社口（しゃぐち）遺跡第3次調査報告書

1997

山梨県北巨摩郡 高根町教育委員会
社口遺跡発掘調査団

社口（しゃぐち）遺跡第3次調査報告書

1997

山梨県北巨摩郡 高根町教育委員会
社口遺跡発掘調査団

序

本報告書は、平成７年９月に高根町教育委員会から依頼を受けた㈶山梨文化財研究所が社口遺跡発掘調査団を組織し、高根町教育委員会が行った第１次、第２次調査の延長線上で行われた「第３次調査」の報告書である。

社口遺跡は山梨県北巨摩郡高根町村山北割・東割地内に所在し、山梨県が進めている八ヶ岳地区広域営農団地農道整備事業に伴う農道建設に遺跡が係わるため、平成３年度には山梨県埋蔵文化財センターによって遺跡詳細分布調査が行われ、予定路線内の試掘坑26ヶ所全てから遺物が確認できるなど、濃密な遺跡の存在が明らかとなった。

高根町教育委員会が行った第１次調査は平成６年１～２月に、第２次調査は同年８～12月に行われ、あわせて東西10m×南北約200mの間に縄文時代中期の竪穴住居址27軒、土坑約100基、平安時代竪穴住居址２軒、平安時代鍛冶関連土坑２基が発見されたもので、社口遺跡の規模の大きさ・中味の濃さを垣間見ることが出来たと同時に社口遺跡の重要性が広く認識されるに至った。

本報告書で報告する社口遺跡第３次調査は、第２次調査の延長線上から県道（万年橋・長坂線）までの区間（巾10m×長さ300m）となったが、第１次、第２次調査の遺構・遺物の出土状態から当該区間でも濃密な分布が予測されたため、慎重に調査が進められ、竪穴住居址35軒（縄文時代中期14、同後期７、平安時代12)、ピット（土坑、集石土坑含む）414基、溝（近・現代中心）21本を確認、遺物もプラ箱（30×45×25㎝）で65箱を数えるに至った。

縄文時代草創期～早期から平安時代に至る長期にわたる人々の生活の痕跡が見事なまでに残されていたことが調査で明かとなったが、農道で本遺跡は残念ながら消滅してしまった。せめてもの救いとでも言える「本報告書」によってしか社口遺跡で生きた人々の暮らしぶりは知るよしもないが、幸いにも緻密な報告が出来たことに、関係機関、地域の皆様、直接調査・整理に携わった皆様の努力に対し深甚なる感謝の意を捧げたい。

最後に本報告書が広く研究資料として活用されることを祈念している。

1997年３月

社口遺跡発掘調査団

団長　谷　口　一　夫

例　　言

1　本書は山梨県北巨摩郡高根町村山北割・東割所在の社口遺跡の発掘調査報告書であり、高根町の委託を受けて社口遺跡発掘調査団が実施した第3次調査の報告である。

2　本調査報告書作成のための作業分担は以下の通りである。

遺物洗浄・注記	名取もと子・岩崎満佐子・林紀子・雨宮寛美・藤井多恵子・佐野靖子・矢房静江・保坂真澄・若木美和
遺物復元（石膏入れ）	佐野靖子
遺物実測・拓本	矢房静江・斉藤ひろみ・岩崎満佐子・林紀子・佐野靖子・保坂真澄
遺構写真	櫛原功一・森原智恵子
遺物写真撮影・プリント	佐野靖子
遺構トレース	櫛原功一・森原智恵子
遺物トレース	櫛原功一
図版作成	櫛原功一・森原智恵子・岩崎満佐子・林紀子・斉藤春美
写真図版作成	櫛原功一・矢房静江
表作成	櫛原功一・森原智恵子・矢房静江

なお、航空写真は（株）シン技術コンサルによるものである。

3　本書の原稿執筆分担は以下の通りである。

第3章第2節	森原智恵子・櫛原功一
第4章第1節	新山雅広・植田弥生・山形秀樹（㈱パレオ・ラボ）
第4章第2・3節	河西学（㈶山梨文化財研究所）

その他の原稿執筆、全体の編集・校正は櫛原がおこなった。

4　発掘調査および整理作業において次の調査・業務を以下の機関・各位に委託した。

基準点設置・航空写真測量	㈱シン技術コンサル
テフラ分析	㈶山梨文化財研究所　地質研究室　河西　学
炭化材樹種同定・炭化種実同定・放射性炭素年代測定	㈱パレオ・ラボ　新山雅広・植田弥生・山形秀樹
金属製品保存処理	㈶山梨文化財研究所　保存修復研究室

5　本書で用いた地図は建設省国土地理院発行の地形図（1:25,000、1:50,000）、地勢図（1:200,000）、高根町発行の土地集成図（1:10,000）である。

6　石器石材鑑定は、河西学氏による。

7　引用・参考文献は第4章以外は巻末にまとめた。第4章については各節末に注・引用参考文献をまとめている。

8　本書に関わる出土品・図面・写真等の諸記録は、高根町教育委員会にて保管している。

9　社口遺跡の概要については『帝京大学山梨文化財研究所報』28で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

10　発掘調査から報告書作成までの間、以下の諸氏、諸機関から多大なる御助言・御配慮を賜った。記して心より感謝申し上げたい。（順不同・敬称略）

中嶋靖・小清水淳三・原一元・雨宮正樹（高根町教育委員会）、新津健・保坂康夫・小野正文・田口明子・森原明廣・笠原みゆき（山梨県埋蔵文化財センター）、今福利恵（山梨県立考古博物館）、萩原三雄・宮澤公雄・平野修・河西学・鈴木稔・伊東千代美・市川昌子・中山千恵・畑大介（（財）山梨文化財研究所）、佐野隆（明野村教育委員会）、小宮山隆（長坂町教育委員会）、竹田眞人（武川村教育委員会）、杉本充（白州町教育委員会）、瀬田正明（一宮町教育委員会）、小渕忠秋（石和町教育委員会）、佐藤勝広（小淵沢町教育委員会）、伊藤公明（大泉村教育委員会）、信藤祐仁（甲府市教育委員会）、堀内真（富士吉田市教育委員会）、布施光敏（富士吉田市歴史民俗博物館）、原田昌幸・土肥孝（文化庁）、広瀬昭弘・宇賀神誠司（長野県埋蔵文化財センター）、神村透（木曽郡遺跡調査会）、堀田雄二（東部町教育委員会）、吉川昌伸（（株）パレオ・ラボ）、石原正敏（十日町市教育委員会）、佐藤雅一（津南町教育委員会）、谷口康浩・宮尾亨（國學院大学）、安達満、奥山和久

（財）山梨文化財研究所、高根町役場、山梨県埋蔵文化財センター、甲斐丘陵考古学研究会、北巨摩郡埋蔵文化財担当者会、縄文早期土器研究部会（長野県考古学会）、東京大学考古学研究会、峡北土地改良事務所、峡北広域シルバー人材センター、馬淵建設

凡　　例

1　遺跡全体図におけるＸ・Ｙ数値は、平面直角座標第Ⅷ系（原点：北緯36度00分00秒、東経138度30分00秒）に基づく各座標数値である。各遺構平面図中の北を示す方位は、すべて座標北を示す。

2　遺構および遺物の縮尺は原則として次の通りである。

＜遺構＞　竪穴住居址　1:60（竈・炉は1:40）
ピット　1:40
溝　任意
全体図　任意

＜遺物＞　縄文土器（小・中型・拓本）　1:3
縄文土器（大型）　1:4　1:5　1:6
縄文土器（草創～早期）　1:2
石器（打斧・凹石・平安時代支脚石など）　1:3
丸石・石皿　1:4
石鏃・縦長剥片・掻器・調整痕のある剥片　1:1
砥　石　1:2
石匙・小型磨斧・玉　2:3　1:2
鉄製品　1:2
土師器・灰釉陶器　1:4
銭　貨　1:1
土製品・土偶　1:2

3　遺構図版中の床面上、竈内断面図中の手書き点文は焼土分布および焼土の堆積を表す。また竈周辺の点網掛けは白色粘土分布を表す。また炉石・竈礫中の手書き点文は被熱痕を表す。遺物分布図中のマーク指示は次の通りである。

・　土器・土師器　▲　灰釉陶器・須恵器　□　金属製品
●　土製品　■　石　器

ただし草創～早期遺物分布図におけるマーク指示は異なるため、図版中で説明している。

4　遺構図版中の遺物番号は遺物図版番号・遺物観察表番号と一致している。また遺構図版中の遺物接合線については、実線ラインは接合した2点の遺物の接合関係を、また破線ラインは接合してはいないが同一個体であることを意味するものである。

5　遺構図版中の柱穴深さ（－）は基準床面レベルからの深さ（cm）である。また基準床面レベルはおおよその床推定レベル、又は完掘時の平均的な床面レベル値である。

6　遺構図版中および土器観察表中の色調名は農林省水産技術会議事務所監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1990）による。

7　遺物図版中の土器・陶器の断面図が黒塗りは須恵器、点網掛けは灰釉陶器で、それ以外の白ぬきは土器・土師器・土師質土器・中世土器である。また土師器器面の点網掛けは黒色処理面である。また断面図中の接合帯を意味する破線は、やや不明確な接合帯を、実線の接合帯は明確な接合帯を表す。

8　凹石・磨石・石斧の外形線に沿った実線は磨り面、破線は叩き（潰し）面、小さな矢印は敲打痕を表す。また打斧・磨斧の刃部・稜上の細かな条線は、磨耗痕（使用痕）、もしくは磨き痕を表す。

9　竪穴住居址の床面積は、壁下端ラインをプラニメーターで計測した。使用機器はウシカタＸ－PLAN360ｄ。

10　遺構および遺物写真の縮尺は統一されていない。

目　次

序
例　言
本文目次
挿図目次
表目次
写真図版目次
第1章　序説 …… 1
第1節　調査の概要 …… 1
第2節　調査に至る経過と調査体制 …… 2
第3節　調査の方法と経過 …… 3
第2章　遺跡の位置と環境 …… 162
第1節　遺跡の位置と現況 …… 162
第2節　地質・自然環境 …… 162
第3節　歴史環境 …… 162
第3章　遺構と遺物 …… 165
第1節　縄文時代 …… 165
1　縄文時代草創～早期包含層と出土遺物 … 165
(1)　包含層の状況・層序・遺物出土状況 …… 165
(2)　草創～早期の遺物 …… 166
2　縄文時代中期前半の住居址（34号住） … 168
3　縄文時代中期後半の住居址（3・7～10・13・14・27・28・30～33・36号住） …… 168
4　縄文時代後期の住居址（16・17・18・19・21・26・35号住） …… 173
第2節　平安時代の住居址（1・2・4～6・12・15・20・24・25・29・37号住） …… 177
第3節　近世～近・現代 …… 184
1　溝 …… 184
2　箕輪堰（ふるせぎ） …… 186
第4節　ピット …… 186
1　縄文時代草創期～早期 …… 186
2　縄文時代中期 …… 187
3　縄文時代後期 …… 189
4　平安時代 …… 190
5　中世～近世 …… 190
第5節　遺構外出土遺物 …… 190
第4章　自然科学分析
第1節　炭化物の分析 …… 191
1　社口遺跡から産出した大型植物化石（新山雅弘） … 191
2　社口遺跡から出土した炭化材の樹種（植田弥生） … 194
3　放射性炭素年代測定（山形秀樹） … 198
第2節　高根町社口遺跡のテフラ（河西　学） … 199
第3節　社口遺跡出土土器の胎土分析（河西　学） … 201
第5章　遺構・遺物の分析
第1節　社口遺跡における土地利用の変遷 …… 208
第2節　縄文時代草創～早期の土器 …… 211
第3節　縄文時代中期 …… 214
1　土器の分類と段階 …… 214
2　石組みを伴う集石炉について …… 217
第4節　縄文時代後期 …… 219
1　土器の分類と段階 …… 219
2　16号住の敷石に関する観察 …… 219
第5節　平安時代土器類の分類と編年 …… 223
第6節　配石土坑と中世墓 …… 228
第7節　調査の反省と今後の課題 …… 230
引用・参考文献

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置（1:200,000） …… 5
第2図　遺跡分布図（1:50,000） …… 6
第3図　遺跡分布図（1:25,000） …… 7
第4図　調査区周辺図（1:1,000） …… 8
第5図　調査区周辺の地形図および堰・用水路図 … 9
第6図　遺跡付近の地形現況図およびグリッド配置図 …… 10
第7図　遺構全体図 …… 11
第8図　遺跡の地形及び縦断面図 …… 12
第9図　遺構分布図 (1) …… 13
第10図　遺構分布図 (2) …… 14
第11図　遺構分布図 (3) …… 15
第12図　遺構分布図 (4) …… 16
第13図　遺構分布図 (5) …… 17
第14図　遺構分布図 (6) …… 18
第15図　社口遺跡第2次調査全体図 …… 19
第16図　縄文草創～早期包含層土器分布図 …… 21
第17図　縄文草創～早期包含層石器・礫分布・接合図及び焼土断面図 …… 23
第18図　縄文草創～早期土器の分布・接合図 (1) … 25
第19図　縄文草創～早期土器の分布・接合図 (2) … 27
第20図　34号住実測図 …… 29
第21図　3・7号住実測図 …… 30
第22図　7・8号住実測図 …… 31
第23図　9号住実測図 …… 32
第24図　10・13号住実測図 …… 33
第25図　13・14号住実測図 …… 34
第26図　27・28号住実測図 …… 35
第27図　28・30号住実測図 …… 36
第28図　31号住実測図 …… 37
第29図　32号住実測図 …… 38
第30図　33・36号住実測図 …… 39
第31図　16号住実測図 …… 40

第32図　17号住実測図 ……41
第33図　18・19号住実測図 ……42
第34図　21号住実測図 ……43
第35図　26・35号住実測図 ……44
第36図　1号住実測図 ……45
第37図　1・2号住実測図 ……46
第38図　4号住実測図 ……47
第39図　5号住実測図 ……48
第40図　6号住実測図 ……49
第41図　12・15号住実測図 ……50
第42図　20・23号住実測図 ……51
第43図　24号住実測図 ……52
第44図　25・29号住実測図 ……53
第45図　29・37号住実測図 ……54
第46図　37号住・4・5・10・21・22・25号ピット実測図 ……55
第47図　33・41・45・52・53・55・63号ピット実測図 ……56
第48図　61・69・70・73・79・81・82・83・86・95・137・145号ピット実測図 ……57
第49図　149・156・159・160・165・169・184・206・232・248・249・250・251・263・294・296・309・328・335・337・338・343号ピット実測図 ……58
第50図　344・366・368・381・382・390・391・393・395号ピット実測図 ……59
第51図　398・401・404・406・407・408・412号ピット実測図 ……60
第52図　1・2・4・5・6・11・13・14・15・17・20号溝実測図 ……61
第53図　3・8・9・10・12号溝、箕輪堰（ふるせぎ）断面図 ……62
第54図　草創～早期土器実測図 ……63
第55図　草創～早期土器実測図 ……65
第56図　草創～早期土器実測図 ……67
第57図　草創～早期土器実測図 ……68
第58図　草創～早期土器実測図 ……69
第59図　草創～早期土器実測図 ……70
第60図　草創～早期土器実測図 ……71
第61図　草創～早期土器実測図 ……72
第62図　草創～早期土器実測図 ……73
第63図　草創～早期土器実測図 ……74
第64図　草創～早期石器実測図 ……75
第65図　草創～早期石器実測図 ……76
第66図　草創～早期石器実測図 ……77
第67図　草創～早期石器実測図 ……78
第68図　草創～早期石器実測図 ……79
第69図　草創～早期石器実測図 ……80
第70図　草創～早期石器実測図 ……81
第71図　草創～早期石器実測図 ……82
第72図　草創～早期石器実測図 ……83
第73図　草創～早期石器実測図 ……84
第74図　草創～早期石器実測図 ……85
第75図　34号住出土遺物実測図 ……86
第76図　34号住出土遺物実測図 ……87
第77図　34・3・7号住出土遺物実測図 ……88
第78図　7・8号住出土遺物実測図 ……89
第79図　8号住出土遺物実測図 ……90
第80図　9号住出土遺物実測図 ……91
第81図　9号住出土遺物実測図 ……92
第82図　9号住出土遺物実測図 ……93
第83図　9号住出土遺物実測図 ……94
第84図　9号住出土遺物実測図 ……95
第85図　9号住出土遺物実測図 ……96
第86図　9号住出土遺物実測図 ……97
第87図　10号住出土遺物実測図 ……98
第88図　13号住出土遺物実測図 ……99
第89図　14号住出土遺物実測図 …… 100
第90図　14・27号住出土遺物実測図 …… 101
第91図　28号住出土遺物実測図 …… 102
第92図　28号住出土遺物実測図 …… 103
第93図　30・31号住出土遺物実測図 …… 104
第94図　31号住出土遺物実測図 …… 105
第95図　31号住出土遺物実測図 …… 106
第96図　31号住出土遺物実測図 …… 107
第97図　31号住出土遺物実測図 …… 108
第98図　31号住出土遺物実測図 …… 109
第99図　31号住出土遺物実測図 …… 110
第100図　31号住出土遺物実測図 …… 111
第101図　31号住出土遺物実測図 …… 112
第102図　32号住出土遺物実測図 …… 113
第103図　32号住出土遺物実測図 …… 114
第104図　32号住出土遺物実測図 …… 115
第105図　32・33号住出土遺物実測図 …… 116
第106図　33・36・16号住出土遺物実測図 …… 117
第107図　16号住出土遺物実測図 …… 118
第108図　16号住出土遺物実測図 …… 119
第109図　17号住出土遺物実測図 …… 120
第110図　17号住出土遺物実測図 …… 121
第111図　18号住出土遺物実測図 …… 122
第112図　18・19号住出土遺物実測図 …… 123
第113図　19号住出土遺物実測図 …… 124
第114図　19号住出土遺物実測図 …… 125
第115図　19・21号住出土遺物実測図 …… 126
第116図　21号住出土遺物実測図 …… 127
第117図　21号住出土遺物実測図 …… 128

第118図　21号住出土遺物実測図 …… 129
第119図　26・35号住出土遺物実測図 …… 130
第120図　35・1号住出土遺物実測図 …… 131
第121図　1号住出土遺物実測図 …… 132
第122図　1・2号住出土遺物実測図 …… 133
第123図　2・4・5号住出土遺物実測図 …… 134
第124図　5・6号住出土遺物実測図 …… 135
第125図　6号住出土遺物実測図 …… 136
第126図　6・12・15号住出土遺物実測図 …… 137
第127図　20・23・24号住出土遺物実測図 …… 138
第128図　24号住出土遺物実測図 …… 139
第129図　25号住出土遺物実測図 …… 140
第130図　25・29号住出土遺物実測図 …… 141
第131図　29号住出土遺物実測図 …… 142
第132図　29・37号住出土遺物実測図 …… 143
第133図　37号住出土遺物実測図 …… 144
第134図　4・5・10・21・22・25・33・41号ピット出土遺物実測図 …… 145
第135図　41・52・53・55・61・63・69・70号ピット出土遺物実測図 …… 146
第136図　73・79・81・82・86・95・136・137・149・156号ピット出土遺物実測図 …… 147
第137図　159・169・184・206・232・248・250号ピット出土遺物実測図 …… 148
第138図　251・263・294・296号ピット出土遺物実測図 …… 149
第139図　328・334・335・336・337・338・344・368号ピット出土遺物実測図 …… 150
第140図　391・393・395・401号ピット出土遺物実測図 …… 151
第141図　404・407・408・412号ピット出土遺物実測図 …… 152
第142図　遺構外出土遺物 (1) …… 153
第143図　遺構外出土遺物 (2) …… 154
第144図　遺構外出土遺物 (3) …… 155
第145図　遺構外出土遺物 (4) …… 156
第146図　遺構外出土遺物 (5) …… 157
第147図　遺構外出土遺物 (6) …… 158
第148図　遺構外出土遺物 (7) …… 159
第149図　遺構外出土遺物 (8) …… 160
第150図　遺構外出土遺物 (9) …… 161
第151図　草創～早期土器の重量比 …… 165
第152図　1号住内炭化種実出土状況 …… 178
第153図　集石炉の礫構成 …… 188
第154図　社口遺跡B62地点での火山ガラス含有率　199
第155図　A・A´型火山ガラス屈折率 …… 200
第156図　縄文時代草創期～早期分析試料の拓影図　202
第157図　点紋片岩中の曹長石斑状変晶 …… 202
第158図　土器の岩石鉱物組成 …… 203
第159図　土器の岩石組成折れ線グラフ …… 204
第160図　甲府盆地周辺地域河川砂の比較樹形図 … 205
第161図　八ヶ岳南麓縄文中期土器との比較樹形図　205
第162図　土地利用の変遷 …… 209
第163図　青木遺跡との位置関係 …… 210
第164図　縄文草創期～早期の土器変遷図 …… 212
第165図　縄文中期土器の変遷 …… 215
第166図　縄文中～後期土器の変遷 …… 216
第167図　16号住居址の敷石磨り痕・レベル・変色部・重量分布図 …… 220
第168図　平安時代土器・陶器編年(1) …… 225
第169図　平安時代土器・陶器編年(2) …… 226
第170図　食器類の割合の変遷 …… 228
第171図　追加資料図 …… 258

表　目　次

第1表　遺跡地名表 …… 164
第2表　産出した大型植物化石 …… 192
第3表　縄文時代の住居跡から出土した炭化材の樹種 …… 196
第4表　平安時代の住居跡の竈から出土した炭化材の樹種 …… 197
第5表　年代別測定結果数 …… 198
第6表　計数火山ガラス粒数 …… 200
第7表　火山ガラスの屈折率 …… 200
第8表　試料表 …… 201
第9表　土器試料中の岩石鉱物 …… 202
第10表　岩石組成による土器の分類 …… 204
第11表　16号住の敷石観察表 …… 221
第12表　平安時代住居出土の土器数 …… 228
第13表　住居址一覧表 …… 232
第14表　ピット一覧表 …… 233
第15表　土器・陶器観察表 …… 235
第16表　石器観察表 …… 251
第17表　土製品観察表 …… 257
第18表　金属器観察表 …… 257
第19表　墨書・刻書一覧表 …… 257
第20表　追加資料表 …… 258

写真図版目次

図版1　1.北から見た遺跡　2.南西から見た遺跡
図版2　1.北から見た遺跡　2.西から見た遺跡
図版3　1.南から見た遺跡　2.西から見た遺跡
図版4　1.53～74グリッド付近　2.36～43グリッド付近　3.28～37グリッド付近
図版5　1.22～28グリッド付近　2.13～23グリッド付近
図版6　1.調査前景観　2.調査中景観

図版７　1.D52付近から北を見る　2.C67付近から南西を見る　3.B68付近から南を見る
図版８　1.50～74グリッドを西から見る　2.F43付近から南を見る　3.J27付近から北を見る
図版９　1.積雪の朝　2.O19付近から北を見る　3.R14付近から北を見る
図版10　1.C61付近から西南を見る　2.早期包含層調査風景　3.早期包含層下層の調査状況
図版11　1.早期包含層　2.早期包含層　3.早期包含層
図版12　1.出土状況　2.出土状況　3.出土状況　4.出土状況　5.406号ピット内配石
図版13　1.34号住完掘状況　2.34号住内遺物出土状況　3.34号住深鉢出土状況　4.34号住炉体土器出土状況
図版14　1.３号住礫・遺物出土状況　2.３号住完掘状況　3.７号住完掘状況　4.７号住炉完掘状況
図版15　1.８号住完掘状況　2.８号住炉　3.８号住埋甕　4.９号住完掘状況
図版16　1.９号住遺物出土状況　2.９号住内石皿・磨石出土状況　3.９号住埋甕出土状況　4.９号住炉内礫・遺物出土状況
図版17　1.10号住炉断面　2.10号住完掘状況　3.13号住完掘状況　4.14号住完掘状況
図版18　1.14号住埋甕　2.14号住炉　3.27号住完掘状況　4.27号住炉　5.28号住完掘状況
図版19　1.28号住遺物出土状況　2.28号住炉完掘状況　3.30号住遺物出土状況
図版20　1.30号住内出土土器　2.30号住炉　3.31号住完掘状況　4.31号住遺物出土状況
図版21　1.31号住炉　2.31号住内土器出土状況　3.31号住内土器出土状況　4.31号住内土器出土状況
図版22　1.32号住完掘状況　2.32号住遺物出土状況　3.32号住内遺物出土状況
図版23　1.32号住炉　2.32号住内土器出土状況　3.33号住完掘状況　4.33号住炉完掘状況
図版24　1.36号住完掘状況　2.16号住遺物出土状況　3.16号住敷石状況
図版25　1.16号住内丸石出土状況　2.16号住遺物出土状況　3.16号住敷石敷設状況　4.16号住完掘状況
図版26　1.16号住炉　2.17号住遺物出土状況　3.17号住敷石・柱穴配置状況　4.17号住炉体土器
図版27　1.18号住遺物・礫出土状況　2.18号住完掘状況　3.18号住炉体土器出土状況　4.19号住遺物出土状況
図版28　1.19号住床面遺物出土状況　2.19号住床面の注口土器・凹石　3.19号住床上の深鉢　4.19号住炉と炉体土器
図版29　1.19号住完掘状況・敷石敷説状況　2.19号住完掘状況　3.21号住遺物出土状況
図版30　1.21号住敷石敷設状況　2.21号住完掘状況　3.21号住炉内炉体土器出土状況
図版31　1.26号住遺物出土状況　2.26号住完掘状況　3.26号住炉体土器　4.26号住内双口土器出土状況　5.35号住遺物出土状況
図版32　1.35号住完掘状況　2.35号住炉内炉体土器出土状況　3.35号住内深鉢出土状況　4.１号住遺物出土状況
図版33　1.１号住内鉄製品出土状況　2.１号住竈南側付近での出土状況　3.１号住竈内・竈周辺遺物出土状況　4.１号住竈内支脚石の状況　5.１号住竈袖石の状況
図版34　1.１号住完掘状況　2.１号住掘り方完掘状況　3.１号住内中央のピット
図版35　1.２号住完掘状況　2.２号住竈内出土状況　3.２号住竈支脚石と袖石　4.４号住遺物・礫出土状況　5.４号住完掘状況
図版36　1.５号住遺物出土状況　2.５号住完掘状況　3.５号住竈出土状況　4.５号住竈袖石状況
図版37　1.６号住遺物出土状況　2.６号住坏出土状況　3.６号住竈袖石状況　4.６号住竈内遺物出土状況
図版38　1.６号住完掘状況　2.６号住掘り方完掘状況　3.12号住完掘状況
図版39　1.12号住竈　2.15号住完掘状況　3.20号住完掘状況　4.23号住遺物出土状況
図版40　1.24号住遺物出土状況　2.24号住完掘状況　3.24号住竈遺物出土状況　4.24号住竈とつき臼
図版41　1.25号住遺物出土状況　2.25号住完掘状況　3.25号住竈出土状況
図版42　1.29号住遺物出土状況　2.29号住完掘状況　3.29号住竈　4.29号住竈
図版43　1.37号住遺物出土状況　2.37号住完掘状況　3.37号住ロクロ甕出土状況　4.37号住内出土２枚重ねの皿出土状況
図版44　1.10号ピット出土状況　2.21号ピット出土状況　3.22号ピット出土状況　4.25号ピット出土状況　5.95号ピット出土状況　6.250号ピット出土状況　7.263号ピット出土状況
図版45　1.343号ピット出土状況　2.344号ピット出土状況　3.381号ピット内集石出土状況　4.381号ピット下部石組出土状況
図版46　1.382号ピット内石組出土状況　2.390号ピット内集石・石組出土状況　3.390号ピット内石組出土状況　4.398号ピット内集石出土状況
図版47　1.398号ピット内上部集石・石組取り上げ後の下層集石状況　2.398号ピット内下層石組状況

3.381～398号ピット全景　4.401号ピット内出土状況
図版48　1.404号ピット上面配石出土状況　2.404号ピット完掘状況　3.408号ピット出土状況　4.箕輪堰（ふるせぎ）断面
図版49　草創期～早期土器
図版50　草創期～早期土器
図版51　草創期～早期土器
図版52　草創期～早期土器
図版53　草創期～早期土器
図版54　草創期～早期土器
図版55　草創期～早期土器・石器
図版56　草創期～早期石器
図版57　草創期～早期石器
図版58　34号住出土遺物
図版59　34・3・7号住出土遺物
図版60　7・8号住出土遺物
図版61　9号住出土遺物
図版62　9号住出土遺物
図版63　9号住出土遺物
図版64　9号住出土遺物
図版65　10・13号住出土遺物
図版66　13・14号住出土遺物
図版67　27・28号住出土遺物
図版68　28号住出土遺物
図版69　30・31号住出土遺物
図版70　31号住出土遺物
図版71　31号住出土遺物
図版72　31号住出土遺物
図版73　31号住出土遺物
図版74　31号住出土遺物
図版75　31・32号住出土遺物
図版76　32号住出土遺物
図版77　32・33号住出土遺物
図版78　33・16号住出土遺物
図版79　16号住出土遺物
図版80　16・17号住出土遺物
図版81　17・18号住出土遺物
図版82　18・19号住出土遺物
図版83　19号住出土遺物
図版84　21号住出土遺物
図版85　21号住出土遺物
図版86　26・35・1号住出土遺物
図版87　1号住出土遺物
図版88　1・2号住出土遺物
図版89　4・5号住出土遺物
図版90　6号住出土遺物
図版91　6号住出土遺物
図版92　12・15・20・24号住出土遺物
図版93　24・25号住出土遺物
図版94　25・29号住出土遺物
図版95　29・37号住出土遺物
図版96　37号住・ピット出土遺物
図版97　ピット出土遺物，鉄製品・鉄滓・土偶・墨書土器
図版98　社口遺跡出土炭化材の樹種
図版99　社口遺跡出土炭化材の樹種・大型植物化石

第１章　序　　説

第１節　調査の概要

社口遺跡は、北巨摩郡高根町村山北割・東割地内に所在する（第１～３図）。山梨県が進める八ヶ岳地区広域営農団地農道整備事業にともない、須玉町（茅ヶ岳広域農道）から長坂・小淵沢町に連結する農道建設が予定され、平成３年度に山梨県埋蔵文化財センターにより遺跡詳細分布調査が行われた。その際、村山東割字社口地内の長さ600mにわたる道路予定地内約6000㎡に、10～30m間隔で２×２mの試掘坑を26カ所入れたところ、ほとんどすべての地点から遺物の出土があり、遺跡の存在が確認された。この調査以前には社口遺跡の存在は明らかでなく、昭和61・62年に行われた高根町内詳細分布調査では、現況の多くが山林だったため遺跡の存在は確認されていない。平成３年度の試掘調査報告によると、出土遺物は縄文時代中期前葉から後葉、後期初頭から前葉を主とし、また早期末条痕文土器や晩期の可能性ある土器片も出土した。中でも中期中葉から後葉に至る井戸尻～曽利式期には大型破片が多く、中期後半を主体とした遺跡であることが想定された。

本調査は平成６年（1994年）に高根町教育委員会によって、町民グランドに近い北側から南側へ向けて開始され、１月～２月に第１次調査が、また同年８月～12月に第２次調査が行われた。第１・２次調査では東西10m、南北約200mにわたる調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居址27軒、土坑・ピット約100基、平安時代竪穴住居址２軒、平安時代鍛冶関連土坑２基が見つかった（第15図）。内容については教育委員会発行の『社口遺跡－八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査－』（雨宮　1995）に譲るが、惜しいことに報告書には図面等の基礎データがないため、詳細については不明といわざるをえない。台地西側縁辺に弧状に住居址が密集した状況を示し、おそらく曽利Ⅰ～Ⅲ式期を中心とする環状集落の一部であろうと想像できる。住居址には炉に接して奥壁部に配石をもつ4号住や、炉隅に副炉のある２号住、埋甕埋設位置に石囲炉状の特殊施設を持つ12号住など、見るべきものが少なくない。また土坑中には井戸尻式期の土器を埋設したものがある。

平成７年９月に高根町教育委員会の依頼を受けた㈶山梨文化財研究所では、社口遺跡発掘調査団を組織し、第２次調査の延長線上から県道（万年橋・長坂線）までの区間を本調査することになった（第３次調査）。この間は幅10m、長さ約300mで、第１・２次調査区の存在した北側の台地上（北台地）、水田のある低地面、箕輪堰が横切る南側の台地（南台地）へと起伏に富んだ地形を呈している。一部の畑地では開墾時に土を持ち出したという話があり、また斜面では遺構はないと予想されていたが、念のため全面的に精査したところ、くまなく遺構が発見された。

調査面積は3721㎡、発見された遺構は竪穴住居址35軒（縄文時代中期14、縄文時代後期７、平安時代12）、ピット（土坑・集石炉・シミ状ピットを含む）414基、溝（近・現代中心）21本である（第７図）。遺物量はプラ箱（30×45×25㎝）で65箱であった。

調査結果を時代順に並べるならば、縄文時代草創期～早期の包含層、縄文時代中期狢沢式期住居址、曽利Ⅰ式期集落址、曽利Ⅱ～Ⅳ式期集落址、後期前半（堀之内式期）集落址、平安時代集落址である。

草創期～早期の包含層は北台地南斜面、Ｂ・Ｃ58～62グリット付近の10×15m程度の狭い範囲にある。表裏縄文土器を中心に撚糸文土器が集中し、それらに伴って黒曜石製の掻器や、砥石、磨石・凹石などの石器が出土した。焼土や焼け礫もあり、生活址の可能性もあるが、台地上出土土器片との接合事例があり、覆土は斜面上方から下方への流れと判断できたので、多くは北台地上からの二次堆積土であろうとの推測に至っている。表裏縄文土器は緩やかに外反・屈曲した平口縁が主体で、小さな瘤状貼り付けをもつものがある。底部は尖底、もしくは丸底で、裏面の縄文は内面底部まで施文するものが多い。土器の大半は井草式直前から稲荷台式併行で、井草式に対比できる資料があり、山梨県における早期前半期の様相を明らかにする資料である。また、表撚糸裏縄文という折衷的な資料もあり興味深い。破片数は微細資料を含めて千点余り出土している。

中期前半、狢沢式期の住居址（34号住）は、南台地上に１軒のみ発見された。中期後半、曽利Ⅰ式期の集落址も同じ南台地上に６軒がまとまっている（27・28・30・31・32・33号住）。それらには大きな重複はない。31号住では多くの土器が見つかり、良好な資料を得ることができ、また炉内に大きな丸石が遺存し、住居廃棄の際に何らかの祭祀的行為を行っていることが伺えた。曽利Ⅰ式の集落址は県内ではそれほど多くなく、良好な資料を提供した。

中期後半、曽利II～IV式期の集落は、北台地上にまとまっている（7・8・9・10・13・14号住）。台地上に展開すると思われる中期後半集落の一端を示す資料となり、第1・2次調査との関連性が明らかになった。さらに台地斜面では中期末と思われる周礫を配した3号住も見つかっている。

後期堀之内式期の集落は低地に広がり、等高線に沿った形で、列状に16・17・18・19・21・26・35号住があり、ほかに炉と思われる焼土を伴う単独埋甕が2カ所ある。住居はいずれも広義の敷石住居で、うち16号住が鉄平石を用い全面に近い形で敷石を敷設し、19号住では出入り口部～炉までを、また21号住では炉裏を中心に敷設し、他のものは周礫を巡らす程度である。住居はいずれも円形で、壁際にやや細い柱穴をもち、炉は例外なく石囲い埋甕炉もしくは埋甕炉である。この集落は、かつて町教委が圃場整備事業にともない調査した青木遺跡の一部と思われる。先の調査では配石を中心に住居が数軒出ていたが、このような形で配石から随分離れた地点での住居配置は意外であった。

平安時代の住居は調査地内の各地点にある（1・2・4・5・6・12・15・20・24・25・37号住）。時期は9世紀中葉～10世紀前半台で、竈の石組みを良好に残すものが多い。かつて圃場整備で調査が行われた東久保遺跡など、周辺集落との関連性の中で捉える必要がある。

そのほか箕輪堰の「ふるせぎ」といわれる溝を断面観察し、V字状の溝であることを確認した。また土坑底面に平石で石組を設け、上層に小礫の集石を充填した集石炉が4基まとまって見つかり、うち1基は^{14}C年代測定の結果、縄文中期と推定された。それらの集石は、高温のため多くの礫の表面が発泡した状態である点が注意された。また中世の土坑墓が1基あり、上面は配石で密閉され、内部には5枚銅銭が副葬されていた。

寒中の半ば強行的な調査であったため、凍土の影響で遺構確認が十分でなく、土坑やピットなどを完全に検出できたとは言い難いものであった。また調査終了後に調査範囲の一部誤認が判明するという調査ミスがあるなど、反省すべき点を残す調査であったが、それでも十分な成果をあげることができた。

第2節　調査に至る経過と調査体制

平成7年9月、高根町教育委員会より㈶山梨文化財研究所へ広域農道建設にともなう社口遺跡調査の依頼があり、協議した結果、委託契約を結んで調査することとなった。委託者は高根町町長　大柴恒雄、受託者は社口遺跡発掘調査団団長　谷口一夫で、平成7年9月25日委託契約を行い、調査を行う運びとなった。

現場での調査は1995年10月16日～1996年3月22日まで、96日ほど実施した。また室内での整理作業は1996年4月～1997年3月まで㈶山梨文化財研究所で行った。

＜社口遺跡発掘調査団組織＞

調査団長	谷口　一夫	㈶山梨文化財研究所	所長
調査員	櫛原　功一	同	考古第2研究室長
同	森原智恵子	同	研究助手
経理	五味　芳子	同	事務主任

＜発掘調査参加者＞（50音順、敬称略）

秋山圭子（筑波大学生）・秋山喜美恵・浅川利一・浅川江代・浅川朝子・浅川みのり・植松梅子・植松志げ子・植松千鶴子・大柴欣子・重川恵美子・重川英雄・重川八千子・国府田孝吉・小林昭子・小林種晴・小林　裕・小林立枝・五味ゆき子・坂本よし江・坂本明子・坂本穂津美・篠原邦彦・清水とよ子・清水まつ代・白倉カツ子・中嶋當子・原藤　栄・福井光幸・保坂実香子・堀川ふじ・松沢みどり・三沢ふみ江・宮川昌蔵・矢戸いと恵・吉田香代子・吉本勝美・頼　未順

＜整理作業参加者＞（順不同、敬称略）

佐野靖子・雨宮寛美・藤井多恵子・矢房静江・斉藤春美・斉藤ひろみ・岩崎満佐子・林　紀子・保坂真澄・若木美和・名取もと子

第３節　調査の方法と経過

（対象地区）計画された道路予定地約4000㎡のうち、県道に近い人家脇水田および竹薮（現箕輪堰の南側）を除く、すべての予定地を調査対象地区とし、3721㎡を調査した。竹薮付近は、近世以降の水田面が薮となったもので、当初調査予定地としての指示がなく、また水田造成時の段切りが大きいため、近世をさかのぼるような遺構はないだろうと予測された。しかし竹薮付近は箕輪堰が直角に曲がるコーナー内側にあたり、何らかの屋敷地の可能性があり、また調査区南端では中世の土坑墓や内耳土器片が出土するなど中近世の遺構の広がりが予想され、調査すべき地点であったと反省している。また調査終了後、予定路線図と調査全体図を比べたところ、O19グリッド付近で幅２mほど予定路線幅に達していないことがわかり、調査地区設定ミスが判明したが、造成工事開始後であったため追加調査できなかった。現地で示された路線ラインが一部間違っていたようだ。

（基準点の設置）調査予定地区すべてをカバーするように、国家座標に基づく5mメッシュの杭設置を委託した。X軸方向（北方向）を０～74、Y軸方向（東方向）をA～Vとし、XYの組み合わせで各グリッドを表示した。ちなみにA12は、X座標　－18480、Y座標　－6510、緯度　35－50－0.2175、経度　138－25－40.5604、N　0－2－31.9である。水準点は調査区内にベンチマークを４カ所設置した。

（基本層序・土層サンプリング）調査区内は起伏に富んだ地形であり、覆土状況も異なる。66～72グリッド付近では遺構確認面までが浅い上に畑の耕作が著しく、15～26グリッド付近では表土がきわめて薄いうえカラマツが多いために、抜根による撹乱が激しい地区である。また35～45グリッド付近では牧草地にするために土地を造成し、土を搬出したとのことで、遺構面までが浅くなっていた。したがって、遺跡全体の統一的な基本層序は定めていない。しかし57～63グリッド付近の草創～早期包含層が厚く、良好な堆積を示していたため、調査区境の西壁に沿って南北方向に、それに直交するように東西方向にトレンチを入れて断面を観察した。またテフラ分析のための土層採取は、A61グリッドの南北トレンチ内で行った（第４章第２節参照）。また３号溝の壁面でさらに下層の堆積土（火山灰層など）の観察を行っている。

（遺構番号）遺構は原則として住居址、ピット、溝に分け、「一号住」、「一号ピット」、「一号溝」と発見順に遺構番号を付けた。また住居址内のピットは各住居址ごとに「一号住Ｐ一」と付けた。

（調査の進め方）調査は北側から開始し、南側へ向かって進行した。重機による表土除去後、じょれんがけで遺構確認面を精査し、遺構確認を行った。途中出土した遺物は原位置に残し、後で1:40の平板測量による全体図に記録して取り上げることを原則としたが、グリッド一括で取り上げたものもある。遺構は近世以降現代までの溝や畝を最初に調査し、その後ピット、平安時代竪穴住居址、縄文時代住居址へと新しい順に調査していった。平安時代竪穴住居址の調査手順は次のとおりである。まず十字のセクションベルトを残し、遺物や礫・焼土を残しながら床面付近までさげ、1:20の土層実測・観察後にベルトを撤去し、遺物出土状況写真撮影後、遺物を1:20で平板測量し、取り上げる。その後、床面・周溝を出すとともに竈の調査を行う。竈は十字ベルトを残して掘り下げ、断面観察、写真撮影後に遺物や礫を残した状態でベルトをはずす。出土状況写真撮影後、実測枠を用いて1:10で実測し、遺物取り上げ後、写真撮影し、竈石組みを残したまま住居全体の完掘写真を撮影する。1:20で平板による平面図作成後、最後に貼り床を掘り下げ、再び写真撮影、平面図作成を行う。なお掘り方の測量は調査区全体の空撮時に併せて撮影し、航空測量をした。縄文時代竪穴住居も原則的には平安と同じであるが、貼り床の存在が不明なものに関しては床下の調査は行っていない。ピットは南側を半截し、1:10で断面実測・観察・実測・写真撮影し遺物を残して掘り下げ、出土状況を1:10で実測後、完掘し、再び写真撮影した。溝もほぼ同様である。すべて調査終了した後全体写真を撮影した。全体図作成は委託し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、航空測量で作成した。調査区が長細く、一度に全ての空撮を行うことはできないため、２回撮影した。また調査区周辺の地形状況（1:500）を作図するための航空測量も同時に行った。なお遺構写真は35㎜カメラで白黒・リバーサルの２種類撮影するとともに、中判カメラ（６×６サイズ）で白黒・カラー撮影を行った。

（自然科学分析）炉・竈内から種実・炭化材・焼骨を抽出して食生活を探るための土壌採取を、遺存状況の悪い住居を除く全ての竪穴住居址で行った。また１号住では焼土が床面に広がり火災住居と思われたため、50㎝メッシュを床面に設定し、床面直上の土を採取した。整理段階でそれらの土を水洗選別し、主に炭化物や焼骨を抽出した。抽出方法は、土壌を半日程度乾燥し、重量を測定後、バケツの水に静かに投入し、浮上した炭化物をすくう。さらに水を撹拌して炭化物を徹底的にすくい出し、なくなったらバケツの水を0.5㎜メッシュ程度のふるいにあけて、泥を洗い流し、泥中の炭化物・焼骨類を拾い出す。あるいはチップ洗浄器内で水洗選別を行う。同定

は委託した。また住居床面に遺存した大型炭化材も樹種同定を委託したが、それらのうち縄文時代中期曽利II式期の8号住、縄文時代後期堀之内2式期の19号住、集石炉である398号ピット出土炭化材についてβ－線計数法による^{14}C年代測定を委託した。また早期包含層付近で土層の年代を知るためのテフラ分析を委託した。

（整理作業） 注記作業の簡略化のため、一括遺物はジェットマーカーを借用した。ただし、黒文字しか印字できないために、縄文土器の多くの場合必ずしも適当であったとは言えない。ナンバー付資料については手書きで注記した。接合後、実測作業に支障あるもののみ石膏を入れた。実測は通常の手描きで行ったが、ガラス透視法で効率化を計った。図面は土器の場合選択し、石器は極力実測する方針をとった。

（図版作成） 図版は原則的には2倍図で作成し、トレースにあたってはロットリング0.1・0.2・0.3および丸ペンを用いた。

＜調査日誌抄録＞

平成7年（1995年）

10月16日(月)　プレハブを設置、器材搬入し、調査の準備を整え、調査区の範囲確認を行う。また重機により雑木の抜根をする。

10月17日(火)　重機により表土剝ぎ開始。同時にじょれんがけによる遺構確認を開始。

10月24日(火)　重機による表土剝ぎは本日で完了。

10月26日(木)　じょれんがけ中に表裏縄文土器片を発見。

10月30日(月)　1回目のじょれんがけをほぼ終了し、本日より遺構の掘り下げを開始。調査区北側の近・現代と思われる溝から調査し始める。

10月31日(火)　1号住設定。3号溝掘り下げを開始したが、非常に深く、調査難航。

11月1日(水)　㈱シン技術コンサルによる杭打ち開始。グリッド設定。

11月2日(木)　2・3号住設定。

11月7日(火)　4号住設定。

11月9日(木)　5号住設定。

11月11日(土)　11号溝設定して掘り始めたが、非常に深く、調査難航。

11月15日(水)　6号住設定。

11月16日(木)　7・8・9号住設定。

11月17日(金)　10・11・12号住設定。

11月21日(火)　13号住設定。ピット番号を付け始める。

11月28日(火)　14号住設定。

12月12日(火)　北側地区の斜面（B・C61・62付近）を再度じょれんがけしたところ、表裏縄文土器片が多数出土。良好な包含層であることを確認。

12月18日(月)　層序確認のため、早期包含層西壁に沿ってトレンチ設定する。

12月19日(火)　高根町ＣＡＴＶが取材。

12月21日(木)　ピット群の調査。

12月22日(金)　防寒対策のためシートを調査区全面にかけて保護し、1995年の調査は終了。

平成8年（1996年）

1月8日(月)　本日より調査再開。午後から降り出した雨が夜間雪となる。

1月9日(火)　雪かき。参加作業員は少ない。

1月10日(水)　表土が本格的に凍結し始めたため、稲わらの「こも」を購入し遺構内に敷いてみる。

1月11日(木)　早期包含層に東西方向のサブトレンチを設定。

1月12日(金)　中央地区で再度じょれんがけをし、敷石住居2軒を確認。後期遺構の広がりが予想される。青木遺跡のちょうど東側に相当する。

1月19日(金)　早期包含層の断面図作成し、土層観察を行う。

1月26日(金)　15～21号住設定。調査開始。

1月27日(土)　午前10時より遺跡見学会。地元の方がた中心に90名ほどが参加。

1月30日(火)　午前中、北側地区の空撮のために清掃したが、風が強く中止となる。

1月31日(水)　河西学氏（山梨文化財研究所・地質研究室）による土層サンプリング。早期包含層を中心に依頼。南地区のじょれんがけ（2回目）。

2月1日(木)　22・23号住設定。一時雪が舞い、土は厚く凍りついたままであった。作業は難航。

2月6日(火)　24・25号住設定。

2月7日(水)　㈱シン技術コンサルによる空撮(1回目)。

2月8日(木)　26号住設定。

2月13日(火)　南地区のじょれんがけを行い、27号住設定。

2月14日(水)　28・29号住設定。

2月16日(金)　30・31号住設定。

2月21日(木)　32号住設定。このころ、早期包含層の掘り下げを継続。

2月23日(金)　本日にて大半の作業員は終了。

2月24日(土)　山梨県考古学協会埋蔵文化財パトロールが実施され、併せて遺跡見学のため来跡（社口遺跡東側で行われた重機による農地開墾状況を視察）。

3月4日(月)　33・34号住設定。

3月5日(火)　東大考古学研究会メンバーが見学。

3月12日(火)　朝積雪あり。風非常に強い。35号住設定。

3月13日(水)　36号住設定。

3月14日(木)　北側地区の調査終了部分にて、周囲に盛り上げた排土を調査区内に戻すため、重機を入れる。同時に箕輪堰「ふるせぎ」箇所を重機で掘削し、断面記録。

3月16日(土)　9号溝付近の土師器が多く出土した部分を念のため再度じょれんがけしたところ、住居が確認され、37号住を設定。

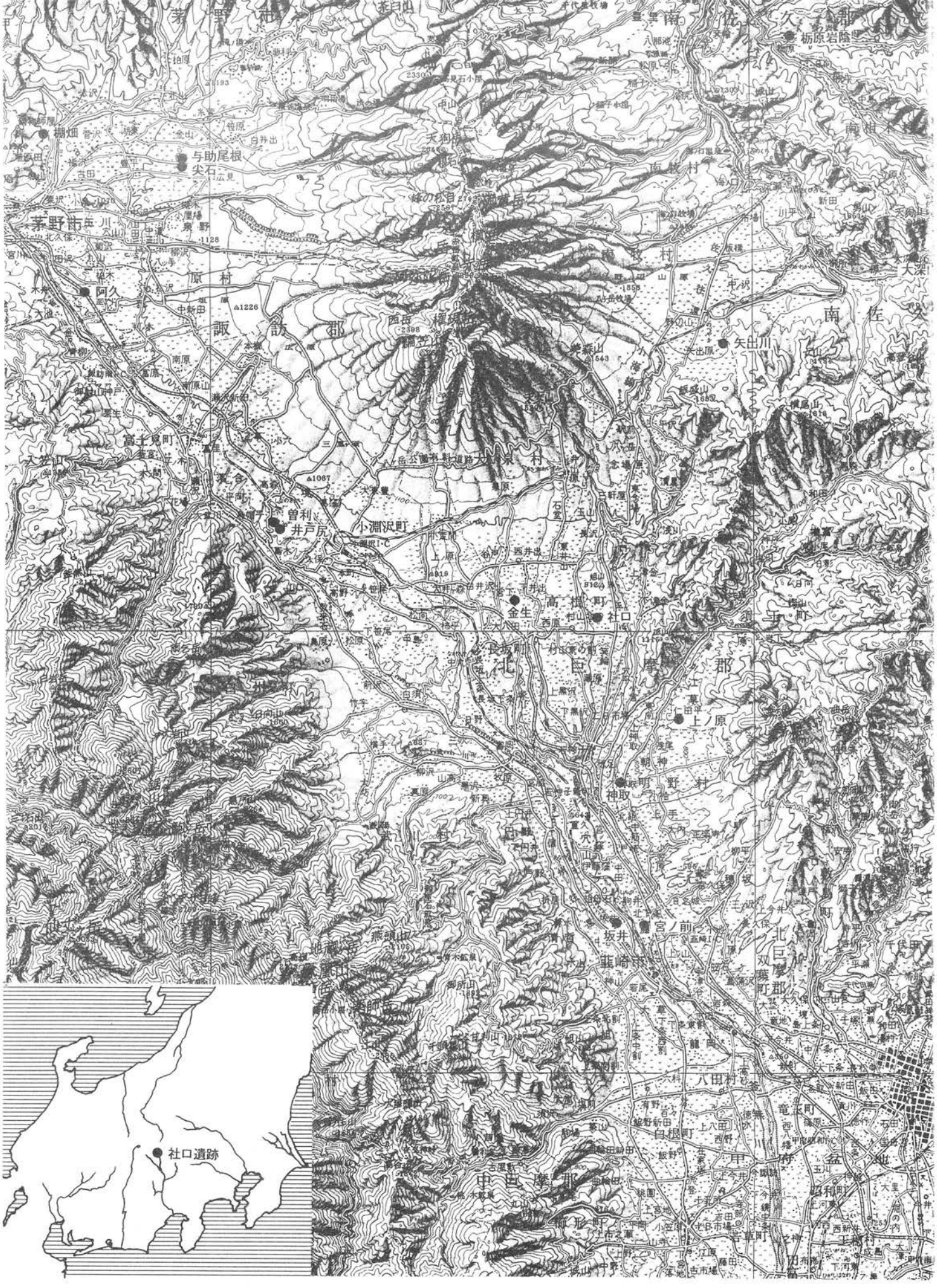
3月18日(月)　空撮準備をしたが、風が強く中止。

3月19日(火)　朝、空撮(2回目)。

3月21日(木)　道具洗浄、プレハブ内清掃。発掘調査は本日で終了。

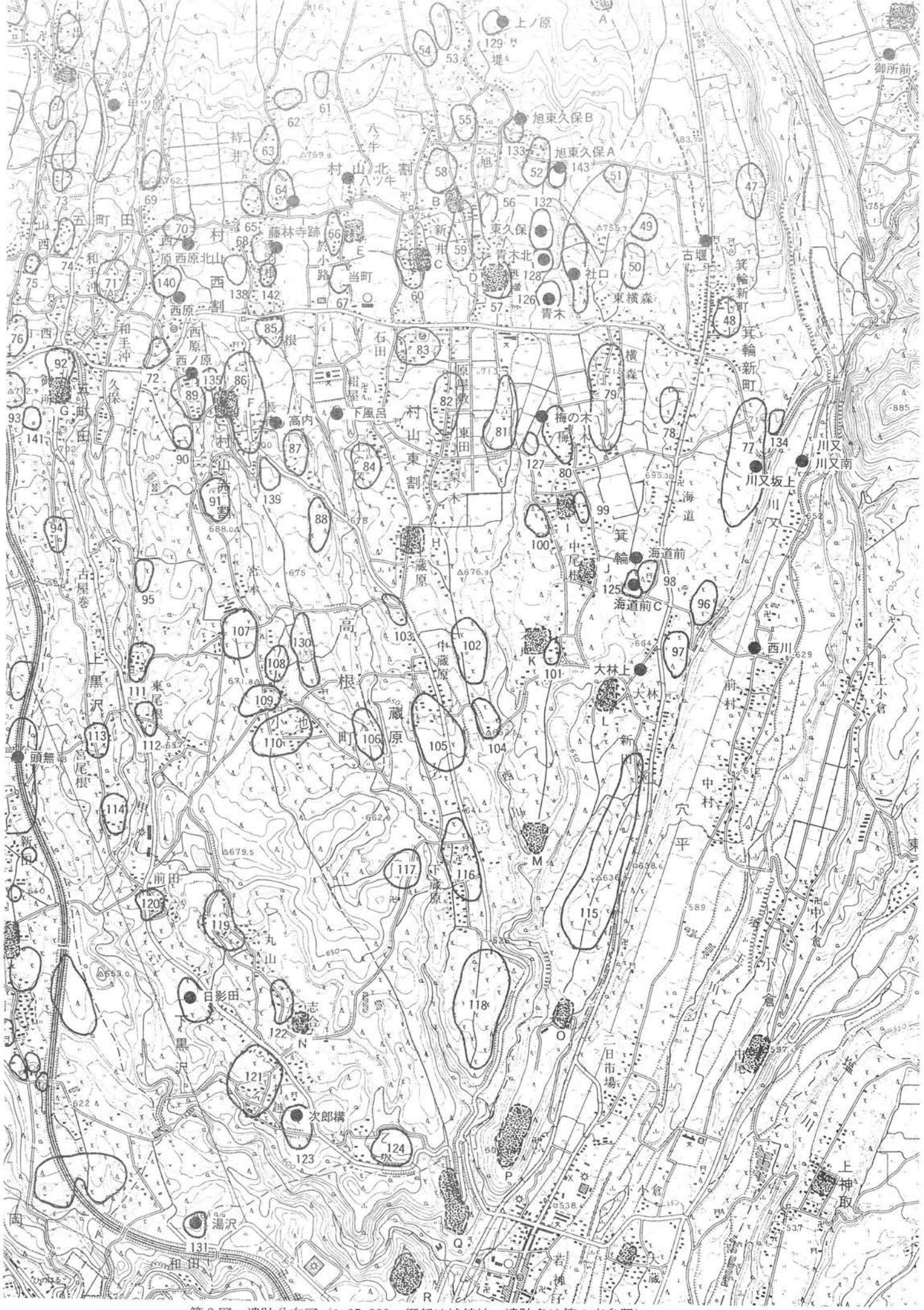
3月22日(金)　器材撤収。

3月26日(火)　残務処理等終了し、現場での業務は終了。



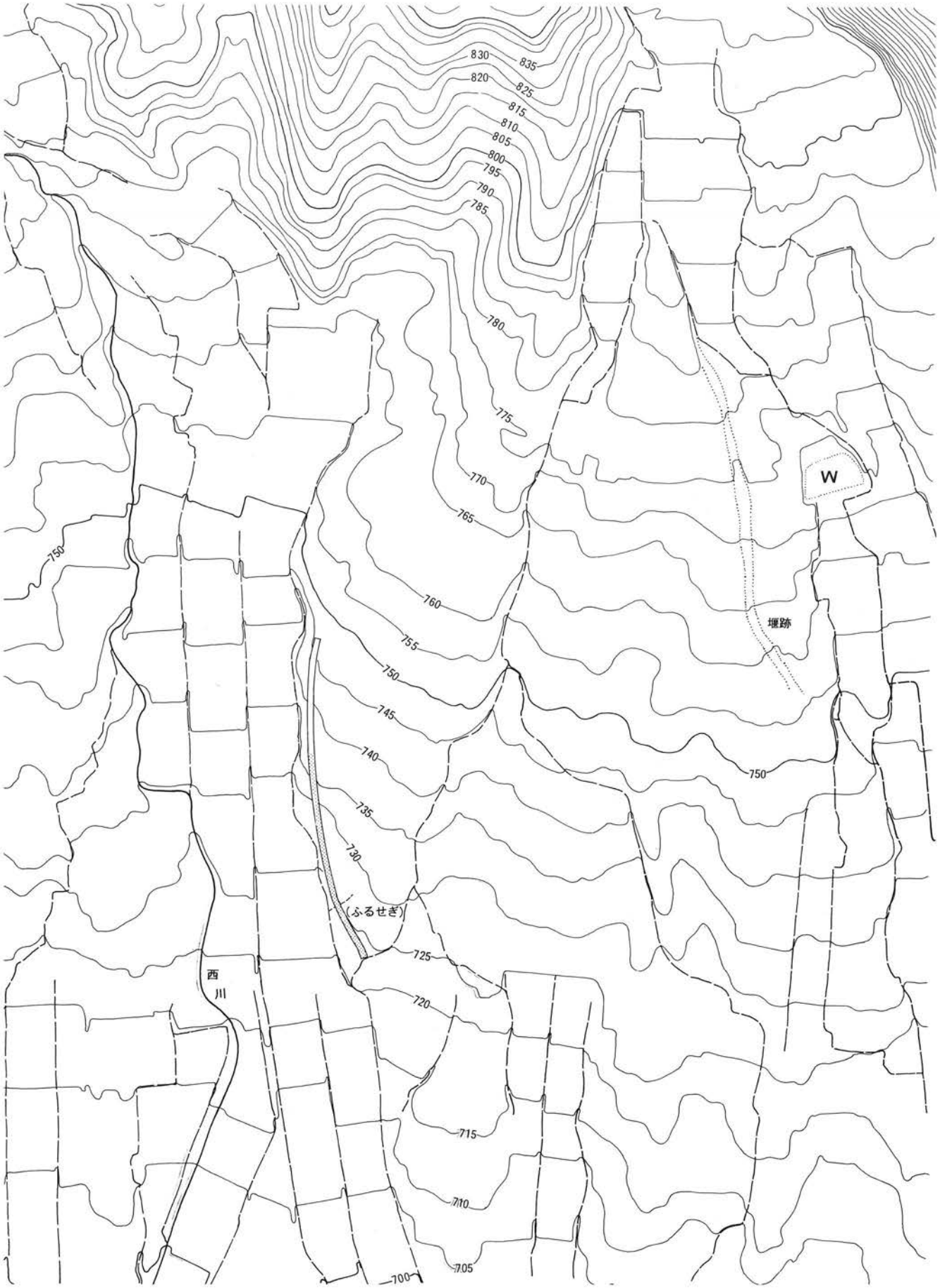
第１図　遺跡の位置（1:200,000）

第2図　遺跡分布図（1:50,000）

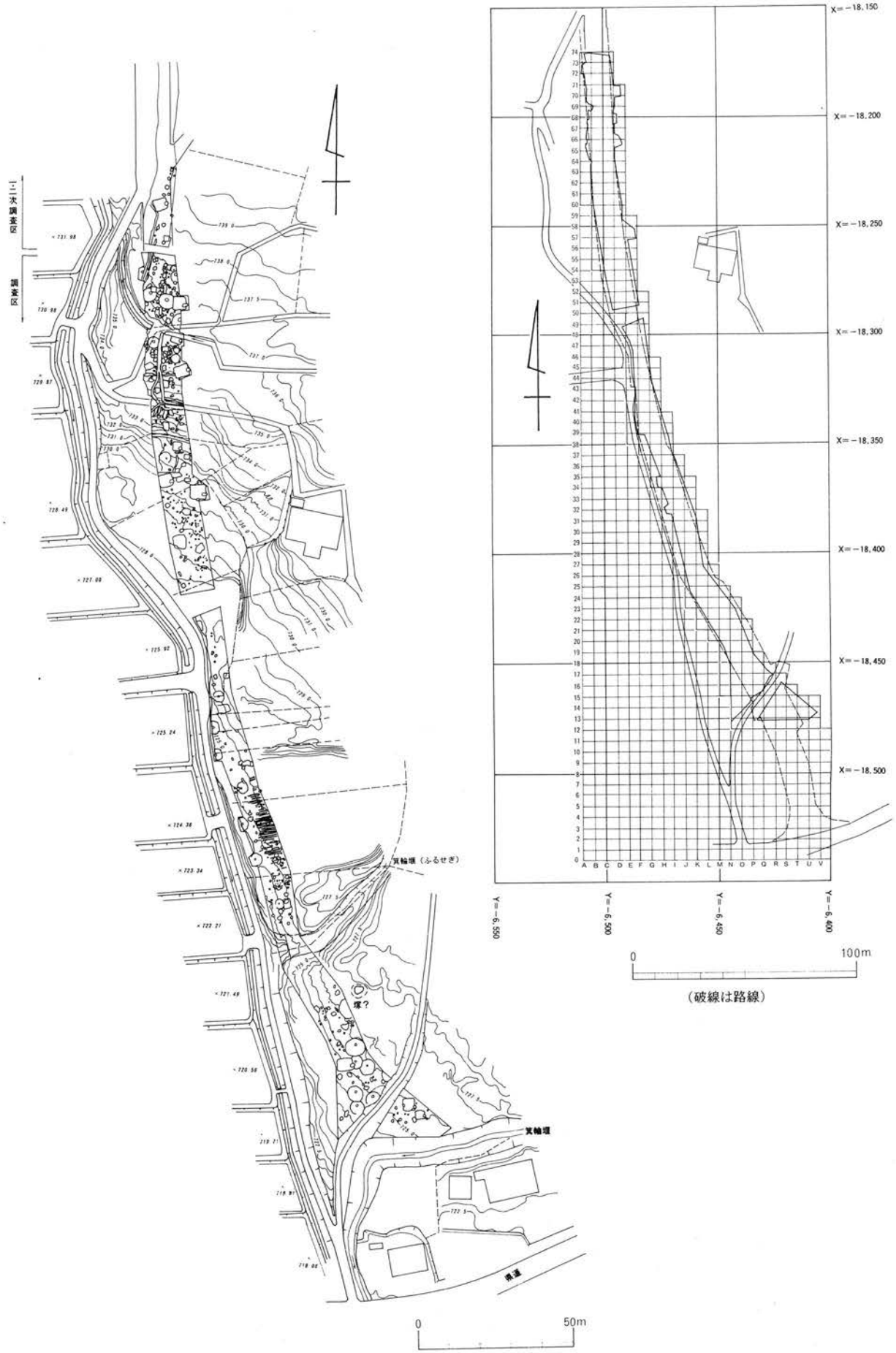


第3図　遺跡分布図（1:25,000，網部は城館址，遺跡名は第1表参照）

第4図　調査区周辺図（1:10,000）（道路網部が調査区）



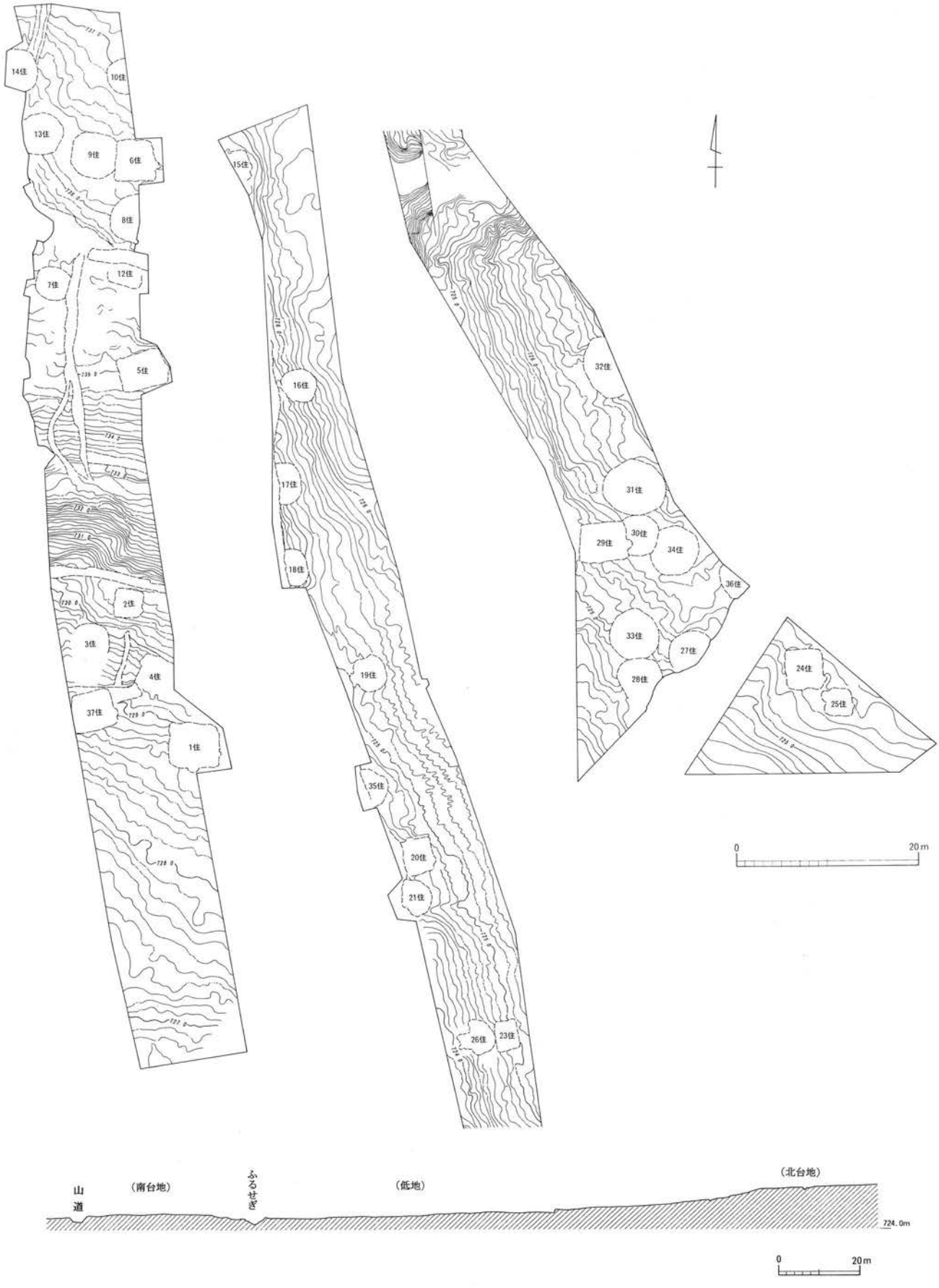
第5図　調査区周辺の地形図および堰・用水路図（破線は堰・用水路）



第６図　遺跡付近の地形現況図およびグリッド配置図（コンタは50㎝、破線は地境）

1住
2住
3住
4住
5住
6住
7住
8住
9住
10住
12住
13住
14住
15住
16住
17住
18住
19住
20住
21住
23住
24住
25住
26住
27住
28住
29住
30住
31住
32住
33住
34住
35住
36住
37住
0
20m
(黒塗りは礫)

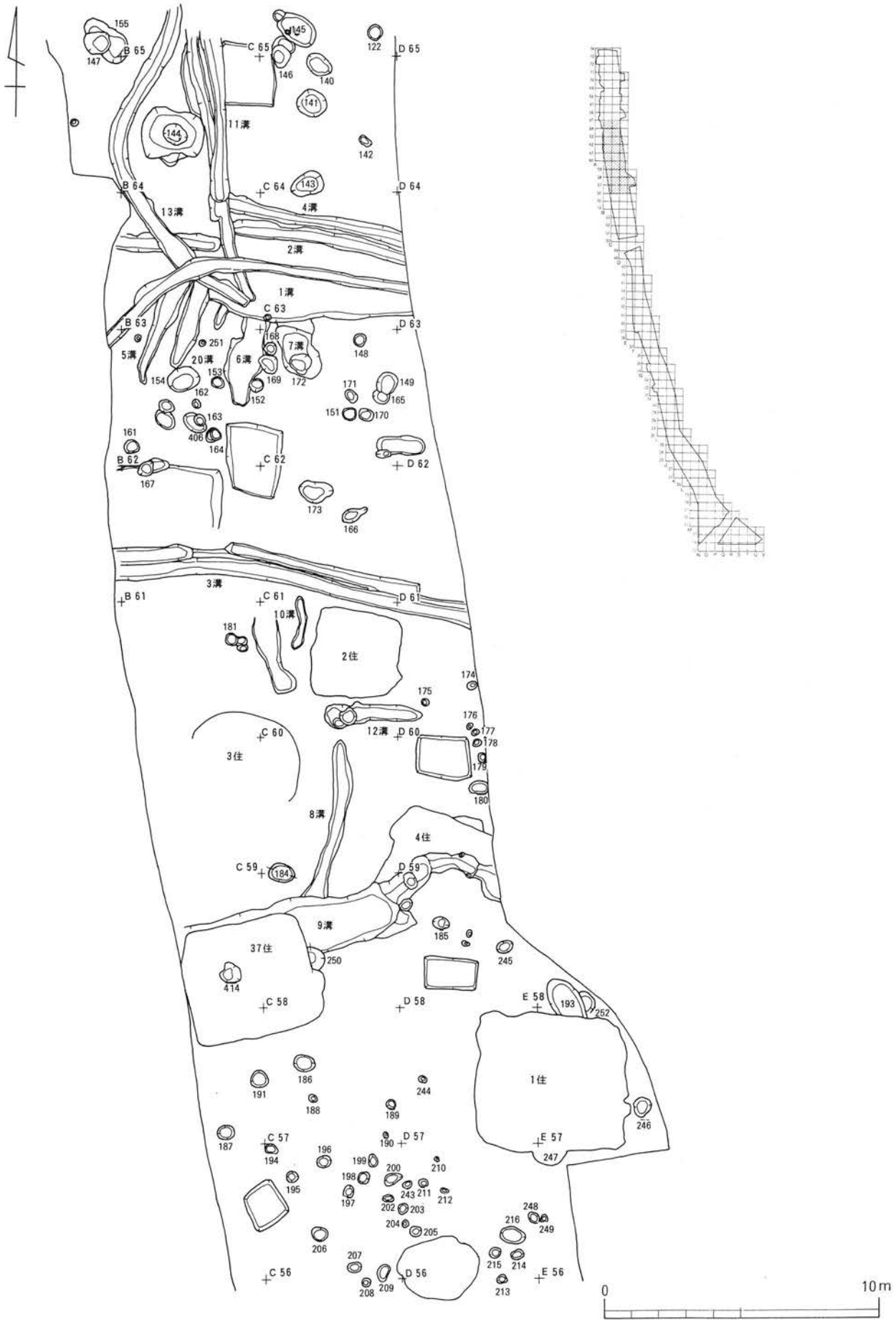
第7図　遺構全体図



第８図　遺跡の地形及び縦断面図（10㎝コンタ）

B 74
C 74
14溝
15溝
B 73
C 73
14住
10住
B 72
C 72
16溝
13住
B 71
C 71
D 71
9住
6住
19溝
B 70
C 70
D 70
18溝
8住
B 69
C 69
D 69
B 68
C 68
D 68
7住
12住
11溝
B 67
C 67
D 67
B 66
C 66
D 66
5住
17溝
B 65
C 65
D 65
0
10m

第9図　遺構分布図(1)


B 65
C 65
D 65
B 64
C 64
D 64
B 63
C 63
D 63
B 62
C 62
D 62
B 61
C 61
D 61
C 60
D 60
C 59
D 59
C 58
D 58
E 58
C 57
D 57
E 57
C 56
D 56
E 56
11溝
13溝
4溝
2溝
1溝
5溝
20溝
6溝
7溝
3溝
10溝
12溝
8溝
9溝
2住
3住
4住
37住
1住
0
10m

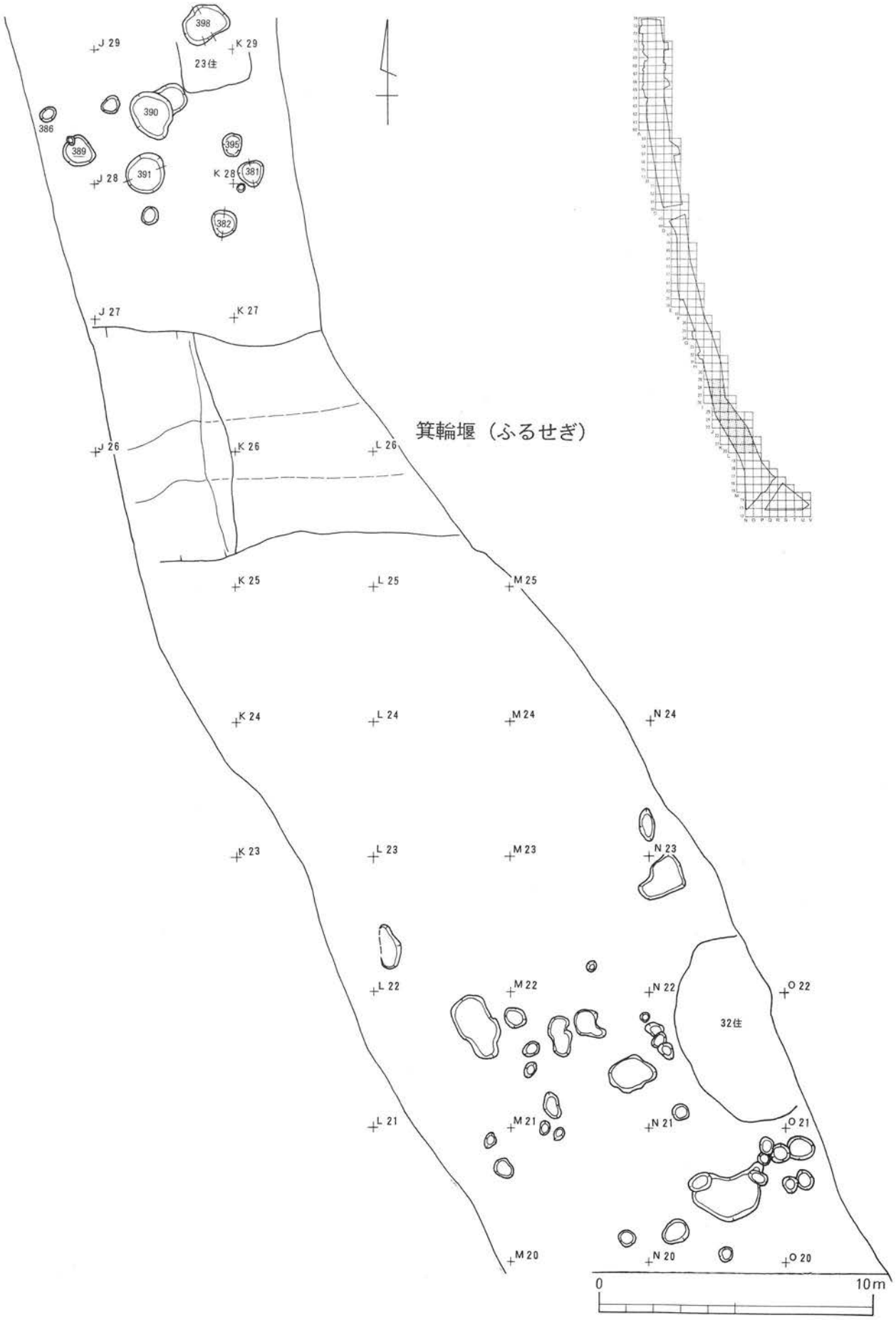
第10図　遺構分布図(2)

C 56
D 56
E 56
C 55
D 55
E 55
D 54
E 54
D 53
E 53
D 52
E 52
F 52
D 51
E 51
F 51
E 49
E 50
F 50
E 49
F 49
15住
E 48
F 48
F 47
G 47
0
10m

第11図　遺構分布図 (3)

F 47
G 47
G 38
H 38
I 38
F 46
G 46
19住
H 37
I 37
F 45
G 45
H 36
I 36
F 44
G 44
H 35
I 35
J 35
35住
16住
F 43
G 43
H 34
I 34
J 34
F 42
G 42
H 42
H 33
20住
I 33
J 33
17住
F 41
G 41
H 41
21住
I 32
J 32
K 32
F 40
G 40
H 40
I 31
J 31
K 31
18住
G 39
H 39
I 30
J 30
K 30
G 38
H 38
I 38
I 29
J 29
26住
23住
K 29
0
10m

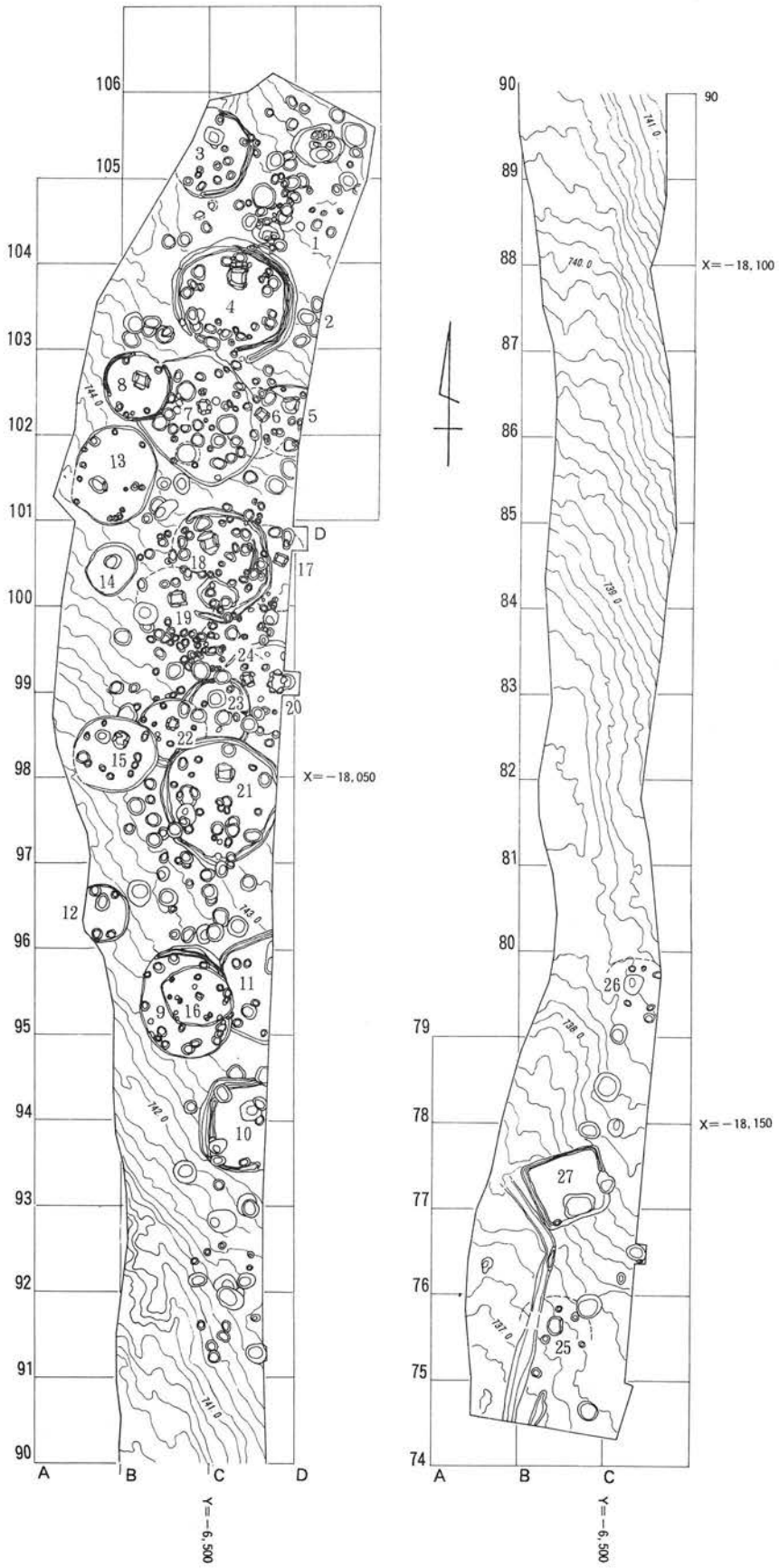
第12図　遺構分布図(4)


箕輪堰（ふるせぎ）
398
J 29
K 29
23住
390
386
389
395
391
K 28
381
J 28
382
J 27
K 27
J 26
K 26
L 26
K 25
L 25
M 25
K 24
L 24
M 24
N 24
K 23
L 23
M 23
N 23
L 22
M 22
N 22
O 22
32住
L 21
M 21
N 21
O 21
M 20
N 20
O 20
0
10m

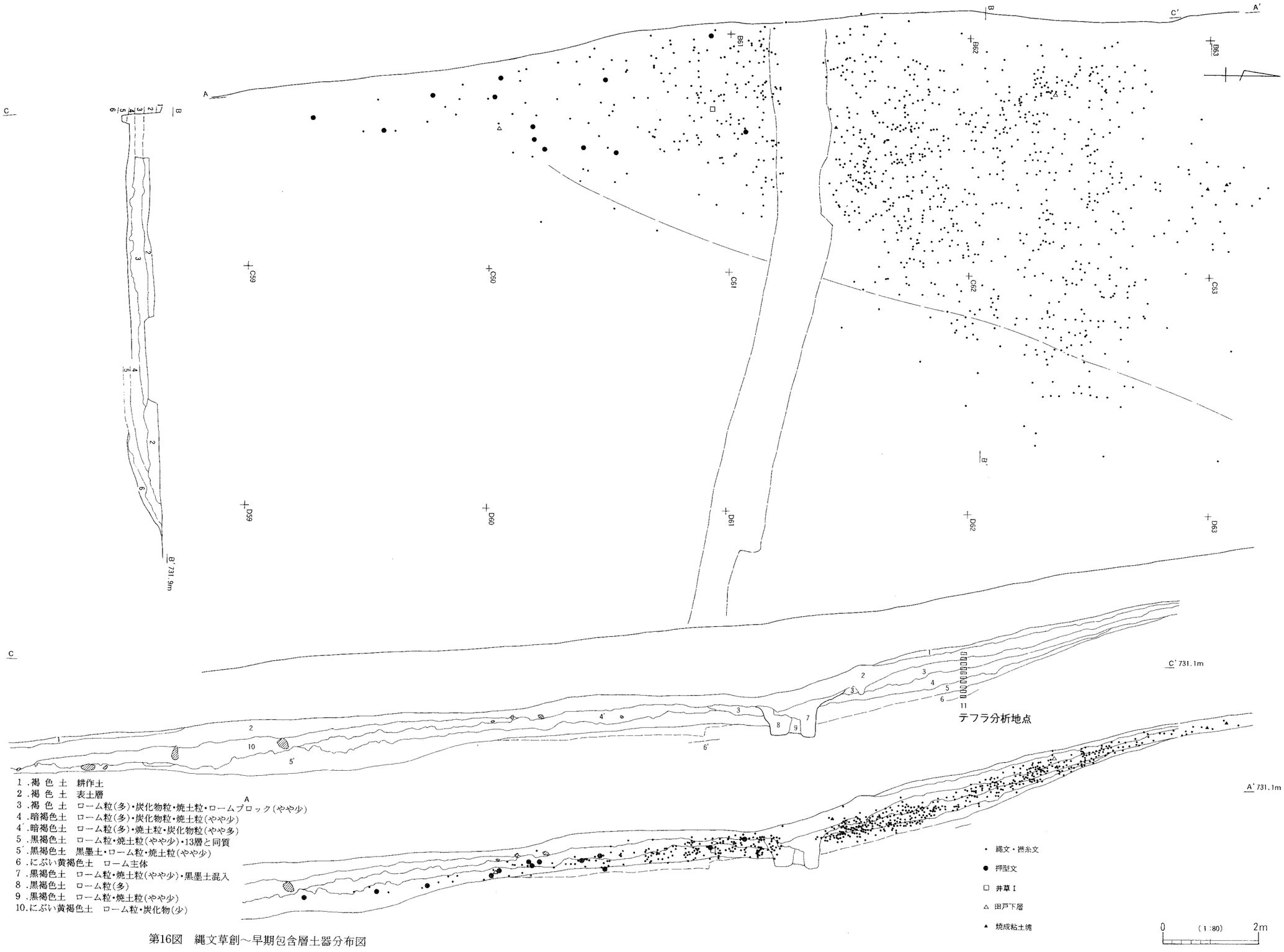
第13図　遺構分布図（5）

N 20
O 20
P 20
31住
N 19
O 19
P 19
N 18
O 18
30住
P 18
29住
34住
412
N 17
O 17
P 17
Q 17
36住
R 17
411
N 16
O 16
P 16
Q 16
R 16
S 16
33住
27住
408
N 15
O 15
28住
P 15
Q 15
R 15
24住
S 15
405
413
25住
林道
404
N 14
O 14
P 14
Q 14
R 14
S 14
401
402
403
407
N 13
O 13
P 13
Q 13
R 13
S 13
T 14
U 14
T 13
U 13
0
10m

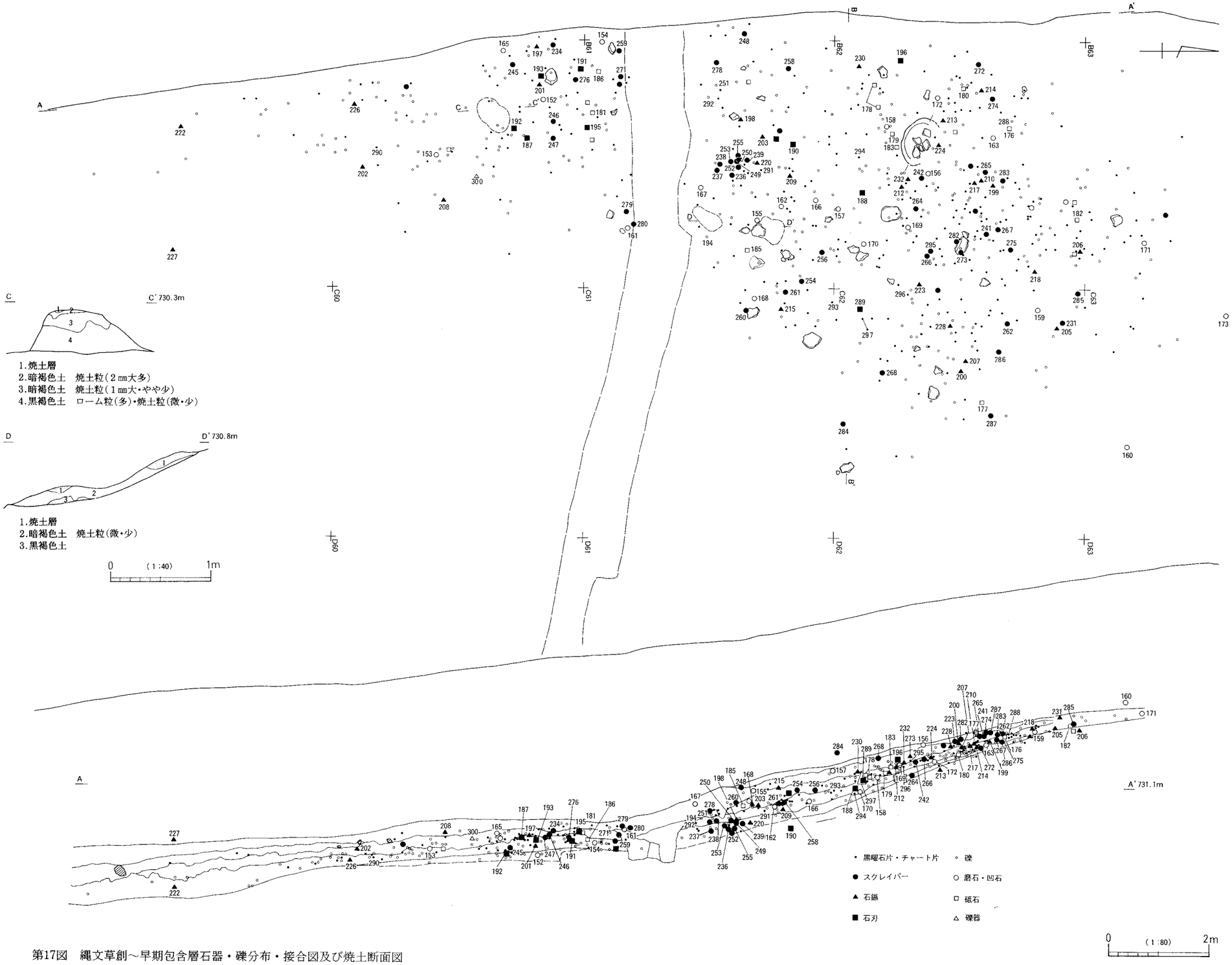
第14図　遺跡分布図(6)



第15図　社口遺跡２次調査全体図（平成６年度高根町教委調査，コンタは10㎝，数字は住居番号）



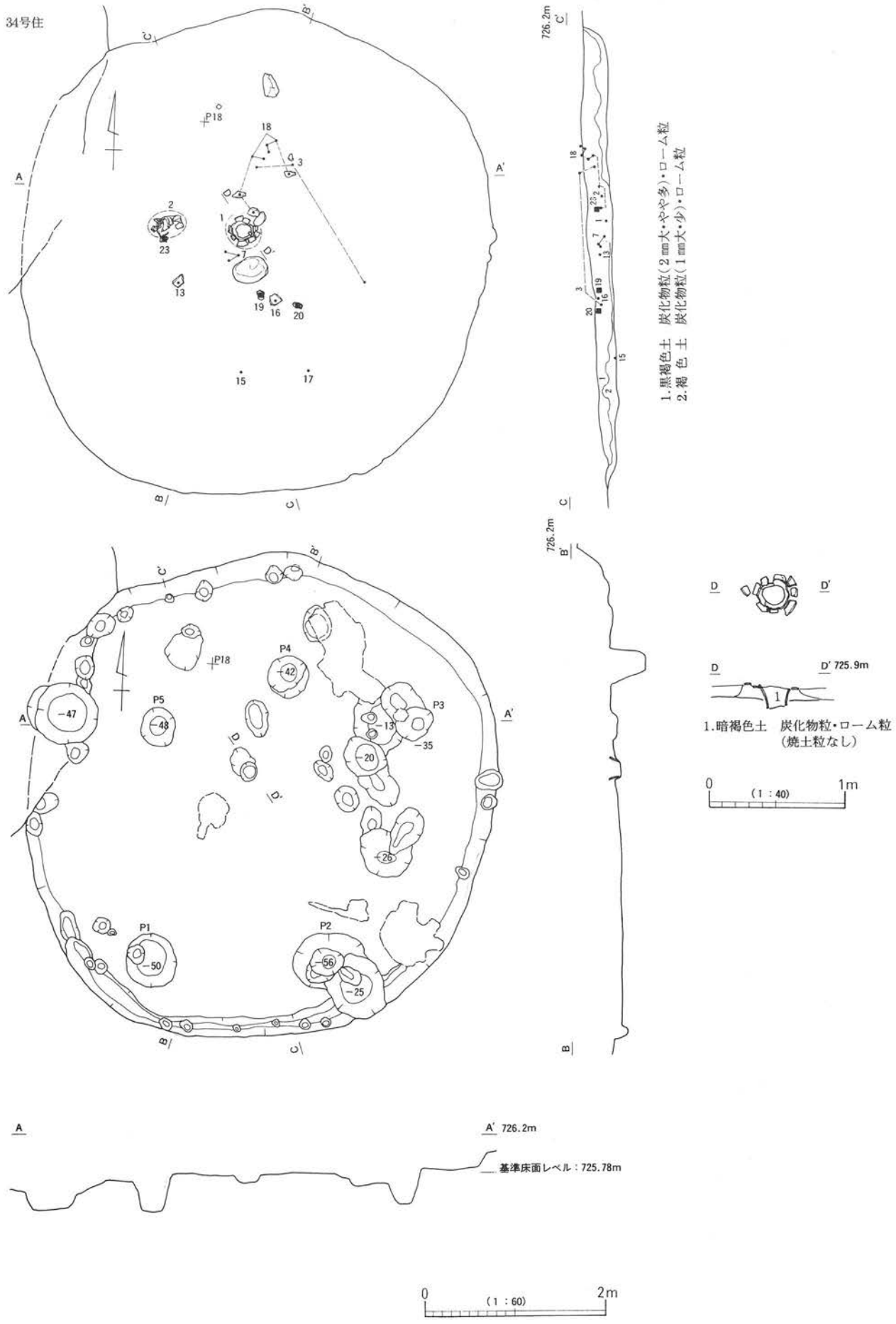
第16図 縄文草創～早期包含層土器分布図



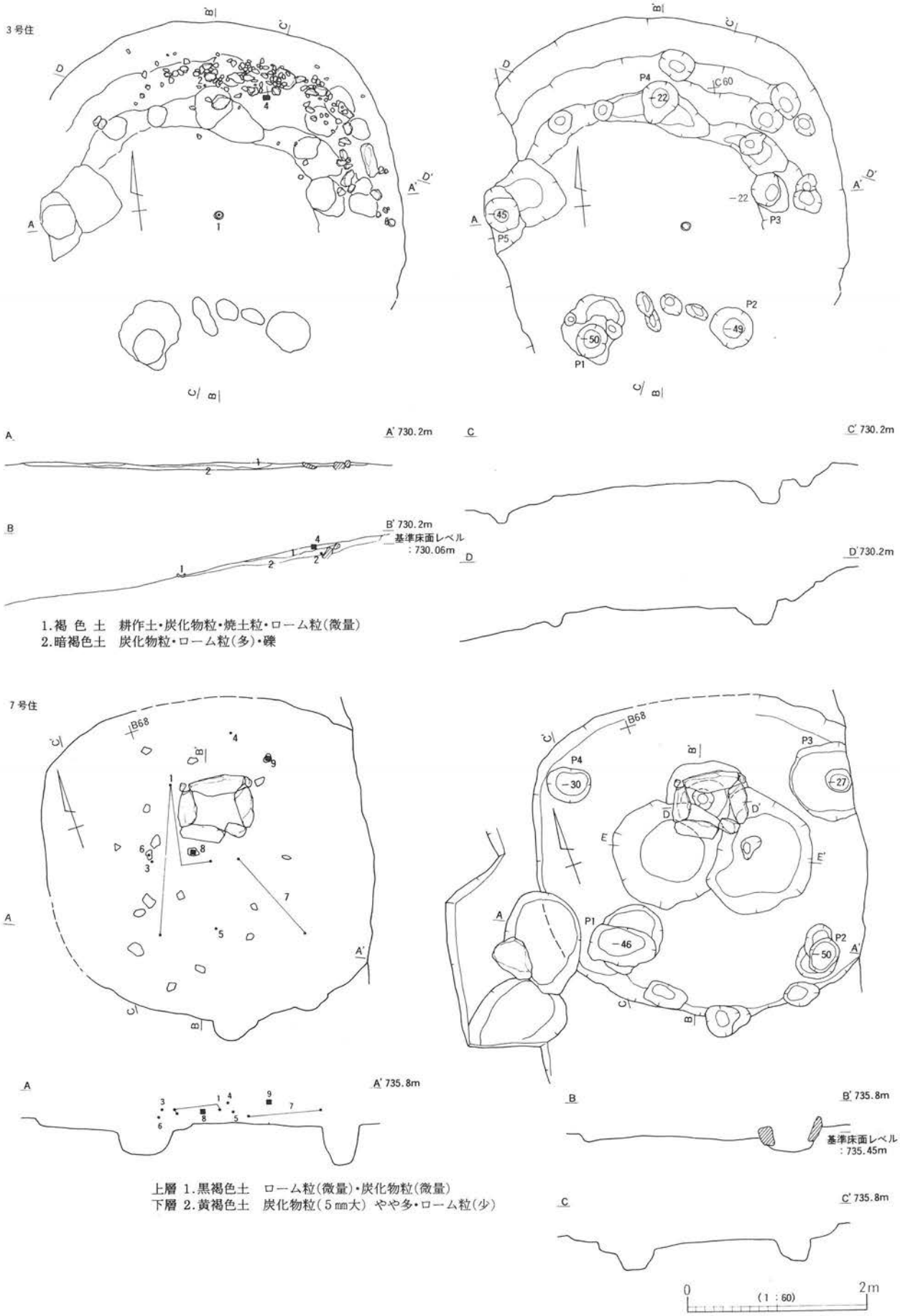
第17図　縄文草創～早期包含層石器・礫分布・接合図及び焼土断面図

第18図　縄文草創～早期土器の分布・接合図(1)

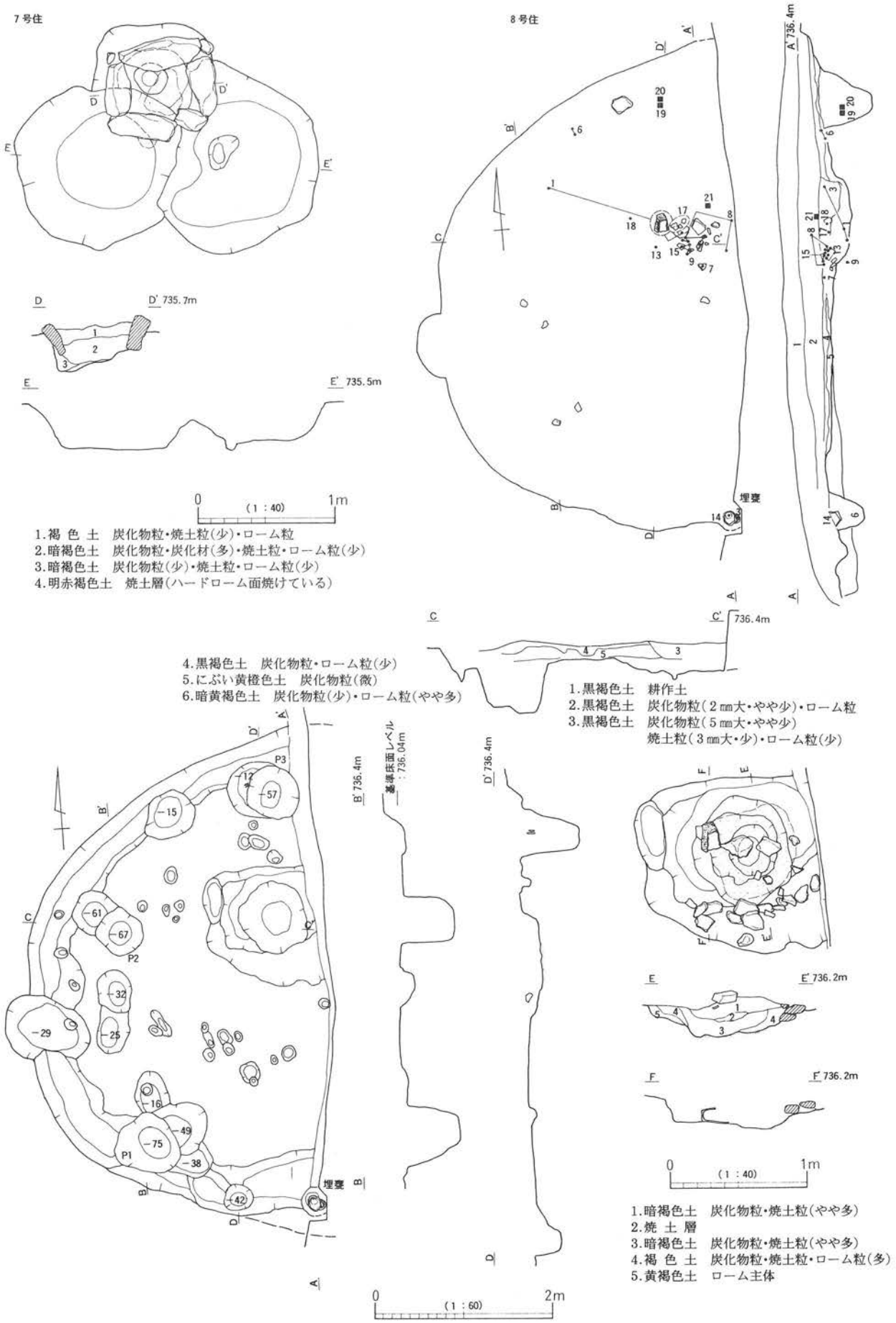
第19図　縄文草創～早期土器の分布・接合図(2)



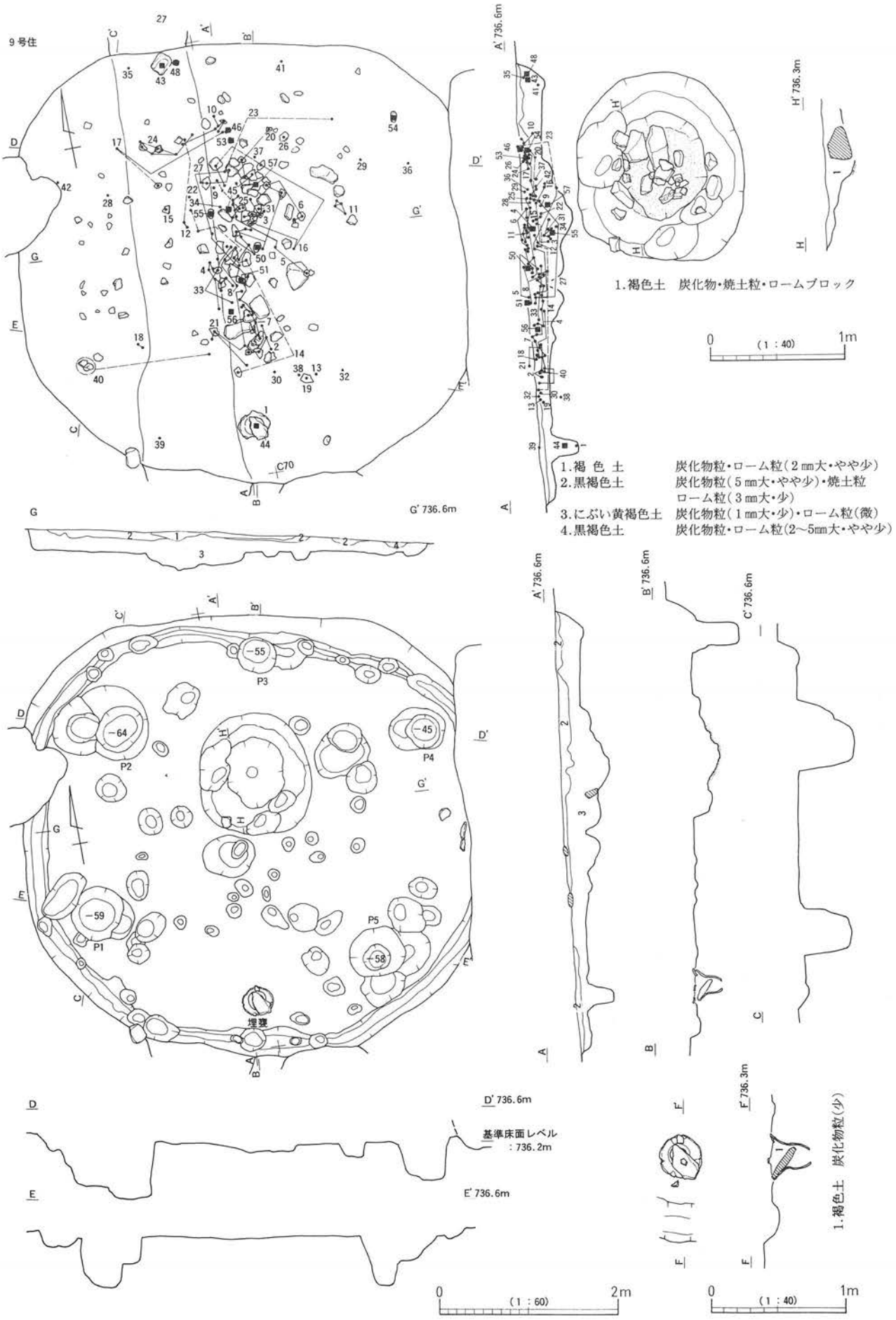
第20図　34号住実測図



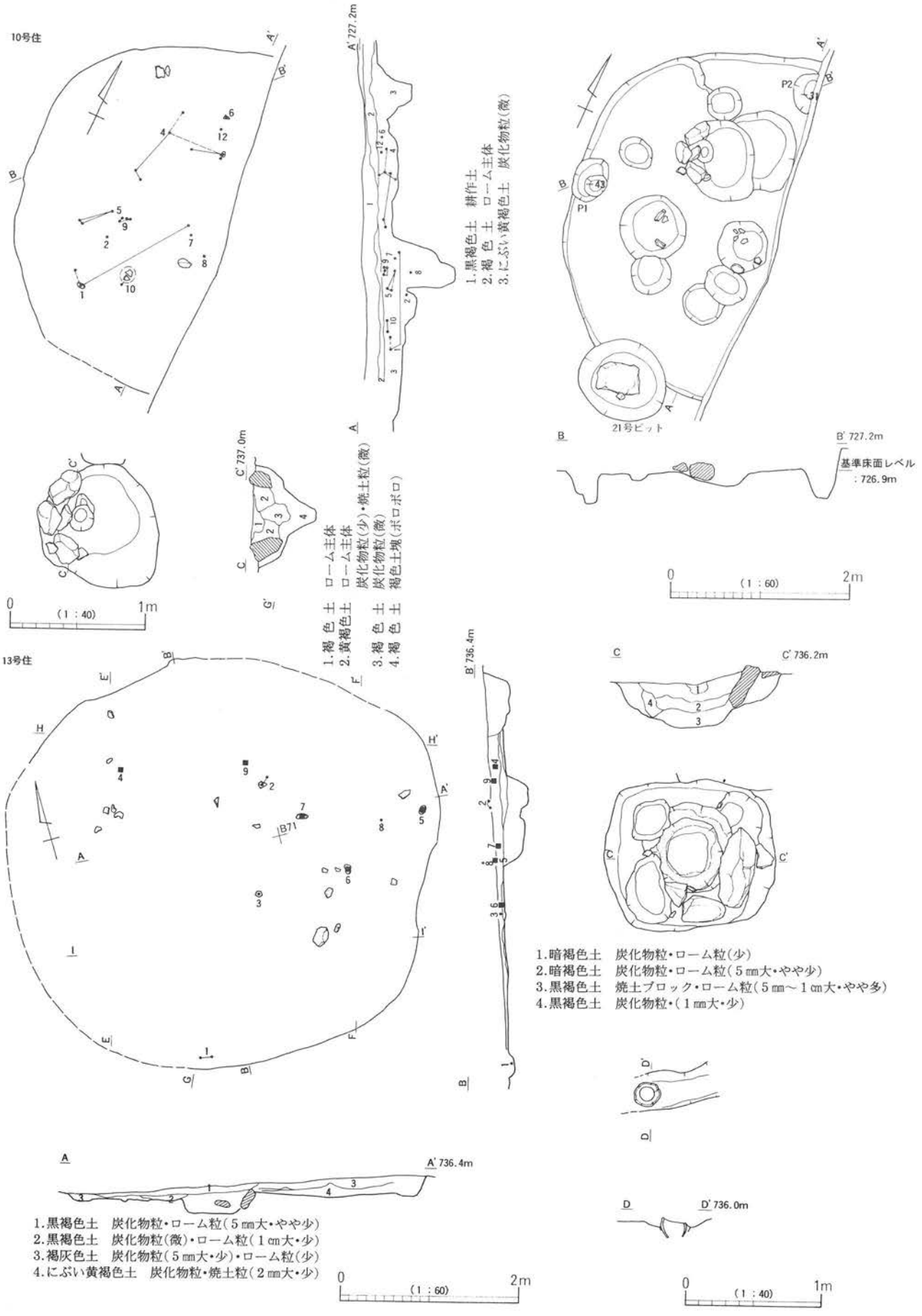
第21図　3・7号住実測図



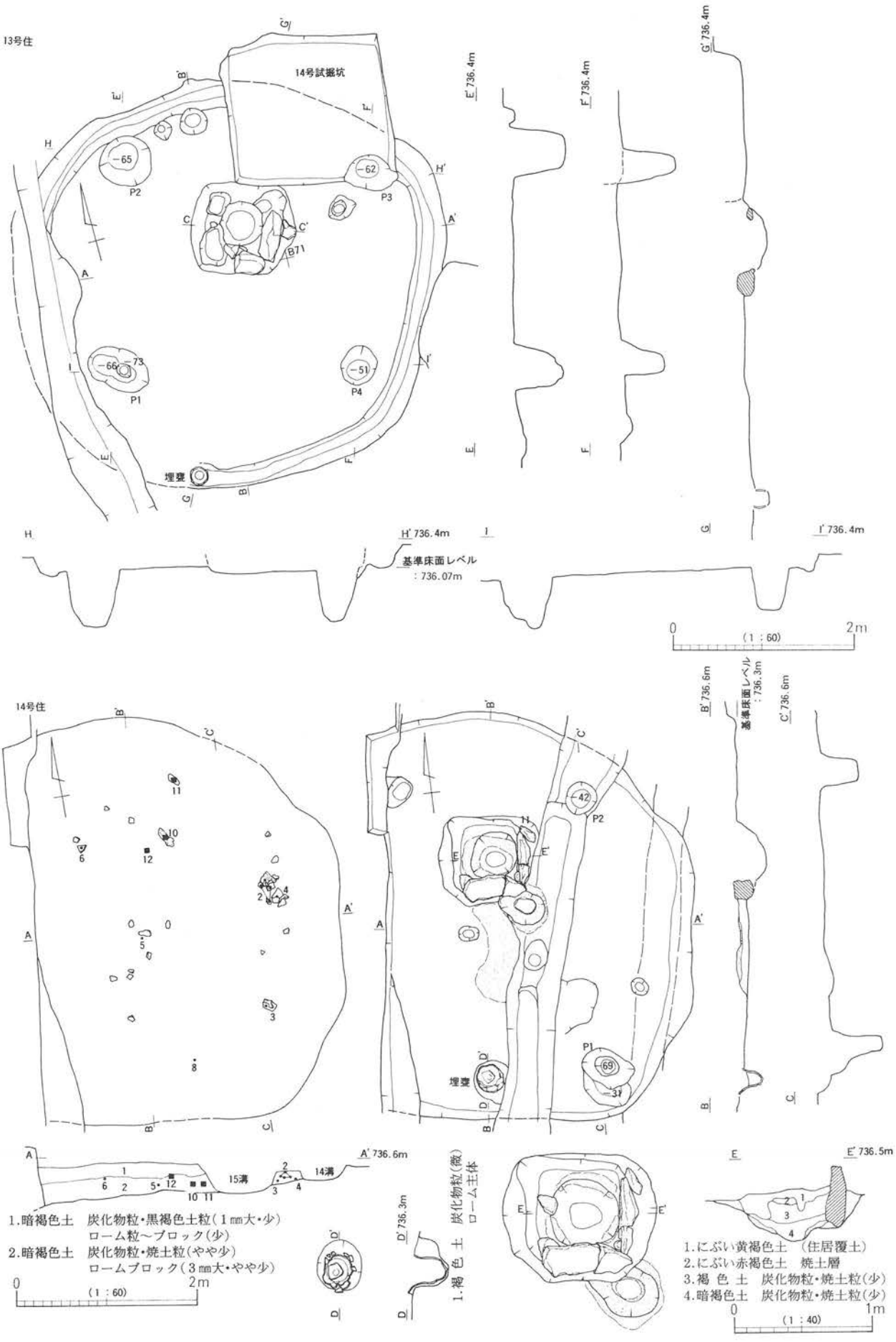
第22図　7・8号住実測図


9号住
A' 736.6m
H' 736.3m
1.褐色土　炭化物・焼土粒・ロームブロック
0　(1：40)　1m
1.褐 色 土　炭化物粒・ローム粒(2㎜大・やや少)
2.黒褐色土　炭化物粒(5㎜大・やや少)・焼土粒
ローム粒(3㎜大・少)
3.にぶい黄褐色土　炭化物粒(1㎜大・少)・ローム粒(微)
4.黒褐色土　炭化物粒・ローム粒(2～5㎜大・やや少)
G' 736.6m
P1
P2
P3
P4
P5
埋甕
B' 736.6m
C' 736.6m
D' 736.6m
基準床面レベル
：736.2m
E' 736.6m
F' 736.3m
1.褐色土　炭化物粒(少)
0　(1：60)　2m
0　(1：40)　1m

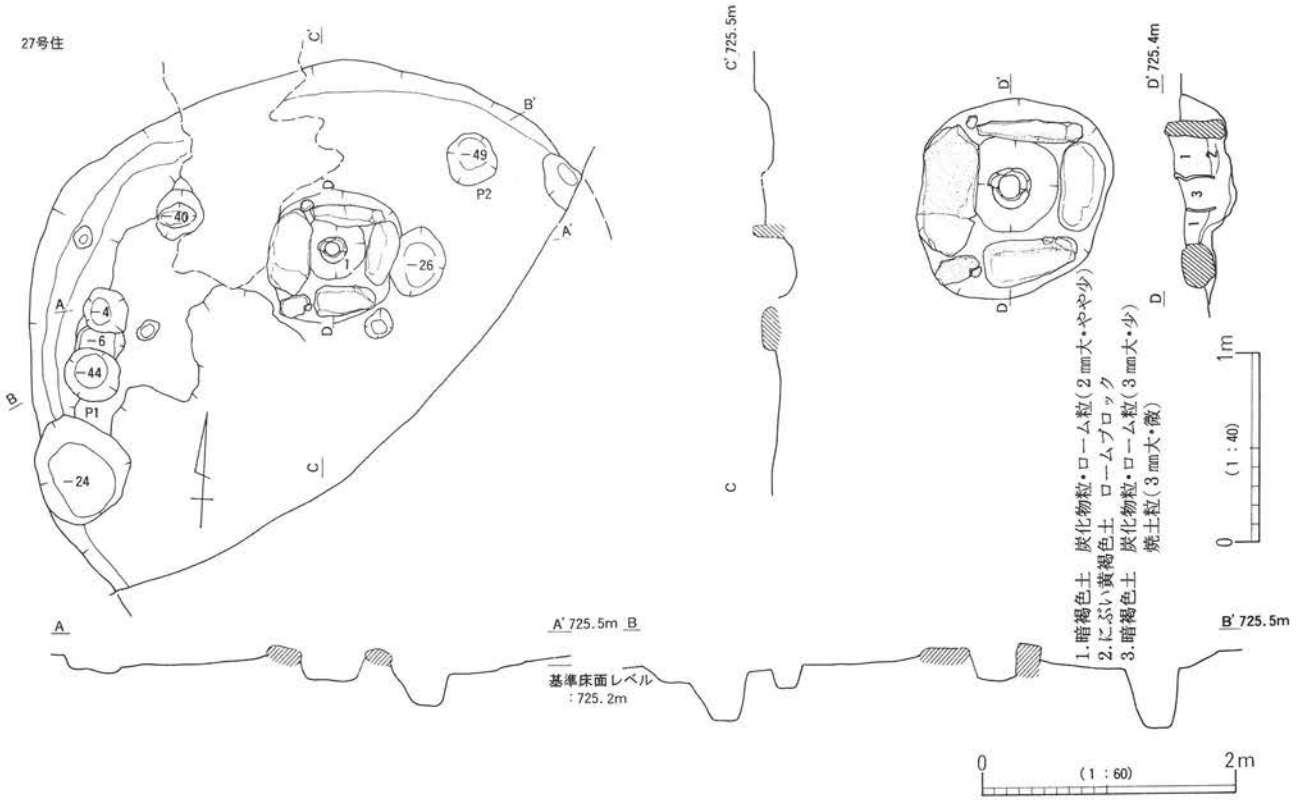
第23図　9号住実測図

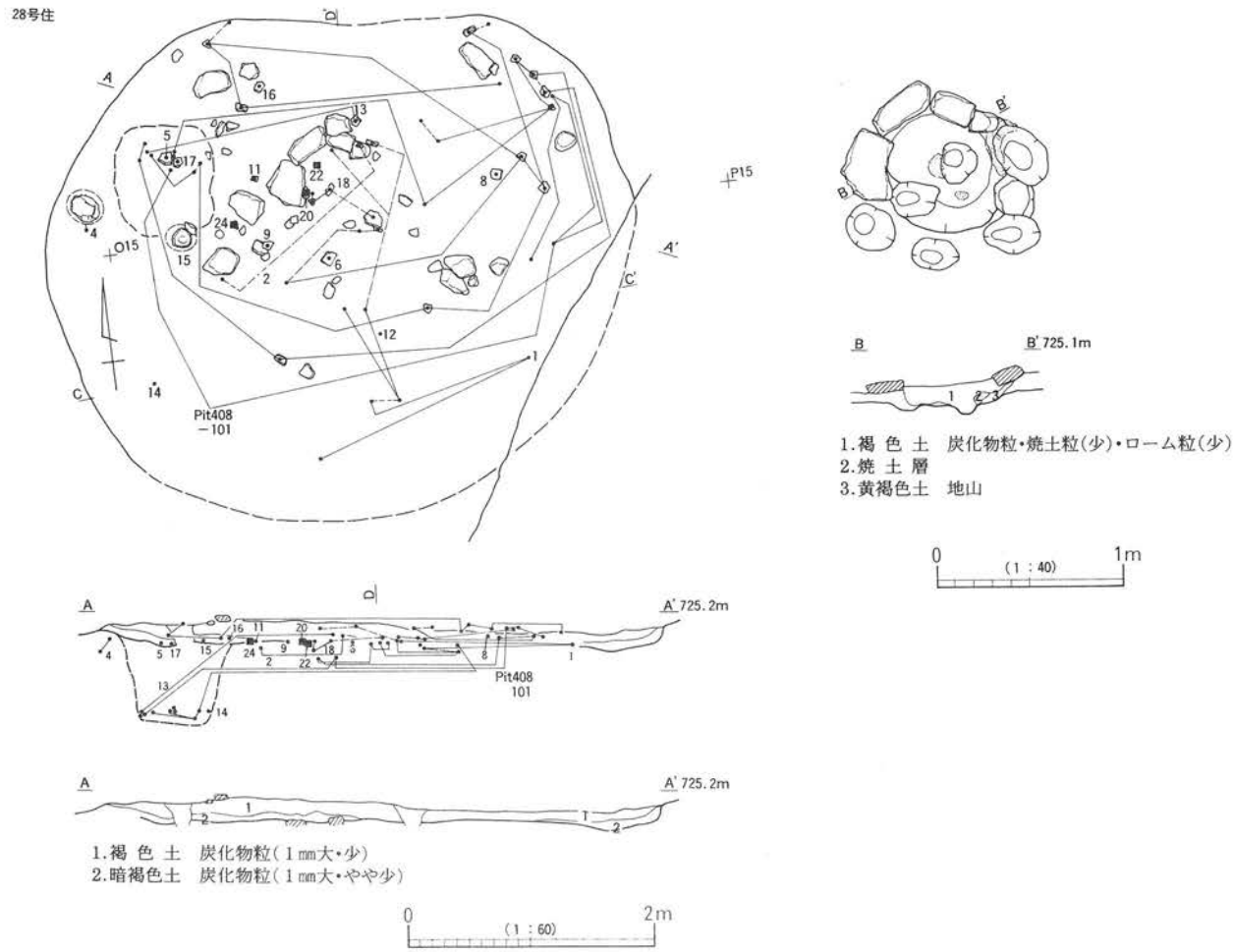


第24図　10・13号住実測図

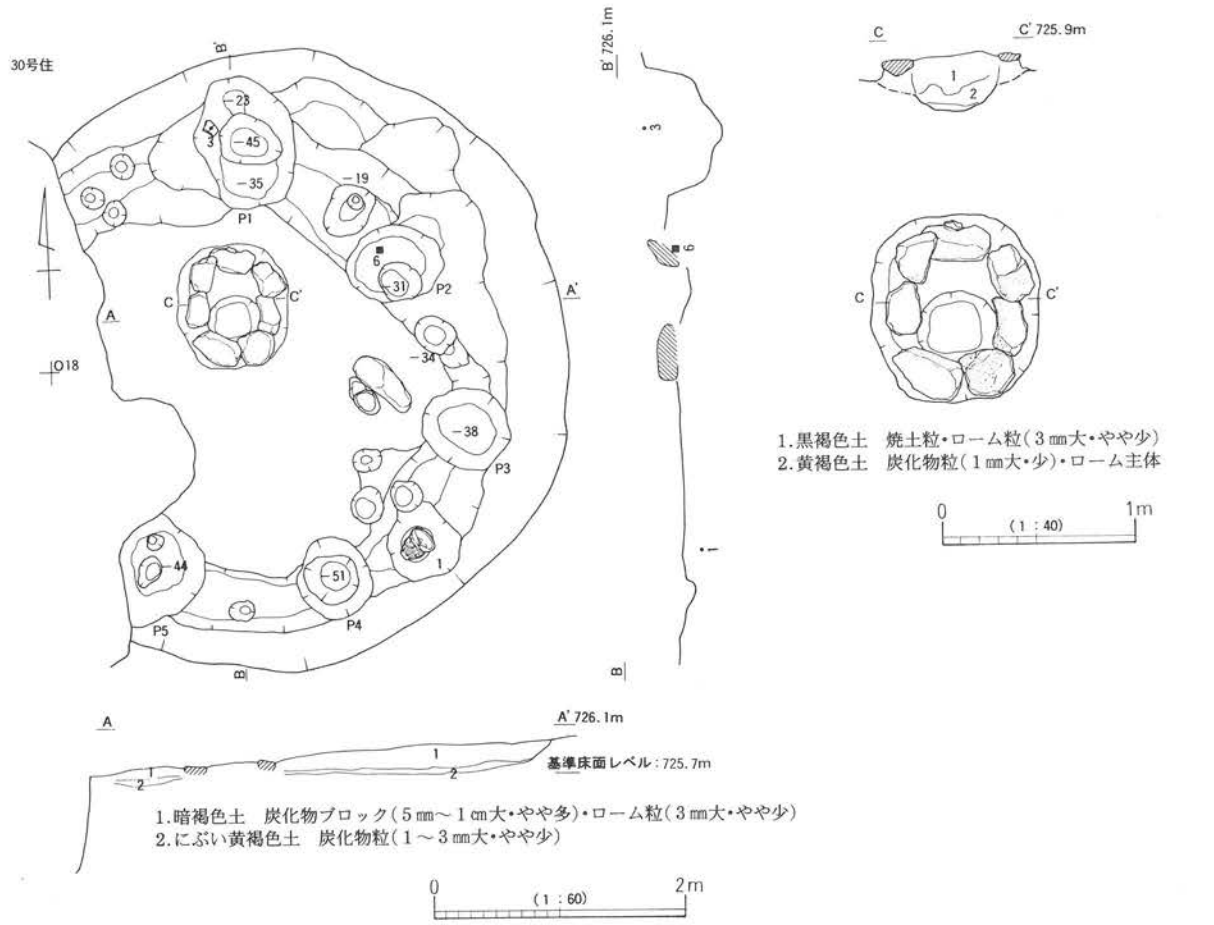


第25図 13・14号住実測図

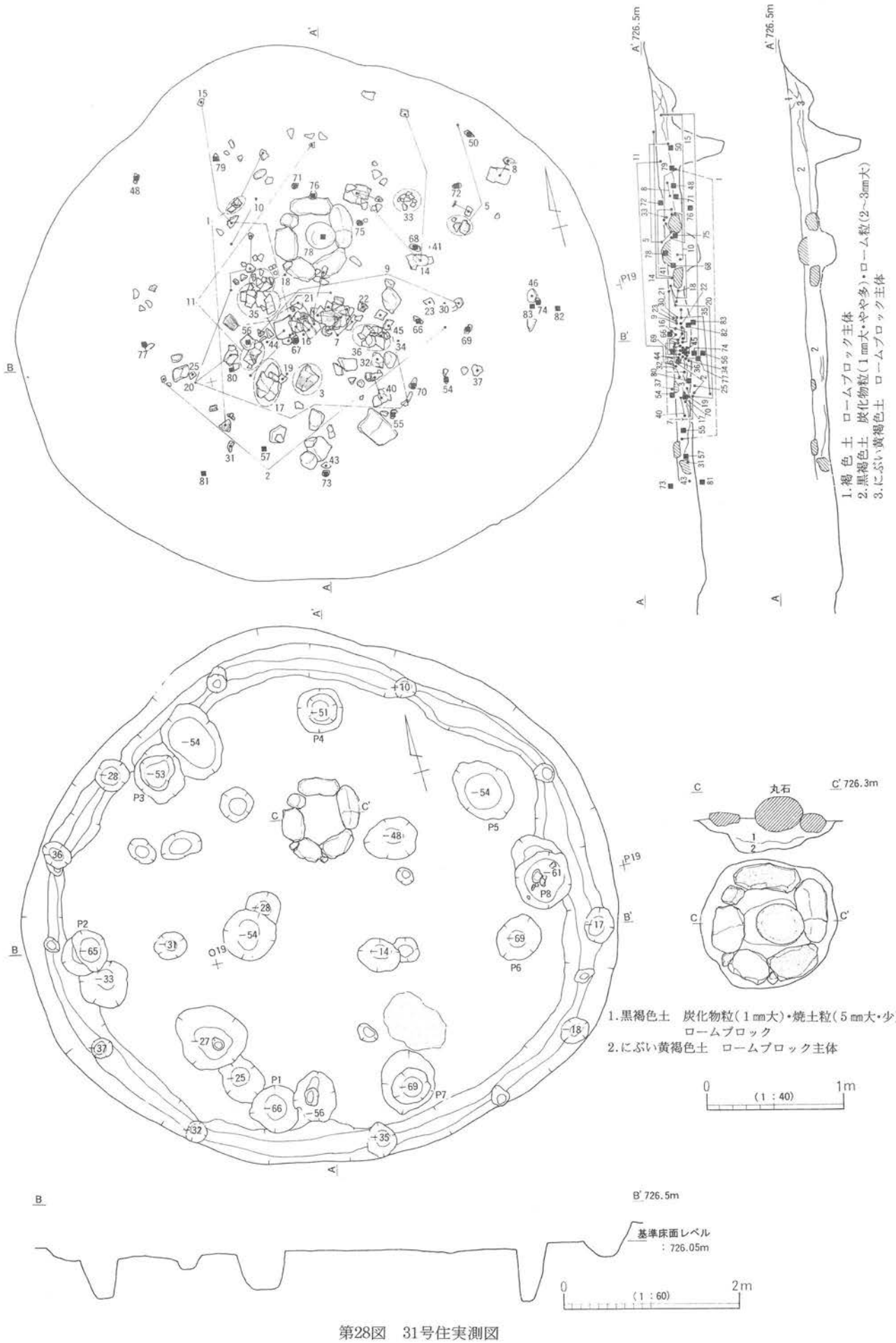




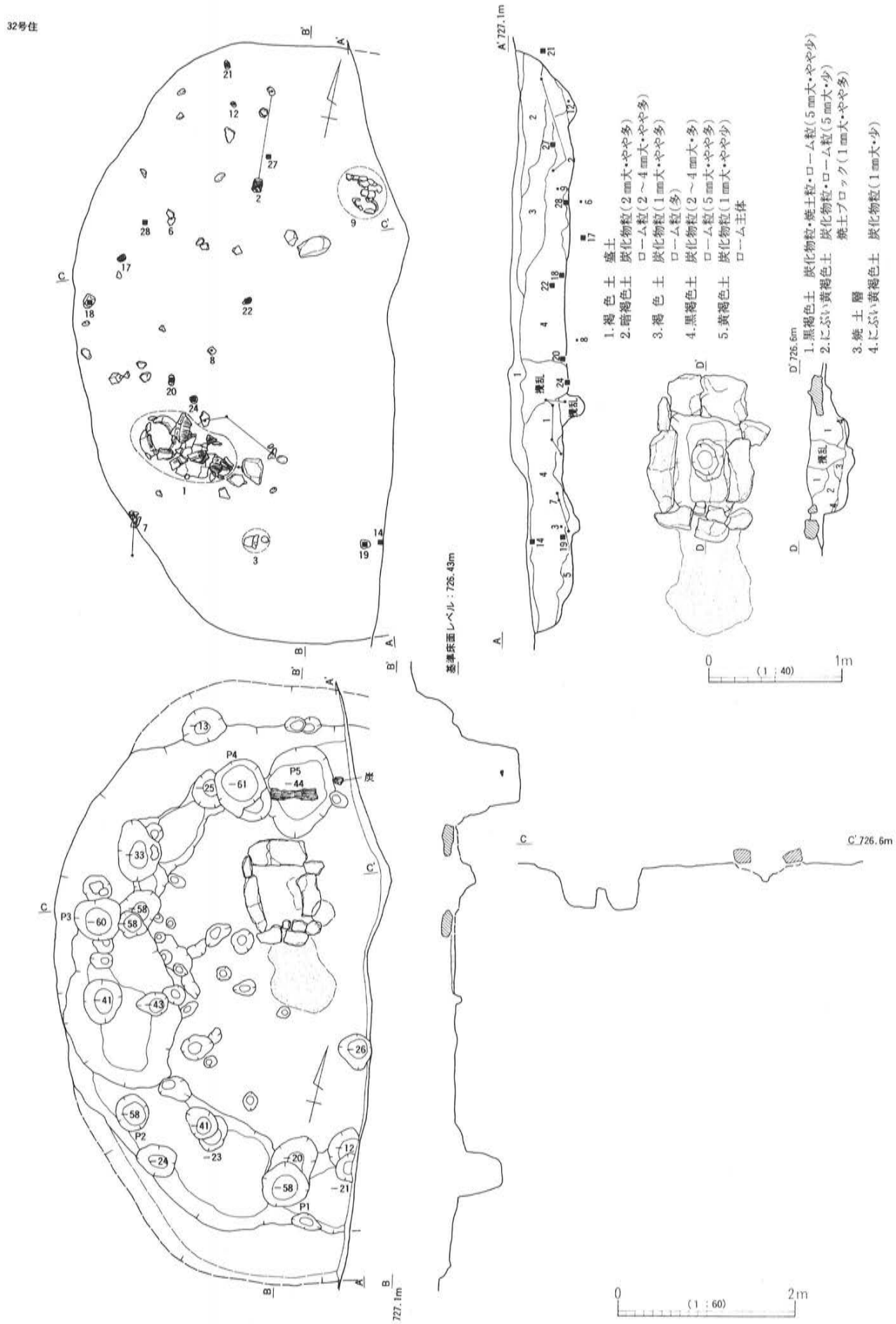
第26図 27・28号住実測図



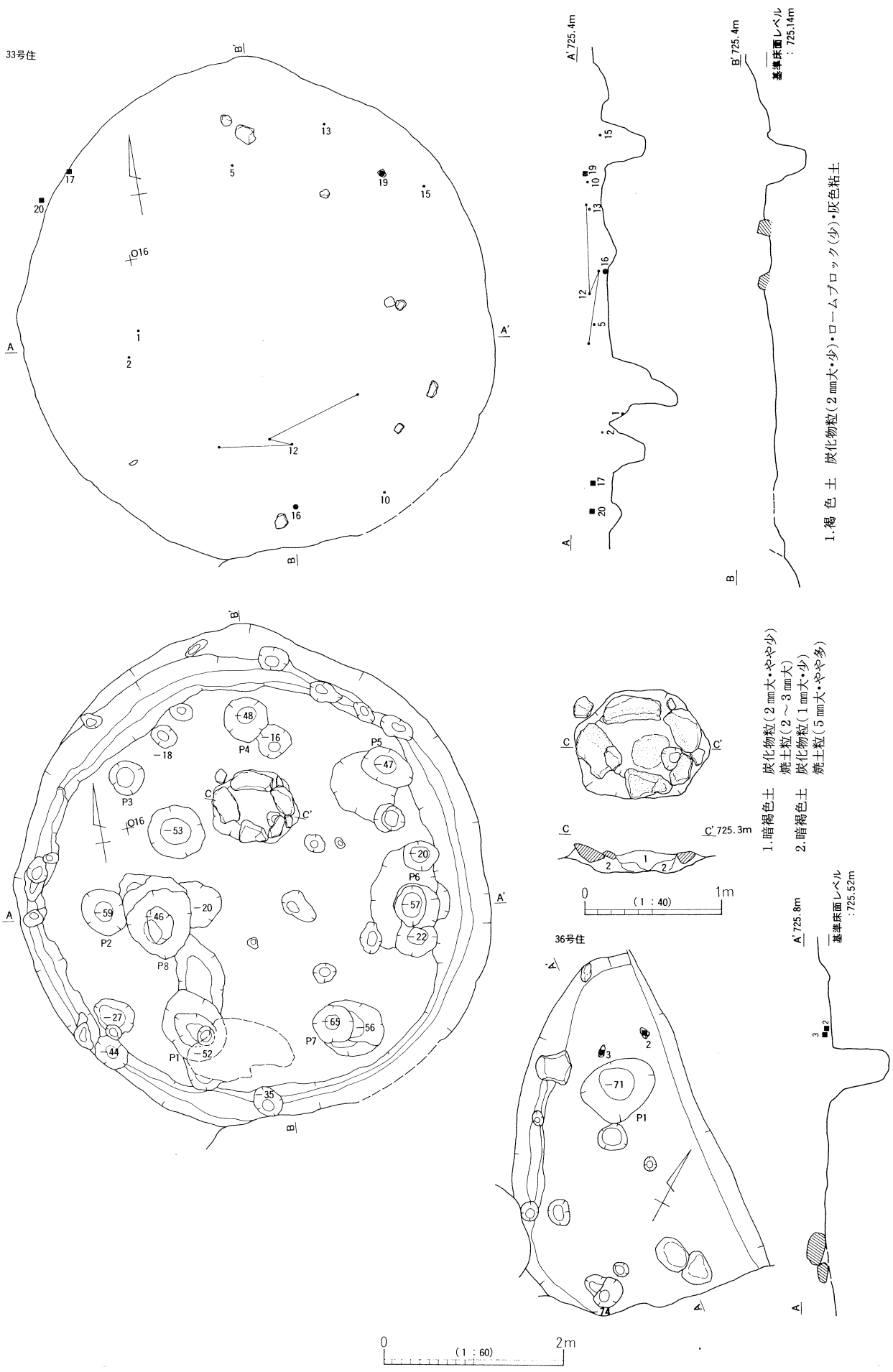
第27図　28・30号住実測図



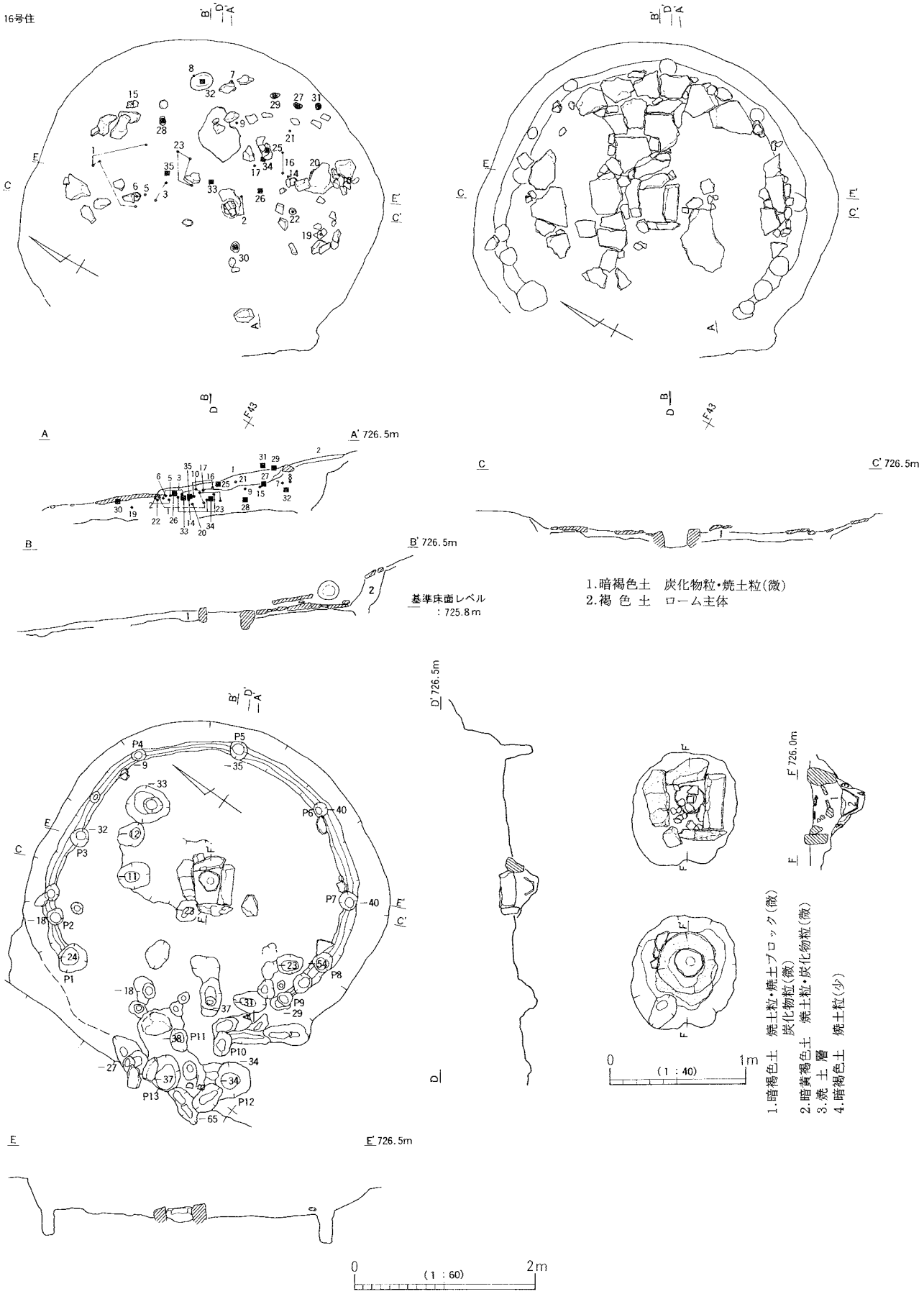
第28図　31号住実測図



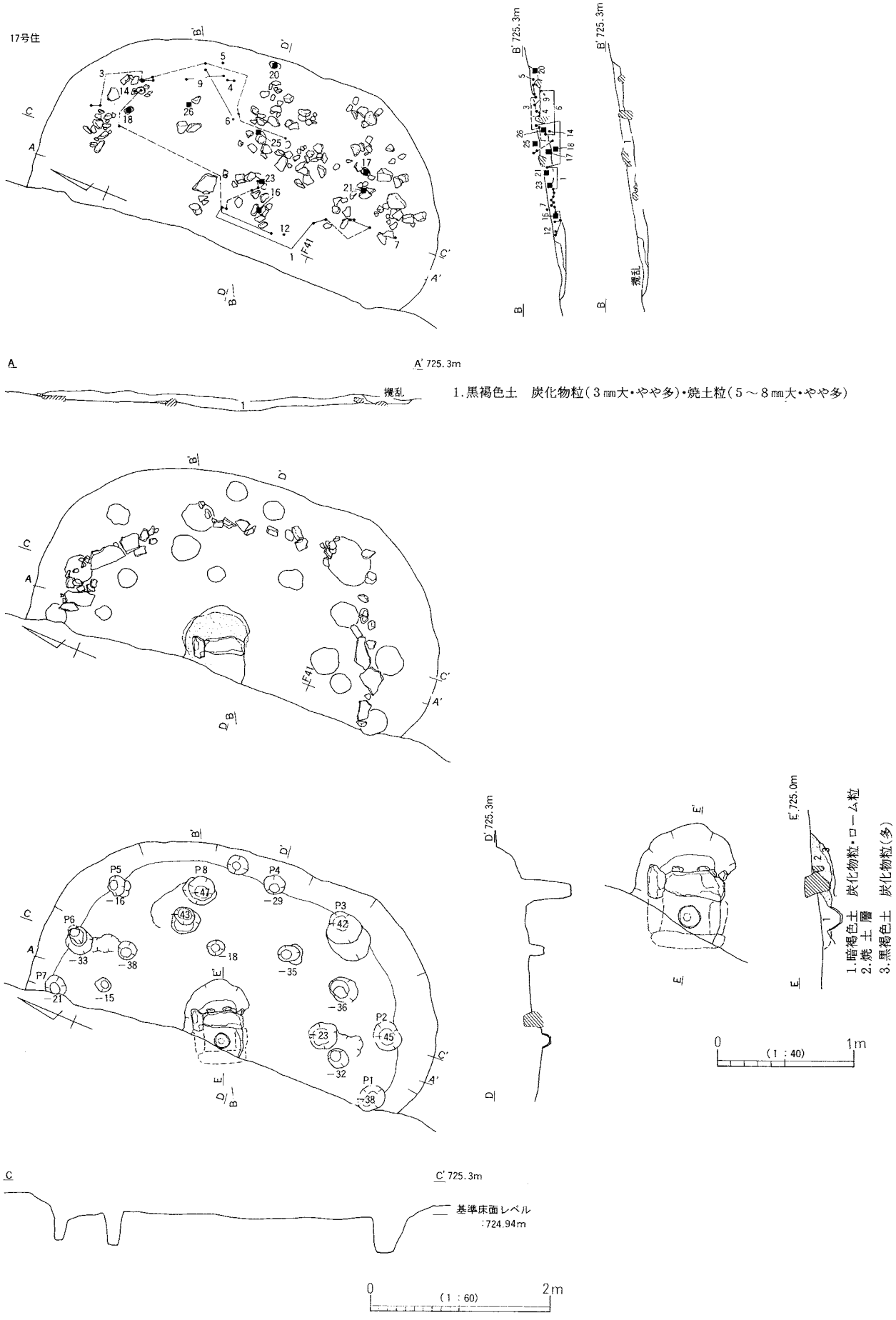
第29図　32号住実測図



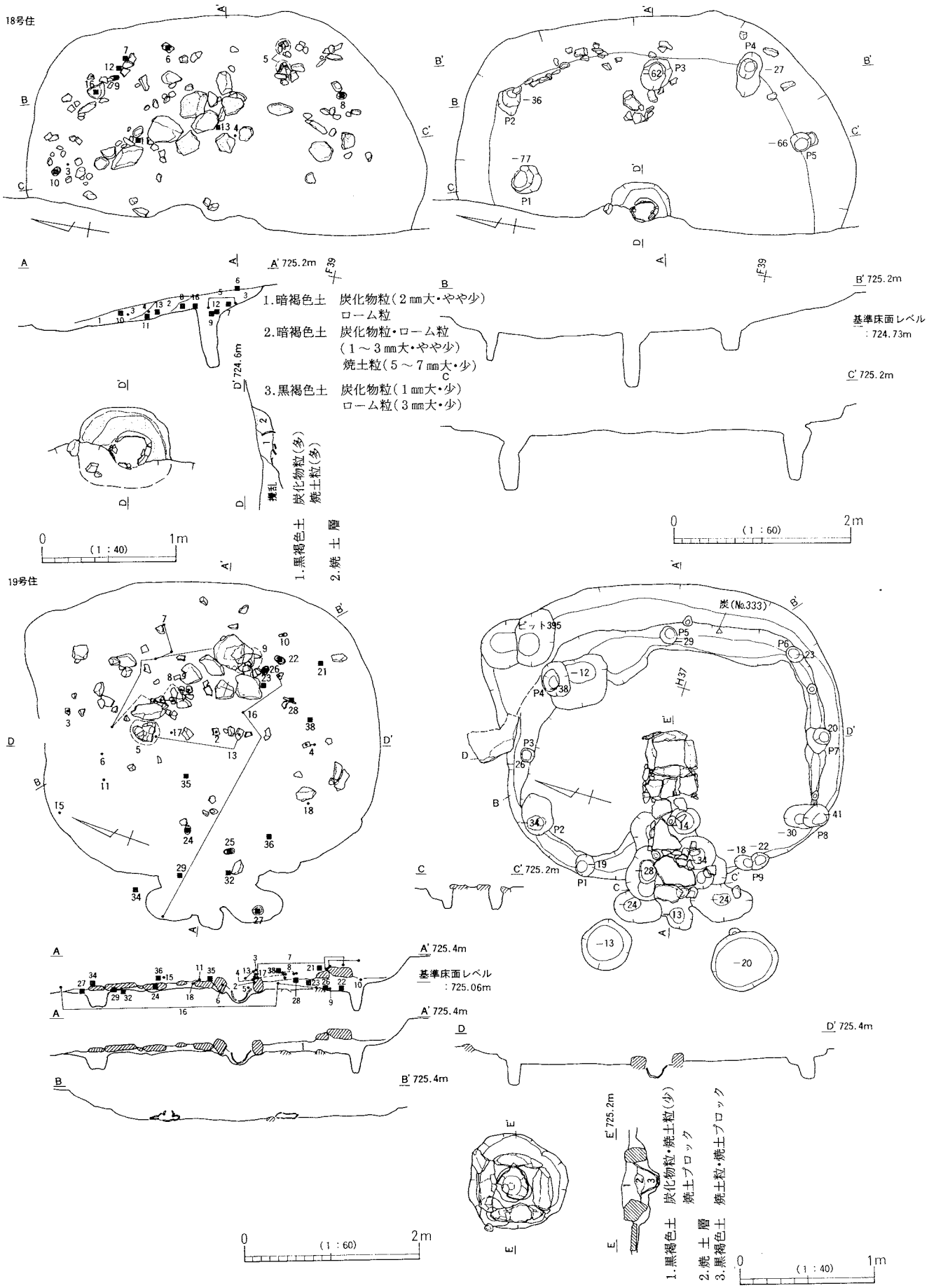
第30図　33・36号住実測図



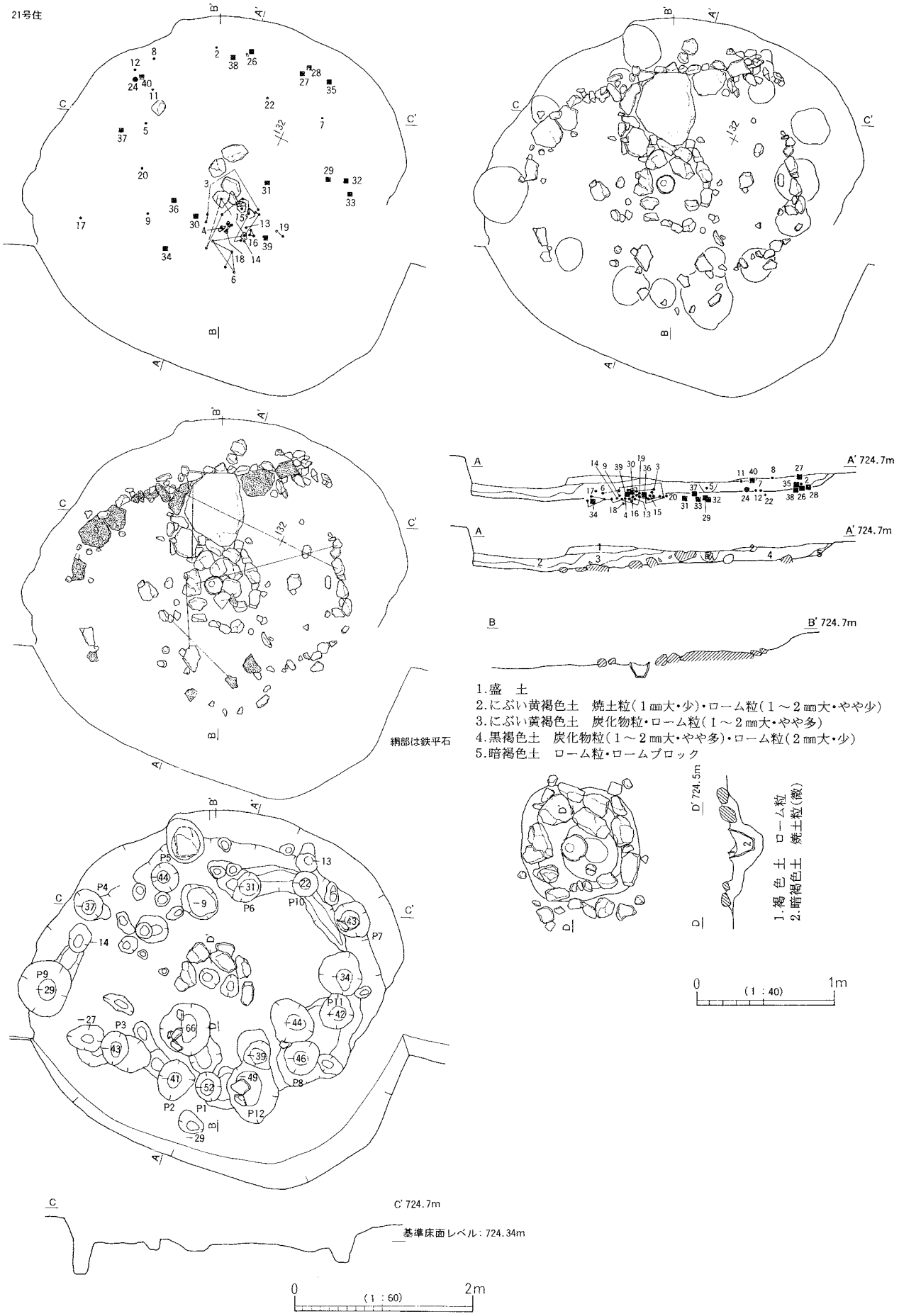
第31図　16号住実測図



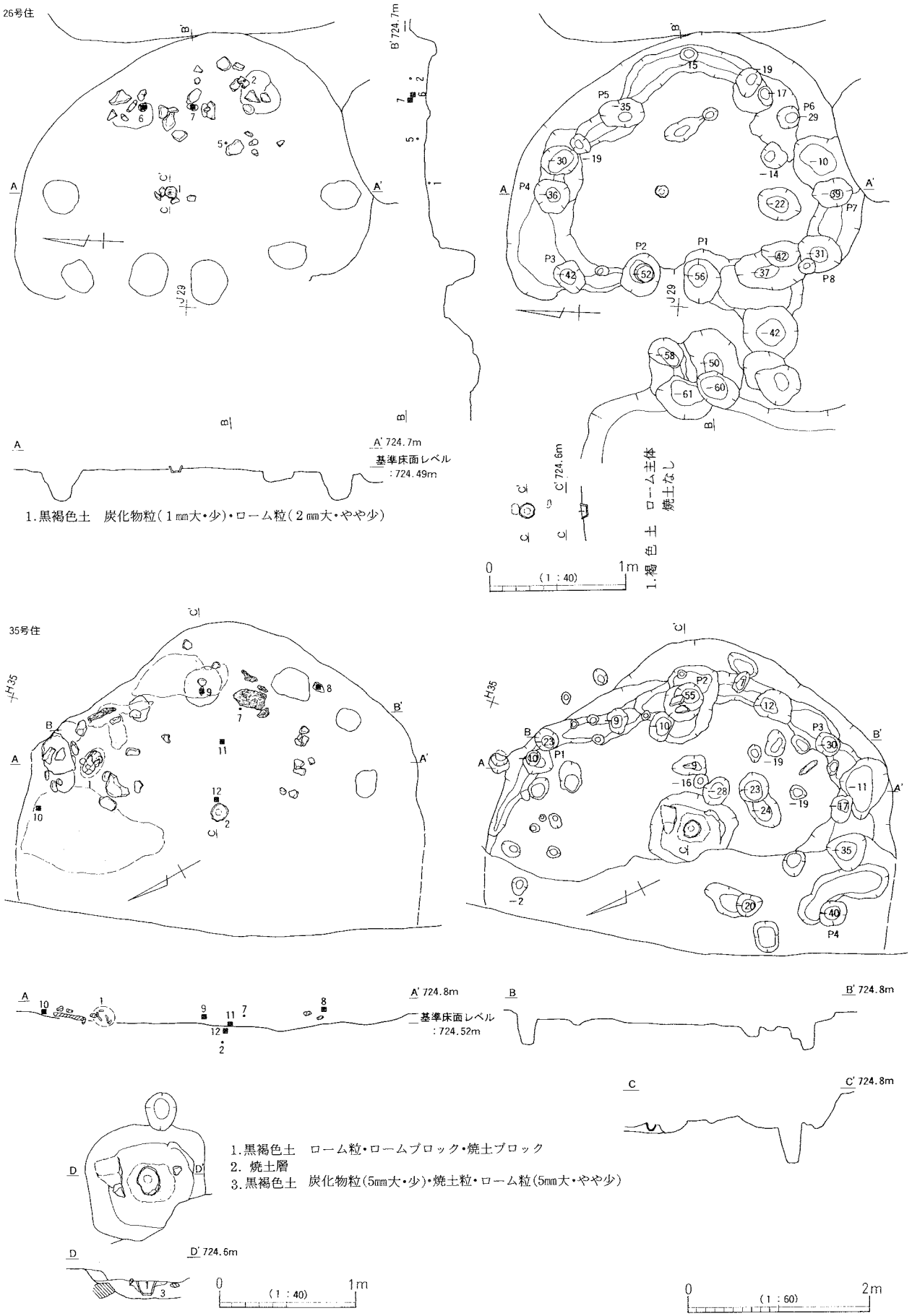
第32図　17号住実測図



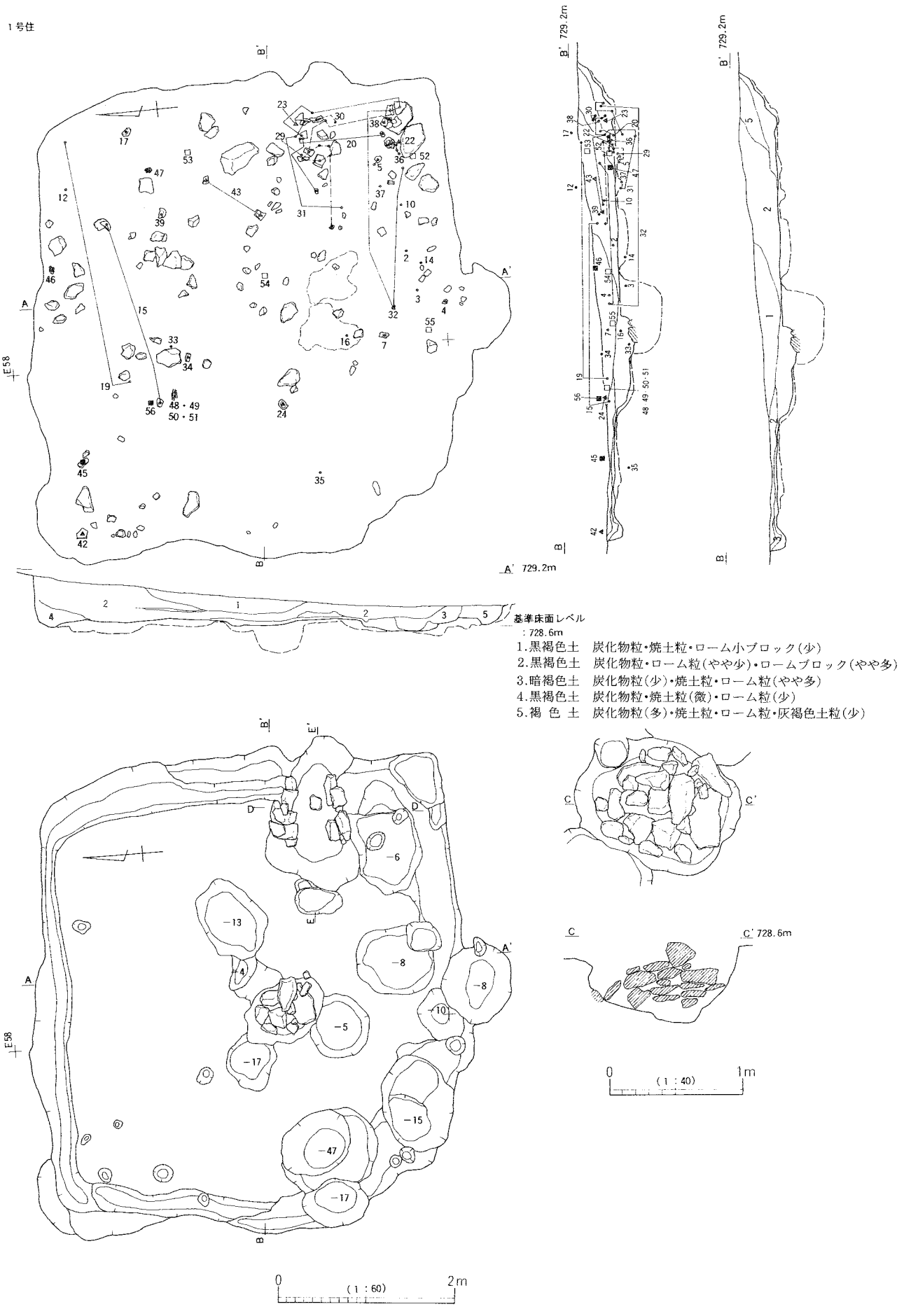
第33図　18・19号住実測図



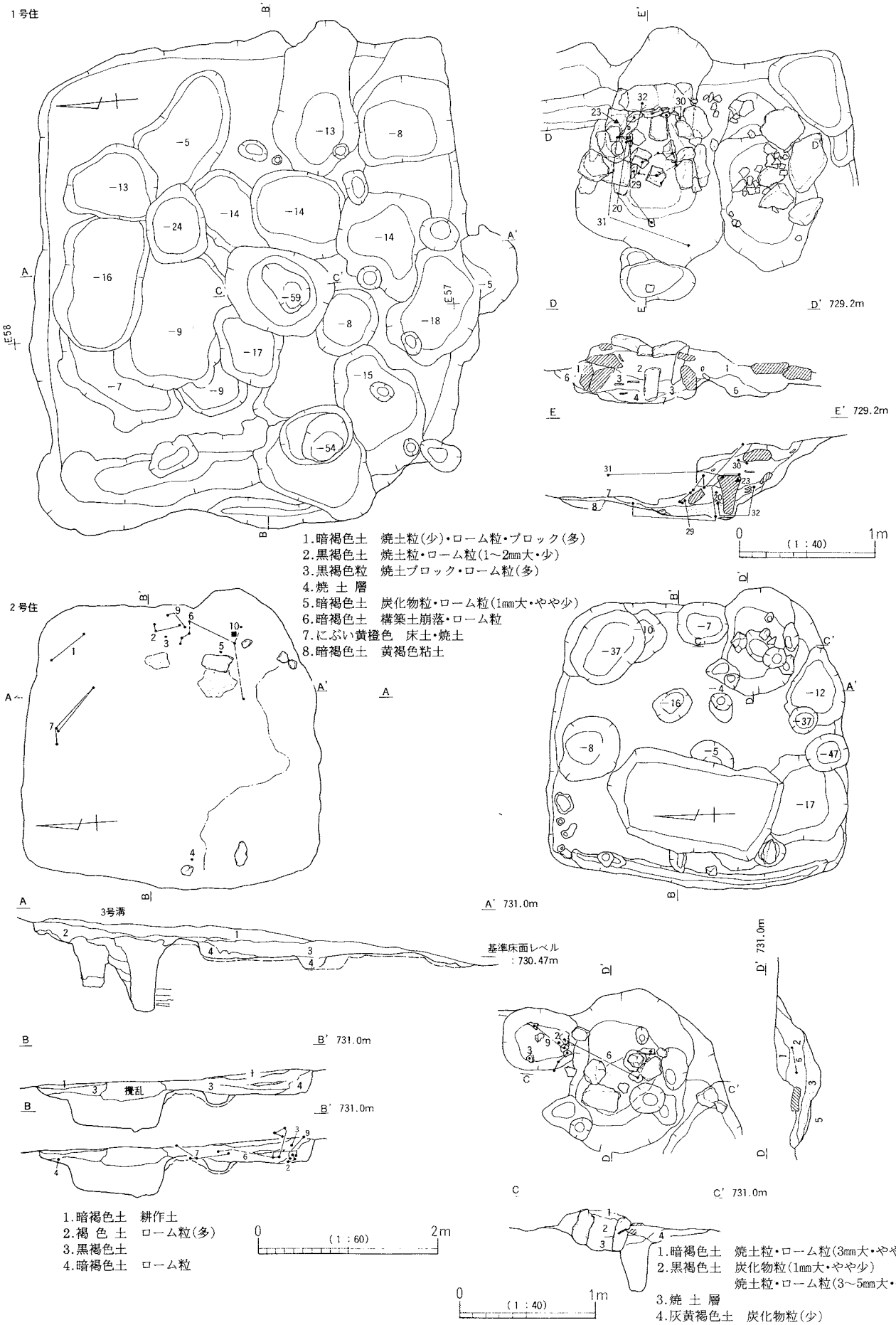
第34図　21号住実測図



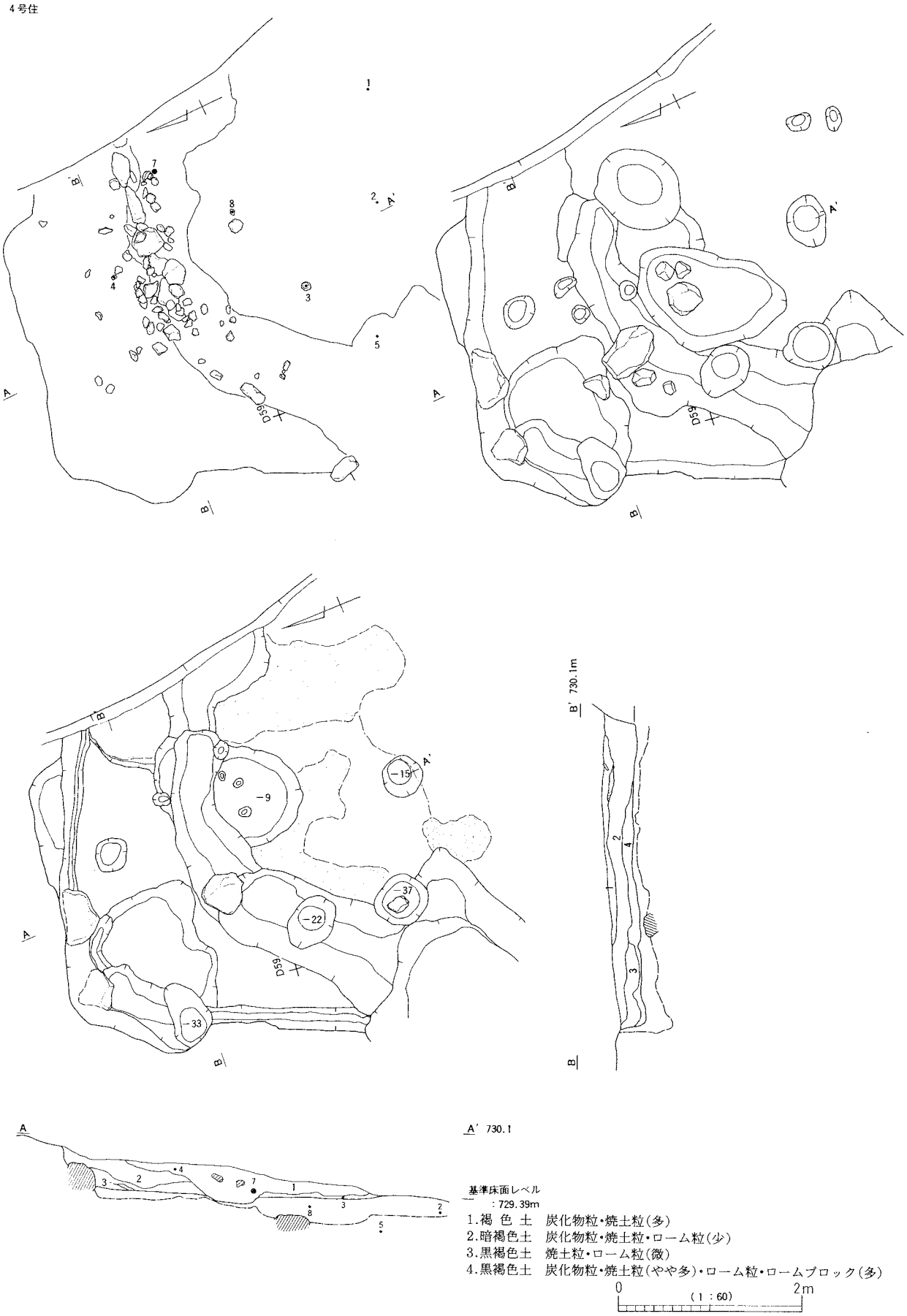
第35図　26・35号住実測図


1号住
A' 729.2m
B' 729.2m
基準床面レベル
：728.6m
1.黒褐色土　炭化物粒・焼土粒・ローム小ブロック(少)
2.黒褐色土　炭化物粒・ローム粒(やや少)・ロームブロック(やや多)
3.暗褐色土　炭化物粒(少)・焼土粒・ローム粒(やや多)
4.黒褐色土　炭化物粒・焼土粒(微)・ローム粒(少)
5.褐 色 土　炭化物粒(多)・焼土粒・ローム粒・灰褐色土粒(少)
C' 728.6m
0 (1：40) 1m
0 (1：60) 2m

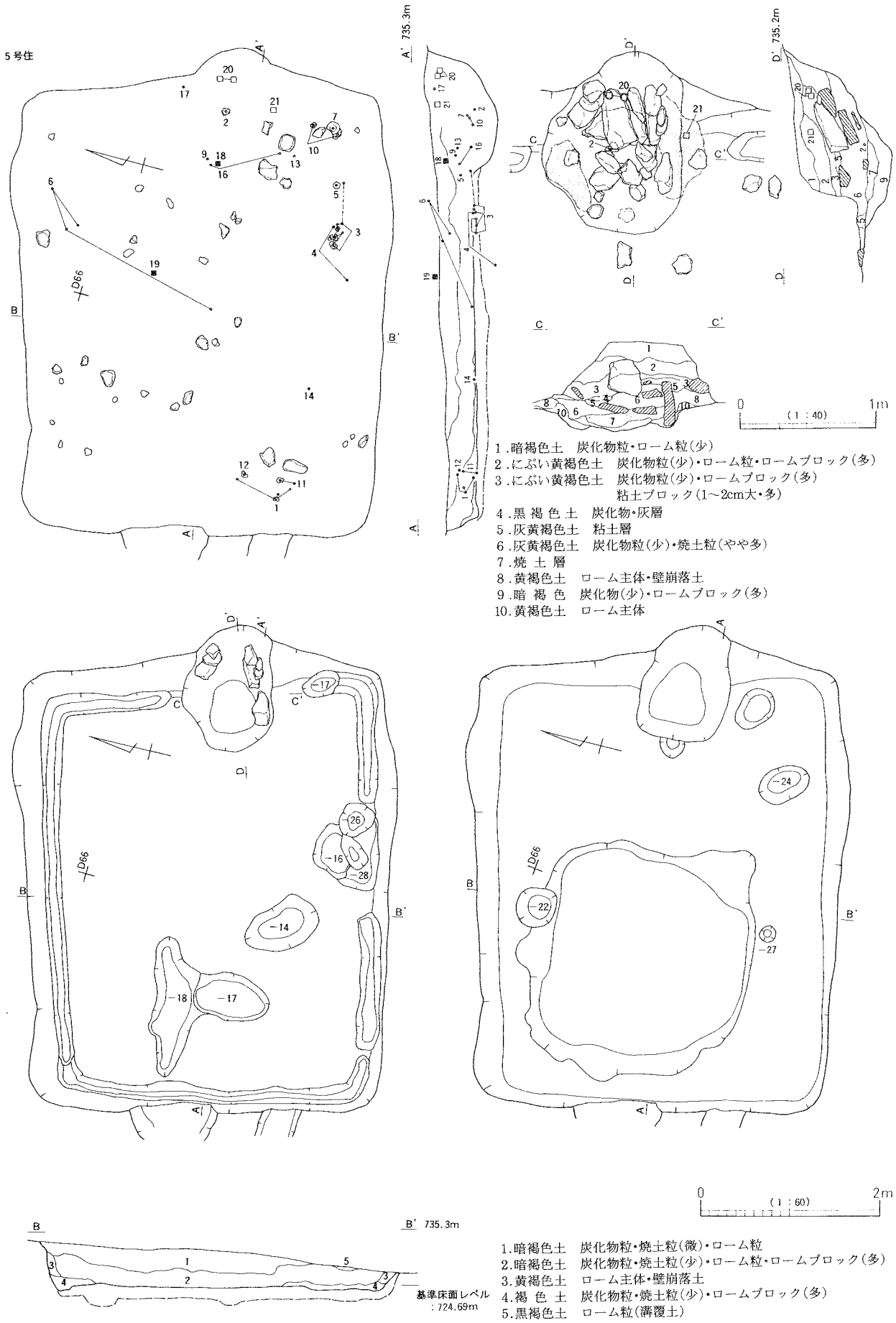
第36図　1号住実測図



第37図　1・2号住実測図


4号住
D59
−9
−15
−22
−33
−37
B' 730.1m
A' 730.1
基準床面レベル
：729.39m
1.褐 色 土　炭化物粒・焼土粒(多)
2.暗褐色土　炭化物粒・焼土粒・ローム粒(少)
3.黒褐色土　焼土粒・ローム粒(微)
4.黒褐色土　炭化物粒・焼土粒(やや多)・ローム粒・ロームブロック(多)
0
(1：60)
2m

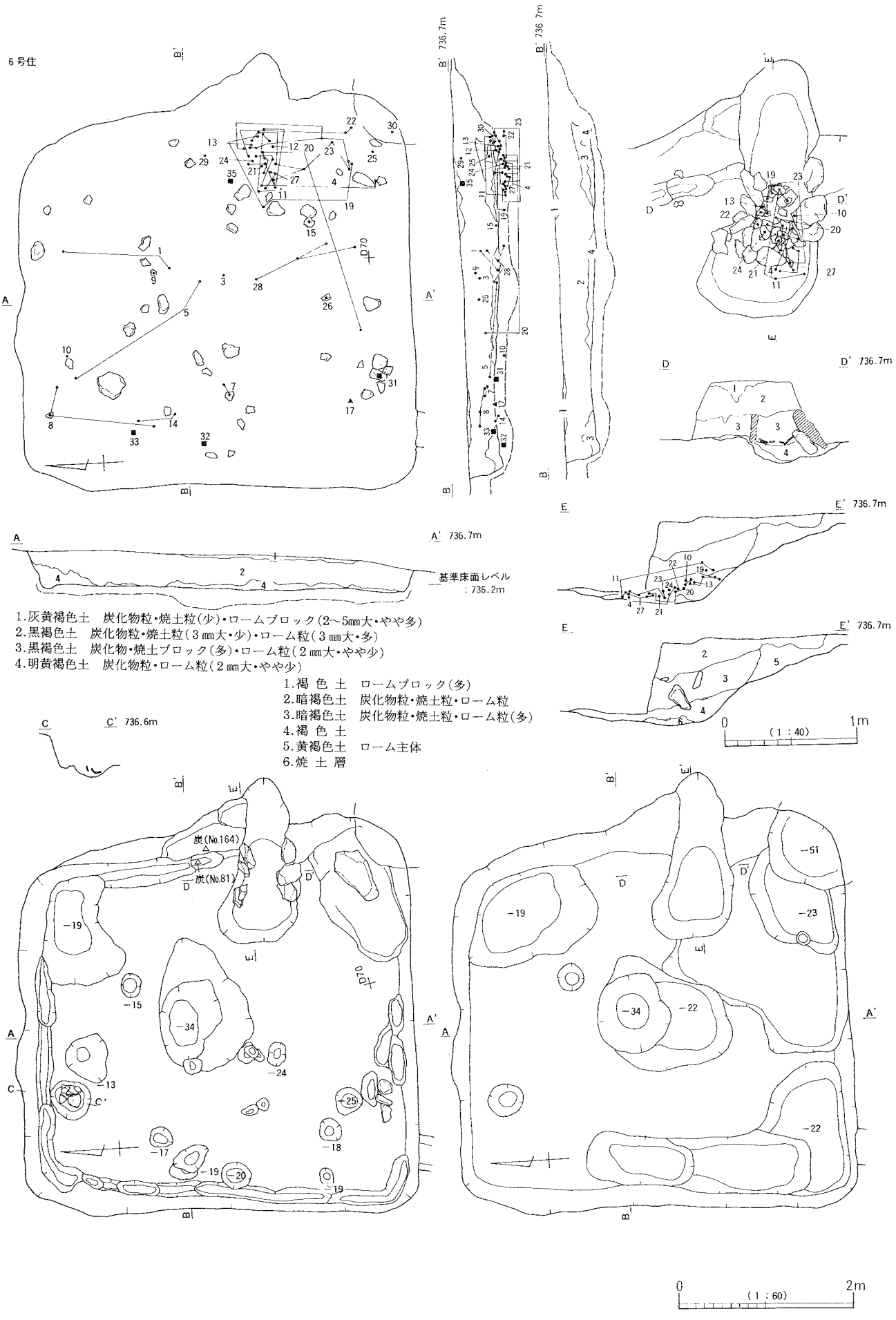
第38図　4号住実測図



1.暗褐色土　炭化物粒・ローム粒(少)
2.にぶい黄褐色土　炭化物粒(少)・ローム粒・ロームブロック(多)
3.にぶい黄褐色土　炭化物粒(少)・ロームブロック(多)
　　粘土ブロック(1～2cm大・多)
4.黒 褐 色 土　炭化物・灰層
5.灰黄褐色土　粘土層
6.灰黄褐色土　炭化物粒(少)・焼土粒(やや多)
7.焼 土 層
8.黄褐色土　ローム主体・壁崩落土
9.暗 褐 色　炭化物(少)・ロームブロック(多)
10.黄褐色土　ローム主体

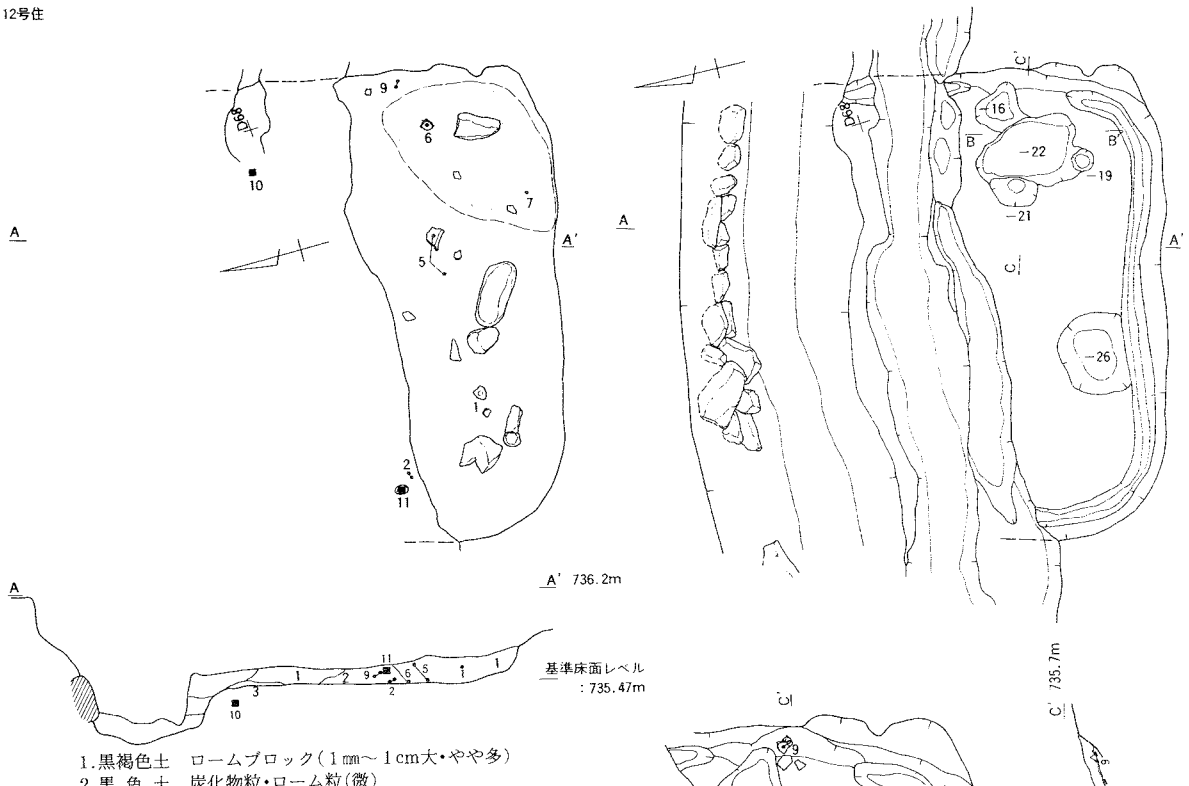
1.暗褐色土　炭化物粒・焼土粒(微)・ローム粒
2.暗褐色土　炭化物粒・焼土粒(少)・ローム粒・ロームブロック(多)
3.黄褐色土　ローム主体・壁崩落土
4.褐 色 土　炭化物粒・焼土粒(少)・ロームブロック(多)
5.黒褐色土　ローム粒(溝覆土)

第39図　5号住実測図

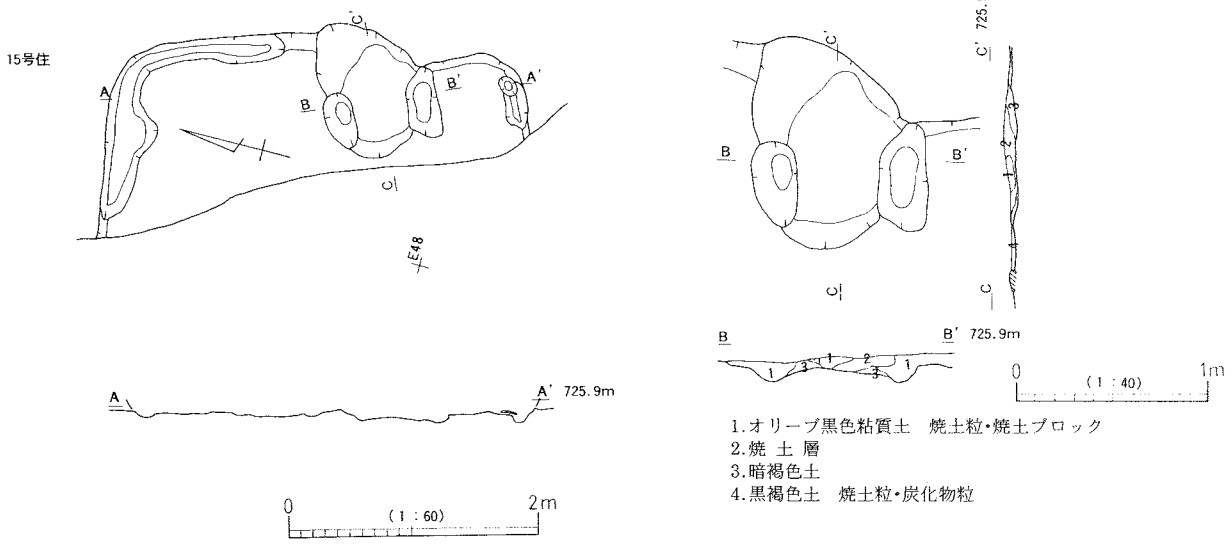

6号住
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
736.7m
736.6m
基準床面レベル
: 736.2m
1.灰黄褐色土　炭化物粒・焼土粒(少)・ロームブロック(2～5㎜大・やや多)
2.黒褐色土　炭化物粒・焼土粒(3㎜大・少)・ローム粒(3㎜大・多)
3.黒褐色土　炭化物・焼土ブロック(多)・ローム粒(2㎜大・やや少)
4.明黄褐色土　炭化物粒・ローム粒(2㎜大・やや少)
1.褐 色 土　ロームブロック(多)
2.暗褐色土　炭化物粒・焼土粒・ローム粒
3.暗褐色土　炭化物粒・焼土粒・ローム粒(多)
4.褐 色 土
5.黄褐色土　ローム主体
6.焼 土 層
炭(No.164)
炭(No.81)
D10
0
1m
(1 : 40)
2m
(1 : 60)

第40図　6号住実測図

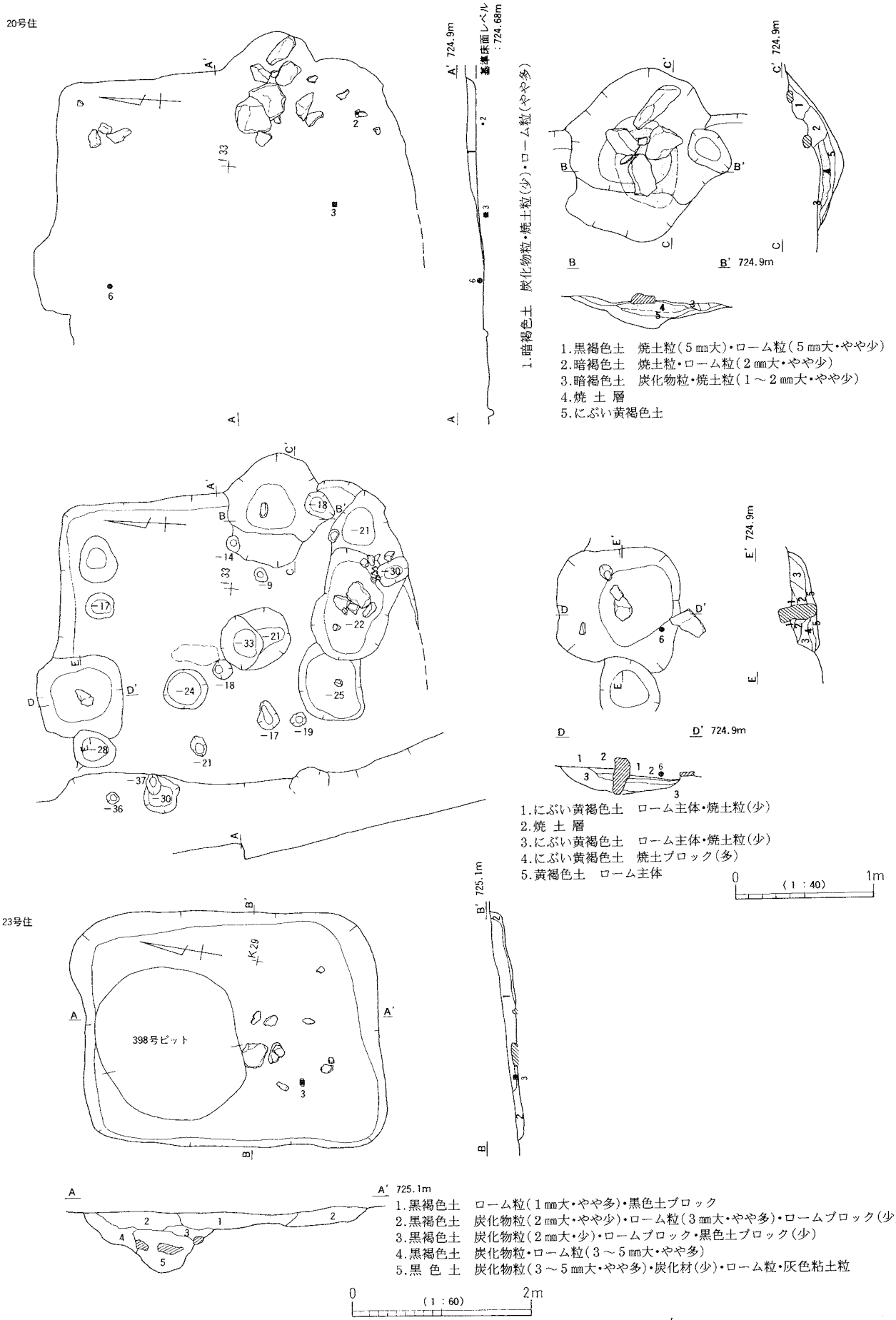
12号住



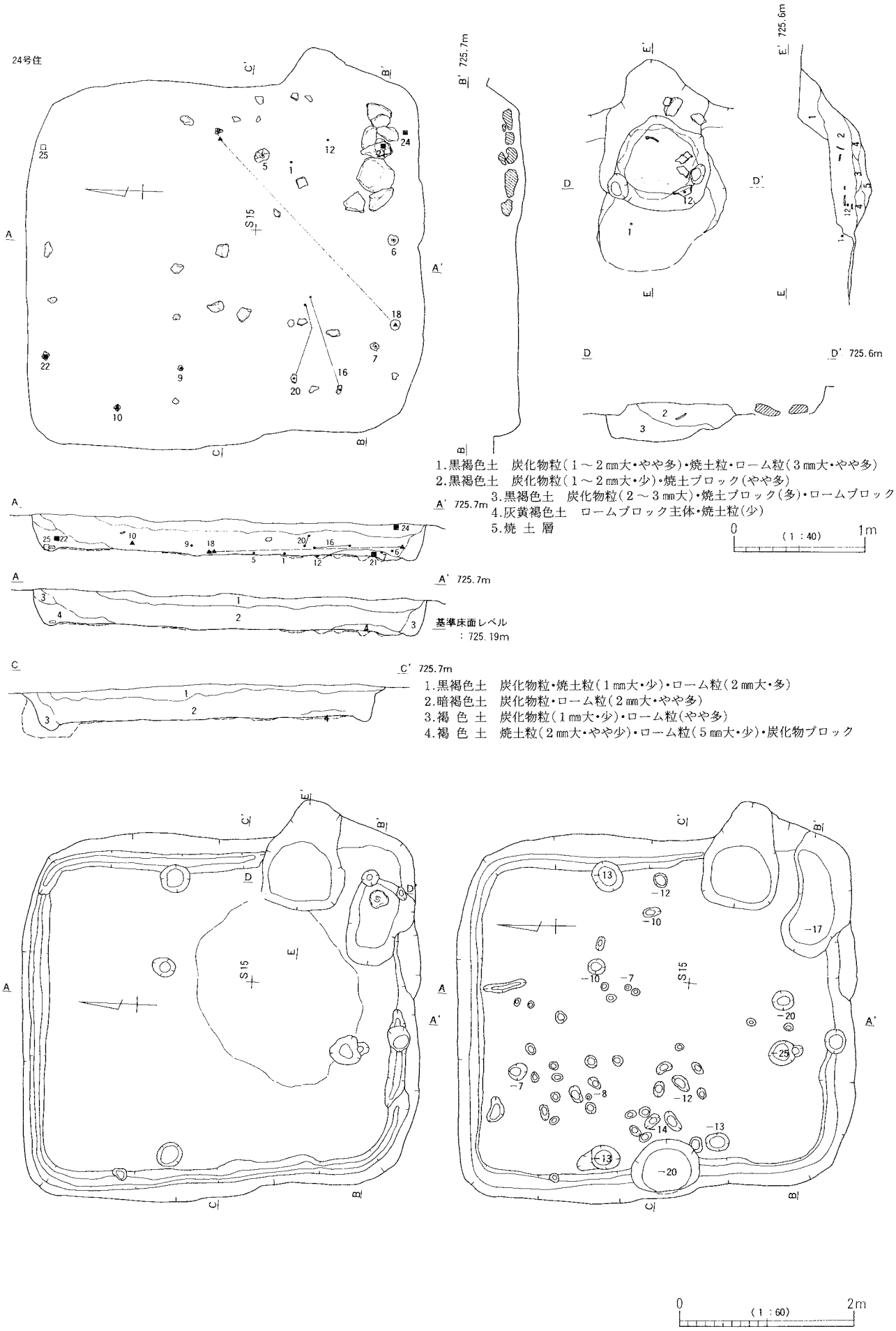
15号住



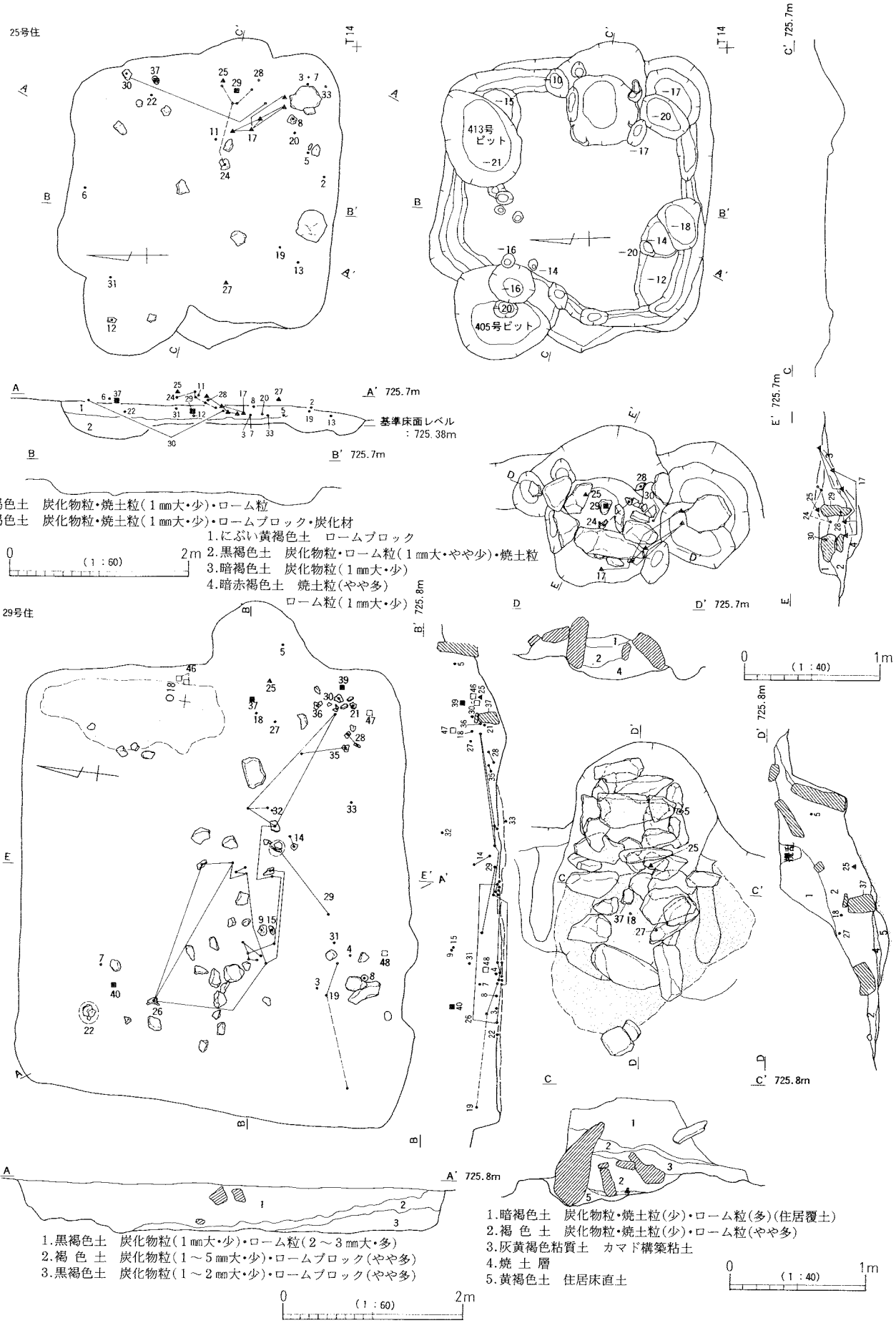
第41図　12・15号住実測図



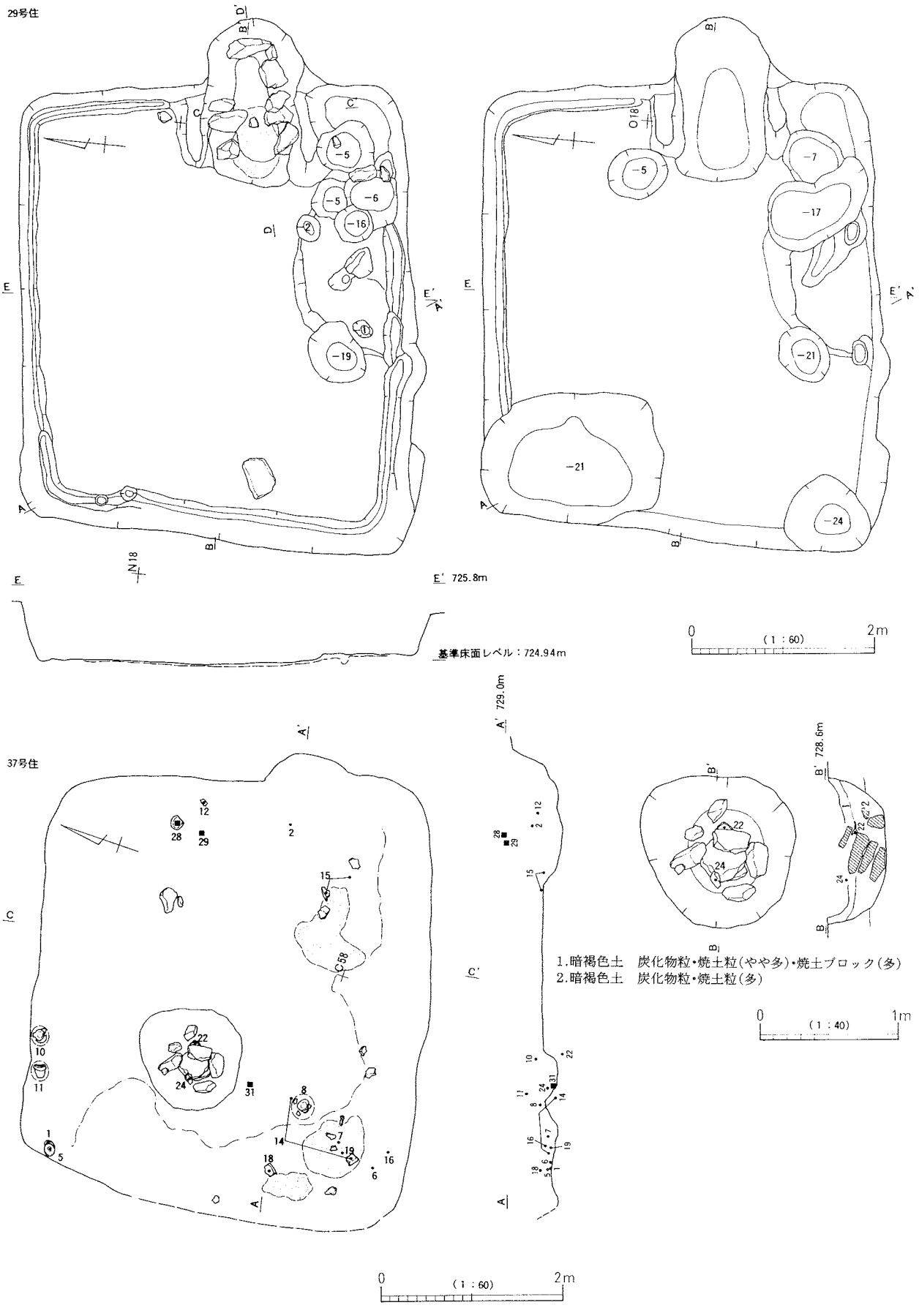
第42図　20・23号住実測図



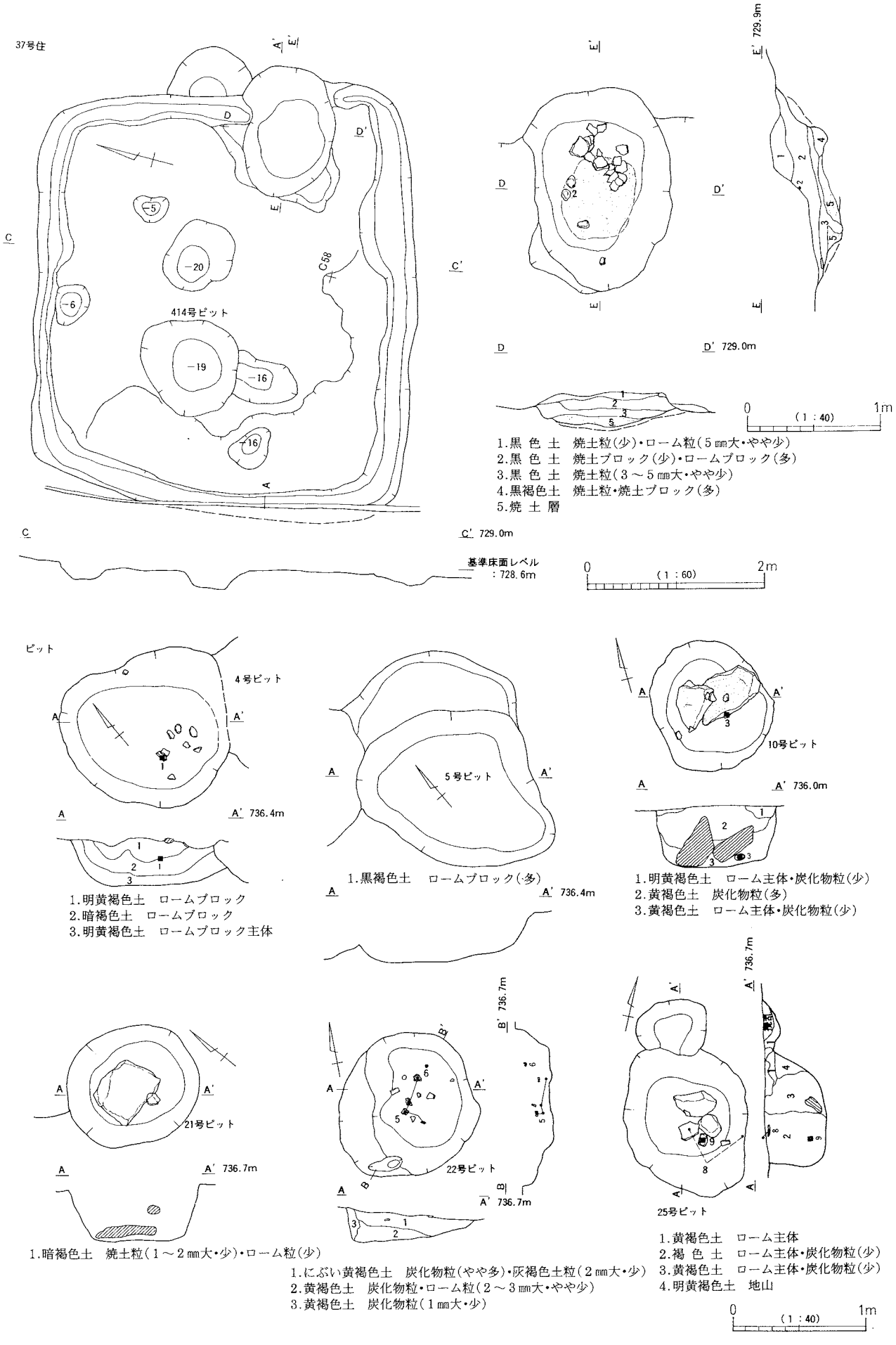
第43図　24号住実測図



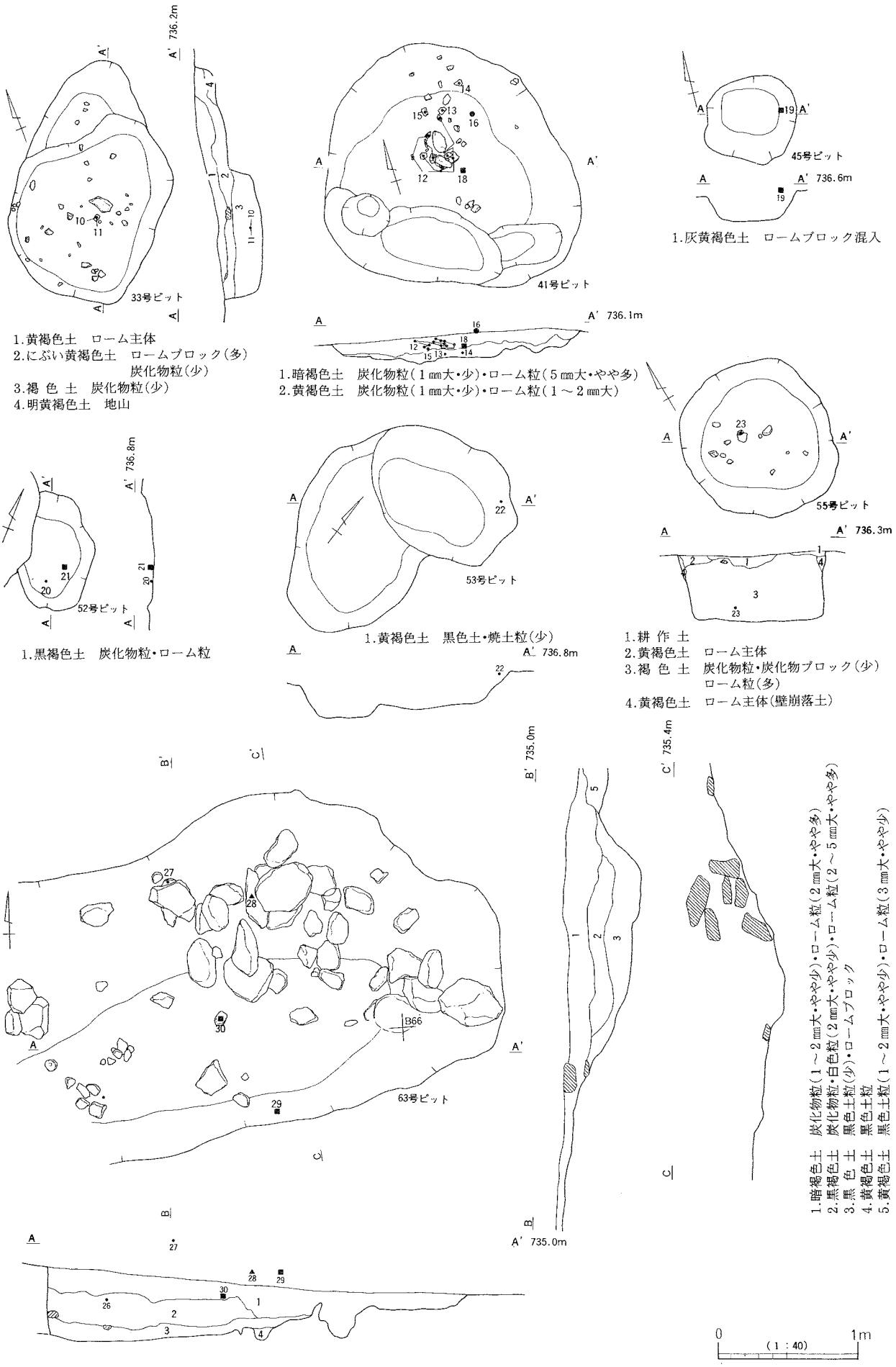
第44図　25・29号住実測図



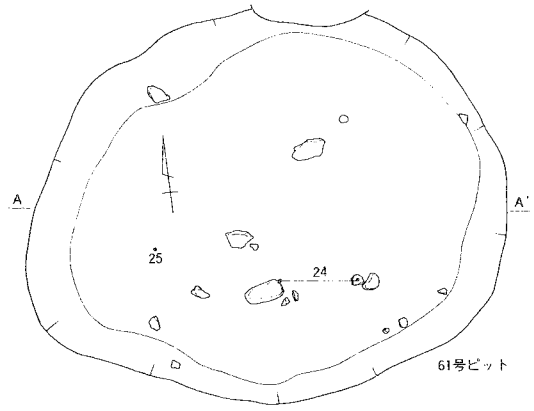
第45図　29・37号住実測図



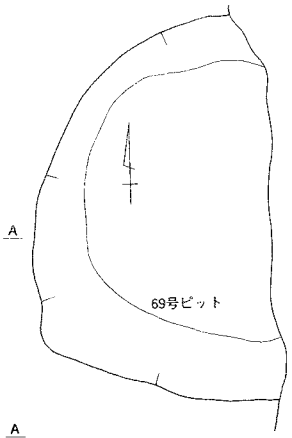
第46図　37号住・4・5・10・21・22・25号ピット実測図

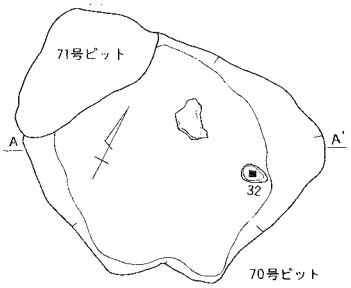


第47図　33・41・45・52・53・55・63号ピット実測図

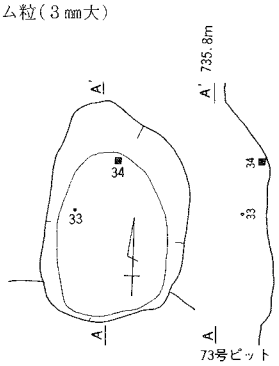


1.黒褐色土　黒色土ブロック・ローム粒
2.暗褐色土　黒色土粒(2㎜大・やや少)・ローム粒(3㎜大)
3.明黄褐色土　ローム主体

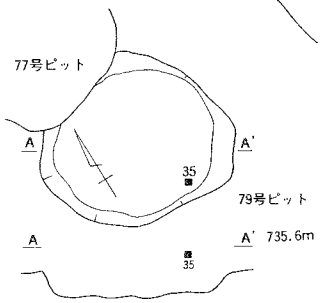




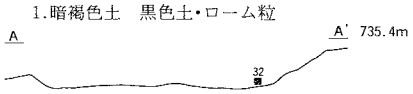
1.暗褐色土　黒色土・ローム粒

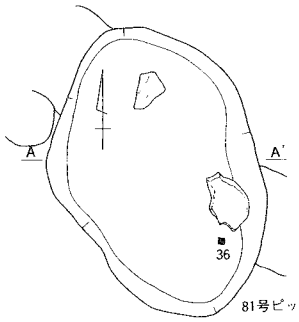


1.黒褐色土　黒色土ブロック
ロームブロック

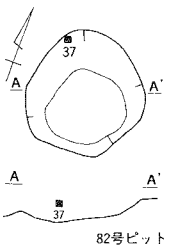


1.黒褐色土　炭化物粒・ローム粒(2～5㎜大・やや少)

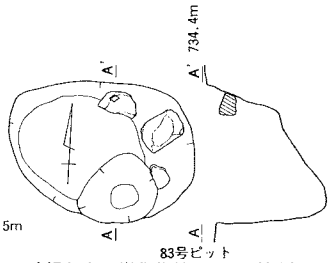




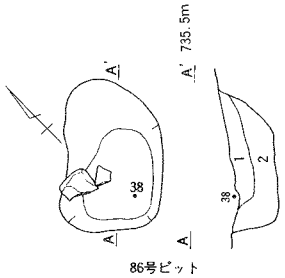
1.黒褐色土　ロームブロック(多)



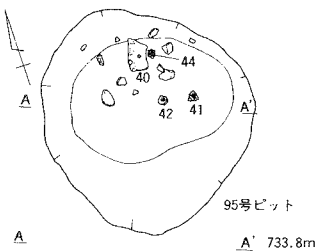
1.黒 色 土　ロームブロック(多)

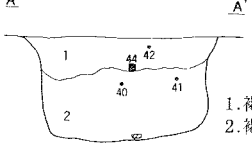


1.暗褐色土　炭化物粒・ローム粒(少)

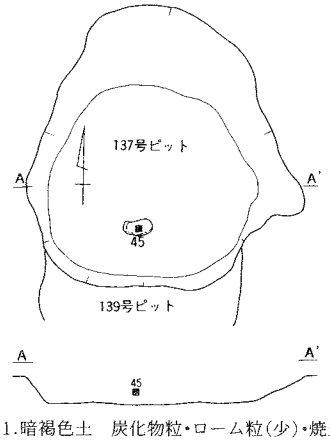


1.暗褐色土　炭化物粒(1～2㎜大・やや少)
ローム粒(2㎜大)
2.暗褐色土　炭化物粒(微)・ローム粒
(2㎜大・やや多)

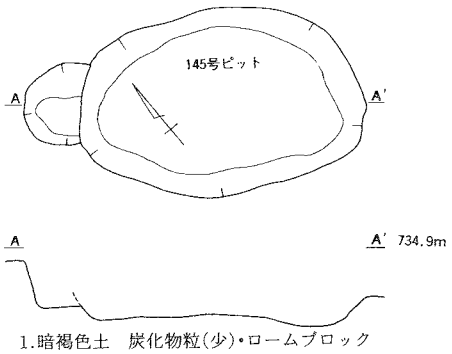




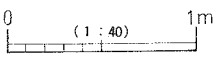
1.褐色土　ローム主体・炭化物粒・焼土粒(少)
2.褐色土　ローム主体・炭化物粒(少)



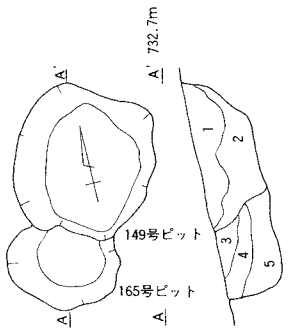
1.暗褐色土　炭化物粒・ローム粒(少)・焼土粒(微)



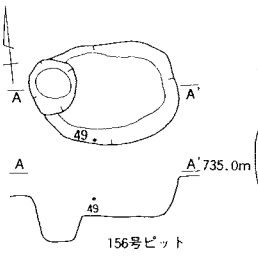
1.暗褐色土　炭化物粒(少)・ロームブロック



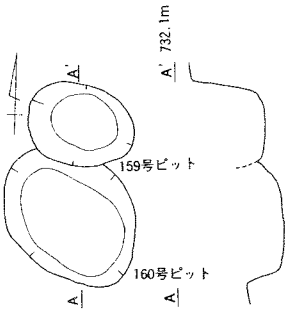
第48図　61・69・70・73・79・81・82・83・86・95・137・145号ピット実測図



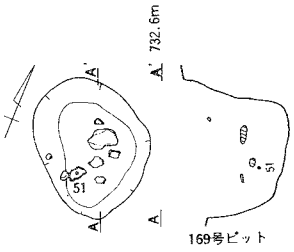
1.黒褐色土　黒色土粒(2㎜大・やや少)
ロームブロック(3～5㎜大・やや多)
2.黄褐色土　炭化物粒(1㎜大・微)
3.暗褐色土　炭化物粒・ローム粒(1～2㎜大・少)
4.黒褐色土　炭化物粒(少)・ローム粒(やや多)
5.黄褐色土　炭化物粒(1～2㎜大・少)



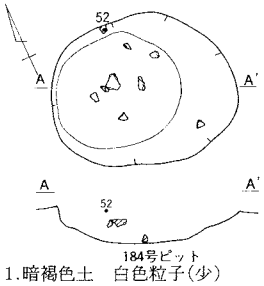
1.暗褐色土
黒色土・炭化物粒(少)



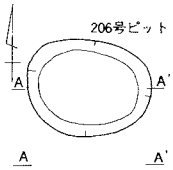
1.暗褐色土　ローム粒
2.暗黄褐色土　焼土粒(少)
ローム粒(3㎜大・やや多)



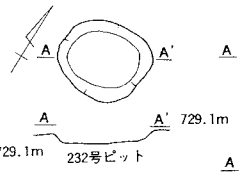
1.暗褐色土　黒色土粒・ローム粒



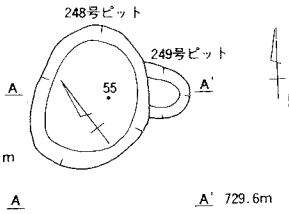
1.暗褐色土　白色粒子(少)
ローム粒(2～3㎜大・やや多)



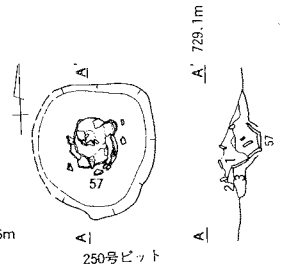
1.暗褐色土
焼土粒・ローム粒
(1㎜大・少)



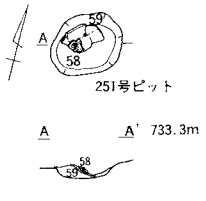
1.黒褐色土　ローム粒(少)



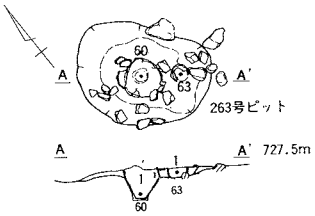
1.黒褐色土　白色粒子・焼土粒
(1～2㎜大)



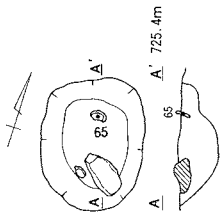
1.暗褐色土
2.焼土層
3.褐色土　炭化物粒・焼土粒
焼土ブロック



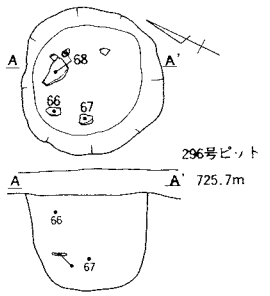
1.黄褐色土
ローム主体
炭化物粒(微)



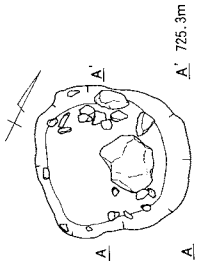
1.黒色土　ローム粒(3～5㎜大・少)
黒色粒子(少)
2.黒褐色土　焼土ブロック・ローム粒
黒色粒子(少)



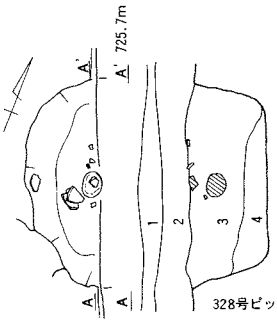
1.黒褐色土　炭化物粒(1㎜大・やや少)
ローム粒(少)



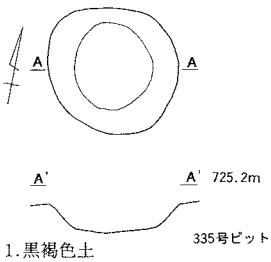
1.黒褐色土　焼土粒・炭化物粒(2～3㎜大・少)
ローム粒(多)



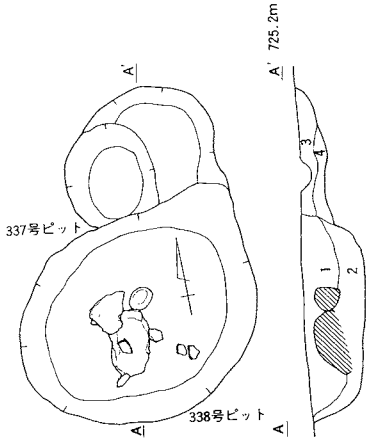
1.褐灰色土
炭化物粒・ローム粒
(2～4㎜大・やや少)
2.黒褐色土
炭化物粒・ローム粒
白色粒子
(1～2㎜大・やや多)
3.黒褐色土
炭化物粒(2㎜大・
やや多)・ローム粒



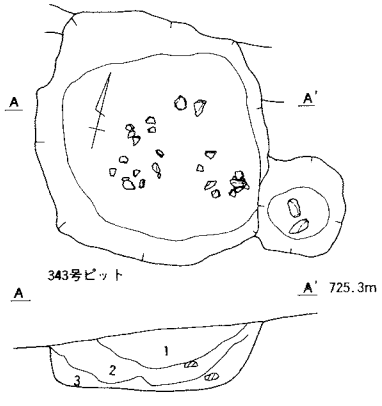
1.耕作土
2.耕作土
3.褐色土
炭化物粒・
焼土粒(少)
ローム粒(多)
4.褐色土
炭化物粒・
焼土粒(少)
ローム粒(多)



1.黒褐色土
炭化物粒(2㎜大・やや少)・
ロームブロック



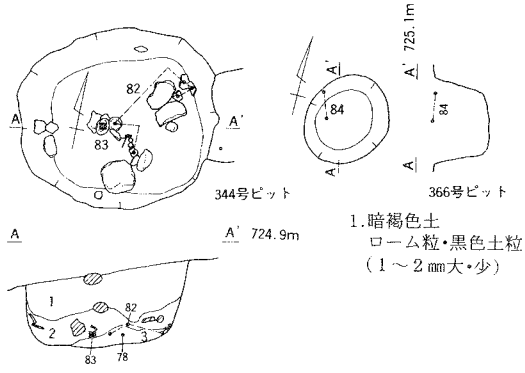
1.黒色土
炭化物粒・ローム粒
(1～2㎜大・やや多)
2.暗褐色土
炭化物粒(2㎜大・やや多)
ローム粒(2～3㎜大・多)
3.黒褐色土
炭化物粒(2㎜大・やや少)
ローム粒(3㎜大・少)
4.黄褐色土
ローム粒主体・黒色土(少)



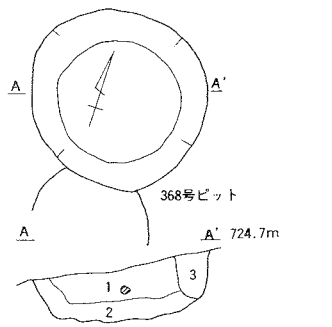
1.黄褐色土
炭化物粒(1～2㎜大・多)
2.黒褐色土
ローム粒(1～2㎜大・少)
3.暗褐色土
炭化物粒(1～2㎜大・やや少)
ローム粒(少)

0　(1:40)　1m

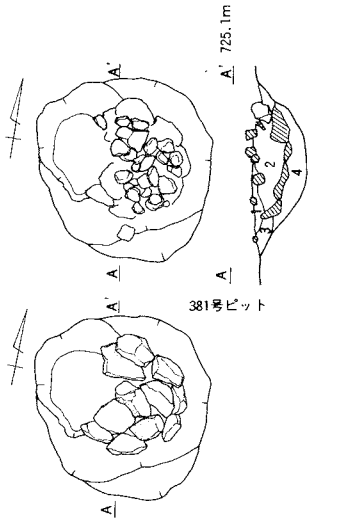
第49図　149・156・159・160・165・169・184・206・232・248・249・250・
251・263・294・296・309・328・335・337・338・343号ピット実測図



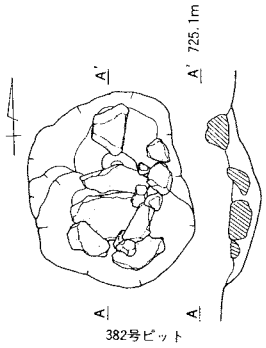
1.暗褐色土　炭化物粒・ローム粒(2～3㎜大・多)
2.黒褐色土　炭化物粒・ローム粒(2～3㎜大・やや多)
3.黒褐色土　炭化物粒(3㎜大・多)・ローム粒(1㎜大・やや少)



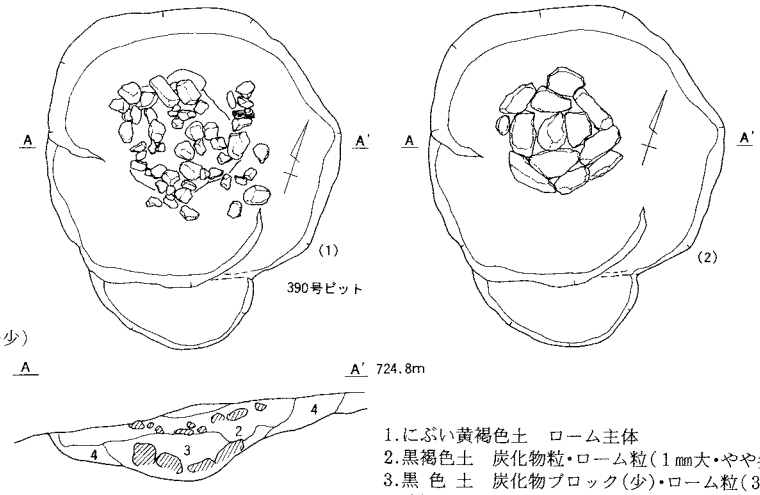
1.暗褐色土　炭化物粒(1㎜大・少)
ローム粒(3㎜大・やや多)
2.黒褐色土　炭化物粒(1～2㎜大・やや多)
ローム粒(2～3㎜大・少)
3.褐　色　土　炭化物粒(1㎜大・やや少)



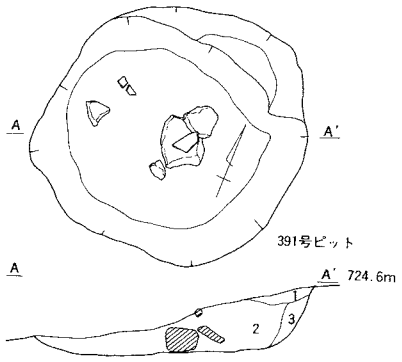
1.黄灰色土　炭化物粒(少)・焼土ブロック
2.黒　色　土　炭化物粒・焼土粒(少)・
ロームブロック・黒色土(多)
3.褐　色　土　ロームブロック・黒色土(少)
4.黄灰色土　炭化物粒・焼土粒(1～2㎜大・
やや多)



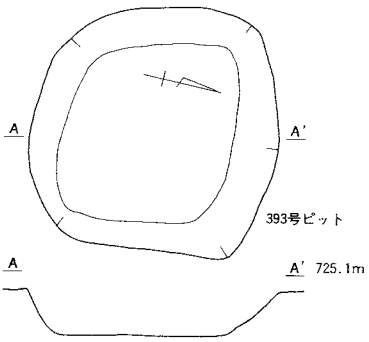
1.黒　色　土　炭化物粒・ローム粒
(3㎜大・やや多)・焼土粒(2㎜大・少)



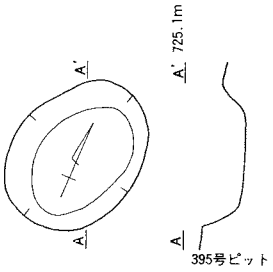
1.にぶい黄褐色土　ローム主体
2.黒褐色土　炭化物粒・ローム粒(1㎜大・やや多)
3.黒　色　土　炭化物ブロック(少)・ローム粒(3㎜大・やや少)
4.暗褐色土　炭化物粒(1㎜大・微)



1.褐　色　土　炭化物粒・ローム粒(1～2㎜大・少)
2.暗褐色土　炭化物粒(2～3㎜大・多)・ローム粒(1～2㎜大・少)
3.褐　色　土　炭化物粒(1㎜大・少)



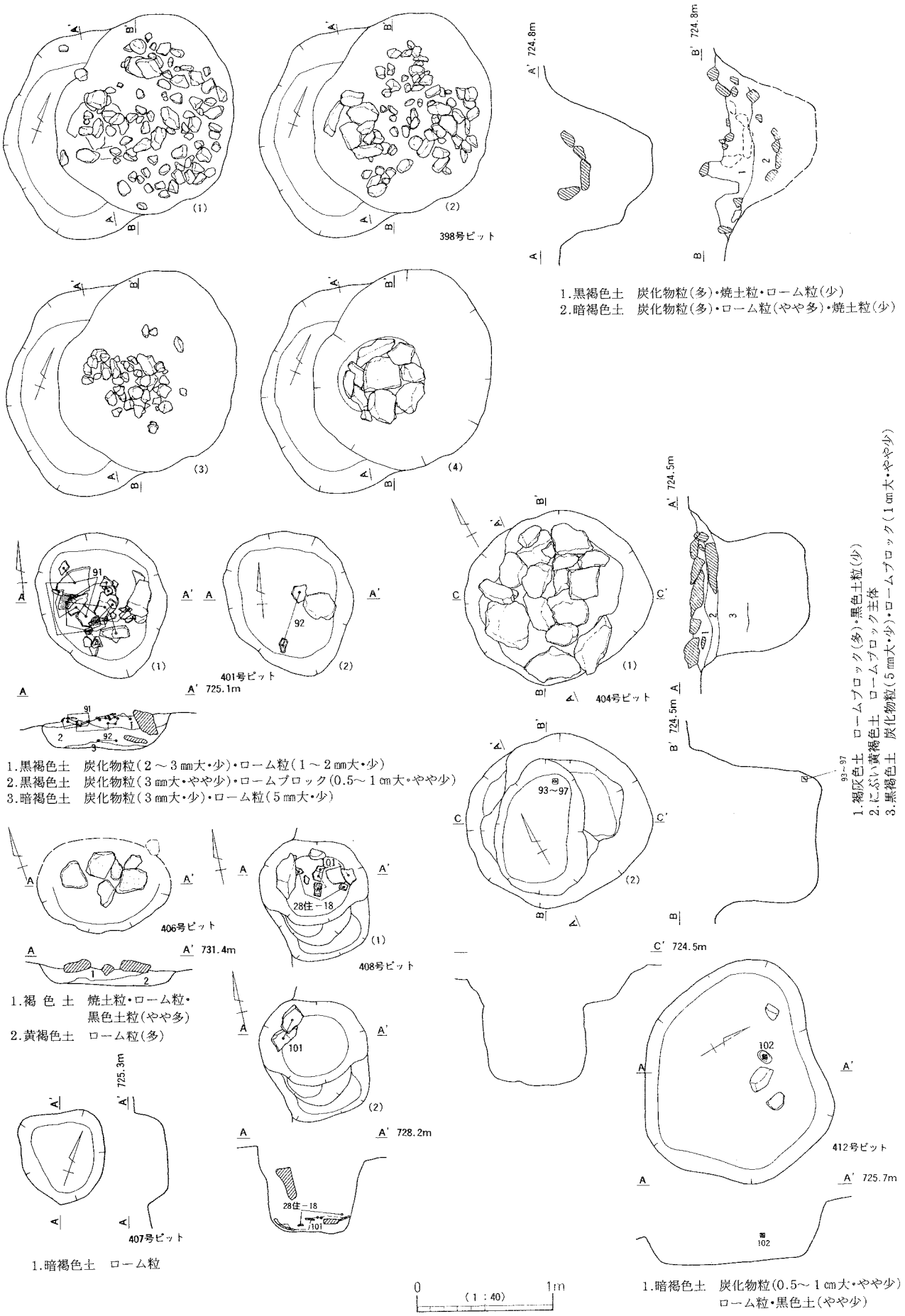
1.褐　色　土　ローム主体



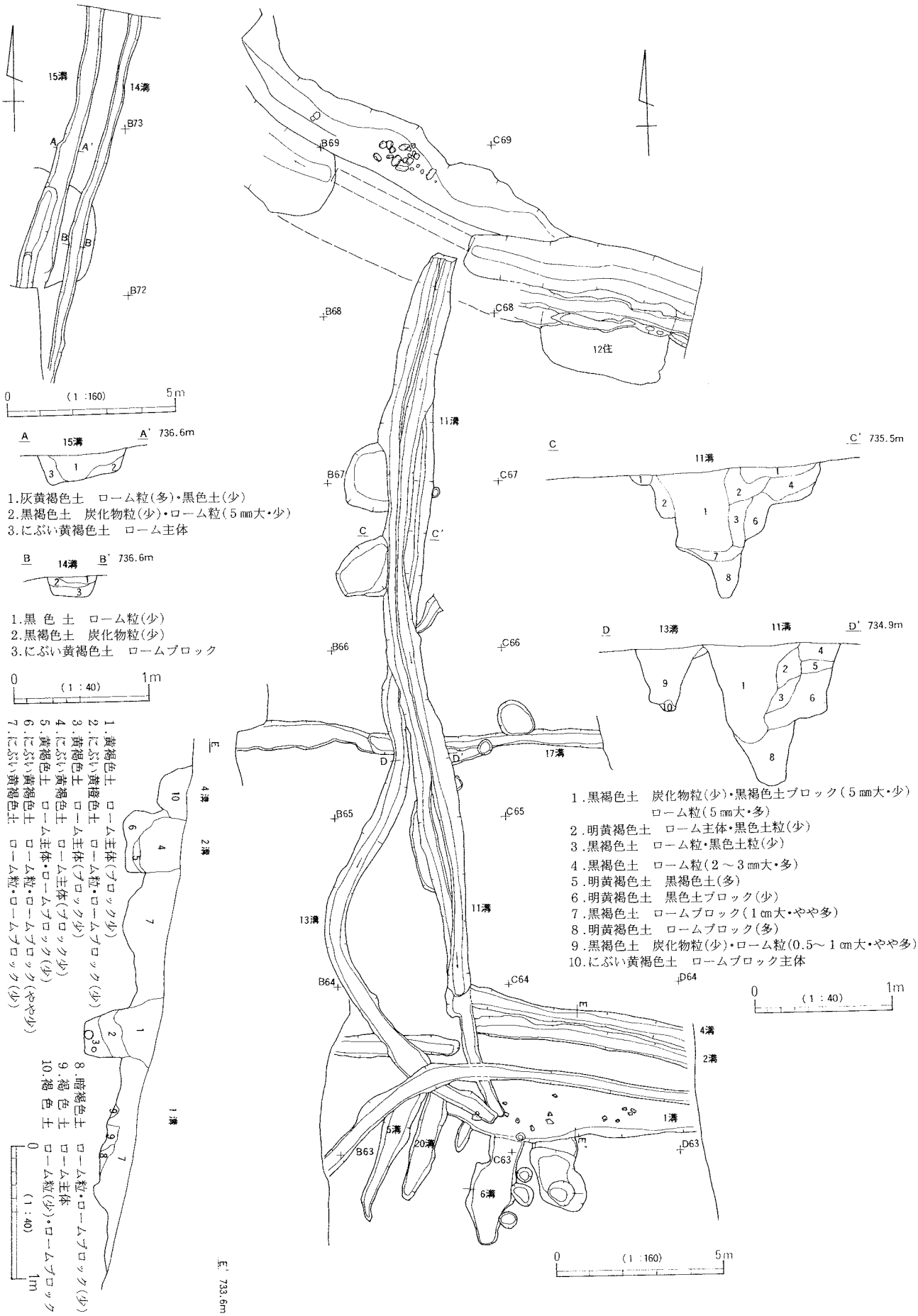
1.黒褐色土　焼土粒・ローム粒(1㎜大・少)

0　(1：40)　1m

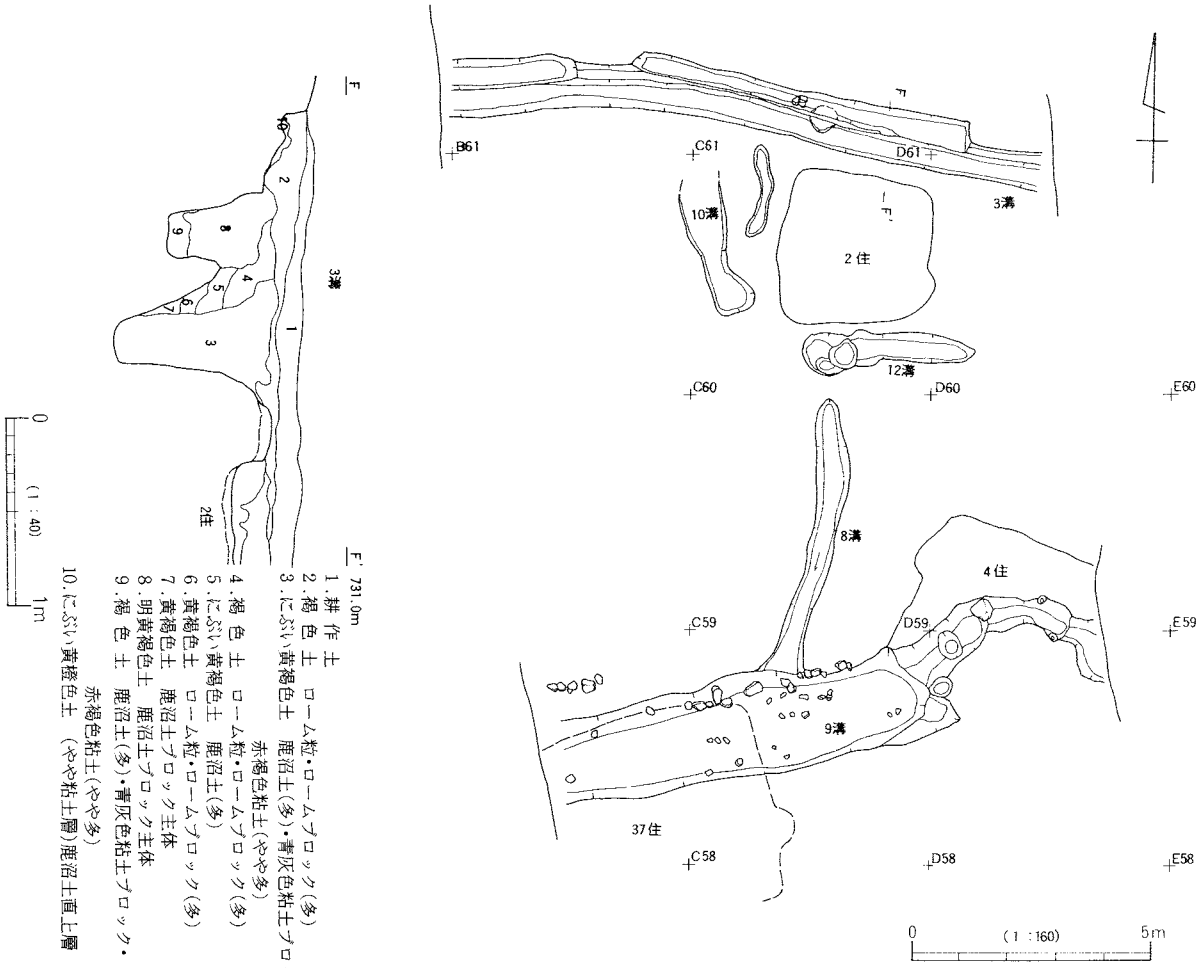
第50図　344・366・368・381・382・390・391・393・395号ピット実測図



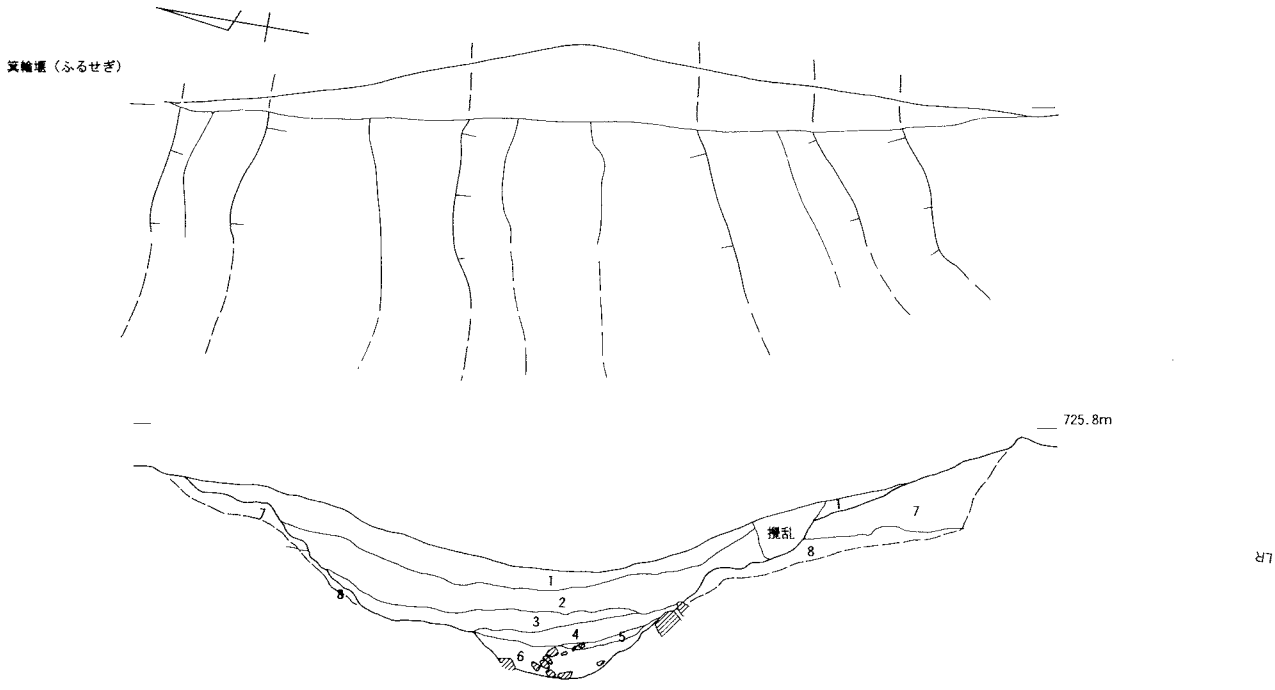
第51図　398・401・404・406・407・408・412号ピット実測図



第52図 1・2・4・5・6・7・11・13・14・15・17・20号溝実測図

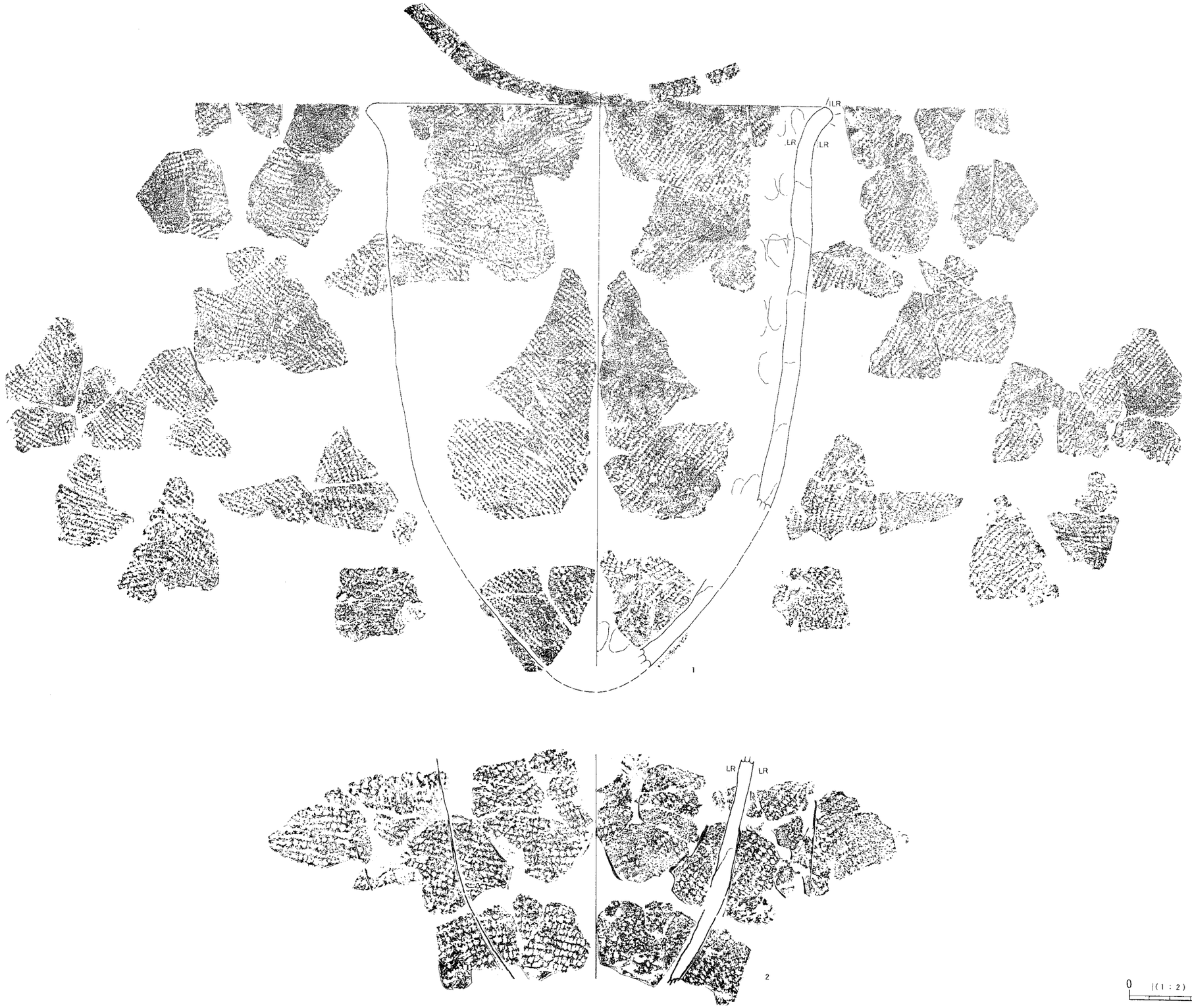


1.耕 作 土
2.褐 色 土 ローム粒・ロームブロック(多)
3.にぶい黄褐色土 鹿沼土(多)・青灰色粘土ブロック・
赤褐色粘土(やや多)
4.褐 色 土 ローム粒・ロームブロック(多)
5.にぶい黄褐色土 鹿沼土(多)
6.黄褐色土 ローム粒・ロームブロック(多)
7.黄褐色土 鹿沼土ブロック主体
8.明黄褐色土 鹿沼土ブロック主体
9.褐 色 土 鹿沼土(多)・青灰色粘土ブロック・
赤褐色粘土(やや多)
10.にぶい黄橙色土 (やや粘土層)鹿沼土直上層

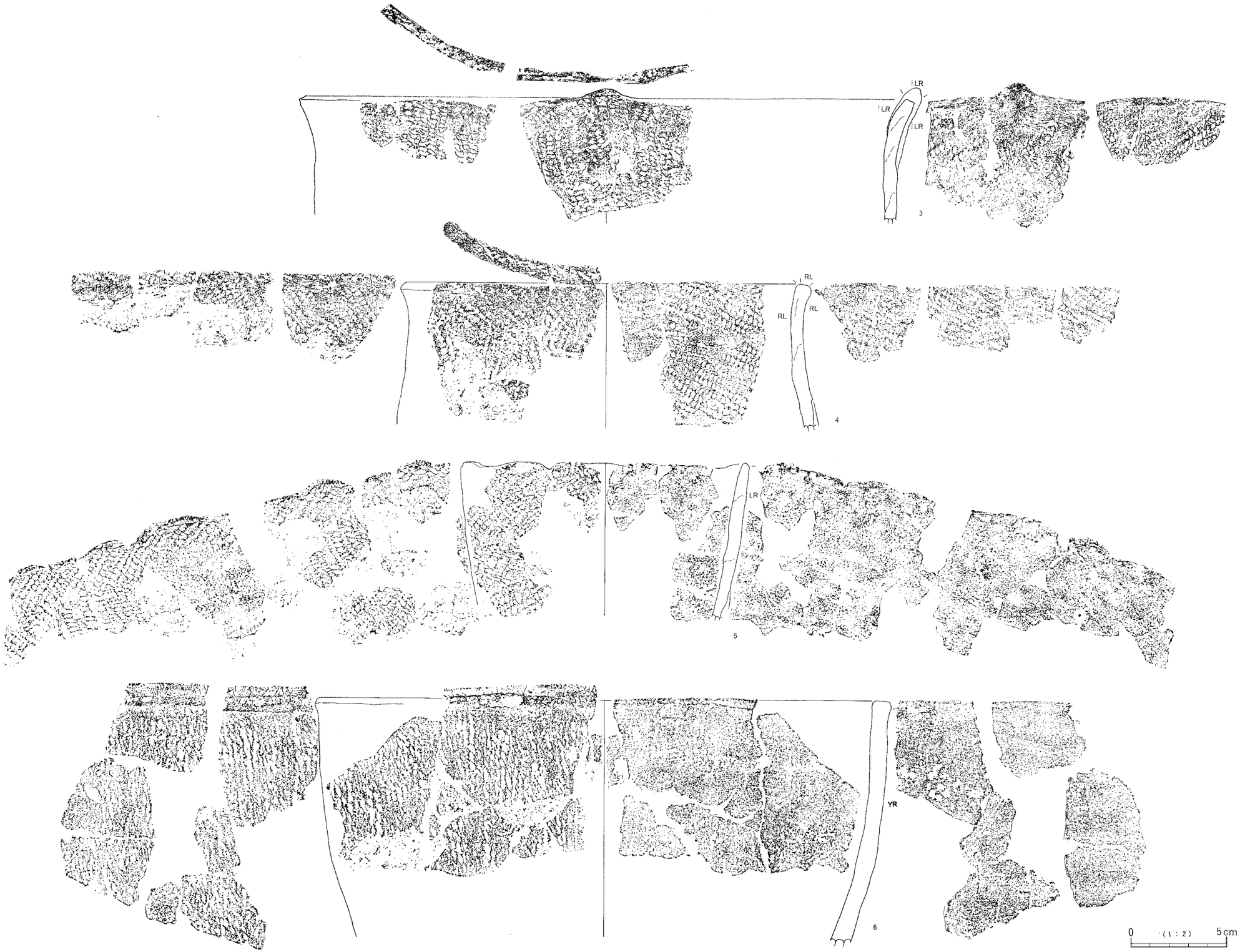


1.腐 葉 土
2.褐 色 土 ローム粒(多)
3.暗褐色土 炭化物粒
4.褐 色 土 ローム粒(多)
5.暗褐色土(暗褐色砂質層)礫(3～5㎜大・やや多)
6.褐灰砂礫層
礫(3～10cm大・多)・ローム粒(少)
7.褐 色 土 ローム主体
8.にぶい黄橙色土(粘質土)
白色粘土主体

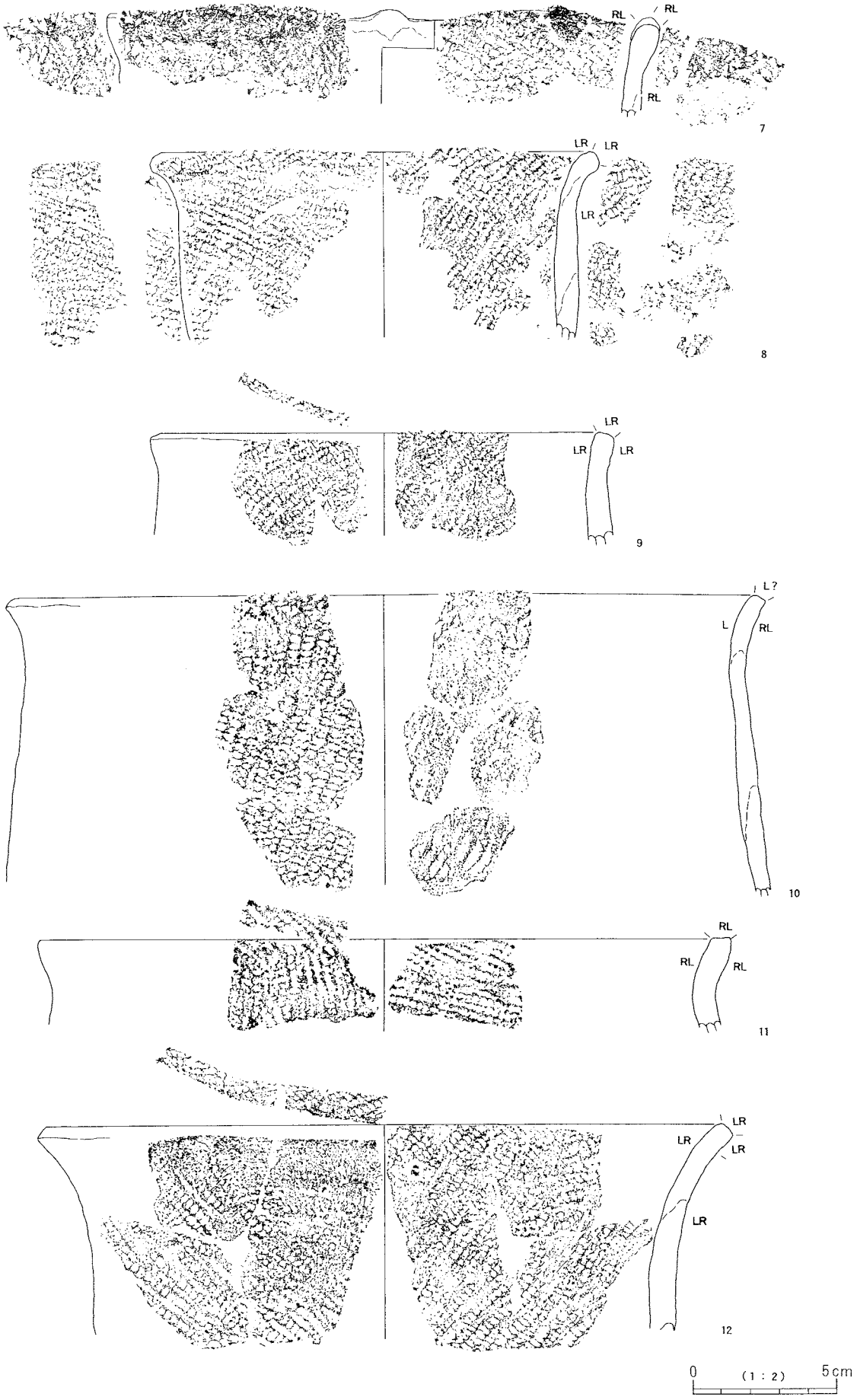
第53図 3・8・9・10・12号溝・箕輪堰(ふるせぎ)実測図



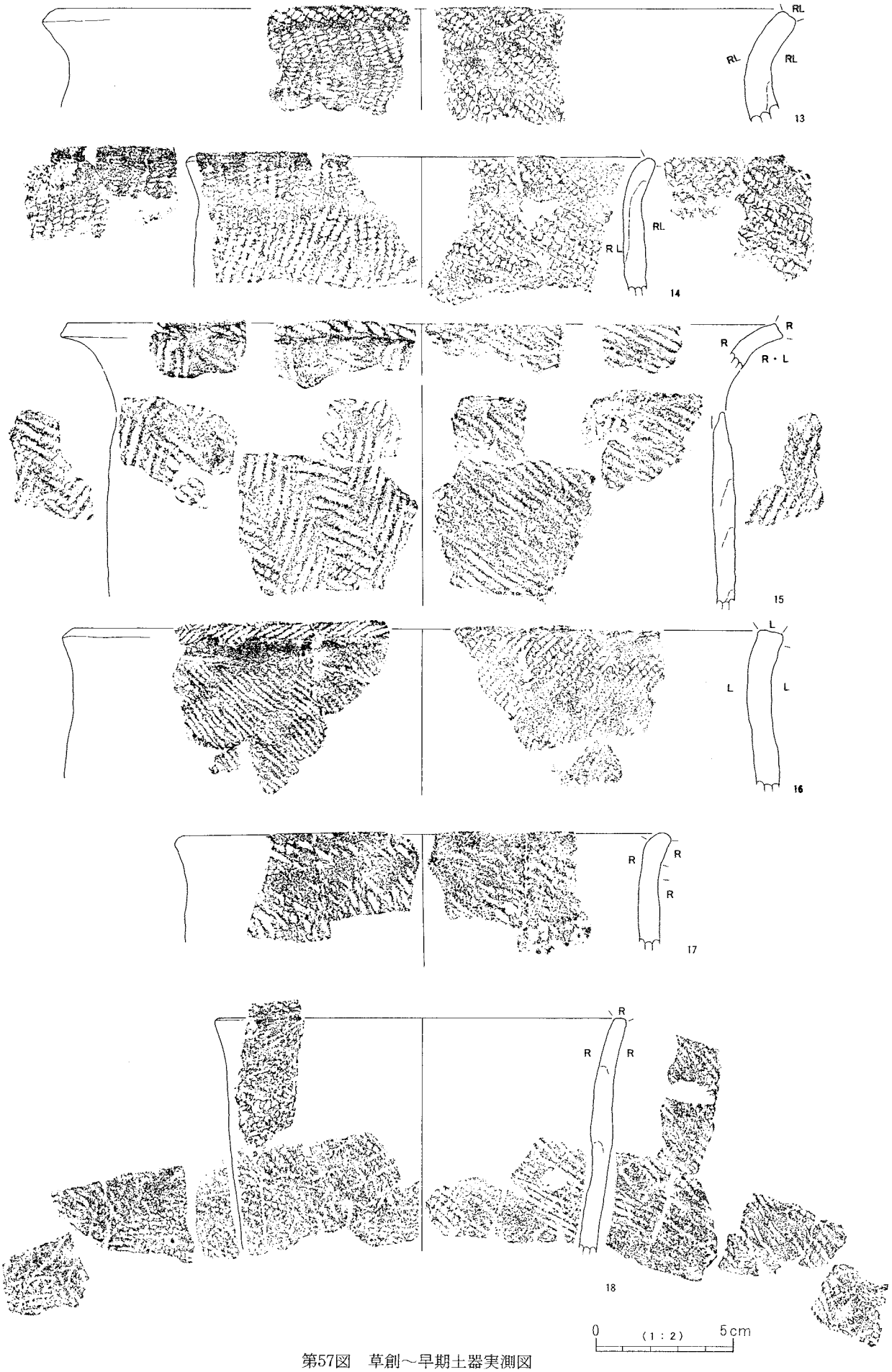
第54図　草創～早期土器実測図



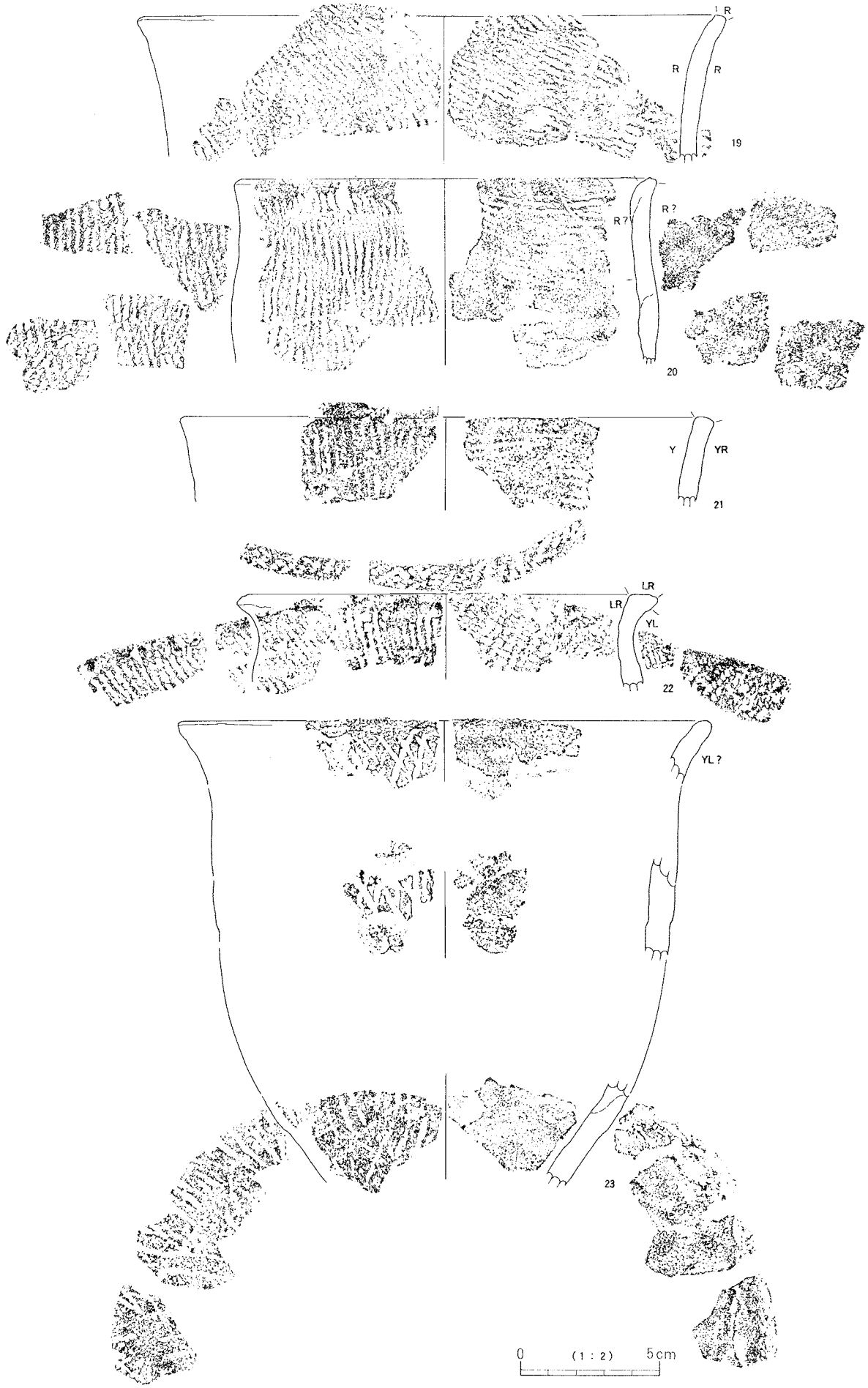
第55図　草創～早期土器実測図



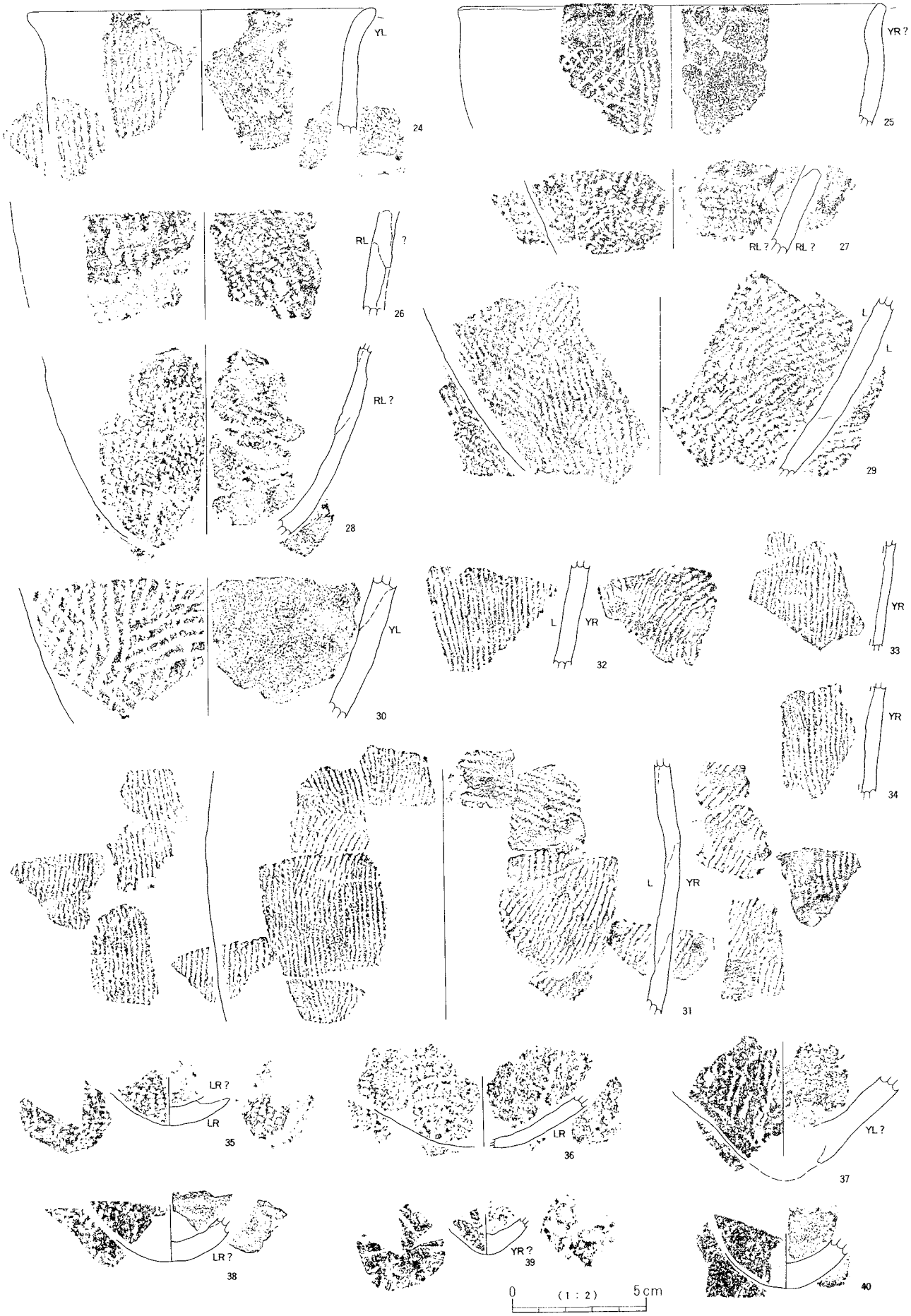
第56図　草創～早期土器実測図



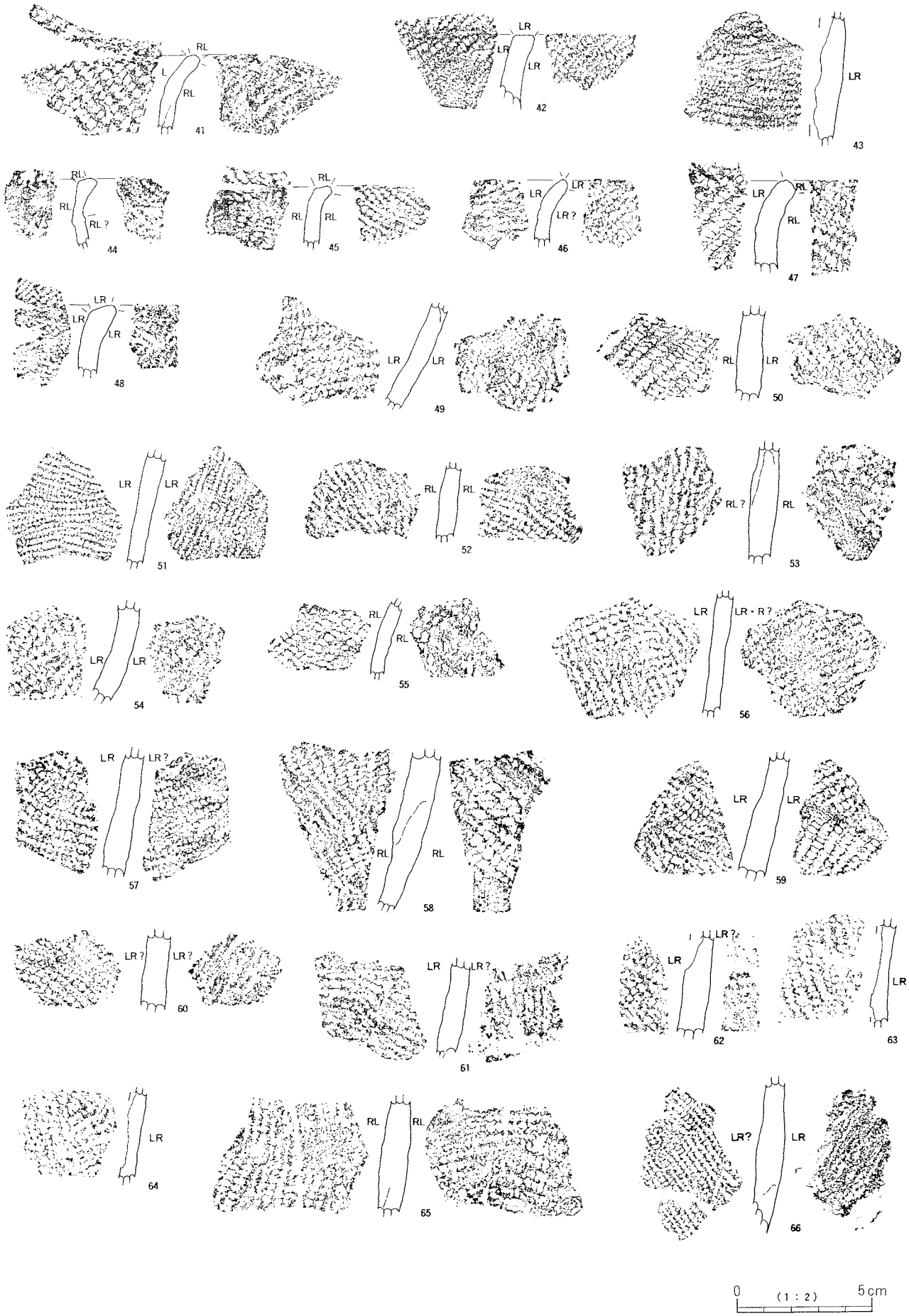
第57図　草創～早期土器実測図



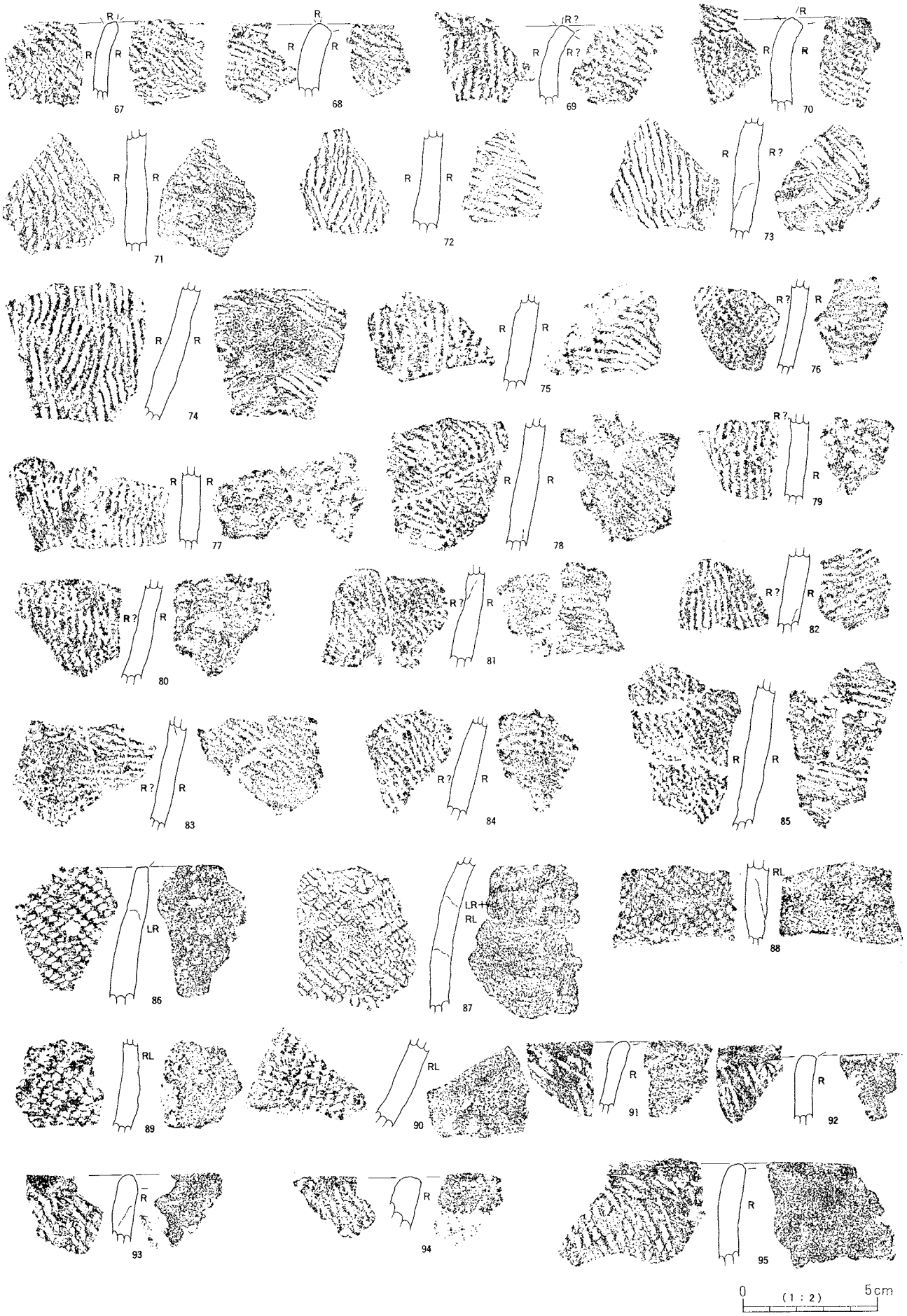
第58図　草創～早期土器実測図



第59図　草創～早期土器実測図

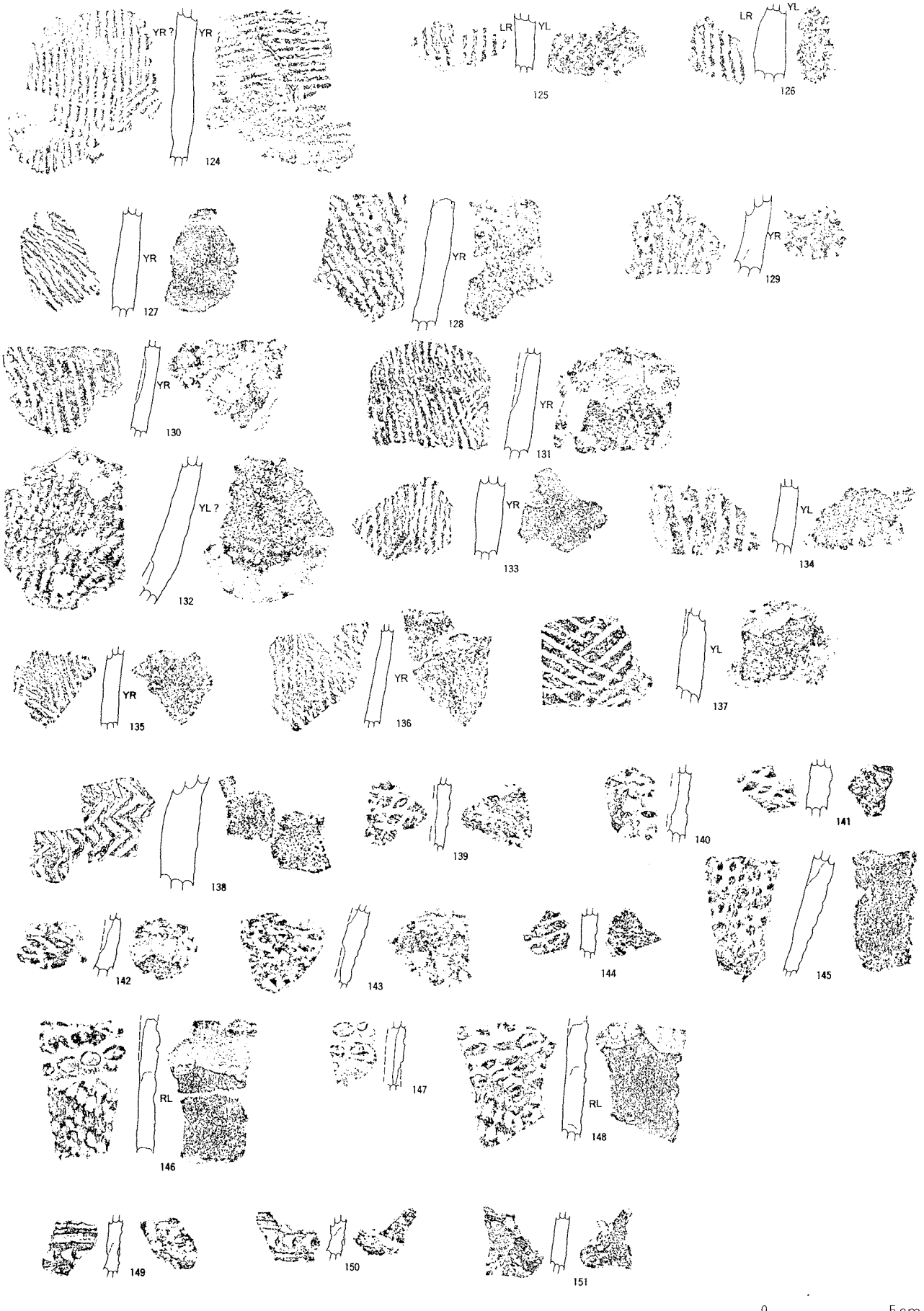


第60図　草創～早期土器実測図

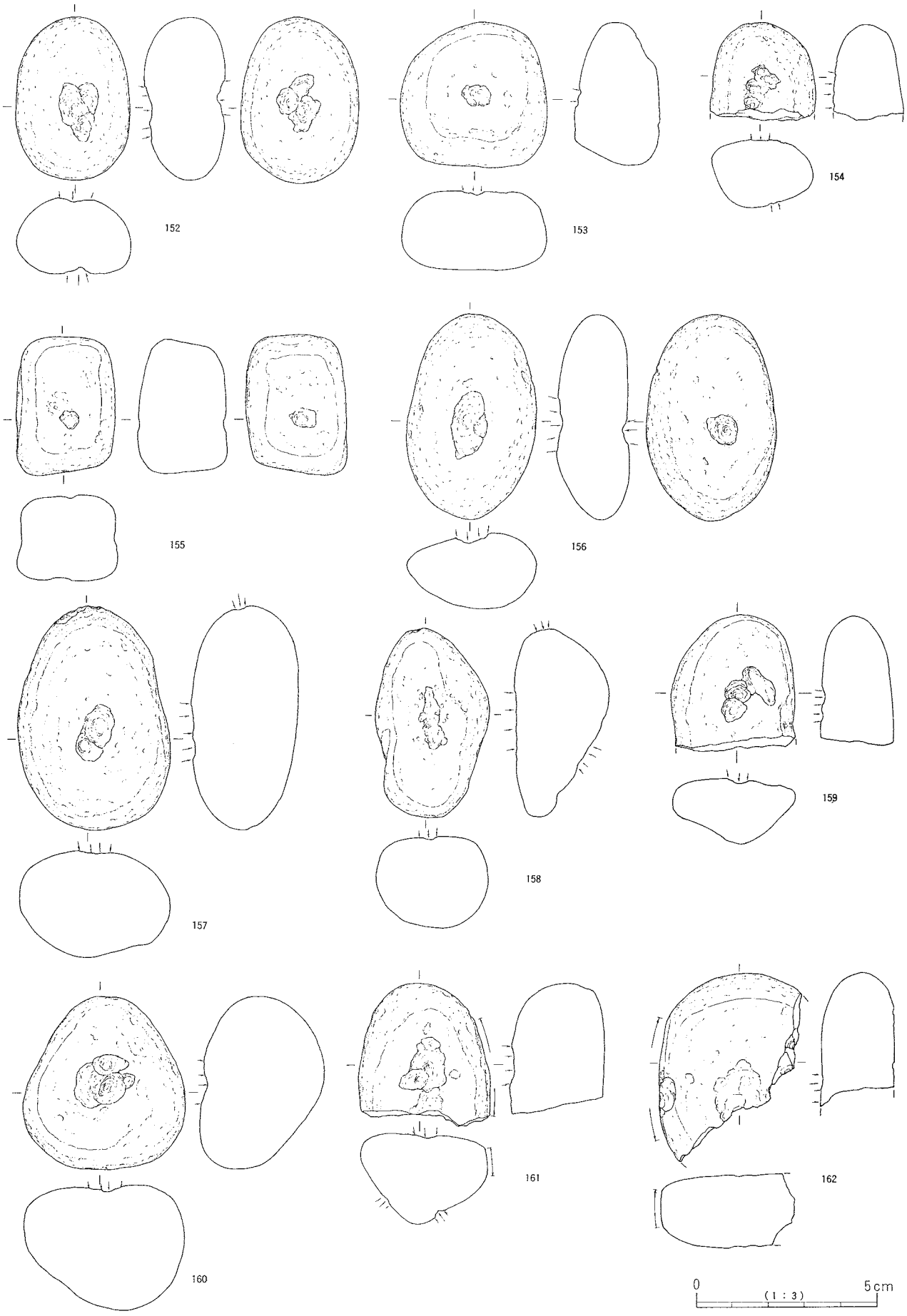


第61図　草創～早期土器実測図

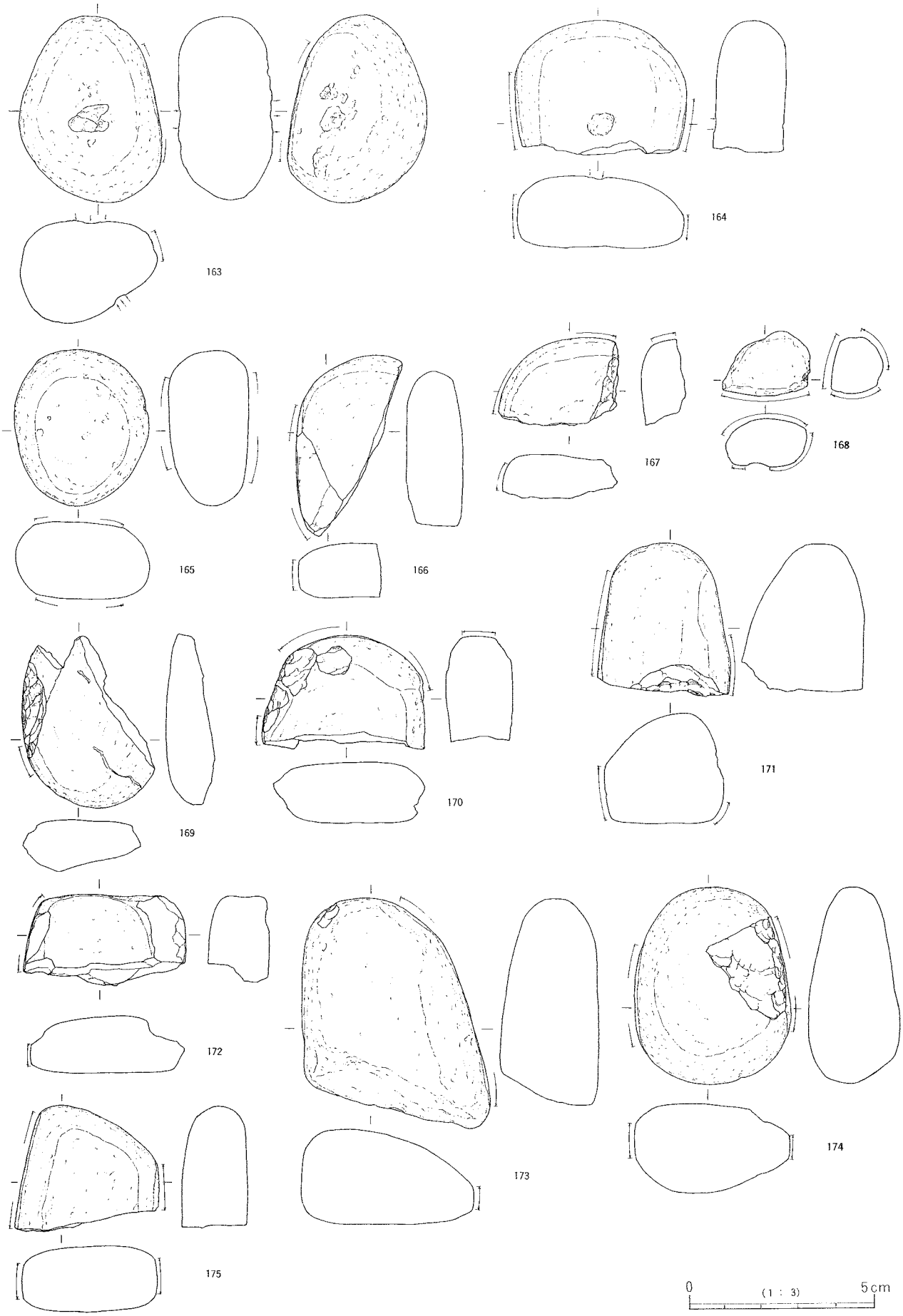
第62図　草創～早期土器実測図



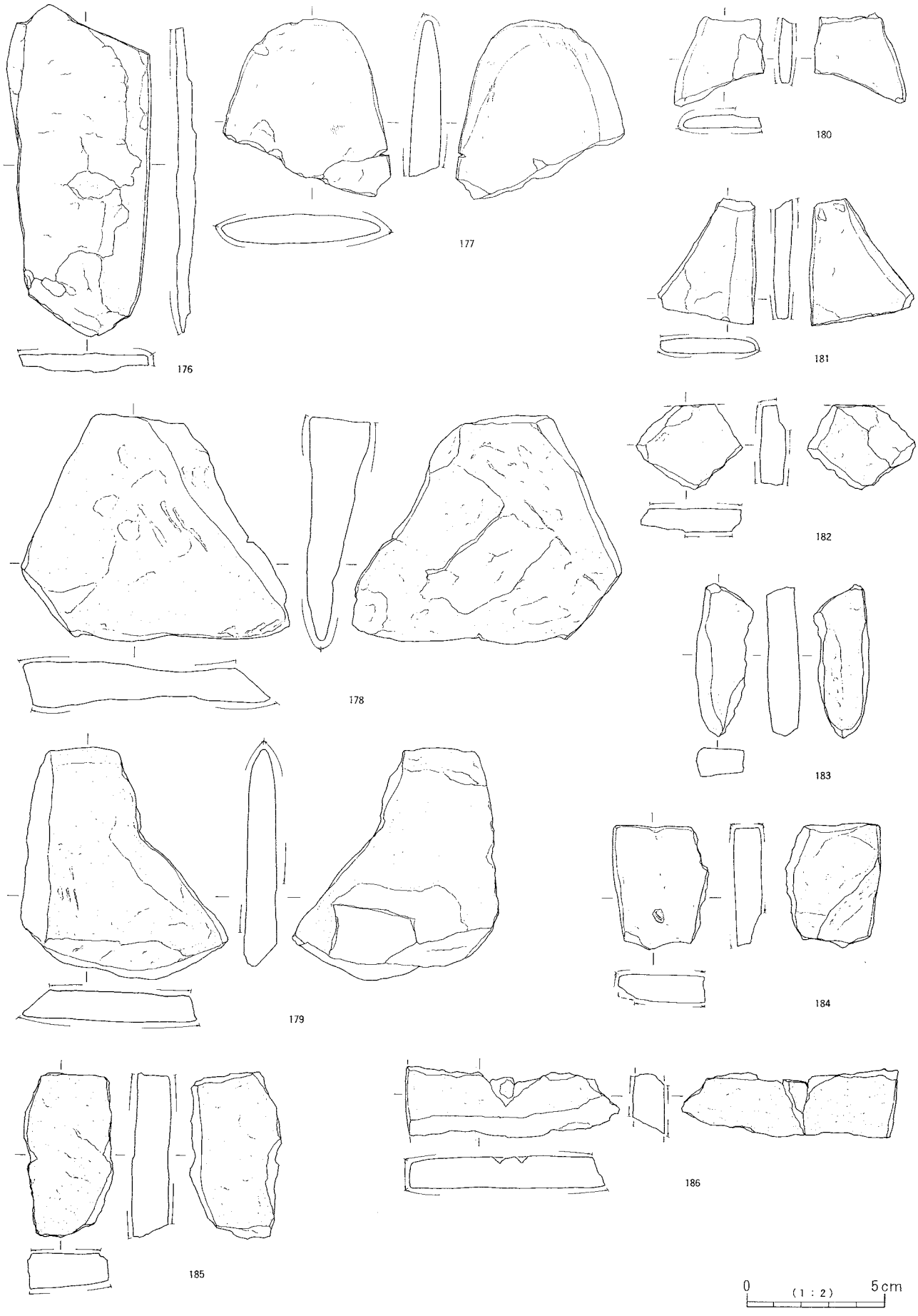
第63図　草創～早期土器実測図



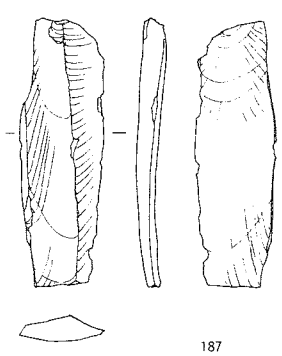
第64図　草創～早期石器実測図（凹石）

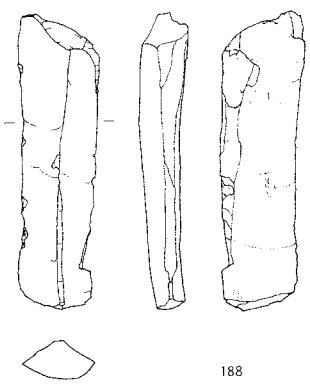


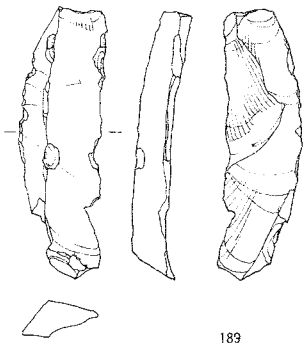
第65図　草創～早期石器実測図（凹石・磨石）

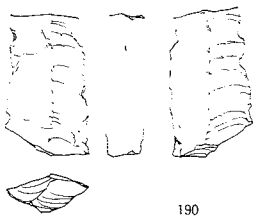


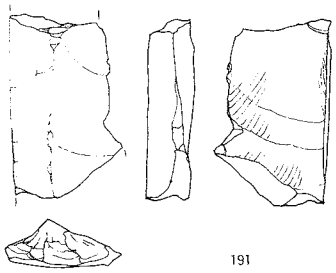
第66図　草創～早期石器実測図（砥石）

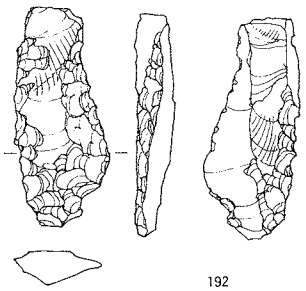

187

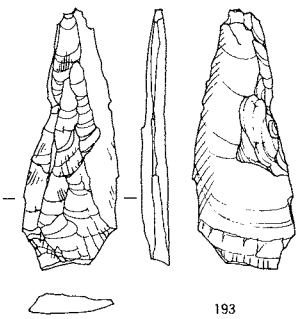

188

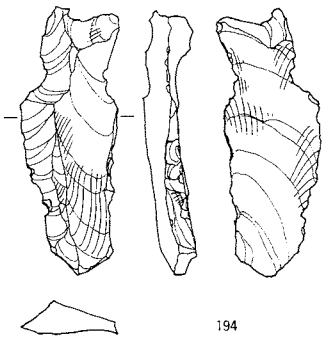

189

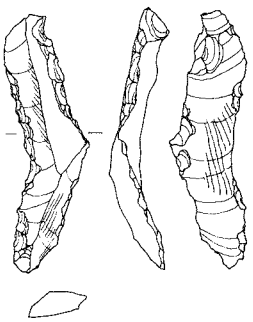

190

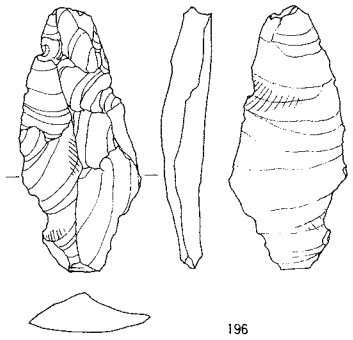

191

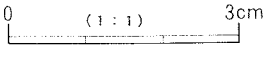

192


193

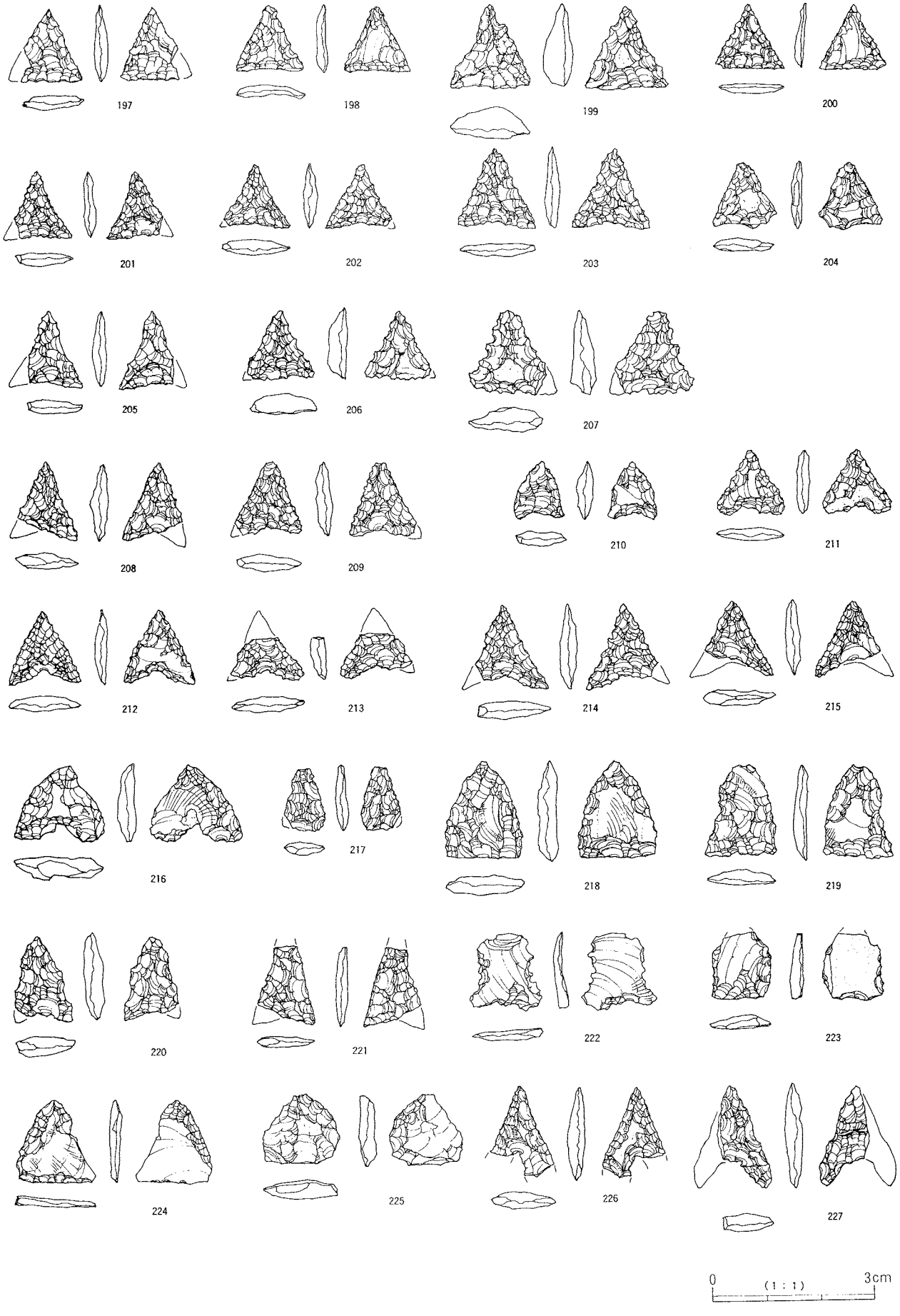

194


195

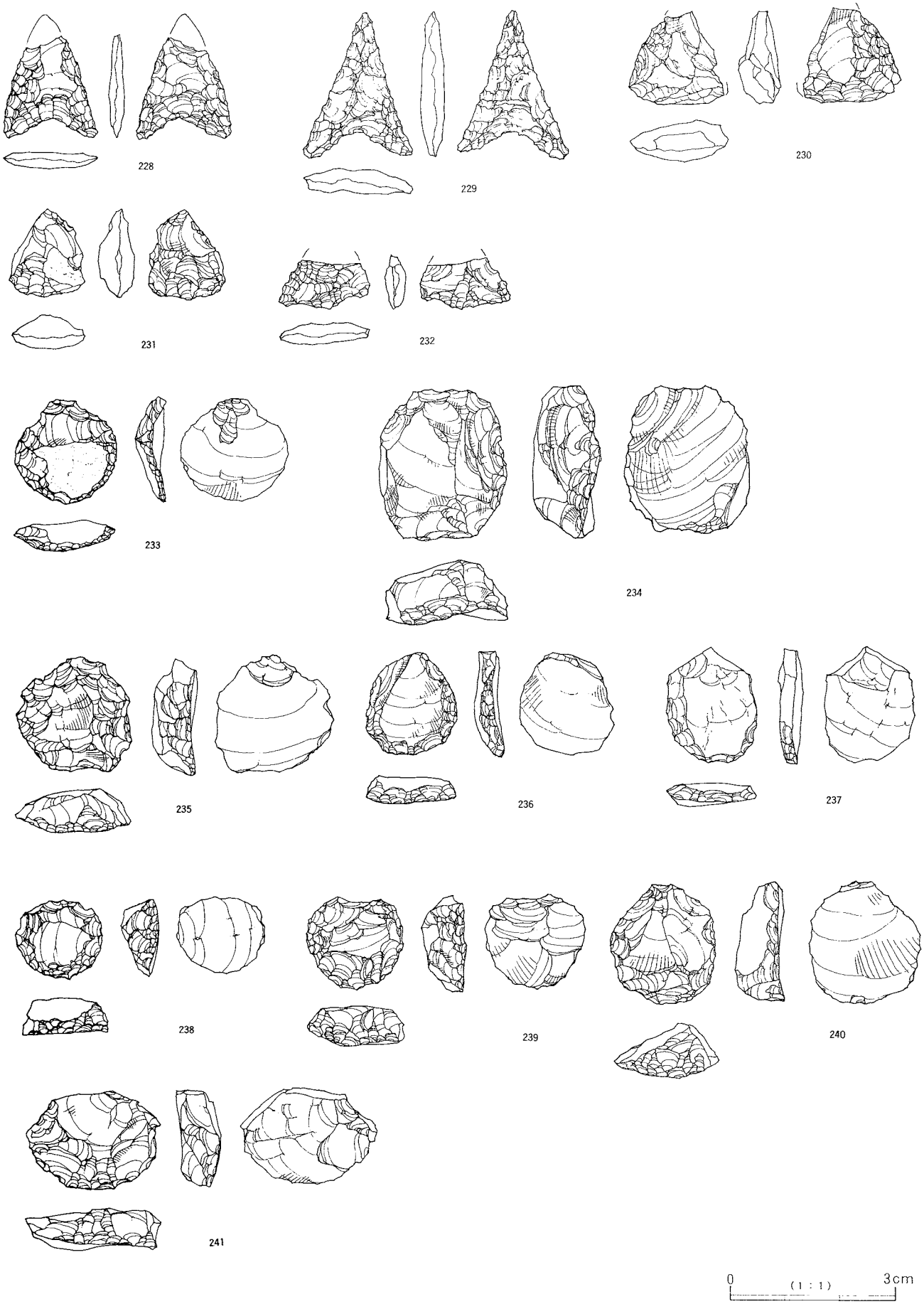

196



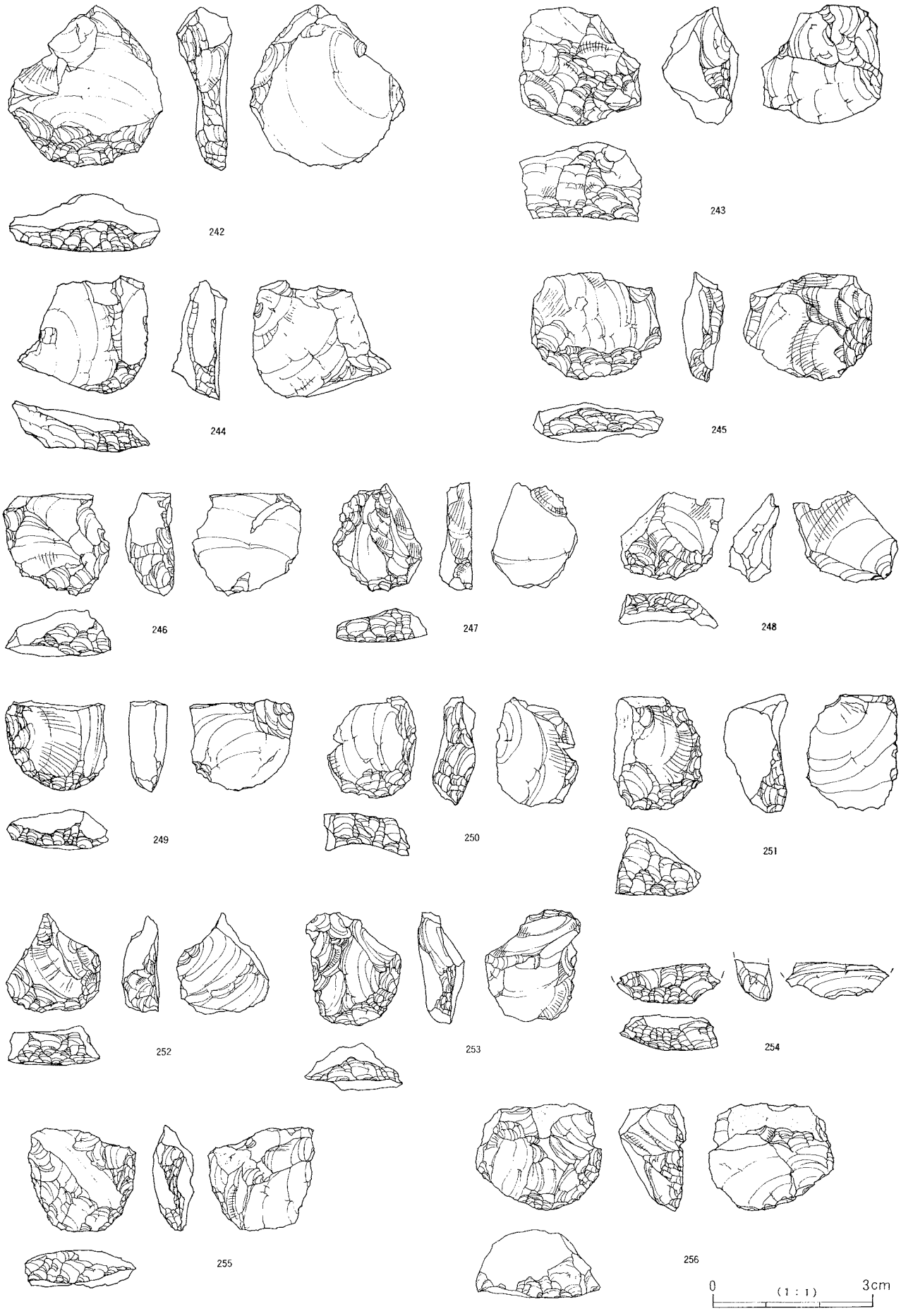
第67図　草創～早期石器実測図（縦長剥片）



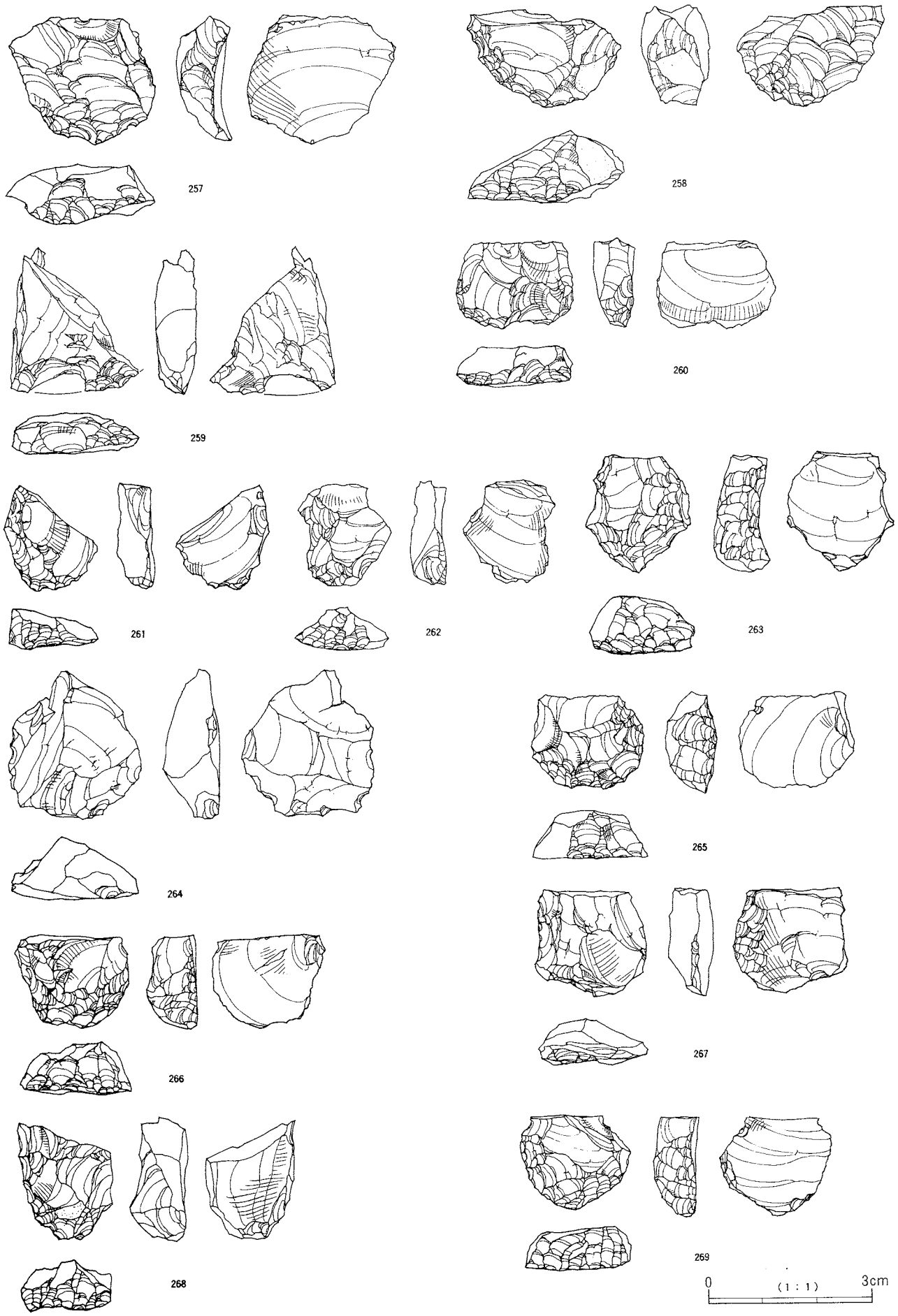
第68図　草創～早期石器実測図（石鏃）



第69図　草創～早期石器実測図（石鏃・掻器）



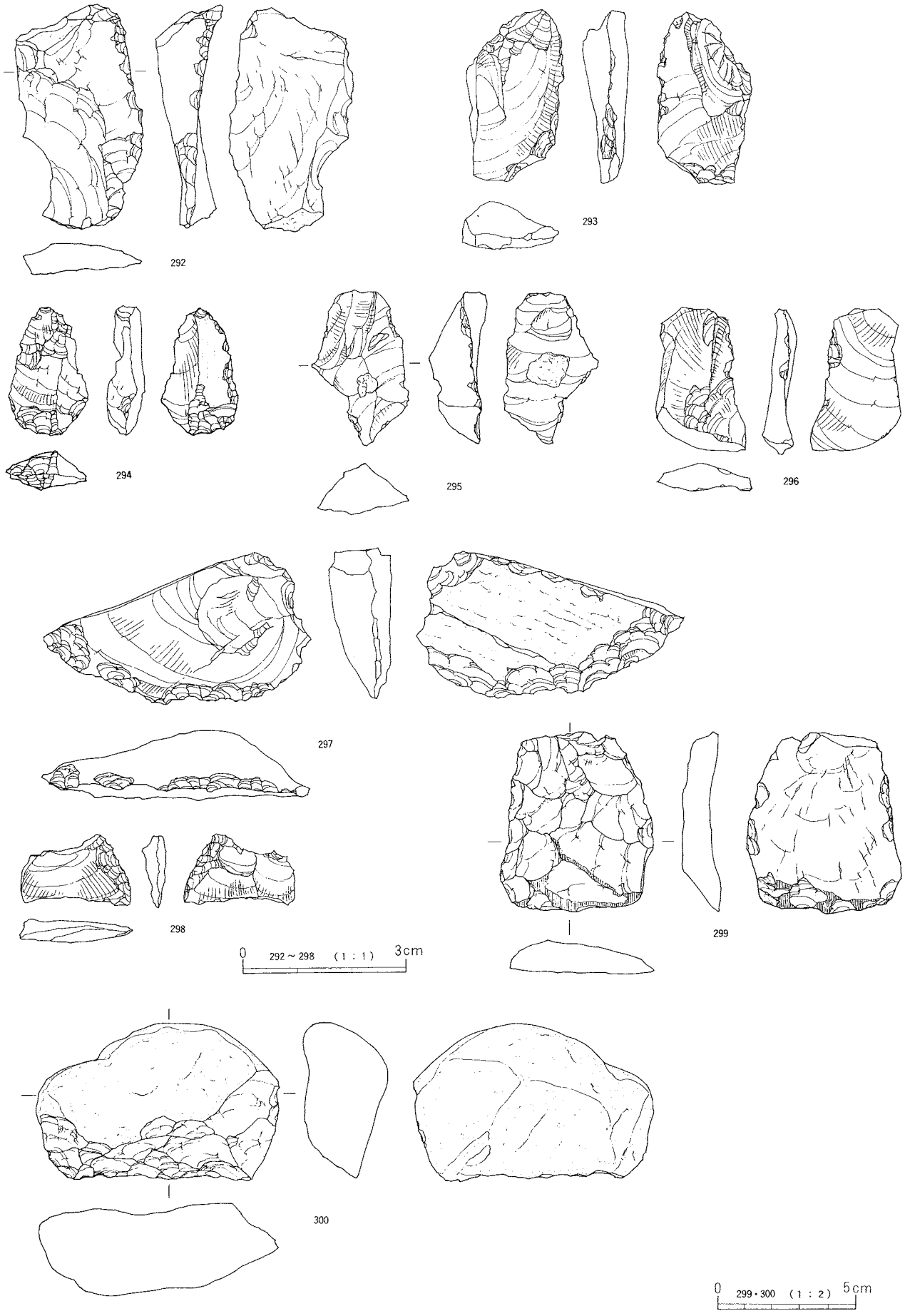
第70図　草創～早期石器実測図（掻器）



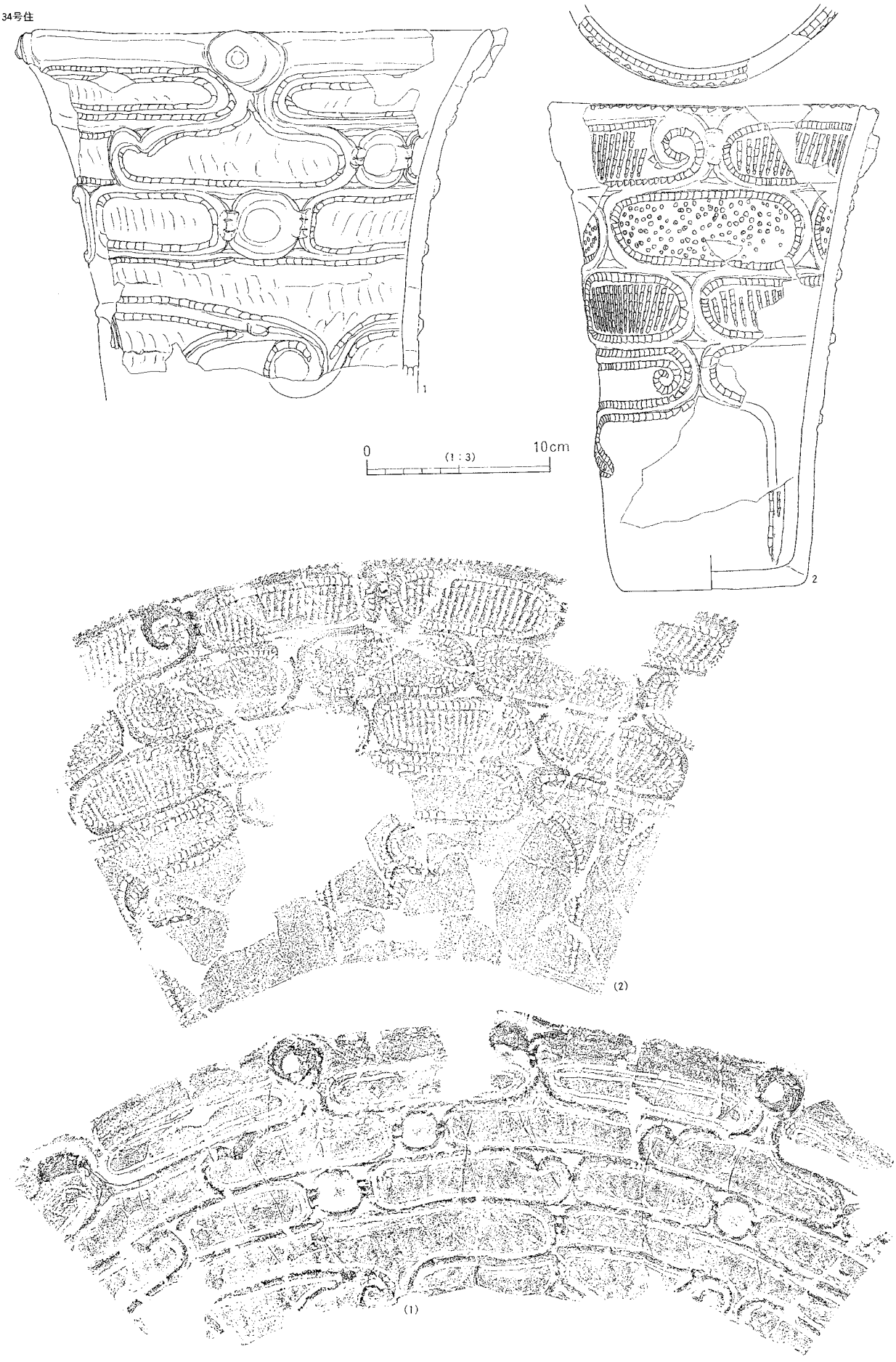
第71図　草創～早期石器実測図（掻器）

第72図　草創～早期石器実測図（掻器・楔形石器）

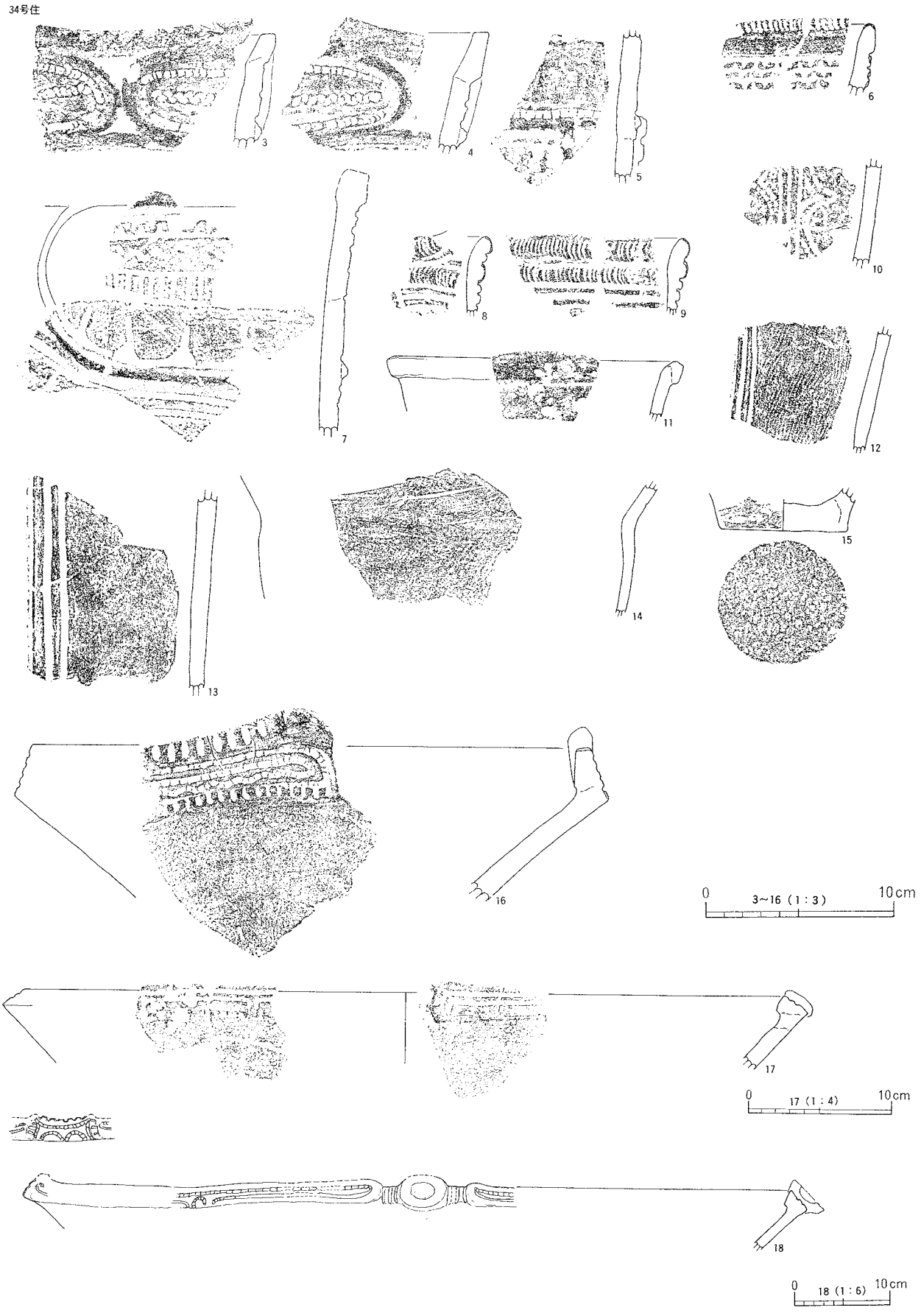
第73図　草創～早期石器実測図（楔形石器・掻器・石錐など）



第74図　草創～早期石器実測図

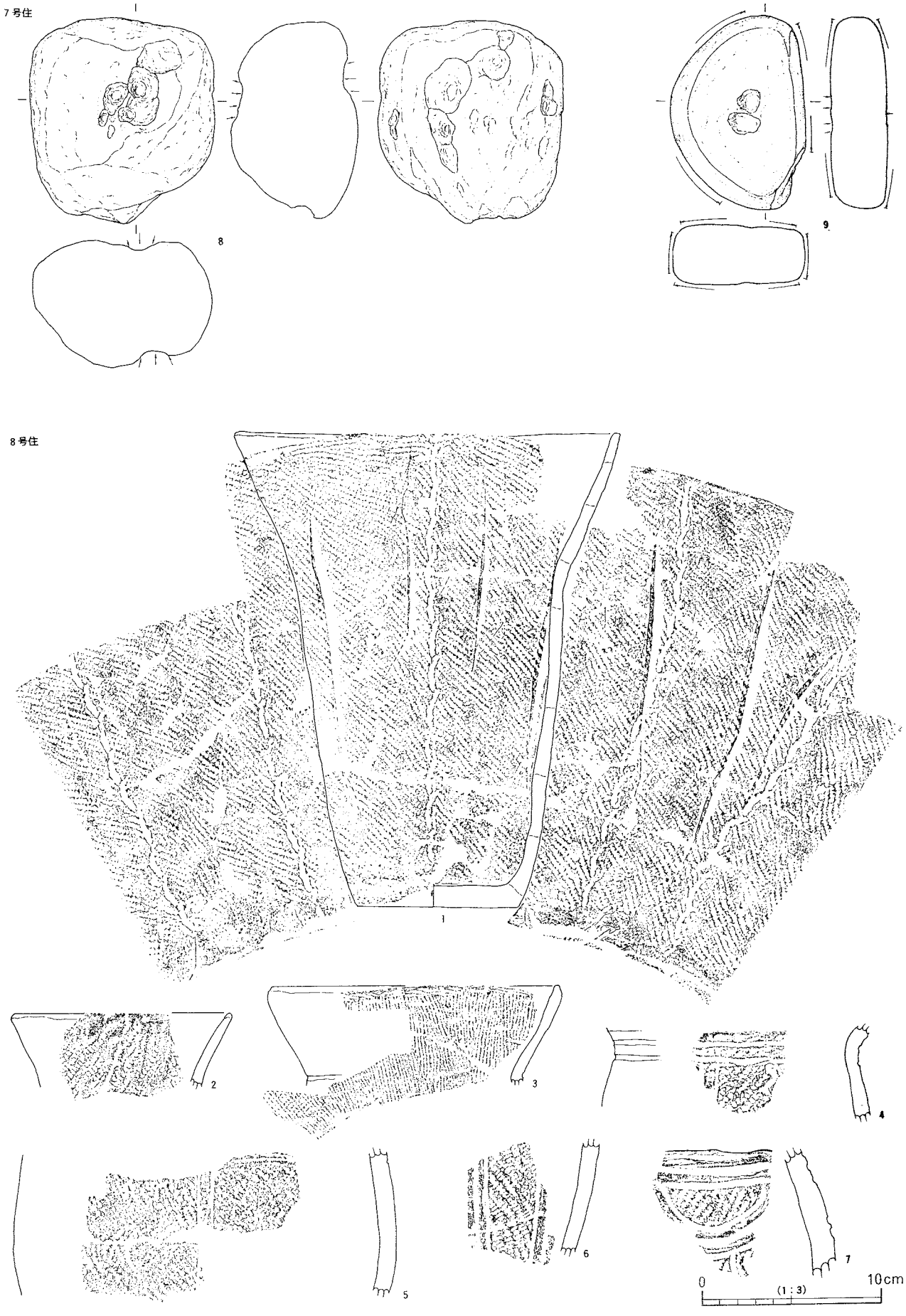


第75図　34号住出土遺物実測図（1・2）

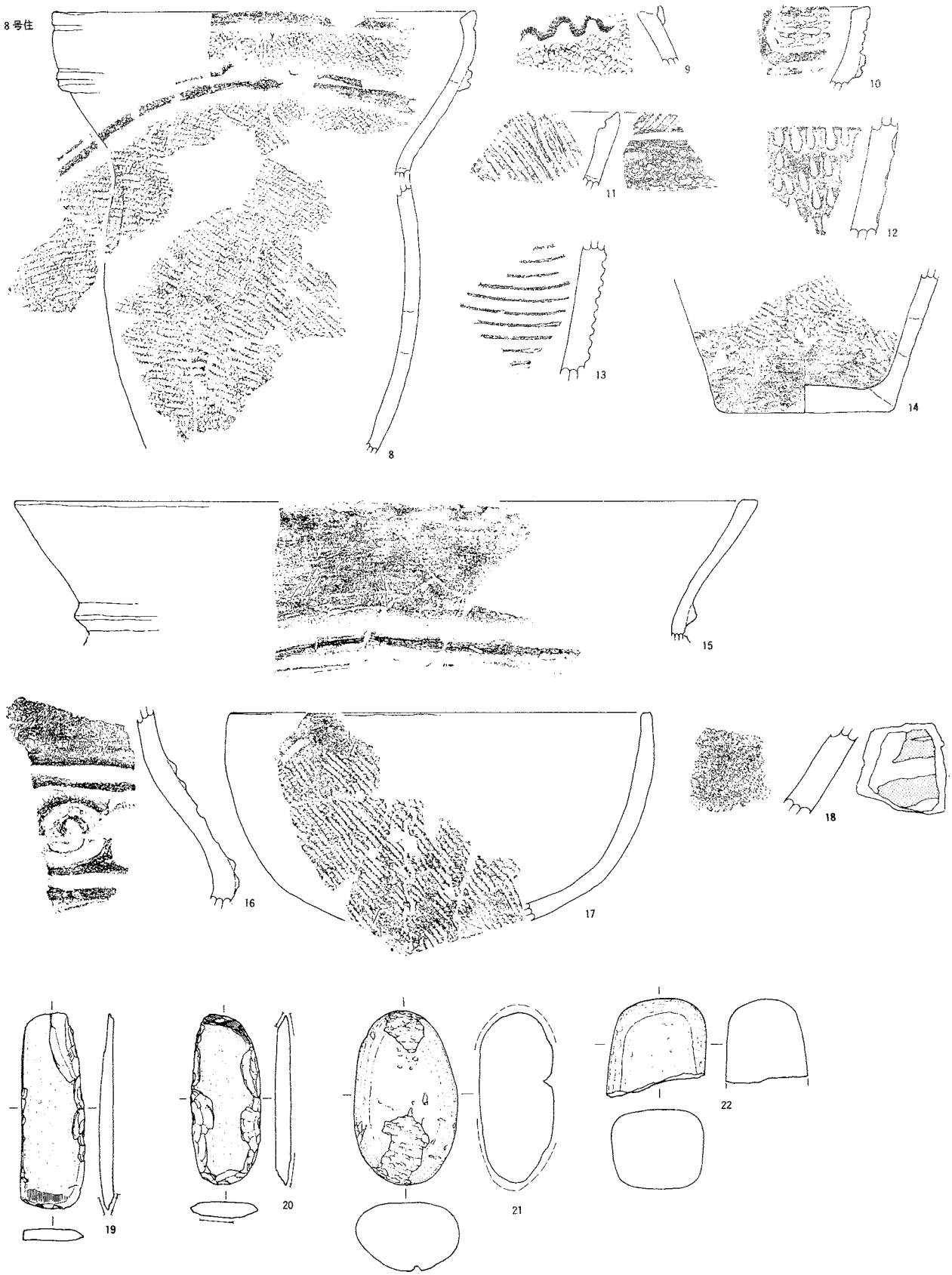


第76図　34号住出土遺物実測図（3～18）

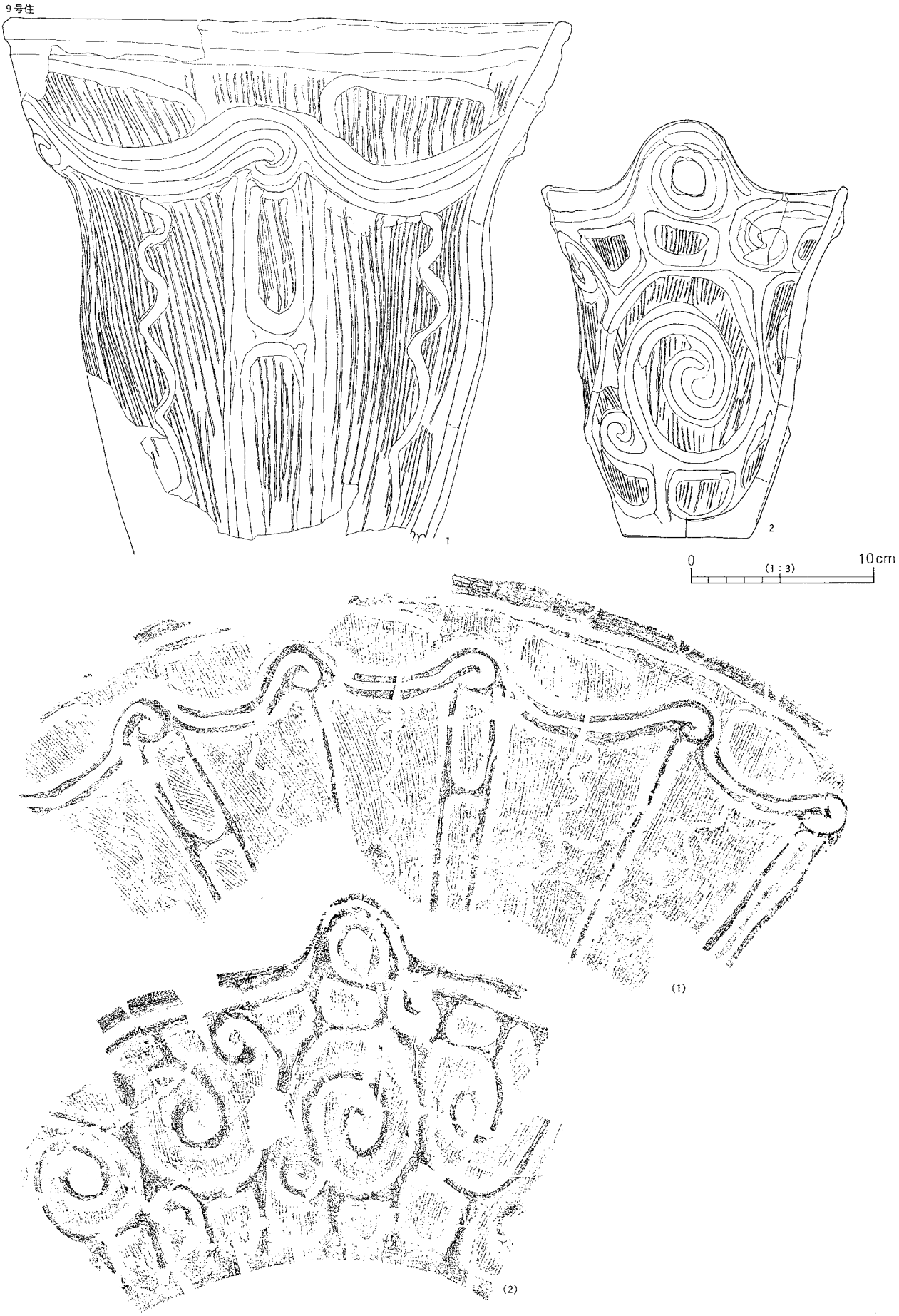
第77図　34号住（19～24）・3号住（1～4）・7号住（1～7）出土遺物実測図



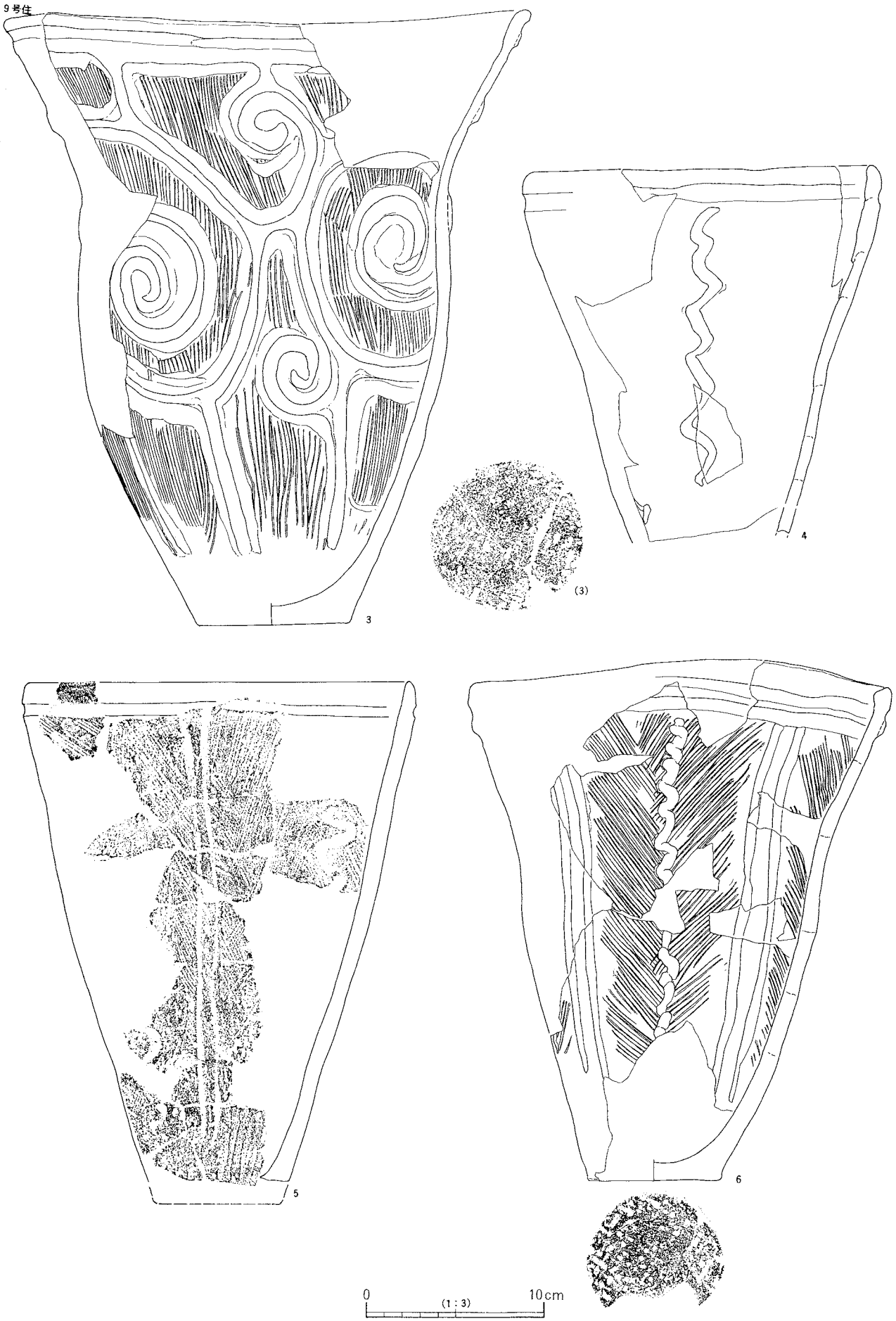
第78図　7号住（8・9）・8号住（1～7）出土遺物実測図



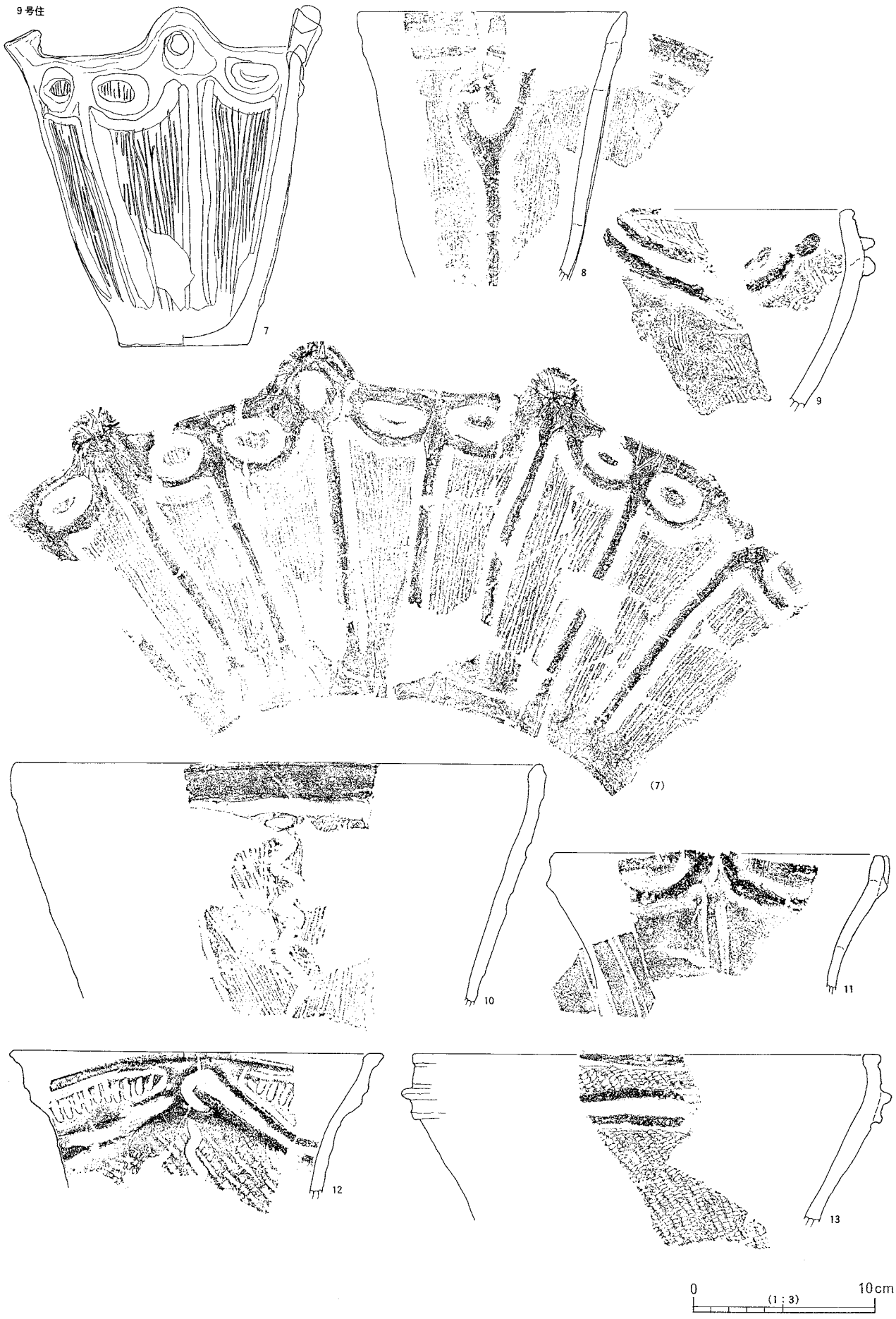
第79図　8号住出土遺物実測図（8～22）



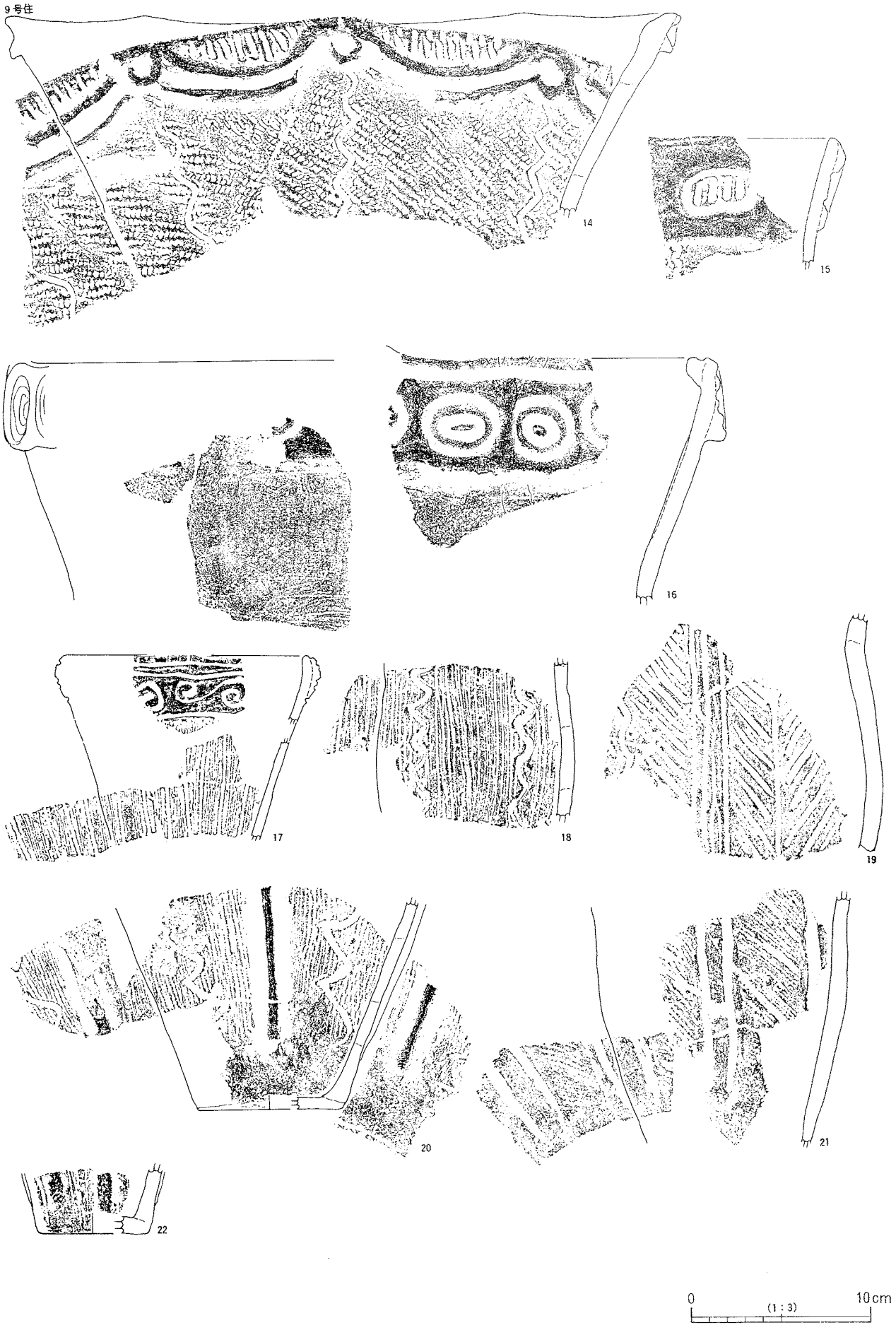
第80図　9号住出土遺物実測図（1・2）



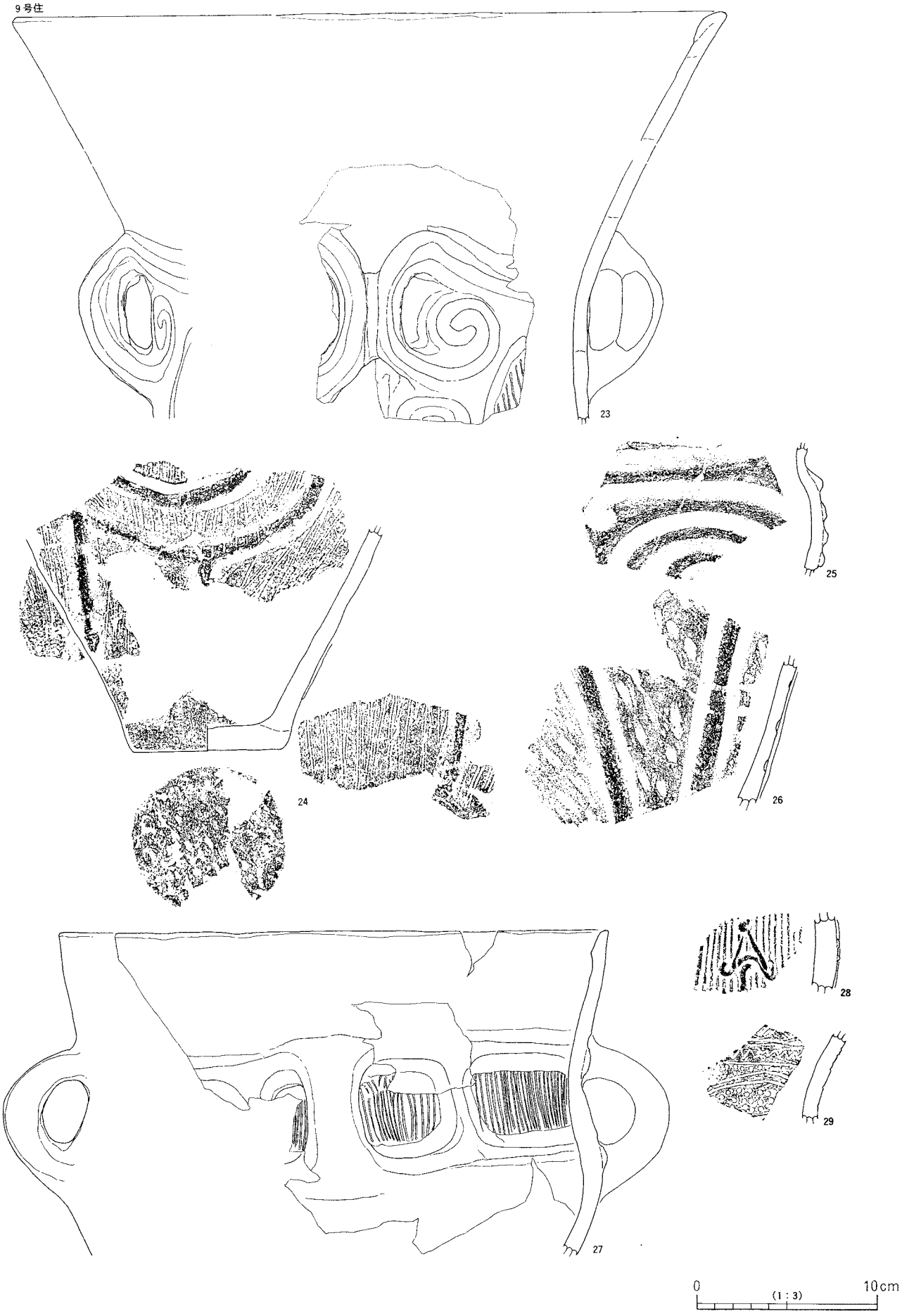
第81図　9号住出土遺物実測図（3～6）



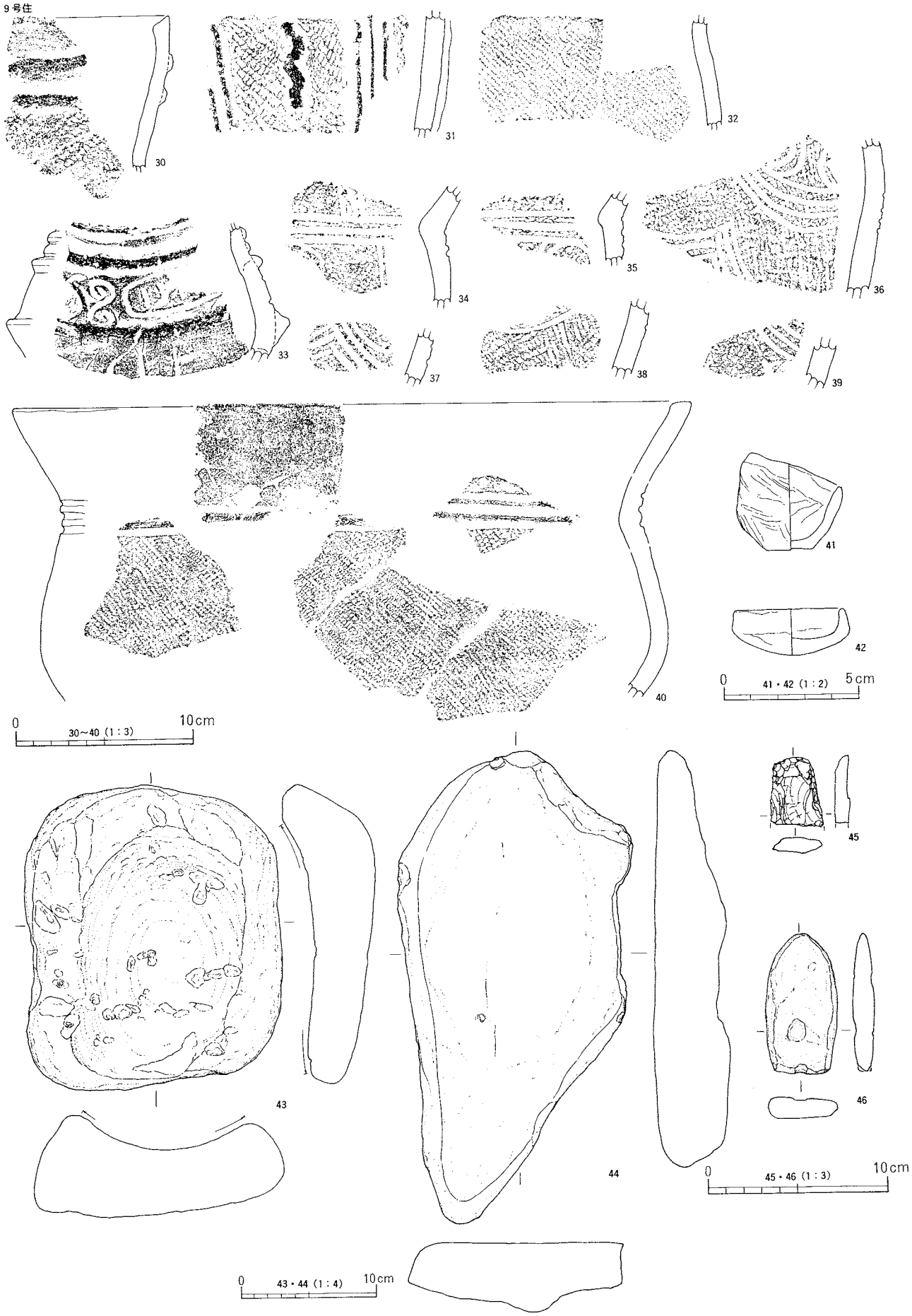
第82図　9号住出土遺物実測図（7～13）



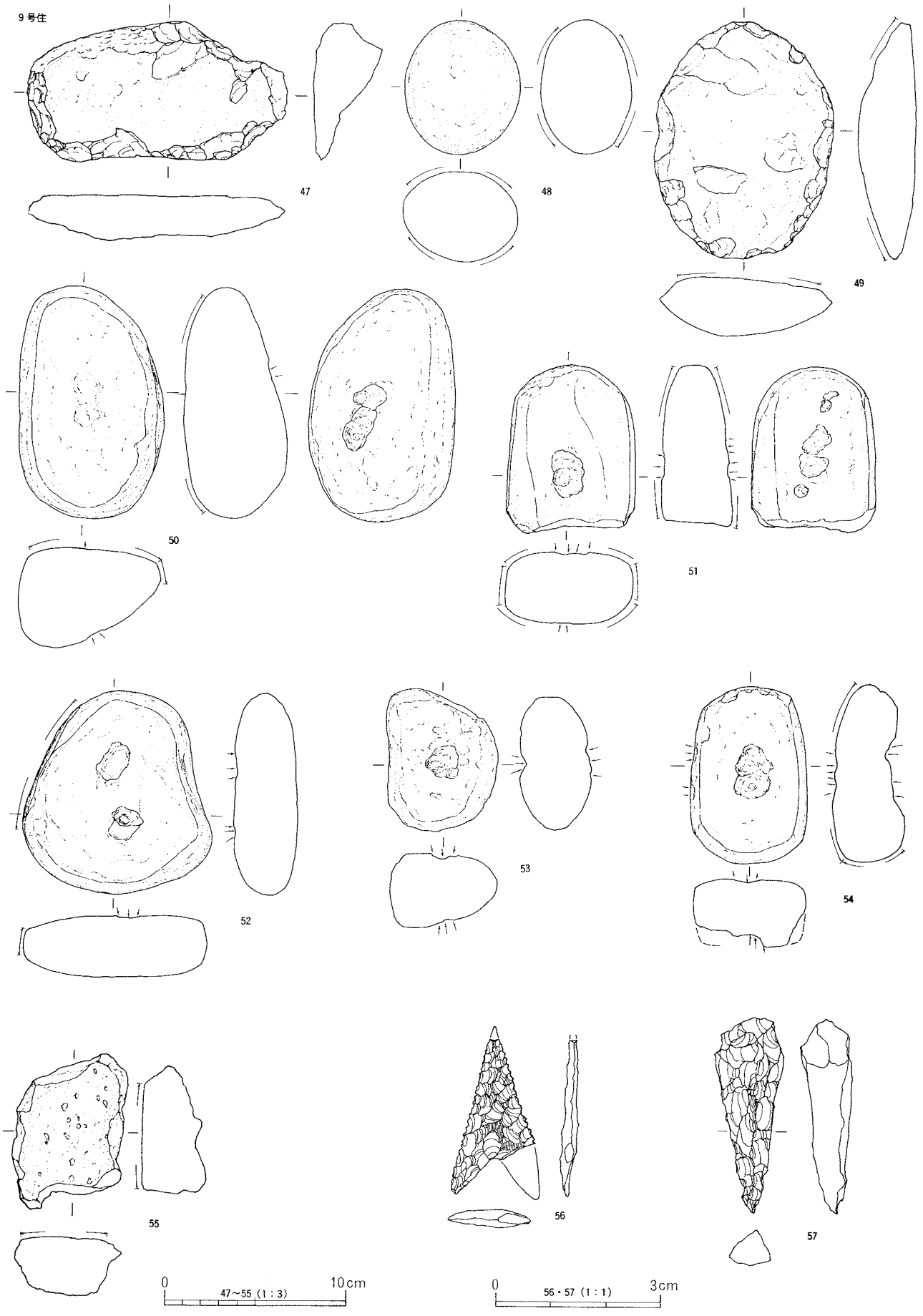
第83図　9号住出土遺物実測図（14～22）



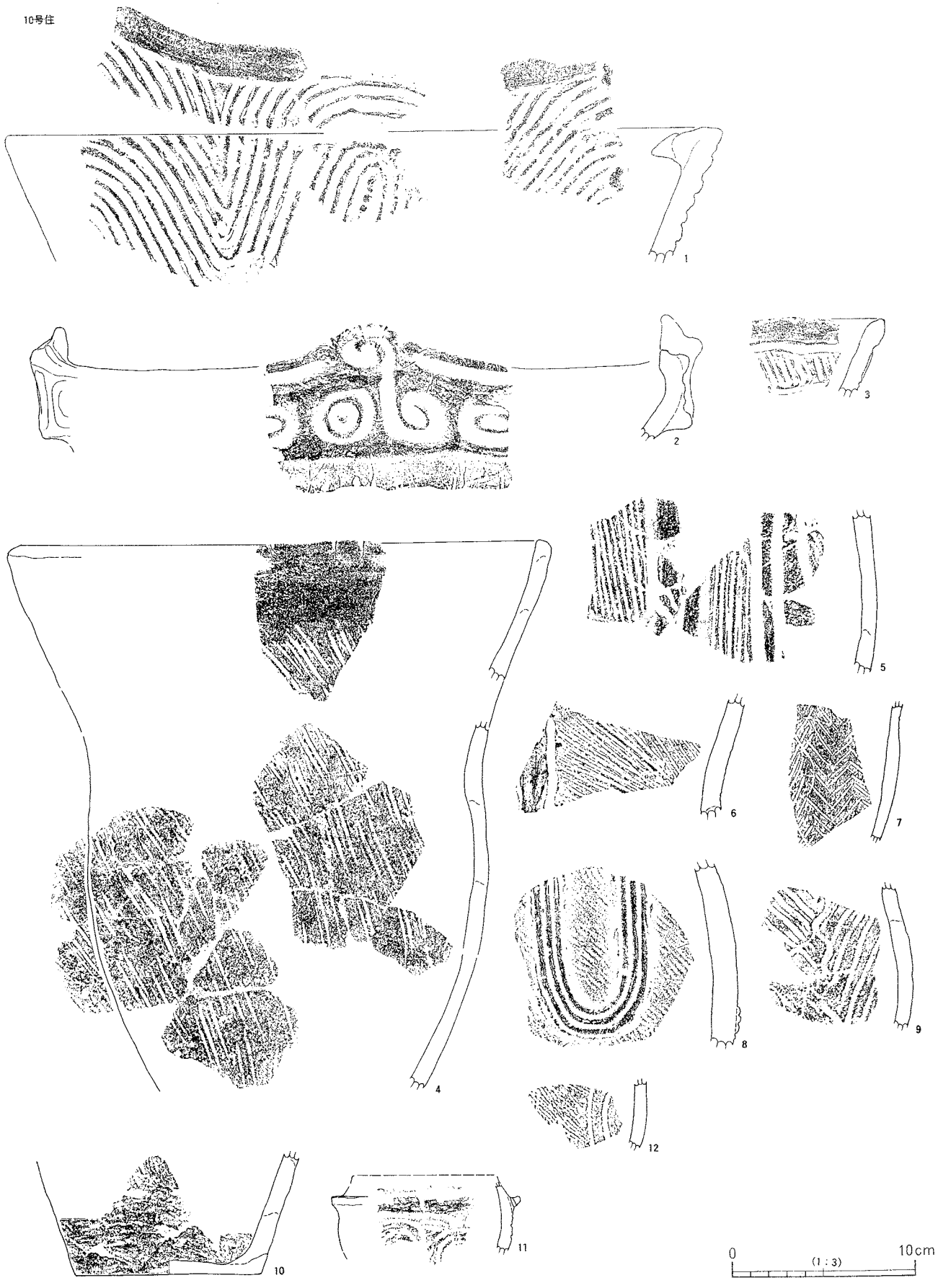
第84図　9号住出土遺物実測図（23～29）



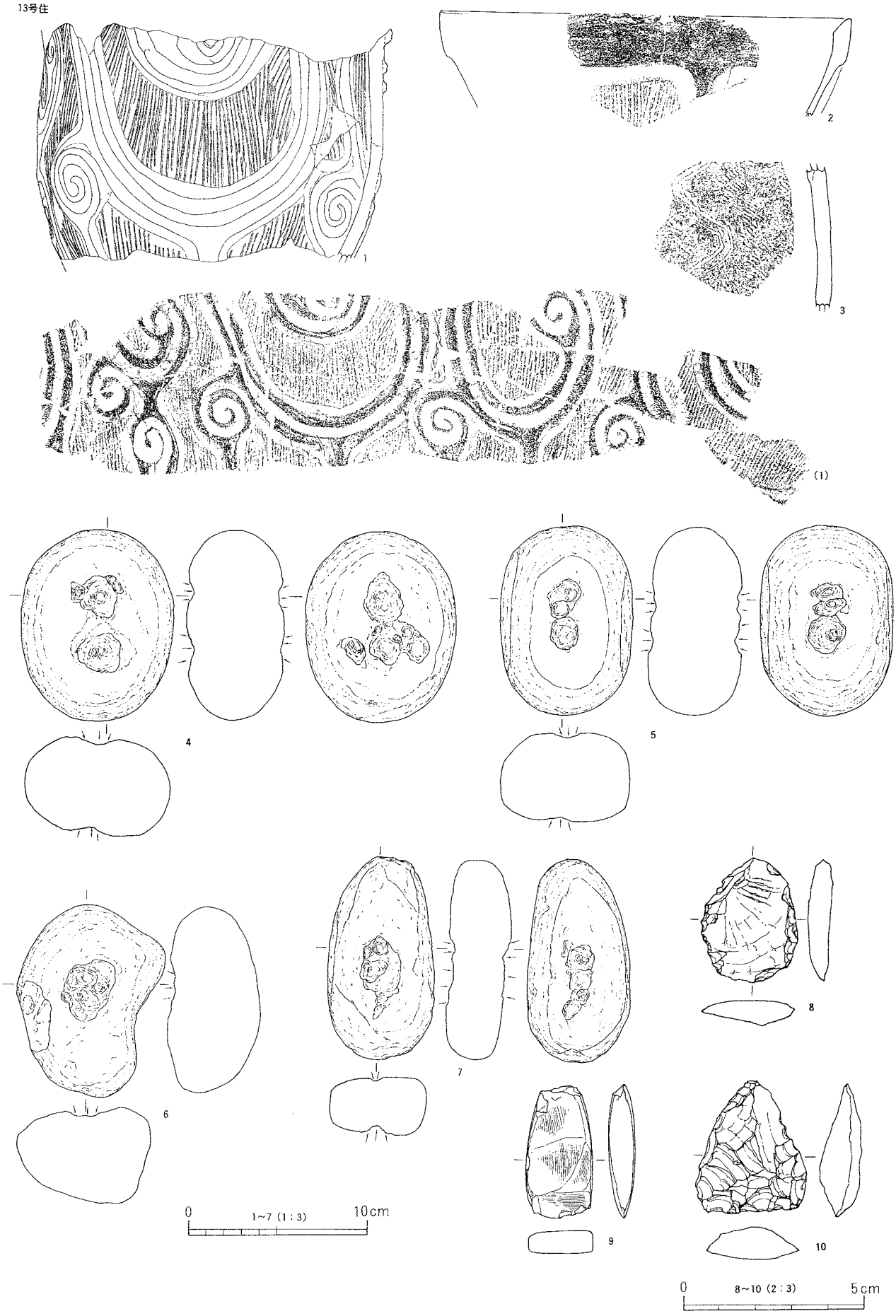
第85図　9号住出土遺物実測図（30～46）



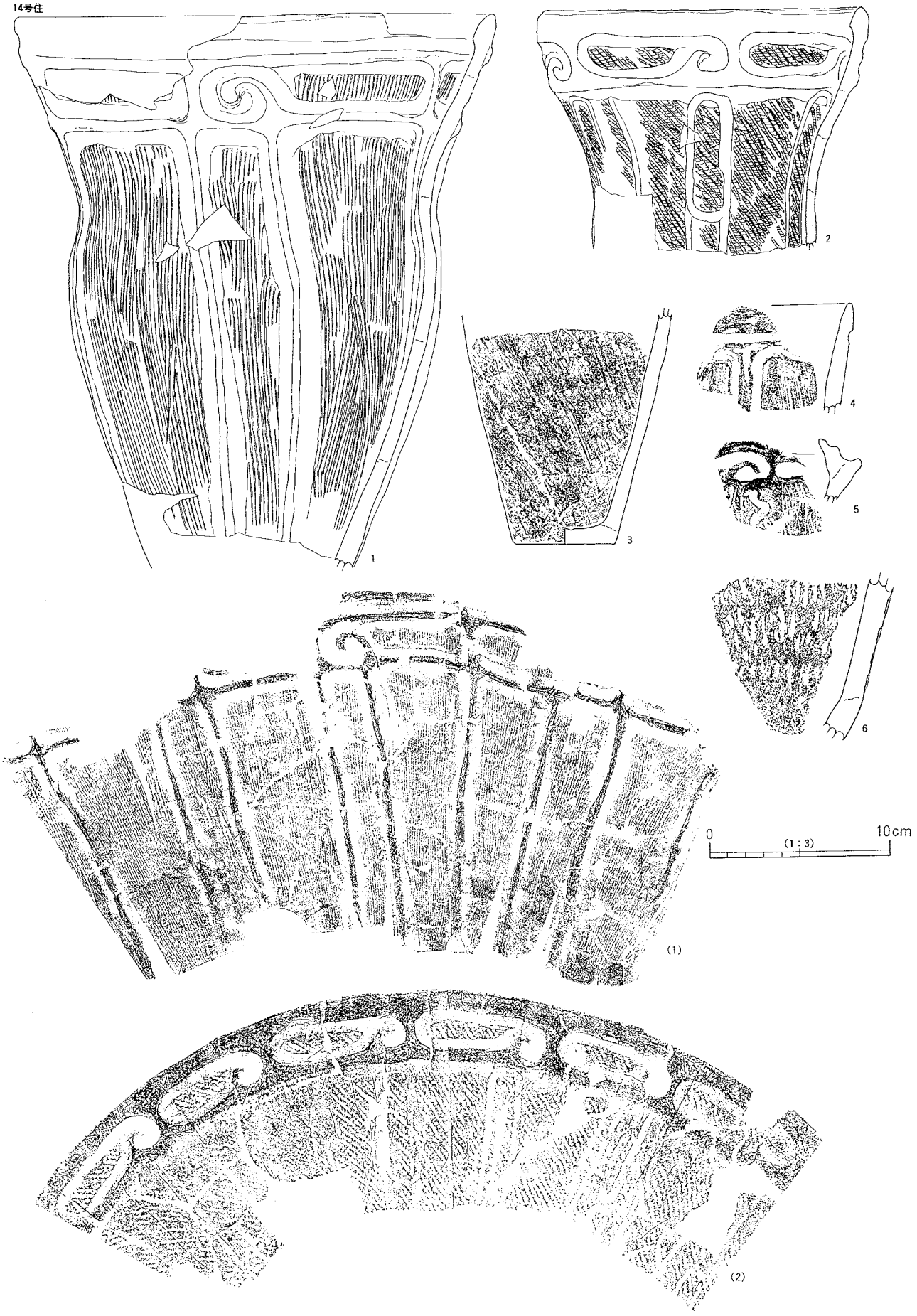
第86図　9号住出土遺物実測図（47～56）



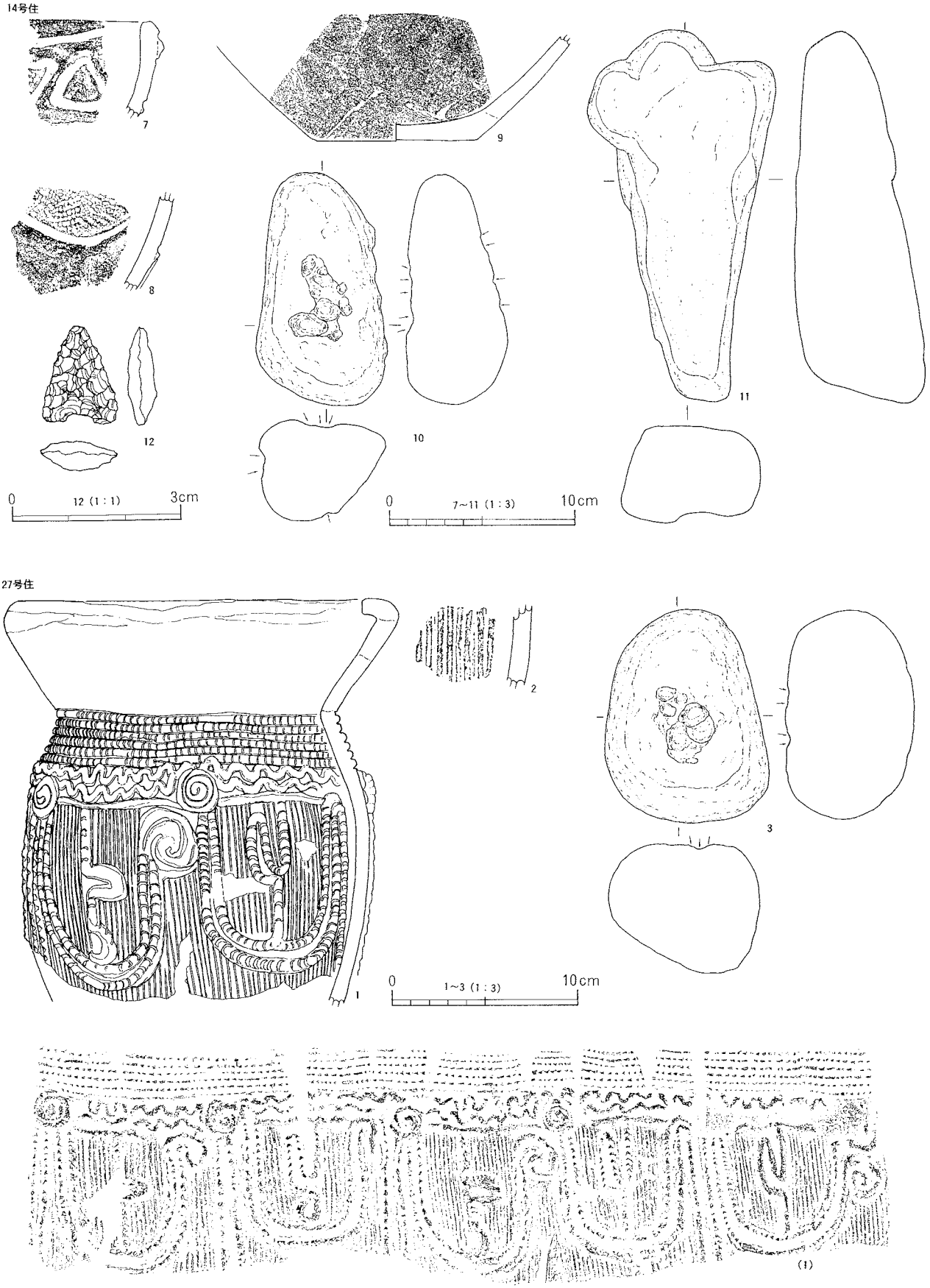
第87図　10号住出土遺物実測図（1～12）



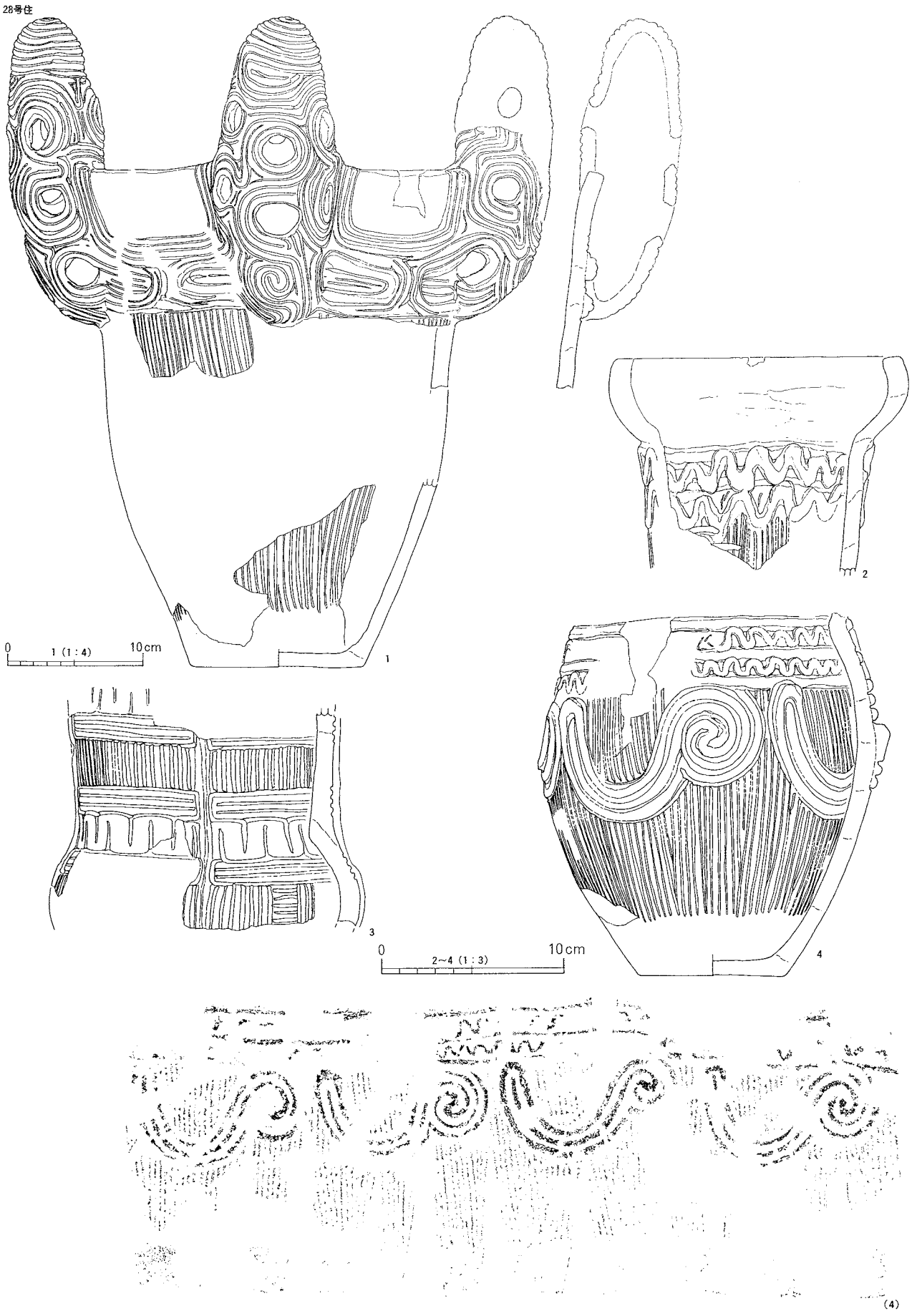
第88図　13号住出土遺物実測図（1～10）



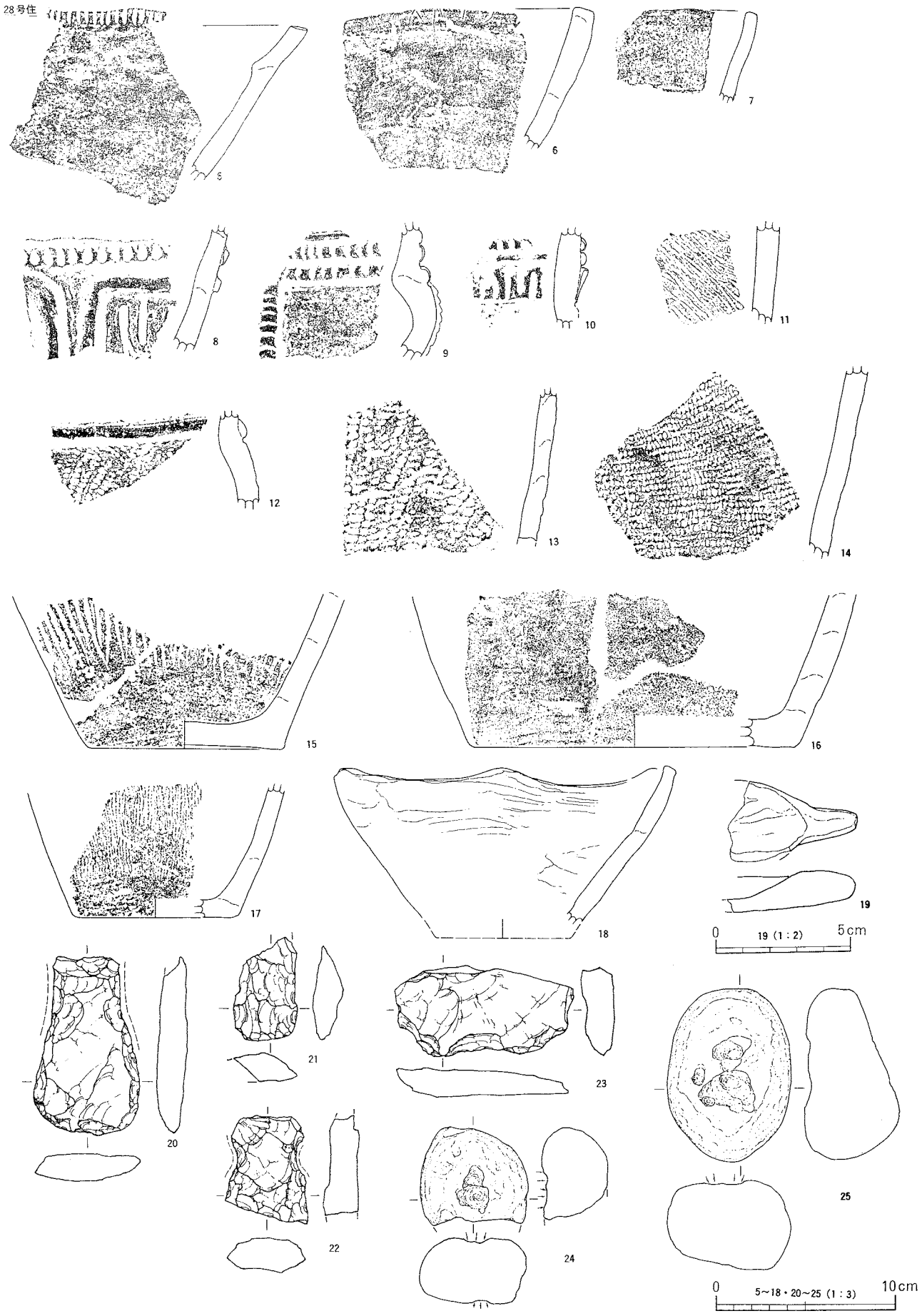
第89図　14号住出土遺物実測図（1～6）



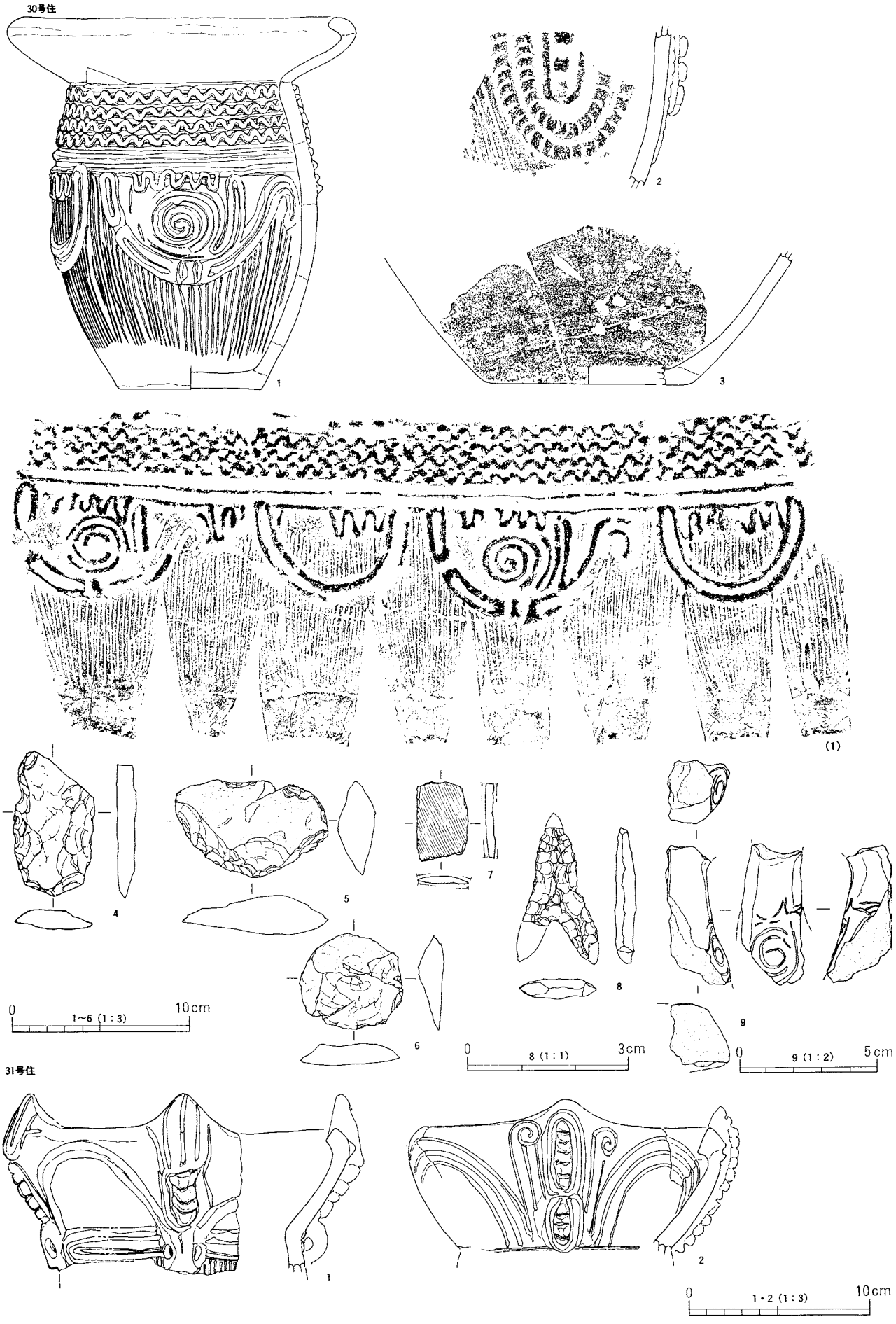
第90図　14号住（7～12）・27号住（1～3）出土遺物実測図



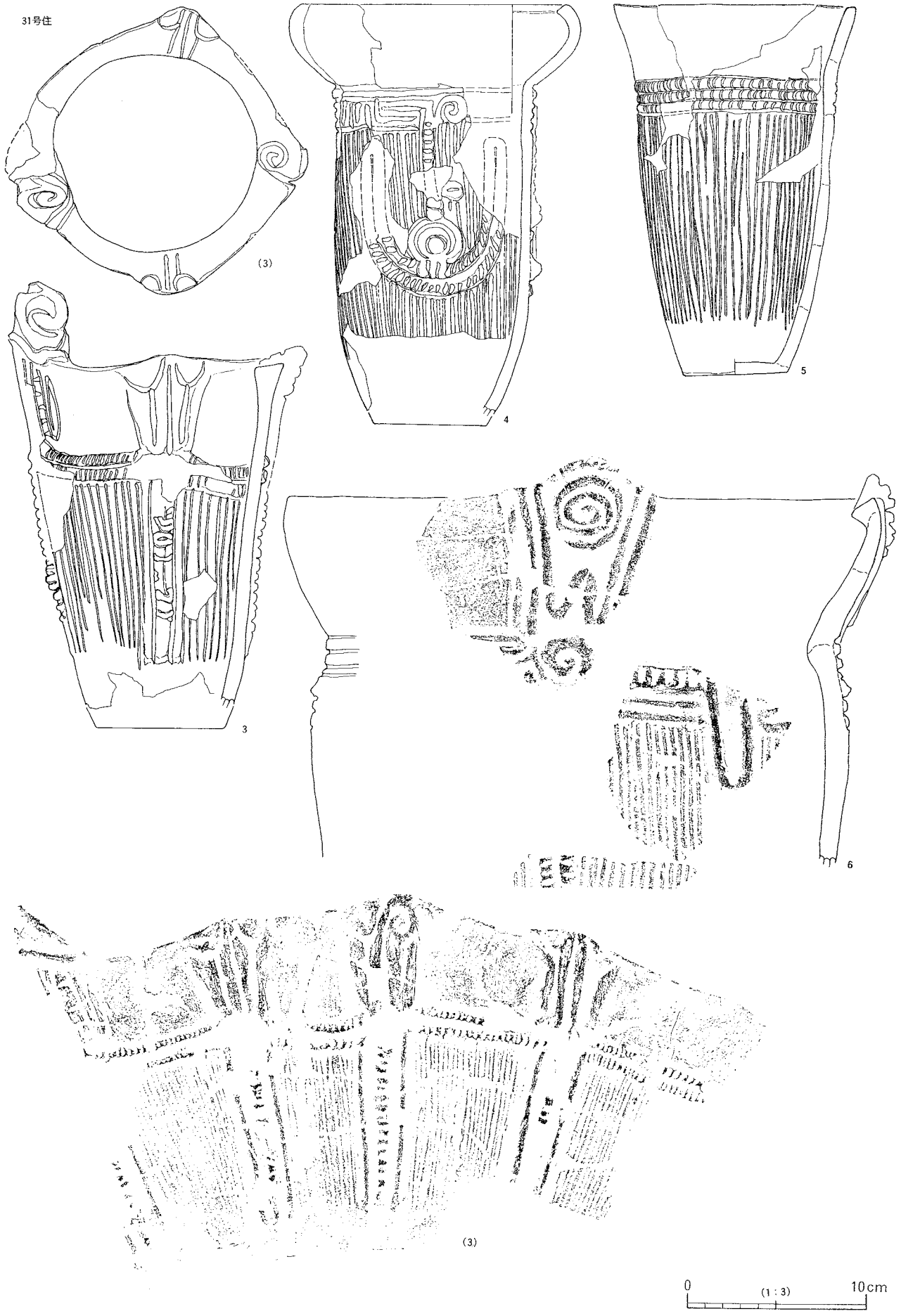
第91図　28号住出土遺物実測図（1～4）



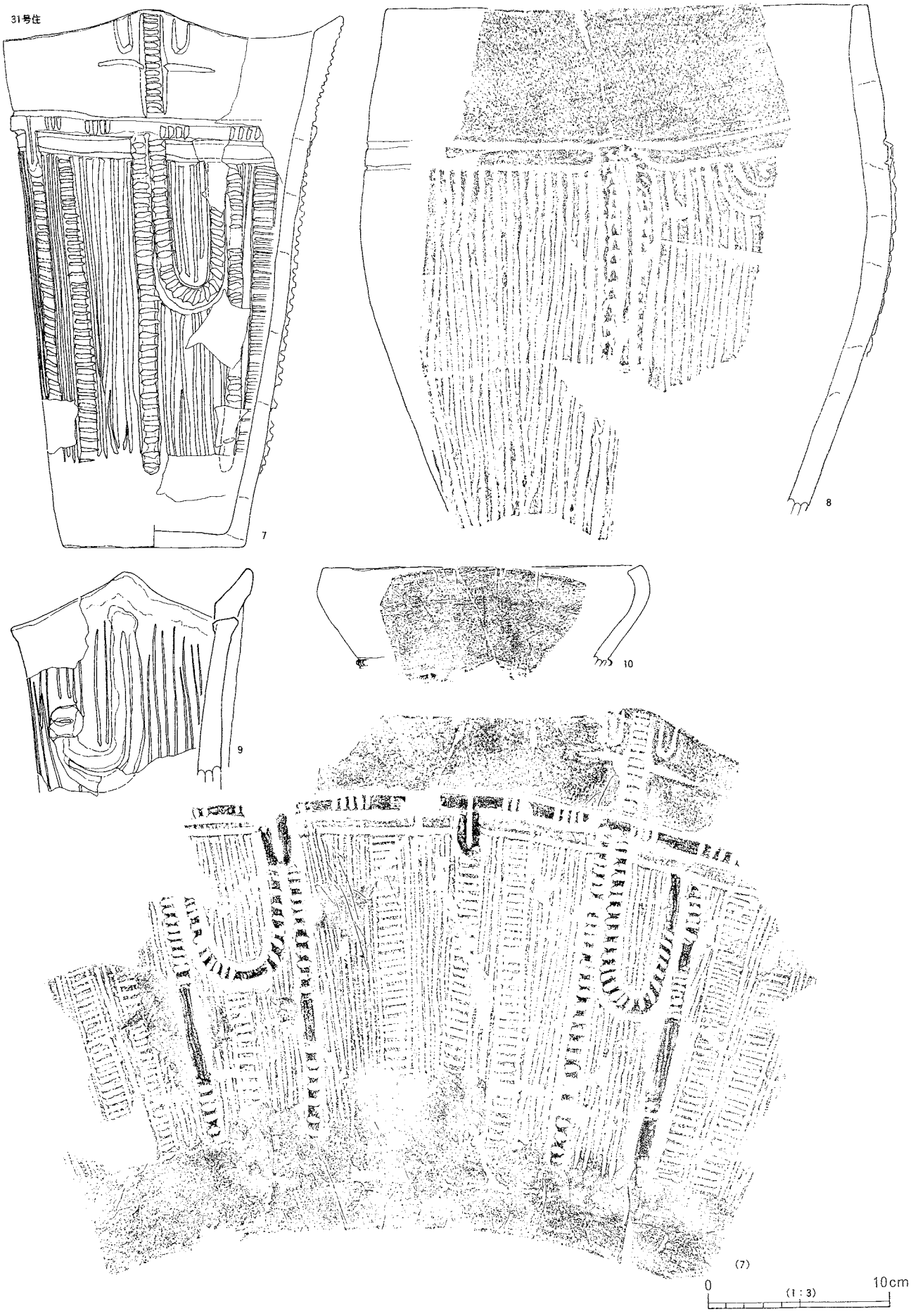
第92図　28号住出土遺物実測図（5～25）



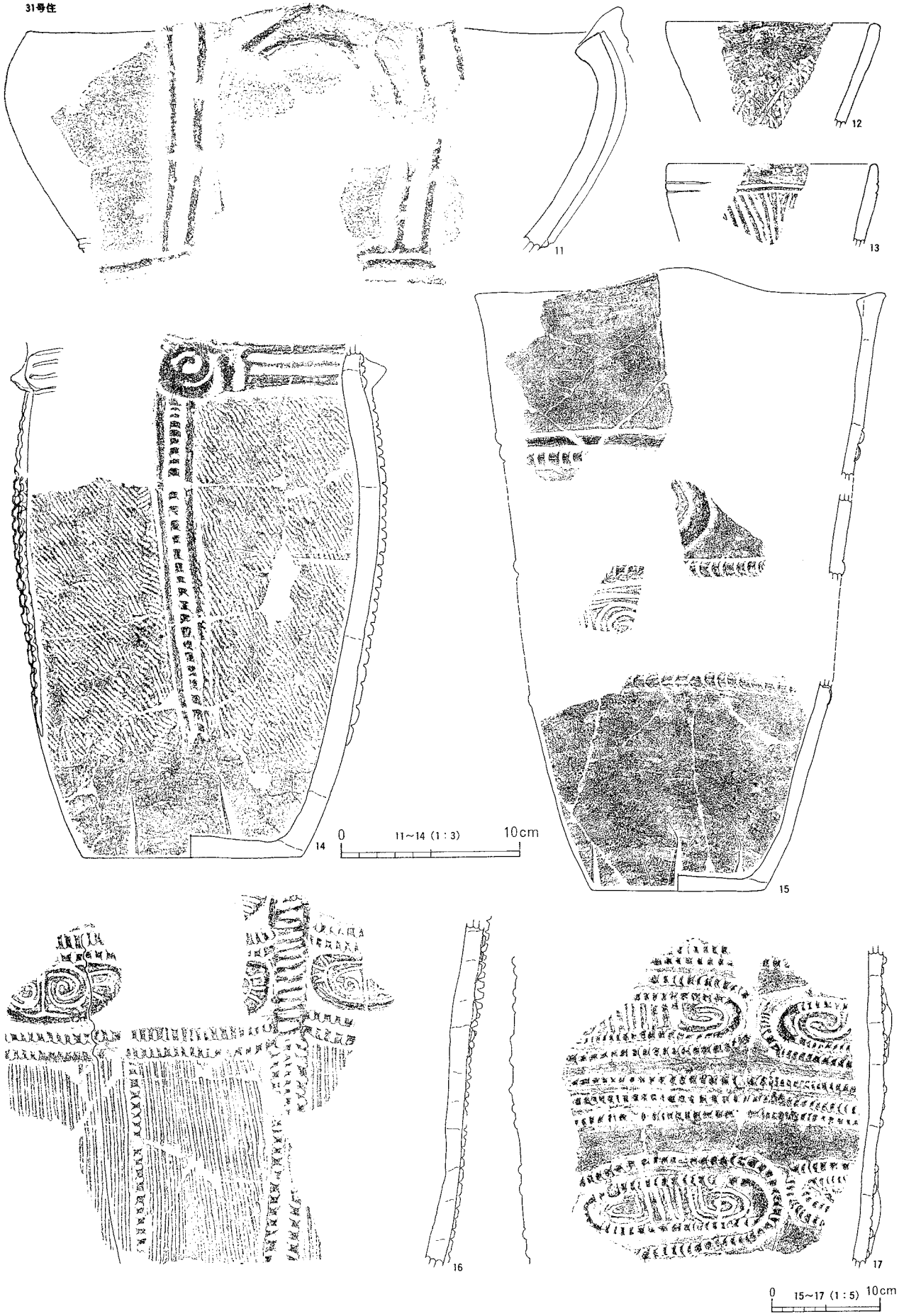
第93図　30号住（1～9）・31号住（1・2）出土遺物実測図



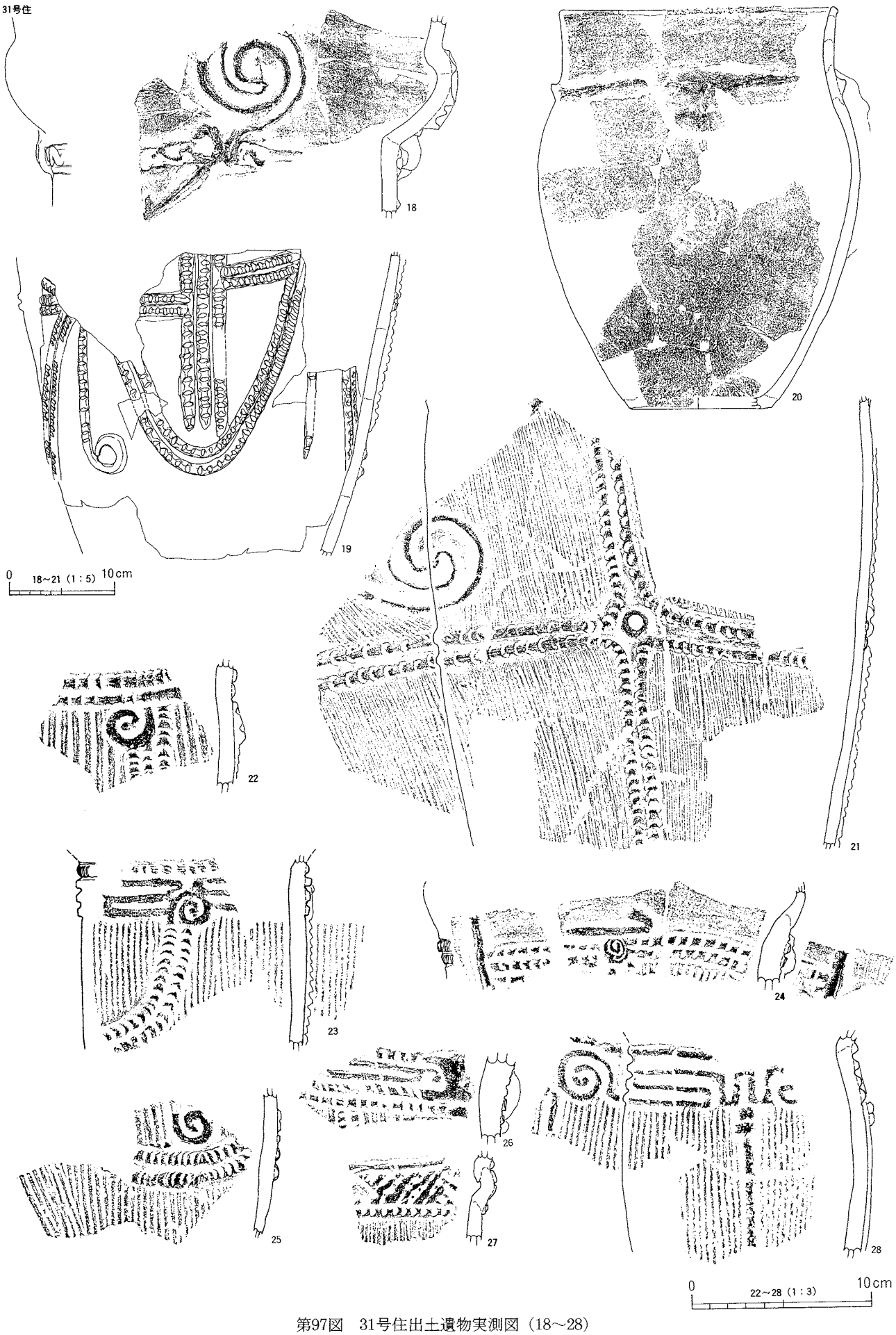
第94図　31号住出土遺物実測図（3～6）



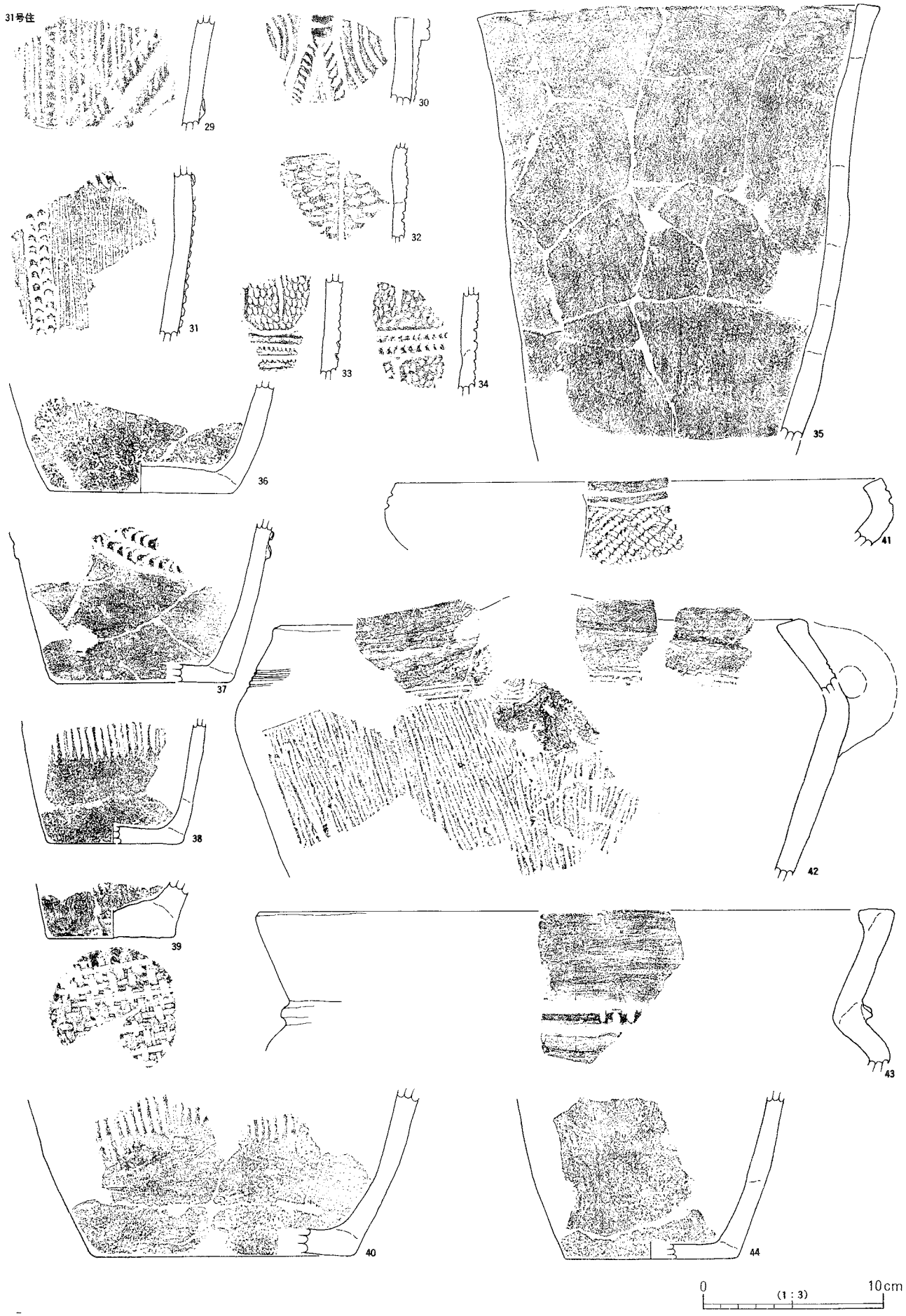
第95図　31号住出土遺物実測図（7～10）



第96図　31号住出土遺物実測図（11～17）

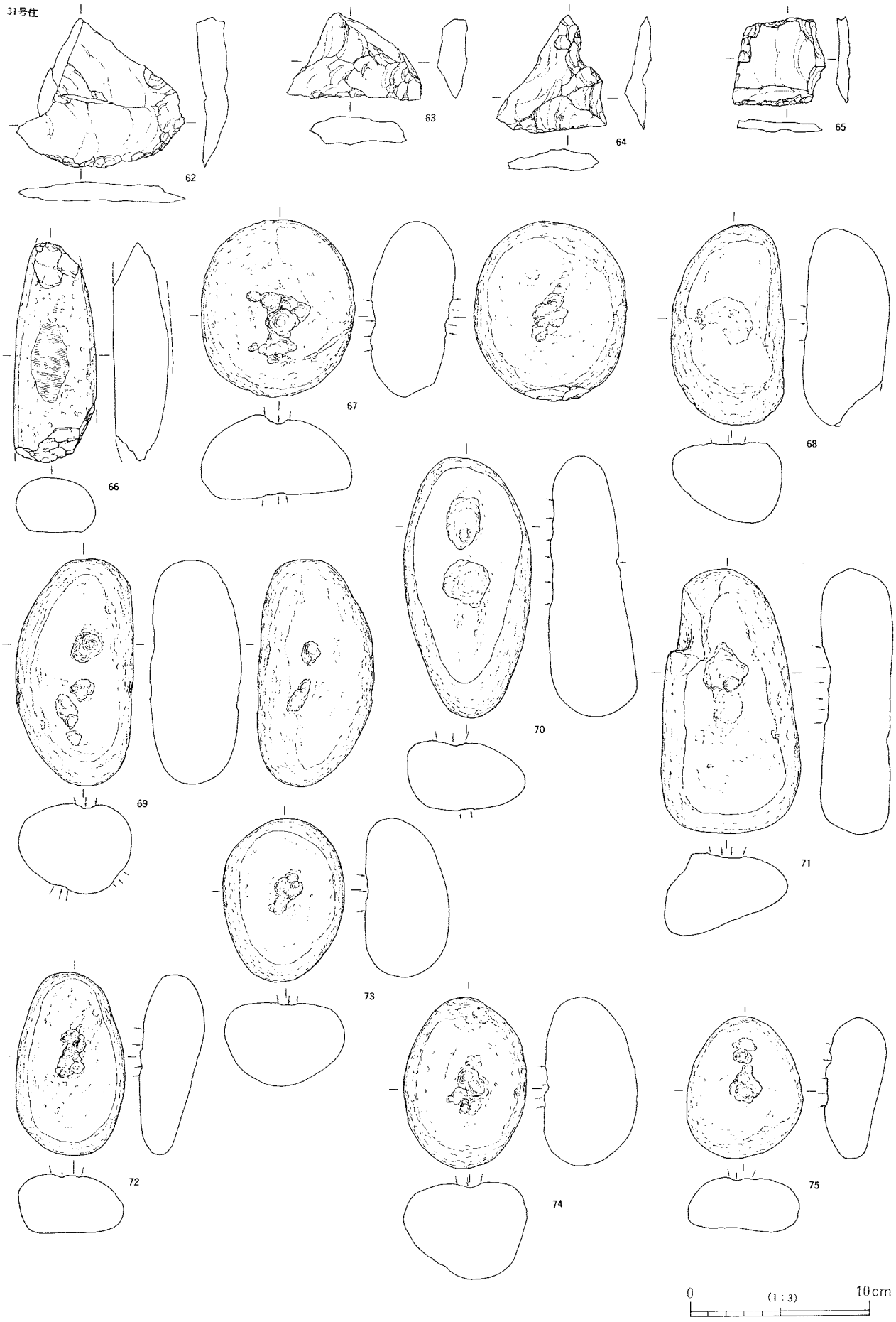


第97図　31号住出土遺物実測図（18～28）

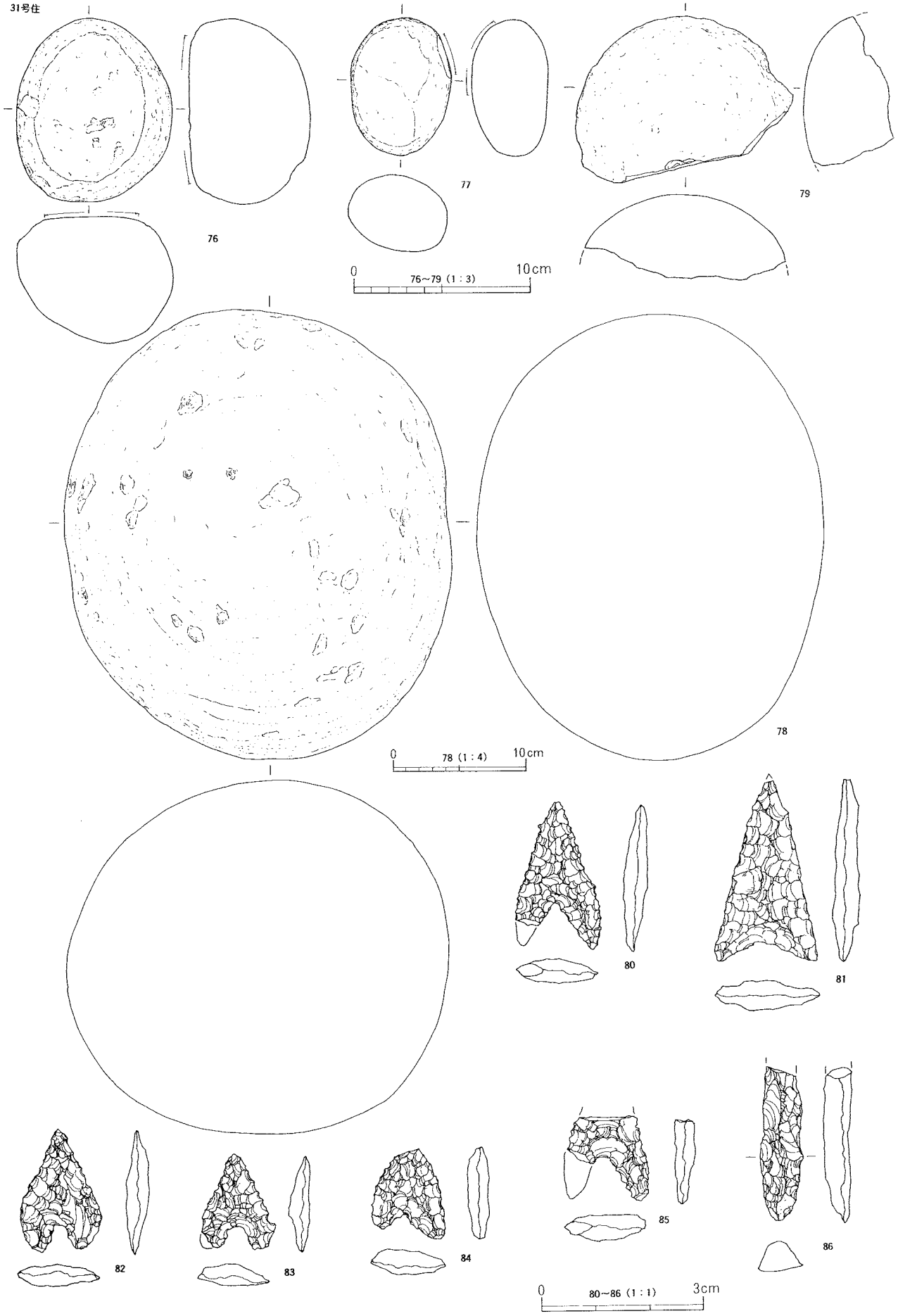


第98図　31号住出土遺物実測図（29～44）

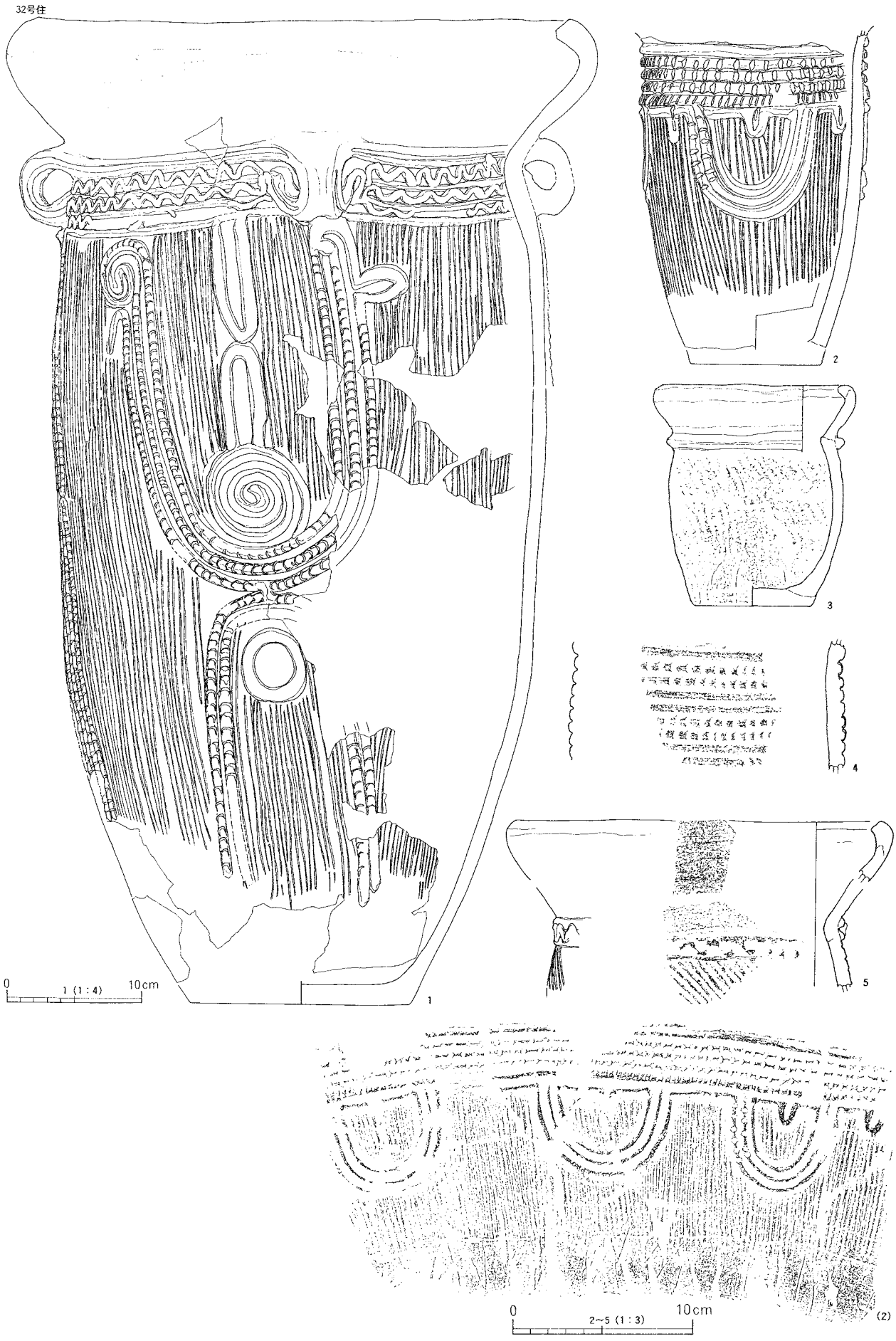
第99図　31号住出土遺物実測図（45～61）



第100図　31号住出土遺物実測図（62～75）

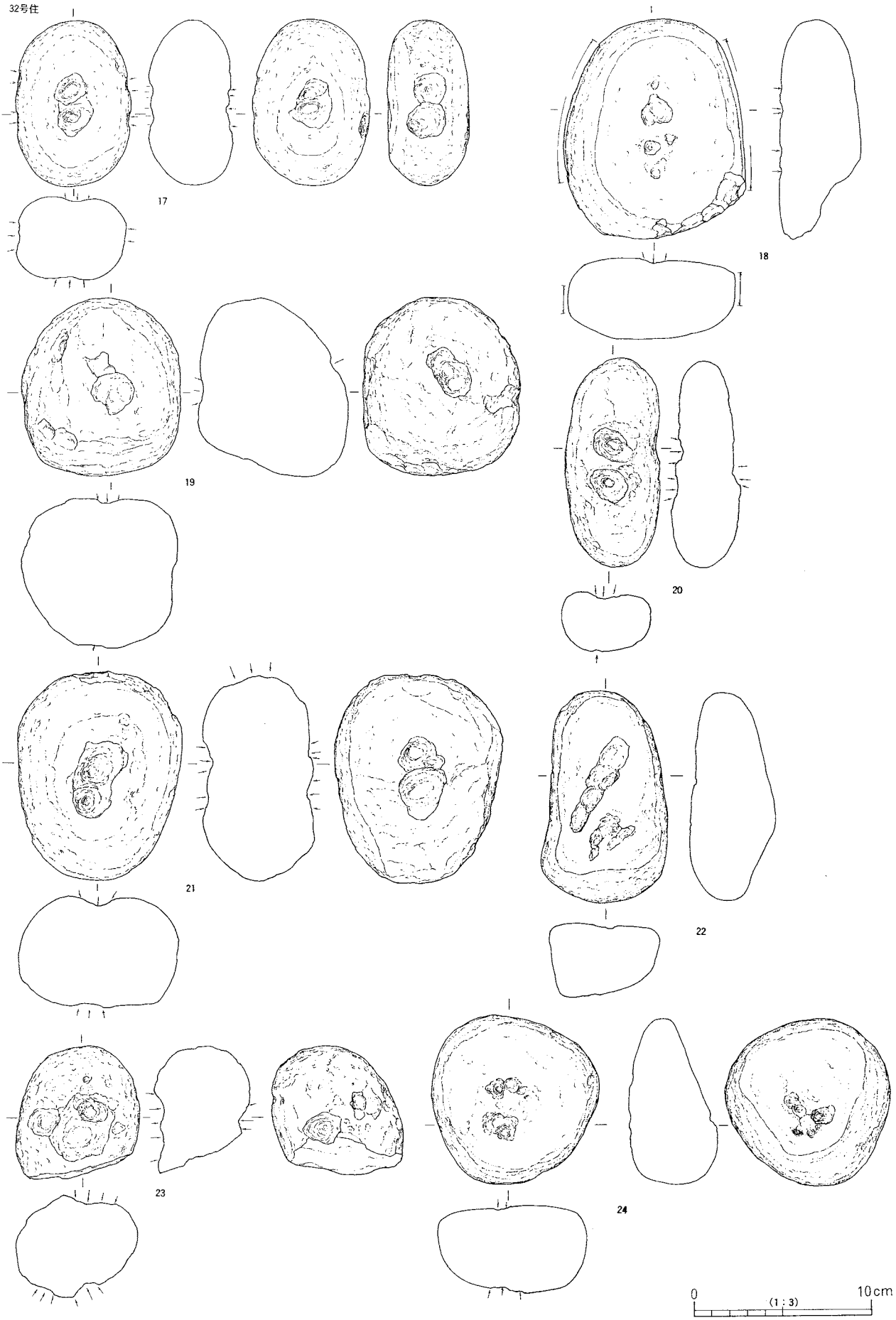


第101図　31号住出土遺物実測図（76～86）

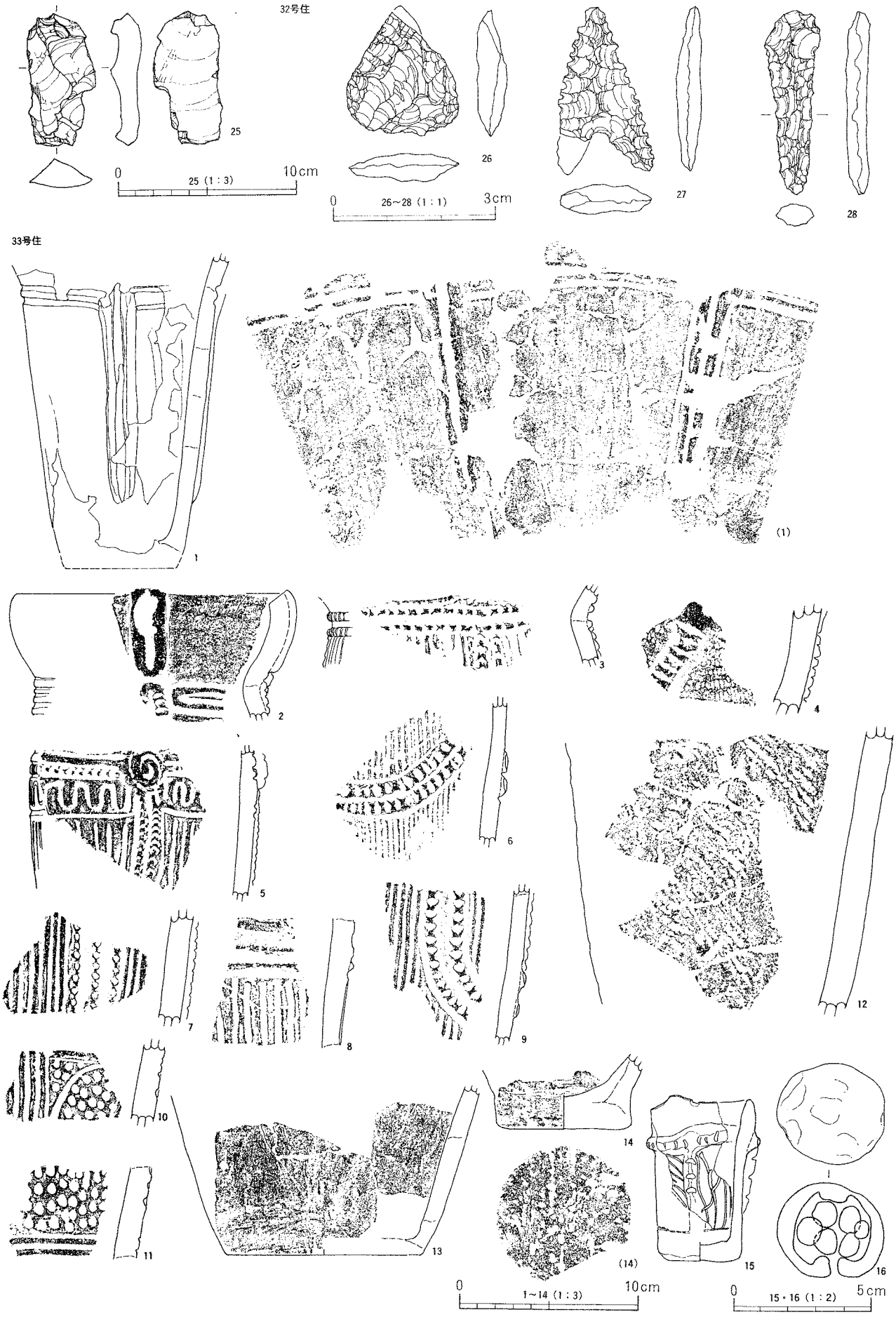


第102図　32号住出土遺物実測図（1～5）

第103図　32号住出土遺物実測図（6～16）

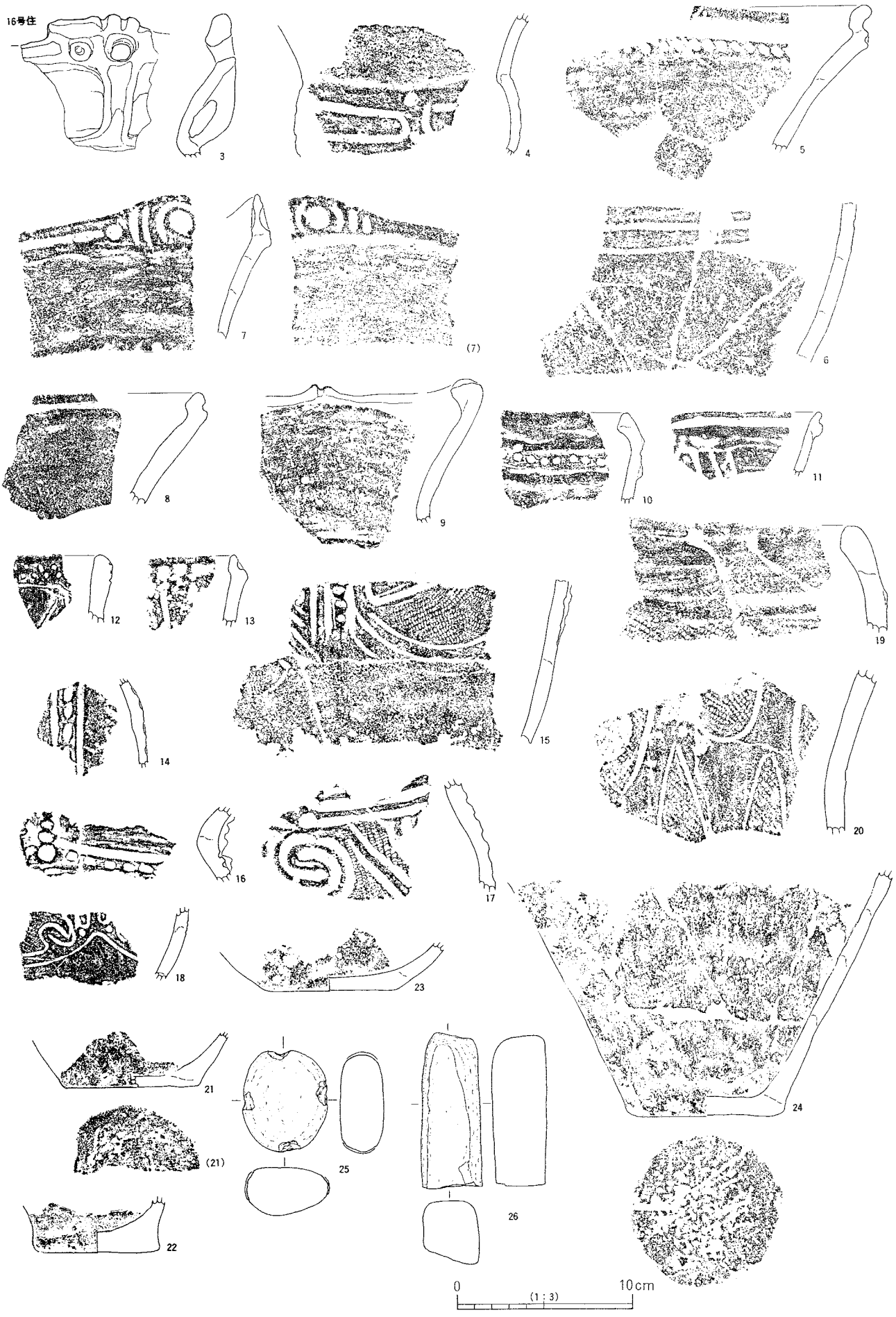


第104図　32号住出土遺物実測図（17～24）

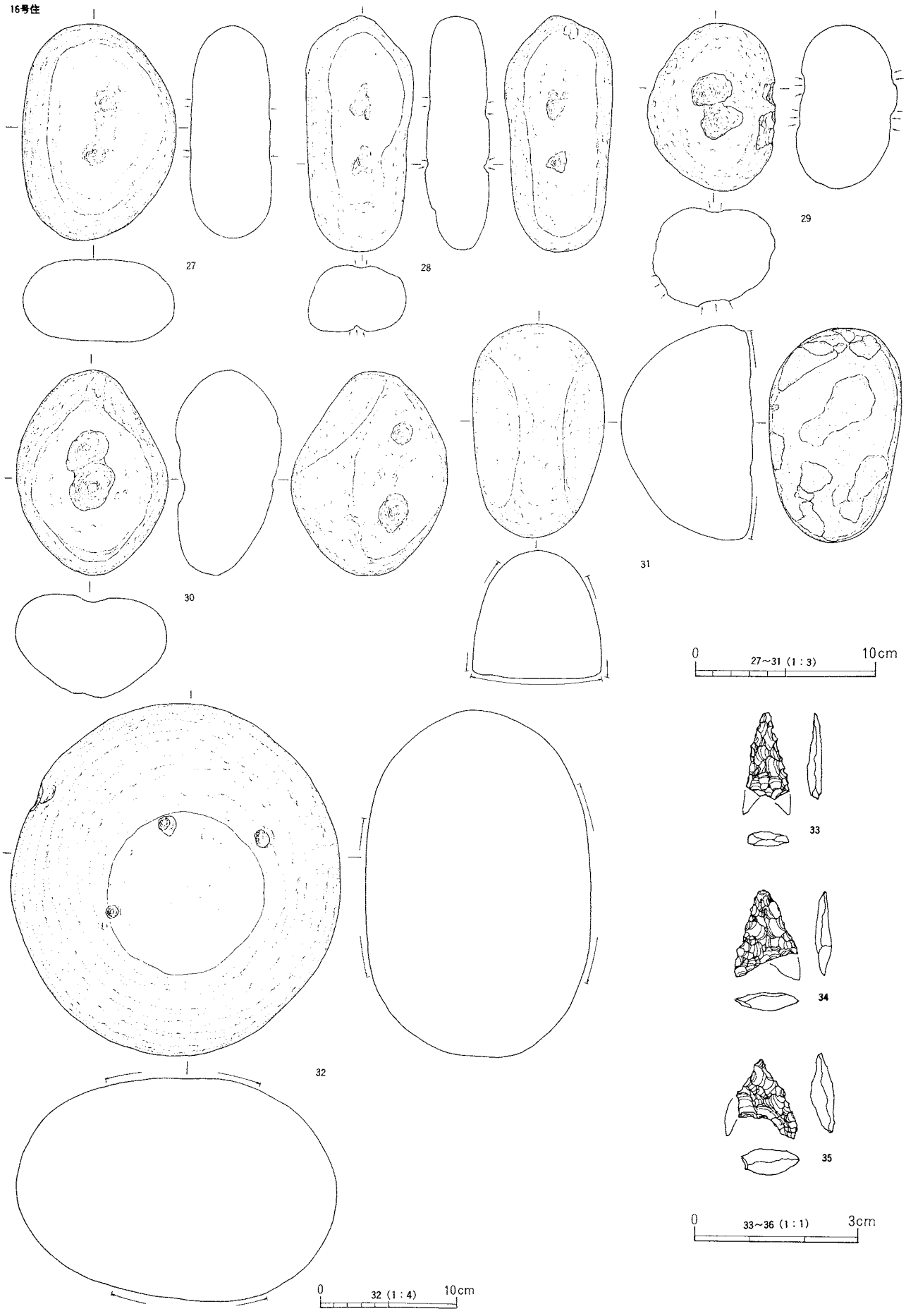


第105図　32号住（25～28）・33号住（1～16）出土遺物実測図

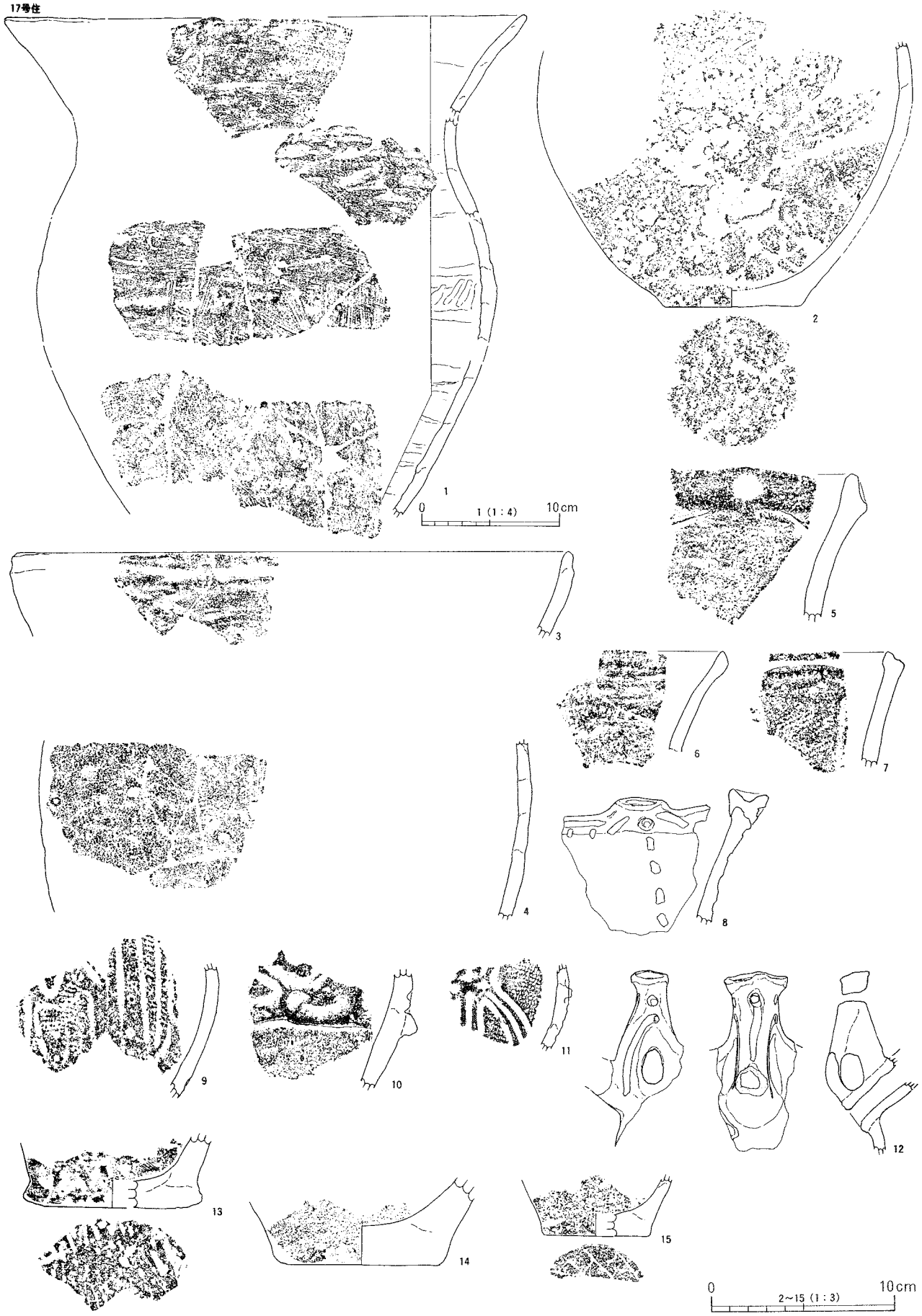
第106図　33号住（17～20）・36号住（1～3）・16号住（1・2）出土遺物実測図



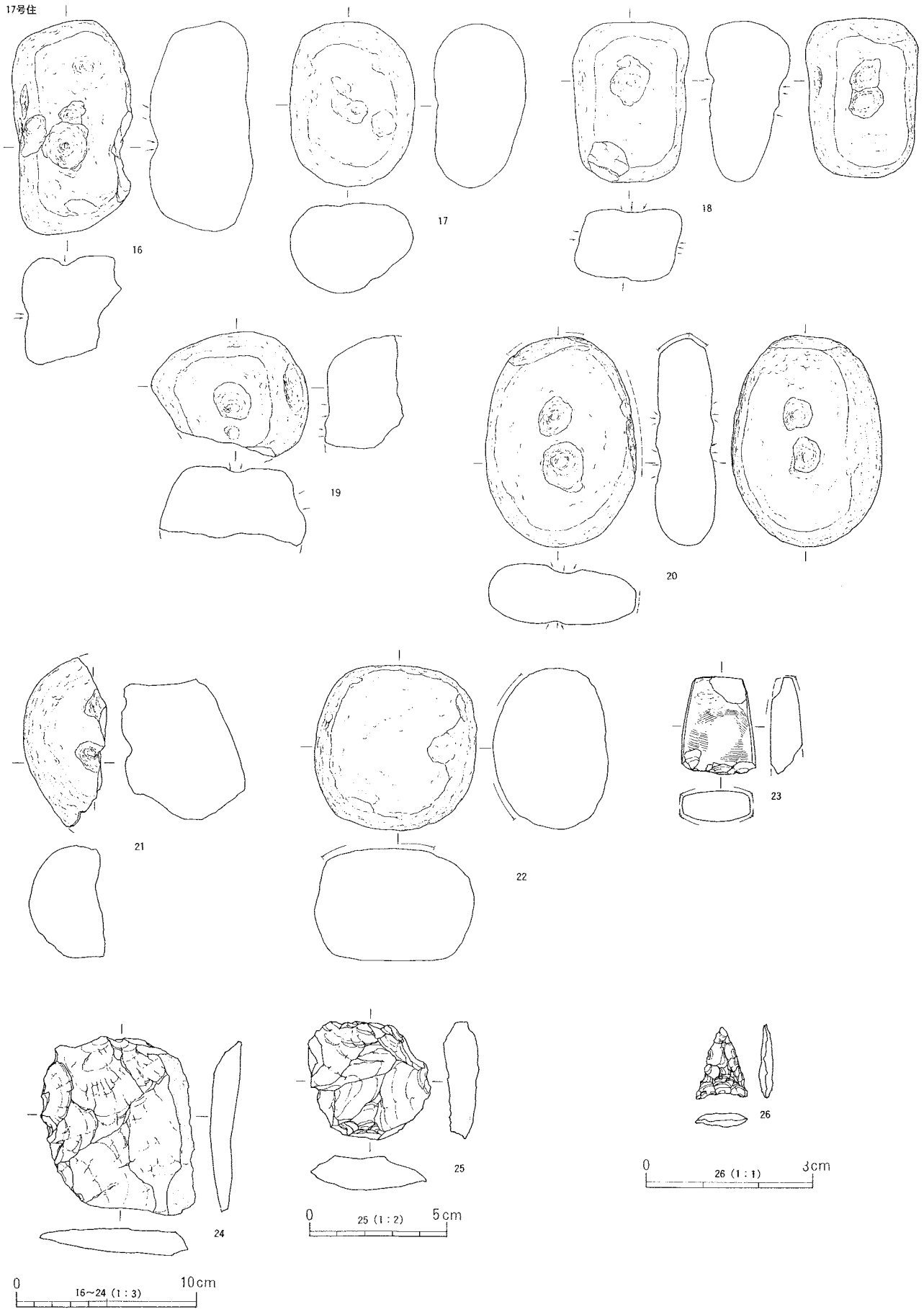
第107図　16号住出土遺物実測図（3～26）



第108図　16号住出土遺物実測図（27～35）

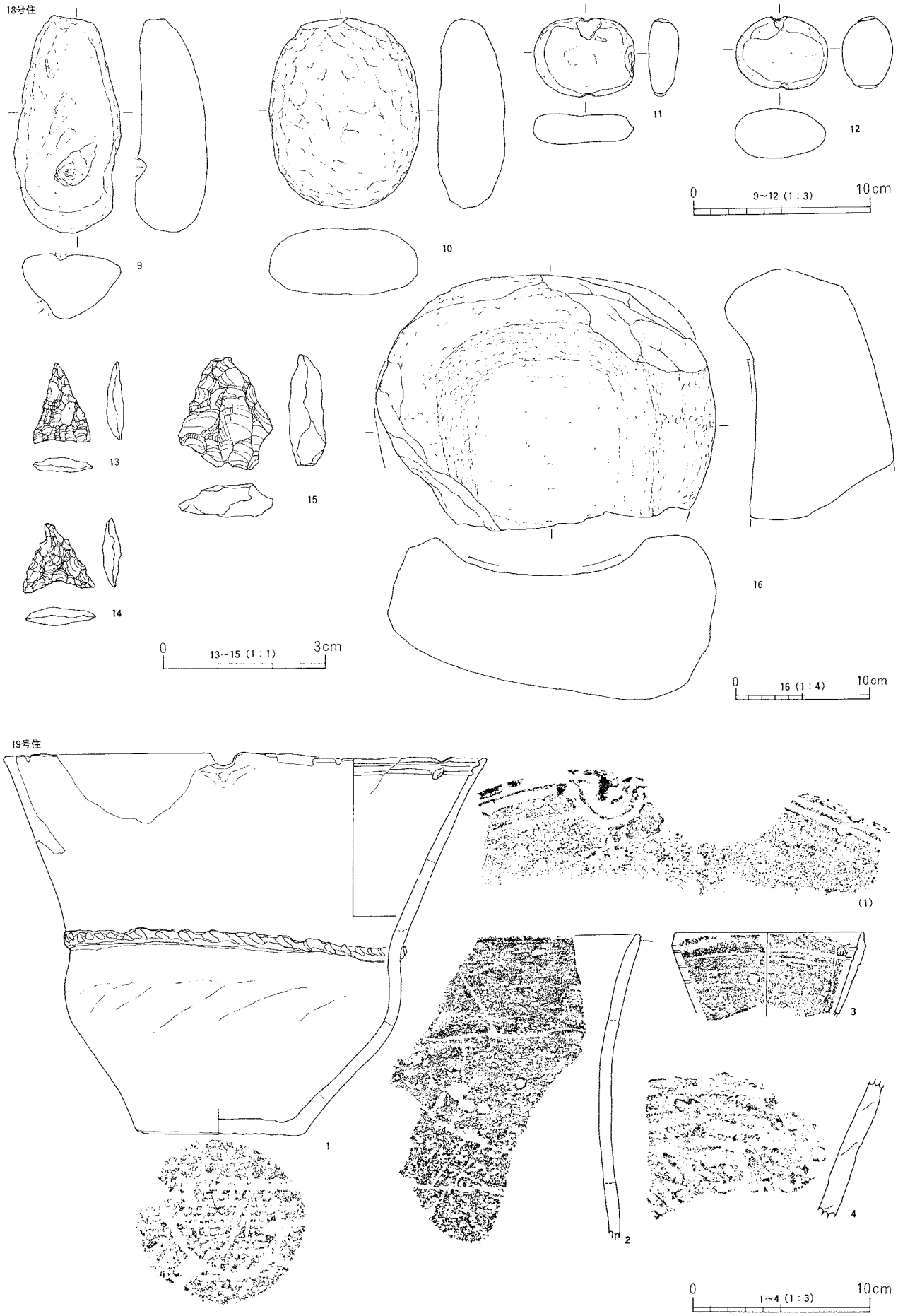


第109図　17号住出土遺物実測図（1～15）

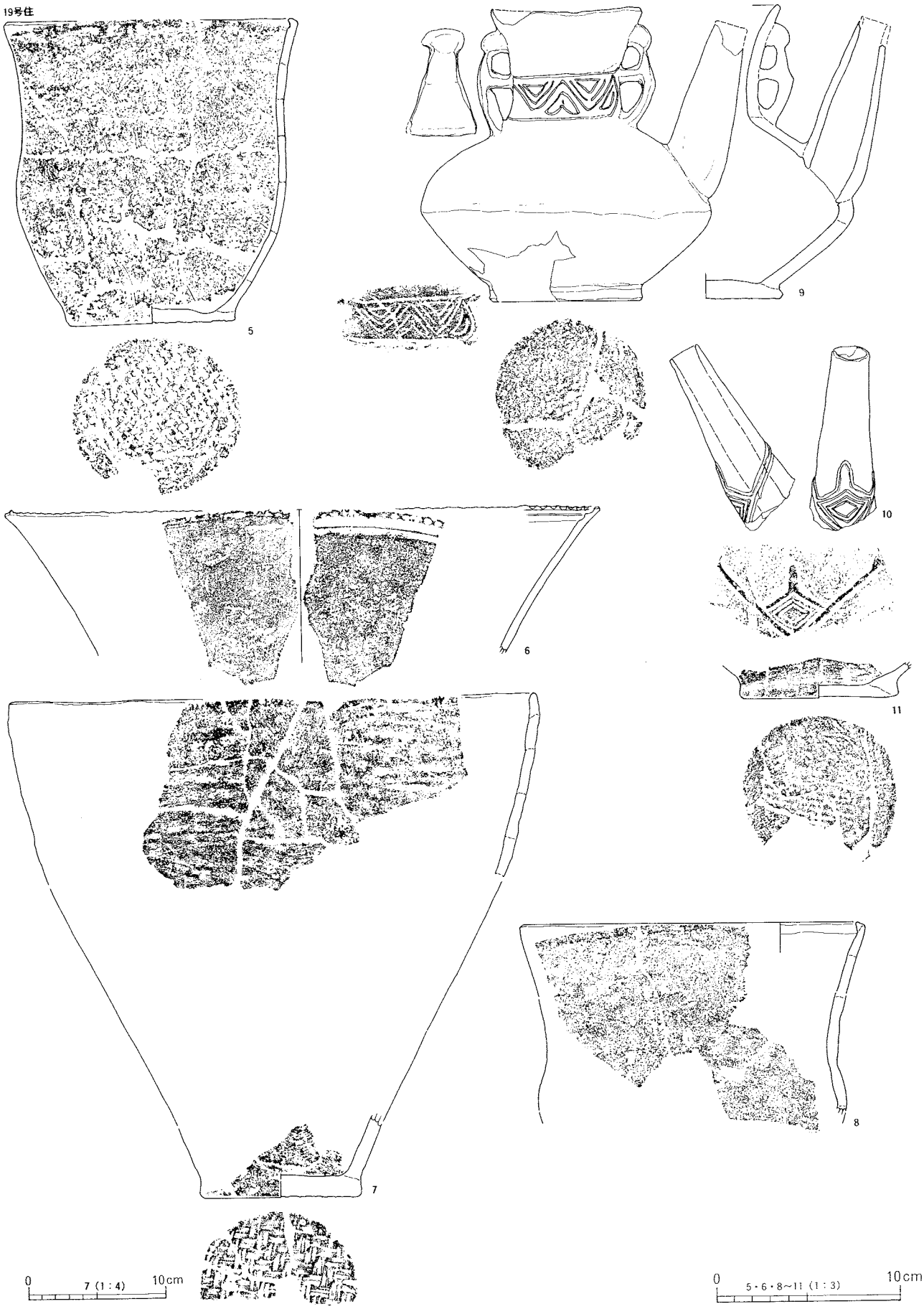


第110図　17号住出土遺物実測図（16～26）

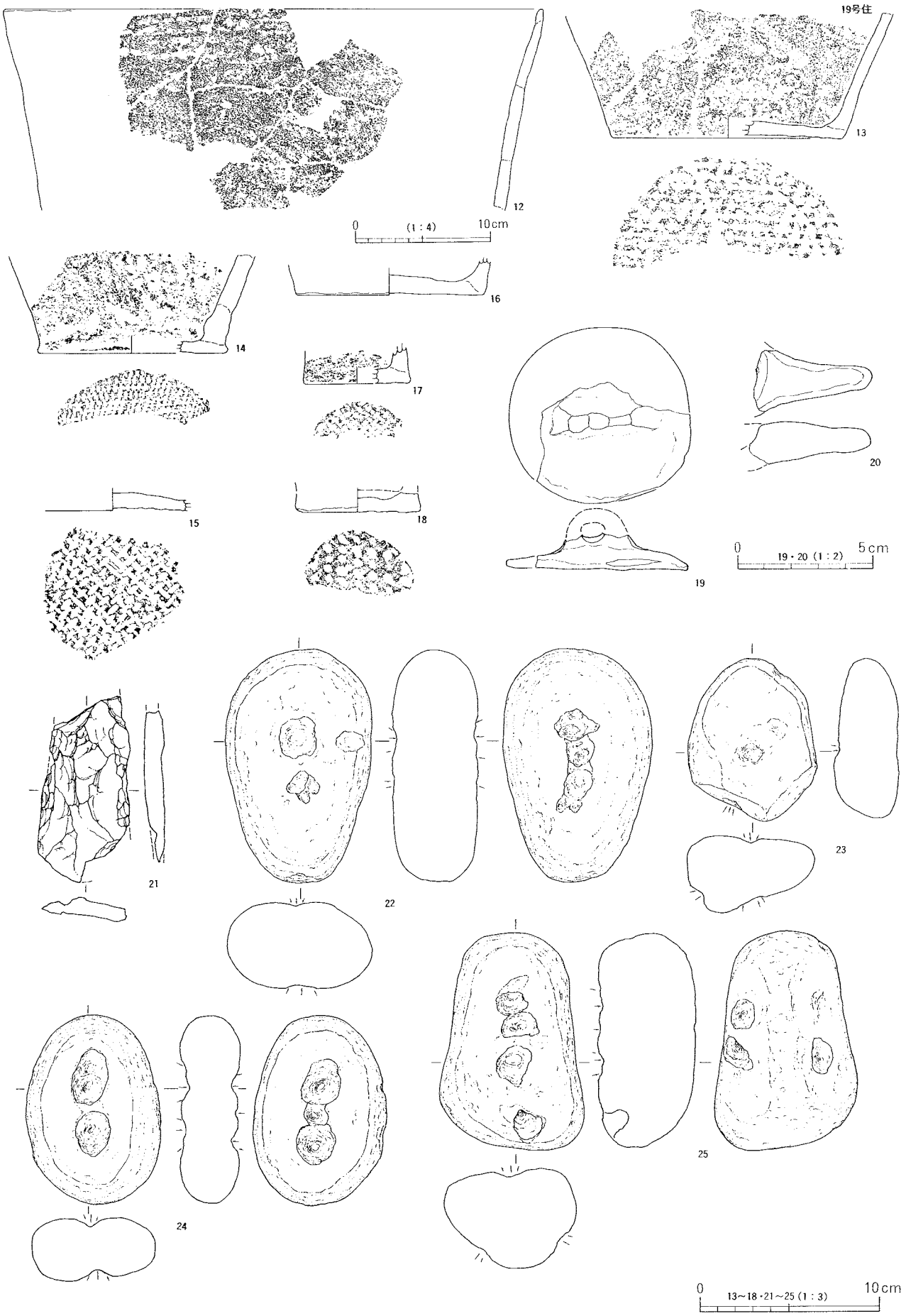
第111図　18号住出土遺物実測図（1～8）



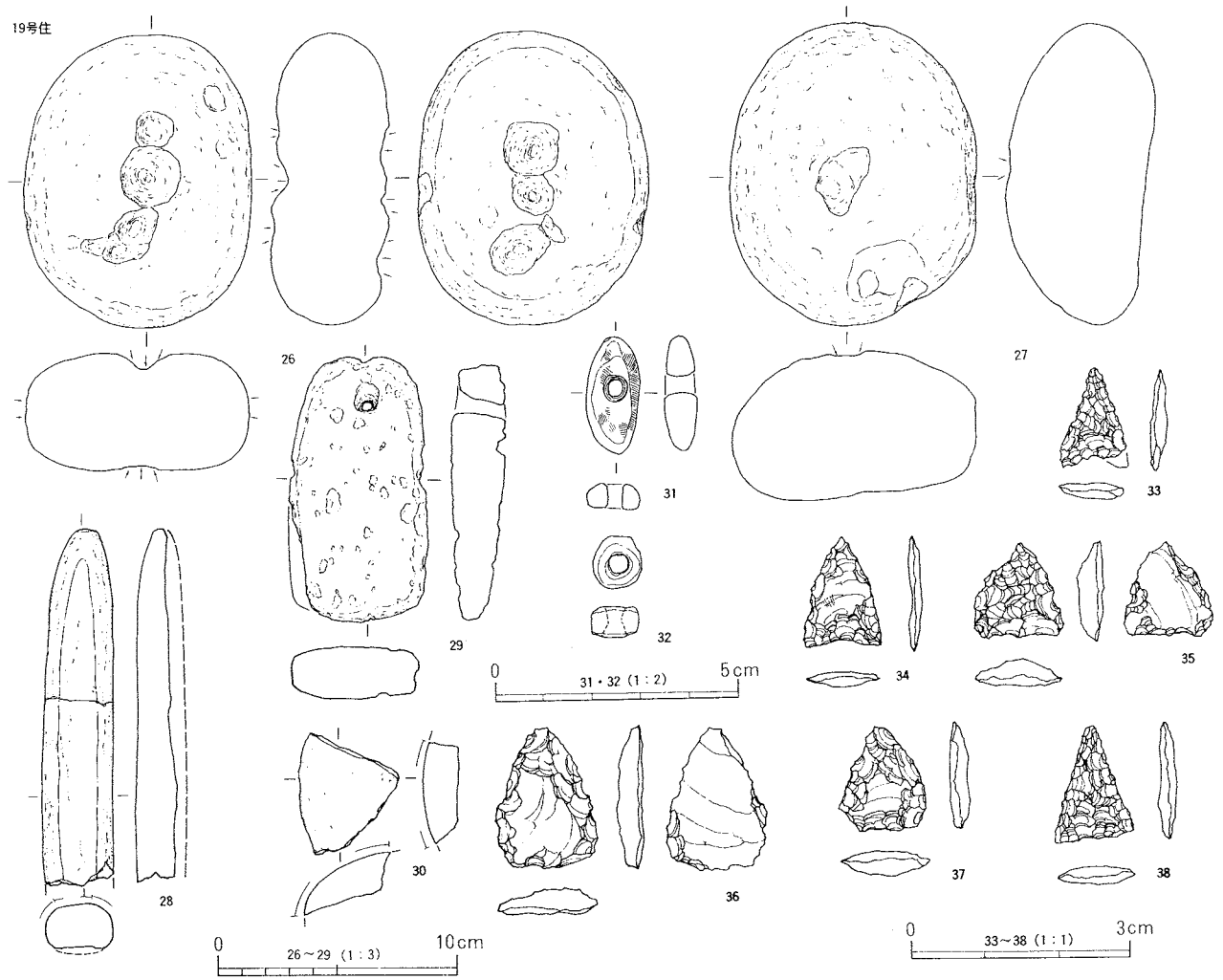
第112図　18号住（9～16）・19号住（1～4）出土遺物実測図



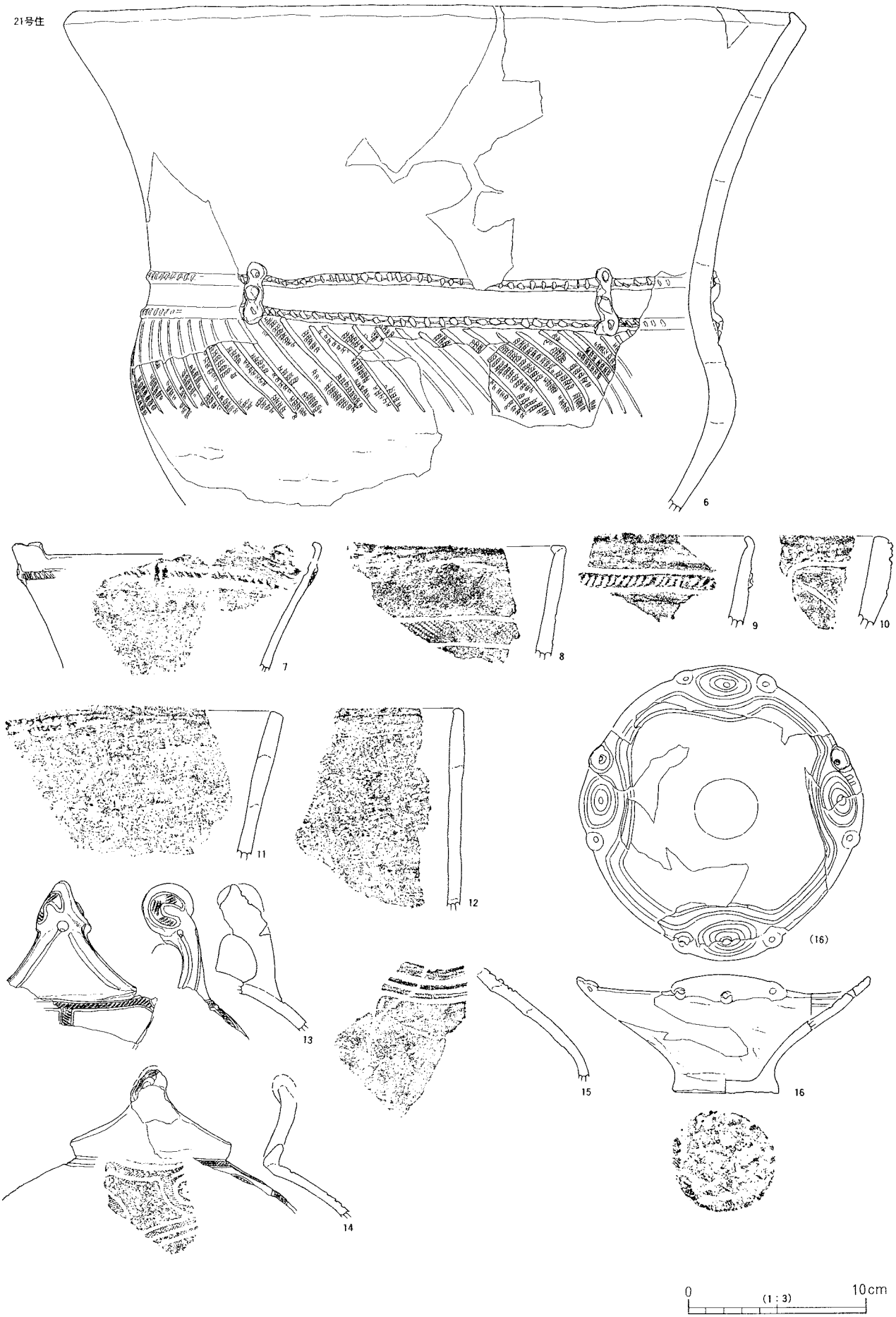
第113図　19号住出土遺物実測図（5～8）



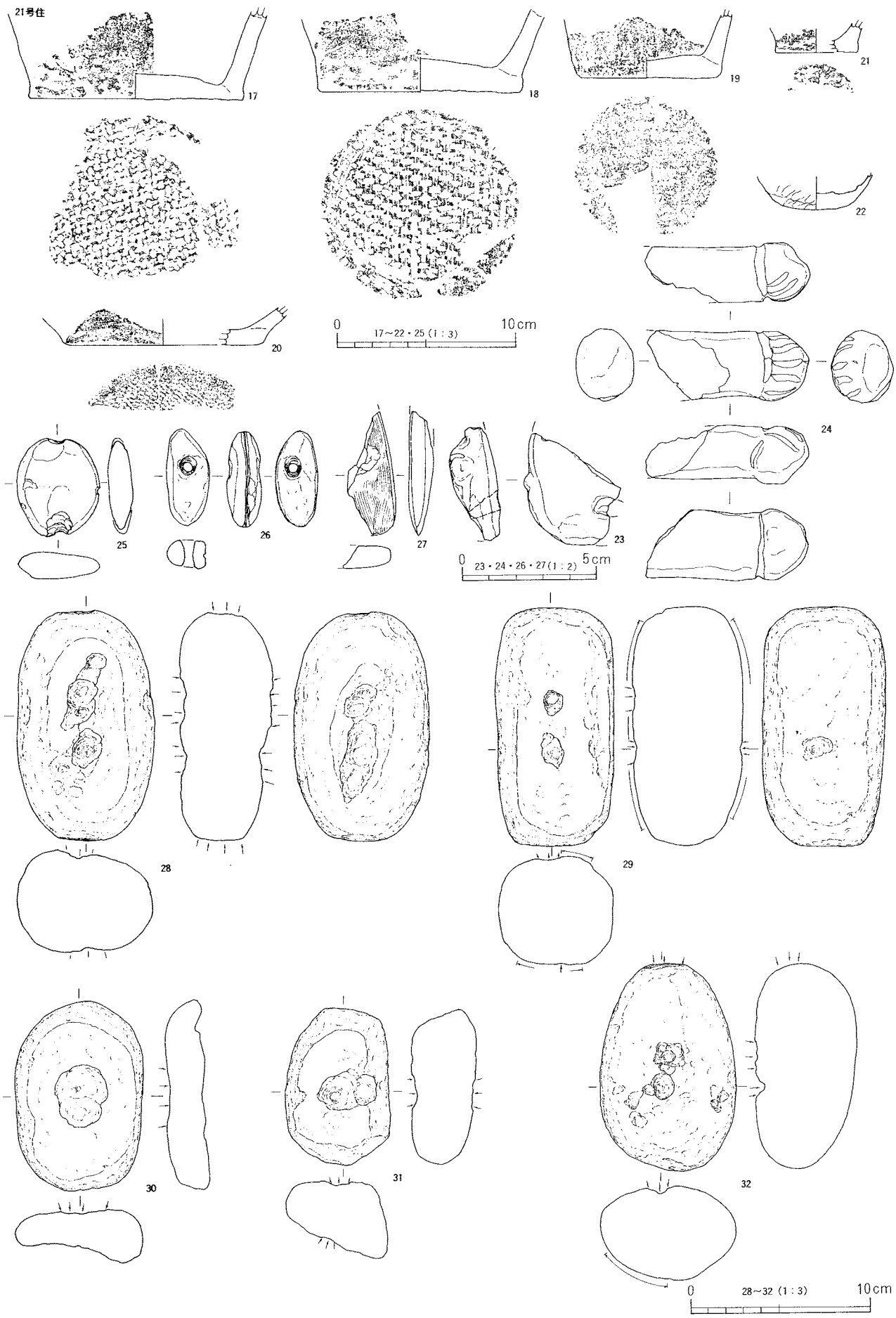
第114図　19号住出土遺物実測図（12～25）



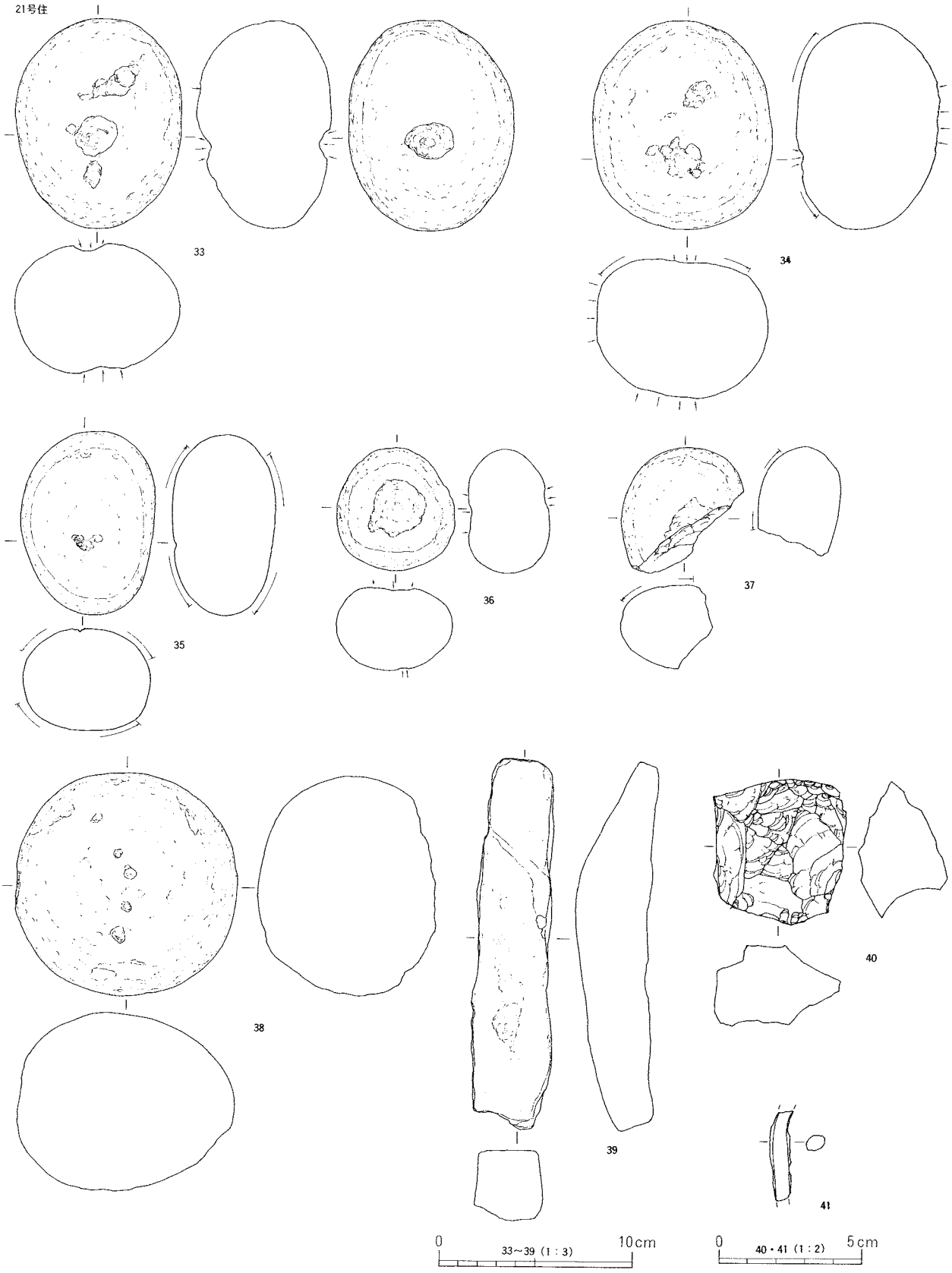
第115図　19号住（26～38）・21号住（1～5）出土遺物実測図



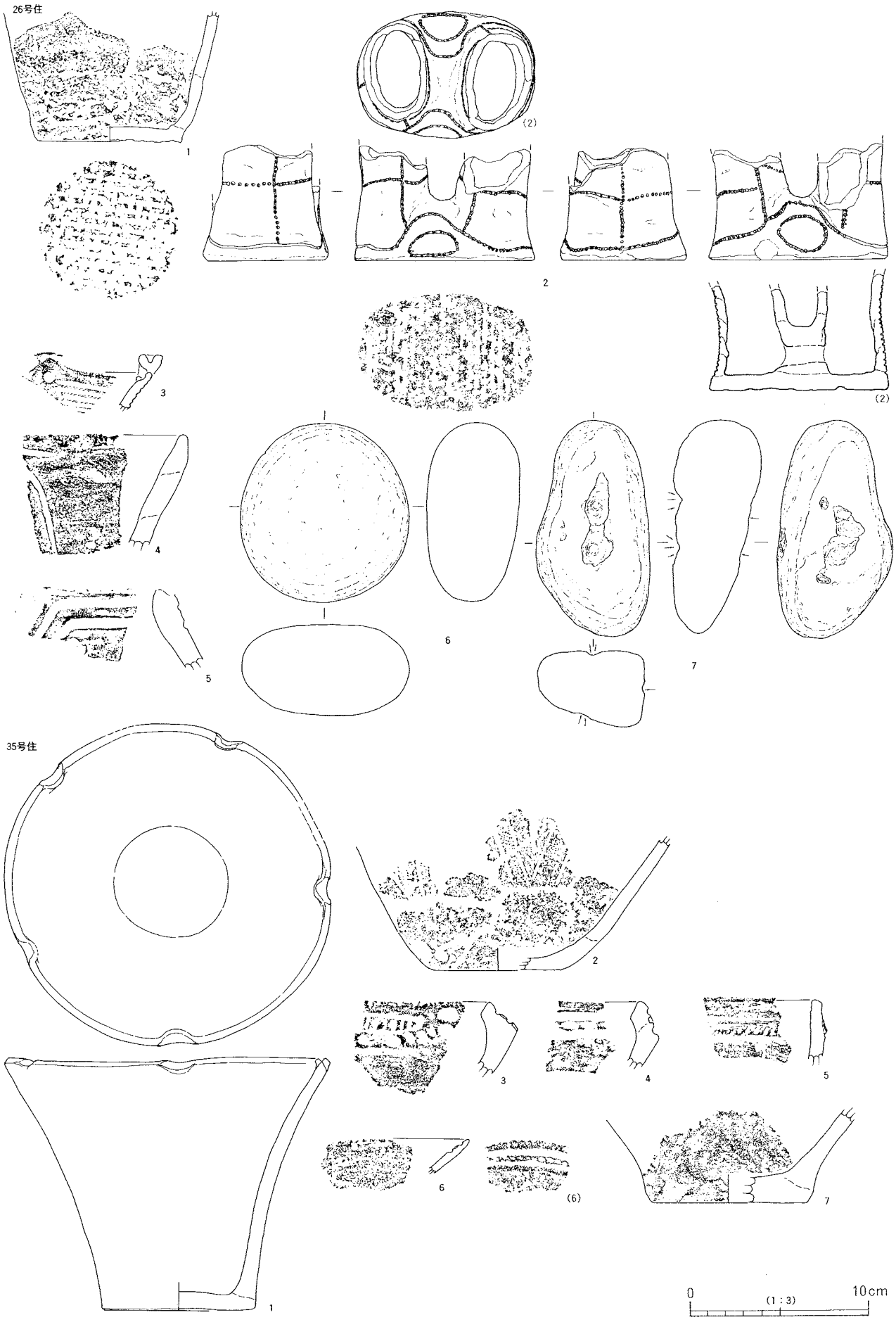
第116図　21号住出土遺物実測図（6～16）



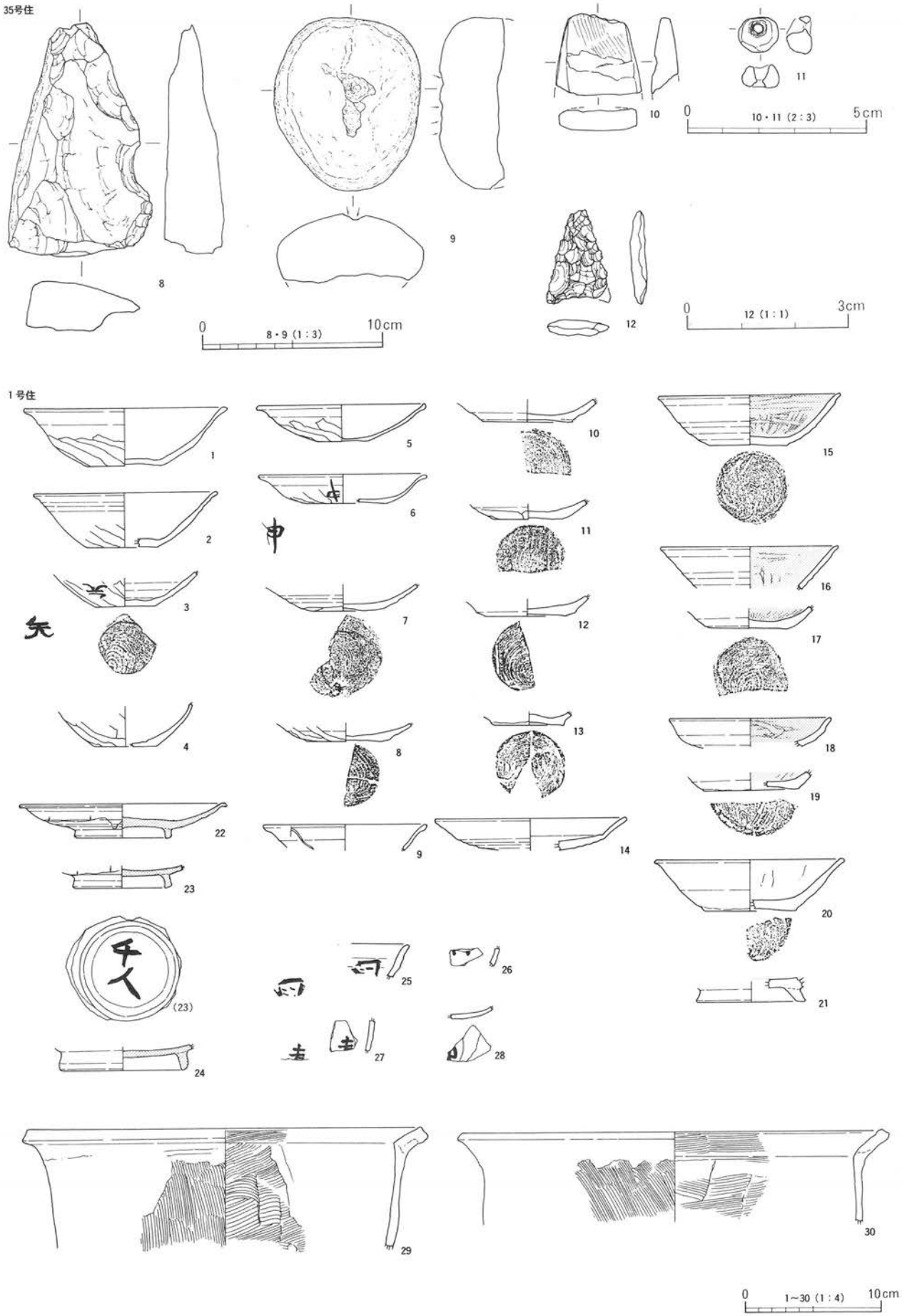
第117図　21号住出土遺物実測図（17～32）



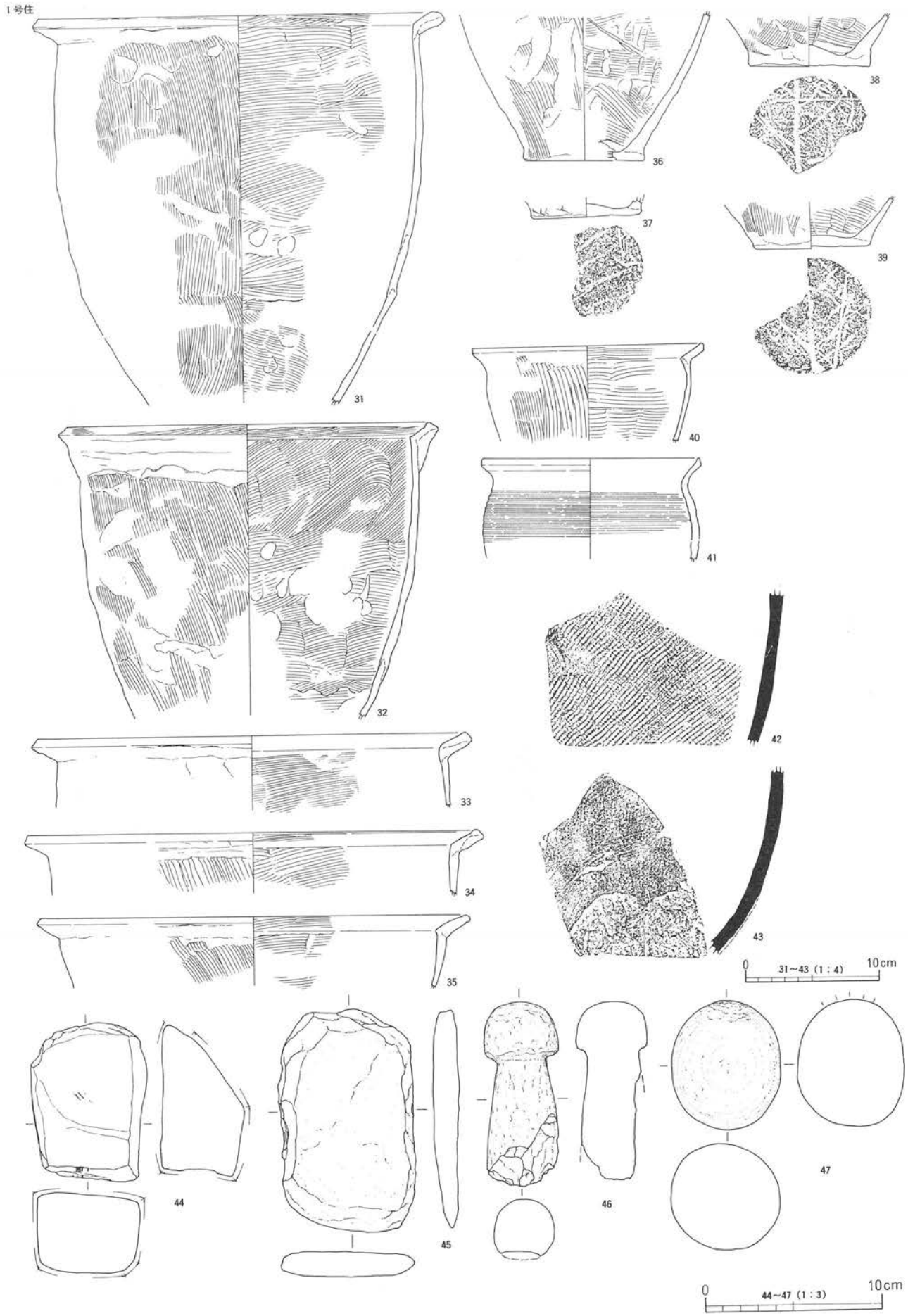
第118図　21号住出土遺物実測図（33～41）



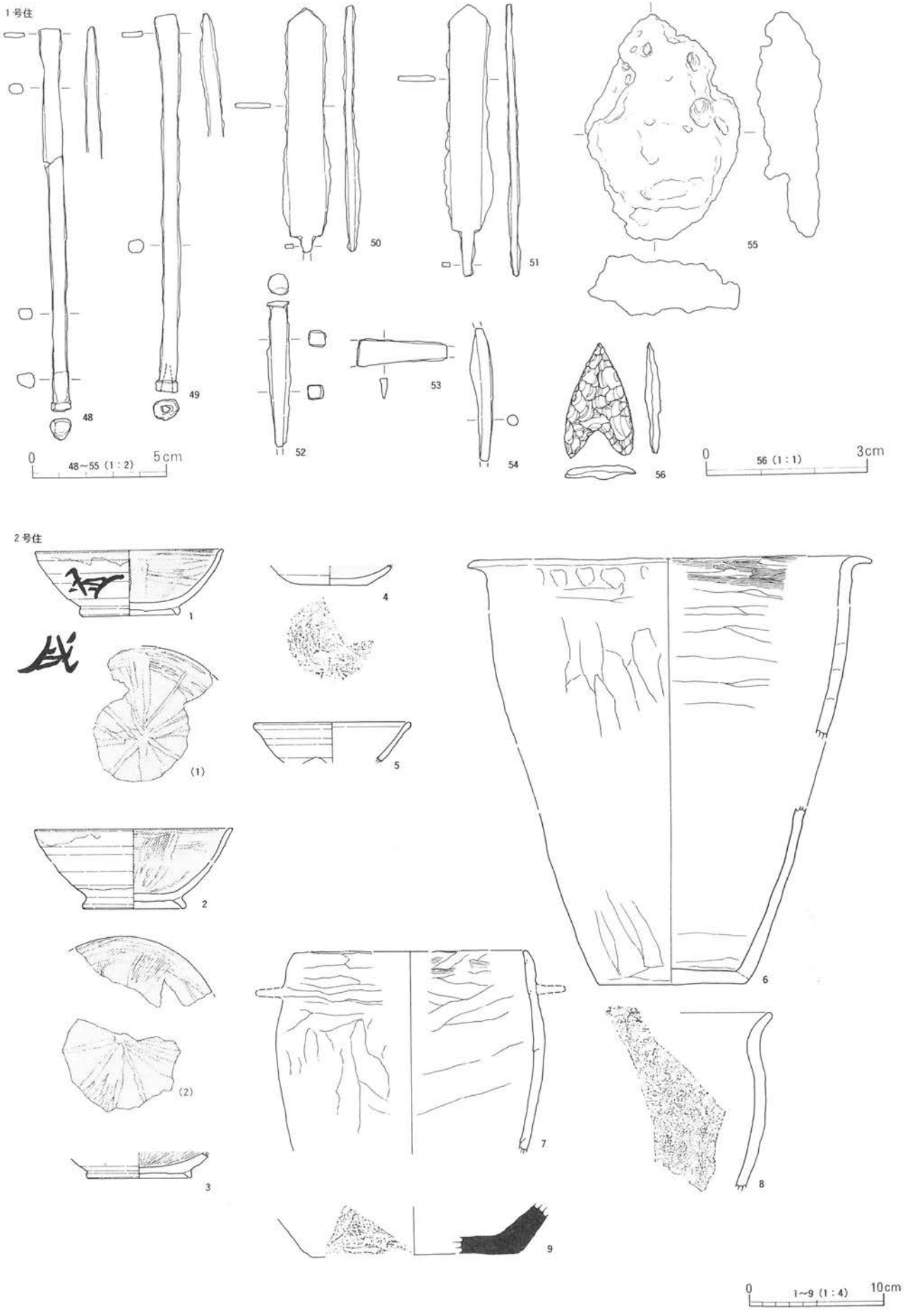
第119図　26号住（1～7）・35号住（1～7）出土遺物実測図



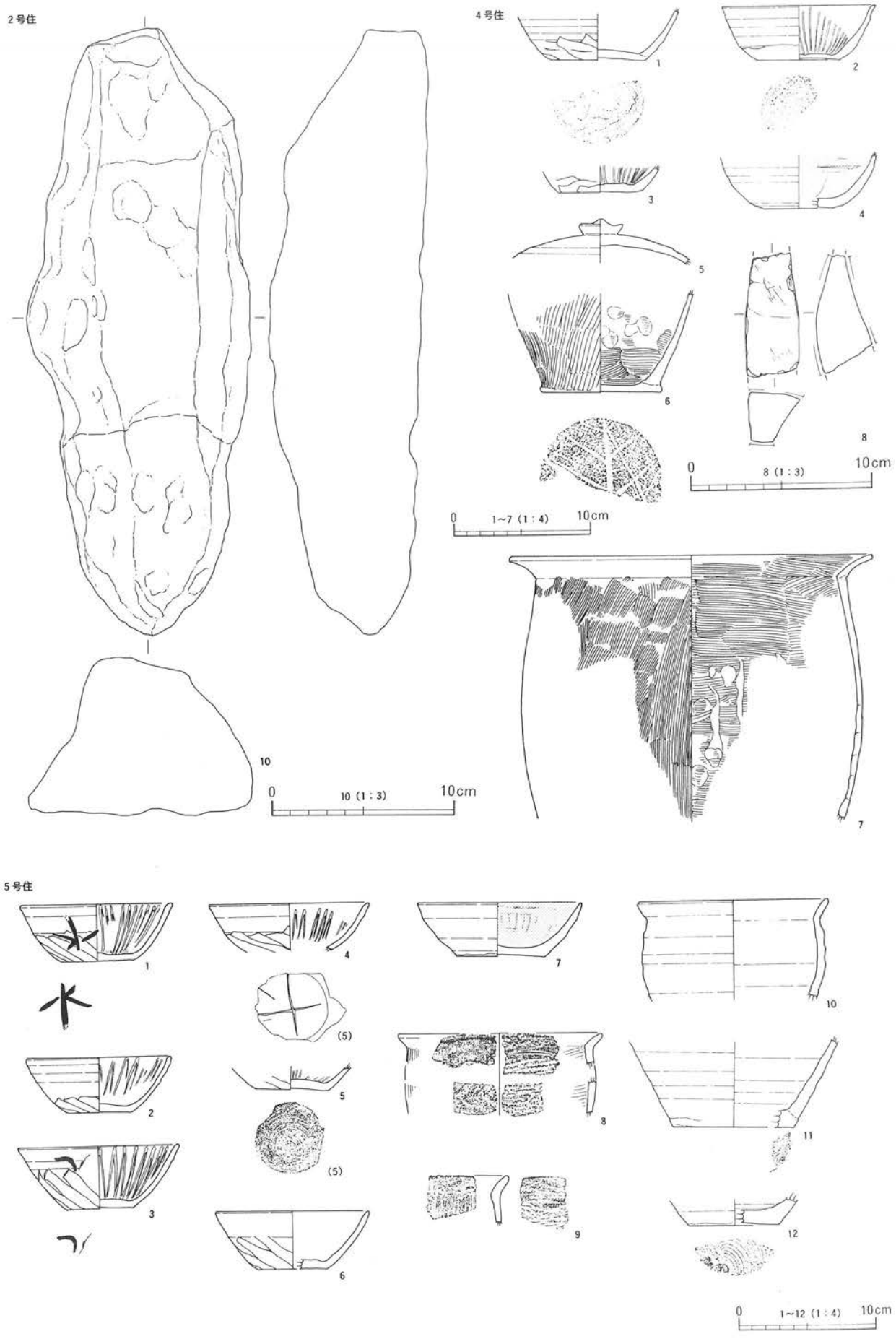
第120図　35号住（8～12）・1号住（1～30）出土遺物実測図



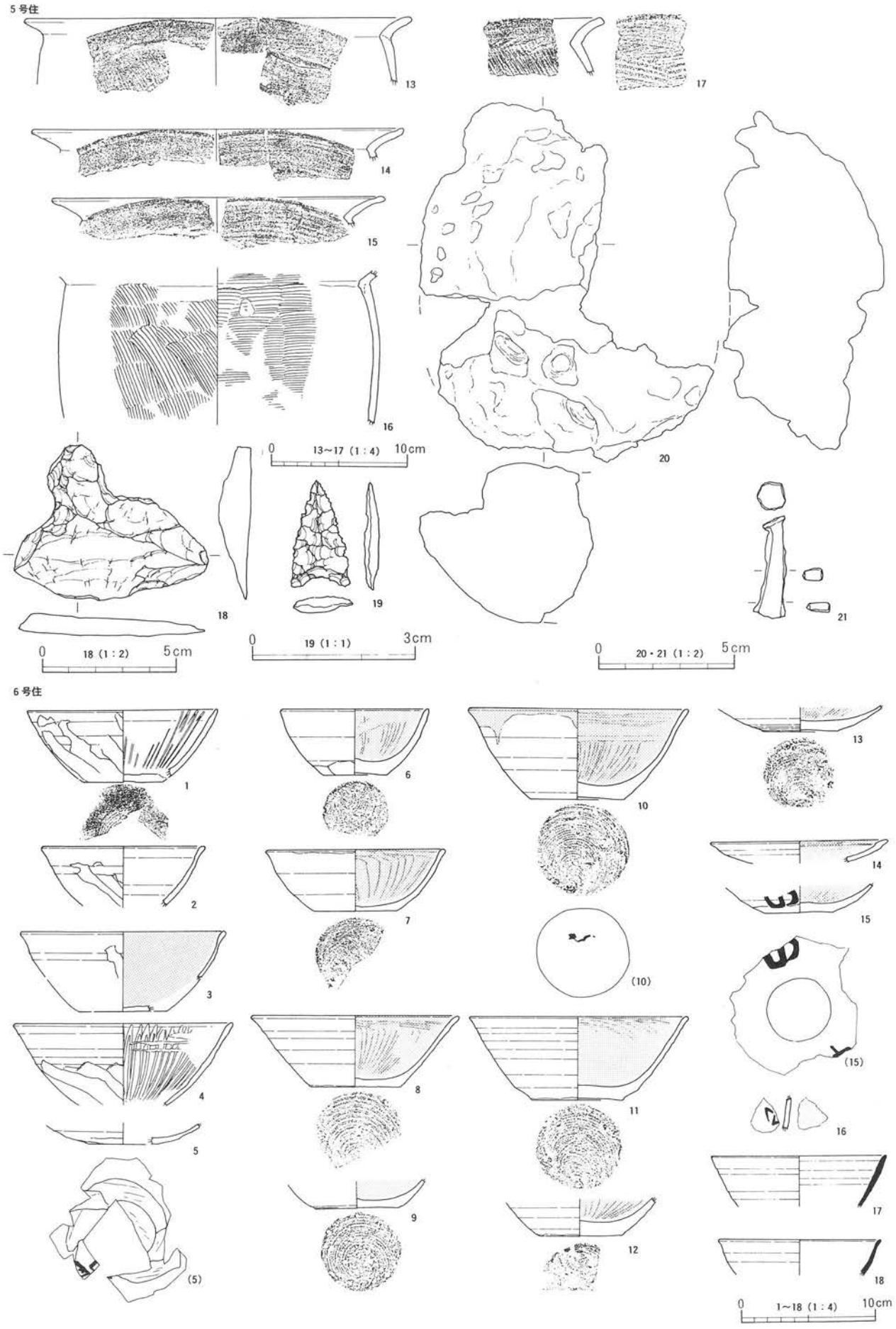
第121図　1号住出土遺物実測図（31～47）



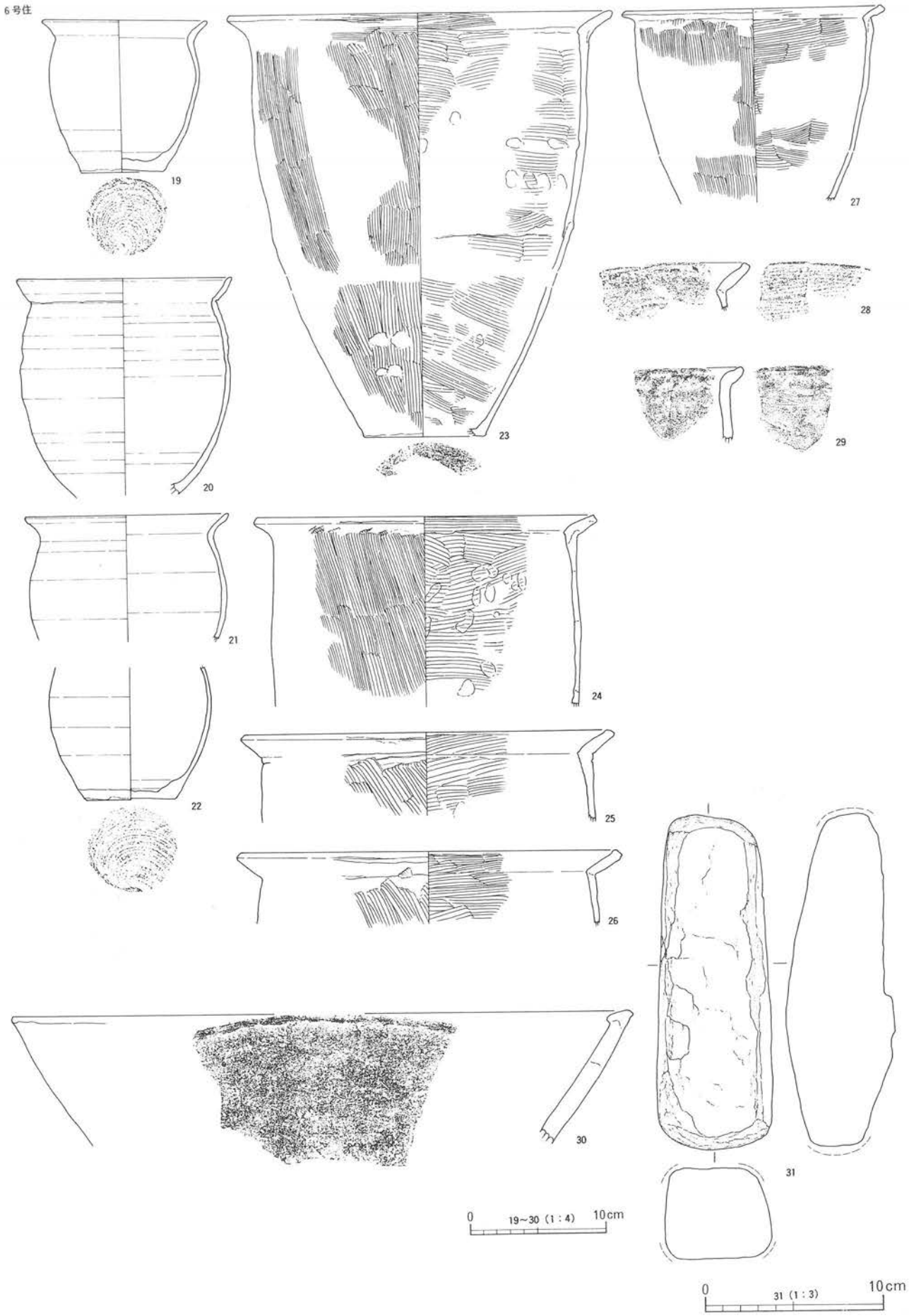
第122図　1号住（48～56）・2号住（1～9）出土遺物実測図



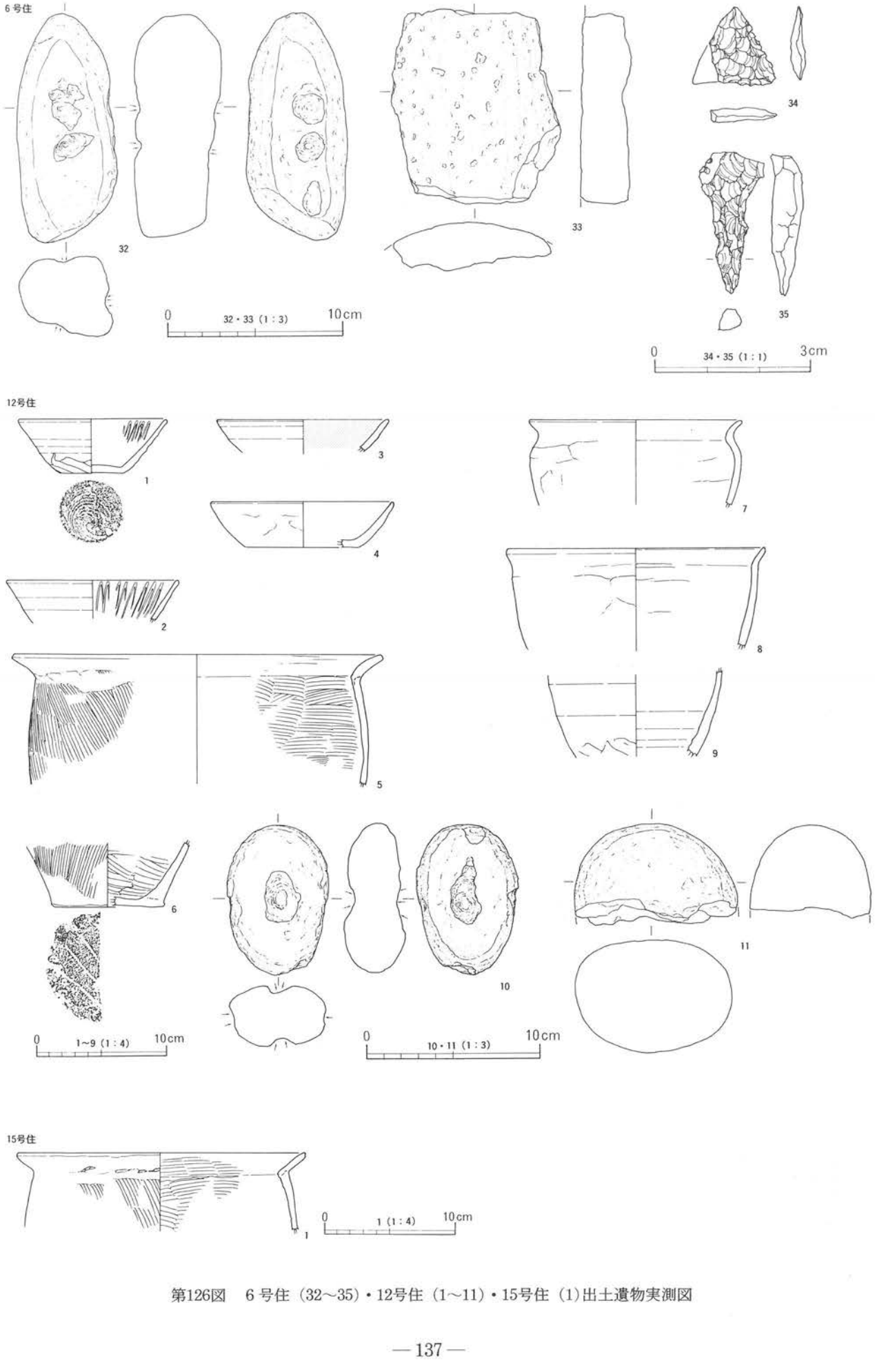
第123図　2号住（10）・4号住（1～8）・5号住（1～12）出土遺物実測図



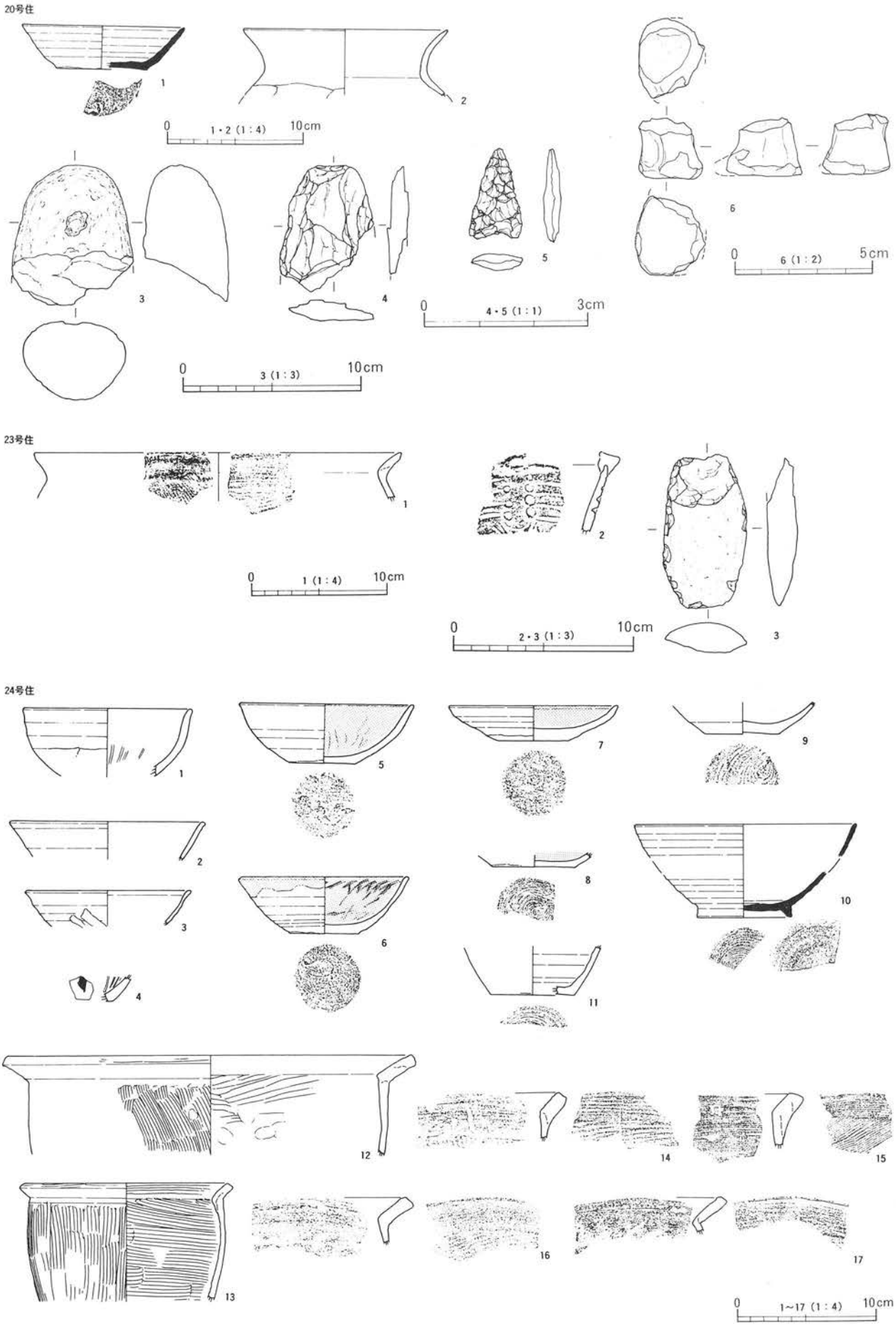
第124図　5号住（13～21）・6号住（1～18)出土遺物実測図



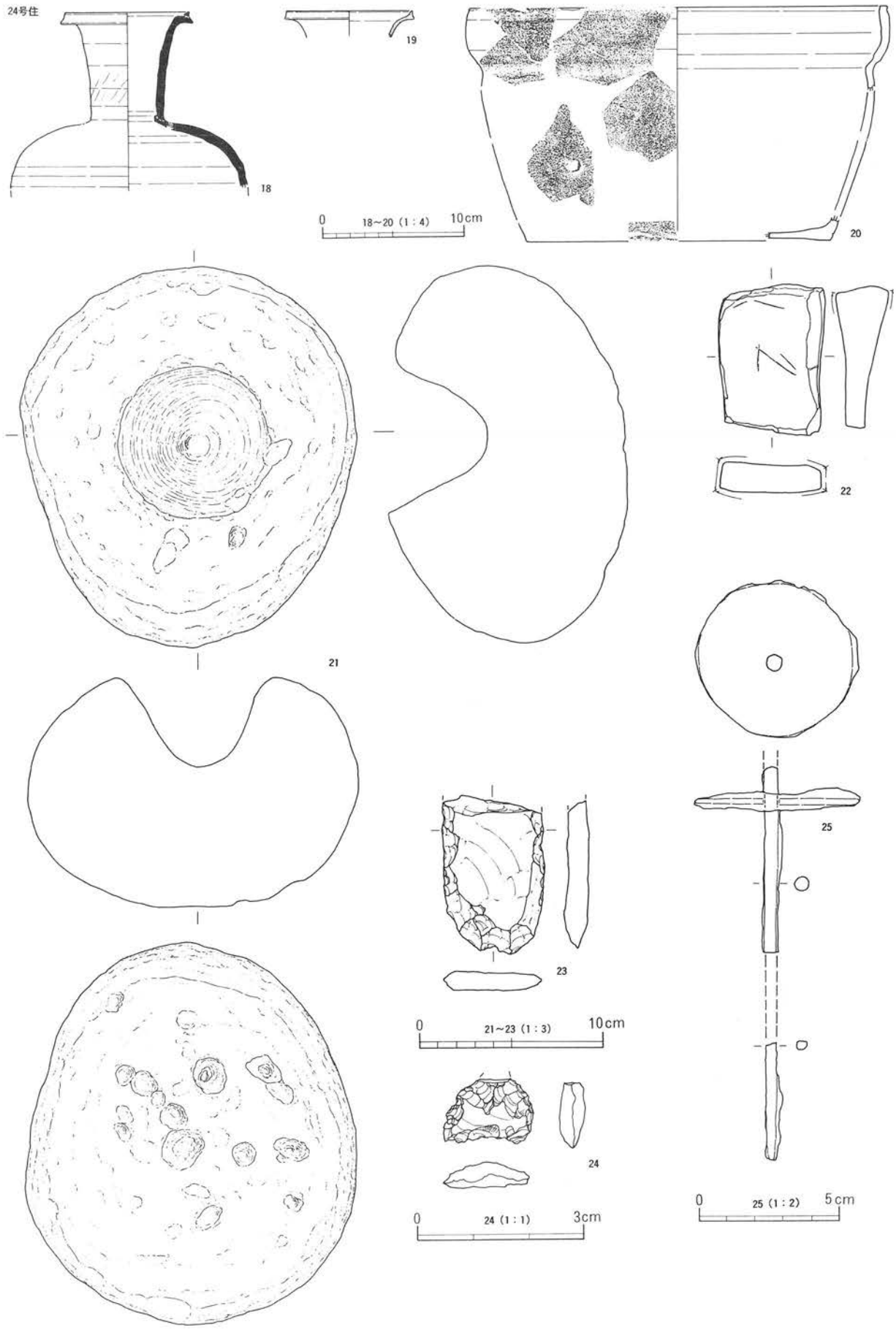
第125図　6号住出土遺物実測図（19～31）



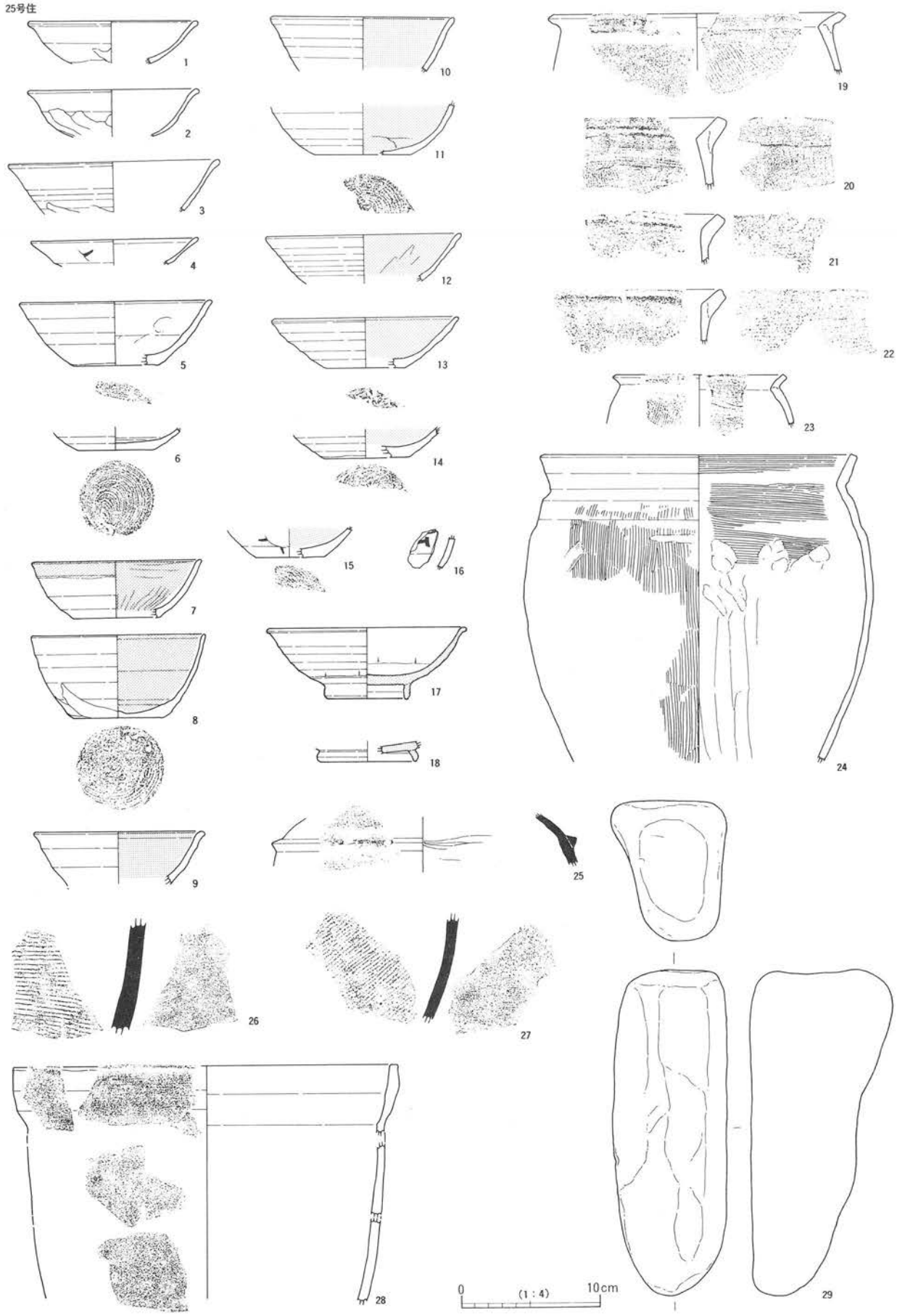
第126図　6号住（32～35）・12号住（1～11）・15号住（1）出土遺物実測図



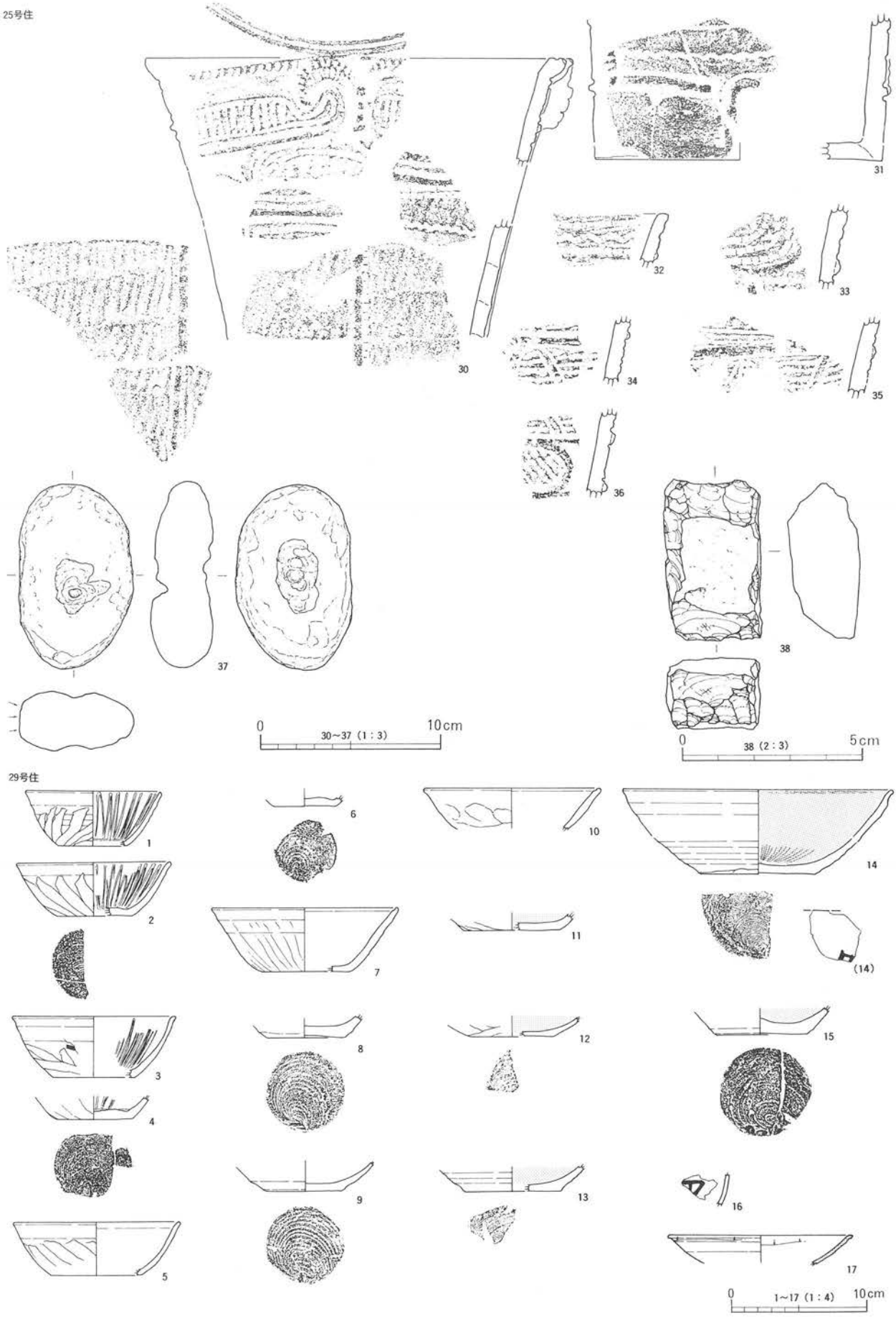
第127図　20号住（1～6）・23号住（1～3）・24号住（1～17）出土遺物実測図



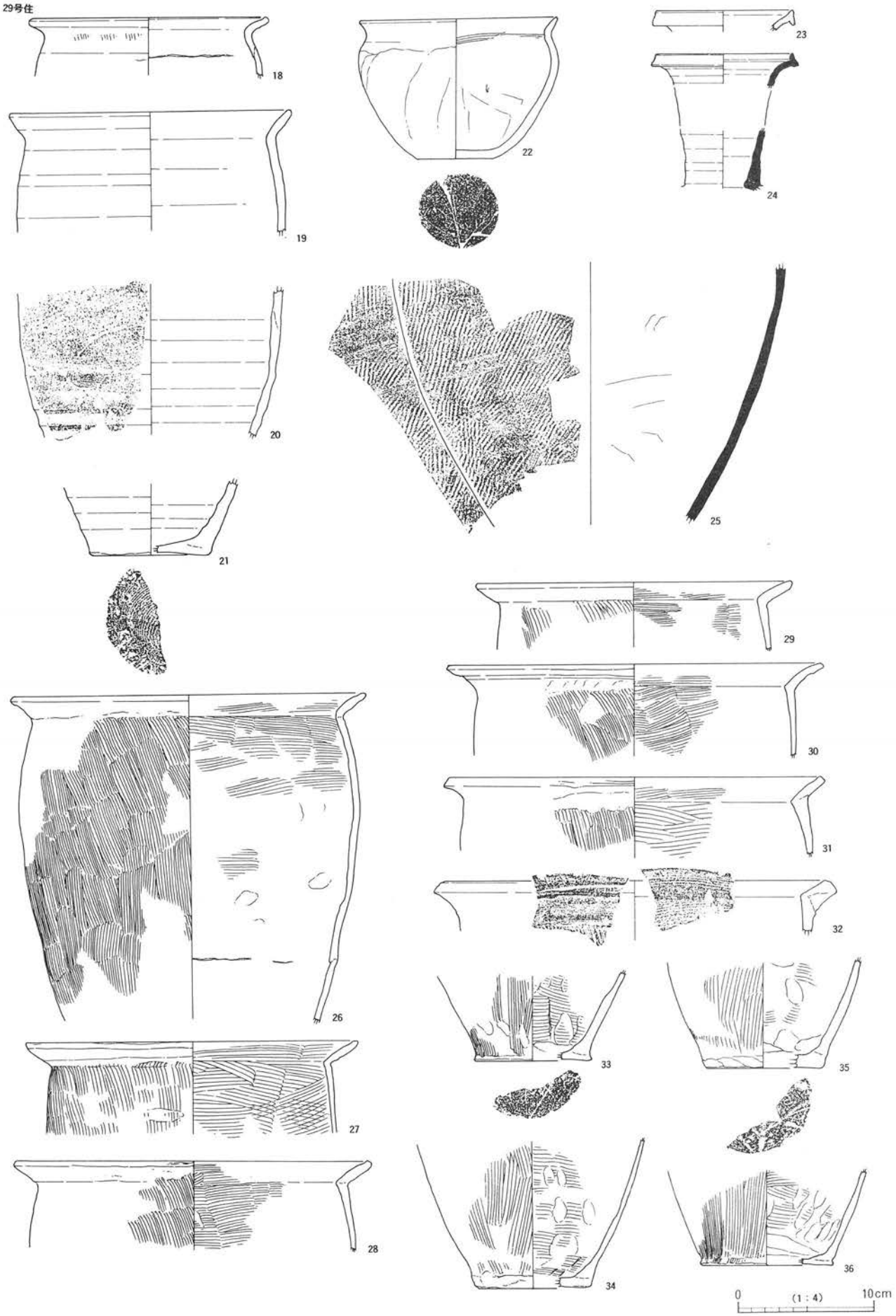
第128図　24号住出土遺物実測図（18～24）



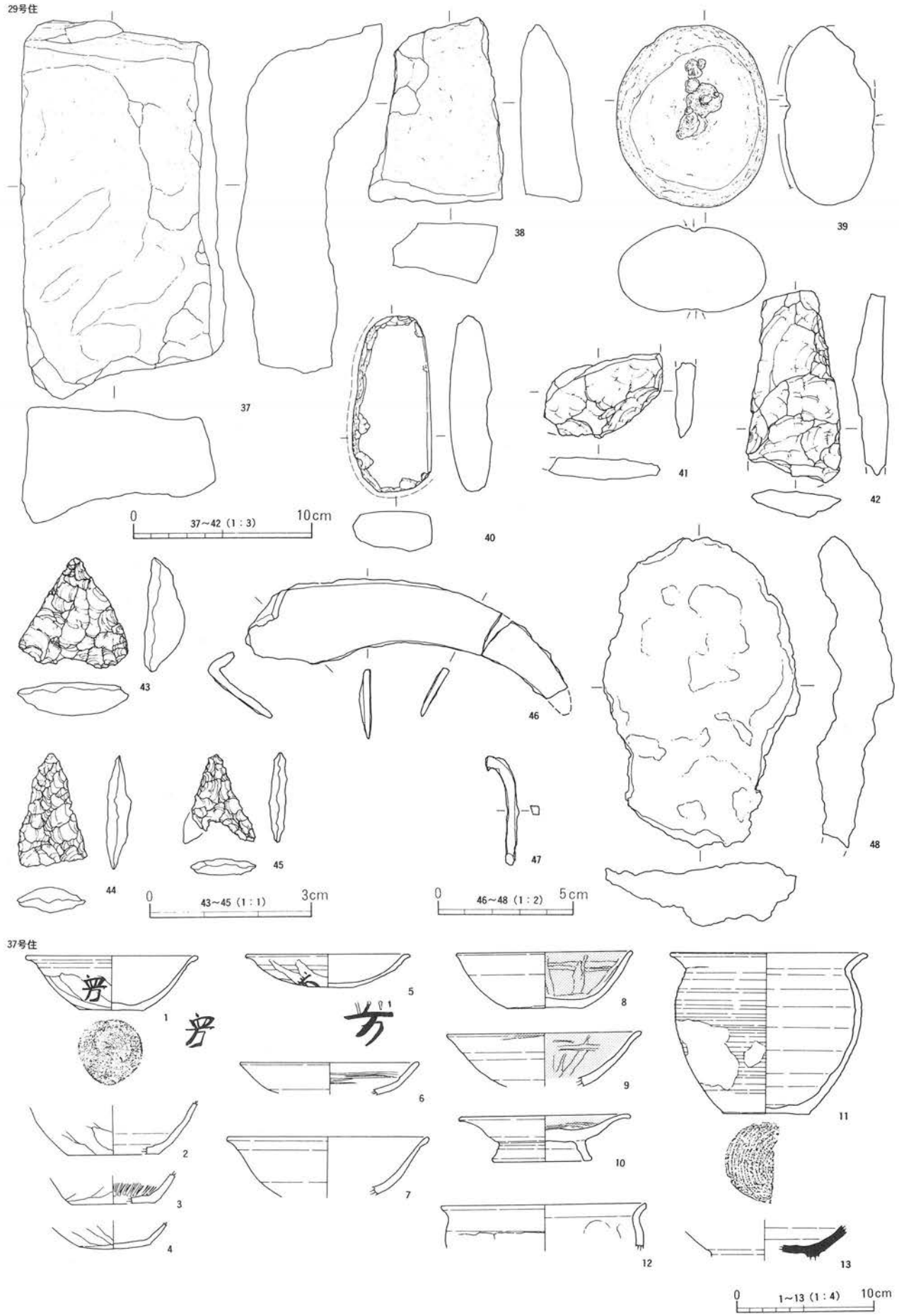
第129図　25号住出土遺物実測図（1～29）



第130図　25号住（30～38）・29号住（1～17）出土遺物実測図

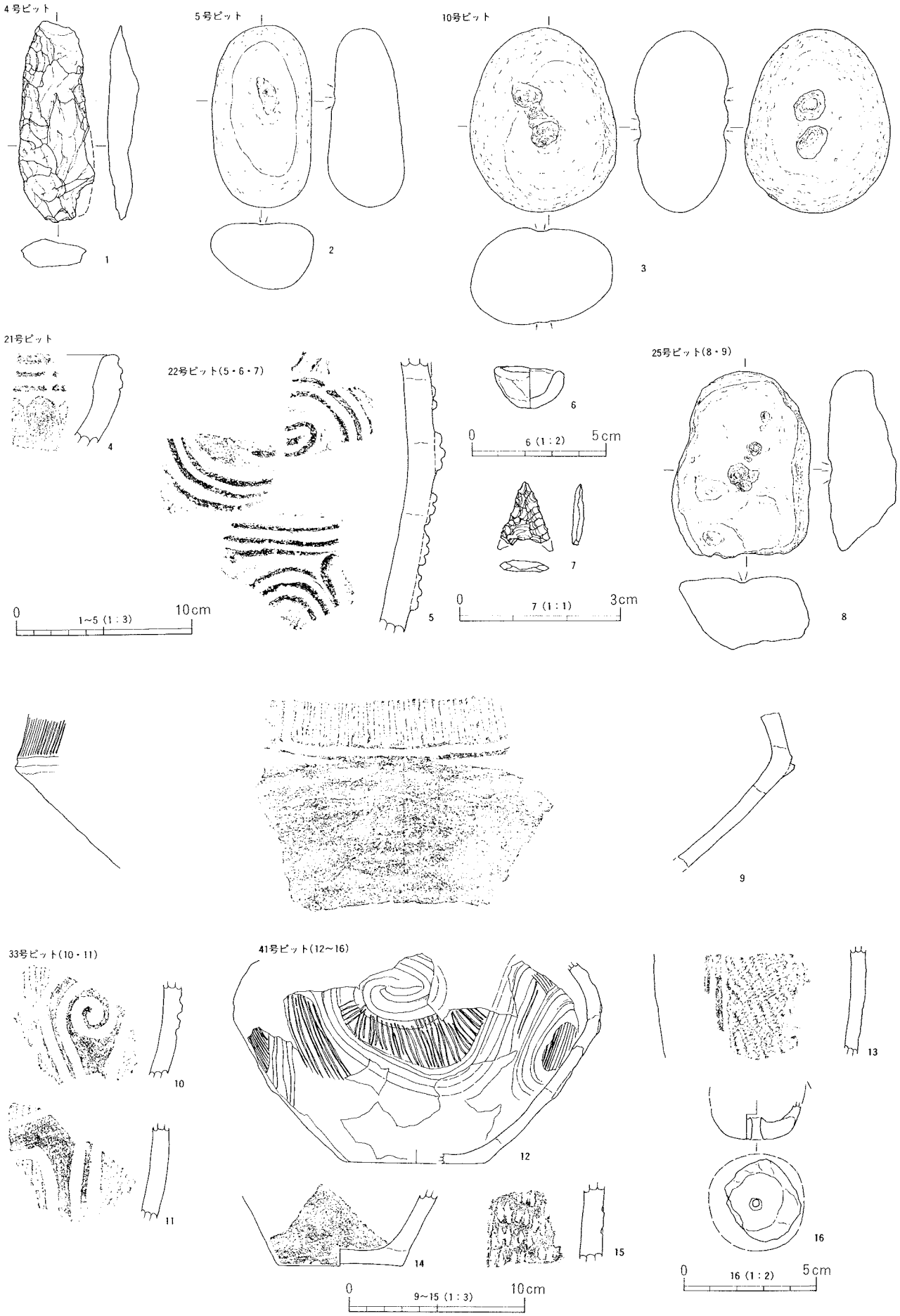


第131図　29号住出土遺物実測図（18～37）

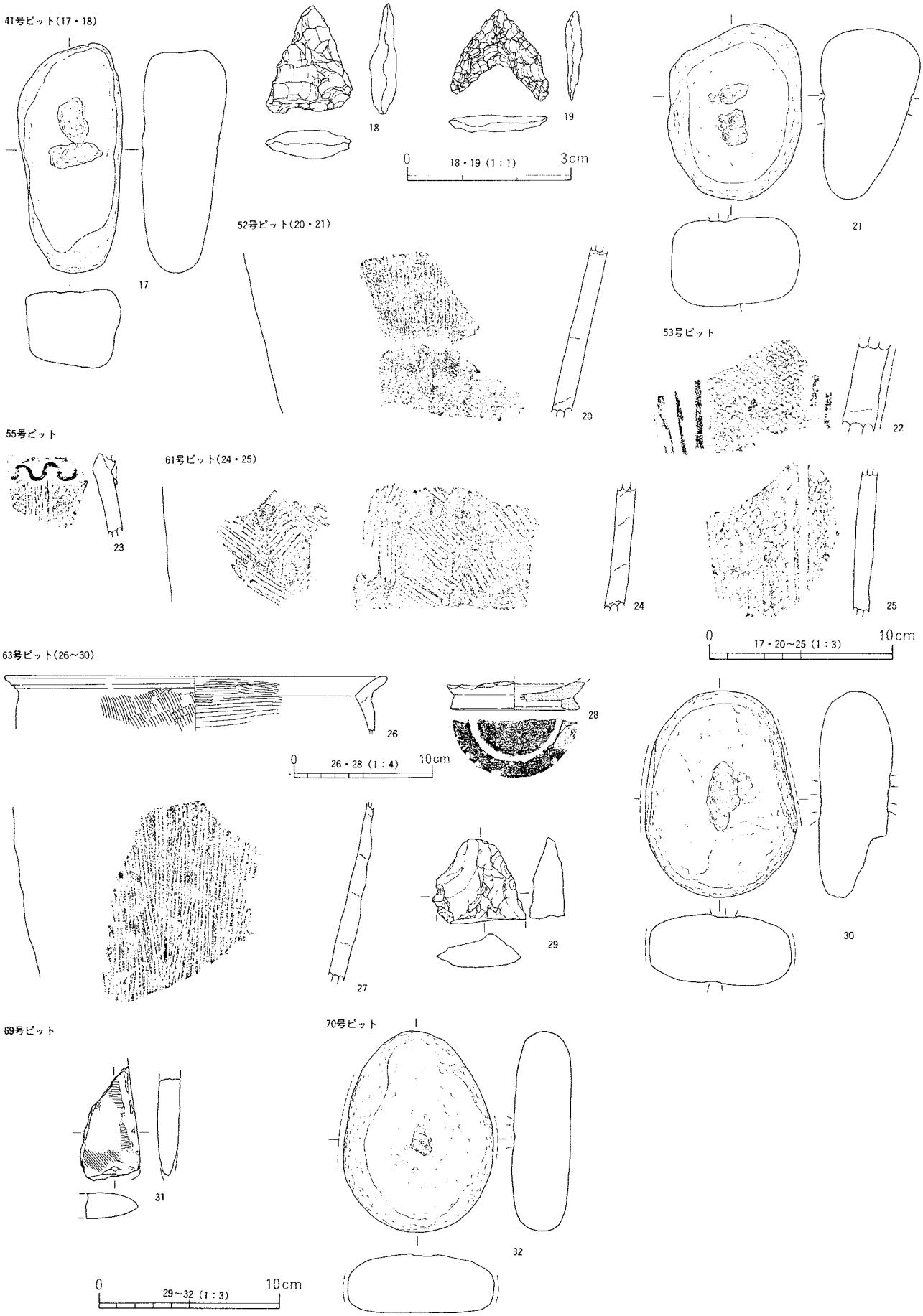


第132図　29号住（38～49）・37号住（1～13）出土遺物実測図

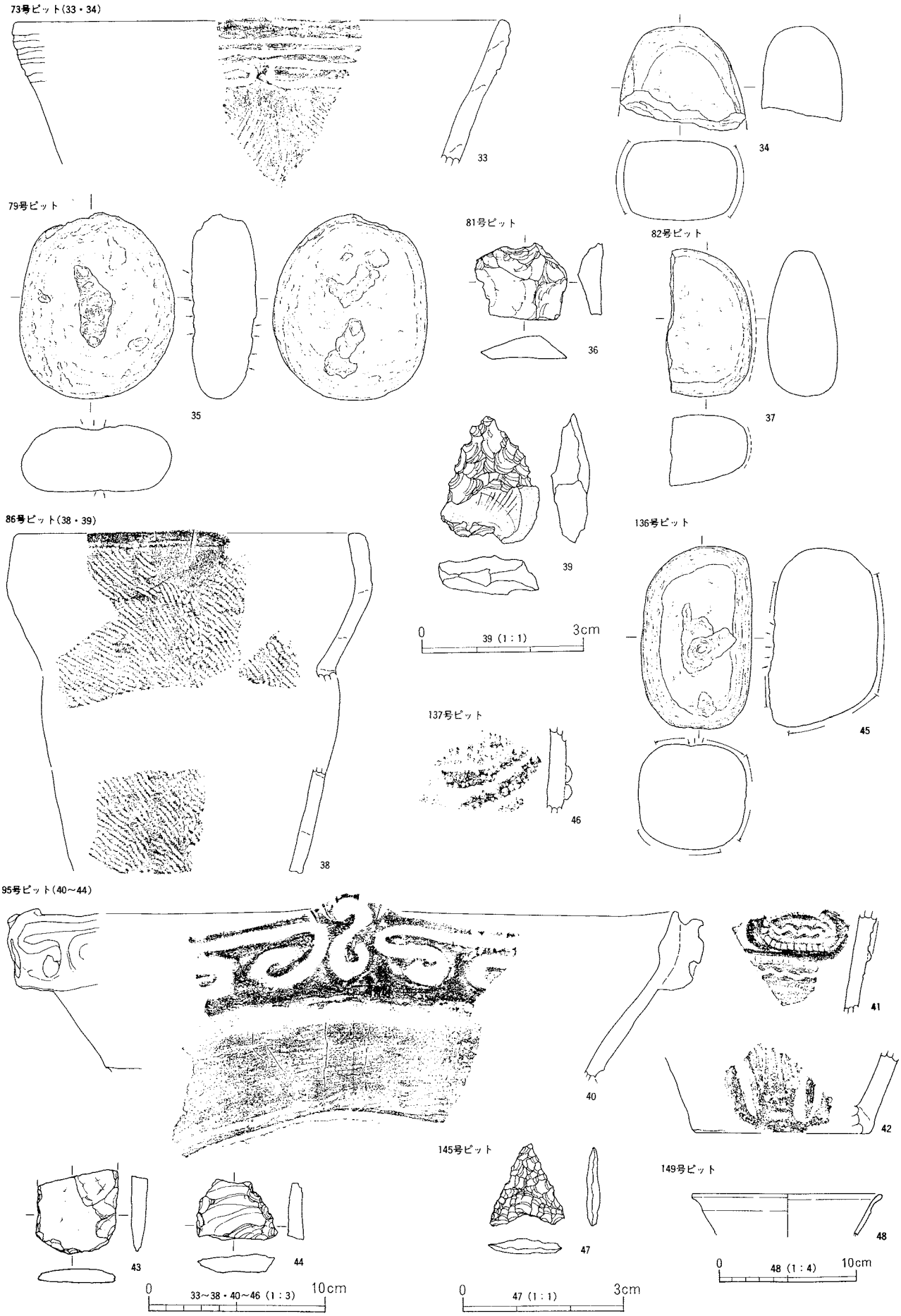
第133図　37号住出土遺物実測図（14～31）



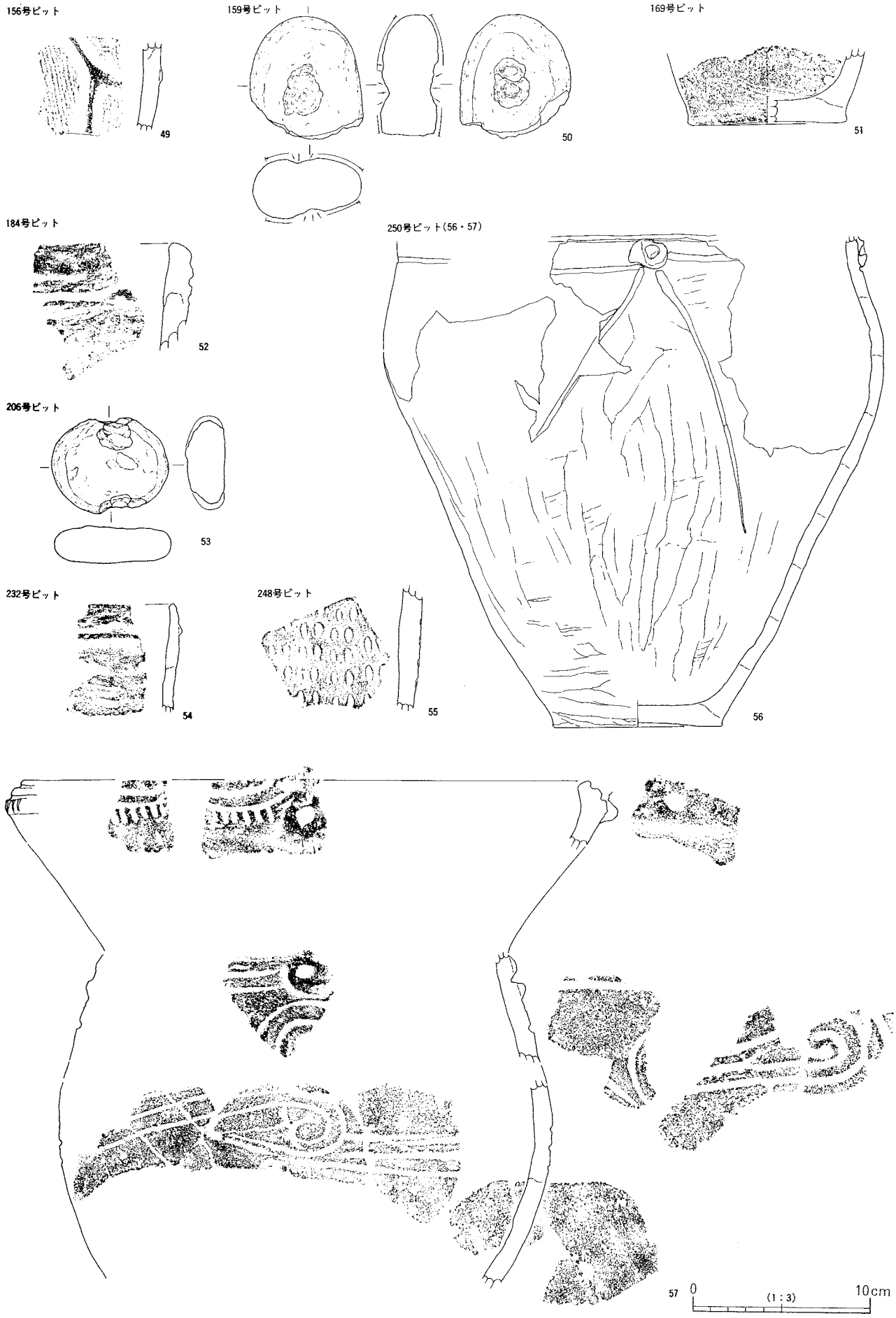
第134図　4・5・10・21・22・25・33・41号ピット出土遺物実測図



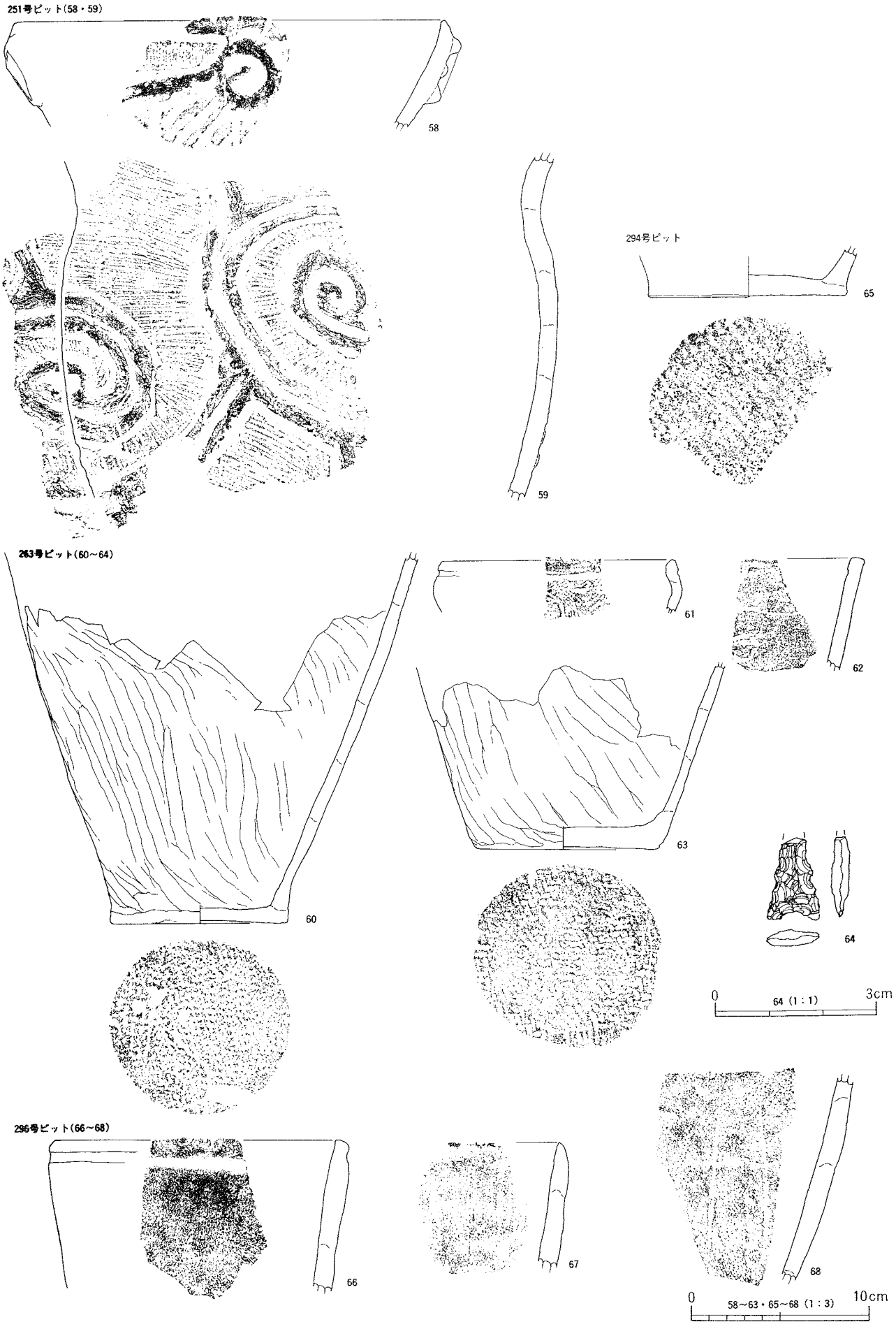
第135図　41・52・53・55・61・63・69・70号ピット出土遺物実測図



第136図　73・79・81・82・86・95・136・137・149・156号ピット出土遺物実測図

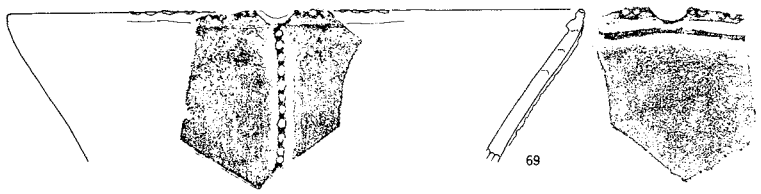


第137図　159・169・184・206・232・248・250号ピット出土遺物実測図



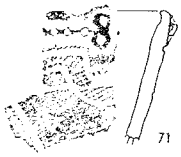
第138図　251・263・294・296号ピット出土遺物実測図

328号ピット(69～72)

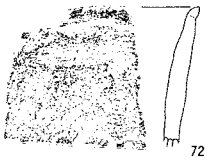


69

70

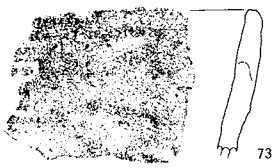


71



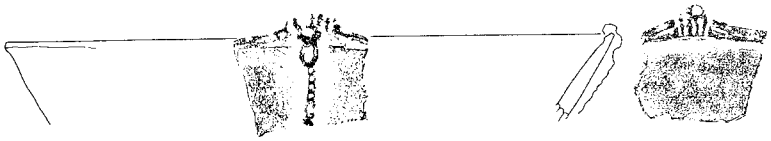
72

335号ピット



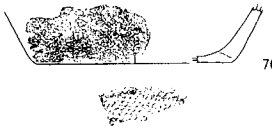
73

337・338号ピット(74～77)

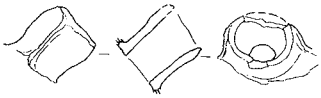


74

75



76



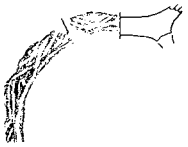
77

344号ピット(78～83)

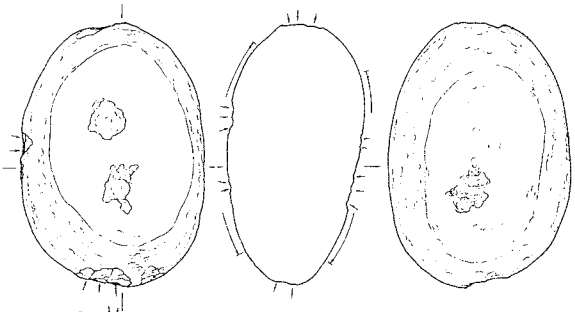
78

80

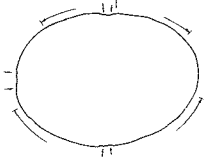
79



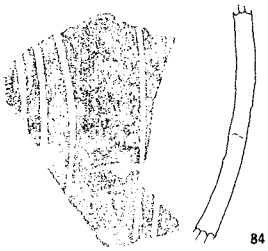
81



83



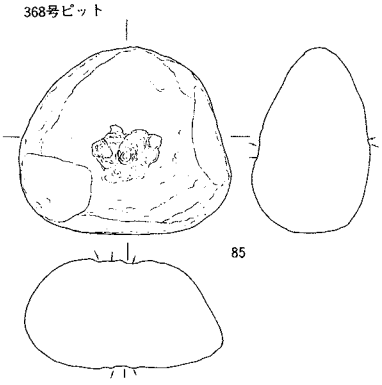
366号ピット



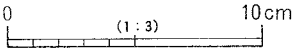
84

82

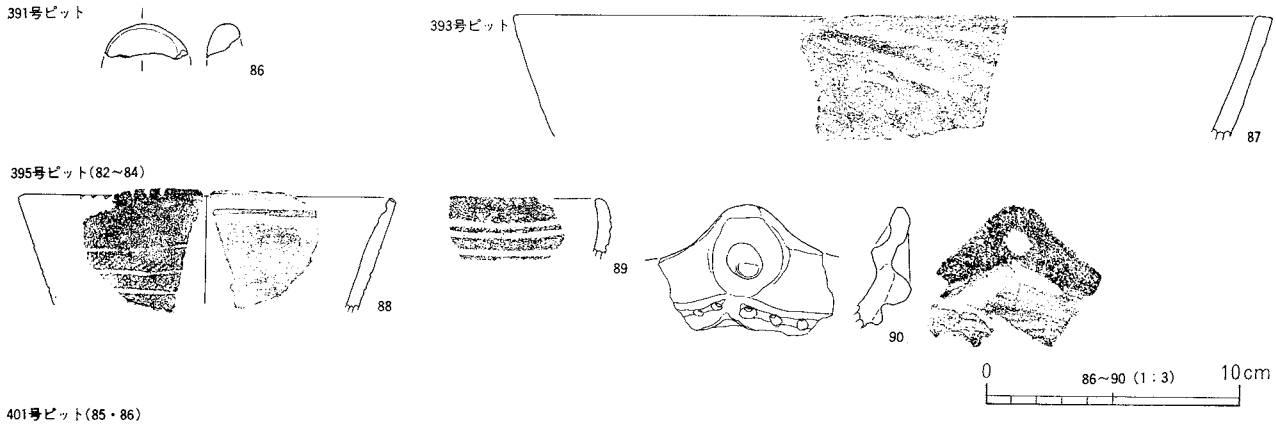
368号ピット

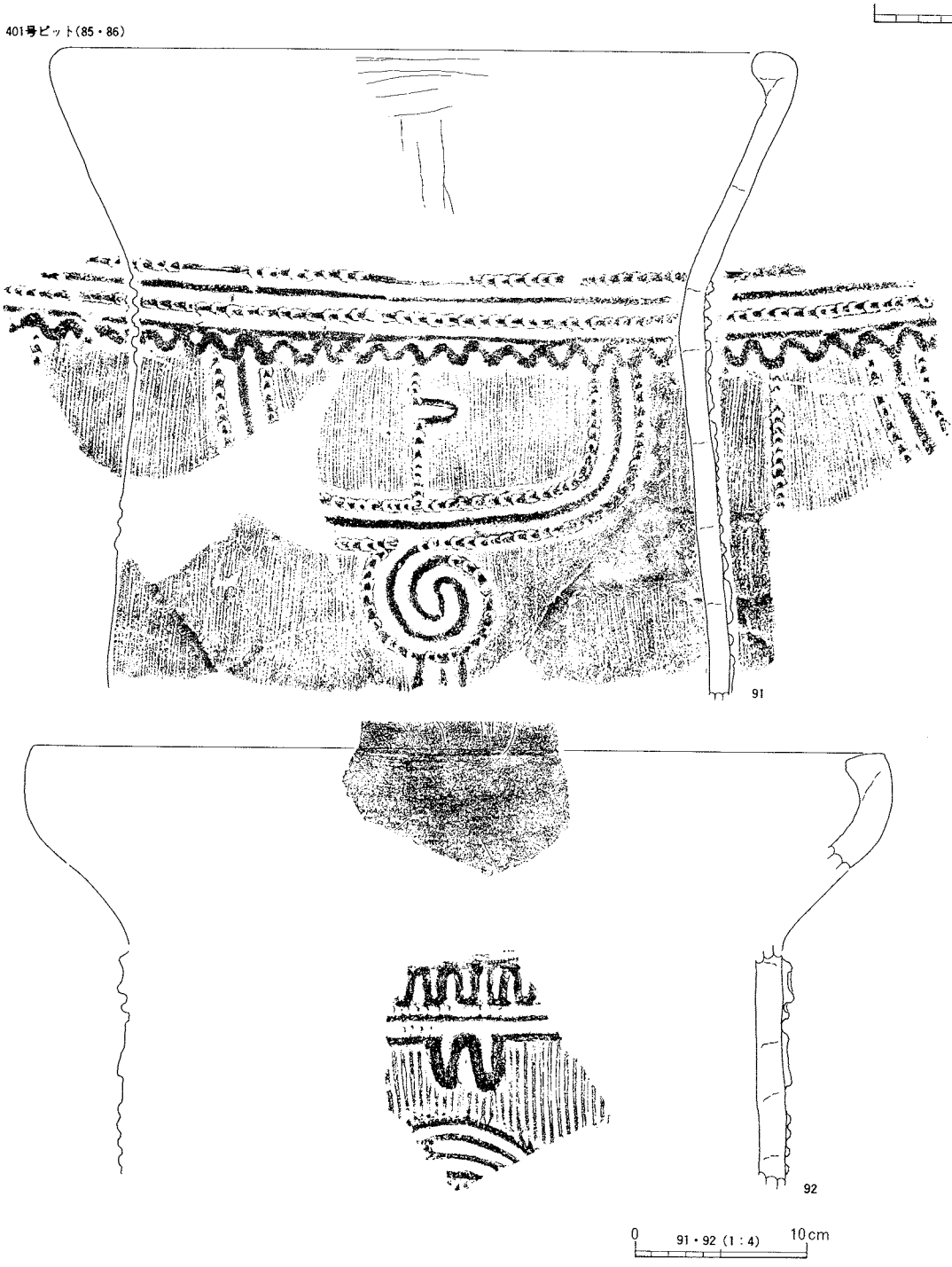


85

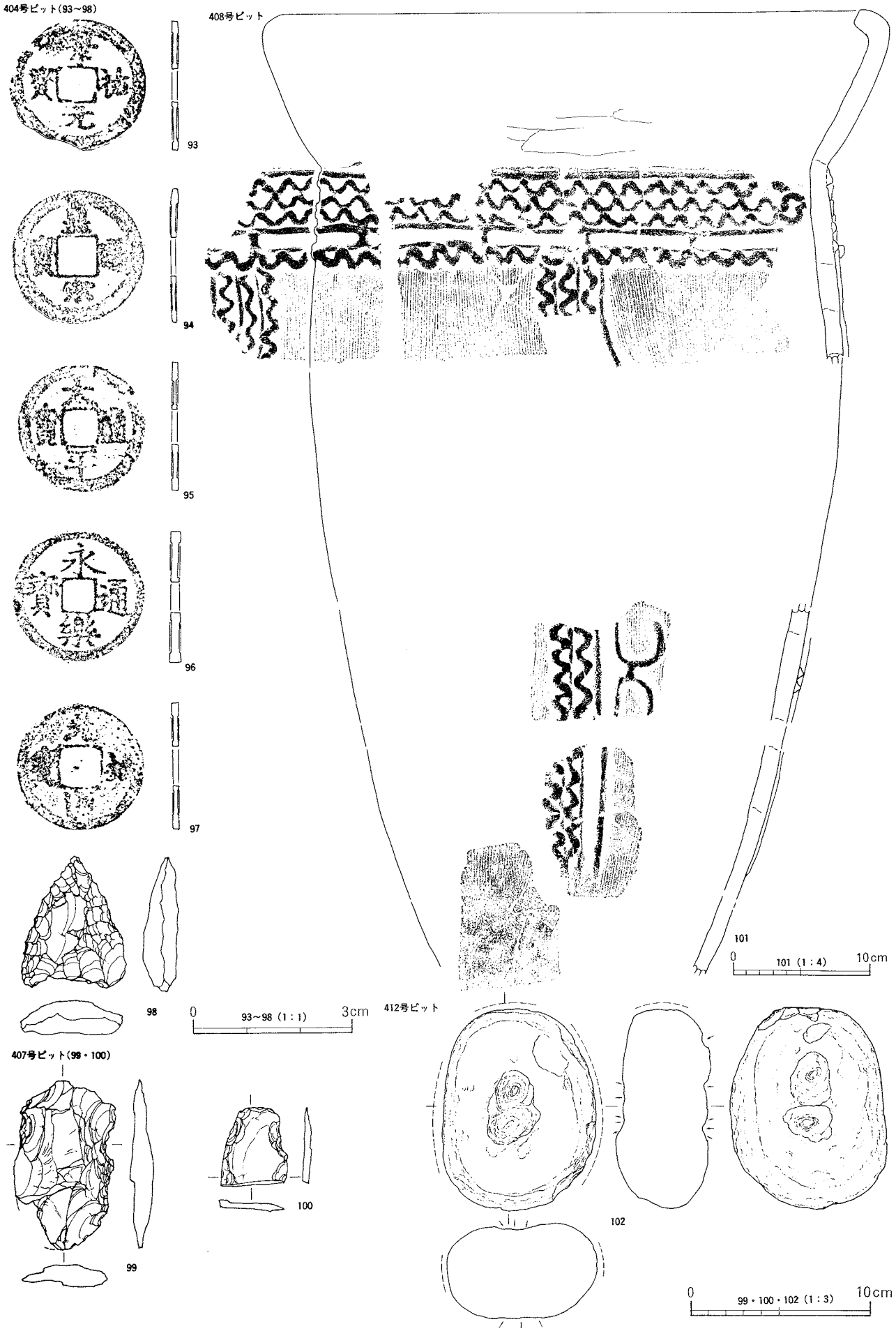


第139図　328・335・337・338・344・366・368号ピット出土遺物実測図

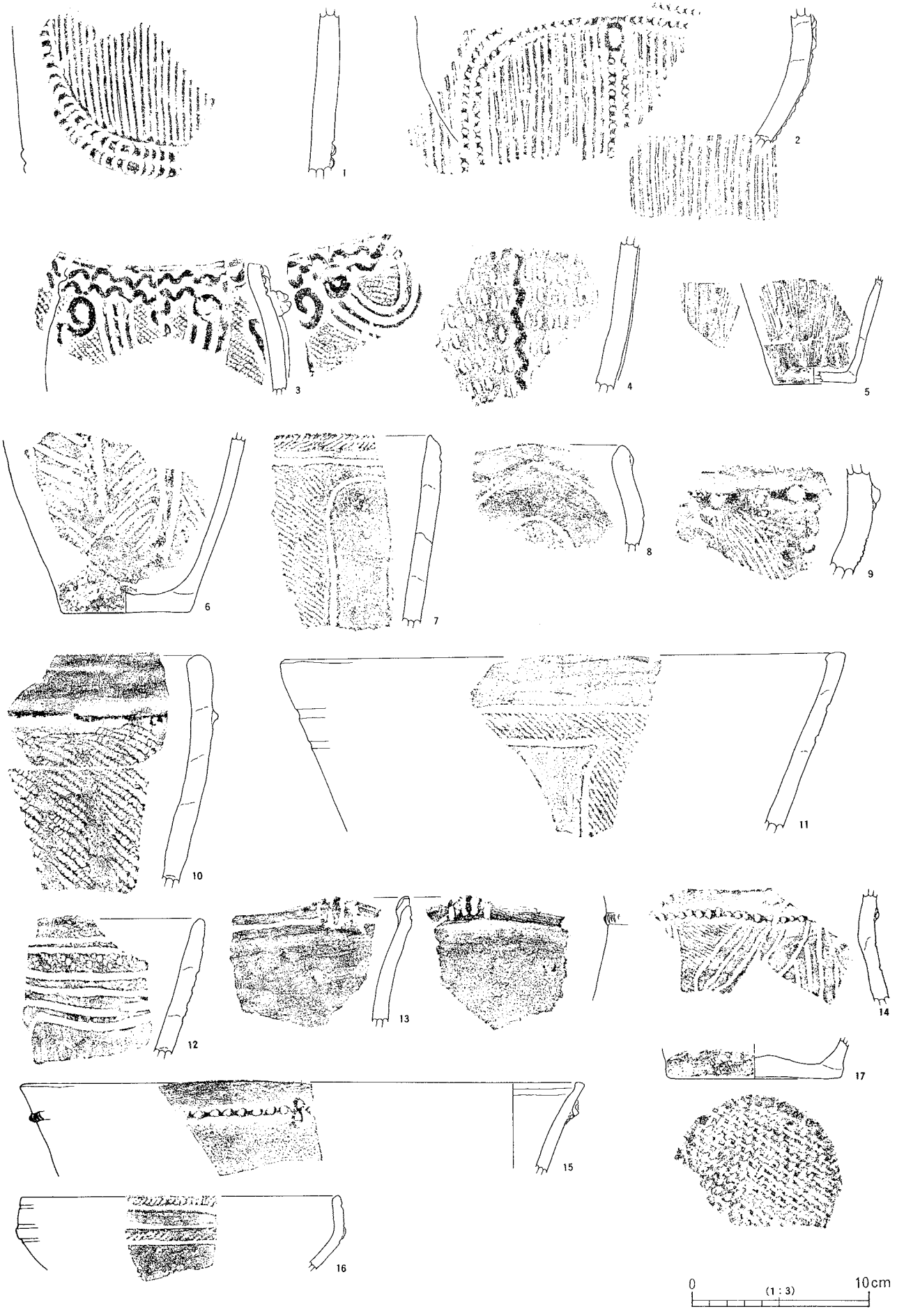




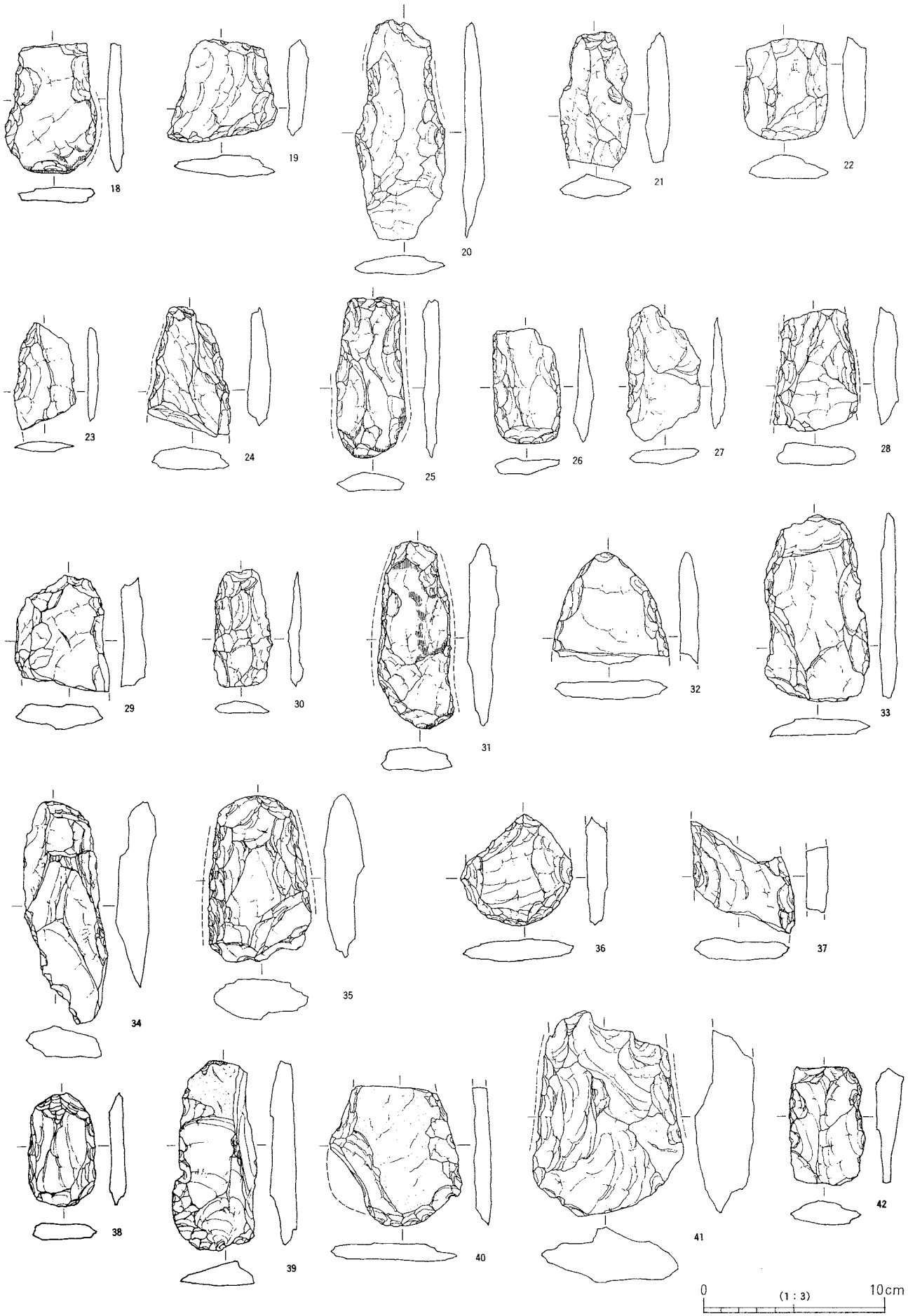
第140図　391・393・395・401号ピット出土遺物実測図



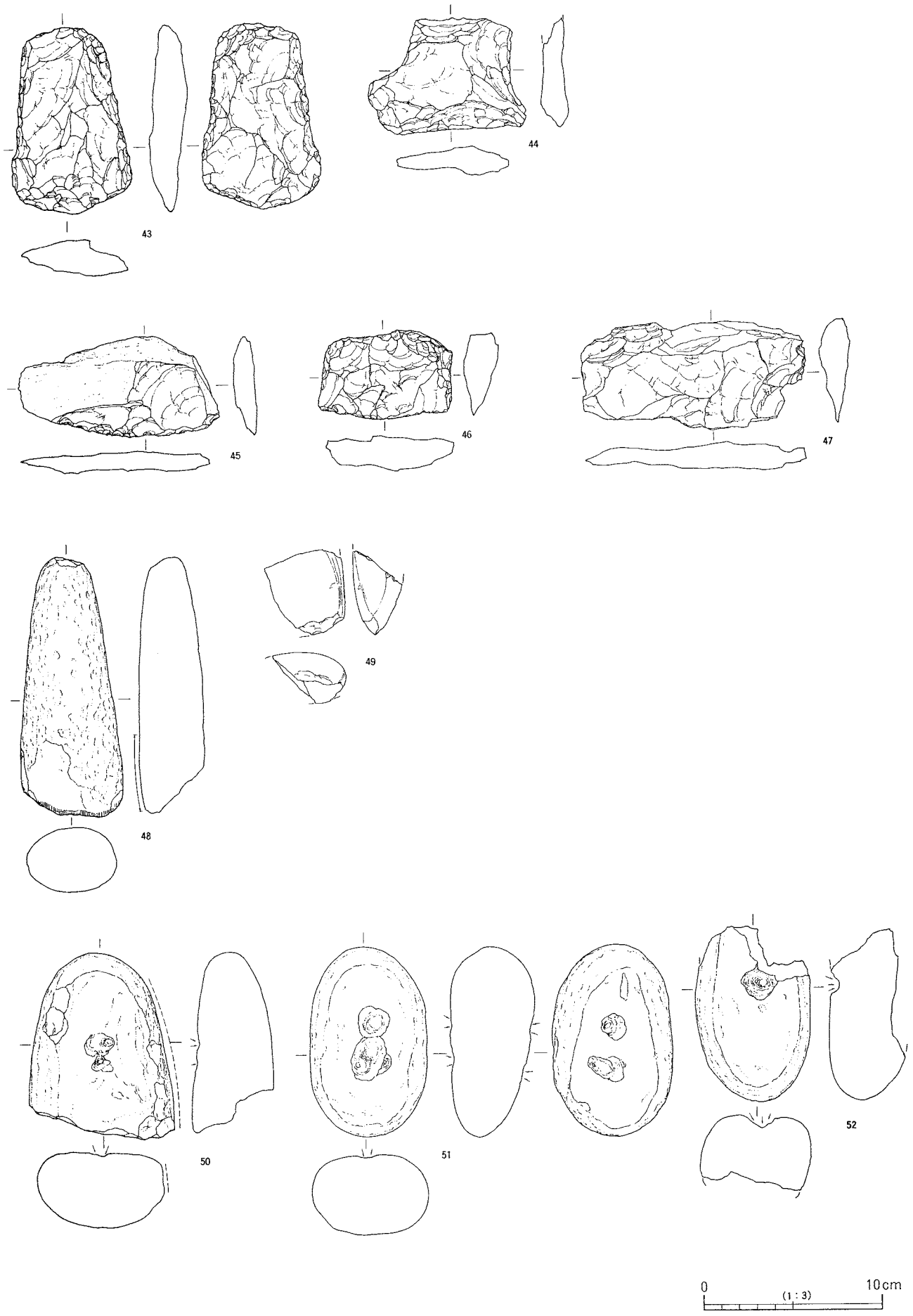
第141図　404・407・408・412号ピット出土遺物実測図



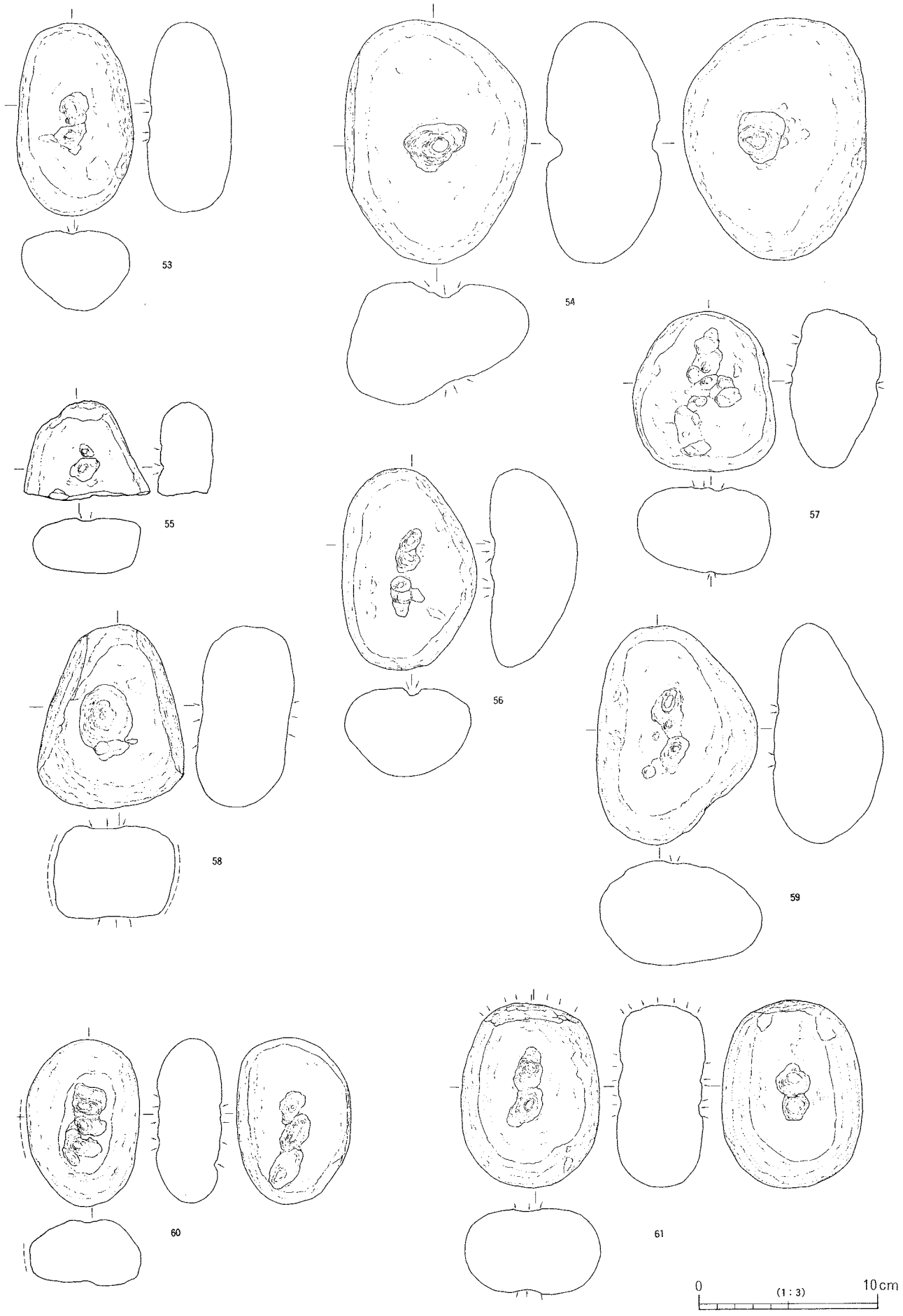
第142図　遺構外出土遺物（1）



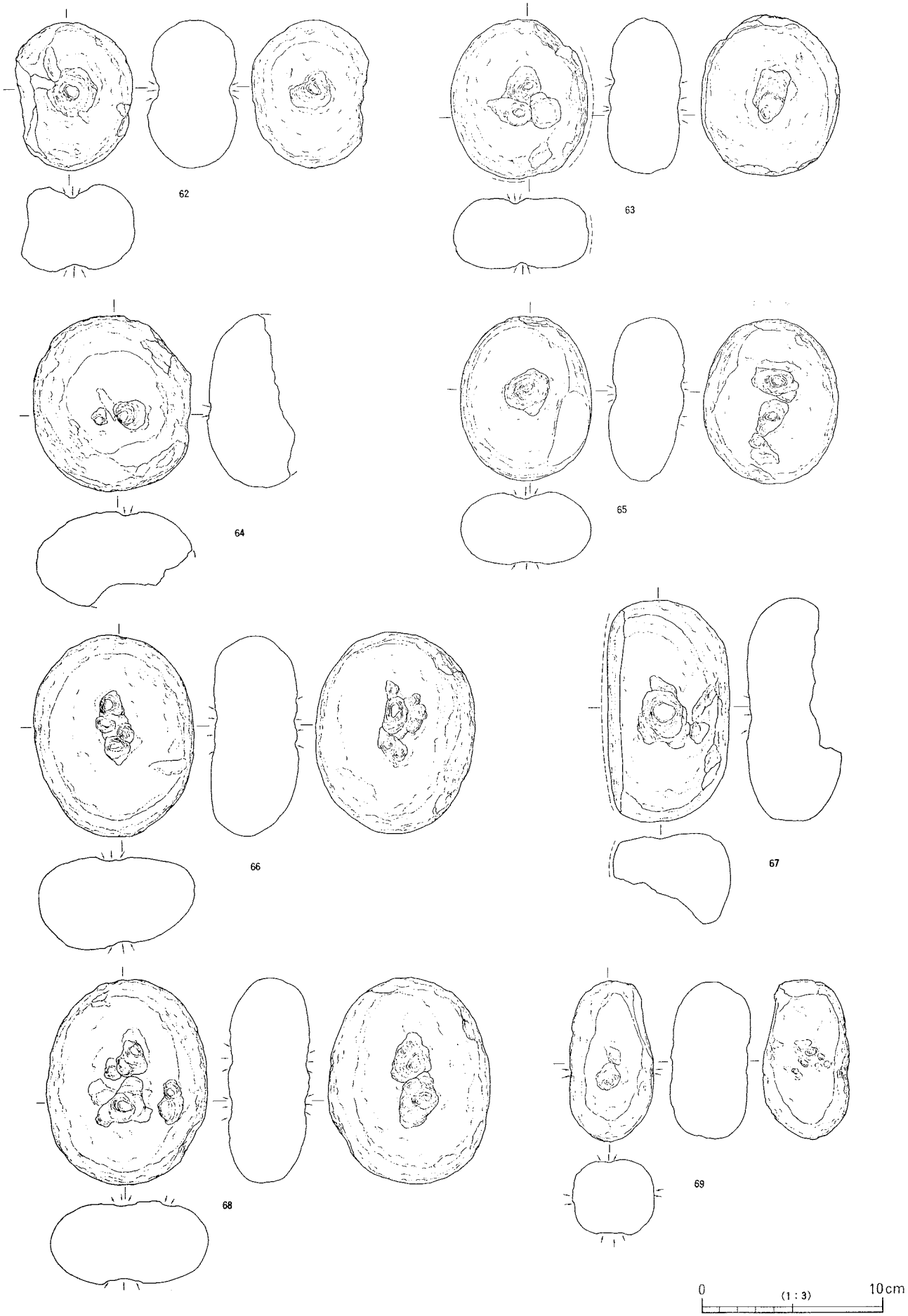
第143図　遺構外出土遺物（２）



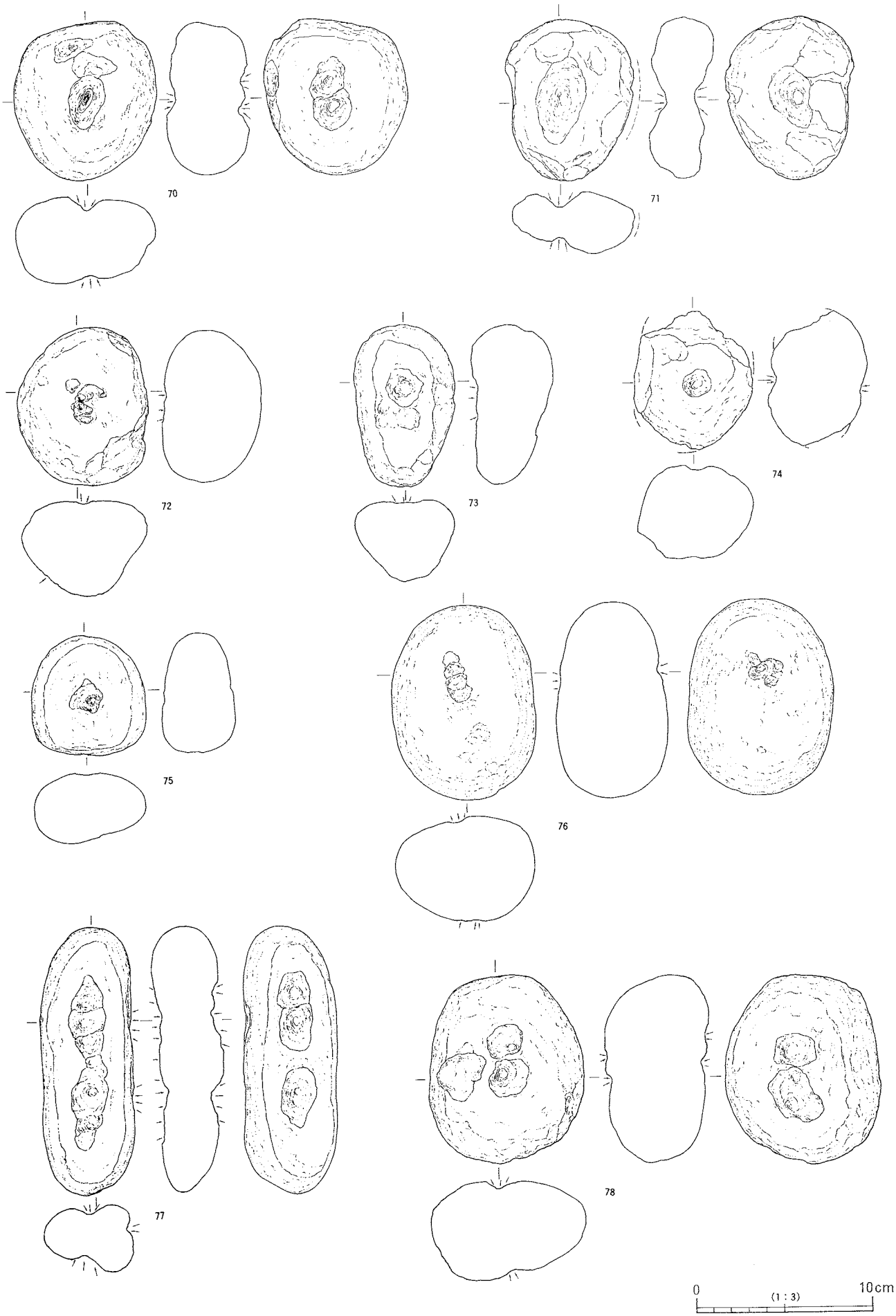
第144図　遺構外出土遺物（３）



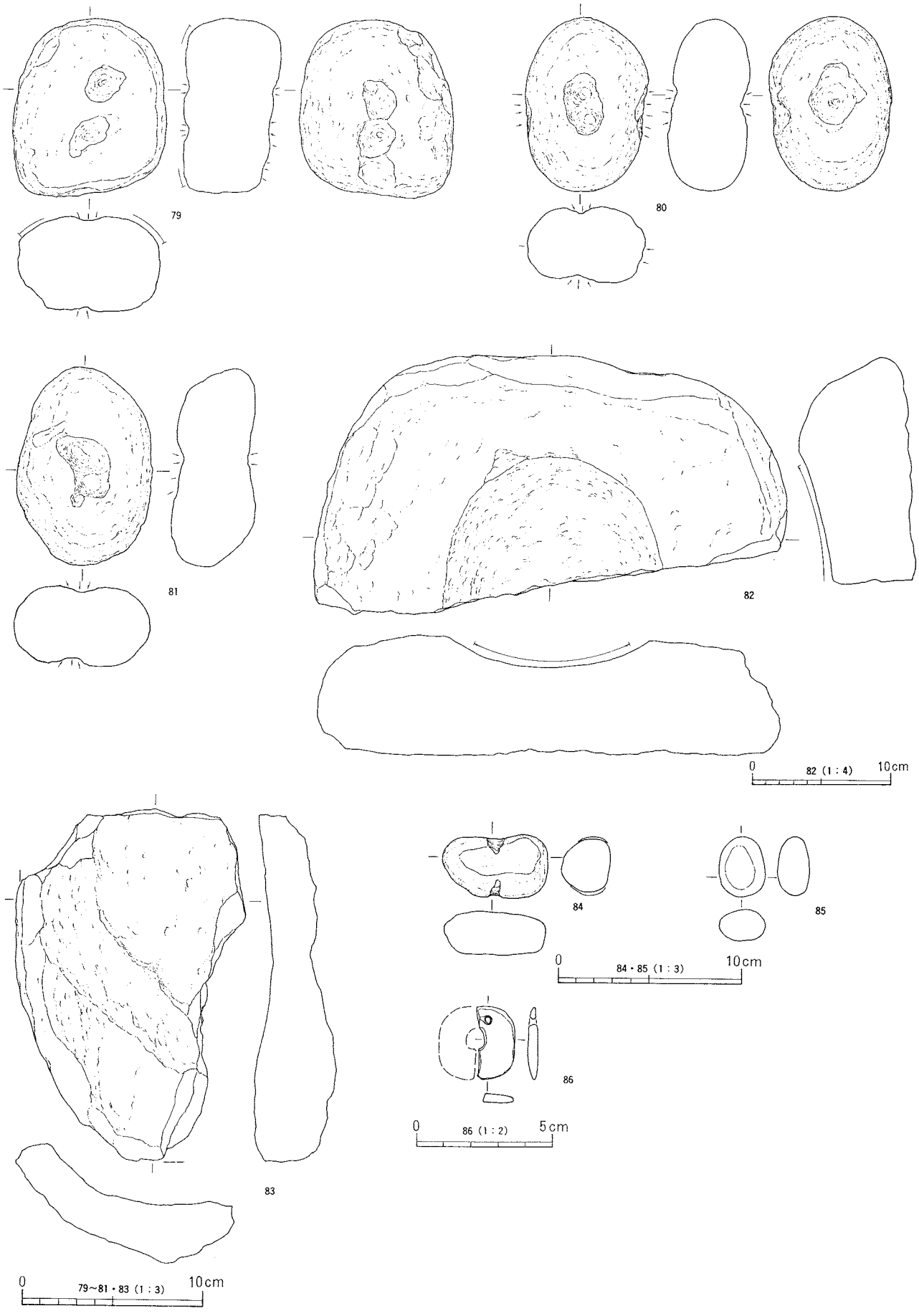
第145図　遺構外出土遺物（4）



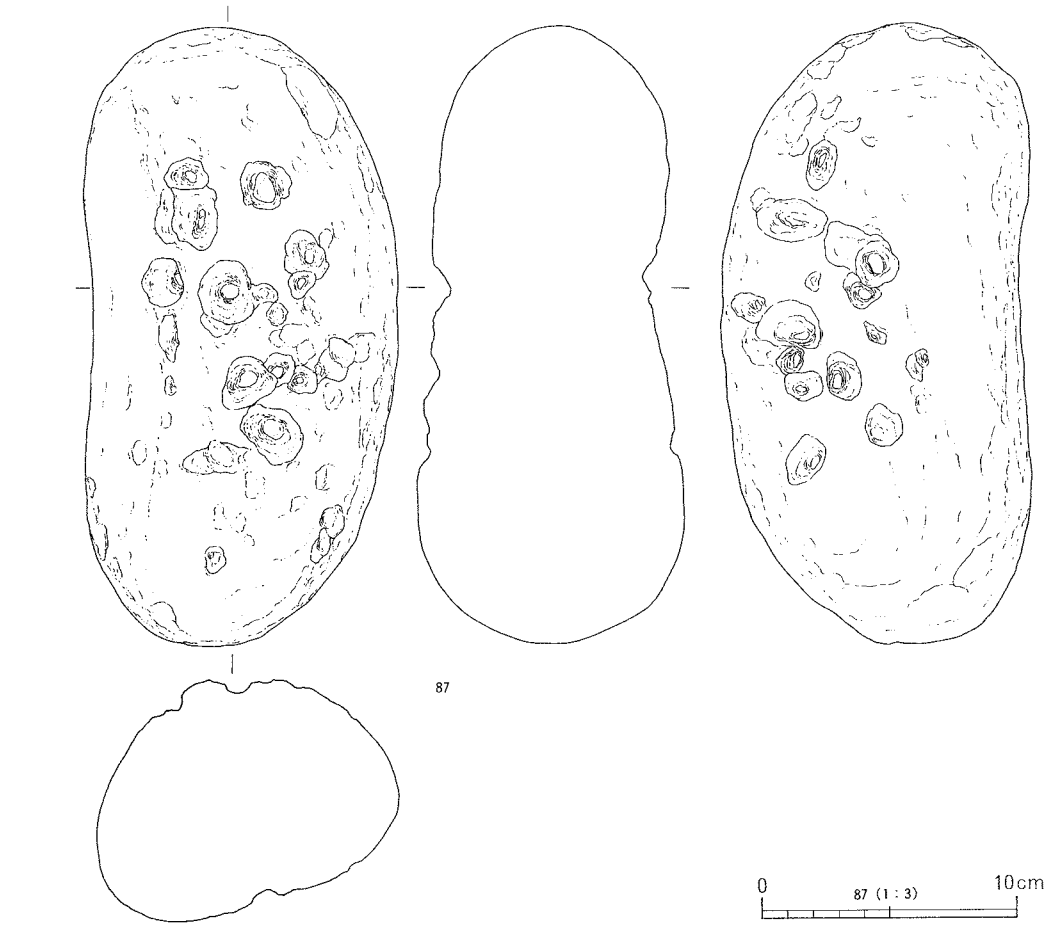
第146図　遺構外出土遺物（5）

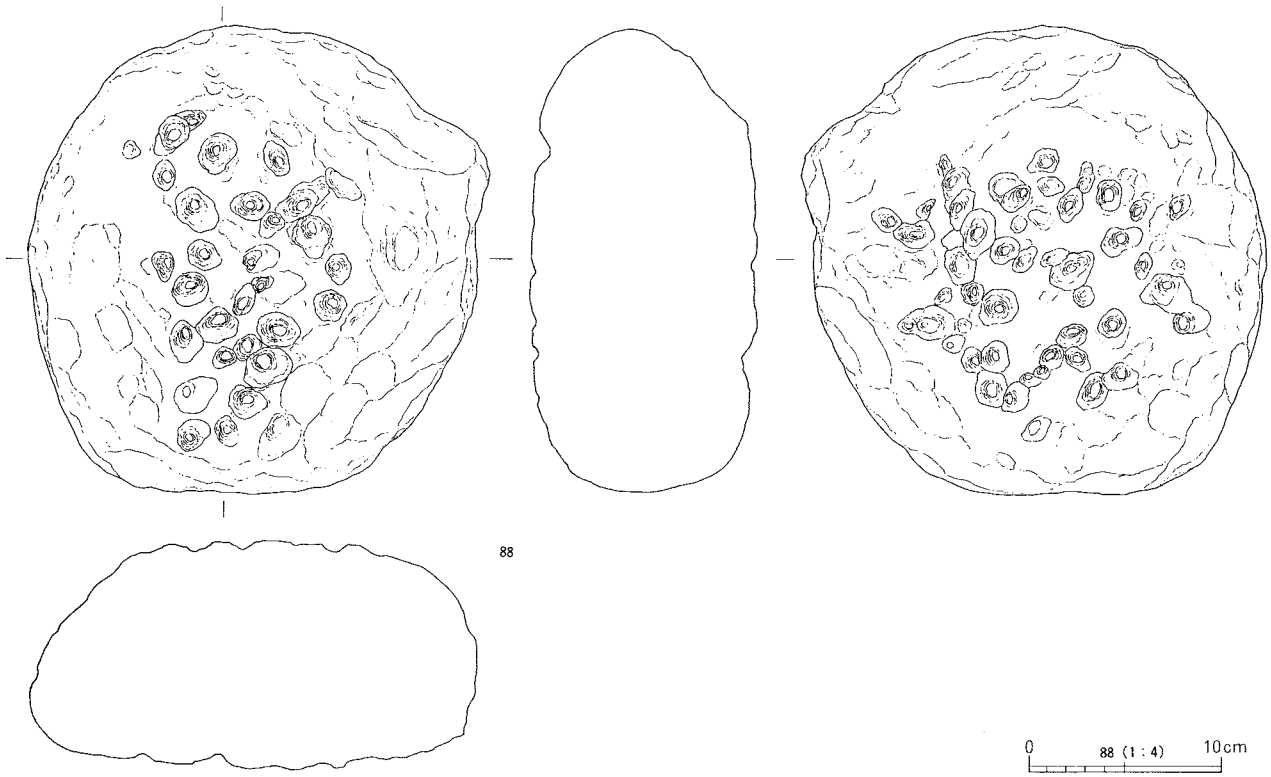


第147図　遺構外出土遺物（6）



第148図　遺構外出土遺物（7）





第149図　遺構外出土遺物（８）

第150図　遺構外出土遺物（1）

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　遺跡の位置と現況

社口遺跡は、山梨県の北西部にある北巨摩郡高根町村山北割・東割字社口に位置する(第1～5図)。八ヶ岳南麓の中腹、標高720m付近にあり、八ヶ岳泥流によって形成された七里岩台地、通称「台上」とよばれる台地上の東寄りに位置する。遺跡からは北側に赤岳(標高2899m)を主峰とする八ヶ岳の姿を間近に眺めることができ、東側には金峰山を中心とする秩父連峰を、また西側には甲斐駒をはじめとする南アルプスの連山を望み、南は甲府盆地を見下ろし、御坂山地の上に富士山を望む、緩やかな南向き傾斜地である。位置は国道141号線を韮崎から清里方面へ北上途中、高根町箕輪交差点で西へ曲がり、県道万年橋・長坂線を約800mほど過ぎた北側のやせ尾根付近である。現在、県道と高根町民グランドとの間に広域農道が出来上がっているが、その道路の位置が社口遺跡である。こうしたやせ尾根は八ヶ岳南麓に通有な南北方向に伸びる細長い尾根状台地で、多くは林や畑地、集落となっている。社口遺跡周辺ではカラマツやナラ・クヌギ等の落葉樹林が広がり、その中には別荘が点在し、牧草地や畑、栗林が入り混じった土地利用が行われている。尾根の西側は水田地帯で、近年圃場整備が完了し広々とした圃場となっている。このやせ尾根上と圃場脇の低地に広域農道建設が予定され、調査が行われた。

第2節　地質・自然環境

八ヶ岳は本州中央のホッサマグナに噴出した火山群である。洪積世後期には古八ヶ岳火山群の活発な活動があり、とくに末期の火山活動では多量の火山泥流が噴出し、沖積世初期になると新八ヶ岳火山の活動があったという。韮崎市中心部へ伸びる七里岩台地は、韮崎泥流と呼ばれる堆積物からなるが、これは火山活動のさかんであった洪積世末期(8～15万年前)に起こった八ヶ岳の山体崩壊で形成されたもので、甲府盆地に流れ込んだ土石流は中道町の曽根丘陵あたりまで達している。その後釜無川・塩川による東西方向からの浸食で七里岩と呼ばれる断崖を形成し、比高差30～100mの屹立した台地が出来上がった。したがって高根町周辺では輝石安山岩類を主とする熔岩粉砕物からなる基盤上に御岳などの火山灰層や黒色土が堆積した地質である。台地上は緩やかな南斜面で、東側の縁は赤岳東南から流れる大門川が川俣川と合流して須玉川、塩川となって南流する深い谷である。

八ヶ岳山麓一帯では、伏流水が標高1000～1500m付近と700～800m付近で豊富に湧き出して小河川が発達している。それらは南流して南北方向に開折谷を刻み、谷と谷の間に残った細長い尾根状台地が南北に形成される。湧水は生活用水として、また農業用水として使われており、現在の高根町内の集落はちょうど泉の分布と重なるように営まれている。台上一帯は夏は冷涼ですごしやすいが、冬は降雪量が少ないものの八ヶ岳下ろしと呼ばれる北風が厳しく、寒冷地となる。高根町での年平均気温は摂氏10.4度、降水量は年間1,100㎜程度で(浅川1990)、標高が高く冷涼な気候のため、高原野菜に適した地域であり、また水稲栽培も盛んに行われてきた。

遺跡周辺は、旭山から南にのびた尾根続きの地形上にあり、その周囲は谷戸田として水田化されている。現在は圃場整備によって微地形や小河川の状況がわからなくなっているが、かつて尾根脇に小河川が流下し、また遺跡北西付近には泉もあった、という話を聞いている。

第3節　歴史環境

高根町は山梨県北西部に位置し、長野県佐久地方と接することから山梨県の北の玄関口となっている。江戸時代には甲州街道韮崎宿と中山道岩村田宿を結ぶ脇往還である佐久往還(現在の国道141号線付近)が設定され、町内には長沢・浅川口留番所が置かれた。西側の長野県諏訪地方とは八ヶ岳山麓の隣接した地域として、縄文時代以来交流が盛んであった。また古代には、高根町付近は甲斐国巨麻郡内に位置づけられ、甲府盆地東部方面の中心地域との結びつきがより強固なものになっていた。このように北・西・南からの様々な流れが交差する地域にあたり、遺跡出土の土器や土師器、遺構のあり方にもそうした特質が表れている。

古代以前における高根町周辺の遺跡を列記すると(第1～3図・第1表)、先土器時代では矢出川遺跡群(長野県南牧村)、縄文時代草創期～早期では、栃原岩陰遺跡(長野県北相木村)・神取遺跡(山梨県明野村)、前期

では阿久遺跡（長野県原村）・天神遺跡（山梨県大泉村）、中期では大深山遺跡（長野県川上村）・曽利遺跡・井戸尻遺跡（長野県富士見町）・与助尾根遺跡・尖石遺跡・棚畑遺跡（長野県茅野市）・甲ツ原遺跡（山梨県大泉村）・坂井遺跡（山梨県韮崎市）、後期～晩期では金生遺跡（山梨県大泉村）・上ノ原遺跡（山梨県須玉町）・長坂上条遺跡（山梨県長坂町）、古墳時代では坂井南遺跡（山梨県韮崎市）、奈良～平安時代では宮ノ前遺跡（山梨県韮崎市）がある。このように八ヶ岳山麓には縄文時代を中心とした著名な遺跡が数多く集中している。

高根町内では、清里高原で近年先土器時代の遺跡が集中して見つかっており、近くにある矢出川遺跡群とともに濃密な分布域となっている。縄文時代では中期を主とした遺跡が数多く分布し、遺跡数は中期後半に爆発的なピークをもって推移している。後期以降は遺跡数としては減少傾向にあるものの、後期から晩期にかけて金生遺跡のように石を多数用いた大規模な配石遺構を伴う石堂遺跡、青木遺跡が存在し、八ヶ岳南麓地域の核的な集落と考えられている。ところが弥生～奈良時代になると、高根町周辺の南麓台上地域（高根町・長坂町・大泉村・小淵沢町）では遺跡が極端に少なくなる。古墳時代の集落がわずかに知られてはいるものの、それ以外の時期では無人化したのではないかと思われるほどである。やがて平安時代になると集落が各地で一斉に再出現し、遺跡数としては縄文時代に次ぐか、あるいは同数程度である。一集落には竪穴住居に加えて小鍛冶竪穴や掘立柱建物を伴い、開墾的な性格が窺える。また北巨摩地方に想定される牧との関連も指摘されるところである。その後の11～13世紀の遺跡は非常に少ないものの、その頃定着したと言われる初期甲斐源氏の伝承をもつ社寺や城館が数多くあり、甲斐源氏にとって何らかの重要な役割を担った地域であろうと思われる。

社口遺跡周辺はもともと山林であり、昭和24・25年頃開墾されて畑地となったといわれる。遺跡西側の水田地帯では、1981年以降の県営圃場整備事業にともない、南側から青木遺跡・青木北遺跡・東久保遺跡・旭東久保遺跡といった遺跡が次々と連なって見つかっている。また町内詳細分布調査では、数多くの遺跡が周辺地域に分布する状況が明らかにされた。これらの調査以前にも社口遺跡付近は遺跡として地元の方には知られていたらしく、戦後、昭和20年代後半頃、北巨摩郡下で考古学研究が盛んになった時期に、峡北農業高校の教員2名が生徒を引き連れて調査を行ったことがあった。残念ながら詳しい内容や、出土遺物などの成果は全く不明であるが、今回の調査参加者で当時も調査に参加した小林種晴氏によれば、調査箇所はB70グリッド付近であったという。

社口という小字名に関しては、諏訪神社の信仰圏にみられるミシャグチという祭神名から転化した地名であろうと思われ、類例として県下には三口神（さんこうじん）等の地名がある。今日、付近にはそうした祭神を祀る神社・祀等はないものの、J25・26グリッド付近の農道脇に、かつていくつかの石造物があった、との話があり、現在までに失われてしまったのかもしれない。社口地内の小名としては「ゑの木はた」が箕輪堰西側にあり、榎木の大木があったという伝承がある（高根町郷土研究会編　1990）。その他、O21グリッド付近の尾根上には塚が3基ほどあったという地元の方の話がある。調査時点で31号住東側の調査区外にそれらしい低い高まりが1カ所あった。直径約2m、高さ1m足らずである。付近は数年前に行われたカラマツ伐採時にトラックが踏み荒らした状況のため、その1基以外は現状では確認できなかった。今回の調査で検出した中世墓の一種、またはムラ境に構築されたという十三塚の類かもしれない。しかし、いずれにせよ古墳時代の高塚とは性格の異なるものである。

調査区南端に現在「箕輪堰」が流れている。また調査区内にも尾根を横切る堰跡らしい山道状の窪地が1カ所あり、箕輪堰の旧流路「ふるせぎ」ではないかという話を地元の方から伺った。この村山東割・北割一帯は水田潅漑のための堰や堤がよく発達した地域で、泉や小河川以外の大規模な河川等の水源がないため、江戸時代以前から盛んに掘削されてできたといわれ、今日では社口遺跡周辺地域を潅漑する用水としては村山六ヶ村堰と箕輪堰がある。村山六ヶ村堰は川俣川東沢の水を「吐龍の滝」下流で取水し、いくつかの隧道を経て多数の流路に分かれて堤・村山北割・村山西割・村山東割・小池・蔵原の旧六ヶ村に流域をもつ潅漑用水で、寛永16年（1639）ころ竣工したといわれる。また明暦3年（1657）ころ竣工したという箕輪堰は箕輪新町・箕輪を潅漑するものであり、一部六ヶ村堰と合流している（野牛嶋　1990）。社口遺跡を横切る箕輪堰は箕輪新町方面から村山東割方面への用水路となっており、今日でもかなりの水量がある。

今日までに調査された町内の遺跡を時代順に挙げておく（第3図・第1表参照）。

先土器時代　念場原の川俣川崖線近くに丘の公園遺跡群（清里）がある。中でも丘の公園第2遺跡ではナイフ形石器約60点などが出土し、本県最大の先土器時代集落址といわれている（保坂　1989a）。そのほか湯沢遺跡（下黒沢，雨宮　1983）や次郎構遺跡（下黒沢）でも石器が出土している。

縄文時代　縄文早期として丘の公園第5遺跡で押型文土器、条痕文系土器の鵜ヶ島台式土器が出土し、前期末十三菩提式土器などもある（保坂　1990）。中期では持井遺跡（村山北割）に五領ヶ台I式期の住居1軒と、中期前葉の土坑がある（雨宮　1992）。土坑出土の土器には胴部に木目状撚糸文をもち、北陸の新保式との関連が窺え

る。住居の炉には小形の石囲い炉が採用されており、石囲い炉の出現としては早い段階である。旭東久保遺跡（村山北割）では五領ヶ台式期を中心とする土器が土坑などから出ている（雨宮　1985）。また日影田遺跡（下黒沢）では五領ヶ台II式期の住居址2軒、曽利I式期の住居1軒が出ている（山本ほか　1995）。梅の木遺跡（箕輪）には新道・藤内式期の住居址1軒がある（森　1992）。海道前C遺跡（箕輪）には藤内式期～中期後半の住居址約20軒があり、土坑中から顔面把手付土器の優品が出土した。西ノ原遺跡（村山西割）には中期前葉～中葉の土器捨て場がある（雨宮　1986）。湯沢遺跡（下黒沢）では曽利式期の住居址8軒、東久保遺跡では曽利V式期の住居址1軒、当町遺跡では曽利IV式期の住居址1軒が出ている。野添遺跡（東井出）では学術調査により中期中葉～後半の住居4軒が検出され、微細炭化物の全点取り上げによって自然科学的な考察が行われた（市川ほか　1987）。次郎構遺跡では中期末、曽利V式期を主とした住居址10数軒からなる集落址が調査され、中期末の良好な資料を提供した。後期以降として青木・石堂遺跡がある。青木遺跡（村山北割）は社口遺跡の西側約100mに位置するもので、加曽利B式期中心の後期住居址15軒、大型配石3、石棺20基などが出ている（雨宮ほか　1988）。石棺は列状に2群に分かれ、それぞれ主軸方向を異にしている。石堂遺跡B地区は後期～晩期の大規模な配石遺構で、住居址8軒以上、石棺14基以上などが出ており、方形を意識したと思われる配石北側に石棺墓群が東西に展開する（雨宮　1986, 1987b）。耳飾り200以上のほか、土偶、石棒などさまざまな遺物もある。

弥生時代　丘の公園第5遺跡（清里）で弥生後期とみられる壺形土器片が出ている程度である（雨宮　1990）。

古墳時代　西ノ原遺跡（村山西割）では五領期の住居址1軒が出ている（雨宮　1986）。また丘の公園第5遺跡では古墳時代前期の高坏片が、また小池地区土取り場遺跡では古墳時代後期（7世紀初）の遺物が多く採集されている。この時期の集落址は長坂町内で数遺跡が知られているが、台上地域では全体に少ない。

平安時代　湯沢遺跡（下黒沢）では竪穴住居27軒、掘立柱建物13棟、柵列があり、掘立柱建物には柱数の多い大型のものがある。掘立柱建物群はコの字状配置に近く、官衙的性格も想定され、牧経営に関わる施設ではないかともいわれている（雨宮　1983）。東久保遺跡（村山北割）は本遺跡西側にあり、竪穴住居33軒、掘立柱建物址7棟が出ている（雨宮　1984）。うち3・22号住は小鍛冶遺構で、多量の鉄滓・ふいご羽口が出土した。また全体的に墨書土器も多い。本遺跡の西、約250m離れた青木北遺跡（村山北割）には竪穴住居址12、掘立柱建物址5がある（森　1992）。墨書土器には「上」が多いほか、社口遺跡と同一書体の「四万」があり、集落の広がりと同時性、墨書土器の意味を考える上で興味がもたれる。また4号住は一辺6.5mの大きな竪穴で、その一辺に4カ所づつ礎石が置かれていた。当時の住居構造を窺わせる重要な発見である。ほかに石堂遺跡A地区（東井出）では住居址1軒（雨宮　1986）、大林上遺跡で住居址5軒、掘立柱建物址1棟が出ている。

中近世　当町遺跡（村山北割）で13世紀代の青磁や常滑甕などが出ている（雨宮　1987c）。青木北遺跡では上部に配石をもつ土坑墓1基があり、内部から脇差1振りが出土した。旭東久保遺跡ではピット群が出ており、建て替えを伴う多数の掘立柱建物群が想定されている。日影田遺跡では上部に配石をもつ人骨をともなう近世初頭の墓坑があり、煙草袋が副葬されていた。古堰遺跡（箕輪）では箕輪堰の旧堰跡が調査されており、社口遺跡の堰址同様に断面V字形の溝であった（萩原・田口　1996）。

このほか多数の遺跡が調査されているが、報告書が未刊のため詳細は不明である。遺跡の分布状況に関しては『町内遺跡詳細分布調査』（雨宮　1987a）で分布図と、調査された遺跡が明記されているので参考になる。中近世では土塁を巡らした土豪屋敷や城館跡が多数知られており（第3図）、それらは『山梨県の中世城館跡』（山梨県教委　1986）や『高根町誌』「第二章第三節　城址・館跡」（八巻　1990）の詳細な報告がある。

	遺跡名	時期		遺跡名	時期		遺跡名	時期		遺跡名	時期		遺跡名	時期
42	上の原A	縄・中	63	上の原C	縄・中	83	石田前	縄・平・中	103	宮の前A	縄	123	打越	縄・平・中
44	山の神、常盤	縄	64	持井A	平・中	84	上ノ反	縄・弥・平・中	104	藤代B	縄	124	坂上	縄・平・中
45	常盤A	縄・中	65	持井B	縄・平・中	85	高内A	縄・平・中	105	宮の前B	縄	125	海道前A	縄・平
46	常盤B	縄・平・中	66	於小路	平	86	大正寺	縄・平・中	106	西久保	縄・平	126	青木	縄
47	道満、細久保	縄・中	67	当町B	中	87	高内B	縄・平・中	107	後原	縄・古・中	127	梅ノ木	縄
48	東浦	縄・平・中	68	権現の木	縄・平・中	88	老ヶ森B	縄・平・中	108	長崎A	縄・古・平・中	128	青木北	平
49	矢捨	縄・平・中	69	大石畑	平	89	西ノ原B	縄・古・平	109	長崎、後原	縄・平	129	上ノ原	縄
50	糀久保	縄・中	70	西深山	中	90	菖蒲原B	縄・中	110	長崎B	縄・平・中	130	舟山	弥
51	社口、古城跡	縄・平・中	71	大坪	縄・平・中	91	宮地	縄・平	111	中久保B	縄・平	131	湯沢	縄・平
52	旭東久保B	縄・平・中	72	菖蒲原A	縄・平・中	92	御所	縄・平・中	112	宮尾根A	縄・中	132	東久保	縄・平
53	水落	縄・平・中	73	土蜂地A	縄・平	93	柳田B	縄・平・中	113	宮尾根B	縄・平	133	旭東久保A	縄・平・中
54	上の原B	縄	74	土蜂地B	平	94	沢田	平・中	114	宮尾根C	縄・平	134	川又坂上	縄・平
55	旭西久保A	縄・平・中	75	竹の内	平・中	95	中久保A	縄・平・中	115	大林原	縄・中・平	135	西ノ原A	縄・古
56	旭西久保B	平・中	76	神明	平・中	96	海道前B	縄・平・中	116	新井A	平・中	138	神木	縄・平
57	横森	縄・中	77	下原	縄・平	97	大林上	縄・近	117	西ノ入	縄・平・中	139	老ケ森	平・中
58	新井A	平・中	78	横森東下	平・中	98	海道前C	縄・平	118	新井B	縄・平	140	西原	縄
59	新井B	縄・平・中	79	横森、横森前	縄・平・中	99	中尾根	縄・平・中	119	東入	縄・古	141	柳田A	平
60	新井C	縄・平	80	堤、堤上	縄・平・中	100	堤前	縄・中	120	宮渡戸	縄・古・中	142	当町A	縄
61	大久保、八ッ牛	縄	81	雲雀沢辺成	縄・平・中	101	大坪	縄・中	121	大窪	縄・平・中			
62	山の神	縄・中	82	東田、原屋鋪	縄・平・中	102	藤代A	縄・中	122	馬場	縄・平・中			

A	旭山砦	中	G	五町田御所	中	M	大坪砦(大坪城)	中
B	白倉氏屋敷	中	H	上蔵原塁址	中	N	米倉氏屋敷	中
C	新井館	中	I	清水氏屋敷	中	O	十騎屋敷	中
D	西横森塁址	中	J	中尾根屋敷	中	P	若神子城(北城)	中
E	日向氏屋敷	中	K	大坪塁址	中	Q	若神子城(大城)	中
F	小宮山氏屋敷	中	L	大林屋敷	中	R	若神子城(南城)	中

第1表　遺跡地名表

第3章　遺構と遺物

第1節　縄文時代

縄文時代に関しては、古い順に大きく草創～早期包含層、中期前半住居址、中期後半住居址、後期住居址に分けられるので、それぞれ項を分けて報告し、各項目内の順番については遺構番号順とする。またピット・遺構外出土遺物は第4・5節で報告する。

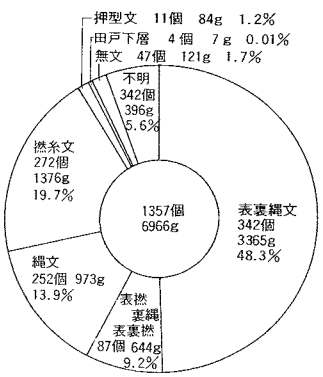
1　縄文時代草創～早期包含層と出土遺物

(1)　包含層の検出状況・層序・遺物出土状況（第16～19図,図版11・12）

A61～62・B59～63・C61～63グリッドの台地南斜面が中心的な包含層で、約14°の勾配をもつ急傾斜地である。また北台地上の近現代の溝やピットの覆土中からも遺物が少量出土した。台地斜面（遺物包含層）では遺構確認時点で調査区内に南西向きの暗褐色の層が検出され、数片の表裏縄文土器が出土した。またその部分で確認されたピットの調査時に多数の表裏縄文土器片が見つかり、暗褐色土は草創期～早期の包含層であることが予想された。そこで調査区境の西側壁に沿って南北トレンチを設定し、また直交する東西トレンチをB・C61杭付近に設定した。南北トレンチは約24mあり、低地から斜面にかけて断面をみている。傾斜変換点付近に近現代の3号溝が横切るため、斜面と低地面の層位関係が分断されているが、斜面には1～6・11層が、また低地面では1・2・10・4′～6′層が確認され、4～6層はおおよそ4′～6′と対応していた。これらのうち1・2層は耕作土・表土層で、3～5・4′・5′層が包含層である。斜面中心に堆積する3層は傾斜変換点付近まで及び、4′層上部に堆積する。また10層は4′層上に堆積し、平安時代以降の包含層と思われる。4・4′層は低地面全面にはなく、傾斜変換点から10m付近で止まっていることから、3層とともに斜面にともなう限定的な層位であろうと思われる。おそらく北台地上の縁辺部に存在した土層が崩落して再堆積したものであろう。

土器・石器のほかに礫が多数分布し、多くは被熱・赤変していた。また焼土ブロックが斜面下部～低地面に3カ所で見られた。焼土は4～5層中の堆積であり、焼土のまとまりが維持されていることから、近距離で形成されたものか、または原位置を保っている可能性がある。5′層はいわゆる黒ボク土で、八ヶ岳南麓ではよく発達している。5層から移行するもので、5層中では5層上層で黒味がより強くなっている。包含層の厚さは斜面上部で表土から5層までが約30cm、傾斜変換点付近で約60cm、低地面（斜面下方）で約110cmである。斜面中間部の覆土が厚い箇所を選んで火山灰分析を行ったところ、2層から3層上部でアカホヤ火山灰が出ており、約6400年前に3層上に火山灰が降下したらしく、アカホヤ降下以後は地形が安定的なことがわかる。台地上と斜面での土器接合事例が1例あり（第57図17）、一応3・4層は台地上または斜面上部からの再堆積土で、遺物の多くも二次堆積したものと考えておくが、層位判断の誤認も予想され、斜面での居住の可能性も残しておきたい。

遺物はB61グリッドに最も集中している。包含層全域での草創～早期土器は全体で1357点（同一個体と判断した複数片は1点とする）6966gで全て無繊維土器である。土器の内訳は第151図のとおりで、重量で割合を出すと、表裏縄文土器・表裏撚糸文土器・表撚裏縄文土器など、表裏施文土器が約6割、撚糸文土器が約2割、表縄文が約1割で、そのほか押型文土器・田戸下層式土器が1％程度存在する。この図では裏面不明の縄文土器を表縄文に含めているので、表裏縄文土器の割合が実際にはもう少し多い。表裏縄文のうち、表に単節縄文を施文したものは170点（2107g－30.2%）、無節縄文を施文したものは172点（1258g－18.0%）、表裏撚糸文は32点（178g－2.5%）、表撚裏縄文は56点（604g－8.6%）。また表縄文のうち単節は108点（447g）、無節は144点（526g）。いずれも微細化した小破片で、調査が厳寒期であったことから、土器片が凍結・解凍を経て取り上げ時に崩れたり、整理段階でも水洗によって溶けたりするものがあった。



第151図　草創～早期土器の重量比

石器は石鏃37点、砥石22点、縦長剝片13点、掻器51点、二次加工のある剝片27点以上、楔形石器15点以上、磨石・凹石24点、礫器2点のほか、黒曜石チップ388点、礫などがあり、土器と同様な分布状況を示し、南西方向への広がり

をみせている。種別ごとの分布に差異はないが、B61グリッド中央付近で掻器が集中する箇所が存在した。なお前期以降の混入も若干予想され、すべてが早期前半以前の資料であると断定できない。ただ前期以降の土器の混入が微量（第61図86・87）であることから、石器においても混入は少ないと思われる。

そのほか、焼成粘土塊が3点以上出土した。径1.5～2.5cm程度の小さなもので、土器胎土とは異なり、混和材がほとんど見られない。炭化物には大形の炭化材はないが、微小な炭化粒は多数見られた。

(2)　草創～早期の遺物

a　土器（第54～63図,図版49～55）

表裏縄文土器（表　無節縄文）：15～20・29・67～85　15は口縁と胴部の接点が潰れているため器形が確実でないが、緩やかに屈曲する角頭状口縁で、口唇1部位施文。口縁直下から2原体による縦位施文の縦羽状縄文とする。雲母を非常に多く含みもろい。厚さ7㎜。16は緩く外反する角頭状口縁部で、口唇1部位施文、縦位施文の斜縄文。厚さ8㎜。17はB62グリッド内154号ピットとC65グリッド内112号ピットの接合資料で、わずかに肥厚した丸頭状口縁部が緩く外反し、外面は一部横位施文の斜縄文であるが、縦縄文を意識するようにもみえる。厚さ7㎜。口唇施文なし。18は直立に近い形でわずかに外反する角頭状口縁で、口唇1部位施文。外面の施文方向は不規則であるが、頚部文様帯を横羽状、あるいは格子状とするようにも見られる。薄手で厚さ7㎜。19は丸頭状口縁部が緩やかに外反し、口唇は1部位施文、外面は横位施文の斜縄文。20は丸頭状口縁で口唇施文はなく、斜位施文の縦縄文であるが、撚糸文の可能性もある。内面は幅4㎝ほどの横縄文となり、内面全面施文ではないらしい。

表裏縄文土器（表　単節縄文）：1～4・7～14・26・27・35・41～66　1は同一個体片が最も多く存在した資料で、口縁～底部直上付近までが断片的にある。出土状況は約10m内に接合関係をもち、広範囲に散在する。厚さ8㎜で、表裏とも明褐色で、焼成は良いが粉っぽい。直立ぎみに立ち上がり、丸頭状口縁が緩く屈曲し、口唇1部位施文。口縁から4～6㎝幅で頚部文様帯（第II文様帯）を意識したらしい斜位施文の横縄文があり、それより下では縦位施文の斜縄文となっている。口縁部には不確実ではあるが瘤状貼付がある。内面は縄文施文しながら積み上げ、粘土帯の接合部を指頭で押圧する。胴部の張りは弱く、底部はやや尖っている。2は1カ所でまとまって出土した土器（図版12－3）。縦位施文による斜縄文で、もろい。厚さ7㎜。3は口縁部外面に長さ4.5㎝の縦長瘤状貼付文をつけ、口縁から5㎜ほど突出させ、口縁部は角頭状でゆるく屈曲する。口唇1部位施文。口縁から2㎝幅で部分的に1段の斜縄文をし、それより下を斜位施文の縦縄文としている。厚さ7㎜。4は口縁が丸頭状で弱く屈曲し、外面は同一原体の横位施文で横羽状縄文とする。胴下半が不明であるが、形骸化した頚部文様帯と思われる。厚さ6㎜。焼成良好、硬質で、雲母が特徴的である。7は口縁部に瘤を丸く貼付した瘤状貼付文をもち、丸頭で、横位施文による斜縄文。口唇1部位施文。厚さ8㎜。8は屈曲・丸頭状口縁で、口唇2部位施文する。外面は部分的に幅4㎝の頚部文様帯を縦位密接施文の斜縄文、胴部文様帯（第I文様帯）を斜位施文の横縄文としているようにみえるが、胴下半の様子が不明で、基本的に縦位施文の斜縄文かもしれない。厚さ7㎜。黒味が強く、硬質。9は弱い外反、角頭状口縁で、横位施文の斜縄文。厚さ8㎜。10は弱く屈曲した口縁部で、口唇1部位施文し、縦位施文による縦縄文である。雲母を非常に多く含み、太い縄文を施文する。厚さ6㎜。11は口唇1部位施文で、角頭口縁であり、外面は斜位施文による縦縄文。厚さ8㎜。12は緩やかに外反した丸頭状口縁で、やや肥厚し、口縁直下に一部横縄文、他は縦位施文の斜縄文。雲母を多量に含み、厚さは7～9㎜。13は強く屈曲した角頭状口縁で、外面は同一原体で斜位施文による横羽状縄文、もしくは縦縄文とする。厚さ8～10㎜。14は口縁直下が一部縦縄文、下を縦に近い斜縄文としたもので基本的には縦縄文かと思われる。屈曲・丸頭状口縁で、口唇施文はない。厚さ7㎜。

表裏撚糸文：21・105～126　21は外面縦位施文、内面横位施文する。角頭状口縁で口唇施文はなく、弱く外反し、厚さは6㎜。

表撚裏縄文：22・31～34　22は口縁が強く屈曲し、角頭状で肥厚し、口唇1部位施文である。外面に縦位施文するが、連続的ではない。31～34は同一個体で、内面に2種の無節縄文を施文した胴部片。外面の撚糸文は細く密で、井草II・大丸式～夏島式的な撚糸文である。厚さ6㎜と薄手。

縄文（無節縄文）：91～102　91～95は丸頭状口縁で、口唇施文はない。横位施文の斜縄文で、粗い原体である。102は口唇が肥厚した井草式的な土器。

縄文（単節縄文）　5・28・36・38・88～90・103・104　5は厚さ5㎜の薄手土器で、直立口縁。口縁部には単位不明な複数の小波状が付き、内面には指頭痕を多数残す。外面は横位施文の横羽状縄文とし、文様帯を意識しているようである。雲母を多く含み、硬質。103・104は口唇部が肥厚し、2部位施文した井草式的な土器である。

撚糸文：6・23～25・30・37・39・127～137　6は角頭状口縁で直立し、外面に粗大撚糸文を浅く施文し、裏面は平らなヘラ状工具で平滑に調整する。稲荷台式土器の模倣かと思われる。胎土には結晶片岩が含まれ、県外からの搬入品らしい（第4章第3節参照）。厚さ8～10㎜。斜面やや上部から集中域を離れて出土している。23は外反口縁で、丸頭状。厚さ7㎜で、同一原体により網目状施文する。24は口縁が細長くのび、緩く屈曲し、丸頭状で、口唇施文はない。雲母を非常に多く含み、もろい。25は緩く外反した丸頭状口縁で、口唇施文はない。

無文：40・151　40は丸底の底部、151は時期不明の無文土器。

押型文：138～148　138は厚さ1.2～1.4㎝の厚い土器で、振幅の大きな山形文が縦位施文される。いわゆる立野式かと思われる。同程度の破片がもう1片あり、同一個体と思われる。146～148は同一で、下部に非常に太い単節縄文を、上部に楕円押型文を施文した異種施文土器で、厚さ7㎜。焼成は良好で、硬質。ともに5´層上層で出土している。

田戸下層式：149・150　149・150は同一個体で、部位も同じである。頭の平らな棒状工具で、器面が軟らかな時点で浅い沈線を描き、沈線の両脇がわずかに隆起する。草創期の微隆起線文土器に類似した雰囲気をもっている。沈線間を半截竹管状工具で斜めに連続刺突する。厚さ5㎜。ほかに2点の小破片がある。

これらの変遷案については第5章第2節に記す。

b　**石器**（第64～74図,図版55～57）

凹石：152～164　1面にのみ凹部をもつもの（153・154・157～162・164）、2面に凹部をもつもの（155・156・163）、3面に凹部をもつもの（161・163・164）、周縁部・稜に磨り部をもつもの（161～164）、端部に敲打痕をもつもの（157・158）がある。石材は安山岩円礫で、凹部は中期の凹石に比べると浅い。総数13点。

磨石：165～175　磨り面をもつもの（165）、周縁部・稜に磨り部をもつもの（166～175）がある。円礫素材で、稜磨りを主とし、面的な磨り石は165のみである。磨石・凹石が相当数あるにもかかわらず、石皿・台石は確認されていない。石材は安山岩円礫が主で、ほかに砂岩がある。総数11点。

砥石：176～186　細砥～荒砥があり、176・178が最も細かく滑らかで、182～186が最も粗い。177・179～181は中間的な粗さであるが、細砥に近い。厚さ0.4～2.1㎝で、183を除きいずれも両面を砥面とする。全て小型・板状の平砥石で、有溝砥石はない。石材は花崗岩の1例（185）を除き、すべて砂岩である。擦痕は177に長軸方向にかすかに認められるものの、それ以外では肉眼的にはわからない。なお176・178・179・181・183には被熱・赤変が認められる。また186は黒変し、脆弱になっている。図示した以外に11点の砥石小破片があり、総数は22点。

縦長剝片：187～196　幅1～1.4㎝で、側縁が平行に近く、一面に1本の稜線をもつ石刃状の剝片（187～191）とそうでないもの（192～196）がある。いずれも黒曜石製。いずれも連続的に作り出した縦長剝片ではなく、石刃ではない。図示した他に167号ピットに両側縁二次調整した原石利用剝片1点、B64グリッドに1点、129号ピット内に石核状の剝片1点がある。総数13点。

石鏃：197～232　正三角形に近い無茎平基三角鏃（197～207：11点）、弱い抉りをもつ無茎凹基三角鏃（208～216：9点）、縦長で抉りがない無茎平基鏃（217～219：3点）、縦長で弱い抉りがある無茎凹基鏃（220・221：2点）、剝片鏃（222～225：4点）、縦長で抉りが大きな無茎凹基鏃（226～229：4点）、基部が丸い円基鏃（230～232：3点）があり、三角鏃・凹基三角鏃が最も多い。このうち226は鍬形鏃になるかと思われる。また228・229は他に比べ大形で、前期以降の混入の可能性がある。石材は229を除き黒曜石。ほかに10号住に無茎平基三角鏃1がある（第171図8）。総数37点（228・229を含む）。

掻器：233～275・282・286・299　円形で、素材側縁に調整痕が及ぶ拇指状掻器（233～241）、円形に近い不整形で刃部調整が部分的な不整円形掻器（242～270）、縦長で長軸端部に刃部をもつ縦長掻器（271～275）がある。不整形掻器には刃部の反対側に平らな一辺をもつものがあり（245・246・249・260・263・266・267・269・270）、辺側が厚く、打点側である場合が多い。またほとんどが片面調整で、湾曲した素材を用いている。縦長掻器は素材端部を刃部とし、側面にも二次加工痕をもつものがある（274・275など）。282は掻器片で、形態は不明。299は黒色緻密安山岩の大形掻器で、刃部両面に磨耗痕をもつ。刃部の反対側（基部側）に打点があり、湾曲した素材で刃部側が広く基部側が狭い狭基である。なお264は掻器類似の原石。ほかに63号ピットに不整円形掻器1・掻器片1、167号ピット・1号溝・6号溝・表採資料に不整円形掻器各1の計6点がある（第171図1～5・7）。総数は51点。石材は、黒曜石49点、珪質頁岩1点、黒色緻密安山岩1点。

石核状礫器：288　周縁部に両面加工した石核状（亀甲形）を呈す。珪質頁岩製で、この石材を素材とした製品はあまりなく、石核状の両面礫器と思われる。1点のみ。

石錐：289　素材端部を錐先とする。1点のみ。

楔形石器：276～280・285・294、第171図6　図示したほかに7点以上の楔形石器があり、総数は15点以上。
二次加工ある剝片：281・283・284・287・290～293・295～298　ほかに14点以上あり、総数は27点以上。
礫器：300　頁岩円礫を用い、長軸方向の一辺に片刃を形成した片面礫器で、他は自然面のまま。1点のみ。
その他の剝片類：図示していないが多数あり、黒曜石チップ388点（320.7ｇ）のほかチャート・頁岩チップ17点（31.2ｇ）などがある。

2　縄文時代中期前半の住居址（34号住）

34号住（第20・75・76図,図版13・58・59）（**位置**）O・P17・18グリッド。南台地上。（**重複**）北西隅をわずかに30号住に切られる。（**検出状況**）遺構検出面が表土直下であったため、当初住居プランは見えなかった。いくつかのピット状の黒色部を半截したところ、狢沢式期の土器(2)が出土した。そこで住居を予想し、改めて精査しておおよその見当をつけ、ベルトを設定したところ、ベルト中から炉体土器(1)が出土し、住居として確定した。床面には木の株がいくつかあり、根による撹乱が多い。（**形状・規模**）長軸長5.54m×短軸長5.10m。隅丸五角形に近い円形。中央やや北寄りに炉体土器が埋設され、その周囲に5本の柱穴がある。（**覆土**）大きく2層に分けられるが、2層直上面付近に炉体土器口縁部片が同一レベルで遺存していたこと、また遺物の多くは1層出土であったことから、2層上面が生活面と思われる。（**遺物出土状況**）炉体土器(1)以外に炉周辺からは横位で小型深鉢形土器(2)が出土し、また大形の浅鉢形土器の小破片が炉北側に散在していた（18)。いずれも床面として完掘した面より浮くが、2層上面を床面と推定した場合、床面からやや浮上した位置出土となる。（**床**）硬化面がなかったため、柱穴確認のために掘り方まで下げている。（**柱穴**）P1～5を主柱穴とみた。そのうちP3は撹乱部にあたり、不確実である。深さはP3・4を除き一47～55㎝と一定している。P3～5の柱穴は壁から大きく離れているが、P1・2はやや壁に接して存在する。柱穴間の距離はP1－P2間2.0m、P1－P5間2.7mである。奥壁側にあたるP4には、覆土中にクルミの炭化核が見いだされた。（**炉**）深鉢形土器の胴下半を欠く土器を正位に埋設した埋甕炉。口縁部が破損しているが、本来その分だけ床面上から突出していたのであろう。焼土・炭化物層はなかった。（**壁溝**）床を掘り方付近まで下げてしまったため、壁溝は南側にのみ確認された。ただし不明瞭である。（**壁**）確認面から床までは30㎝程度であり、だらだらした立ち上がりである。（**その他の施設**）なし。（**遺物**）1は炉体土器、2は横位出土。どちらも平縁で、3段の帯状楕円区画をもつ類似した文様構成の土器であるが、楕円区画内の充填文様のあり方が違う。また18は炉北側に散在した浅鉢である。そのほかに五領ヶ台式土器が数片（6・8・9・12・13）出土した。14は胴部に羽状沈線文をもつ後期土器であろう。石器は打斧片が6点出土した。いずれも欠損品である。（**時期**）狢沢式期。

3　縄文時代中期後半の住居址（3・7～10・13・14・27・28・30～33・36号住）

3号住（第21・77図,図版14・59）（**位置**）B・C59・60グリッド。草創～早期包含層上層にあたり、低地に移行しつつある南向き傾斜面に位置する。（**重複**）なし。（**検出状況**）じょれんがけ中に弧状の小礫群が検出され、中期末～後期敷石住居と予測された。また中心あたりから土器底部が出土し、炉体土器底部かと思われた。礫を取り上げ後、ピットを探したが、遺構面が褐色土のためよくわからなかった。全体を随分下げて感触を手がかりに掘ってみたところ、柱穴らしきピットが確認された。（**形状・規模**）円形と思われるが、南壁が斜面のためにない。推定主軸長3.9m×推定交軸長4.2m。（**覆土**）わずかに中央から北側に浅く遺存し、南側にはない。（**遺物出土状況**）礫中に混じって土器片や石器がみられ、礫の一部に混ぜられたようである。（**床**）ほとんど遺存しない。（**柱穴**）5本程度の主柱穴らしいピットがある（P1～5)。一応、正五角形に配置し、中期的な柱穴構造である。うちP3・4には建て替えを示すようなピットがある。柱穴間隔はP1－P5間1.7m、P1－P2間1.6m、P2－P3間1.6m、P3－P4間1.8m、P4－P5間2.2mである。（**炉**）土器底部を炉体土器の残存と推定した。石囲い、焼土はないが、炉体土器ならば方形石囲埋甕炉であろう。（**壁溝**）北側の柱穴をつなぐように弧状の溝が壁際に出ており、礫群の内側に巡っている。（**壁**）ゆるやかに立ち上がる。壁の高さは北壁で18㎝程度。（**その他の施設**）礫群は直径10㎝程度の安山岩礫を約120個用いている。その基部には長軸長40㎝ほどの大きめの礫が一部弧状に並んでいた。それらの礫も円礫安山岩で、平石ではない。なお礫は全て遺物番号を付けて取り上げた。（**遺物**）1は炉体土器と思われる底部。その他の遺物は礫中に混じって出土した小片である。4の砥石は平安以降のものとは異なる。（**時期**）2の土器や柱穴配置から推定すると中期末かと思われるが、不

明である。後期初頭の可能性も強い。

7号住（第21・77図，図版14・59・60）（**位置**）A・B67・68グリッド。北台地上。（**重複**）11号溝に東側を切られる。また炉前面に住居より古い土坑状のピットが重複する。（**検出状況**）重機での表土剝ぎ中に炉石正面（南側）の石を持ち上げて確認された。炉石の奥壁には大きな株があり、炉石は木によって耕作などから保護されてきたようである。住居プランはほとんど不明であったが、かろうじて柱穴2本（P1・2）が出たため、残る柱穴を探した。柱穴を探す段階で床面を相当下げている。（**形状・規模**）隅丸方形で、柱穴は壁のコーナー寄りに4本出た。しかしP3・4はあやしい。炉は中央奥壁寄りにある。（**覆土**）上層が黒褐色土、下層が黄褐色土である。（**遺物出土状況**）推定床面上・覆土中に少量散在。（**床**）硬化面がなく不明。（**柱穴**）主柱穴がP1～4と思われるが、柱穴配置からすると炉裏にももう1本あった可能性がある。ただ株のため調査不能であった。柱穴間隔はP1－P4間1.9m、P1－P2間2.2m、P2－P3間2.0m。（**炉**）4枚の安山岩平石による方形石囲炉で、82×72cm、深さ30cm。奥壁側の東北隅と西北隅には小礫が添えてあった。（**壁溝**）検出していない。（**壁**）明確ではない。（**その他の施設**）なし。（**遺物**）曽利II式期を中心に破片がある。7は堀之内2式期の注口土器であり、混入品。（**時期**）土器から判断すると曽利II式期であるが、方形石囲炉の形態はIII式期以降に多い。

8号住（第22・79図，図版15・60）（**位置**）C68・69グリッド。北台地上。（**重複**）なし。（**検出状況**）調査区外にかかり約半分ほど調査。炉を中心とした黒褐色のシミを確認し住居と認定したが、当初プランが不明確であった。柱穴・壁溝を見つけ、プランがはっきりした。また調査区境に設定したセクション面の再精査中に、断面中に埋設土器を検出した。位置的には埋甕らしい。（**形状・規模**）推定長軸長5.7m×短軸現存長3.3m・推定5.4m。推定円形プランで、中央奥寄りに炉がある。（**覆土**）1・2層が覆土で、4・5層は床部分であろう。覆土中には炭化物粒が多く散っていた。（**遺物出土状況**）炉内から1・8・17など縄文・結節縄文の土器が出土した。中でも1は炉底面に横位に接している。炉以外では小破片のみである。特殊な出土状況としては、P3覆土上層に打製石斧2点を合わせて立てたような状況で出土した（19・20）。（**床**）硬化面があまりはっきりしなかったので、柱穴を探すために下げた。（**柱穴**）調査区内では3本の主柱穴が出ている（P1～3）。五角形配置を示すものである。柱穴の深さは57～75cmと深い。柱穴間隔はP1－P2間2.4m、P2－P3間2.3m。（**炉**）100×100cm、深さ48cmの炉で、本来方形石囲炉と思われるが、方形の掘り方のみ遺存し、炉石は撤去された状況であった。ただ正面側の一辺に詰め石かとも思われる礫群が並んでいた。覆土には炭化物が多く堆積し、また炉底は非常によく赤変し、硬化していた。炉内出土の炭化材を同定したところクリで、^{14}C年代測定では4,350±110BPという結果が得られた。（**壁溝**）柱穴に接して全周すると思われる。幅広で、浅い。（**壁**）壁溝の立ち上がりを壁とした。南側では傾斜の関係でほとんど遺存していない。（**その他の施設**）埋甕が南側にある。ピット覆土中に斜位に底部のみ遺存し（14）、底部に接して別個体の口縁部片が出土した（3）。3の埋設後に14を埋設した状況である。14は耕作等で上半が欠損したと思われるが、4層直上面を床面とみなすと、埋甕にしては埋設位置がやや高いように思われる。（**遺物**）縄文施文の土器が主体である。加曽利E式的な8や、結節縄文を伴う1・17、連弧文土器（7）がある。また18は浅鉢内面に赤色塗彩している。石器は打斧2、磨石・凹石2で、19・20が接して出土した打斧である。自然面を残す薄い剝片を使用し、一部磨いている。実用的ではなく、また石材も通常の打斧とは違っており、儀器的なものであろう。ほかに黒曜石製石錐1（未図化）あり。（**時期**）曽利II式期。

9号住（第23・80～86図，図版15・16・61～64）（**位置**）B・C70・71グリッド。北台地上。（**重複**）東側をわずかに6号住（平安）によって切られる。またほぼ中央部に近現代の浅い溝がかかる。（**検出状況**）褐色のシミを住居と認定し掘り始めたが、当初プランは不明であり、柱穴を確認した後に壁が確定した。（**形状・規模**）隅丸方形に近い円形で、主軸長5.0m×推定交軸長5.5m。中央奥寄りに炉がある。（**覆土**）浅い。（**遺物出土状況**）炉周辺、炉南側を中心に覆土中から小破片が多く出土。特殊な出土状況としては、北壁面の向かって右側に完形のミニチュア土器が、また北壁左側壁溝上に石皿と磨石がセットで出土した。石皿はやや斜めに上向きで、磨石は石皿に接して出土した。また南側の推定出入り口部に石蓋状の平石をともなう埋甕（1）があった。（**床**）硬化面はない。（**柱穴**）5本柱穴（P1～5）で、深さは45～64cmと一定している。配置は横方向に長く、P1－P5間3.2m、P1－P2間2.2m、P2－P3間1.8m、P3－P4間2.1m、P4－P5間2.7mである。P3を除きいずれも同じ位置での柱穴の掘り直しが行われたらしく、柱穴の重複がある。とくにP2は40cmほど内側に建て替えている。P1からはクリの炭化材が出土した。（**炉**）125×120cm、深さ22cmの炉で、方形石囲炉で

あったと思われるが、炉石は遺存しない。ただ炉石設置時の掘り方の穴が残り、また詰め石状の礫が炉中にあった。炉底はローム質の褐色土が非常に良く赤変・硬化していた。（壁溝）柱穴の外側20cm程度の位置に狭く浅い溝が全周する。（壁）緩やかに立ち上がる。（その他の施設）胴下半を欠く埋甕が1個、壁溝の内側15cmのところに正位で埋設されていた。内外面に煮沸痕がある深鉢形土器で、土器内に長さ35cmの安山岩平石が斜めに入っていた。蓋石と思われ、埋甕内に空洞部があったために石蓋が落ち込んだのであろう。ただ、幅が狭い石なので蓋をすると隙間ができてしまう。また埋甕にともなう石蓋は県内では非常に少ない。（遺物）全点実測で606点ある。埋甕（1）をはじめとする曽利III式期の土器（12・14・15・17）、曽利IV式期の土器（2・7・8・10）、加曽利E式的な土器（13・34～39）がある。また曽利II式期（16・31・32）も混じる。とくに34～39は胴部に剣先状沈線文をもつ土器であり珍しい。石器は打斧1、横刃形石器1、石皿1、磨石1、凹石5、砥石1、石鏃1、石錐1がある。（時期）埋甕が住居の時期を示すのであれば、曽利III式期であり、曽利IV式期にかけて土器廃棄が行われたらしい。

10号住（第24・87図，図版17・65）（位置）C71・72グリッド。北台地上。（重複）21号ピットが重複する。（検出状況）調査区外にかかって約半分確認。プランは不明確で、一応、土色の違いで確認した当初のラインを住居プランとしたが、もっと大きい可能性が高い。（形状・規模）円形で、炉が奥壁寄りにある。長軸長は4.0m、現存短軸長は2.8m。柱穴らしいものがいくつか出ているが、確実視できるものは2本（P1・2）である。（覆土）耕作の影響で覆土は薄く、覆土中には炭化粒がやや目立った。（遺物出土状況）住居内に小破片が少量散在する。（床）硬化面はなく不明確。（柱穴）P1・2がそれらしものであり、4本主柱かと思われるが定かではない。柱穴間距離はP1－P2間が2.6mである。（炉）92×87cm、深さ48cmの石囲炉で、石は2辺に部分的に残る。4枚組の方形石囲いではなく、複数の礫を用いた円形石囲いらしい。炉石は斜めに立てている。焼土層はなく、炉底も赤変していない。なおオニグルミ12片が検出されている。（壁溝）ないらしい。（その他の施設）なし。（遺物）曽利II式（1・2・8）のほかIII式期以降と思われるものもある（4～7）。4は竹管施文による地紋のみの土器。12は後期か。ほかに草創～早期の小型三角鏃1（第171図8）。（時期）炉形態から曽利II式期以前と思われるが、はっきりしない。

13号住（第24・88図，図版17・66）（位置）A・B70・71グリッド。北台地上。（重複）29号ピットが重複。また西壁は畑境の溝に切られ、また崖状に西へ向かって下がるため、床は遺存していない。なお県埋文調査の14号試掘坑が炉裏に位置する。（検出状況）炉中心に土色の異なる部分を住居址とし、調査を進めた。東壁と南壁が不明であったが、ピット・埋甕・壁溝の検出で確定した。（形状・規模）隅丸方形に近い円形。主軸長4.5m、推定交軸長4.6m。炉が中央奥壁寄りにあり、柱穴（P1～4）が長方形に配置する。主軸線上に埋甕が1個埋設されている（1）。（覆土）ごく浅く、北側では覆土の厚さが20cmほどあるものの、炉から南ではほとんどない。（遺物出土状況）小破片が散在。（床）きわだった硬化面はないが、全体に床らしくしまっている。（柱穴）主柱は4本（P1～4）で、深さは51～66cmと安定する。P1はだるま状で、建て替えが予想されるが、他は単独である。奥壁側の2本（P2・3）は壁溝に接して存在し、P4は15cmほど離れている。9号住と同様に主軸ラインに対して交軸方向に長い。柱穴間距離はP1－P2間2.4m、P2－P3間2.7m、P3－P4間2.3m、P4－P1間2.8mである。柱穴中には褐色土が入り、しまりは弱い。（炉）110×100cm、深さ37cmの切りごたつ状の方形石囲炉で、正面と東側の2枚の石以外はない。掘り方には炉石を設置した凹みが残る。また炉底はドーナッツ状に良く赤変・硬化していた。（壁溝）床のない南西側以外は全周する。埋甕の位置が壁溝中か、あるいは埋甕両脇で壁溝が途切れるのかは微妙である。（壁）壁溝から緩やかに立ち上がる。（その他の施設）埋甕が推定出入り口部の周溝中にある。口縁及び胴部を欠く深鉢形土器。（遺物）埋甕（1）をはじめ、曽利IV式期の土器片が少量ある程度。石器は凹石4、小型磨斧1、掻器？2がある。（時期）曽利III～IV式期。

14号住（第25・89・90図，図版17・18・66）（位置）A72グリッド。北台地上で調査区内では最北端。西側は深く落ちる崖となっている。（重複）近現代の溝と思われる14号溝と15号溝が2本平行して住居東側に通っている。溝底面は床面下まで達するため、溝の部分では床面が遺存してない。（検出状況）15号溝調査中に東側炉石にあたり、住居址の存在が判明した。拡張して住居全体の把握に努めたが、西側は表土から浅く、また崖となって落ちているため、床は残っていない状況であった。また炉北側に大きな株があり根が床面まで達していたため、炉北側は撹乱状態である。（形状・規模）楕円形か。炉が中央奥壁寄りに位置し、また南側正面に埋甕1個がある

（1・9）。柱穴は2本確認。（覆土）中央から西半分は住居址覆土がほとんどないと思われる。炉南側に焼土が薄く堆積した面があった。炉石レベルから考えても、この焼土面直下が当時の床面と思われる。（遺物出土状況）東側半分を中心に土器が出土した。2・3がそれぞれまとまって床面付近から出土。（床）西半分では軟弱。その他も硬化した部分はない。（柱穴）P1・2が主柱であろうと思われるが、P2はやや疑問である。その他の柱穴は遺存していないが、4本主柱であろう。（炉）107×98cm、深さ55cmの切りごたつ状の方形石囲炉である。南・東側は残るが、西・北側はない。正面の炉石には上が平坦で大きな石を用いている。東側炉石に接して11の異形自然石が出土。炉底はドーナッツ状に赤変・硬化していた。また炉石をはずして炉掘り方を調査したところ、炉の東南にもう1カ所のドーナッツ状赤変部があり、旧炉であろうと思われた。また炉正面の焼土は地床炉か。（壁溝）なし。（その他の施設）埋甕が1個埋設されている。底部付近を欠く深鉢形土器を正位埋設したもの（1）で、内部に別個体の鉢形土器底部付近を入れ子にする（9）。調査時点では別個体とはわからなかった。（遺物）曽利III式期が主で、加曽利E式をともなう（2）。石器は凹石1、石鏃1のほか、手のような形をした異形自然石がある（11）。加工痕はないものの滑らかで、祭祀具的な感じを受ける。（時期）曽利III式期。

27号住（第26・90図,図版18・67）（位置）P14•15グリッド。南台地上。（重複）南東側に現代の林道が通過しているため、のり面で深く削られている。（検出状況）表土剝ぎ中に炉の石組みを発見。切り株が炉北側にあり、炉石だけはよく保護されていた。（形状・規模）円形プランと思われるが、約3分の2を欠損しており、また地表から床までがごく浅いため、確実ではない。現存主軸長4.2m×推定交軸長4.8m。（覆土）ごく薄い。（遺物出土状況）炉体土器以外はほとんど土器片が出ていない。（床）西側は立木の根等による撹乱で荒れた状態であり、床面はほとんど遺存していない。（柱穴）P1・2が主柱穴と思われるが、あまり明確ではない。他の小ピットは根などの穴である。全体では6本柱穴か。（炉）87×97cm（炉石を含む）、深さ25cmの方形石囲い埋甕炉。炉は4個の安山岩を主に使用して組んでおり、奥壁側の石は平板な石を立てているが、それ以外は棒状の滑らかな石を平置きして用いる。方形石囲炉の事例としては曽利I式期では珍しく、曽利II式期以降につながる炉形態の先駆例であろう。とくに奥壁のみ立てている点は興味深い。炉中央に胴下半を欠く埋甕炉（炉体土器）が正位で設置されている（1）。炉底より浮いており、また土器内外には焼土層・炭化物層などはない。炉石側面（北側の炉石では上から8cm程度）・炉石上面は良く赤変していた。（壁溝）西側に一部幅広の壁溝がある。北側では確認できなかった。（壁）明確なものではない。（その他の施設）なし。（遺物）5単位の胴部文様をもつ炉体土器（1）、土器片のほか、凹石1があるのみ。（時期）曽利I式期。

28号住（第26・27・91・92図,図版18・19・67・68）（位置）南台地上。N・O14•15グリッドで、27号住西に隣接。（重複）東南側に林道が通り、住居の壁の一部をのり面で削られている。また住居内炉西側に408号ピットが重複している。ただし、住居内出土遺物と408号ピット内出土遺物との接合事例が数例認められるので、408号ピットは住居と一体の可能性がある。（検出状況）重機による表土剝ぎの段階で遺物が多く出土したため、土色の違いで住居と認定し調査を始めたところ、炉石がでて確定した。しかし柱穴・壁がなかなかわからずに苦心した。（形状・規模）隅丸六角形に近い円形。推定主軸長4.1m×推定交軸長4.8m。炉は中央奥壁寄りにある。（覆土）ごく浅い。（遺物出土状況）住居内全体に散在して出土した。接合状況は408号ピット＋住居内例のほか、距離のある接合が多数認められる。そのほか西側周溝付近から14が横位で出土した。（床）はっきりしない。炉石ののる面が床であろうが、柱穴探しのために相当床を下げている。（柱穴）柱穴としてP1～7がある。P1・3・4・5・7が主柱で、おそらく6～7本主柱穴であろう。ただ炉裏にはカラマツの根があり、炉裏の柱穴の有無は不明である。（炉）礫3個が並んでいるが、本来は円形、あるいは楕円形石囲炉であろう。炉石は平置きしたもので、炉内掘り方は浅い。（壁溝）北側～西側にかけて壁溝がある。浅く、不明確である。（壁）北側には壁がかろうじて遺存しているが、南側にはほとんど残っていない。なお炉内よりオニグルミ炭化核6片が出ている。（その他の施設）408号ピットは住居内貯蔵穴などの特殊施設の可能性がある。（遺物）破片では井戸尻式かと思われるものがあるが、主体は曽利I式期。1は水煙把手付深鉢で、正面の把手を左側面にして図化した。おそらく4単位の把手をもつ。把手部はさなぎ状を呈し、中空で、正面に2孔、両側面に3孔づつ、内面に1孔が開く。胴部片が少ないため、高さは不明である。一般に、この手の土器が住居内から出土することは希で、1遺跡から出土する個体数も多くはなく、また把手だけが単独で出ることがある。3も変わった器形である。特殊遺物として土製スプーンがある（19）。石器は打斧3、横刃形石器1、凹石2がある。（時期）曽利I式期。

30号住（第27・93図,図版19・20・69）（**位置**）N・O17･18グリッド。南側台地上。（**重複**）29号住（平安）に切られ、34号住を切る。（**検出状況**）じょれんがけの際に炉が出たため、プランを後から探した。当初プランはわからなかったが、炉石面を床とみなして柱穴探しをし、壁を決めた。（**形状・規模**）円形で、炉は中央奥寄りにある。炉裏の柱穴と炉を通るラインを主軸とみなすと、炉も主軸方向を向く。主軸長4.9×推定交軸長4.7m。重複によって約3分の1は欠失している。（**覆土**）浅い。（**遺物出土状況**）全体に少ないが、P4脇にほぼ完全な深鉢形土器が斜位で出土した（1）。壁溝中の浅い凹みに置かれた状況である。重複したピット中の埋置土器の可能性もないわけではないが、住居に伴うものと考えてよかろう。主軸線からは多少ずれているものの、埋甕的な機能も想定できる。（**床**）硬化面はない。（**柱穴**）壁溝中の多数のピットのうちP1～5を主柱とみなした。P1・4・5については柱穴として安定しているが、P2・3はやや浅く、またP2の場合、主柱としては内側に寄りすぎた感じがある。全体では7本主柱の住居であろう。（**炉**）7個の炉石を平置きした楕円形、あるいは長方形石囲炉。炉内に焼土層はないものの、炉石は良く被熱していた。炉の規模は100×88㎝、深さ27㎝で、住居の主軸方向に長いという特徴がある。想像をたくましくすれば、7個の礫が住居プラン、柱穴配置と対応しているように見え、炉自体が住居構造を象徴するようにみえる。（**壁溝**）柱穴をつなぐように幅広の壁溝が全周する。ただ通常の壁溝とは違い、漠然としたものである。（**壁**）壁溝から緩やかに立ち上がる。（**その他の施設**）P3脇に立石状の石が出土した。（**遺物**）1は壁溝中出土の土器。石器は打斧1、横刃形石器1、剝片1、磨斧片1、石鏃1である。また土偶胴部片が1点出土している（出土地点は不明）。（**時期**）曽利Ⅰ式期。

31号住（第28・93～101図,図版20・21・69～75）（**位置**）N・O18・19グリッド。南台地上。（**重複**）なし。（**検出状況**）じょれんがけ中に土器が多量に出土し、土色の違いで住居を設定、調査を開始。土器の集中域を当初住居プランと考え、柱穴を確認しながら確定していった。（**形状・規模**）横に長い楕円形。P1・7間の中心とP4を結ぶラインが主軸線である。主軸長5.8×交軸長6.4m。炉は中央奥壁寄りにある。主柱穴は7本。（**覆土**）浅い。P7北側には焼土が床面からやや浮上して堆積していた。（**遺物出土状況**）住居中央を中心に5.2×4.0mの範囲で土器が集中。とくに炉の南側に多い。炉南側では床面近くに、また北東・北西側では浮上して出土し、個体ごとにまとまって出土したものが多い。炉内からは炉にはめ込まれたように丸石が出土した。住居廃絶時に炉・住居の使用停止を意味するために炉を封鎖したのか、あるいは丸石祭祀の中で意味があって入れたのかはわからない。偶然でないことは確かで、たいへんおもしろい出方であり、類例も知らない。（**床**）硬化面はない。（**柱穴**）P1～7の7本主柱。柱穴間距離はP1－P2間2.8m、P2－P3間2.2m、P3－P4間2.0m、P4－P5間2.1m、P5－P6間1.8m、P6－P7間2.1m、P7－P1間1.6m。深さは51～69㎝と安定している。P2・3にはそれぞれ建て替えかと思われるピットが重複するが、他には見られない。（**炉**）炉石6個を平置きした円形、あるいは方形石囲炉。炉の規模は100×99㎝。炉内よりオニグルミ炭化核6片が出土。（**壁溝**）主柱穴の外側10㎝位のところ、あるいは柱穴に接して全周する。壁溝はあまり明確ではなかった。また壁溝中にほぼ一定の間隔で小ピットがある。12～13本ほどが1.1m～2.1m間隔で並んでいる。深さは10～35㎝と浅いものである。（**壁**）壁溝から緩やかに立ち上がる。（**その他の施設**）P8からは石鏃2（82・83）、凹石1（74）、珪質頁岩フレイクが出土しており、貯蔵穴等の施設である可能性がある。（**遺物**）土器は多量で、図化した土器は46点。楕円区画の多段構成をもつなど井戸尻式深鉢形土器（15～17・19）、曽利Ⅰ式期の縦位条線文深鉢形土器（1～9・21～31・38・40）、縄文地紋土器（14・41）、無文土器（35）、鉢形土器（43）、壺形土器（20）、浅鉢形土器（45）、台形土器（46）がある。大形土器に井戸尻式土器が多く見られる傾向があり、器種によって古手の文様を残すものがあるのか、または貯蔵用土器は煮沸用土器よりも寿命が長いためこうした現象が起こるのだろうか。45は胎土中に地元ではみられない結晶片岩を多く含み、群馬方面からの流入が想定できる。石器は40点あり、打斧14、凹石10、磨石2、横刃形石器が4、丸石2、石鏃6、石錐1である。（**時期**）曽利Ⅰ式期。

32号住（第29・102～105図,図版22・23・75～77）（**位置**）N・O21・22グリッド。南台地上。（**重複**）なし。（**検出状況**）土色の違い・遺物の広がりで住居プランを設定し、柱穴・壁溝を検出しながら設定し直した。西側約半分は調査区外のため未調査。（**形状・規模**）全掘していないので形状・規模ともに明らかではないが、主軸長6.0m×推定交軸長5.4m（現存交軸長3.9m）の楕円形、あるいは隅丸六角形に近い楕円形であろう。炉の向き、および炉とP4を通るラインを主軸線と考えることができる。（**覆土**）深さ58㎝と同時期のほかの住居に比べると深い。全体的に炭化粒が多く認められた。（**遺物出土状況**）炉南西に曽利Ⅰ式の大形深鉢が床面上に伏せ

た状態で出土し（1）、胴～底部は東側へ倒れていた。炉南には小形深鉢が出土した（3）。また炉の北側には深鉢が（2）、北東コーナー部からは無文の深鉢が出土している（9）。このように点数は少ないものの復元可能な個体がまとまっていた。それら以外は小破片である。**（床）**全体に硬化面がなく、炉石面レベルを床面と考えた。**（柱穴）**深めのピットが多数あり、主柱穴の認定は難しいが、P1～4が主柱穴で、全体ではP4を炉裏の主柱として7本であろう。P1～4はいずれも58～61cmと安定した深さである。また柱穴間距離はP1－P2間2.0m、P2－P3間2.3m、P3－P4間2.3mである。**（炉）**主に炉石7個を長方形に平置きした石囲炉。主軸方向に炉の主軸を合わせ、30・31号住と同様に正面には2個の礫で焚き口部としている。規模は124×77cm、深さ20cm。炉底には焼土層が、また炉南側には床面上に焼土が堆積していた。床面で地床炉的に燃焼して生じた感じではなく、炉から掻き出したような状況であった。また炉石は東西両側と南側炉石がよく被熱・赤変していた。また北側の炉石は表面が全体によく磨かれていた。**（壁溝）**柱穴をつなぐように幅広で浅い壁溝が全周する。30・31号住に類似した壁溝である。**（その他の施設）**炉裏に貯蔵穴状のピットがあり、覆土中から大形の炭化材が出ている。ピット自体が住居と同一時期かどうか不明ではあるが、そばの床面からも炭化材が出ており、一応同時期の住居内遺構とみなした。また炭化材の樹種同定を行っている。火災住居の可能性もある。**（遺物）**13点図化しているが、11・13は異時期である。縦位条線文土器（1・2・6・8・10）のほか、縄文地紋土器（3）、無文土器（9）がある。9の器形は曽利I～II式期のものであり、文様を完全に省略した珍しい土器である。1は長胴で、胴部文様に人体文を2単位持つ。また頚部文様帯にはX字把手の初源的な小把手が4単位付けられているのが注意される。石器は打斧3、凹石8、フレイク1、石鏃2、石錐1。**（時期）**曽利I式期。

33号住（第30・105・106図,図版23・78）**（位置）**N・O15・16グリッド。南台地上。**（重複）**28号住とわずかに接する。**（検出状況）**28号住調査中に、壁外からも土器片が出ることがわかり、再度遺構確認を行った。シミ部を半截したところ炉石にあたり、住居の存在がわかった。当初プランは全くわからなかったが、柱穴を確認していく中で確定した。**（形状・規模）**円形で、主軸長5.5m×交軸長5.2m。主柱穴は7本。炉は中央奥壁寄りにある。**（覆土）**浅い。**（遺物出土状況）**住居内周辺部に散在。P8は現代の撹乱および小動物の巣穴による撹乱を受けたピットで、カラマツの丸太が埋められていた穴であるが、その北壁に貼り付くように1個体の土器があった（1）。それ以外は小破片である。**（床）**硬化面はない。**（柱穴）**P1～7が主柱である。深さは47～65cmと安定している。柱穴間隔はP1－P2間1.6m、P2－P3間1.6m、P3－P4間1.5m、P4－P5間1.6m、P5－P6間1.6m、P6－P7間1.6m、P7－P1間1.5mで、ほぼ1.6mの梁間をもっている。柱穴は壁溝より10～40cmほど内側に配置している。**（炉）**5個の石を円形に平置きした石囲炉。規模は90×90cm、深さ15cm。石は全体によく被熱している。**（壁溝）**全周する。**（壁）**壁溝下端から緩やかに立ち上がる。**（その他の施設）**なし。**（遺物）**土器は少ない。主に縦位条線文土器であるが、1は地紋の条線を略した土器である。特殊遺物としてミニチュア（15）が北東壁溝付近から、土鈴（16）が南側から出土した。土鈴は無文完形で、孔が1つ開く。X線観察で6個程度の土玉が入れられていることがわかった。石器は打斧2、フレイク1、凹石1。ほかに黒曜石製石核状石器1（未図化）あり。**（時期）**曽利I式期。

36号住（第30・106図,図版24）**（位置）**Q16・17グリッド。南台地上。**（重複）**ピットが西壁に接し、林道が南側を通過しているため、のり面で切られている。また北東側は調査区外となっており、住居としたら全体の3分の1程度であろう。**（検出状況）**土色の違いで設定したが、住居として確実視できない。**（形状・規模）**不明。**（覆土）**きわめて浅い。**（遺物出土状況）**土器は床面近くからはほとんど出ていない。丸石状の礫が2個寄り合って出ているが丸石ではない。**（床）**硬化面はない。**（柱穴）**柱穴らしいピットは1カ所のみ（P1）。**（炉）**なし。**（壁溝）**西壁の一部でそれらしい溝が出ている。**（その他の施設）**なし。**（遺物）**土器は少量で、石器は打斧1、剝片石器1、凹石1。**（時期）**不明。

4　縄文時代後期の住居址（16・17・18・19・21・26・35号住）

16号住（第31・106～108図,図版24～26・78～80）**（位置）**F42・43グリッド。水田面に面した西向き斜面で、現状ではかなりの傾斜面である。**（重複）**なし。**（検出状況）**土色の違いと、一部見えていた鉄平石の敷石で敷石住居と判断。農道に西側を切られるため、推定出入り口部付近は覆土が薄く、床面付近まで撹乱されていた。**（形状・規模）**主体部は円形で、ほぼ中央に石囲埋甕炉がある。また壁溝中に柱穴が配置する。農道による撹乱

で出入り口部の施設の有無が不明確であるが、短い突出部があると思われる。推定主軸長4.4m×交軸長4.0m。主軸線は、通常いわれるように斜面の低い方向（等高線と直交する低い側）を向く。（覆土）褐色粘質土中の構築であり、壁は非常に硬くしまる。壁面には地山中の礫が多数露出する。覆土は山側では良好に残り、奥壁部では深さ45cmもある。しかし西側は浅い。（遺物出土状況）覆土中から多量の土器片が出土している。また丸石が敷石面から約5cm浮上して出土した。また敷石の一部も原位置から移動して覆土中に存在した。（床）壁溝の内側に、壁溝に接するようにして鉄平石を主に用いた敷石が敷設されている。本来は全面に敷設された可能性があるが、現状では左右の壁近く、奥壁～炉、炉の両脇である。炉の左右空間を無敷石部として意図的に敷設しなかった可能性もある。出入り口付近には撹乱のせいもあって遺存していない。主な敷石は安山岩の鉄平石であるが、詰め石的な礫は安山岩円礫などを主に用いている。敷石表面を観察すると、全体的に研磨されたものが多いことに気づく。研磨の多くは表面のみで裏面は自然面であるが、裏面研磨した礫もある。詳しくは第5章第4節を参照。（柱穴）壁溝内および出入り口部付近に多数の小ピットがあり、主体部で柱穴と考えられるものはP2～11、出入り口部ピット（対ピット）と思われるものがP12・13である。主体部柱穴は直径15～20cmと細い。深さ30～50cm程度のP3・5・6・7・8は柱穴で間違いないが、P4は浅く不確実である。また北壁の柱穴は明確でない。柱穴は全体に垂直に掘られていた。（炉）4枚の石を組んだ方形石囲埋甕炉で、内部に深鉢底部を埋設した炉体土器がある（24）。炉石は南側を除き被熱し、炉体土器周囲には焼土がドーナッツ状にみられた。炉の規模は85×76cm、深さ42cm。炉体土器の大きさは直径22cm、高さ11cm。石囲炉中の土壌を採取して洗浄したところ、ササゲ属の炭化種子片が2点あり、栽培種である可能性が指摘されている（第4章第1節1参照）。（壁溝）壁直下に幅の狭い壁溝が主体部をほぼ全周する。北側を除き明確に検出された。（壁）壁溝からの立ち上がりは急である。ピット外側を空間利用する余裕は全くない。（その他の施設）出入り口部施設に関わるかと思われる横にのびた溝が右側にある。左側では支線の金具が打ち込まれるなどの撹乱のためによくわからない。（遺物）土器は無文破片が主である。中期末（19・20）、後期初頭（10）のほかは後期前半である。全体に胎土が悪く、ぼろぼろする。石器は11点あり、石錘1、砥石？1、凹石4、磨石1、丸石1、石鏃3。（時期）堀之内1式期。

17号住（第32・109・110図,図版26・80・81）（位置）E・F40・41グリッド。水田に面した西向き斜面で、農道に半分程度切られている。16・18号住の間に位置し、16号住から7m、18号住から5mの近接した場所にある。これらの住居はいずれもほぼ同じ等高線上に直線的に並び、等高線に直交する低い方向へ主軸方向を向けるという立地である。（重複）農道に切られる。（検出状況）遺構確認の際に礫を伴う半円形の暗色のプランが確認でき、住居と判断した。（形状・規模）円形の主体部を持ち、壁柱穴に沿って礫を並べた敷石住居である。炉から出入り口側にかけては農道のために遺構は消滅していた。主体部は現存主軸長2.3m、推定主軸長3.5m、交軸長4.5m。（覆土）黄色粘質土中の構築である。16・18号住同様、山側では厚いが谷側では薄い。壁際に並べられたと思われる礫が炉付近まで散乱して広がっていた。大小不揃いの安山岩礫を用い、いくつかの凹石も見られた。それらを取り上げたところ床面と思われるレベルで鉄平石を中心に平坦な礫を柱穴間に並べた部分敷石が見つかった。柱穴を直線的に結んでいるため、全体では多角形的な配置である。（遺物出土状況）礫と同レベルで小破片化した土器片があった。量はさほど多くない。（床）硬化した床面はないが、部分敷石が柱穴を結ぶように並んでおり、床面レベルを知ることができる。敷石は南側と北側に鉄平石を並べ、東側では小礫を並べている。（柱穴）ピットは大小あわせて計17本あるが、うち柱穴と考えられるものはP2・3・6・8で、P1も可能性はある。炉とP8を結んだ主軸線を中心に左右対称的に並ぶものと思われ、本来7～9本程度の柱が考えられる。径は25～30cm、深さは33～47cmで、40cm台が多い。P6をはじめ、内傾するものがある。壁柱のひとまわり内側にピットがあり、建て替えに伴う可能性もある。（炉）方形石囲炉で炉体土器をもつ。炉石は東・北に遺存し、4枚の板状の礫を垂直に立てて組んでいる。炉体土器は炉底に縁を出すようにして正位埋設された深鉢底部付近で、被熱のために内外ともに脆弱であった。炉内覆土の西側大半は農道で削除されていたが、東側の炉体土器周囲および炉石を越えた掘り方内には焼土が多く堆積していた。炉の改修を示すものであろう。（壁溝）なし。（壁）上端から柱穴に向かって緩やかに移行する。（その他の施設）なし。（遺物）図示した土器は2の炉体土器を除きいずれも小破片である。1・2は外面無文で荒い調整痕をもつ粗製土器である。石器は凹石6、磨石1、磨斧1、剝片石器2、石鏃2（うち1点は未図化、黒曜石製）。23の磨斧は身近な安山岩を用いたもので、当時磨斧としての機能を果たし得たか疑問である。（時期）堀之内1式期。

18号住（第33・111・112図,図版27・81・82）（位置）E・F38・39グリッド。17号住の南側に位置する。やはり

農道によって東半分を切られ、かろうじて炉体土器が残っていた。**（重複）**なし。**（検出状況）**やや大形の礫のまとまりを伴う暗色の半円形プランが確認でき、住居と認定した。**（形状・規模）**円形主体部の半分で、16・17号住と同じく主軸方向（出入り口方向）を斜面の低い西側へ向けた住居であろう。主体部は現存主軸長2.4m、推定主軸長4.0m、交軸長4.5mで、17号住とほとんど同規模である。**（覆土）**粘土質の礫層中に掘り込んだ竪穴住居で、周囲には礫が多数露出している。覆土は山（東）側がやや厚く、西側では炉体土器を境に削られている。炉の東側に径30～40cm大の大形礫が数個まとまってあり、被熱・赤変したものが多い。また壁際には小礫を主とした配石が広がり、それらの中には凹石を中心に石器が7個ほど見られた。さらに床面に並べられたと思われる配石が北東側の壁際に一部見られた。鉄平石を含む平たい安山岩小礫で、柱穴を結ぶように検出された。**（遺物出土状況）**覆土中を中心に小破片化した土器が見つかっている。**（床）**硬化面はない。**（柱穴）**5本のピットが出ている。そのうちP2・3・5が壁柱と思われ、P1も可能性がある。多くが内傾する。柱穴配置は奥壁主軸線上に1本、左右に複数の壁柱を配した7本程度の構造であろう。柱穴は径30～40cm程度、深さ36～77cmで、P2・5は60cm台と同規模である。P2・3間、やや内側に直線的に小礫を並べた配石がある。**（炉）**農道のために炉中央付近まで撹乱が及んでいる。素掘りの炉内に径30cm、高さ10cmの深鉢胴部を埋設した埋甕炉であるが、本来は他の住居同様に方形石囲埋甕炉と思われる。ただ炉石の抜き取り痕はない。また焼土は掘り方内覆土中に多く見られた。炉体土器は通常底部付近を用いるものが多いが、底のない輪切りの胴部を使用する点が特徴的である。なお炉内2層中からは焼骨片が少量検出されたが、小片のため同定は不可能であった。**（壁溝）**ない。**（壁）**緩やかに傾斜した壁で、下端は柱穴付近に達している。**（その他の施設）**なし。**（遺物）**1は炉体土器で、被熱のために脆弱である。2は小形の深鉢で、細片化した破片がまとまって接合した。石器は打斧1、凹石3、磨石？1、石錘2、石皿1、石鏃3である。**（時期）**堀之内1式期。

19号住（第33・112～115図,図版27～29・82・83）**（位置）**G・H36・37グリッド。16～19号住と同地形の西向き斜面。**（重複）**北壁に接して395号ピットがあり、壁の一部に重複する。**（検出状況）**黒色土の広がりが確認でき、敷石が一部露出したため住居とした。**（形状・規模）**隅丸方形に近い楕円形の主体部で、炉から出入り口部に向かって廊下状の敷石をもつ敷石住居。壁柱穴が巡る。出入り口付近は柄鏡状に短く突出する。さらにその先に浅いピットが対になり、ハの字状に出入り口部を構成するようにも見えるが、住居との関係は確実ではない。主軸長3.9m、交軸長3.7m。**（覆土）**覆土中には炉と奥壁の間に、床面から浮上した礫がまとまっていた。18号住などで見られた礫の出土状況とほぼ同じである。**（遺物出土状況）**炉東側の礫直下、ほぼ床面直上に完形の注口土器（9）が正位で出土した。礫の圧力で潰れていたが、礫を直接土器に載せたような割れ方ではなく、ある程度の覆土堆積を経て礫が投棄された状況である。また炉北側には同じく床直で横位に潰れた深鉢（5）が出土した。このほか注口土器周囲には凹石2、小形石棒片1が床直遺物として存在した。生活時の土器類のあり方、1軒の住居が保有する土器数を示唆する出方である。そのほか出入り口部対ピット中には、向かって右（南）側に玉、左（北）側に浮子状石製品が覆土上層中から出土している。**（床）**粘質土で乾燥すると非常に硬くなる。しかし床面としての硬化面は見いだせなかった。床面には焼土粒・炭化粒を多く含んだ黒色土が厚く広がり、焼土は出入り口部左右の空間、特に左（南）側に多く、炭は炉奥（東側）に多い。掘り方の上に床土あるいは貼り床として焼土を敷いたか、あるいは床面を人為的に焼いた後に上屋を構築した状況と推定できるものの、調査過程でははっきりしなかった。なお床面上や柱穴中には建築材としての炭化材はなく、火災住居とは考えにくい状況であった。敷石は炉と出入り口を結ぶ、幅40～60cm、長さ1.4mの敷石で、鉄平石の平石を並べて、隙間に礫を充填している。壁際には特に配石・敷石はない。なお東壁寄り周溝付近の炭化材を同定したところトリネコ属で、^{14}C年代測定の結果、3,740±110BPという結果が得られた。**（柱穴）**主体部には壁柱が壁下端に巡り、浅い壁溝が連結する。主軸線上の炉裏に1本あり（P5）、主軸線を中心に左右に4本を配し、計9本がある（P1～9）。いずれも径の小さな小規模のもので、計15～40cm、深さ19～41cm。また出入り口施設として敷石の両脇に対ピットがある。連結した2・3本の柱穴であり、径は壁柱穴よりも大きい。**（炉）**方形石囲埋甕炉で、炉体土器は口縁の大半を欠損する深鉢形土器である。土器の口径は27.8cm、高さは21.8cm。炉内土壌を洗浄したところ焼骨片が少量出ている。**（壁溝）**床面精査時には一巡するごく浅い壁溝を確認したが、焼土化した床面を下げていくなかで次第に消滅した。**（壁）**非常に緩く立ち上がっており、特に東・南側では段状になっている。**（その他の施設）**なし。**（遺物）**1は炉体土器で、被熱のために器面は脆弱である。3は加曽利B1式と思われる土器で、横帯文や内面の沈線が成立している。5・9は床直の深鉢と注口土器で、両者とも器面が被熱したような形跡をもつ。5は粗製で、器面の調整は荒い。表面は黒色処理された感じがある。9は丁寧に作られており、内

外面には黒色処理が施されているが、胎土・焼成が悪く、脆弱である。口縁と同じくらいに立てた注口部、靴篦状把手、鋸歯状の簡素な沈線文に特徴がある。7は粗製土器。また蓋（19）、土製スプーン（20）も出ている。石器には打斧1、凹石6、磨石1、浮子状石製品1、玉2、小型石棒1、石鏃6がある。**（時期）** 堀之内2式期。

21号住（第34・115～118図,図版29・30・84・85）**（位置）** H・I31・32グリッド。西向きの緩やかな傾斜面。**（重複）** なし。**（検出状況）** 畑への取り付け道路が北側にかかり、上層は硬くしまっていたため、当初は存在に気づくことができなかったが、再度の遺構確認で調査区西端に暗色のプランを確認し、調査に入った。西側は調査区外にかかり、さらに農道ののり面によって削られているため、住居西側の遺存状態は悪かったが、遺構の残り具合を見ながら調査区を拡張して調査した。**（形状・規模）** 円形ないしは楕円形の主体部をもつ敷石住居。出入り口部付近は遺構が遺存せず、構造の把握はできていない。現存主軸長は3.52m、交軸長は4.20m。**（覆土）** 床および壁際に敷石が床面レベルで敷設されており、浮上した覆土中の礫は炉周辺に数個集まっているほかは顕著な礫出土はない。**（遺物出土状況）** 小破片を中心に、床面に近いレベルに遺物が見られた。また縁石中には凹石・磨石が多数使用されていた。床材として転用されたものと思われるが、一時的な片づけによって、壁際に置かれたものもあろう。また炉裏奥壁寄りの敷石上から小型の丸石が出土し、16号住の出土状況に類似している。ほかに奥壁寄りには、縁石の敷石よりも外側、または敷石に接して特殊遺物である土偶腕片、玉が出土した。**（床）** 炉を中心として隅丸方形状に縁石状の敷石が並べられ、炉裏のスペースに炉から壁まで連続した敷石面がある。19号住の敷石のあり方とは逆転している。概して小形の安山岩自然礫を縁石に用い、奥壁側には中形の鉄平石を用いている。また炉裏には非常に大きな、重量感のある平坦な1枚の安山岩礫（重さ96kg,鉄平石ではない）を敷設し、周囲に礫を充塡している。住居内における場のあり方を伺わせる敷設状況である。敷石、炉石の接合事例は5例認められた。また礫の被熱、磨り面はほとんどの敷石で観察されている。敷石のない部分は土間であったと思われるが、硬化した床面はない。**（柱穴）** ピットが壁際に大小合わせて23本ほど検出されたが、そのうち柱穴と判断できるのは縁石外側に接して検出できたP1・3・4・5・7・8・9・10・11・12であろう。またP1・8は出入り口部に関わる対ピットの可能性がある。ピットの規模は大小あり、深さは30～40cmほどであるが、その中でP10は浅く、不確実である。ピットの配列は奥壁主軸上に1本（P5）置き、左右対称に数本配置している。**（炉）** 主体部中央にある。方形石囲炉であったと思われるが、いくつかの礫が動いており、現状では方形らしくない。他の後期住居が板状の礫を方形に組んでいるのに対し、この炉は丸みのある礫で囲んでいる。中央には無文粗製深鉢の体部下半を埋設した炉体土器がある。土器内外には明確な焼土層の堆積はない。炉体土器は径20.4cm、高さ19.5cm。炉内土壌の洗浄によって焼骨片が少量出ている。**（壁溝）** 奥壁側でピットをつなぐように浅い壁溝が出ている。ただし明確ではない。**（壁）** 緩やかに立ち上がる。**（その他の施設）** なし。**（遺物）** 1は荒いナデ痕が縦に器面に残る粗製土器で、炉体土器。1510g。2～7・9は口縁部・頚部に刻み目のある貼付隆線文が水平に一巡する土器で、7・9を除き丁寧な仕上げである。口唇部はいずれも短く内側に折れ、内面には一条の沈線的な凹みが巡る。3・4・6・7の隆線上には8の字状貼付文がつく。11・12は無文粗製土器口縁部。13～15は注口土器で、13・14は同一個体の把手部。16は小形浅鉢で、4単位の波状口縁をもち、それぞれの波状部に3個の孔があく。内面には沈線文を施文する。23・24は土偶片で、23はおそらく中空有脚立像の顔面部で、平面的な仮面状のタイプである。24については先端の5本の沈線を指の表現と見て一応腕と見なしておくが、どのような形態の土偶になるのかわからない。石器は16点図化した。内訳は凹石8、磨石2、丸石1、石錘1、石核1、磨斧1、玉1である。また特に使用痕はないものの棒状の安山岩自然礫が出ている（39）。26は玉で、軟質な滑石を用い、片方の側面にのみ縦に筋状の沈線が入っている。紐かけの溝か。**（時期）** 堀之内2式期。

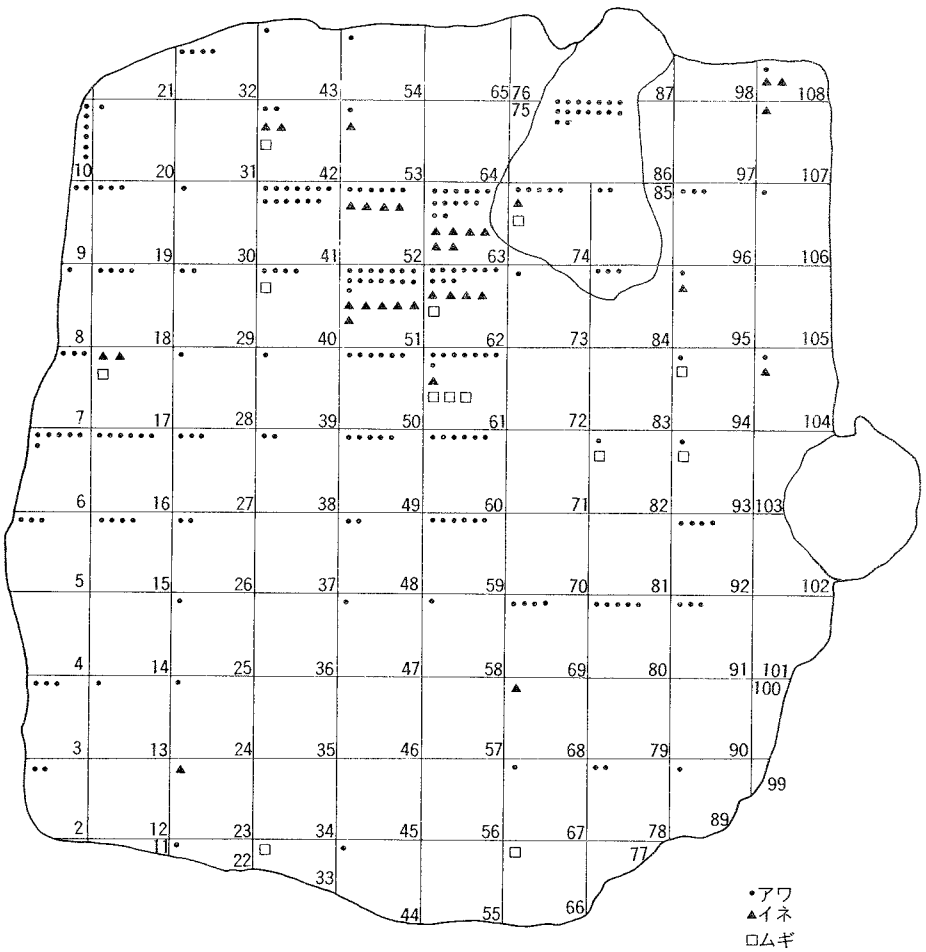
26号住（第35・119図,図版31・86）**（位置）** I・J28・29グリッド。21号住の12.6m南側で、西向きの緩やかな傾斜面にある。**（重複）** 東側に20号住が接し、南側にも390号ピットが接する。**（検出状況）** 遺構確認中に礫・土器片が出土し、住居址とした。礫の分布域を壁際と考え、また炉体土器と思われる焼土をわずかに伴う土器底部が見つかったため、それらを手がかりに柱穴を探した。壁の立ち上がりは当初わからず、柱穴検出後に柱穴の外側に想定している。**（形状・規模）** 不整円形もしくは半円形的な主体部。西向き斜面のため出入り口は西側と思われるが、耕作等により西側の床面は遺存しない。張り出し部は不鮮明で、それらしいピットがあるのみ。主軸方向は対ピットらしきピット間と炉を結ぶラインに想定できる。主体部主軸長は2.0m、交軸長は2.54m。主軸線は中央より北側に寄っており、南壁の位置が正しくない可能性がある。**（覆土）** 炉から東側にわずかに覆土

が残る。壁付近に礫が散在し、壁際の敷石が散乱した状況である。（遺物出土状況）双口土器が横位で出土したほか、出土量は少ない。（床）礫の下面付近に想定できるが、硬化面は確認できていない。（柱穴）主体部壁溝中に18本程度、壁溝内側に数カ所のピットがある。それらのうち柱穴と思われるのはP1・2の対ピットと、P3～8ぐらいであろう。張り出し部に伴うと思われるピットも対ピット西側にいくつか存在するが、確実ではない。（炉）土器下半部を埋設した炉体土器であるが、底部のみしか遺存していない。焼土もわずかな小ブロックがあるのみである。本来は石囲いであったはずだが、そうした痕跡は全く確認できなかった。（壁溝）対ピットから左右にのびる壁溝があり、一応全周している。ただ検出状況では非常に不明確なものであった。（壁）周溝下端からだらだらと立ち上がる。（その他の施設）なし。（遺物）土器を5点、石器を2点図示した。1は炉体土器。2は双口土器で、土偶の脚状に2本の断面楕円形の筒が直立し、口縁部は欠損している。基部は連結し、結合部には孔が開いている。沈線中に連続刺突を施した文様が巡っており、図の正面、裏面ともに同じ文様が描かれ、どちらを正面として意識しているかはわからない。調整は粗雑で、ナデ仕上げされているのみである。6・7は礫中に混在した磨石・凹石。（時期）堀之内2式期。

35号住（第35・119・120図,図版31・32・86）（位置）G・H34・35グリッド。21号住の北、8.7m。西向き斜面の農道寄りに位置する。（重複）なし。（検出状況）調査の最終段階で暗色の遺構面と、敷石の一部と思われる鉄平石を調査区境でかろうじて確認し、急遽調査に入った。炉まで調査した後、西側へと遺構が続くことが確認でき、またピットもありそうだったため、調査区を一部拡張して全体の把握を目指した。しかし農道ののり面のために西側の状態は悪かった。（形状・規模）炉を中心に円形の主体部であったと思われるが、3分の2のみ検出した。主軸方向は傾斜方向と思われ、他の住居址例を参考にすると、炉とピット2を結ぶ線と考えられる。現状では主軸長3.4m、交軸長4.4m。（覆土）焼失家屋で、北側～東側にかけて焼土がブロック状に広く見られ、焼土付近には炭化材がやや多く見られた。炭化材は柱穴を連結する方向に遺存した。また敷石の一部や小礫が少数分布している。（遺物出土状況）無文鉢形土器が1点、北側壁寄りの床想定レベルで横位に出土した。また炉東側で玉が出土している（11）。（床）焼土直下、敷石面付近が床面であろうと思われる。硬化面はない。なお炉北側よりオニグルミ炭化核39片が出土している。（柱穴）ピットは壁際、壁溝中に14本程度、内側の炉周辺に8本程度見られるが、壁溝中のP1～4が確実な柱穴である。直径20～25cm、深さ23～55cm程度で、小振りである。（炉）方形の掘り方内に胴下半を埋設した炉体土器が残るが、本来は方形石囲埋甕炉であったと思われる。焼土は土器周辺に堆積し、内部にはなかった。炉石は全く残存していない。（壁溝）炉から東側の壁際には幅15～40cmの壁溝が巡っている。（壁）緩やかな立ち上がりを示す。（その他の施設）なし。（遺物）土器7点、石器5点を図示した。1は横位出土の土器で、ほぼ完形。710g。上から見ると、口縁部には5カ所の押圧があり、無文土器ながら5単位を意識している。丁寧なナデ仕上げが行われており、無文ではあるが粗製土器ではない。2は炉体土器。被熱のためひどくぼろぼろに荒れている。底部中央は割れているが、意図的な打ち欠きではなく、本来はあったはずである。（時期）堀之内2式期。

第2節　平安時代の住居址（1・2・4～6・12・15・20・24・25・29・37号住）

1号住（第36・37・120～122図,図版32～34・86～88）（位置）D・E57グリッド。斜面から下がった平坦部に位置する。（重複）なし。（検出状況）一部調査区外へ広がって確認されたが、地権者の了解を得て拡張し全体を調査した。西側に向かって覆土が浅くなっていたため、西壁のとくに南西隅は覆土が非常に薄く、プランは不明瞭であったが、それ以外は明確であった。（形状・規模）隅丸方形で、東壁中央南寄りに竈が設置されている。竈に対面する東西方向を主軸方向とすると、主軸長5.4m×交軸長4.6m。（覆土）床面中央やや南寄りに、焼土が床面より4cmほど浮上してブロック状に堆積している。床面直上層（2層下層）では炭化物も多く認められたため、床を精査する前に床面に50cmメッシュを組んで土壌採取をした。整理段階で水洗選別し、同定した結果、床面中央から北東にかけた範囲を中心にほぼ全体から穀物類の炭化種実の分布があった（第4章第1節参照）。住居址覆土の遺存状況の良し悪しで左右されているようにもみえるが、一応穀類の貯蔵場所を推定する手がかりとしたい。出土量の割合はアワ207粒（81%）、イネ35粒（14%）、ムギ類（オオムギ・コムギ・ムギ類）13粒（5%）であり、アワが非常に多い結果である。アワは粒径が小さいので、粒数だけでイネなどと単純比較できないものの、食生活の中で大きな割合を占めていたとの推定は可能である。ほかに床面上からササゲ属・マメ科炭化種子が8粒出ている。（遺物出土状況）竈南側に平たい大形の礫がまとまってあり、その周辺や礫直上に土師器・



第152図　１号住内炭化種実出土状況

灰釉陶器が出土した。また竈内には数個体分の土師器甕片があった。その他、床面より浮上して多数の礫とともに土師器類が散在して出土した。また中央北西寄りに、床面よりわずかに浮上して鉄鏃状鉄製品２点と剣状鉄製品２点が束ねたように重ねられて出土した。**（床・掘り方）**床面精査の段階でピットがいくつか出ているが、それらは柱穴ではなく、床面上のシミを下げたものである。掘り方は16個ほどのピットの集合体である。ピットの覆土は主に黒褐色土で、焼土粒や炭化粒、土師器片を含んでいる。深さは数㎝～10数㎝のものが多く、長径１～1.5mの楕円形を呈するものが多い。ピットは全体にあり、偏在傾向は窺えない。中央には1.2×0.9m、深さ59㎝のピットがあり、平たい多数の礫が隙間のないほどに詰められていた。集石内部に石組みはなく、特殊施設というよりは掘り方の一部に礫をまとめて廃棄した様子である。床面精査時に既に確認されており、いつの時点で作られたものか問題となるが、地山中には礫が含まれているために竪穴掘削の際に出た礫をまとめたものであろう。**（竈）**東壁やや南寄りにあり、石組み竈である。焚き口部・煙道部を含めた規模は東西1.75m×南北1.05m、石組み部は東西0.9m×南北0.8m。袖石は一部二重に石列を並べ、壁に向かって３個ほどを立て並べ、さらにその上に平たい小振りの礫を積んで高さの微調整をしている。壁寄りには天井石１枚が遺存していた。焚き口部手前の天井石は遺存していないが、竈南側の東南隅にまとまっていた礫が天井石などを片付けたものではないかと思われる。ただし現場で被熱痕などを確認していない。竈内には長さ28㎝、幅17×10㎝ほどの端部の平坦な礫を直立させた支脚石が遺存していた。水洗選別によって竈内からはアワ16粒が出ている。**（壁溝）**東・北壁では明瞭であり、北壁では幅18㎝、深さ７㎝、東壁では幅15㎝、深さ６㎝である。西から南にかけては不明瞭であり、壁溝を探しているうちに掘り方にまで達してしまっている。**（壁）**東・北壁は明確で、周溝から直に立ち上がる壁である。**（その他の施設）**東壁の竈寄りの部分が幅1.3m、奥行き12㎝ほどえぐれて段状になっており、棚状施設の可能性があるが、断定はできない。**（遺物）**土師器坏（１～４）、土師器皿（５～14）、黒色土器（内黒土器）（15～21）、灰釉陶器皿（22～24）、墨書土器小片（25～28）、土師器甕（29～39）、土師器小型甕（40）、小型ロクロ甕（41）、須恵器甕胴部片（42・43）、砥石（44）、砥石状石製品（45）、鉄鏃状鉄製品（48・49）、剣状鉄製品（50・51）、鉄釘（52）、鉄滓（55）のほか、縄文時代の遺物である石棒（46）、磨石（47）、石鏃（44）などが

ある。土師器坏・皿には通常の甲斐型土器（1～6・9・14）と、体部下半にわずかなヘラ削りを行う7・8・11がある。また時期的に1段階後出技法である体部ヘラ削りがなく、底部糸切りのままのもの（10・12・13）が存在する。7・8・10～13は胎土に在地的な特徴をもつものがあることから在地産（北巨摩地方生産）の可能性があり、甲斐型と併存の可能性もある。灰釉陶器は3点とも刷毛塗りであり、美濃窯の光ヶ丘1号様式期のものであろう。以上の食器関係の割合は図化資料だけで分析すると、甲斐型土器8点（33%）、（仮称）在地産土器8点（25%）、黒色土器7点（29%）、灰釉陶器3点（12%）である。土師器甕には厚口縁（29～31）、より厚く、屈折のない肥厚口縁（32）がある。墨書土器は7点あり、甲斐型に3点、不明土師器片に3点、灰釉陶器に1点みられる。黒色土器にはない。文字には判読できるものに「申」（6）、「矢」（3）、「千人」（23）がある。灰釉陶器の24は高台部周辺を打ち欠いて高台内部を池部とした転用硯である。また48と49、50と51はそれぞれ良く類似した形態の鉄製品であり、類例を知らない。用途も不明である。刃部（先端）が鋭くなっておらず、48・49はマイナスのドライバー状であるし、50・51は板状のままであることから儀器的なものであろう。2種の異なる製品であるが、組み合って二対一式の製品であった可能性もある。48・49の端部は輪をはめたようになっており、49には内部が孔状になっている。**（時期）** 平安4段階（第5章第5節参照）。

2号住（第37・122・123図,図版35・88）**（位置）** C60グリッド。尾根状台地の南斜面から平坦部へ移行する中間の緩斜面に位置する。北側25cmには3号溝（近現代）がある。**（重複）** ないが現代の撹乱を受けている。とくに3号溝南側には溝に沿ったあたりに農道があったとのことで、段状に削平され、住居北側半分が影響を受けている。**（検出状況）** 南壁・西壁は覆土が薄く、床面まで耕作が及び、プランは不明瞭であった。また住居西半分は撹乱により不明瞭である。**（形状・規模）** 隅丸方形で、東壁中央南寄り、南東隅に近い位置に竈がある。主軸長3.2m×交軸長3.3m。**（覆土）** ローム粒を含む黒褐色土が堆積する。**（遺物出土状況）** 東半分から主な遺物が出土した。また、竈北に接するピット（P1）から壁や底部に貼りつくように土師器坏などが数点出土している（2・3）。**（床・掘り方）** 東側では軟弱な床面が確認されているが、西側では撹乱のためほとんど残っていない。数ヶ所の浅いピットが確認されているが、これらは桑などの根による撹乱である。北東隅の土坑状のピットも撹乱ではないかと思われた。**（竈）** 東壁南寄りにあり、石組み竈と思われる。焚き口部・煙道部を含めた規模は東西1.1m×東西0.85m。袖石は北側に1個のみ直立している。天井石かと思われるものが1枚、焚き口部の焼土上面に落ち込んでいた。また、竈内より片面が赤化した礫が2．3個出土しており、竈の石組みの一部と考えられる。焚き口部の南側には袖石を抜いたと思われる凹みがある。竈内には長さ34cm、幅12cmほどの平坦な端面をもつ礫を直立した支脚石が遺存していた（10）。竈覆土は焼土粒を含む黒褐色土、厚い焼土層、わずかに薄い灰層が堆積している。焼土層の上面に堆積する黒褐色土を2層に分けて採取し、水洗選別した結果、イネ1、ムギ類1、アワ1が出ている。**（壁溝）** 全体的に不明瞭で、西側では検出しているが、他にはない。とくに北側には全く存在していない。**（壁）** 北・東壁は明確でほぼ直に立ち上がる。**（その他の施設）** なし。**（遺物）** 黒色高台坏（1～3）、黒色土器坏（4）、土師器坏（5）、土師器甕（6・8）、羽釜（7）、須恵器甕（9）、支脚石（10）などがある。墨書土器は1に「成」とある。食器は黒色土器椀を中心であり、煮沸具は在地的なナデ調整の甕、羽釜である。坏・甕類に甲斐型が極端に少ないのが特徴である。（時期）平安4段階。

4号住（第38・123図,図版35・89）**（位置）** D58･59グリッド。南斜面から平坦部への傾斜変換点にある。**（重複）** 9号溝に南側を切られているが、床面はかろうじて遺存している。東側は調査区外に延びており、完全な調査はできなかった。**（検出状況）** 9号溝確認中、東側において不明瞭ながら北・西側のプランを確認した。南側を切る9号溝の完掘後、住居全体の調査を進めた。調査の途中、明確な北・西壁が検出され、プランの修正を行いながら完掘した。北東コーナーと東壁は調査区外へ続いていた。竈は調査区外にあるらしい。**（形状・規模）** 隅丸方形と考えられ、現存する規模は南北5.0m・東西4.7m。**（覆土）** 大部分を9号溝に切られ、多量の礫が東西方向に一部並んでいた。37号住付近でも同様な石列が見られ、溝に沿って礫を並べて畑境としたようである。下層（3・4層）にはローム粒・焼土粒・炭化物粒を少量含む黒褐色土が堆積し、住居覆土と思われる。上層のかなり高い位置から焼土層が出ているが、溝に伴うものであろう。**（遺物出土状況）** 住居南側床面から少量の遺物破片が出土した。全体的に出土量は少ない。**（床・掘り方）** 9号溝の下から非常に硬化した床面が検出され、床面上は広く焼土化している。とくに南東側に多く見られた。ただし大型炭化材はない。**（竈）** 他の住居址の状況から東側に推定できるが、調査区外のため検出できなかった。焼土分布が東側に濃く、竈が近いように思われた。**（壁溝）** 北・西壁で確認された。北壁幅18cm・深さ3cm、西壁幅20cm・深さ7cmである。東壁・南壁は不明で

ある。（壁）北・西壁は明瞭であり、壁溝からほぼ直に立ち上がる。（その他の施設）北西隅にタヌキ穴状のピットがある。掘り方の一部とも考えられるもので、大きな礫の脇まで掘り下げている。覆土はぼそぼそであった。（遺物）土師器坏（１～３）、黒色土器（４）、土師器蓋（５）、土師器甕（６・７）、砥石（８）などがある。本遺跡内の平安時代遺構中では最古段階の土器群で、甲斐型の坏底部径が大きいことが特徴的である。（時期）平安１段階。

５号住（第39・123・124図,図版36・89）（位置）Ｃ・Ｄ65･66グリッド。尾根状台地の南縁辺部に位置する。（重複）細かな溝が上面に重複するが遺構にはほとんど影響していない。（検出状況）一部東側調査区外へ広がって確認されたため拡張し、全体を調査した。全体的にプランは明瞭であった。（形状・規模）東西方向に長軸を持つ隅丸長方形で、東壁中央寄りに竈がある。主軸長5.1m×交軸長4.0m。（覆土）炭化物粒・焼土粒・ローム粒を含む暗褐色土が２層堆積する。また壁際にはロームを主体とする黄褐色土が堆積する。また小礫が全体に見られた。（遺物出土状況）住居内東側を中心として、ほぼ全域より土師器坏・甕を出土した。遺物は覆土中位より床面直上の出土が目立つ。竈内では崩落した天井石の下から土師器甕破片などが出土し、上面からは鉄釘・鉄滓が出土した。また竈南からは、黒色土器１点が礫直上に伏せた状態で出土していた。竈内を別にして全体では小破片中心で、出土量はやや少ない。（床・掘り方）床面は不明確ながら確認された。床面確認時においてやや深めの数個のピットと西側に溝状の落ち込みを検出している。掘り方には凹凸があり、中央より西側にかけて広範囲の浅い方形の落ち込みがある。また、数個のピットもあるが柱穴ではない。（竈）東壁やや南寄りにあり、石組み竈である。焚き口部・煙道部を含めた規模は1.45m×南北1.17m。石組み部は東西0.91m×南北0.65m。袖石は壁に向かって３個ほどの礫で一部二重に石列を並べ、さらにその上に平たい小礫を積んでいる。焚き口には、北側の袖石が１個倒れ込んでおり、その東側には天井石が落ち込んでいる。南側袖石には構築粘土が遺存している。支脚石はない。竈構築礫が片付けられずに竈内に崩れた状況を呈しているが、手前の天井石と支脚石は移動されているらしい。竈内覆土を４層に分けて採取し同定した結果、穀物類は検出されなかった。（壁溝）全体に明瞭であるが、他の住居でも同じように南側の壁溝は中央部が途切れ、その両側も明確ではない。出入り口施設の関係であろうか。北壁では幅10㎝、深さ7.8㎝、南壁では、幅20㎝、深さ7.2㎝、東壁では幅20㎝、深さ6.4㎝、西壁では幅17㎝、深さ4.2㎝である。（壁）全体に明瞭であり、四方とも壁溝からほぼ直に立ち上がる壁である。（その他の施設）なし。（遺物）土師器坏（１～６）、黒色土器（７）、土師器小型甕（８・９）、土師器ロクロ甕（10～12）、土師器甕（13～17）、鉄滓(20)、鉄釘(21）などのほか石匙（18）、石鏃(19）が混入している。甲斐型土器を主として若干の在地的なロクロ甕を伴う器種構成である。墨書土器は２点あり、１は「水」かと思われる。３も同一文字の可能性がある。また５には見込み部に十字の線刻がある。ほかに黒曜石製石錐１、楔形石器１（未図化）。（時期）平安２段階。

６号住（第40・124～126図,図版37・38・90・91）（位置）Ｃ・Ｄ70グリッド。（重複）９号住の西壁を切る。また東南隅に縄文時代の遺構（ピットあるいは住居址の一部）が重複し、曽利Ⅰ式期かと思われる深鉢口縁部片が出ている。（検出状況）調査区東端において、一部調査区外へ広がって確認されたため拡張し、全体を調査した。プランは明瞭であった。（形状・規模）隅丸方形で東側中央南寄りに竈が設置されている。主軸長4.3m×交軸長4.4m。（覆土）炭化粒・焼土粒・ローム粒を含む黒褐色土が全体に堆積する。竈北側に大きめの炭化材があった。（遺物出土状況）竈南側のピットより土師器坏・甕の小破片が多く出土し、その直上から竈天井石と思われる大型の礫が１枚出土している。北壁やや西よりの床面のピット中から黒色土器坏が一個体分出土している（10)。床下埋納遺構とみてよいだろう。竈内には焼土層直上から数個体分の土師器坏や甕の破片が非常に多く出土した。（床・掘り方）床面は比較的明瞭であった。中央のピット北側に広く硬化面があり、また南側には部分的に硬化面があった。床面精査の段階でやや軟弱な床面より10個ほどの小ピットと中央部分より広めの落ち込みが確認され、これらは掘り方まで達していた。中央のピット覆土は褐色土で、ぼそぼそであった。掘り方面は全体に床よりも10㎝程度下がり、北西隅を除く各隅に落ち込みをもつ状況であった。（竈）東側やや南寄りにあり、石組み竈である。焚き口部・煙道部を含めた規模は東西1.98m×南北0.9m。石組み部は東西0.83m×南北0.8m。袖石は左右３個づつの礫を立て並べている。平坦な小振りの礫が竈内部や周辺に散在し、袖石上に用いたものが崩落したのであろう。遺物上に礫が崩落し、甕の廃棄（あるいは祭祀）段階では袖石部は完存していたことを窺わせる。天井石は遺存してはいないが住居南東隅にピット上面に礫が片付けられていた。ただ現場で被熱痕などの確認はしていない。竈内には支脚石は遺存しなかった。これらの状況から竈廃棄にあたっては、支脚石と竈の天井

石全部をはずし、1枚のみ住居南東隅に置き、竈内に甕類を投棄する、という過程が想像できる。なお竈内覆土を2層に分けて採取し水洗した結果、穀物類は検出されていないが、燃料材と思われるクリ・モモ・ウメ・コナラ節が出ている。**(壁溝)** 北・東・西壁では明瞭であり、北壁では幅18cm、深さ7cm、東壁では幅19cm、深さ5cm、西壁では幅18cm、深さ10cmである。南壁には一部溝状のピットが出ているが、壁溝はない。**(壁)** 全体に明瞭であり、壁溝からほぼ直に立ち上がる壁である。**(その他の施設)** 床下埋納ピットが北西隅に近い場所にある。径40cm、深さ19cm程度の小ピットである。**(遺物)** 土師器坏（1・2・4）、土師器皿（5）、黒色土器坏（3・6～12・15・16）、黒色土器皿（13・14）、須恵器坏(17・18)、土師器ロクロ甕（19～22）、土師器甕（23～26・28・29）、土師器小型甕（27）がある。坏皿類は17点中甲斐型土器5点（29%）、黒色土器10点（59%）、須恵器2点（12%）で、黒色土器が約6割と多い。甕類は11点中北巨摩産と思われるロクロ甕が4点（36%）、甲斐型甕6点（55%）、ナデ調整の在地甕1点（9%）で、甲斐型甕が約半数を占めている。縄文時代の深鉢(30) は東南隅に重複した遺構内出土。ほかに凹石(32)、石棒(33)、石鏃(34)、石錘(35) などが混入している。叩き石(31) は平安期のものであろう。墨書土器は甲斐型土器皿に1点（5）、黒色土器坏に3点確認できたが（10・15・16)、いずれも判読はできない。ほかに黒曜石製石鏃1（未図化）あり。**(時期)** 平安3段階。

12号住（第41・126図,図版38・39・92）**(位置)** C・D67・68グリッド。**(重複)** 北側半分を東西方向に走る近現代の溝に切られている。**(検出状況)** 溝付近の精査時にプランを確認した。北側半分は溝により切られており、東側は調査区境のため、また西側は木の株の影響や覆土が浅いために不明瞭であったが、南側は比較的明瞭であった。**(形状・規模)** 隅丸方形で、竈は東壁南寄りに設置されている。主軸長3.7m×現存交軸長1.6m。**(覆土)** 全体的に浅く、溝による撹乱の影響でフカフカした黒褐色土が主体的に堆積する。**(遺物出土状況)** 竈がある南東部から土師器坏・甕を中心とした遺物破片が少量出土している。南壁床直上からは4個ほどの大きめの礫が出土している。礫は棒状のもので、竈天井石とは形状が異なる。**(床・掘り方)** 溝や木の株の影響であまり明瞭な床面はない。竈を中心に焼土が広がっていた。礫が出土した直下付近には直径70cmほどのピットがあった。掘り方調査では溝状の落ち込みと数個のピットを確認した。ただし床面同様に溝や木の根の影響を受けている。**(竈)** 東壁南寄りにあり、石組みはほとんど残っていなかったが、南側に袖石らしき礫が1個倒れていた。残存規模は東西1.1m×南北0.8mであるが、竈の掘り方・煙道部は明瞭ではなかった。竈内土壌を水洗選別した結果、コムギ2粒が出ている。**(壁溝)** 壁残存部直下には全て確認できた。南壁では幅18cm、深さ5cm、西壁では幅15cm、深さ3cm。**(壁)** 南壁と東西壁の一部が明確に確認でき、壁溝からほぼ直に立ち上がる壁である。**(その他の施設)** なし。**(遺物)** 土師器坏（1・2・4）、黒色土器坏（3）、土師器甕（5～9）のほか、縄文時代の遺物である凹石(10・11) などがある。甲斐型坏・甕のほか、在地的なナデ調整の甕（鉢）と坏、北巨摩産らしいロクロ甕がある。**(時期)** 平安2段階。

15号住（第41・126図,図版39・92）**(位置)** D・E47・48グリッド。**(重複)** 西側の大半は水田地帯へと続く低地のへりにあり、溝状落ち込みに大きく切られている。**(検出状況)** 重機による掘削時に竈と思われる土師器片をともなう焼土を確認した。西側の大部分は落ち込みのために遺存していない。**(形状・規模)** 隅丸方形を呈し、東壁やや南寄りに竈が設置されている。現存主軸長0.8m×交軸長1.6m。**(覆土)** 検出時にはすでに覆土の大半を重機によって掘削しており、観察することはできなかった。**(遺物出土状況)** 竈覆土内と周辺より少量出土するのみであった。**(床・掘り方)** 床面は掘り方が一部露出した状態で検出された。**(竈)** 東壁やや南寄り。竈掘り方に礫の抜き取り痕があり石組み竈と思われる。残存規模は東西1.2m×南北0.8m。竈覆土は、焼土粒・焼土ブロックが薄く堆積する層が主体となっている。**(壁溝)** 北東壁でわずかに確認でき、幅18cm、深さ5cm。**(壁)** 立ち上がりがほとんど残存していない。**(その他の施設)** なし。**(遺物)** 土師器甕（1）のみ。ほかにも数片ある。**(時期)** 不明。

20号住（第42・127図,図版39・92）**(位置)** H・I32・33グリッド。**(重複)** とくになし。**(検出状況)** 竈の石組みが露出し、東壁が明確に確認できた。。住居西側はすでに欠失しており、北・南壁の半分・西壁は現存していない。また、調査中、北壁にもう一基の竈を検出した。**(形状・規模)** 西側半分以上は不明であるが、隅丸方形を呈すと思われる。現存主軸長3.3m×交軸長4.0m。**(覆土)** 東壁付近でわずかに確認できるだけであり、炭化物粒・焼土粒を少量含む暗褐色土である。中央西側は床面よりも下がっている。**(遺物出土状況)** 遺存状態が悪く小破片が出土するのみである。**(床・掘り方)** 東側のみで軟弱な床面を残している。掘り方面にはいくつか

のピットが確認された。南側より確認された0.6m×0.4mのピットからは礫が数個検出され、竈構築材の可能性も考えられる。（竈）北壁中央（？）と東壁やや南寄りに各1基づつ確認された。ともに遺存状態は不良である。北竈の残存規模は東西0.84m×南北0.94m。袖石・天井石はなかったが、竈内には長さ27㎝、幅12㎝ほどの端部が平坦な礫を直立させた支脚石が遺存していた。東竈は東壁南寄りに設置された石組み竈である。残存規模は東西1.32m×南北1.17m。袖石は焼土層直上に倒れ込む状態で検出されたが、支脚石は現存していない。また確実な天井石もない。東竈南側のピットからは数個の大型礫が出土し、竈の天井石などを片づけたものとも考えられるが、これも確実ではない。2基の竈の新旧関係については、東竈に多くの構築材が遺存していたことから東竈が新しいと思われ、北から東へ竈を移動した考え方ができるが、北竈には支脚石が遺存したことから同時使用の可能性も十分ある。なお北・東竈覆土はともに焼土層が厚く堆積していた。現場において焼土下層の土壌を採取し、水洗選別したが、炭化種実は出ていない。（壁溝）確認できなかった。（壁）ほぼ直に立ち上がる壁である。（その他の施設）なし。（遺物）須恵器坏（1）、土師器甕（2）のほか、縄文時代の凹石（3）、打製石斧（4）、石鏃（5）、土偶（6）などがある。2は胴部を薄くヘラ削りした武蔵型甕に類したもので、東信地方の土器であろう。（時期）甲斐型坏がないため時期判断は難しいが、須恵器坏の形態から平安2段階としたい。

23号住（第42・127図,図版39）（位置）J・K28・29グリッド。（重複）26号住・398号ピットを切る。（検出状況）住居の掘り下げを開始した直後、多量の礫を埋設する398号ピット（集石炉）が床面上に確認された。398号ピットは23号住確認面には確認されてはいないものの、断面観察時には先後関係の把握が容易ではなかった。ピットからの遺物の出土はなく時期判断には悩んだが、覆土中から検出された炭化材で年代測定を行ったところ縄文中期と推定された。したがって、23号住がピットを切っている。竈がないため、住居ではなく竪穴状遺構という方が適切である。（形状・規模）南北方向に長軸をもつ隅丸方形を呈す。竈がないため主軸方向は不明。東西2.7m×南北3.3m。（覆土）ローム粒・炭化物粒を含む黒褐色土が主体となって堆積する。（遺物出土状況）住居内からの遺物の出土はほとんどない。建物とピットとは時期差をもつと考えるのが自然であるが、両者が同時期の遺構である可能性もわずかに残されている。ただ建物址の掘り方が方形であり、軸方向も平安期の住居とほぼ同じであることから、建物址は平安期の所産と考えておきたい。（床・掘り方）軟弱な床面であった。（竈）なし。（壁溝）なし。（壁）ほぼ直に立ち上がる壁である。（その他の施設）なし。（遺物）土師器甕（1）のほか縄文時代の深鉢（2）、打製石斧（3）がある。（時期）不明。

24号住（第43・127・128図,図版40・92・93）（位置）R・S14・15グリッド。調査区最南部の南台地上。（重複）ないと思われるが、竈南側に長方形の配石がある。下部が土坑状を呈し、中世墓の可能性がわずかにある。（検出状況）地面の凍結のため南壁が不明であり、修正を行いながら調査を進めた。（形状・規模）南北方向に長軸をもつ隅丸方形で、東側南寄りに竈がある。主軸長4.2m×交軸長4.5m。（覆土）炭化粒を少量含む黒褐色土が全体に堆積している。（遺物出土状況）床面に近い位置から、土師器の坏・甕を中心として須恵器・鉄製品などが出土した。全体ではやや少ない。竈内からは焼土層上面を中心として土師器甕破片などが数点出土した。竈南側には礫が長方形に並べられ、その下部には「つき臼」が1点正位で出土した。下部には土坑状の掘り方があり、配石土坑の重複の可能性もあるが、一応住居廃絶時の竈構築材を片付けたものと理解したい。しかし、覆土上層で出土した内耳土器片との関連も予想され、中世の構築の可能性もわずかにある。そうした2通りの想定ができるので、内部から出土したつき臼の時期も確定しにくい。ただ、つき臼は韮崎市宮ノ前遺跡など数遺跡から平安時代住居址に伴って出土しているし、長野県佐久地方・松本盆地でも平安時代の出土例を見出すことができ、平安時代に存在していたことは確実で、中世になると多く出土する石製品である。（床・掘り方）やや軟弱ではあるが比較的明瞭であり、特に、竈前面から中央付近にかけては非常に堅くしまった床が確認された（破線部分）。掘り方にはあまり荒掘りの痕跡はなく、多数の小ピットが確認できた。また西壁中央に壁にもぐり込むピットが出ている。覆土は褐色土で縄文的であり、袋状土坑の可能性もわずかにあり、住居に伴うものか否か定かではない。（竈）東壁南寄りにあり、焚き口部・煙道部を含めた規模は東西1.6m×南北0.96m。竈の石組みはほとんど残っていないが、焚き口の南北には袖石を外したであろう凹みが確認されている。また竈南側の配石は竈礫を用いた可能性が十分ある。竈内からは支脚石は検出されなかった。竈内覆土には最下層に焼土層が堆積した。竈覆土を採取し水洗選別したところ、炭化種実は検出されなかった。（壁溝）南壁竈寄りを除きほぼ全周した壁溝が明瞭にある。北壁は幅20㎝、深さ5㎝、南壁は幅20㎝、深さ5㎝、東壁幅23㎝、深さ7㎝、西壁幅20㎝、深さ10㎝である。（壁）壁溝から直に立ち上がる。（その他の施設）西壁中央のピットは何らかの壁施設の可能性が

ある。（**遺物**）土師器坏（1～4）、黒色土器坏（5・6）、黒色土器皿（7・8）、土師器皿（9）、須恵器高台坏（10）、小型ロクロ甕（11）、土師器甕（12・14～17）、土師器小型甕（13）、須恵器長頸壷（18）、灰釉陶器長頸壷（19）、つき臼（21）、砥石（22）紡錘車（25）のほか中世の内耳土器（20）、縄文時代の打製石斧（23）、石鏃（24）などが出土している。坏皿類は黒色土器を主に、甲斐型土器、在地的な土器、須恵器がある。つき臼（21）は、縄文の多凹石を転用したらしい片面に凹みを数個もつもので、径8.4cm、深さ5.5cmの孔が途中まであけられ、孔内には旋回した同心円状の痕跡が認められる。墨書土器は1点ある（4）。（**時期**）平安3段階。

25号住（第44・129・130図,図版41・93・94）（**位置**）S・T14グリッド。24号住の1.1m。調査区南端の台地上。（**重複**）東壁に405号ピットが重複し、また北東隅に縄文時代の413号ピットが重複する。（**検出状況**）当初、24号住同様に地面の凍結のため壁のラインは不明瞭なものであったが、調査途中で修正を加えていった。（**形状・規模**）やや歪んだ隅丸方形で、台形状。東壁南寄りに竈がある。主軸長3.1m×交軸長3.0m。（**覆土**）炭化粒・焼土粒を少量混入する黒褐色土が主体。（**遺物出土状況**）覆土中位から竈を中心に東側を中心として少量出土した。竈の天井石かと思われる石が竈南側にあった。（**床・掘り方**）軟弱な床である。（**竈**）東壁南寄りにあり、石組み竈である。焚き口部・煙道部を含めた規模は東西1.25m×南北0.85m。北側袖石は長さ50cmほどの礫を2個並べ構築し、南側袖石は1個のみが内側に倒れ込むような形で遺存している。天井石は焚き口部手前に1枚遺存した。竈内には長さ23.5cm、幅8cmほどの端部の平坦な礫を直立させた支脚石が遺存していた。竈内覆土は炭化粒．焼土粒を混入する黒褐色土が主体となって堆積しており、その下に厚い焼土層が堆積している。黒褐色土を採取・水洗選別した結果、モモの炭化核が4片検出された。（**壁溝**）ほぼ全周するようであるが、北・西壁においてはピットなどの影響により不明瞭で、東・南壁では幅15cm、深さ5cmを確認した。（**壁**）南・東壁はほぼ直に立ち上がる壁であり、北・西壁は残りが悪く、緩やかに立ち上がっている。（**その他の施設**）なし。（**遺物**）土師器坏（1～3・5）、土師器皿（4・6）、黒色土器坏（7～16）、灰釉陶器椀（17）、灰釉陶器皿？（18）、土師器甕（19～22）、土師器小型甕（23）、土師器ロクロ甕（24）、須恵器凸帯壷（25）、須恵器甕（26・27）、支脚石（29）がある。坏皿類は図示した17点中、甲斐型土器4点（23%）、黒色土器（黒色処理のない土器も含む）11点（65%）、灰釉陶器2点（12%）で、黒色土器が非常に大きな比率を占めている。甕類は甲斐型甕のほかに信州系と見られるロクロ・ハケ調整の甕がある（24）。中世の内耳土器（28）、縄文時代の狢沢式土器（30～36）、凹石（37）、石核状石器（38）がある。狢沢式土器は北東隅の413号ピット付近出土である。墨書土器は土師器皿に1点、黒色土器に2点あるが判読はできない。（**時期**）平安4段階。

29号住（第44・45・130～132図,図版42・94・95）（**位置**）N・O17・18グリッド。南台地上。（**重複**）30号住東壁を切る。（**検出状況**）黒褐色土のプランを確認し調査を始めた。10cmほど掘り下げたところで明確な壁が検出され、大幅にプランを変更して調査を進めた。床面まではたいへん深く、遺存状態の良好な住居であった。（**形状・規模**）東西に長軸を持つ隅丸方形で、東壁やや南寄りに竈が設置されている。主軸長4.8m×交軸長4.2m。（**覆土**）床面までは約70cm。黒褐色土が主体であり、床面上には南壁側からの流入・堆積が認められた。（**遺物出土状況**）床面直上からは多くの土師器甕の破片が出土した。竈内からは土師器甕破片や須恵器片が覆土上層より少量出土している。また、北側の焼土が散在する範囲から鉄鎌1点が、また竈南には鉄滓が1点出土している。（**床・掘り方**）硬質の明瞭な床面が検出された。竈北側の床面直上には焼土が東壁寄りにまとまって分布している。南壁ほぼ中央部には地山を掘り残して作られた段状の高まりがある。掘り方調査でも地山から続いていることがわかり、出入り口部に関わる段状土間の可能性がある。掘り方は西北隅・南北隅が落ち込んでいる。（**竈**）東壁やや南寄りに非常に良好な状態で遺存した。石組み竈で、焚き口部・煙道部を含めた規模は東西2.1m×南北1.6m、石組み部は東西1.8m×南北0.97m。竈両脇は地山を掘り残して袖の一部とし、その内側に袖石を壁に向かって3～4個立て並べている。この地山を掘り残すやり方は、南壁の段のつくりと同一である。また竈周囲には白色粘土が比較的良好な状態で遺存した。竈の奥壁には1個の大型礫を立てており、煙道の構造を示すものと思われるが、普通この部分に配石をした例はなく非常に珍しい。天井石の遺存状態も良好で、焚き口部の天井石は焼土上面に崩れ落ちているが、煙道部付近の天井石は袖石上面の小礫上に載ったまま検出され、竈内には支脚石が遺存していた。支脚石は長さ22.7cm、幅11.6cm×4.5cmほどの、上面が平坦で下部がL字状の屈曲をもつ礫を直立させたもので、支脚石上に10.3cm×6.8cm、厚さ3cmほどの小振りの平石が重ねられていた。甕を平らに正しく固定するための工夫であり、坏を伏せる例などが他遺跡例にはある。竈内覆土は下層に薄い焼土が堆積し、その上に白色粘土を混入する褐色土の層が堆積している。それらの2層を採取し水洗選別したが穀類は検出

されなかった。この竈は片付けられなかった例であり、こうした竈には竈内から甕類破片が多量に出ることはないようである。**（壁溝）** 全周する。北壁では幅10cm、深さ4cm、南壁では幅12cm、深さ3cm、東壁では幅14cm、深さ4cm、西壁では幅14cm、深さ5.6cmである。南壁土間上にも壁溝は確認された。**（壁）** 全体に明瞭であり、壁溝よりほぼ直に立ち上がる。**（その他の施設）** 南壁に確認された段状の高まりは住居の出入り口に関係する施設であろう。**（遺物）** 土師器坏（1～10•16）、黒色土器坏（11～15）、土師器皿（17）、土師器ロクロ甕（18～22）、灰釉陶器長頸壷（23）、須恵器長頸壷（24）、須恵器甕（25）、土師器甕（26～36）、支脚石（37）、支脚石蓋（38）、鉄鎌（46）、鉄釘（47）、鉄滓（48）がある。坏皿類には甲斐型土器、黒色土器、在地のナデ調整の坏がそれぞれ同程度の割合で存在する。甕は甲斐型甕が主体のほかロクロ甕などがある。縄文時代遺物としては、凹石（39）、打製石斧（41•42）、石鏃（43～45）、時期不明の遺物として叩き石（40）などがある。墨書土器は3点あるが判読はできない。**（時期）** 平安2段階。

37号住（第45・46・132・133図,図版43・95・96）**（位置）** B・C57・58グリッド。早期包含層から続く傾斜面が平坦部に移行した最初の面にあり、1号住西6.2mに位置する。**（重複）** 9号溝に上面を切られている。また250号ピットが竈に隣接してあり、本住居が切っている。また床面には礫を詰めた414号ピットがあり、縄文土器が出土している。当初、1号住との類似性から掘り方内土坑と判断したが、縄文中期末のピットであろう。**（検出状況）** 9号溝底部より一個体の土師器ロクロ甕（11）が出土したため住居の存在が推定され、壁と思われるラインが一部確認されたが、それ以上の連続はないため調査しなかった。しかし全体の調査がほぼ終了し、念のため37号住付近を重機で全体的に掘り下げたところ、完形にちかい土師器坏や集中した焼土が確認され、急遽住居と判断し調査を行った。住居が黒色土壌中の構築であったため、黄色礫層上面に掘り込まれたレベルまで全体を下げてようやく確認できたのである。西壁はわずかに調査区境にかかり検出できなかった。また南壁は上面の掘り下げのため不明瞭であるが、北・東壁は明瞭であった。**（形状・規模）** 隅丸方形で東壁南寄りに竈がある。主軸長4.7m×交軸長4.3m。**（覆土）** 重機で覆土上層を削除したため覆土は浅い。覆土は炭化粒を多く含む暗褐色土で、床面上には広範囲に焼土が分布していた。**（遺物出土状況）** 床直・床面に近い部分から遺物が出土した。北西壁付近からは完形遺物が4点ほど出土し、うち北西隅の壁溝中には土師器坏と皿が重なって正位に出土し（1•5）、ともに同様の文字が墨書されていた。また、竈全面や南西隅には焼土が散在し、その上面に遺物の破片が散在している。竈内からは同一個体とみられる土師器甕の破片が多く出土している。**（床・掘り方）** 中央から北東では3ヶ所ほど楕円状に床面がとぎれる場所があったが、その他は全面的に硬化した床面が検出できた。床面の中央よりやや西側に径約110cm、深さ42cmの414号ピットがあり、平たい礫が10個ほど詰められていた。そのほか掘り方には浅いピットが数個検出された。**（竈）** 東壁南寄りにあり、石組みは遺存していない。東西1.57m×南北1.0m。支脚石は確認されなかった。竈内覆土は1～5層に分層でき、うち焼土を含む4層について土壌を採取・水洗選別を行ったが、穀類は検出されなかった。**（壁溝）** 西・南が不明瞭ではあるが、ほぼ全周している。東西・北壁では幅25～30cm、深さ8cm。南壁の壁溝はとくに不明確であった。**（壁）** 壁溝からほぼ直に立ち上がる壁のようであるが、立ち上がりはほとんど検出していない。**（その他の施設）** なし。**（遺物）** 土師器坏（1～4•7）、土師器皿（5•6）、黒色土器坏（8•9）、黒色土器高台皿（10）、土師器ロクロ甕（11）、土師器甕（12•14～18）、須恵器壷（13）、土師器小型甕（19）、須恵器甕（20）、灰釉陶器壷（21）がある。坏皿類は甲斐型土器が主で、3割程度の黒色土器をもつ。甕類はやはり甲斐型が主で、ロクロ甕、ナデ調整甕が少量伴っている。縄文時代の遺物としては、414号ピット出土の鉢（22～27）のほか、多凹石（28）、横刃型石器（29）、石鏃（30•31）などがある。墨書土器は重なって出土した1と5にあり、「四万」と判読できる。この文字は青木北遺跡5号住の皿体部外面に正位で書かれたものと同一文字・同一書体で、突き合わせは行っていないものの同一人物による筆記と推定される（森　1992）。**（時期）** 平安4段階。

第3節　近世～近・現代

1　溝（第52・53図）

1号溝（位置） B～D63グリッド。**（方向と傾斜）** 東から西へ向かって大きくカーブしている。西傾斜。**（規模・形態）** 幅40～60cm、深さ57cm、長さ11•5m。内部にエンビの水道管が埋設されている。**（切り合い）** 11・13号溝

を切る。（出土遺物）縄文土器片。黒曜石製掻器１（第171図４）。（時期）現代。（機能）調査区東側にある別荘地と、西側の農道脇にあるポンプ小屋とを結ぶ水道管埋設溝。

２号溝（位置）Ｂ・Ｃ63グリッド。少し前まで使用されていた道に沿った溝で、斜面の中間に位置する。（方向と傾斜）Ｅ－９°－Ｗ。西傾斜。（規模・形態）幅50㎝、深さ53㎝、長さ10.5ｍで、11号溝に切られるところで溝がずれている。（切り合い）11号溝と重複し、切られるようである。また13号溝に切られている。（出土遺物）なし。（時期）現代か。（機能）道の側溝、あるいは地境溝か。

３号溝（位置）Ｂ～Ｄ61グリッド。（方向と傾斜）Ｅ－７°－Ｗ。わずかに西傾斜。（規模・形態）幅0.7～1.2ｍ、深さ50㎝、長さ12.8ｍ。調査区外へとさらにのびている。断面形は11・13号溝と同一で、箱状。二重に重複し、南側に重複する溝の方が新しい。（切り合い）なし。（出土遺物）縄文土器片、土師器片、灰釉陶器片、織部陶器片、瓦片。（時期）現代か。（機能）現在の地境と一致し、地境溝であるとともに上からの雨水の排水溝か。

４号溝（位置）Ｂ・Ｃ63グリッド。２号溝に平行する。（方向と傾斜）Ｅ－９°－Ｗ。（規模・形態）幅50～60㎝、深さ25㎝、長さ6.5ｍ。11号溝に接して止まっている。（切り合い）11号溝に切られる。（出土遺物）なし。（時期）現代か。（機能）２号溝同様に道の側溝か、あるいは地境溝か。

５号溝（位置）Ｂ62・63グリッド。南斜面。（方向と傾斜）Ｎ－20°－Ｅ。南傾斜。（規模・形態）幅30～80㎝、深さ16㎝、長さ４ｍ。（切り合い）１号溝に切られる。（出土遺物）なし。（時期）現代か。（機能）不明。

６号溝（位置）Ｂ62・63グリッド。５号溝の東側。（方向と傾斜）Ｎ－13°－Ｅ。南傾斜。（規模・形態）幅70～1.2ｍ、深さ13㎝、長さ3.2ｍ。北側にある11号溝の延長線上にあり、また南側にも10号溝など不連続につながっていくようである。（切り合い）かつての道に切られている。（出土遺物）縄文土器片、黒曜石製掻器１（第171図５）。（時期）現代か。（機能）不明。

７号溝（位置）Ｃ62グリッド。（方向と傾斜）南傾斜。（規模・形態）溝というよりはピット状である。（切り合い）ピットが重複する。（出土遺物）縄文土器片、土師器片。（時期）不明。（機能）不明。

８号溝（位置）Ｃ58・59グリッド。斜面にあり、９号溝に接続する。（方向と傾斜）Ｎ－９°－Ｅ。南傾斜。（規模・形態）幅50～70㎝、深さ8㎝、長さ６ｍ。（切り合い）９号溝との前後関係は不明。（出土遺物）縄文土器片、灰釉陶器片。（時期）近世以降か。（機能）排水のための溝か。

９号溝（位置）Ｂ～Ｄ58グリッド。（方向と傾斜）東西方向に蛇行しながらのびている。西傾斜。（規模・形態）幅1.8ｍ、深さ38㎝、長さ12ｍほど確認した。さらに調査区外へのびている。（切り合い）４・37号住を切る。溝内北側に人頭大の礫による石列が不連続にあり、かつての地境溝か。（出土遺物）縄文土器片、灰釉陶器片、内耳土器片。（時期）近世以降か。（機能）かつては地境溝であったと思われるが、現在の地境ではない。

10号溝（位置）Ｃ60グリッド。（方向と傾斜）Ｎ－３°－Ｅ。（規模・形態）幅20～30㎝、深さ11㎝、長さ1.9ｍ。（切り合い）なし。（出土遺物）なし。（時期）不明（機能）不明。

11号溝（位置）Ｂ63～68グリッド。北台地南斜面。この溝の北端は、現在でも使われている東西方向の溝にＴ字形に接続している。（方向と傾斜）南北方向の溝で、南傾斜。（規模・形態）幅1.2ｍ、深さ95～105㎝で、25.5ｍほど弓なりにのびている。断面形は箱状である。２時期の掘削により、底面には段がある。（切り合い）13号溝と絡み合う。13号溝と断面形が類似し、同時期あるいは11溝の方が新しい。（出土遺物）縄文土器片、黒曜石製石鏃１（未図化）、フレイク、土師器片、近世陶磁器片。（時期）現代か。（機能）よくわからないが、畑中の排水のためのものか。

12号溝（位置）Ｃ60グリッド。２号住南側。（方向と傾斜）Ｅ－３°－Ｗ。傾斜はとくにない。（規模・形態）幅60㎝、深さ10㎝、長さ3.6ｍ。（切り合い）なし。（出土遺物）土師器片。（時期）不明。（機能）現代の撹乱。

13号溝（位置）Ｂ63～67グリッド。斜面にのびる。（方向と傾斜）南北方向に大きく弓なりにのびている。（規模・形態）幅60～70㎝、深さ46㎝、長さ24.5ｍ。断面形は11号溝同様に箱状。（切り合い）11号溝に切られ、Ｂ66・67グリッドでは11号溝の東側に重複して存在する。（出土遺物）縄文土器片、灰釉陶器片、セルロイドの動物の頭。（時期）現代か。（機能）地境、あるいは排水溝か。

14号溝（位置）Ａ72・73グリッド。第２次調査でこの溝の続きが出ている。台地の縁辺部にあたる。（方向と傾斜）Ｎ－13°－Ｅ方向の溝で、南に傾斜する。（規模・形態）長さ10.5ｍ、幅30～40㎝、深さ17㎝程度。断面は鍋状。（切り合い）14号住を切る。（出土遺物）縄文土器片。（時期）近世以降か。（機能）地境溝、あるいは根切り溝と思われるが、15号溝と平行してのびていることから、道の側溝かもしれない。

15号溝（位置）Ａ72・73グリッド。14号溝と平行するようにのびており、14号溝との間隔は40～70㎝。（方向と傾斜）14号溝に同じ。（規模・形態）長さ5.5ｍ、幅40～80㎝、深さ28㎝。断面は鍋状。（切り合い）14号住を

切る。(**出土遺物**) 縄文土器片、土師器片。(**時期**) 近世以降か。(**機能**) 14号に同じ。

16号溝 (**位置**) B69～72グリッド。北へのぼる道の延長線上にある。(**方向と傾斜**) N－5°－E。南傾斜。(**規模・形態**) 幅1m程度、深さ8cmで、16mにわたり不連続にのびる。(**切り合い**) 9号住上層を切る。またいくつかのピットと重複する。(**出土遺物**) 縄文土器片。(**時期**) 現代か。(**機能**) 道の延長線上にあるので、溝ではなく道のわだち、あるいは地境溝であろう。

17号溝 (**位置**) A～C65グリッド。(**方向と傾斜**) E－3°－W。西傾斜。(**規模・形態**) 幅30～50cm、深さ4.1cm。長さ10.5mであるが、5号住上面にものびるのを確認している。(**切り合い**) 11・13号溝に切られ、5号住上層を切る。(**出土遺物**) 縄文土器片。(**時期**) 不明。(**機能**) 不明。

18号溝 (**位置**) C69グリッド。(**方向と傾斜**) N－16°－Eか。(**規模・形態**) 長さ90cm、幅40cm、深さ16cm程度で、6号住上面での状況は捉えていない。(**切り合い**) 6号住上層を切る。(**出土遺物**) なし。(**時期**) 不明。(**機能**) 不明。

19号溝 (**位置**) B70グリッド。9号住東側。(**方向と傾斜**) 東西方向。西傾斜か。(**規模・形態**) 幅40cm、長さ1.2m。溝というよりピットに近い形態。(**切り合い**) 9号住上層を切っているらしい。(**出土遺物**) 縄文土器片。(**時期**) 不明。(**機能**) 不明。

20号溝 (**位置**) B62・63グリッド。5号溝と平行してのびる。(**方向と傾斜**) N－18°－E。(**規模・形態**) 幅60～70cm、深さ14.9cm、長さ3.2m。(**切り合い**) 13号溝に切られる。(**出土遺物**) 縄文土器片。(**時期**) 現代か。(**機能**) 不明。

2　箕輪堰（ふるせぎ）(第53図,図版48)

(**位置と現状**) J26グリッド付近にあり、農道脇に東方向へ窪地化した痕跡が残る。一見、山道のようでもあり、雑木に覆われて荒れていた。断面観察したあたりでは、現状で幅8m、深さ1.1m程度のくぼみとなっている。この場所が一般的に「ふるせぎ」という呼称で広く認知されているかどうかは定かではない。県埋文調査の箕輪新町地内の旧堰も「ふるせぎ」であり、こうした堰跡の類はすべて「ふるせぎ」と呼ばれるようである。ここでも現在の箕輪堰に対して使用されていない堰という意味で「ふるせぎ」と呼びたい。須玉川から水を引いた箕輪堰は複雑に枝分かれして各地区に水を配分しており、そうした支流のひとつと思われる。(**方向**) 東北方向から水田地帯へ向けて台地を斜めに掘削して構築されている。(**調査状況**) 主に断面観察を主眼として2m幅程度のトレンチを堰に対して直角方向に入れ、その範囲で溝底面を検出した。(**規模・形態**) 幅は広く見ると9m程度、狭く見ると6.3mで、深さは台地のへりから2.3mである。底部は擂り鉢状で、段がついてさらに深くなっている。(**土層堆積状況**) 底部付近の段から下の堆積土（6層）は、礫を多く含む砂礫層で、その範囲が水流の範囲であろう。(**出土遺物**) なし。(**時期**) 箕輪堰の完成は、記録では明暦3年（1657）といわれるが、このような支流のすべてがその頃に完成したとは思われない。出土遺物があったとしても時代決定は大変難しい。なお、箕輪バイパスに伴う古堰遺跡で検出された堰の断面形とよく類似する（萩原・田口　1996)。古堰遺跡例は幅15m、深さ約7mで、断面V字形であり、社口例よりはるかに大規模である。断面形の類似から時代的にも同じ頃の開削であろう。(**機能**) 用水を引いた堰。

第4節　ピット（第46～51・134～141図，図版44～48・96・97)

現場でNo.を与えたピットは414ある。うち撹乱、獣穴、シミ状のものは117ほどあり、そのほかにも遺構ではないと思われる小穴が多数含まれている。また集石炉や埋甕をもつものもあるが、掘り込みをもつ遺構をすべてピットとした。本書には出土遺物のあるピット実測図を掲載しているが、それらの中には時期・性格不明の遺構も含まれている。ここでは出土遺物や検出状況から時期が推定できるものを掲げて概要を記す。他のピットを含めて詳細なデータに関しては第13表に譲るが、このうち遺物が出土していないピットはシミ状のものあるいは近現代の撹乱であり、表から除外した。

1　縄文時代草創期～早期

406号ピット（第51図）　草創期～早期包含層の斜面上部にあり、長径15～25cm、厚さ8cmほどの安山岩平石

（鉄平石ではない）6枚を平らに敷いた配石遺構で、石の表面は4枚が被熱・赤変していた。ピットの掘り込みは不明確で、あったとしても非常に浅いものであり、長径1mの楕円形と思われる。断面図1層が掘り方で2層は地山（包含層）である。出土遺物は皆無で、本ピットをこの時期に位置付ける根拠はない。そばに中期土器を出した251号ピットなどがあることから、中期の可能性もある。ほかに63号ピットに掻器2（第171図1・2）、115号ピットに楔形石器1（第171図6）、167号ピットに掻器1（第171図3）・縦長剝片（未図化）1がある。いずれも混入品と思われる。

2　縄文時代中期

(1)　狢沢式期

413号ピット（第44・130図）　25号住北壁に重複するピットで、住居調査時に周辺から狢沢式期を主とした土器片や石器が出ている。付近の34号住との関わりがあろう。

(2)　曽利Ⅰ式期

401号ピット（第51・140図）　径1m、深さ25cm程度の鍋底状のピットで、上面に曽利Ⅰ式期の長胴深鉢片が多く出ている。土器は1個体にまとまらず、その場で割ったのではなく、ピット上面を封鎖するために破片で覆ったような状況であった。東壁寄りに礫が出ている。

408号ピット（第51・141図）　28号住居内の西壁にある。径80cmほどの円形ピットで、断面箱状。壁際に礫があり、その下の底付近から深鉢の無文口縁部片を主とする大形土器片が出ている。出土土器は同時期で、住居址内出土土器との接合関係をもつ。同時併存、または住居直後の時期想定ができる。

(3)　曽利Ⅱ式期

4号ピット（第46・134図）　径1.2m、深さ35cmほどの円形ピットで、断面は鍋底状。小破片と打斧が出ているのみ。

21号ピット（第46・134図）　径1m足らずの円形ピットで、深さ約40cm、断面鍋底状。底部に50cm近い平石がある。図示した狢沢式期の土器の他に曽利Ⅱ式土器が数点出ている。

22号ピット（第46・134図）　径1.1mの皿状のピットで、深さ20cm。土器の小片が少量あり、完形のミニチュア土器1点出土。

25号ピット（第46・134図）　径90cm、深さ45cmほどの円形ピットで、断面は鍋底状。礫が2個入っている。

41号ピット（第47・134図）　径1.7mほどの円形ピットで、深さ20cm足らずの皿状。曽利Ⅳ式期頃の鉢ないし壺形土器（12）のほか、小片が出ている。また土鈴と思われる破片が1点ある（16）。

55号ピット（第47・135図）　径1.1mの円形ピットで、断面は鍋底（円筒形）。土器の小片が少量出土。

86号ピット（第48・136図）　径50×80cmほどのピットで、深さ30cm、断面は鍋底形。

(4)　曽利Ⅲ・Ⅳ式期

33号ピット（第47・134図）　径1.2m程度の不整円形ピットで、深さ約30cmの鍋底状。曽利Ⅲ・Ⅳ式中心に土器小片が少量出土。

95号ピット（第48・136図）　径1.1mの円形ピットで、深さ55cm、断面形は鍋底状。曽利Ⅲ式期を主とした土器片が中位から上部で出土。

251号ピット（第49・138図）　径40cmほどの皿状ピットで、上面に曽利Ⅲ式期の深鉢片が2個体分出土。早期包含層の傾斜面にあり、掘り方は不明瞭。

(5)　曽利Ⅴ・中期末期

414号ピット（37号住内ピット，第45・133図）　径110cmの円形ピットで、深さ42cm。礫が多数重なっており、その上面や礫間に中期末の土器片が出土。

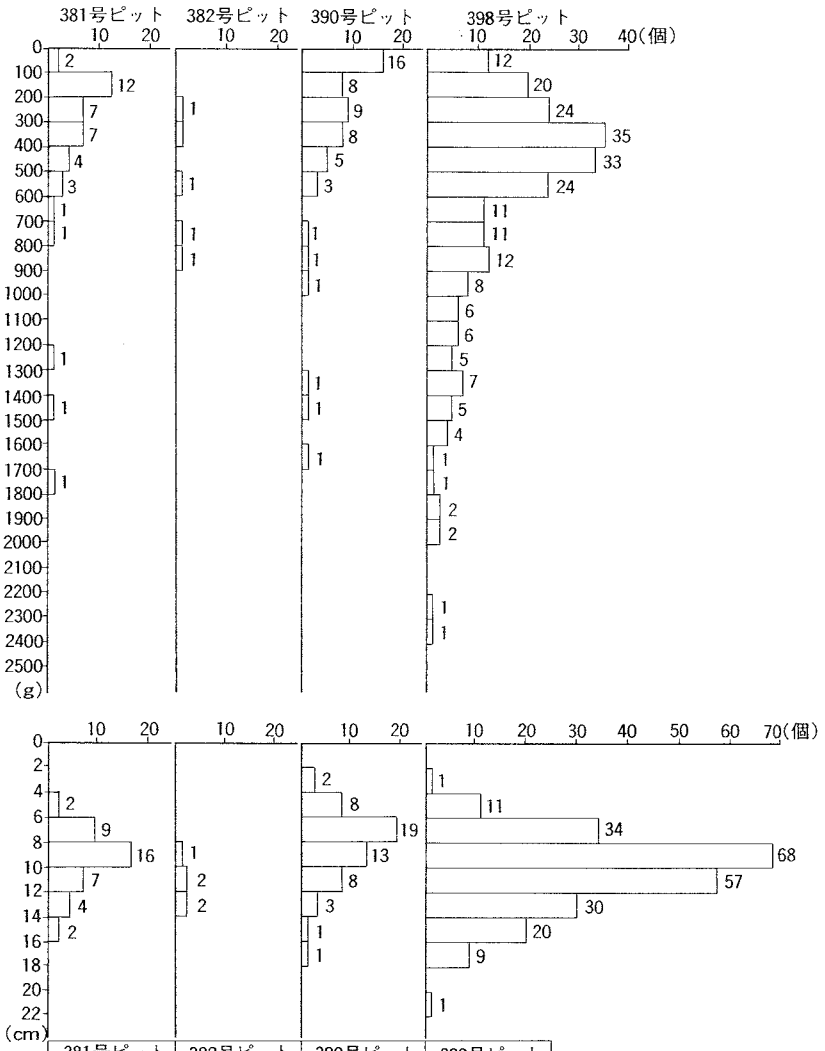
(6)　中期後半期（時期不明）

10号ピット（第46・134図）　径0.8～1mの円形ピットで、断面は鍋底状。中期後半代の土器片が少量出ているが小破片ばかりで、時期が不明瞭である。ピット中には赤変した長径40～50cmの安山岩板状角礫が2個入っている。これらの礫は形態から炉石であった可能性が高い。位置的には8・9号住（炉石は全くない）・13号住（炉石は2辺のみ存在）が近く、どれかの炉石をはずして埋設したのであろう。確実に炉石であったとみる証拠もないけれども、炉石転用の1例として、今後の類例を待ちたい。

61号ピット（第48・135図）　曽利Ⅱ～Ⅴ式期の土器片が出ているが、時期を特定できない。

(7)　集石炉（第50・51図，図版45～47）

381・382・390・398号ピットは集石炉である。時期を確定する土器がほとんど皆無であり、当初は集石礫中に表面が高温で発泡したものも多数含まれていたことから平安時代以降に属すのではないかと思われたが、398号ピット出土炭化材の^{14}C年代測定で4,470±120BPという結果が判明し、同時に８号住（曽利Ⅱ式期）が4,300BP頃であったため、曽利Ⅰ式期又は中期初頭の所産だろうと推測するに至った。４基の集石炉は９ｍ内の範囲に集中し、同時期あるいは近接した時期であることが想定できる。仮に南側台地上にまとまっている曽利Ⅰ式期の集落に伴うものと予想した場合、集落の北側約30ｍ離れた位置になる。集落とやや離れており、より近接した場所に居住域が存在することも考えられる。なお集石炉および発泡礫の温度については第５章を参照。



	381号ピット	382号ピット	390号ピット	398号ピット
総数(量)	40(15,220g)	5(2,810g)	55(17,885g)	231(139,310g)
赤変礫	7(17.5%)	1(20%)	6(10.9%)	70(30.3%)
黒変礫	19(47.5%)	3(60%)	39(70.9%)	206(89.2%)
発泡礫	10(25%)	0	20(36.3%)	108(46.8%)
欠損礫	33(82.5%)	2(40%)	52(94.5%)	195(84.4%)

第153図　集石炉の礫構成

381号ピット（第50図）　現状では径１ｍ足らずの小さな円形ピットであるが、上面が削平されているため、本来はもっと大きなピットと思われる。集石は長径４～15㎝、40～1720ｇの礫が40個集中しており、赤変礫（被熱による赤変）７個（18%）、黒変礫（被熱によるスス状の付着などによる黒変）19個（48%）、発泡礫（表面が高温のために発泡した礫）は10個（25%）、欠損礫（一部欠けた礫）33個（83%）であり、多くが被熱して黒変していた。坑底からやや浮いて、径60㎝ほどに配石して平らな面を設けた石組みがある。長径15～25㎝ほどの平坦な面をもつ礫を11個用い、中心に５個程度を据えて周囲に縁石状に並べている。それらの礫表面にも一部赤変が見られた。覆土は炭化粒を含んだ黒色土で、焼土粒もある。

382号ピット（第50図）　坑底の石組みとわずかな集石の一部が見つかっている。径１ｍ足らずであるが、上面は削平されている。石組みは25～40㎝程度の礫５個程度を組んだもので、平たい安山岩礫を用いる。礫表面はいずれも被熱・赤変している。覆土は炭化粒を多く含んだ黒色土。集石は赤変礫１個、黒変礫３個、発泡礫０個であった。

390号ピット（第50図）　径1.5ｍの円形ピットで、深さ40㎝。上面に径70㎝の範囲で集石があり、長径４～17㎝、50～1660ｇの礫55個が集中していた。集石は赤変礫６個（11%）、黒変礫39個（71%）、発泡礫20個（36%）である。集石の堆積状況は、断面でみると上面が窪んだ形である。集石は被熱し黒変したものが多い。集石の直下、ピット底面の中心部には径60㎝の範囲で10～30㎝程度の細長い礫を組んだ石組みがある。中心に５個の礫を据え、周囲に縁石状に並べている。石組みの礫表面の被熱はあまりない。覆土は大きな炭化材や炭化粒を含む黒色土である。

398号ピット（第51図）　23号住（平安期か）と重複する。4基の集石炉の中では最も高い位置にあり、深い掘り込みで遺存状況もよい。ピットは、径1.5mの2基の掘り込みが重なり、全体では1.7mほどのピットとなっている。調査では2基の重複に気づかずに同時に掘ったため、集石を上下一括で取り上げた。2基は上下の重複で、下部集石炉は深さ70cm、坑底よりやや浮いて深さ40cm付近に石組みがあり、径30cmほどの平石周囲に8個の礫を並べている。礫はほとんどが被熱している。覆土は炭化粒を多く含む暗褐色土である。上面の集石炉は深さ25cmで、石組みは長径15～25cmの礫6個程度で組んでいる。断面が深めの箱状である。集石は上面に多く伴っているが、一括であげたため上下の区別ができなくなっている。覆土は炭化粒を多く含む黒色土である。集石は総数では231個あり、大きさは6～22cmのうち8～12cmのものが圧倒的に多い。個々の礫重量は50g～1960gで、300～500gが多い。総重量139.31kg。231個中赤変礫70個（30%）、黒変礫206個（89%）、タール状付着礫31個（13%）、焼土付着礫63個（27%）、発泡礫108個（47%）、欠損礫195個（84%）である。安山岩礫で、円礫ではなく角張ったものを多く用いている。発泡礫は大半がごく一部の発泡で、安山岩のためガラス質がほとんど含まれていないにもかかわらず、細かな気泡が抜けたような小孔が礫表面に見られ、やや軽い感じである。ピット中で燃焼した場合、簡単な窯構造のため内部は予想以上に高温になった可能性がある。なお覆土の土壌水洗を行ったが、炭化材以外の動植物遺体は出ていない。

3　縄文時代後期

(1)　堀之内1式期

250号ピット（第49・137図）　径70cmの円形ピットで、深さ5cm程度の断面皿形を呈し、ピット中央部に深鉢胴下半を正位埋設する。ピットは西側を37号住に切られる。土器のまわりに一部焼土ブロックがあり、炉体土器と思われる。住居であれば周囲にピットを伴うはずであるが、遺構は黒色土～暗褐色土中の掘り込みであり、炉周辺にあったと思われるピットは確認できなかった。また炉であれば方形の石囲いや敷石を伴うであろうが、検出面にはそうしたものはなかった。したがって住居No.を付けるべきであったが、ピットとして処理した。土器は沈線文をもつ胴下半の土器の上面に別個体の胴上半の破片を巻くように置いている。なお土器内部からモミ属の炭化材が出ている。

296号ピット（第49・138図）　径75cm程度の円形ピットで、断面は鍋底状。土器が数片出ており、明らかに堀之内1式期と思われるもののほか、66など時期不明のものが混じる。

391号ピット（第50・140図）　径1.4mほどの円形ピットで、断面は皿状。堀之内1式期の土器片がやや多く出土している。

以上のほかに309・314・368号ピットでも堀之内1式期の土器片を伴っている。

(2)　堀之内2式期

338号ピット（第49・139図）　径1.1mほどの円形ピットで、断面は鍋底状。337号ピットを切っている。25～35cm大の礫2点がピット中央に置かれている。堀之内式期の小片がやや多く出ており、時期のわかる資料では堀之内2式期がある。

343号ピット（第49図）　径1.2mほどの円形ピットで、断面は鍋底状。堀之内2式期を主とした土器細片がやや多く出土。

344号ピット（第50・139図）　径1mほどの円形ピットで、断面は鍋底状。堀之内2式期の土器片、土偶片、凹石が出土。

以上のほか、367・373・393・395号ピットでも堀之内2式期の土器片が出ている。それらは21号住や26号住など同時期の住居址周辺にある。

(3)　加曽利B式期

143号ピット　台地傾斜面上部で出ている楕円形のシミ状ピットで、加曽利B2式期かと思われる口縁部片が出ている。台地上には同期の遺構は検出されていないが、台地下に存在した青木遺跡では加曽利B式期は主体的な時期であり、集落周辺が台地上も含めて何らかの土地利用が行われていたことを示す資料である。

(4)　後　期（時期不明）

263号ピット（第49・138図）　50×70cm程度の楕円形ピット中に土器の胴下半を正位埋設したもので、おそらく炉体土器である。土器周辺のピット底面は焼土化し、炉体土器の隣にも小形の土器底部が焼土面に正位で置かれていた。周囲には住居に伴う可能性があるピットがいくつか存在するが、とりあえずピットで処理した。炭化

材が少量伴っており、炉体土器からはモミ属・クリまたはコナラ節、小さい土器からはモミ属が出ている。時期は無文土器のみではっきりしないが、堀之内式期頃であろう。

ほかに295・299・303・304・305・306・310・312・313・320・328・335・336・341・352・376・377号ピットで後期と思われる無文土器を中心とした土器細片が出ており、いずれも堀之内式期の範疇に収まるものと思われる。

4　平安時代

63号ピット（第47・135図）　長さ3.5m、幅2•3mの大きな落ち込みで、深さ約50cm。段切り溝のような形態で、30～45cmの大きな礫が斜面に置かれ、一部積み上げられている。西側へ細長く続いているように見られ、溝状である。通常のピットや住居ではない。土師器・須恵器や縄文の凹石などが出ており、平安あるいは近現代の所産であろう。

以上のほか、17・147・225号ピットから土師器片が出ており、平安時代のピットかと思われる。

5　中世～近世

404号ピット（第51・141図）　南台地の端、水田地帯を見下ろす見晴らしの良い場所にある。単独で存在するが、調査区脇には塚が数基あったらしいこと、24・25号住覆土上層から内耳土器片が見つかるなど、墓域となる可能性もある。本址は上面の掘り方では円形に見えるが、下部の形状では1.25×1mの楕円形もしくは長方形の掘り方で、深さは約1m。坑底より60cm上面に長径30～40cmほどの礫20個以上を平らに2層ほど詰めている。礫は安山岩の割石を主とした角礫である。主軸方向はN－23°－E。坑底に近い位置から六道銭とみられる銭貨5枚が重なって出土した。出土位置は北側の坑底である。銭種は景祐元宝1、皇宋通宝1、太平通宝1、永楽通宝1、元祐通宝1。現場では骨類は見あたらなかったが、坑底付近の土を水洗したところ、微細な骨片がやや多く検出された。数mmの白色微細片であり、原形をとどめるものは皆無で、被熱の有無ははっきりしないものの焼骨ではない。人骨かどうかの鑑定は微細片のため行っていないが、六道銭の伴出状況から土坑墓であることは確実である。他遺跡例を参考にすれば北枕屈葬と推定でき、銭の出土位置は頭部付近となろう。覆土堆積状況は正しく図化できていないが、黒色土と黄色土の互層を示しており、埋葬後、直ちに埋め戻されたような状況であった。他の遺跡例との比較については第5章を参照。時代は永楽銭を含むことから15世紀以降であろう。

第5節　遺構外出土遺物（第142～150図,図版97）

1　**縄文土器**　第162図に分布を示すように、本遺跡には草創期（表裏縄文土器段階）から後期中葉（加曽利B2式期）までの遺構外出土土器がある。ここではいくつかのの土器片のみ提示する。中期後半では曽利式土器（1～6）、加曽利E式土器（7・8・10）がある。後期では称名寺式土器（11）、堀之内式土器（13～15）、加曽利B式土器？（16）がある。9は堀之内式期の粗製土器であろう。

2　**石器・石製品**　打製石斧（18～44）、横刃形石器（45～47）、磨製石斧（48・49・100）、凹石（50～81）、石皿（82・83）、石錘（84）、磨き石（85）、玦状耳飾り（86）、多孔石（87・88）、石鏃（89～99）、石匙？（101）がある。凹石の多くはA68グリッドの溝中から採集されたものが多い。おそらく現代の耕作に伴って北台地上の遺物が礫とともに溝中に投棄されたものである。

3　**土製品**　土偶（102～105）、土製蓋（106）、ミニチュア土器（107・108）がある。102は土偶の胴部片で、中央に接合面があり、2本の粘土棒を接合して胴部を形成している。中期後半の製作技法であるが、形態・文様的には後期と思われる。103は後期土偶脚部片で、脚を強く踏ん張った形であり、堀之内式期の所産と思われる。104は中期後半の下半身の土偶片で、本来は腕を左右に伸ばした形態である。胴部から脚が突き出たようになっており、脚の裏側に尻がついた形である。加曽利E式に伴う土偶に類似した曽利Ⅲ～Ⅳ式期の所産であろう。105は104と同時期頃の頭部片で、後頭部の文様は中期中葉のものに較べ素文・簡略化が著しい。ほかにO16グリッドで後期堀之内2式期の中空土偶背部片らしきものが1点出ている（第171図9）。

4　**その他**　刻書土器（109）・墨書土器・（111～113）・鉄製品（114）がある。110の墨書土器は甲斐型皿の渦巻き状暗文が施文された内面見込み部に「不」と書かれており、墨書の位置としては珍しい。「不」は青木北遺跡4号住の暗文のある坏底部にもある（森　1992）。

第4章　自然科学分析

第1節　炭化物の分析

1　社口遺跡から産出した大型植物化石

新　山　雅　広（㈱パレオ・ラボ）

(1)　はじめに

社口遺跡は山梨県高根町に所在し、標高約720mの八ヶ岳南麓に立地する。今回は、本遺跡付近における栽培状況および周辺植生を明らかにする目的で大型植物化石の検討を行った。

(2)　産出した大型植物化石

大型植物化石の検討を行った試料は計169試料であり、時代については平安時代、縄文時代の試料が含まれる。これら各試料から産出した大型植物化石の一覧を第2表に示す。

全試料から産出した大型植物化石は木本5分類群、草本18分類群、その他虫えい、菌核を産出した。木本で産出したのは針葉樹のヒノキ、落葉広葉樹のオニグルミ、カバノキ属、クワ属、モモである。草本で産出したのはイネ、オオムギ、コムギ、ムギ類（オオムギあるいはコムギ）、エノコログサ属、アワ、スゲ属、カヤツリグサ属、ホタルイ属、カナムグラ、クワクサ、タデ属A、タデ属B、タデ属C、シロザ近似種、ナデシコ科、ササゲ属、マメ科、エノキグサである。菌核は多数の試料から産出しており、特に6住カマド3層、12住カマドの試料では極めて多産する。菌核は腐った樹木の表面などにつく菌の集合であるが、生態や種類が不明のためここでは検討の対象から省いた。

(3)　考　　察

a．栽培状況

産出したもののうち、栽培植物と考えられるものは木本ではモモ、草本ではイネ、オオムギ、コムギ、ムギ類、アワ、ササゲ属（アズキ、リョクトウの類）である。このうちアワは68試料から産出しており、最も多数の試料から産出している。イネも17試料と比較的多数の試料から産出している。これら栽培植物は平安時代と考えられる試料から産出しており、平安時代には既に遺跡付近で栽培されていたものと思われる。ササゲ属に関しては縄文時代後期と考えられる試料（16住炉）からも産出しており、縄文後期には既に栽培されていた可能性が考えられる。

栽培されていた可能性のあるものとしては、タデ属A、タデ属B、シロザ近似種があげられる。タデ属A、タデ属Bとしたものは炭化した状態でイネやムギ類（オオムギやコムギ）などの穀類と共に遺跡から産出することがしばしばあり、それらと共に栽培されていた可能性が考えられるものである。本遺跡においてもイネ、オオムギ、コムギなどと共に産出しており、栽培されていた可能性が考えられる。しかし、雑草として生育していた可能性や肥料として用いられていたために、イネなどと共に産出した可能性もある。シロザ近似種は、栽培され若葉を食用にするアカザと畑地などに雑草としてみられるシロザとがある。

b．周辺植生

縄文時代の試料から産出したのは木本ではオニグルミ、草本ではタデ属A、タデ属C、シロザ近似種、ナデシコ科、エノキグサである。オニグルミは遺跡周辺の川沿いなど湿った所に生育していたものと思われる。オニグルミの核（破片）は多数の試料から産出しており、食用とされていたのであろう。シロザ近似種、ナデシコ科、エノキグサなどは畑地ないし路傍の雑草として遺跡付近に生育していたのであろう。

平安時代の試料からは針葉樹のヒノキ、落葉広葉樹のオニグルミ、カバノキ属、クワ属が産出しており、周辺にはこれらが生育していたものと思われる。オニグルミは多数の試料から産出しており、ヒノキも比較的目立った産出状況である。オニグルミ、ヒノキは遺跡周辺に普通にみられ、オニグルミは食用とされていたのであろう。一方、遺跡付近には畑地ないし路傍的環境にはエノコログサ属、カナムグラ、クワクサ、シロザ近似種、ナデシコ科、エノキグサなどが生育しており、湿地的環境にホタルイ属などが生育していたのであろう。

(4)　大型植物化石の記載（図版99）

ヒノキ　Chamaecyparia obtusa (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc.　小枝

第2表－1　産出した大型植物化石　数字は個数，（ ）は破片の数

採取地点	洗浄量g	ヒノキ 小枝	オニグルミ 炭化核	カバノキ属 果実	クワ属 種子	モモ 炭化核	イネ 炭化胚乳	オオムギ 炭化胚乳	コムギ 炭化胚乳	ムギ類 炭化胚乳	エノコログサ属 穎果	アワ 炭化胚乳	スゲ属 果実	カヤツリグサ属 果実	ホタルイ属 果実	カナムグラ 種子	クワクサ 種子	タデ属A 炭化果実	タデ属B 炭化果実	タデ属C 果実	シロザ近似種 種子	ナデシコ科 種子	ササゲ属 炭化種子	マメ科 炭化種子	エノキグサ 種子	虫えい	菌核	不明	その他
1住1	250																				(1)						1		
1住2	1560											2									3	1					11		
1住3	955										2	3									1						18		
1住4	800										1			1							1	1					11		
1住5	1425											3									2						10		
1住6	2150		(1)								1	6									2								
1住7	3580						1					3															3		
1住8	4030											1																3	
1住9	3820		(1)									2									1	1	1					1	
1住10	2935		(1)								1	6									2							1	
1住11	270																				11(1)	1					1		
1住12	830																										1		
1住13	1245											1																	
1住14	1110																				1								
1住15	1600											4									2	1					2		
1住16	1040	1										6									1	4							
1住17	3940						2	1																					
1住18	4530											4									2						6		
1住19	2040											3									2						2		
1住20	2180				(1)							1				1												1	
1住21	2050		(1)								1										4						1		
1住22	660											1									1						1		
1住23	1830						(1)																					2	
1住24	3110	2										1																2	
1住25	1250											1															1		
1住26	2350											2									7				1				
1住27	2350											3															1		
1住28	3750		(3)									1															1		
1住29	1820		(1)									2			1						3								
1住30	1180											1									3								
1住31	2060		(1)													1					2	1			1	1	1		
1住32	3330											4									1						4		
1住33	1790								1																				
1住34	980																			1	1	1							
1住35	1100										2																		
1住36	1950																											2	
1住37	1500																				1						1		
1住38	1640											2							1		2			1			1		
1住39	1720									1		1															1		
1住40	2270								1			4									2						1	2	
1住41	2180											13										1							
1住42	2050						2	1				2															2		
1住43	1500											1															23		
1住44	1690											1																	
1住45	1180																				1				1				
1住46	840	3																							2				
1住47	2190											1						1			1	3					2		
1住48	2200											2									2						2		
1住49	1940											5									7(1)				1(1)		2	2	
1住50	2100											6									4						2		
1住51	4270		(2)				6					15						1							1				
1住52	2260		(1)				4				1	6						1											
1住53	2040		(1)				(1)					1													2		4		
1住54	1540											1										2					18		
1住55	2050	1																											
1住56	2000																1				3						1		
1住57	2020																				1						8		
1住58	1830											1															2		
1住59	2550											6										1					6		
1住60	2050											6															2		
1住61	1650						1		2	1		8									2								
1住62	1720						4	1				10						2			1	1	1		(1)		2		
1住63	2290						6					13		1	1							1	3						
1住66	1940							1																			3		
1住67	1980											1															8		
1住68	2260						1																		1				
1住69	2090											4									1	1			1				
1住70	1870																		1										
1住71	510																				(1)								
1住72	2000																				4								
1住73	2160	3		1								1									4				4				
1住74	1040						1	1				5																	
1住77	510																					4							
1住78	3940										1	2									1	1					3		
1住79	6270																												
1住80	4400		(1)									5															2		
1住81	810																				2	10							
1住82	915									1		1										1					1		
1住83	2030	1																											
1住84	2000		(1)									3									3	1							
1住85	1820		(1)									2									1			2			2		
1住88	150																				4	3							
1住89	6000				1							1									1	1					7	1	

第2表－2　産出した大型植物化石　数字は個数，（ ）は破片の数

採取地点	洗浄量g	ヒノキ 小枝	オニグルミ 炭化核	カバノキ属 果実	クワ属 種子	モモ 炭化核	イネ 炭化胚乳	オオムギ 炭化胚乳	コムギ 炭化胚乳	ムギ類 炭化胚乳	エノコログサ属 穎果	アワ 炭化胚乳	スゲ属 果実	カヤツリグサ属 果実	ホタルイ属 果実	カナムグラ 種子	クワクサ 種子	タデ属A 炭化果実	タデ属B 炭化果実	タデ属C 果実	シロザ近似種 種子	ナデシコ科 種子	ササゲ属 炭化種子	マメ科 炭化種子	エノキグサ 種子	虫えい	菌核	不明	その他
1住91	5520											3						2							1		2		
1住92	3510											4									1								
1住93	4260									1		1									1						1		
1住94	2130		(3)							1		1															1		
1住95	2000						(1)					1						1			8						1		
1住96	1650											3										1							
1住99	300																												
1住100	1300																				1	2							
1住101	1590																				1								
1住102	2150																										2		
1住103	2150				1																							1	
1住104	1640						1					1										1					2		
1住106	1950											1																	
1住107	2160						1																						
1住108	1240						2					1									1	1						1	
1住カマド1層	1310											2									1								
1住カマド2層	3650											4								1	3						8		
1住カマド3層	1960											6						1	3							1	8		
1住カマド4層	965											4								1							3		
2住カマド1層	4270		(1)				1			1		1									17	1					137		
2住カマド2層	1730																				12						166		
5住カマド	3410										1											1							
5住カマド(焼土)	2200																										4		
5住カマド(灰層)	2320																			1							31		
5住カマド構築土	1770																			9		1					10		
6住カマド3層	3800		(1)								1														1		431		
6住カマド4層	8660										2		3								4	4					180		
7住炉2層	4000		(4)																		1						4		
7住炉3層	1300																												
8住炉	9700		(1)																		1						119		
9住埋甕内	4400		(1)																								57		
9住炉	1250		(1)																								17		
10住炉1·2層	2130		(12)																		33				(1)		47		
10住炉3·4層	2910																				4						75		
12住カマド	4510		(3)						2																3		352		
13住埋甕内	740																										6		
13住炉3層	3390		(1)																								14		
14住埋甕内	1000		(4)																	1	1						71		
14住炉	4910		(8)																								4		
16住No.17	65																										2		
16住炉	2120		(1)															1			3		(2)				6		
16住炉体土器内	520																										1		
17住炉	890																										4		
18住炉2層	4240		(3)																		145						13		骨
19住No.9			(2)																								3		
19住No.5			(2)																		2						19		
19住床(南)	2860																	4			9	22					33		
19住炉	1840		(6)																		31						21		骨
20住北カマド	1940																			1	14						196		
20住東カマド	5110																				6	11					9		
21住炉	890		(13)																		1						5		骨
24住カマド2層	1980					(1)																					6		
24住カマド4層	1840																										6		
24住カマド5層	1550																										13		
25住カマド	1750					(4)																					39		
26住No.1内	100																				6						50		
27住炉	1270																										18		
27住炉体土器	1630																										7		
28住炉	2200		(6)																								21		
29住カマド	200																												
29住カマド焼土	2490																										10		
30住No.1内	1400																										14		
30住炉	1820																										49		
31住炉1層	1900		(4)																								14		
31住炉2層	1720		(2)																								7		
32住炉1層	1320																										9		
32住炉2層	1190																										26		
33住炉	1740		(1)																								14		
34住No.2内	1070		(1)																								39		
34住No.18内	920																										3		
34住炉北ピット	490		(39)																								8		
35住炉1層	700		(2)																								4		
35住炉2層	890																				1						45		
35住炉体土器	480																				1						57		
37住カマド2層	2130																								1		1		
37住カマド3層	200																										3		
37住カマド4層	120	4																									2	5	
37住No.11内	240																												
250ピット土器	2370																				2						36		骨?
263ピットNo.63	350																												
263ピットNo.60	1290		(3)																		2	2					1		
390ピット	1730																				1						111		
398ピット	6010																												
404ピット	1470												2														309		骨

小枝には鱗片状の葉が十字対生に付き、葉は鈍頭で先端は茎に密着する。

オニグルミ　Juglans ailanthifolia Carr.　核

産出したものは全て細かな破片であるが、完形であれば核は側面観は卵形から円形、先端は鋭頭、上面観は円形。表面は縦に不規則な隆起があり、明瞭な1本の縫合線が縦に走る。

クワ属　Morus　種子

種子は淡褐色ないし黄褐色、側面観は扁楕円形、上面観は扁三角形。表面はややざらつく。

モモ　Prunus persica (Linn.) Batsch　核

産出したものは破片であるが、完形であれば核は扁平な楕円形。一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則な流れるような溝と穴がある。

イネ　Oryza sativa Linn.　炭化胚乳

扁平な楕円形。炭化したもののみ産出した。1住104から産出したイネは穎が少し貼り付いていた。

オオムギ　Hordeum vulgare Linn.　炭化胚乳

扁平な楕円形。側面観は菱形に近い縦長の楕円形。

コムギ　Triticum aestivum Linn.　炭化胚乳

やや扁平な楕円形で丸こくオオムギに比べ、小粒である。側面観は円形に近い楕円形。

ムギ類

保存状態が悪くオオムギともコムギとも区別し難いものをムギ類とした。

アワ　Setaria italica Beauv.　炭化胚乳

扁平な円形に近い楕円形。背面の胚の部分の長さは果体の2／3程度あり、腹面のへそは細く楕円形。側面観からみた先端部は平坦である。1住－62、63、84、92、93、カマド1層の試料中には穎が少し貼り付いていたものが各試料1点ずつ産出した。

カヤツリグサ属　Cyperus　果実

果実は三稜形で側面観は倒卵形。

カナムグラ　Humulus scandens (Lour.) Merill　種子

種子は黒灰色、二面の円形でへそは白く心形。

タデ属A　Polygonum A　炭化果実

果実は二面の倒卵形、上面観は円形。

タデ属B　Polygonum B　炭化果実

果実はかなり丸みを帯びた三稜形で側面観は卵形。

タデ属C　Polygonum C　果実

果実は三稜形で側面観は楕円形。

シロザ近似種　Chenopodium album (cf.) Linn.　種子

種子は黒色で鈍い光沢がある。側面観は円形、上面観は楕円形。1本の不明瞭な筋が中央付近まで入る。

ササゲ属　Vigna　炭化種子

産出したものは破片であるが、完形であれば扁平な楕円形。へその周囲はやや隆起する。産出した破片は子葉内面が確認できるが、幼根と初出葉が残っていないためこれ以上の同定には至らない。

エノキグサ　Acalypha australis Linn.　種子

種子は側面観は先端が尖る倒卵形、上面観は円形。表面は微細な網目模様がある。

菌　核

黒色で球形、割れた断面は種実の構造はなく、均一である。

2　社口遺跡から出土した炭化材の樹種

植　田　弥　生（㈱パレオ・ラボ）

(1)　はじめに

山梨県高根町に所在する社口遺跡から出土した炭化材の樹種同定を報告する。当遺跡は八ヶ岳南麓の標高約720mに位置する。試料は遺構ごとにその堆積物を洗い出し取り上げたもので、これらは約5㎜角の破片が大多数であった。このほかに現地で取り上げられた試料が少数ある。ここでは複数の住居跡から出土した縄文時代と平

安時代の炭化材、P390・P398・P404から出土した炭化材の樹種を報告する。

樹種同定は炭化材の3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し行った。横断面（木口）は炭化材を手で割り新鮮な面を出し、接線断面（板目）と放射断面（柾目）は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあて引くように割り面を出す。この3断面の試料を直径1㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗り試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM　T－100型）で観察・写真撮影をした。

(2)　同定された分類群の組織記載（図版98・99）

モミ属　Abies　マツ科　図版98　1a.－1c.(P250 埋甕)

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞をもたない針葉樹材。P250の試料には横断面に接線状に並ぶ障害樹脂道がある。放射断面において放射柔細胞の細胞壁に数珠状肥厚がみられる。分野壁孔は小型で1分野に1～4個、炭化材では孔口の大きさ・傾きが不揃いである。P250は放射柔細胞がやや大きく、2細胞幅になることから節部の組織かも知れない。

モミ属は常緑高木で暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。材はやや軽軟で腐朽しやすい。組織は類似しており識別はできない。

カバノキ属　Betula　カバノキ科　図版98　2a.－2c.(16住 炉)

小型の管孔が単独または2～数個が複合し放射方向に配列する散孔材。年輪界で管孔は小さくなる。道管の壁孔は小型で交互状に密在し壁孔がつながり間隔の詰まったらせん状にみえ、穿孔は横棒数が5～10本ほどの階段穿孔。放射組織はほぼ同性、1～3細胞幅、道管との壁孔は小型で交互状に密在。

カバノキ属は陽地に生育する落葉性の高木または低木である。岩手県以南の温帯から暖帯の山地に生育するミズメ、北海道から四国の寒帯から温帯上部に生育するダケカンバ、岐阜県以東の温帯から温帯上部の崩壊地や向陽適潤地に生育するシラカンバなど約8種がある。材は重硬・強靱、切削・加工は容易なほうである。樹皮は板状に剝がれる。

コナラ属コナラ亜属コナラ節　Quercus. subgen. Quercus sect. Prinus　ブナ科　図版98　3a.－3c.(3住 No.2 内土)

年輪の始めに大型の管孔が1～2層配列し、晩材部では薄壁・多角形の小型の管孔が火炎状・放射状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。
材は加工がややしにくく乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点はあるが建築材・燃料材によく利用される。堅果は食用となる。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版98　4a.－4b.(6住　竈4層)　5.(6住 No.81)　12.(8住 炉内 PLD－170)

年輪の始めにやや大型の管孔が密に配列し序々に径を減じてゆき、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。6住竈4層からは中心部に髄を持つ2年生の小枝が出土し、これは1年目は小型の管孔が放射方向や樹枝状に配列し散孔材的であり、晩材部に僅かに非常に小型の管孔が火炎状に配列するのがみられ、2年目の始めは中型の管孔が接線状に密に配列している。道管の壁孔はやや大型で交互状、孔口も水平に大きく開き、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織はほぼ単列同性、道管との壁孔は孔口は大きく交互状。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は耐朽性・耐水性にすぐれ、縄文時代の遺跡からよく出土する樹種である。

クリまたはコナラ節　Castanea crenata Sieb. et Zucc. or Quercus sect. Prinus

小型から非常に小型の管孔が火炎状に配列し、放射組織は単列で、晩材部の一部分の材である。1年輪分がなく接線方向の幅も狭い試料のため、孔圏部の管孔配列や複合放射組織の有無が確認できず、クリまたはコナラ節の可能性があることしかいえない。洗い出しによる試料にはこのような材が大部分を占めていた。

クワ属　Morus　クワ科　図版98　6a.－6c.(クワ属　17住 炉)

年輪の始めに中型の管孔が配列し、除々に径を減じ、晩材部では小型で大きさの不揃いな管孔が複合し、斜状・波状・塊状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、7細胞幅の紡錘形、上下端に方形細胞がある。現在の分布からヤマグワの可能性が高い。

クワ属は落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布するヤマグワと、和歌山県・中国地方・四国・九州の暖帯の山中にまれにあるケグワがある。果実は食用となり、材は重硬・強靱で心材は特に保存性が高いので有用材である。

モモ　P. persica Batsch. または　ウメ Prunus mume Sieb. et Zucc. バラ科　図版98　7a.－7c.（6住竈4

第3表　縄文時代の住居跡から出土した炭化材の樹種

遺構名	検出位置（層位）	時期	樹　種
7住	炉3層	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
8住	炉	縄文時代中期	クリ(PLD-170　4,350±110yrBP)
9住	炉	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
9住	埋甕	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
9住	ピット1柱穴	縄文時代中期	クリ
10住	炉1・2層	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
13住	炉3層	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
13住	埋甕	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
14住	炉	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
16住	炉	縄文時代後期	クマシデ属
			クワ属
17住	炉	縄文時代後期	クワ属
18住	炉2層	縄文時代後期	クリまたはコナラ節
19住	炉	縄文時代後期	クリまたはコナラ節
19住	19住9土器内	縄文時代後期	クリまたはコナラ節
19住	19住5土器内	縄文時代後期	クリまたはコナラ節
19住	No333	縄文時代後期	トネリコ属(PLD-169　3,740±110yrBP)
21住	炉	縄文時代後期	クワ属
			クリまたはコナラ節
27住	炉	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
27住	炉体土器内	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
28住	炉	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
30住	30住1土器内	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
31住	炉1層	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
31住	炉2層	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
32住	炉1層	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
32住	炉2層	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
32住	炭	縄文時代中期	クリ
33住	炉	縄文時代中期	クリまたはコナラ節
34住	34住2土器内	縄文時代中期	コナラ節
			クリまたはコナラ節
			クマシデ属
34住	34住14	縄文時代中期	コナラ節
			クリまたはコナラ節
35住	炉1層	縄文時代後期	コナラ節
			クリまたはコナラ節
P250	250号ﾋﾟｯﾄ56土器内	縄文時代後期	モミ属
P263	263号ﾋﾟｯﾄ60土器内	縄文時代後期	モミ属
			クリまたはコナラ節
P263	263号ﾋﾟｯﾄ63土器内	縄文時代後期	モミ属

第4表　平安時代の住居跡の竈から出土した炭化材の樹種

遺構名	検出位置（層位）	時期	樹　種
6住	竈4層	平安時代	クリ
			モモまたはウメ（2年枝）
			クリまたはコナラ節
6住	竈3層	平安時代	モモまたはウメ
			クリまたはコナラ節
6住	No81	平安時代	クリ（直径5cm以上）
6住	No164	平安時代	クリ（直径6cm以上）
12住	竈	平安時代	コナラ節
			クリまたはコナラ節
			広葉樹（当年枝）
			イネ科
20住	北竈	平安時代	コナラ節
			クリまたはコナラ節
29住	竈	平安時代	クリまたはコナラ節
29住		平安時代	コナラ節
37住	竈2層	平安時代	コナラ節
			クリまたはコナラ節
37住	竈3層	平安時代	環孔材A
37住	竈4層	平安時代	環孔材A

層）11.（6住 竈4層）

年輪の始めにやや小型の管孔が密に配列し、除々に径を減じながら単独または2～数個が複合し散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にほぼ水平のらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅、背が高い。

モモまたはウメの材は平安時代になると遺跡からしばしば出土し、核も多数出土するようになる。

トネリコ属　Fraxinus　モクセイ科

年代測定用試料で量が少ないため、実体顕微鏡下で観察した。環孔材で晩材部は小型の管孔が主に2個複合して分布し、放射組織は2～4細胞幅である。

トネリコ属はおもに温帯の山地から低地に生育する落葉高木で、シオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種がある。材は重硬で弾力性があり折れ難くいので棒・柄などによく利用されている。

環孔材A　ring－porous wood　図版99　8a.－8c.（37住 竈3層）

年輪の始めに中型の管孔が2層以上あり、晩材部は丸い非常に小型の管孔が単独または2～数個が複合し分布する。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、おもに4細胞幅の紡錘形。

広葉樹　broad－leaved tree　図版99　9a.－9c.（12住 竈）

直径5㎜ほどの小枝で中心部に髄がある。小型の管孔が分布し晩材部に木部柔組織が塊状にある。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一。放射組織は単列と3細胞幅、異性で背が高く直立細胞が目立つ。1年輪目は管孔配列や放射組織の型がその樹種の特徴を十分に示さないことが多いので分類群を特定することはできなかった。

イネ科　Gramineae　図版99　10.（12住 竈）

直径約2㎜の稈で中心部は一部壊れているが中空ではないことから、タケ・ササ類やヨシ属ではないことがわかる。維管束は厚壁細胞からなる厚い層に囲まれ、稈の外周にある維管束ほどその層は厚い。草本性と思われるがイネ科の種類は多く、現生種の組織もまだ充分には調べられていないので分類群を特定することはできない。

(3)　結　果

同定結果は時代別にまとめ、第3表に縄文時代の結果を、第4表に平安時代の結果を示した。

1)　縄文時代の炭化材

明らかにクリと識別できた材は8住・9住・32住から、コナラ節と識別できた材は34住と35住から出土した。「クリまたはコナラ節」と同定された材はほとんどの住居跡の炉・埋甕・土器内から認められた。炉から出土した材は燃料材の可能性が考えられ、「クリまたはコナラ節」が圧倒的に多い。またクマシデ属とクワ属は縄文時代後期の16住・17住・21住の炉からのみ出土し、中期からは検出されていない。埋甕から出土した材は「クリまたはコナラ節」とモミ属であった。

2）平安時代の炭化材

5つの住居跡の竈から出土した炭化材はクリ・コナラ節・「クリまたはコナラ節」・「モモまたはウメ」・不明環孔材A・不明広葉樹・イネ科であった。不明広葉樹は当年枝であり、「モモまたはウメ」は2年枝が含まれていた。これらは竈から出土していることから燃料材と思われる。クリ・コナラ節・「クリまたはコナラ節」の材はすべての竈から認められ量的にも多かったことから、主要な燃料材であったと思われる。

3）P390・P398・P404の樹種

P390はコナラ節、P398はクリ、P404は「クリまたはコナラ節」であった。なおP398は放射性炭素年代が測定がされ、その結果は4,470±120 yrBPであった。

4）炉と竈から出土した炭化材の特徴

上記の結果から、クリとコナラ節は縄文時代と平安時代の両時代から多数が検出され両時代に共通した主要な燃料材であったと言える。クワ属とクマシデ属は縄文時代から、「モモまたはウメ」と環孔材Aは平安時代から出土し、これらの樹種はそれぞれの時代性を示しているのかも知れない。

3　放射性炭素年代測定

山　形　秀　樹（㈱パレオ・ラボ）

試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化リチウム（カーバイド）の生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管（400cc）を用いて、β^-線を計数した。その結果は下記に示す。

なお、代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、準偏差（One sigma）に相当する年代である。

暦年代の補正は、CALIB3.0(Stuiver and Reimer,1993:IBM—PC用:Reference(Stuiver and Pearson,1993))を使用した。

第5表　年代別測定結果数

測定No.	試　　料	^{14}C年代値（1950年よりの年数）	暦年代　　（1σ）
PLD-168	炭化材　（クリ） Pit 398	4,470±120 yrBP（BC 2,520年）	BC 3,250年（BC 3,350 - 2,920） BC 3,100年
PLD-169	炭化材　（トネリコ属） 19住 No.333	3,740±110 yrBP（BC 1,790年）	BC 2,140年（BC 2,290 - 1,970）
PLD-170	炭化材　（クリ） 8住炉	4,350±110 yrBP（BC 2,400年）	BC 2,920年（BC 3,100 - 2,880）

引用文献

Stuiver,M. and Reimer, P.J. (1993) Extended ^{14}C database and revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program.

第２節　高根町社口遺跡のテフラ

河　西　　学（㈶山梨文化財研究所）

社口遺跡は、八ヶ岳南麓の火山麓扇状地上に位置する。周囲には御岳第一軽石Ｏｎ－ＰｍＩを含むローム層が堆積し、遺跡ののる地形を構成している。本遺跡からは縄文時代草創期～早期の土器が出土している。これらの土器の出土地点は、南向き斜面で褐色土～黒褐色土が発達している。ここでは広域テフラを識別し、遺物包含層の層位を検討することを目的として以下のテフラ分析を行ったので、報告する。

１．試料および分析方法

試料は、Ａ61グリッド内の断面から採取された堆積物10点である。試料は、湿重約20gを秤量後、超音波装置で分散させ、分析篩で泥分を除去した。乾燥後、分析篩（#60,#250）で〉1／4㎜および1／4～1／16㎜の粒径に篩別・秤量し粒径組成を算出した。なお試料の乾燥重量は、別に同一試料約５～10gを秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で105℃、５時間放置して得られた乾燥重量から算出した。粒子観察は、1／4～1／16㎜の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行なった。試料ごとに火山ガラス・風化物その他の粒子を含めた合計が1000粒になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）の方法に従った。細粒結晶を包有するＦ型はＦ’型として区別した。火山ガラスの屈折率の測定は、位相差顕微鏡での浸液法（新井,1972）による。

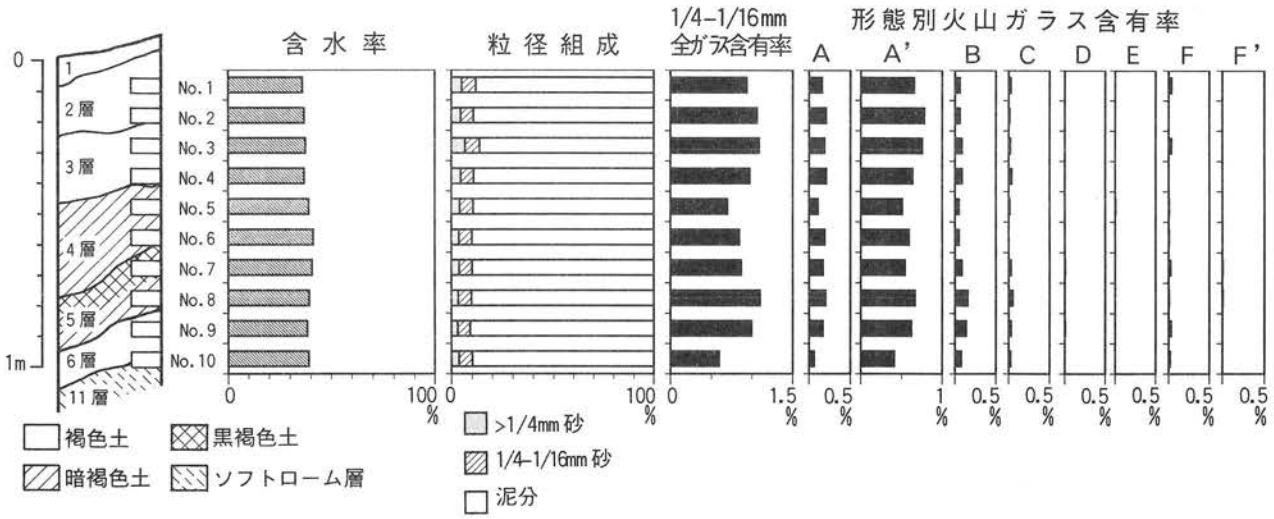
２．分析結果

偏光顕微鏡下での火山ガラスの計数結果を第６表に示す。これをもとに湿重基準の含水率、粒径組成、1／4～1／16㎜の全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第154図に示す。なお1／4～1／16㎜全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの1／4～1／16㎜粒径の火山ガラスの割合で表示した（注１）。火山ガラスの屈折率測定値を第７表に示す。

含水率は、全試料を通じて36.1～41.3％と安定した値を示す。粒径組成では、1／4㎜以上の砂粒子が3.1～6.6％、1／4～1／16㎜の砂粒子が6.0～7.1％とあまり大きな変化を示さない。なおNo.３において1／4㎜以上砂粒子および1／4～1／16㎜砂粒子が最大値を示す。1／4～1／16㎜の全火山ガラス含有率は、No.３（1.09％）とNo.８（1.10％）の２層準で極大値を、No.５（0.70％）で極小値を示す滑らかな曲線を描く。形態別ではＡ’型がもっとも多く、No.３（0.75％）とNo.８（0.67％）の２層準で極大値を、No.５（0.51％）で極小値を示す。Ａ型は、Nos.1～10で0.06～0.21％と低率で検出される。Ｂ型は、全試料で0.05～0.16％と検出される。

甲府盆地から八ヶ岳地域のテフラ分布から本遺跡で始良Ｔｎテフラ（ＡＴ）以降に降灰が予想される広域テフラは、立川ローム上部ガラス質テフラ（ＵＧ,約12000年前）、鬼界－アカホヤ火山灰（Ｋ－Ａｈ,約6300年前）、カワゴ平軽石（Ｋｇ,2900～2800年前）などである。ＡＴとＫ－Ａｈは泡壁（バブルウォール）型のＡ・Ａ’型火山ガラスで、ＵＧはＢ・Ｃ型火山ガラスで、ＫｇはＥ・Ｆ型火山ガラスでそれぞれ特徴づけられる。

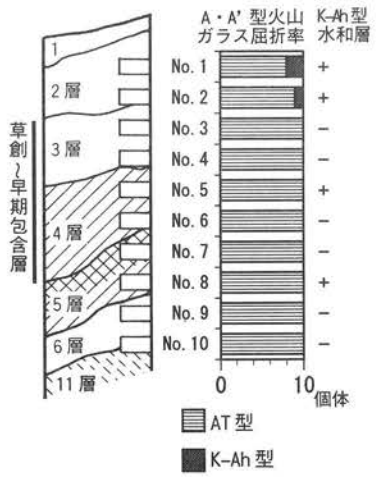
No.８におけるＡ・Ａ’型火山ガラスは、屈折率が1.498～1.501（モード1.4995）を示すことから、約2.2（～2.5）万年前に噴出したＡＴに対比される。さらにＡ・Ａ’型火山ガラスを屈折率の差によってＡＴ型とＫ－Ａ



第154図　社口遺跡Ａ61地点での火山ガラス含有率

第6表　計数火山ガラス粒数（＋は計数以外の検出を示す）

試料番号		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10
火山ガラス	A　無色	23	34	27	34	17	31	28	32	28	10
	A　褐色										
	A' 無色	95	127	106	102	78	95	88	103	102	64
	A' 褐色					+			1	1	
	B　無色	9	10	12	14	8	8	14	25	23	12
	B　褐色		1								
	C　無色	4	2	3	6	2		5	8	5	4
	C　褐色		1	1							
	D　無色							1		1	
	E　無色					1					
	F　無色	5		5		1	1	4	1	5	3
	F　緑褐色			1	1						
	F' 無色							1	1		
	F' 緑褐色				1						
その他		864	825	845	842	893	865	859	829	835	907
合計		1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000



第155図　A・A´型火山ガラス屈折率

第7表　火山ガラスの屈折率

地点	試料番号	火山ガラスの形態	色調	屈折率（モード）	対比されるテフラ
B62地点	No.8	泡壁型（A・A'型）	無色	1.498–1.501(1.4995)	姶良Tnテフラ　AT

h型とに区別してみた（第155図）。低屈折率のATと高屈折率のK－Ah（主要レンジ1.509～1.511）との中間の屈折率をもつ浸液（今回は屈折率1.5055を使用）と比較し、火山ガラス周縁部は厚さ約5μmのハイドレーション（水和）層を示し浸液屈折率より高いA・A'型をK－Ah型火山ガラス、浸液より屈折率が低いA・A'型をAT型火山ガラスとした。測定の結果、すべての試料でAT型が優勢であることがわかった。K－Ah型の明瞭なピークは認められない。しかしNos.1,2でK－Ah型がやや安定して検出されることから、K－Ah型のピークは確認できないものの、2層がK－Ah降灰層準に近い可能性が推定される。なおNo.5とNo.8で検出されるK－Ah型の水和層をもつ火山ガラスは、微量でかつ連続性に欠けることからK－Ahからの二次的混入と判断される。したがって縄文草創期～早期遺物包含層は、K－Ahよりも下位となり、従来の層位的事実と一致する。なお大月市外ガイド遺跡では縄文早期押型文土器および茅山下層式土器を覆う富士黒土層中からK－Ahの降灰層準が確認されている（河西,1996）。

B・C型火山ガラスは、特にNos.8～10付近のものは、UGに由来する火山ガラスの二次堆積物である可能性が高い。八ヶ岳山麓のクロボク土中からは、長坂町中込遺跡・高根町丘の公園地域において、カワゴ平軽石Kgが検出されている（河西,1989,1990）。今回Kg型の火山ガラスが検出されなかったことから、今回の分析試料はKgよりも下位であると考えられる。第155図に示されるように今回検出された火山ガラスの大部分がAT起源の二次堆積火山ガラスから構成されていることが明らかになった。ATの降灰層準はNo.10よりも下位層準に推定される。したがって遺物包含層を含むこの地点の完新世の地層は、周辺地域に分布しているATを含んだローム質堆積物を母材とした風塵が、風成堆積することによって形成されたものと考えられる。

分析によって縄文草創期～早期遺物包含層とK－Ahとの層位関係が明らかになった。また包含層は、AT火山ガラスを多く含むローム質の二次堆積物から形成されていると推定された。

注1　形態x型の火山ガラスの含有率Axは、Ax(%)＝(C／B)×(Ex／D)×100　で算出される。ただし、B：試料の乾燥重量（g）、C：1／4～1／16㎜粒径砂分の重量(g)、D：計数した1／4～1／16㎜粒径粒子の総数、Ex：計数したx型火山ガラスの粒数。

文　献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、11、254－269。

遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学、13、19－30。

河西　学（1990）長坂町中込遺跡試料のテフラ分析。『中込遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告,第52集,36－40。

河西　学（1989）丘の公園地域のテフラと地形。『丘の公園第2遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告第46集、165－184。

河西　学（1996）外ガイド遺跡のテフラ。『外ガイド遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書、第117集。

第3節　社口遺跡出土土器の胎土分析

河　西　　学（㈶山梨文化財研究所）

1．はじめに

高根町社口遺跡では、縄文時代草創期～早期の表裏縄文土器を中心として撚糸文土器・縄文土器などが出土している。これらの土器の産地を解明する目的で胎土分析を行った。さらに平安時代の29号住居址から出土している甲斐型土器、信州系黒色土器、ロクロ整形土師器甕などの土師器についても産地推定を行った。

2．分析試料・分析方法

分析試料を第8表および第156図に示す[1]。分析方法は河西ほか(1989)、河西(1992)と同じである。

3．分析結果

分析結果を第9表に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリックスの割合（粒子構成）、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を第158図に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。

(1)　縄文時代草創期～早期の土器

粒子構成における砂粒子の含有率（含砂率）は、試料ごとに14.5～50.7%と多様であるが、全体的に含砂率が高い傾向がある。文様ごとの含砂率は、表裏縄文(Nos.5,8,9,19,30,37,112)で14.5～37.5%、表撚糸裏縄文(Nos.18,27)で19.4～24.5%、撚糸文(Nos.6,14,21)で14.6～50.7%、斜縄文(No.28)で32.8%を示す。表撚糸裏縄文では2試料間で大差はないが、他の文様では文様ごとの含砂率の傾向性は認められない。

岩石鉱物組成では、大きく三分できる。Nos.5,6,8,18,27,112は、デイサイト[2]・安山岩・変質火山岩類・泥岩・斜長石などで特徴づけられ、重鉱物組成では角閃石が主体をなし、斜方輝石・単斜輝石・不透明鉱物などが含まれる。Nos.9,19,21,28,30,37は、花崗岩類・重鉱物・石英などで特徴づけられ、重鉱物組成は黒雲母・角閃石から主として構成される。No.14は、変成岩(80.6%)が極めて多く、重鉱物・斜長石などが含まれ、重鉱物組成は黒雲母・緑簾石・不透明鉱物・角閃石などから構成される。その他の特徴を以下に記す。

No.5　斜長石は累帯構造が顕著。安山岩とデイサイトが区別しにくい。安山岩は斜長石・不透明鉱物斑晶を伴う。デイサイトは新鮮なものと脱ガラス化したものが存在する。前者の方が多く含まれ、角閃石・斜方輝石斑晶を伴い、角閃石斑晶はときに周辺がオパサイト化している。変質火山岩類はデイサイト質～安山岩質。植物珪酸体を含む。

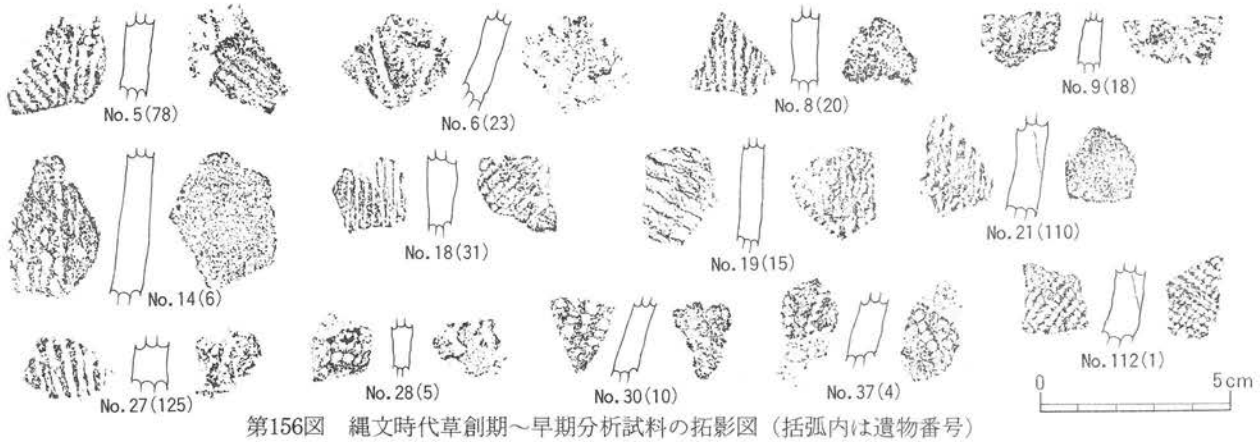
No.6　安山岩とデイサイトが区別しにくい。変質火山岩類はデイサイト質～安山岩質。植物珪酸体多い。植物繊維が部分的に残存。

No.8　安山岩とデイサイトが区別しにくい。デイサイトは角閃石を伴い、脱ガラス化しているものが多い。変質火山岩類は第四紀火山岩の風化変質と推定される。植物珪酸体を含む。

No.9　多結晶石英は部分的に矩形の孔隙をもつ。おそらく長石が風化によって溶脱した痕跡と考えられ、本来は花崗岩類であったと予想される。本試料中には斜長石が他に比して少ないのはこれらの風化作用の影響かもしれない。角閃石はまれに双晶する。植物繊維を含む。

第8表　試料表

分析番号	遺物番号	時代	器種	備考（考古学的観察に基づく）
No.5	78	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	
No.6	23	縄文時代草創期～早期	撚糸文	底部付近
No.8	20	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	撚糸文風
No.9	18	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	
No.14	6	縄文時代草創期～早期	撚糸文	稲荷台式
No.18	31	縄文時代草創期～早期	表撚糸裏縄文	
No.19	15	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	羽状風縄文
No.21	110	縄文時代草創期～早期	撚糸文	口唇部裏施文
No.27	125	縄文時代草創期～早期	表撚糸裏縄文	
No.28	5	縄文時代草創期～早期	斜縄文	在地的な土器
No.30	10	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	
No.37	4	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	
No.112	1	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	
A	29住6	平安時代	土師器坏	甲斐型坏
B	29住13	平安時代	土師器，黒色土器坏	いわゆる信州系
C	29住11	平安時代	土師器，黒色土器坏	いわゆる信州系，体部下半に手持ちヘラ削り
D	29住12	平安時代	土師器，黒色土器坏	いわゆる信州系，体部下半に手持ちヘラ削り
E	29住10	平安時代	土師器坏	体部外面に指頭痕をもつ
F	29住32	平安時代	土師器甕	甲斐型甕
G	29住19	平安時代	土師器ロクロ甕	
H	29住20	平安時代	土師器ロクロ甕	体部外面に叩き目をもつ



第156図　縄文時代草創期～早期分析試料の拓影図（括弧内は遺物番号）

第9表　土器試料中の岩石鉱物（数字はポイント数、＋は計数以外の検出を示す）

試料番号	No.5	No.6	No.8	No.9	No.14	No.18	No.19	No.21	No.27	No.28	No.30	No.37	No.112	A	B	C	D	E	F	G	H
石英-単結晶	12	26	13	107	11	16	107	194	12	141	115	155	26	30	69	50	50	31	88	23	25
石英-β型															1						
石英-多結晶		4	6	86	11	2	71	21	6	111	74	75	2	3	10	27	41	6	21	2	
カリ長石		3	3	11	3	4	5	67	6	24	7	6	4	6	18	11	9	10	30	10	20
斜長石	237	136	150	50	46	159	15	107	177	41	32	36	231	30	69	113	82	74	167	189	186
黒雲母		2		236	54	1	137	7		108	237	118		+	2		1	1	78	1	
無色雲母					1																
角閃石	28	29	34	112	11	57	99	6	53	104	101	132	41	12	6	6	4	+	111	1	3
酸化角閃石		2	1			1			1						4		2	2		8	2
単斜輝石			3		2	2				1			1	1	7		1	1		1	2
斜方輝石	6	4	3	1	1	6			11				10		8		5	2		9	13
カンラン石																					
緑簾石			1		26	1	1	1		1		1		1							
褐簾石																		+			
ジルコン		+		+		+						1									
ザクロ石									+												
電気石																					
スフェーン																					
緑泥石																					
炭酸塩鉱物																					
不透明鉱物	3	9		10	21	10	10	3	9	1	10	3	14		11	4		2	4	3	14
玄武岩																					
安山岩	19	20	7		1	26			25				8		67	5	5	11		4	11
デイサイト	113	12	26			54		1	149				113		15	18	14	16		35	20
変質火山岩類	24	19	25		2	14		4	17	4	1		9		3	20	11	7	1	20	26
"緑色火山岩類"																					
花崗岩類	1	6	6	110		4	115	226	6	115	155	146		6	18	17	35	11	289	11	5
ホルンフェルス																1	1				
変成岩類					816																
砂岩	3	5	1					9	2				5			24	50	27			
泥岩	53	11	4	2	3	24		5	11		1		5	2		36	16	11		1	
珪質岩			1					1	1							1	1	3			
炭酸塩岩																					
火山ガラス-無色	27	3	2	+	2	3	1	2	1			+	14	3	5	15	10	11	1	22	8
火山ガラス-褐色																					
変質岩石			2		1			3			1		3		1	5	16	1			4
変質鉱物	2	1		1	1			1								1	2	1	2		1
その他	1		2	5		3	8		2	5	16	7	2		9	1			18	22	
赤褐色粒子	1	54	46	9	1	52	35	14	53	11	13	18	16	40	21	5	62		8	19	25
マトリックス	1470	1654	1664	1260	986	1561	1396	1328	1458	1333	1237	1302	1496	1866	1656	1640	1582	1772	1182	1619	1635
合計	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000

No.14　変成岩は、緑簾石・カルシウム角閃石片岩で、曹長石斑状変晶を多く含む点紋片岩である。カルシウム角閃石は、土器の焼成あるいは使用時の加熱のためか褐色を呈する。斜長石として計数した粒子のほとんどは、曹長石斑状変晶が分離したものである。曹長石斑状変晶中には緑簾石カルシウム角閃石などの細粒包有結晶が平行に配列してヘリサイト組織を示す(第157図)。また波動消光を示す石英、角閃石、および自形のザクロ石を含む石英片岩などもわずかに含まれる。

No.18　安山岩の一部はデイサイトと区別が困難なものがある。デイサイトは角閃石・斜長石・不透明鉱物斑晶をもち、ときに角閃石斑晶は部分的にオパサイト化している。角閃石は新鮮でときに双晶する。変質火山岩類はデイサイト質～安山岩質。植物珪酸体・植物繊維を含む。

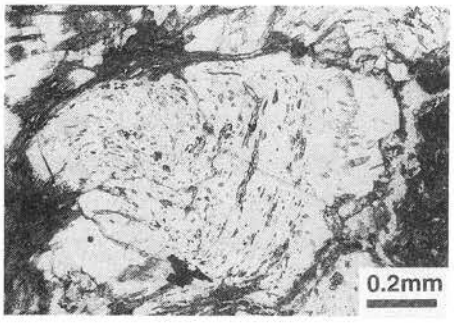
No.19　花崗岩類の斜長石は溶脱している可能性が強い。植物珪酸体がわずかに含まれる。

No.21　デイサイトの石基は変質しカリウム染色反応あり。変質火山岩類はデイサイト質～安山岩質。植物珪酸体を含む。

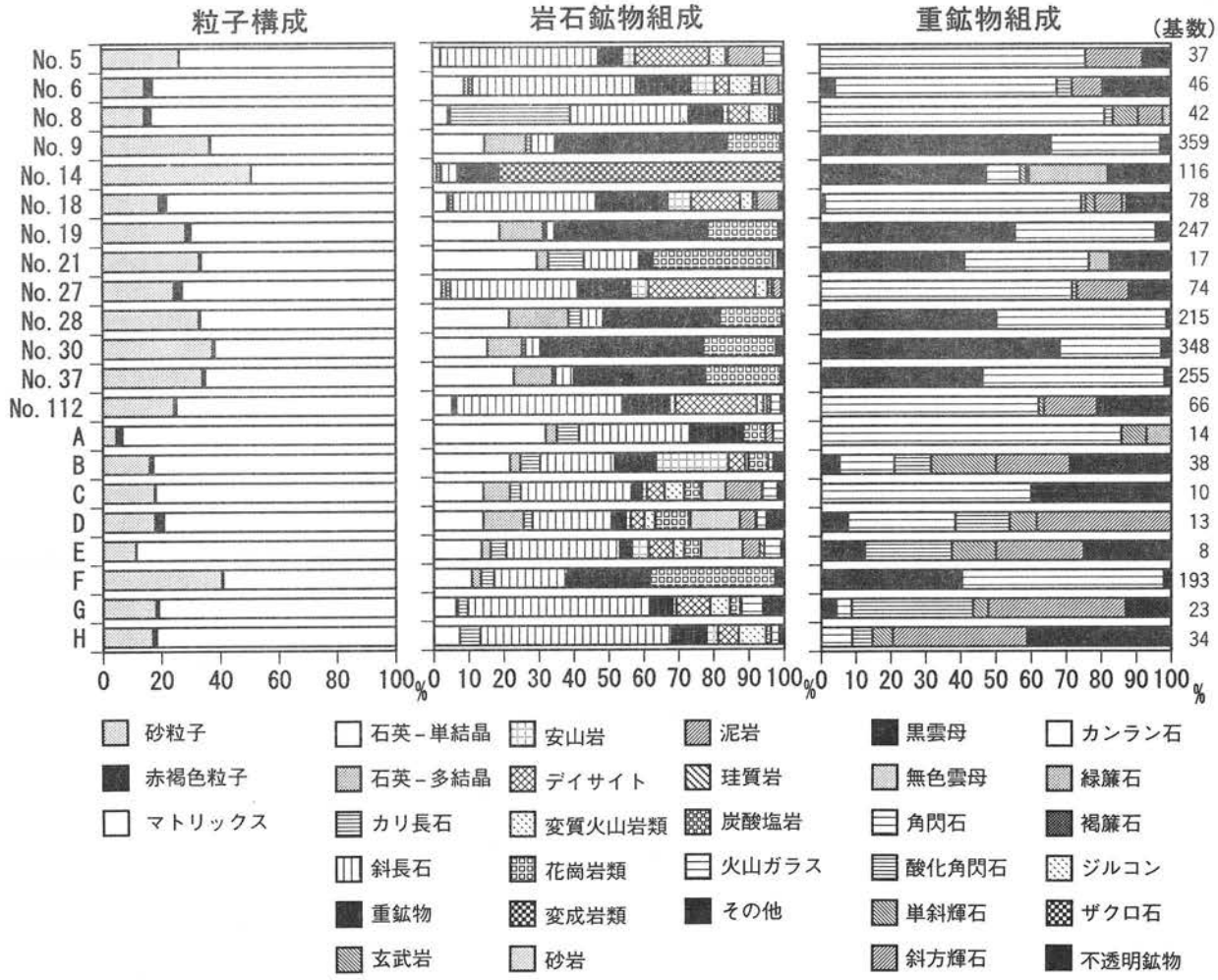
No.27　デイサイトは、斜長石・角閃石・斜方輝石などの斑晶をもつ。変質火山岩類はデイサイト質～安山岩質。角閃石はデイサイト起源と思われる。植物珪酸体を含む。

No.28　花崗岩類の多くは、斜長石が溶脱している可能性が高い。植物珪酸体をわずかに含む。

No.30　花崗岩類は、黒雲母・角閃石・石英斜長石・カリ長石から構成される。



第157図　点紋片岩中の曹長石斑状変晶(No.14)



第158図　土器の岩石鉱物組成

No37　花崗岩類の斜長石は溶脱している可能性が強い。極めてまれに植物繊維質が含まれる。

No112　石英の一部に新鮮な清澄なものあり。斜長石には累帯構造・アルバイト双晶が顕著なものあり。デイサイトは、新鮮なものも脱ガラス化したものもあり、角閃石・斜長石斑晶のほか斜方輝石・不透明鉱物を伴い、角閃石はときにオパサイト化する。斜方輝石は多色性がやや強く、淡緑色～ピンクがかった褐色を呈する。砂岩中に花崗岩類粒子が含まれる。

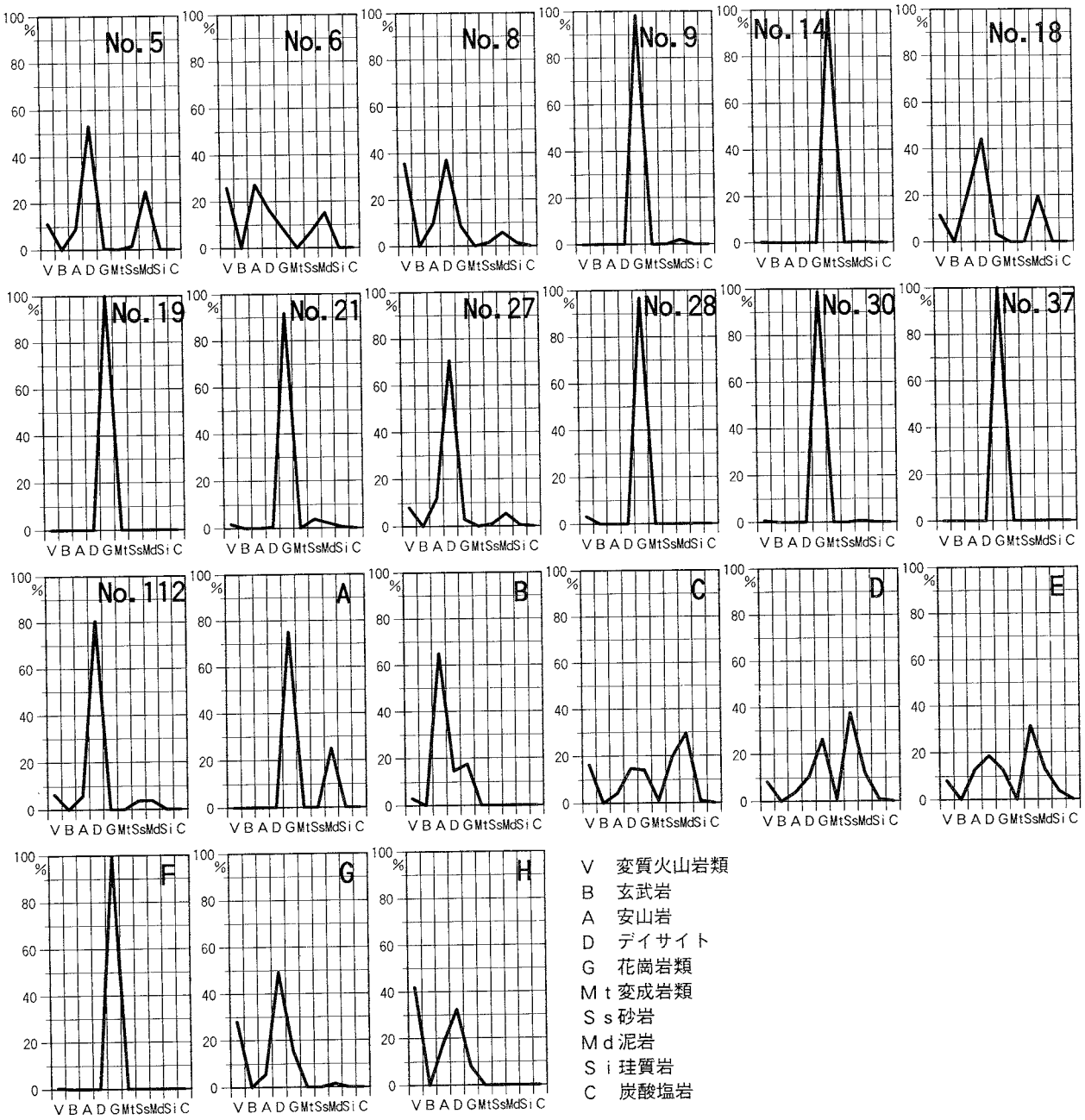
(2)　平安時代の土師器

含砂率は、器種ごとに明確に異なり、同一器種内での規則性も認められる。器種ごとの含砂率は、甲斐型坏Aで4.7%、信州系黒色坏B・C・Dで16.2～17.8%、土師器坏Eで11.4%、甲斐型甕Fで40.5%、ロクロ甕G・Hで17.0～18.1%を示す。

岩石鉱物組成では、本遺跡の縄文土器に比較して石英・斜長石・カリ長石などがやや多い傾向がある。甲斐型坏Aは、斜長石・石英・重鉱物が多く、花崗岩類・泥岩・火山ガラスなどを伴い、重鉱物組成では角閃石が卓越し、単斜輝石・緑簾石が含まれる。信州系黒色坏B・C・Dは、石英・斜長石・花崗岩類・デイサイト・安山岩・火山ガラスを伴う点で共通性がある。細部に着目すると二分され、Bは安山岩（20.7%）が特徴なのに対し、C・Dは砂岩（6.7～14.0%）・泥岩(4.5～10.1%)の検出で特徴づけられる。重鉱物組成では、斜方輝石・単斜輝石・角閃石・酸化角閃石・黒雲母・不透明鉱物などから構成される。土師器坏Eは信州系黒色土器のC・Dと極めて共通性の高い組成を示す。甲斐型甕Fは花崗岩類と重鉱物が多いことで特徴づけられ、重鉱物組成では角閃石・黒雲母が卓越する。ロクロ甕G・Hは、斜長石が(52.2～54.7%)と多く、デイサイト・安山岩・変質火山岩類・花崗岩類・火山ガラスなどが検出され、重鉱物組成では斜方輝石が多く、単斜輝石・酸化角閃石・角閃石・不透明鉱物などを伴い、互いに類似性の高い組成を示す。その他の特徴を以下に記す。

A　砂分が極めて少ない。植物珪酸体がわずかに含まれる。

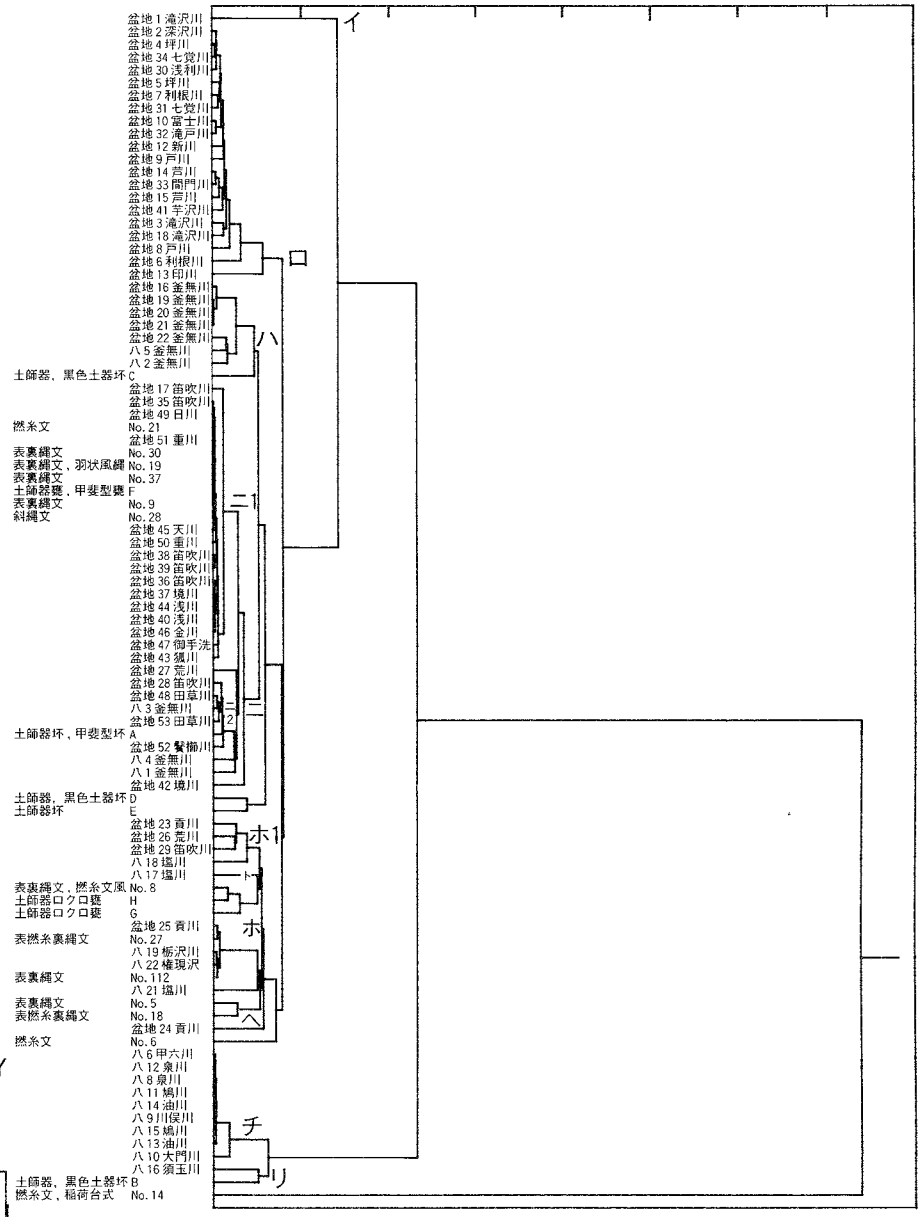
B　石英は火山岩源と推定される清澄なものが含まれる。安山岩は、斜長石・斜方輝石・単斜輝石・不透明鉱物などの斑晶をもつ。デイサイトは角閃石・酸化角閃石・斜方輝石・斜長石斑晶をもつ。変質火山岩類は安山岩質～デイサイト質。花崗岩類の一部にマイクログラフィック組織が認められる。植物珪酸体を含む。



第159図　土器の岩石組成折れ線グラフ

第10表　岩石組成による土器の分類

折れ線グラフによる分類		試料番号	クラスタ分類
変質火山岩類の第1ピーク	デイサイトの第2ピーク	H	ホ・ト
安山岩の第1ピーク	変質火山岩類の第2ピーク	No.6	ヘ・ホ
	花崗岩類の第2ピーク	B	リ
デイサイトの第1ピーク	顕著な第1ピーク	Nos.27,112	ホ
	変質火山岩類の第2ピーク	No.8,G	ホ・ト
	泥岩の第2ピーク	Nos.5.18	ホ
花崗岩類の第1ピーク	顕著な第1ピーク	Nos.9,19,21,28,30,37,F	ニ1
	泥岩の第2ピーク	A	ニ2
変成岩の第1ピーク	顕著な第1ピーク	No.14	?
砂岩の第1ピーク	デイサイトの第2ピーク	E	ハ・ニ?
	花崗岩類の第2ピーク	D	ハ・ニ?
泥岩の第1ピーク	砂岩の第2ピーク	C	ハ



第160図　甲府盆地周辺地域河川砂との比較樹形図

第161図　八ヶ岳南麓縄文中期土器との比較樹形図

C　砂岩中に花崗岩類粒子が含まれる。ホルンフェルスは黒雲母が生じている。植物珪酸体を含む。

D　砂岩中に花崗岩類粒子が含まれる。ホルンフェルスは黒雲母が生じている。単斜輝石は双晶する。変質火山岩類はデイサイト質が多い。植物珪酸体をわずかに含む。

E　砂岩中に花崗岩類粒子が含まれ、砂岩の基質は珪質である。マトリックス中に植物珪酸体と珪藻遺骸片を含む。

F　植物珪酸体を含む。花崗岩類は、ジルコン・黒雲母・角閃石・石英・斜長石・カリ長石などからなる。

G　変質火山岩類はデイサイト質＞安山岩質である。火山ガラスの一部は、カリウム染色反応を示す。植物珪酸体を含む。

H　デイサイトは斜長石斑晶をもち、一部は脱ガラス化している。変質火山岩類は、デイサイト質～安山岩質。デイサイト質変質火山岩類には、カリウム染色反応がある。植物珪酸体を含む。

4．岩石組成折れ線グラフおよびクラスター分析による土器の分類

変質火山岩類（含"緑色凝灰岩"）・玄武岩・安山岩・デイサイト・花崗岩類・変成岩類（含ホルンフェルス）・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩のポイント数の総数を基数とし、各岩石の構成比を折れ線グラフに示した（第159図）。折れ線グラフの類似性から第10表のように便宜的に分類される。同じ10種の岩石データを用いてクラスター分析を行なった。クラスター分析での非類似度は、ユークリッド平均距離を用い、最短距離法によって算出した。甲府盆地および八ヶ岳南麓地域の河川砂との比較を第160図に、八ヶ岳南麓縄文中期末土器との比較を第161図に示す（河西ほか,1989;河西,1989,1990）。第160図のクラスター群の呼称は河西(1992)と同様である。

5．産地推定

(1)　縄文草創期～早期土器

在地的土器が存在しない。

変成岩で特徴づけられるNo.14は、稲荷台式撚糸文土器で、明らかに搬入土器である。稲荷台式土器は、関東地域に分布の中心があり、社口遺跡は分布圏の縁辺部に位置する（原田,1991）。関東地域での変成岩には、関東山地三波川帯の変成岩、丹沢山地の丹沢変成岩、筑波山周辺の筑波変成岩などがある。No.14の変成岩は、曹長石斑状変晶をもつ点紋片岩であることから、高圧型の三波川帯起源の岩石と考えられる。さらに変成岩以外の岩石の混入が極めて少ないことから変成岩露出地域か隣接地域で土器原料が採取された可能性がある。No.14の産地は、埼玉県北部～群馬県南西部の三波川帯分布地域周辺に推定される。

花崗岩類を主体とするNos.9,19,21,28,30,37は、花崗岩類を流域にもつ笛吹川およびその支流の峡東地域河川砂と類似性が高いことから、甲府盆地では峡東地域が産地である可能性が高い。ただしより遠方の花崗岩類地域でつくられ搬入されたた可能性も高いと考えられる。なお斜縄文土器No.28は、考古学的観察で在地的とされたが、分析結果からは搬入土器であることが判明した。

デイサイト・安山岩を伴う土器Nos.5,6,8,18,27,112は、塩川・荒川地域の河川砂組成と類似性が強いことから、これらの地域で製作された可能性がある。ただし北八ヶ岳を含む長野県方面でも同様の地質条件が存在することから、より遠方地域からの搬入も検討する必要がある。なお、第161図のクラスターYに含まれる大部分の土器は、安山岩を主体とし八ヶ岳南麓地域において在地的土器と推定されているが、社口遺跡草創期～早期土器との類似性は乏しい。

縄文中期末では、八ヶ岳南麓地域およびこれに隣接する塩川地域・釜無川地域において、各地質を反映した在地的胎土をもつ土器が出土することから、各地域で土器を生産していたことが推定されている（河西ほか,1989）。これに対し社口遺跡の縄文草創期～早期土器には、在地的土器が含まれていない。富士吉田市古屋敷遺跡の縄文早期後半の土器においても、遺跡が緑色変質した変質火山岩類からなる第三系分布地域に属することから在地的と判断された土器はあるが、富士山火山起源噴出物で特徴づけられるような顕著な在地的土器はなかった（河西・中村,1990）。この状況は社口遺跡とやや類似する。土器の生産や移動に関する縄文草創期～早期の状況と縄文中期末のそれとは異なっていた可能性が暗示される。

社口遺跡に土器を残した人々が、直接外部から八ヶ岳山麓へ移動してきて、八ヶ岳南麓内での交渉がないと仮定すれば、今回のような胎土組成が想定される。この場合、八ヶ岳南麓内には在地的土器が製作されている可能性が残される。これに対し本遺跡の土器組成が八ヶ岳南麓における複雑な移動の結果生じたものであるとすると、当時八ヶ岳南麓で土器が製作されていた可能性はかなり低いことになる。もしそうであれば、縄文中期末のように八ヶ岳南麓内で土器がつくられるようになったのはいつからか、興味深い。いずれにしてもこの地域のこの時代のデータが充分とはいえないので、今後継続的調査が必要であろう。

(2)　平安時代土師器

八ヶ岳南麓でつくられたと推定される土器はない。

甲斐型坏Aは、笛吹川とその支流の田草川・鬢櫛川および釜無川河川砂などで構成されるニ2群に含まれる。甲斐型甕Fは、笛吹川とその支流の河川砂からなるニ1群に含まれる。一宮町狐原遺跡の分析結果は、甲斐型坏がニ1群とニ2群との中間に位置し、甲斐型甕はニ1群に属する点で社口遺跡と極めて類似性が高い（河西，1996）。甲斐型甕Fの産地は、笛吹川流域に推定される。甲斐型坏Aの産地は、細粒で含有岩石粒子が少ないことから推定精度は低いと思われるが、笛吹川流域および釜無川流域に可能性が推定される。

信州系黒色土器は、Bが須玉川河川砂との類似性が強く、Cは釜無川地域の河川砂ハ群と融合し、Dは土師器坏Eとが類似性が高くハ群と二群とが融合したクラスターに融合している。これらの土師器は、甲府盆地周辺の河川砂と直接類似性が高いわけではない。Bと融合する須玉川河川砂は、須玉町穴平産で、花崗岩類が検出されていない点でBとは異なる。Cは泥岩・砂岩が多い点で釜無川の河川砂とは異なる。CおよびD・Eは第160図で離れて位置するが、岩石鉱物組成が類似していることから、ほとんど同一の産地のものと推定される。山梨でこのような岩石組成が得られる可能性がある地域は、須玉川下流域から塩川流域があげられる。しかし信州系黒色土器の分布の中心が長野県側にあることから長野地域の調査をまって、産地について再検討する必要があるだろう。なお三辻(1994)・三辻ほか(1994)は、北巨摩地域の信州系黒色土器について蛍光X線分析での胎土分析を行っているが、在地的か搬入かの判断基準として消費遺跡のデータ（山梨県須玉町大小久保遺跡、長野県松本市小原遺跡）だけを使用している点で問題が残る。

ロクロ甕H・Gは、塩川・荒川地域河川砂から構成されるホ・ト群に含まれる。ト群をなす塩川河川砂は、須玉町東向産で、変質火山岩類が特徴である。変質火山岩類は、デイサイト質～安山岩質で、一部カリウムに対する染色反応が認められる。H・Gは、保坂(1988)のロクロ整形土師器甕の大甕に相当する。ロクロ整形の大甕は、藤井平を中心に律令時代の巨麻郡内にのみ分布し、八ヶ岳南麓にはロクロ整形土師器甕の小甕が分布するとされている(保坂,1988)。社口遺跡は従来小甕が分布するとされる地域に属する。保坂(1988)は、製作技法の特徴からロクロ整形土師器甕は須恵器工人によって製作されたものであり、それらの工人集団は8世紀代後半に「ロクロ整形土師器甕のほとんどの類型がみられる藤井平周辺地域にまず定着した可能性があろう」としている。今回の結果はこの推定に肯定的なものとなっている。変質火山岩類がH・Gに多いことは、風化による変質を反映している可能性がある。藤井平に近接する塩川河川砂試料（八21）は、デイサイト・安山岩が多く、変質火山岩類が少ない。河川砂粒子には風化殻が発達しにくいが、段丘化した河床の堆積物はその場にとどまり段丘堆積物として風化・土壌化が進行していくと考えられる。藤井平付近の塩川河川砂組成とH・Gの岩石組成とは関連性があると考えられる。今後藤井平周辺での堆積物を分析対象にすることが有効かもしれない。

［謝辞］文末ながら地質調査所の奥山（楠瀬）康子氏には変成岩について懇切にご教示いただきました。記して感謝いたします。

注1）平安時代土師器試料の拓影図は報告書本文を参照のこと。

注2）ここではデイサイト・流紋岩を含む珪長質火山岩の総称としてデイサイトを使用する。

文　献

原田昌幸(1991)『撚糸文系土器様式』考古学ライブラリー、61、134p.、　ニューサイエンス社。

保坂康夫(1988)山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐって。山梨県考古学協会誌、2、60－89。

河西　学（1989）甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成－土器胎土分析のための基礎データー。『山梨考古学論集II』、山梨県考古学協会、505－523。

河西　学（1990）大和田第3遺跡出土縄文土器の胎土分析。『大和田第3遺跡』、大泉村埋蔵文化財調査報告書、8、19－29。

河西　学（1992）岩石鉱物組成からみた縄文土器の産地推定－山梨県釈迦堂遺跡・郷蔵地遺跡・柳坪遺跡の場合－。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、4、61－90。

河西　学（1996）狐原遺跡出土甲斐型土器の胎土分析。『狐原遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告第120集、91－93。

河西　学・櫛原功一・大村昭三（1989）八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、1、1－64。

河西　学・中村哲也（1990）古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の胎土・製作技法の特徴。『古屋敷遺跡発掘調査報告書』、富士吉田市史史料叢書、8、98－124。

三辻利一（1994）健康村遺跡出土の信州系土師器の蛍光X線分析。『長坂町健康村遺跡』、新宿区区民健康村遺跡調査団、129－142。

三辻利一・板倉歓之・山田真一・瀬田正明（1994）山梨県における長野系土器の蛍光X線分析。日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集、85－86。

第５章　遺構・遺物の分析

第１節　社口遺跡における土地利用の変遷

時期の明確な住居址・ピット類の分布状況と、遺構外土器類（陶磁器を含む）の出土状況を通して、社口遺跡での土地利用状況の変遷を大づかみに把握する。時期細分は土器の時期細分に応じ、より細かくすべきであるが、ここでは草創期～近・現代までを13段階に粗く分け、遺構と土器類の分布を重ね合わせた（第162図）。なお土器類の出土量については、遺構外グリッド出土資料中の文様・器形で時期が明確な点数を合計し、色分けしたもので、カウントに際しては口縁など部位を限定していない。また遺構内からは遺構に伴わない時期の資料が多く出ているが、それらは考慮していない。また平安時代土師器や草創期～早期については小破片でも識別が容易であるため厳密な点数となり、それらと他の時期の点数比較は単純にはできない。

(1) **草創期～早期前半**　59グリッドから北側の北台地斜面から北台地上にかけて遺物分布がある。詳細については第３章第１節を参照。表裏施文土器群・撚糸文土器群が台地上からB59グリッドまで広範囲に散布するのに対し、やや新しい押型文・沈線文（田戸下層式）は59～60グリッド付近の斜面下部～低地に狭い範囲で見られ、わずかに分布範囲を異にしている。これらの地区より南側では、この時期の遺物の散布は石器を含めて皆無である。なお早期後半では早期末かと思われる土器が232号ピット（D55グリッド）で、また試掘時にO14グリッド付近で繊維を含んだ条痕文系土器片１点が出土している。早期までの段階では遺構としては確実なものはないが、斜面に構築された被熱痕のある配石（406号ピット）は中期以降の可能性が十分あるものの、この段階に伴う可能性も残されている。おそらく67グリッドより北側の北台地上に主な居住域があり、南側斜面を含む一帯を日常的な行動域としていたのではないかと想像される。

(2) **前期**　前期前半～中葉頃と思われる破片が数点、54～60グリッド付近で出土。遺構はない。関連遺跡として本遺跡に近接する青木北遺跡で諸磯ｃ式の出土があり、天神遺跡（大泉村）で諸磯ｂ・ｃ式期を主とした大集落址が出ている。諸磯式期以前の居住痕跡となると、八ヶ岳南麓では全体的に稀薄である。

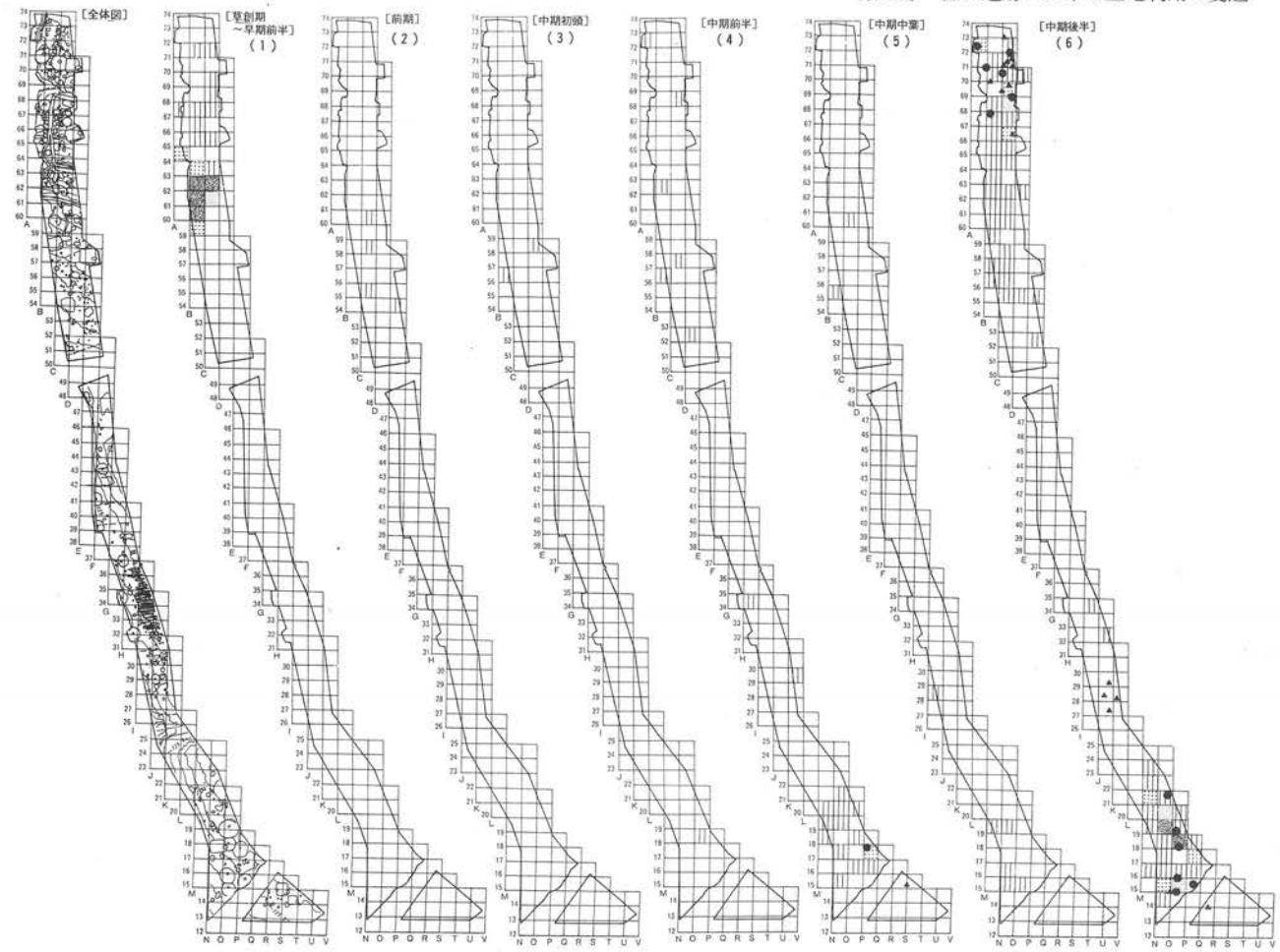
(3) **中期初頭（五領ヶ台式期）**　五領ヶ台II式期の土器が56～59グリッド付近とO18グリッドにある。遺構はない。周囲の遺跡では青木北遺跡、旭東久保遺跡、持井遺跡、当町遺跡などに見られ、高根町内では五領ヶ台末から狢沢式期にかけての良好な資料が散見される。

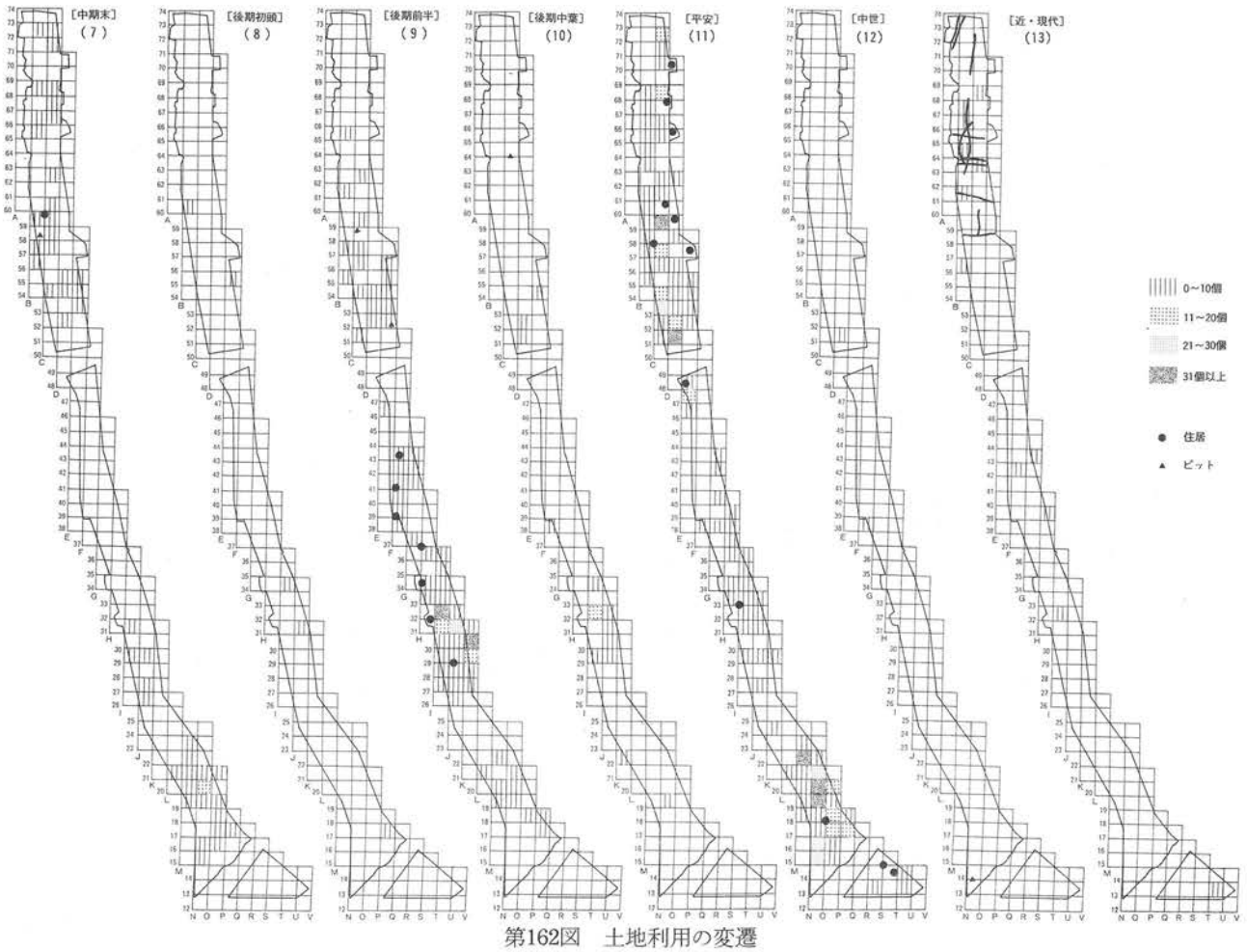
(4) **中期前半（狢沢式期～藤内式期）**　中期前半のうち狢沢式のみ分布する。南台地上P17グリッドに34号住、25住に重複して413号ピットがあり、それらの周囲では遺物が集中して出土した。またそのほか52グリッドから北側に散在するほか、29･34グリッド付近にも分布する。時期は多摩・武蔵野編年（1996　黒尾・小林・中山）でいうと5ｂ期で、三角の印刻文を残すやや古手のものも見られる。

(5) **中期中葉（井戸尻式期～曽利Ｉ式直前段階）**　N18・19グリッドの31号住に曽利Ｉ式直前段階の資料が多くあり、それに関連して15～19グリッドにまとまりがある。また他地点でも少数が散在する。本遺跡西側の青木遺跡でも井戸尻式期の遺物が出土している。

(6) **中期後半（曽利式期）**　曽利II～Ⅳ式期を主とする北台地上と、曽利Ｉ式期の南台地に大きな分布範囲がある。北側の集中域は台地上にある６軒の住居址（７・８・９・10・13・14号住）とピット（４・21・22・25・33・41・55・86・95）に関わるもので、曽利II～Ⅳ式期を中心とする。土器は台地南斜面から55グリッド付近の低地にも広く及んでいる。南台地の集中域は曽利Ｉ式期の６軒の住居址（27・28・30・31・32・33号住）とピット（401・408号ピット）に関わるもので、遺物範囲は台地上に集中している。これらも本来土器細分に応じて細別すれば、より動きが明確になるだろう。また南台地の曽利Ｉ式期集落に伴うと推定された４基の集石炉（381・382・390・398号ピット）周辺にはわずかな土器散布があるのみで、曽利Ｉ式土器の散布は少ない。南台地上から北台地上への住居変遷が推測されるところではあるが、１・２次調査で中期中葉の遺構が北台地上でも出ており、北台地上で中期中葉から後半にかけての動きが連続する可能性がある。そうであれば南台地の曽利Ｉ集落を北台地からの拡散と解釈できるし、あるいは北台地と南台地では全く無関係にそれぞれの時期に集落が成立した、とみることもできる。

(7) **中期末（曽利Ⅴ～加曽利ＥⅣ式期）**　B59グリッドに３号住があり、３号住から南側の低地に散布域が見られる。また北台地上にも散布する。また遺構は確認されていないものの31グリッド以南、とくに南台地上に集中





第162図　土地利用の変遷

域がある。このように中期後半からの傾向として、低地への活動域の進出が顕著になりつつある。

(8)　**後期初頭（加曽利E末～称名寺式期）**　低地～南台地に少量が散在するのみ。遺構はない。

(9)　**後期前半（堀之内式期）**　住居址（16・17・18・19・21・35号住）・埋甕炉（250・263号ピット）のある低地を中心に土器が分布し、遺構の検出されていない南台地上にも多くの遺物が散布する。青木遺跡が低地の西側50mに位置し、青木遺跡と同一集落、または青木遺跡に先行する集落と思われる。青木遺跡が堀之内2式期～加曽利B式期中心で、後期後半まで存続する集落であり、加曽利B式期頃に大規模な石棺墓や配石が構築されたらしいが、住居址の時期認定が明確にできていない。今後、青木遺跡の各住居址の時期細分を行った上で、青木・社口の集落景観を復元する必要がある。社口遺跡は青木遺跡とはやや距離がある感もあるため、青木遺跡とは別の周辺集落とみるべきなのかもしれない。仮に同一集落であるならば幅120mに及ぶ集落域となり、その中心付近に3号配石が位置する（第163図）。いずれにせよ、本時期になると低地面が居住域として利用され、中期後半とは集落立地が大きく異なっている。

(10)　**後期中葉（加曽利B式期）**　後期前半の分布域を踏襲するように低地を中心に散布し、21号住周辺など集中箇所が限定されている。遺構には143号ピット（C63グリッド）で小破片が出ている以外には明確なものはない。

(11)　**平安時代**　北台地上（5・6・12号住）・低地面（1・2・4・20・24・37号住）・南台地上（24・25・29号住）に9世紀中～10世紀後半頃の居住域があり、それらの周辺を中心としてほぼ全域にわたり土器類が分布している。西側には青木北遺跡・東久保遺跡・旭東久保遺跡が存在し、本遺跡37号住の墨書土器は青木北遺跡出土

第163図　青木遺跡との位置関係

例と文字内容・書体共に一致しており、現時点では低地面集落の広がりの中で本遺跡での分布状況を理解したい。ただ平安時代集落も4段階程度の時期細別ができるので、住居の消長、遺物や遺構内容の検討をしたうえで、改めて台地上や低地面に分布する居住域の違いを含めたムラの形態のあり方を考える必要がある。なお、後期後半以降9世紀中頃までの間、遺物は全く存在せず、土地利用が停止されていたのではないかと思われる。

(12) **中世**　主に内耳土器片が低地面・南台地上で少量出土し、遺構としては南台地上の401号ピットが唯一である。おそらく15・6世紀代のものであり、平安時代以降15世紀までの間は土地利用の痕跡が認められない。南台地上には中・近世頃の塚もあり、付近の集落の墓域として、あるいは屋敷地の後背地として墓域等に利用されたのであろう。

(13) **近・現代**　ほぼ全域から少量出土している。茶碗・瓦片などが出ているが、地境と思われる溝などが北台地上から南斜面にかけて多数見られ、屋敷地ではなく畑地としての土地利用が行われている。

第2節　縄文時代草創～早期の土器

(1) 土器群の分類・細別（第164図）

社口遺跡の表裏縄文を中心とした土器群は、撚糸文土器との並行関係を解明する上で絶好の資料であったが、残念ながら二次堆積中での出土のため遺構内での共伴関係、層位的な上下関係を正しく確認することができなかった。したがって周辺遺跡での事例や撚糸文土器の変遷過程を参考にしながら、土器群の変遷を推定したい。なお、本稿執筆にあたっては、谷口康浩・広瀬昭弘両氏からのご教示を大いに参考にしている。

1群土器　直行口縁の土器　第55図5の土器1個体のみ。薄手の直行口縁で小波状を呈し、外面に横位施文の文様帯をもち、内面は無文で指頭痕が残る。

2群土器　表裏縄文（系）土器　表裏ともに斜縄文を主とする。

2a－強い屈曲口縁の表裏縄文土器　角頭状口縁で、口唇に1部位施文をもつ。外面は15では縦位施文で縦羽状縄文であり、13は2段の斜位施文により横羽状の文様帯とする。内面は横位施文の斜縄文となる。羽状縄文をもつものに56があり、この類の可能性がある。

2b－肥厚・屈曲口縁の表裏縄文土器　口縁は角～丸頭状で、口唇1～2部位施文する。不明瞭な頚部文様帯をもつ。1・4・8はいずれも口縁はやや強く屈曲し、頚部文様帯は幅広である。施文方向は縦・横あり、1では頚部を斜位、胴部を縦位とし、4では頚部を横位の横羽状とする。また8では頚部を縦位回転の斜縄文とし、胴部を斜位回転の横縄文とする。内面は横位全面施文らしい。なお1には瘤状貼付文がつくようである。

2c－外反口縁で口唇施文のある表裏施文土器　12・16・19は角頭状口縁で、口唇1部位施文し、外面は縦位施文による斜縄文（12・16）と、横位施文による斜縄文（19）がある。内面は横位の全面施文のようである。

2d－弱い外反口縁で口唇施文のない表裏施文土器　17は口縁が丸頭状で、口唇施文はない。外面は粗い無節縄文。

2e－非常に弱い外反口縁の縄文土器で裏面施文なし　裏面施文はないが、2群の流れをくむ一群である。91～95は丸頭状口縁で、口唇施文はなく、裏面は無文。外面は粗い無節縄文である。

3群土器　撚糸文系土器・模倣土器（裏面施文土器を含む）

3a－井草I式類似土器　102～104の土器。惜しくも裏面が剝離した口縁部小破片のため全体像は不明。肥厚口縁で縄文施文し、口唇は2部位施文と思われる。

3b－井草II・大丸式類似土器　22は表撚糸裏縄文で、口縁が屈曲・肥厚し、口唇1部位施文する。内面は単節縄文で横位施文しており、全面施文の可能性がある。105は口縁が肥厚し、口唇1部位施文をもち、内面にも撚糸文を施文する。107・112は口縁が外反し、口唇1部位施文をもつ土器。107は太く粗い撚糸文であるのに較べ、112は細く密。内面は107では横位1段施文し、112ではさらに下方まで施文するようである。113も口唇施文があり、外面はかなり粗い施文である。31は表裏施文した胴部片で、表面の撚糸は細く密で、井草II・大丸式～夏島式に類似する。

3c－夏島式類似土器　21は口唇施文なく、外反が弱く直行口縁に近い。内面も施文するが、同一原体の撚糸文で施文するため、胴下半には及んでいないだろう。24は口唇が長くのびた丸頭状である。内面施文はない。114～120は粗い撚糸文で、網目状になる可能性もある。口唇施文はなく、丸頭状で、外反は非常に弱い。内面施文は口縁直下に1段のみ行う。

3d－稲荷台式類似土器　6は直立した角頭状口縁で、口唇上・内面の平らなナデが特徴的である。

第164図　縄文草創期～早期の土器変遷図（破線で囲んだ土器は位置付けが不明）

4群土器　縦縄文をもつ撚糸文模倣の表裏縄文土器　縦縄文又は撚糸文を縦位施文した撚糸文系土器様式（第2様式期以降）の影響と推定した。

4 a－屈折・角頭状口縁で、口唇1部位施文　11は胴部下半の状況が不明であるが、内面は全面施文だろうと思われる。

4 b－外反・角頭・丸頭状口縁で、口唇1部位施文　3は口縁部に瘤状貼付文をもつ土器で、内面は全面施文かと思われる。7は丸頭状でやや肥厚し、口唇1部位施文があり、瘤状貼付文がある。10は胴部中ほどまでの破片で、内面は全面施文らしい。

4 c－弱い外反・丸頭状口縁で、口唇施文なし　14は口縁が屈曲ぎみで、内面は全面施文かと思われる。20は撚糸文の可能性もある無節縄文で、内面は胴部上半程度に内面施文する。97～100の胴部片もこの類であろう。

5群土器　網目状撚糸文土器

5 a－内面施文をもつ弱い外反の網目状撚糸文土器　121は丸頭状口縁で、外面に交互施文による網目状撚糸文を、内面に横位施文の撚糸文をもつ。口唇部施文はない。

5 b－弱い外反の網目状撚糸文土器　23・25は丸頭状口縁で内面施文がなく、外面に粗い撚糸文を交互に網目状に施文する。口唇部施文はない。

6群土器　押型文土器

6 a－立野式系の土器　138は縦位施文した山形文をもつ胴部片で、他に同一個体が1片あるのみ。

6 b－細久保段階の土器　139～145は細かな楕円押型文を施文する。

6 c－太い縄文＋楕円押型文土器　胴部片で、上方に径8㎜ほどの大粒の楕円文を施文し（施文方向は不明）、下方に径4～5㎜の太い単節縄文を縦位施文し、斜縄文とする。非常にゆるやかに外反した破片で、口縁部に近い部位の可能性がある。

7群土器　沈線文系土器・田戸下層式土器　149・150で、沈線間に刺突文を加えた田戸下層式類似の小破片。

(2)　草創期末～早期土器群の段階設定

表裏縄文土器は文様の変化に乏しく、器形もまた大きな変化を示さない土器群である。時期に関する論議は近年活発であるが、資料が充実しつつある今日においてもまだ意見がさまざまに分かれている。本遺跡でも確実な時期認定の根拠がなく、しかも口縁部片など一部分による土器全体像の推定に依っているため、いろいろな解釈が可能となっている。ここでは関東の撚糸文系土器様式の変遷観を基軸とするとともに、周辺の遺跡例、近年の論議を参考にして段階設定案を提示したい。

1期　井草直前段階　2 a群段階。1群土器もこの段階か、あるいは前段階、もしくは1～2期に位置づけられると思われる。井草Ⅰ式の肥厚口縁出現直前段階には屈曲・外反した口縁で、頸部文様帯の未発達な土器群が存在するといわれ（原田　1991）、2 a群は本段階と考えられる。15のような縦羽状縄文類似例として長野県栃原岩陰遺跡では深度の深いところから出土したものがあり、栃原の表裏縄文土器群中では古く考えられている。1群土器は草創期の室谷下層式・鳥浜貝塚・三の原遺跡の直行口縁からの系譜が考えられるところではあるが、本資料のみ突出して古いとするのは不自然であろう。口縁部文様帯が2期の頸部文様帯につながることも予想でき、屈曲した口縁部を備えない土器としてみた場合、頸部文様帯をもつ土器として2期とすることもできる。

2期　井草Ⅰ式併行段階　3 a・2 b群段階。頸部文様帯をもつ表裏縄文土器が主で、少量ではあるが井草Ⅰ式的な土器があることから井草式からの影響を受けた、あるいは井草式に影響を与えた段階であろう。県内では上野原町仲大地遺跡に近接して井草Ⅰ式的な土器と表裏縄文土器が出土し、表裏縄文土器は口縁部が屈曲した内外面全面施文土器で、本期の口縁形態に類似する。山形真理子氏が井草Ⅰ式として積極的な評価をするのに対し（山形　1991）、戸田哲也氏は後出すると考えている（戸田　1994）。

3期　井草Ⅱ・大丸併行段階　3 b・2 c群段階。4 a・4 b群土器は縦縄文、または縦縄文を意識した施文があり、撚糸文第Ⅱ様式の模倣、あるいはその影響によると思われるものである。口縁部形態の変遷が2群土器と同一方向をたどると予測し本段階とする。屈曲口縁の4 a群を3期でも前半に、また外反口縁の4 b群を後半としたい。県内では富士吉田市池之元遺跡住居址（阿部　1988）で表裏縄文土器（口縁が弱く外反、口唇1部位施文、外面横・縦位施文の斜縄文、内面口縁部付近に施文）、撚糸文土器（口唇1部位施文し、内面口縁部付近に1段程度施文、外面は縦位・斜位施文）、山形押型文土器（厚さ1㎝ほどの厚手）が伴っている。撚糸文土器は大丸式併行と思われ、また押型文は立野式系の土器である。この中で表裏縄文土器と撚糸文土器が器形・施文手法ともに同調する点、古手の押型文土器が伴う点は重要である。報告者の阿部芳郎氏はそれらを撚糸文末期に位置づけているが、施文技法から撚糸文第2様式併行ではないだろうか。池之元の押型文土器は本遺跡出土の6 a

群と厚さ・原体文様が類似し、同一型式であると判断されるならば6ａ群も3期段階である可能性がある。４ｂ群土器にある瘤状貼付文の類例は、群馬県石畑岩陰遺跡、長野県お宮の森裏遺跡、埼玉県宮林遺跡に存在する。それらの遺跡例では４ｂ群よりも口縁部屈曲が強く、いずれも古く考えられている。２ｃ群は「小佐原段階」とされる土器群に外反の仕方が類似する。

4期　夏島式併行段階　３ｃ・２ｄ群段階。４ｃ群も２ｄ群口縁との類似から本段階とする。５ａ群は口縁形態、内面施文手法の類似性から本時期とする。

5期　稲荷台併行段階　３ｄ群土器段階。２ｅ群もこの段階である。4群で内面施文のない土器群が本期に予想されるが、確認できなかった。もし存在すれば「４ｄ群」を設定するところである。５ｂ群土器は内面施文がない、という点でこの段階か、６期にかけての時期であろう。稲荷台式には施文手法の類似や出土状況から樋沢式土器、あるいは平坂式土器が伴うとされているが、本遺跡には両者はない。

6期　沈線文系土器段階　６ｂ・６ｃ群段階で7群が伴うものと思われる。なお5期とは数段階の時間差が想定される。

第3節　縄文時代中期

1　土器の分類と段階（第165・166図）

住居址・ピット出土の縄文土器を細別し、段階設定を行いたい。

中期1段階　34号住、413号ピット出土土器。中期前半狢沢式期にあたり、「多摩・武蔵野編年」（黒尾・小林・中山　1996）５ｂ・ｃ期に相当する。深鉢では横帯文が多段化し、区画内には多条化した幅の狭い角押文を施文する。34住１は炉体土器であり、区画内が無文のままで古手の様相がある。また25住31は30との同一個体の可能性ある底部であるが、三角印刻文があり、やはり古手である。しかしこれらをさらに細別するには至らない。

中期2段階　井戸尻式期末、曽利Ⅰ式直前段階。31住の土器群中から直前段階の様相をもつものを抜き出したが、３段階と併行するものも多いと思われる。器形はわずかに口縁が開いた円筒形で、口縁部は無文帯とし、胴部から口縁部まで直線的に立ち上がる。口縁は２または４単位の小波状を呈し、加飾されている。胴部は垂下隆線文上にヘラでキザミを入れるものが多いようであるが（31住３・7・16・19）、半截竹管で連続押し引きをしたり（31住5・15）、無文のままとするもの（31住９）がある。モチーフは楕円の横帯区画文を残すもの（31住15・16）、Ｊ・Ｕ字状の懸垂文と縦位条線文（31住７・9）がある。懸垂文は１・２条である。条線は半截竹管とヘラ沈線がある。そのほか特殊な施文技法として、31住３のように垂下隆線上に短い粘土紐を横方向に貼付して連続キザミの効果をもつものがある。頚部は１・２条の隆線文であり、文様帯としては未発達である。

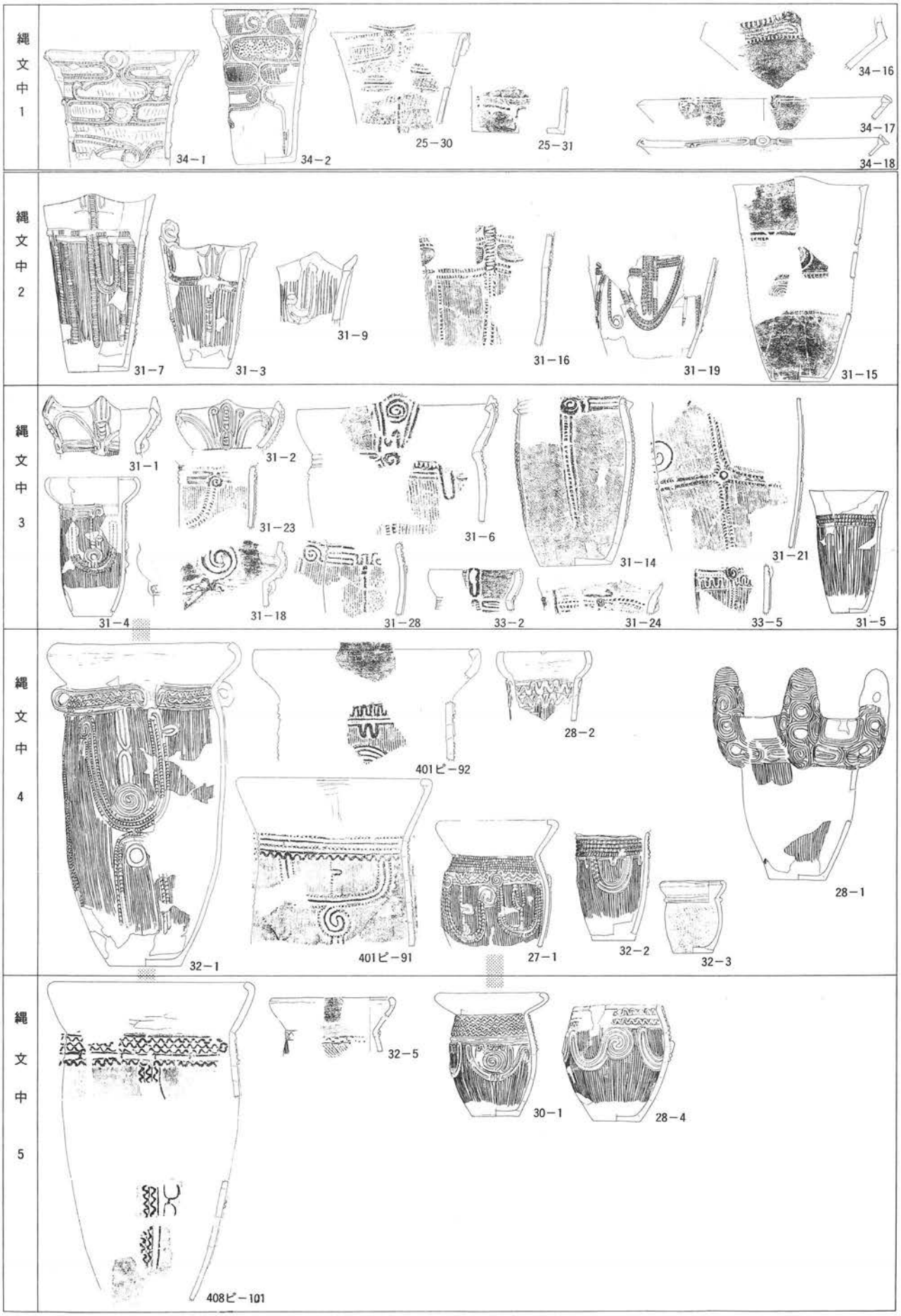
中期3段階　曽利Ⅰ式古段階、または曽利古式１段階。31住の土器群を中心とする。口縁部は内湾した無文帯で、胴部との接点は屈曲する。口縁部に単位文としての加飾があり、渦巻文などがつき、波状を呈するものがある。31住1・2には3と同技法の垂下隆線文がある。頚部は文様帯として３～４条と多条化し、渦巻文などがつく。波状隆線文もあるが少ない（31住18）。胴部にはＵ字状の懸垂文があり、キザミ・半截竹管文で連続押し引きされている。懸垂文は２・３条で、２条が多い。

中期4段階　曽利Ⅰ式中ないし新段階、または曽利古式２段階。28住、32住、401号ピットの土器群。口縁部は無文平縁となり、頚部文様帯は４～Ⅶ段とさらに多条化し、波状（蛇行）隆線文が１・２条貼付される。また胴部懸垂文も２～４条と増え、懸垂文の途中や頚部文様帯にＵ字状文様をもつ例がある（27住１・32住１・2・401ピ91・92）。懸垂文の多くは半截竹管押し引き文である。縦位条線文は半截竹管文のほか櫛歯状条線文も現れる。

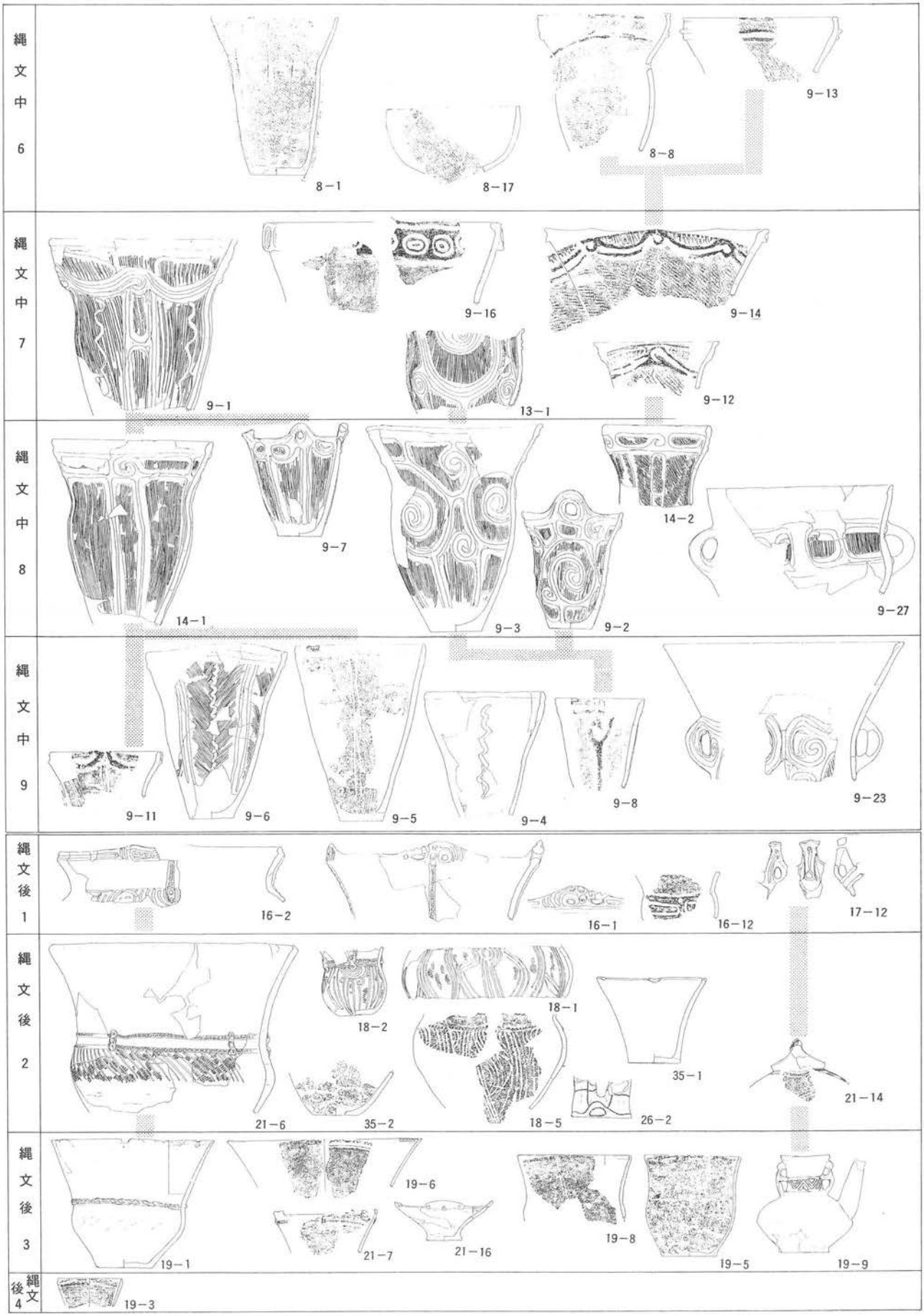
中期5段階　曽利Ⅰ式新～曽利Ⅱ式古段階、または曽利古式２・３段階。多摩・武蔵野編年10ｃ期。長胴のほか胴部の丸い器形が増える。頚部文様帯は幅広で、波状隆線文は２～４条と増える。胴部懸垂文にも波状隆線文やヒゲ状隆線で加飾するものがある（408ピ101）。懸垂文自体は無文であり、Ｕ字の形は縦長から横長になっている。

中期6段階　曽利Ⅱ式期。８住の曽利縄文系と呼ばれる土器と加曽利Ｅ２（多摩・武蔵野編年11ｂ・ｃ期）相当の土器の段階で、８住１・17は縦に結節縄文が施文されている。

中期7段階　曽利Ⅲ式期。多摩・武蔵野編年11ｃ・12ａ期。９住の中から古手のものを抽出した。胴部渦巻き文が２条の隆線文で施文されるもの（13住１）、口縁部に弧線つなぎ文をもつもの（９住１）がある。条線は櫛歯



第165図　縄文中期土器の変遷



第166図　縄文中～後期土器の変遷

状条線文。9住1は新しくも見えるが、埋甕に使用されており、弧線つなぎ文が2条単位であること、H状文をもつことからここに位置づけた。大木式の影響といわれる口縁部楕円連続文や、頸部無文帯をもつもの（9住16）も6段階から本段階にかけてであろう。

中期8段階　曽利Ⅲ・Ⅳ式期。多摩・武蔵野編年12b期。口縁部文様帯をもつ土器（9住7・14住1）、胴部唐草文で口縁部文様帯のない土器（9住2・3）があり、後者の隆線は1条である。条線は櫛歯状条線文。口縁部には環状小把手がつくものがある。

中期9段階　曽利Ⅳ式期。9住のうち新しい様相の土器群である。深鉢は胴部のくびれが弱く、口縁部文様帯を失い口状の区画が成立する（9住5・6）。また口縁部を残す土器も存続すると思われる（9住11）。区画内には櫛歯状条線で綾杉状沈線文を施文し、中心に蛇行垂下沈線文がつく。また無文のままのものもある（9住4）。

曽利Ⅰ式の細分については、曽利式の中心地域とされる甲府盆地の土器群を細かく観察した山形真理子氏の段階設定（山形　1996）と流れにおいては大差はないが、社口遺跡が長野県寄りの甲府盆地西部にあたり、若干の地域性もみられる。釈迦堂遺跡と比較した場合、3・4段階の頸部文様帯中に入る渦巻文は釈迦堂遺跡にはあまり存在しない。また31住1や32住2にみられるような頸部の把手は釈迦堂では少ない。また波状文による加飾の仕方は、408号ピット101が釈迦堂例に近いともいえるが、北巨摩から長野方面の特色としてあまり加飾しないのが一般的である。またモチーフとしては人体文系譜をもつ32住1のような土器は釈迦堂では少なく、北巨摩地方ではよくみられる。

2　石組みを伴う集石炉について

398号ピットからは、出土炭化材（クリ）の^{14}C年代測定によって4,470±120年前という結果が得られた。当初、覆土のあり方や、礫表面の著しい発泡・被熱・変色状況から中近世以降の所産ではないかと考えた。しかし類例には縄文時代早期をはじめとして屋外集石炉としての例が知られており、本遺跡の398号ピット等の屋外炉群は、年代測定の結果を重視して縄文時代中期後半と考えたい。8号住（曽利Ⅱ式期）の炉内クリ材が4,350±110年前ということであるから、398号ピットは曽利Ⅰ式期頃に推測され、ピット群南側に展開する曽利Ⅰ式期集落址との関連が想定できる。ただし、年代測定の年代幅を考慮すると中期初頭から前半ころと考えることもでき、五領ヶ台式期、あるいは狢沢式期の可能性もあるだろう。

土坑中に集石をもつ集石炉は縄文時代を通じて見られ、とくに早期に多い傾向がある。中でも土坑中の底面に皿状の石組みの配石（敷石）を施した例は、小薬氏のいう焼石遺構「A－1型」に含まれるもので（小薬　1979）、「土壙内のほぼ全面に焼石が密集した状態で検出されているもので、壙底に敷石をもつものもある」とされる。また谷口康浩氏の分類（谷口　1986）では（1類）土坑を伴う「集石土坑」－a種（充塡型）－（ア）坑底部に板石・組石・敷石等の付属施設を持つもの、－b種（被覆型）－（ア）坑底部に板石・組石・敷石等の付属施設を持つもの、に相当する。谷口氏が関東・中部地方で集成した表を参考に1aア・1bアを抜き出して時代順に列記すると次のようになる。

早期　静岡県若宮遺跡第1号集石土壙跡・7号（押型文・1aア）、長野県三ツ木遺跡（押型文・1aア）・頭殿沢遺跡集石1（押型文・1aア）・赤坂遺跡1号集石炉・3号（押型文・1bアイ）・同2号（押型文・1aア）、神奈川県向原遺跡17号集石土壙（貝殻沈線文・1aア）、埼玉県宮林遺跡第4号集石（条痕文・1aア）、東京都神明上第81地点第3号集石炉（撚糸文・1aア）

前期　東京都小山田遺跡No.23遺跡ＪＳ－2（諸磯）、埼玉県宮林遺跡第2号集石（諸磯）

中期　長野県判ノ木山西遺跡土壙32（中期・1bア）、神奈川県三の丸遺跡（五領ヶ台・1bア）・蟹ヶ沢・鈴鹿遺跡石積遺構（加曽利E・1aア）、埼玉県宮林遺跡第1号集石（加曽利E・1aア）、東京都馬場遺跡　7号集石跡（中期・1aア）・神谷原遺跡ＳＸ39・41・74（中期前半・1aア）・同ＳＸ32・40・72・75・77（中期前半・1bア）・山根坂上遺跡13H－1・2号・13J1・1号・13J2・1号・13J2・3号・23A1・1号・23A3・1号・23A3・2号・23B2・2号・23B3・1号・23C4・1号・23C4・4号・23E5・3号・33D9・1号・33D9・2号・33D9・4号・33D9・5号・33D10・2号・33E10・1号（加曽利E・1aア）・同23A2・1（加曽利E・1bア）・羽ヶ田上遺跡76B2・3・86D9・2・97A1・1・86A7・1（中期・1aア）・多摩ニュータウンNo.46遺跡（勝坂・1aア）・日野吹上遺跡第1号集石炉（勝坂・1bア）・大和田遺跡ＳＤ1号土壙・3号（中期・1bア）

このように早期撚糸文・押型文期以降中期全般にわたりみられる中で、とくに中期の増加傾向が著しい。ここでは谷口氏集成以降、管見に触れた山梨県～長野県の石組みをもつ集石炉を挙げておく。

西原遺跡（山梨県高根町村山西割,雨宮　1987c）2号土壙　径1m、深さ25cmの円形土坑で、上部に拳大の礫による集石があり、底部には配石がある。遺物の出土はない。なお4m離れた場所に曽利Ⅳ式期の住居址がある。また遺跡内からは五領ヶ台式・堀之内式・晩期条痕文の土器が出ている。

大洞遺跡（長野県岡谷市，市沢　1987）1・2・3・4・5号集石炉　5基の集石炉が集中している。1は径1m、深さ35cmで遺物はない。2は径1.3～1.5m、深さ45cmで、安山岩礫442個が出土した。^{14}C年代測定で4,430±100yrBPという測定結果が出ている。3は径1.2m、深さ50cmで、564個の礫が出土した。集石上面に五領ヶ台Ⅰ式土器があった。^{14}C年代測定結果は4,410±100yrBPである。4は径0.9～1.2m、深さ20cmで、156個の礫が出土した。^{14}C年代測定結果は8,880±350yrBPである。5は径1.2m、深さ80cmで、五領ヶ台Ⅰ式土器を伴う。^{14}C年代測定結果は5,130±105yrBPである。

甲六遺跡（長野県富士見町，唐木　1974）4号土坑　1.25～1.5m、深さ39cmで、焼土・炭化物を多量に出土した。五領ヶ台Ⅰ式土器数片が出ている。

金山沢北遺跡（長野県茅野市金沢，小林ほか　1981）集石2　径1.5m、深さ70cmで、385個の礫を用いている。底部には5枚の板状の石による配石がある。

竜神平遺跡（長野県塩尻市片丘,上田　1988）1・2・4号集石炉　1は径1.7m、深さ50cmの擂鉢状で、坑底に13個の石で配石を行い、内部に2110個の礫がぎっしりと詰まっていた。東側壁に焼土・木炭の集中があり、東側から火が焚かれたらしく、また上面に焼土が存在したことから、火焚きの最中か最後に石が入れられたことが推測されている。2は径1.2～1.3m、深さ50cmの擂鉢状で、坑底中央に一段深く掘りくぼめられた中に6個の石が組まれている。礫は約800個あり、中心より東側に厚く堆積している。焼土が南壁側に厚くなるなど、特定の場所に焚き口があったのではないかと推測されている。4は径1.2mの円形で、深さ50cmの台形断面である。坑底に5個の石が敷かれ、壁にはびっしりと木炭が巡っている。とくに東壁は焼土化し、焚き口と推定されている。約470個の礫が詰まり、集石上面はやや窪んでいる。それらの他に集石炉に関わる集石や焼土（火床）12カ所が検出され、石蒸しに関わる行動復元がなされている。直接時期を示す遺物はないが、周辺の土器分布状況から1・4号集石炉は諸磯C式期、2号集石炉は中期初頭～狢沢式期と推測され、1号集石炉北および2号集石炉北にはそれぞれ数m離れて同期の住居址（竪穴遺構）がある。

以上のほか、中谷遺跡（山梨県都留市）でも中期末～後期の敷石住居址に近接して14基の集石炉が出ている。土器はなく時期不明であるが、後期の可能性もあるという（笠原みゆき氏御教示）。また山梨県塩山市下小田原で発見され市史跡として保存されている原之京鍛冶遺構（上野　1972）は、土坑底面に平石を据え、集石を入れた集石炉である。報告では、発見者である地主の方が集石上付近から鉄滓4点を見つけたという話をもとに、周囲に残る鍛冶関連地名などに鑑みて古代～中世の鍛冶遺構と判断しているが、形態的には縄文時代の集石炉と全く同一である。土坑の断ち割りでも鉄滓・鍛冶関連の遺物は皆無であり、また今日まで鍛冶遺構としての類似遺構は出ていない。周囲には五領ヶ台期の遺跡もあり（小野正文氏御教示）、縄文時代中期頃の遺構と考えた方がよいだろう。そのほか1995･6年に調査が行われた西田町遺跡（山梨県一宮町）でも2基の石組を伴う集石炉が出ている（西田町遺跡発掘調査団調査，未報告）。

配石をもつ集石炉は単独で存在する例もあるが、3～5基が集中する傾向をもち、土器を伴う例があまりないことから時期不明とされることが多い。時期のわかるものでは中期初頭～前半の事例が多いようである。そうしたなかで^{14}C年代測定が大洞遺跡や本遺跡で行われ、両遺跡で中期初頭から中期後半の年代が出ており、中期初頭に限らず中期全般を通して見られる屋外炉と考えられる。集落との位置関係に関しては、住居に近接して存在する例がある一方、本遺跡のように居住域から一段下がった斜面の例、周囲に同時期と思われる住居址がない例などがあり、竪穴住居とは離れて存在することは注目すべきである。竪穴住居が冬の居住形態であると仮定した場合、竪穴住居を周囲に伴わない集石炉は夏季を中心とした調理形態である可能性があり、土器を用いない調理方法が夏季を中心に存在したことが予想され、周囲に居住痕跡を残さない居住形態であったかもしれない。

礫表面に見られる発泡について、鈴木稔氏（㈶山梨文化財研究所　保存科学研究室）の御協力により簡単な予備的実験で被熱温度を探った。集石中の発泡礫のうち、同一礫の発泡のない部分をハンマーで欠き、3cm程度の破片を蒸発皿に入れて電気炉内に入れて加熱して出土資料と比較した。温度を800度程度に上げた結果発泡しなかったため、a－1,000℃（30分）、b－1,000℃（90分）、c－1,100℃（60分）、d－1,200℃（10分）、e－1,200℃(30分)の5種類の加熱をした。その結果a～cでは表面の赤変があり、またdではわずかな溶融が、eでは著しい変形・溶融が見られた。ただし出土礫面に見られた細かな発泡はいずれにもなく、外見はいずれとも出土資料とは違っている。おそらく1,000℃未満の温度下で、付着物などの外的要因も加わって発生したのであろう。

第４節　縄文時代後期

１　土器の分類と段階（第166図）

住居址出土資料で時期細分する。

縄文後期１段階　16・17住の土器群で堀之内１式新段階。深鉢は胴部が強くくびれ、屈曲した口縁部に１条の沈線文による口縁部文様帯がある。また屈曲部内面にも沈線文がある。単位文の起点となる部分には把手状の波状部があり、そこからキザミを加えた垂下隆線が胴部文様帯に連結する。胴部文様は口縁部懸垂文を起点に沈線による曲線文を施文している。

縄文後期２段階　18・21・26・35住の土器群で堀之内２式古段階。短く屈折した口縁部で、内外に沈線文はない。胴部のくびれは１段階よりも弱い。頚部に１・２条のキザミ隆線を貼付し、２条巡らすものには２条を連結する８の字状貼付文が数カ所につく。胴部には縄文地文に曲線文が施文される。斜行した沈線文（21住6）やラフな曲線文がある。

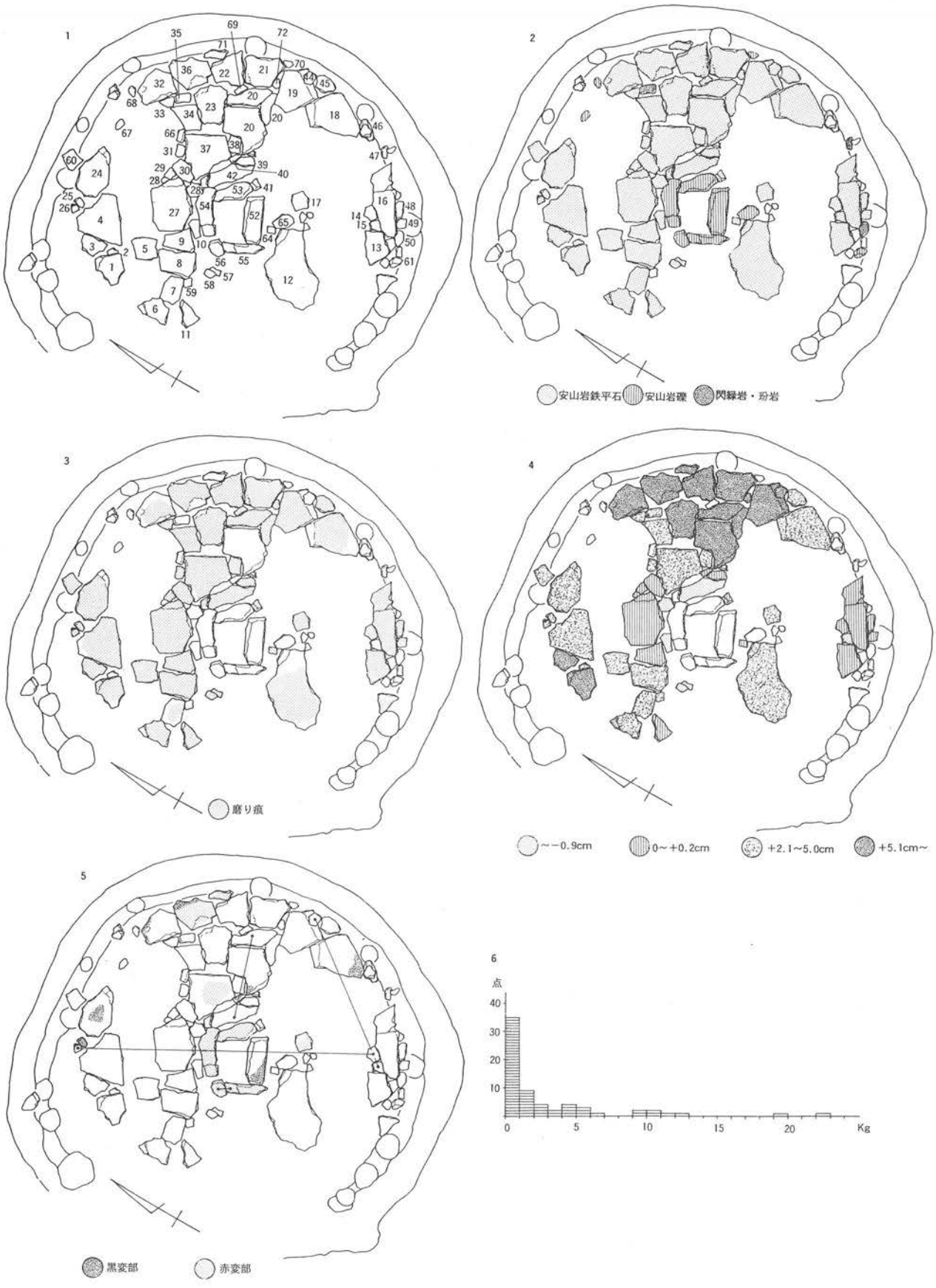
縄文後期３段階　19・21住の土器群で、堀之内２式新段階、あるいは加曽利Ｂ１直前段階。口唇部は短く屈折するか、屈折せずに直線的にのびたものがある。後者には内面に２条の沈線文が巡り、キザミや刺突文も加えられ、加飾化する。とくに浅鉢には顕著である。内外面は磨きにより光沢をもつものがあり、黒色処理した土器がある（19住５・９など）。磨き技法の出現に伴い、外面の文様は簡素化し、無文とするものもある。外面のキザミ隆線は頚部に巡るもの（19住１）、口縁部に巡るもの（21住７）がある。注口土器（19住９）は有頚注口土器と呼ばれるもので、把手は靴篦状把手である。有頚形でも完成段階のもので、堀之内２式期、加曽利Ｂ１式注口土器成立直前段階といわれており（秋田　1994）、他の土器群の様相と一致している。

縄文後期４段階　19住で加曽利Ｂ１式土器片が１点出土し、他にも遺構外で数片出土している。青木遺跡で加曽利Ｂ式土器が多数出ていることを考えれば、社口遺跡にもっと存在してもよさそうである。なおＢ２式期と見られる土器片が143号ピットで出土している。

２　16号住の敷石に関する観察（第167図・第10表）

16号住（堀之内１式期）の敷石には、調査時点で表面の磨り痕や赤変部が確認でき、また敷石の多くは鉄平石であったため敷石どうしの接合関係も予想された。そこで全ての敷石（敷石面から間層をはさんで浮上するものは除く）に関して、取り上げて室内で観察することとした。観察項目は１～７の７項目である。この作業は、敷石住居から可能な限りの情報を引き出すこと、敷石住居構築に関する行動パターンをつかむことを目的とする。また、ここでは多摩川流域の調布市上布田遺跡ＳＩ14（称名寺１式期）、八王子市深沢遺跡ＳＢ02（堀之内１式期）、秋川市前田耕地遺跡１号住（堀之内１式期）の３軒の敷石住居の分析を行った赤城高志氏の先行的な研究成果（赤城　1992）との比較を行ってみたい。

(1)　**石材・石質**　ほとんどが板状節理の発達した鉄平石で、輝石安山岩もしくは輝石角閃石安山岩であり、他に玢岩・閃緑岩が少数含まれる（第166図２）。総数73個に対し、玢岩・閃緑岩の数は３個、４％である。鉄平石には輝石・角閃石の粒子の大きさ、その密度、色調などに違いが見られたため、Ａ～Ｆの６種に原石類別した。採取地点の違いを予想したもので、それぞれの原石が別地点で採取された可能性があるが、同一地点でも複数の違いは予想されるということであり（河西学氏御教示）、分類が必ずしも意味を持たないかもしれない。分類の結果、ほとんどがＡとした類であり（59％）、同一地点から多くの石材を調達した可能性が考えられる。玢岩・閃緑岩は円礫の河床礫で、周縁部ないしは鉄平石間の詰め石として用いられている。赤城高志氏によると、多摩川流域では転用された石皿などを除く礫は、ほとんどが最寄りの河川の河原で採取したと考えられるという。本遺跡16号住の鉄平石は、角が鋭利であることから河原中の転石ではなく、露頭での採取であろう。東へ約１kmの距離にある須玉川付近の露頭での採取と予想されるが、現段階ではまだ産地を特定できていない。露頭確認、産地推定は今後の課題である。一方、玢岩・閃緑岩は円礫であり、台上地域には存在しないと考えられるので、須玉川河床礫の採取であろう。須玉町上ノ原遺跡（櫛原　1996）の敷石住居では鉄平石間の詰め石として、須玉川の本流、塩川の河原中にある青色を呈した粘板岩などが好んで用いられていた。色のある滑らかな円礫を詰め石と



第167図　16号住居址の敷石磨り痕・レベル・変色部・重量分布図

第11表　16号住の敷石観察表

番号	石質	長軸長 cm	短軸長 cm	厚さcm	赤変部の有無・部位	黒変部の有無・部位	磨耗痕の有無・部位	縁部の調整痕の有無	重量g	敷石レベル m	基準レベルからの高さcm（725.8 m）	接合関係	取り上げNo.	備考
1	安山岩鉄平石A	33.8	22.0	4.7-6.7	−	−	表	−	10325	725.860	+6.0		221	
2	安山岩鉄平石F	11.0	5.0	0.7-2.2	−	−	−	−	145	725.845	+4.5		222	
3	安山岩鉄平石A	23.7	16.5	1.4-5.3		−	表	−	2595	725.856	+5.6		223	
4	安山岩鉄平石A	51.8	38.3	2.0-5.9	−	裏	表裏	−	12100	725.844	+4.4		224	
5	安山岩鉄平石A	29.3	20.0	0.7-1.9	−	−	表	−	1340	725.829	+2.9		225	
6	安山岩鉄平石A	28.0	19.0	3.9-6.1	−	−	表	−	4595	725.838	+3.8		226	
7	安山岩鉄平石A	23.0	15.7	0.5-2.6	−	−	表	−	1290	725.829	+2.9		227	
8	安山岩鉄平石A	35.5	29.0	1.7-3.8	−	−	表	−	4820	725.825	+2.5		228	
9	安山岩鉄平石A	28.0	19.2	2.2-2.7	−	−	表	−	2385	725.819	+1.9		229	
10	安山岩鉄平石A	17.5	10.3	1.4-2.4	−	−	裏	−	755	725.771	-2.9		230	
11	安山岩鉄平石A	24.5	12.5	3.3-4.5	−	−	表裏	−	1815	725.812	+1.2		231	
12	安山岩鉄平石B	72.0	38.5	0.7-7.7	−	−	表	−	22000	725.838	+3.8		232	
13	安山岩鉄平石A	30.7	20.8	1.4-3.0	−	−	表	−	2335	725.800	0		233	
14	安山岩鉄平石D	14.0	12.8	1.0-2.2	−	−	表裏	−	470	725.810	+1.0	+246	234	
15	安山岩鉄平石A	14.2	9.5	0.7-1.1	−	−	−	−	160	725.799	-0.1	+264	235	
16	安山岩鉄平石A	65.0	17.5	0.2-4.5	−	−	表裏	有	5880	725.817	+1.7		236	
17	安山岩鉄平石A	14.0	12.5	2.1-3.0	表	−	表	−	980	725.831	+3.1		237	
18	安山岩鉄平石D	53.5	34.5	0.6-4.6	−	裏	表裏	−	9060	725.847	+4.7		238	
19	安山岩鉄平石A	44.5	36.7	2.3-5.4	−	−	表裏	−	10800	725.858	+5.8		239	
20	安山岩鉄平石A	57.0	55.0	2.7-6.2	裏	表裏	表	−	19540	725.861	+6.1	+262	240	
21	安山岩鉄平石A	40.5	33.3	0.7-4.8	−	−	表	−	5845	725.863	+6.3		241	
22	安山岩鉄平石A	32.0	28.0	1.1-3.2	−	−	表	有	3370	725.856	+5.6		242	
23	安山岩鉄平石A	34.5	29.8	1.1-4.5	裏	−	表	−	5810	725.856	+5.6		243	
24	安山岩鉄平石A	46.0	28.5	1.7-3.9	−	表	表	−	6310	725.831	+3.1		244	
25	安山岩鉄平石A	8.5	4.8	0.6-1.0	−	表	表	−	55	725.837	+3.7		245	
26	安山岩鉄平石D	7.5	7.0	1.3-2.2	−	−	表	−	170	725.840	+4.0	+234	246	
27	安山岩鉄平石A	44.8	40.0	1.9-3.5	裏	表	表	有	9140	725.802	+0.2		247	
28	安山岩鉄平石A	14.2	10.2	1.4-1.9	−	−	−	−	520	725.790	-1.0		248	
29	安山岩鉄平石A	12.7	7.7	1.3-1.8	−	−	表	−	250	725.800	0		249	
30	安山岩鉄平石A	22.0	12.0	0.6-2.1	−	−	表	有	730	725.802	+0.2		250	
31	安山岩鉄平石A	14.6	8.0	2.2-2.7	−	−	表	−	525	725.817	+1.7		251	
32	安山岩鉄平石C	38.7	31.5	1.6-3.1	−	裏	表裏	−	4690	725.859	+5.9		252	
33	安山岩鉄平石A	12.3	8.5	1.7	裏	−	表	有	300	725.833	+3.3		253	
34	安山岩鉄平石A	31.0	19.5	1.6-2.7	−	−	表	−	2350	725.835	+3.5		254	
35	玢岩	13.5	9.5	1.4-5.2			表	有	845	725.845	+4.5		255	
36	安山岩鉄平石D	34.0	26.4	0.4-4.8	表裏	表裏	表	−	3800	725.867	+6.7		256	
37	安山岩鉄平石A	47.0	39.0	2.9-5.9	表	裏	表	有	12500	725.824	+2.4		257	
38	安山岩鉄平石A	19.0	12.5	2.4-2.8	裏	−	表裏	−	1005	725.836	+3.6		258	
39	安山岩鉄平石A	17.5	7.3	1.6-2.3	−	−	表裏	−	490	725.808	+0.8		259	
40	安山岩鉄平石C	9.4	6.3	0.8-1.3	−	表	表	−	95	725.817	+1.7		260	
41	安山岩鉄平石A	10.5	6.5	1.4-2.7	−	−	表裏	−	300	725.820	+2.0		261	
42	安山岩鉄平石A	44.0	13.0	1.9-4.9	裏	−	表	−	4200	725.791	-0.9	+240	262	
43	安山岩鉄平石A	16.5	7.3	1.8-2.7	−	−	表裏	−	515				263	
44	安山岩鉄平石A	11.2	11.0	0.8-1.2	−	−	−	−	210	725.852	+5.2	+235	264	
45	安山岩鉄平石C	19.5	12.0	3.0-3.9	−	−	表	−	1545	725.848	+4.8		265	
46								−		725.808	+0.8		266	行方不明
47	閃緑岩	12.5	10.5	1.5-5.8			表	−	1250				267	
48	安山岩鉄平石A	19.3	7.3	2.0-2.3	−	−	表裏	−	650	725.813	+1.3		268	
49	安山岩鉄平石D	9.5	8.8	1.5-2.2	−	−	表裏	−	260	725.818	+1.8		269	
50	閃緑岩	18.0	8.8	3.6-4.7			表裏	−	1440				270	
51	安山岩鉄平石A	12.0	10.0	1.5-1.9	−	−	表	−	305				271	
52	安山岩鉄平石E	36.0	24.0	7.9-14.2				−	18000				272	炉石
53	安山岩	34.5	24.0	7.7-14.5				−	10900				273	炉石
54	安山岩	45.5	20.5	7.8-19.6				−	4000			+276	274	炉石
55	安山岩	20.5	14.0	3.2-7.9				−	6600			+275	275	炉石
56	安山岩	24.0	16.5	3.3-7.7				−	1835				276	
57	安山岩鉄平石A	11.4	5.0	0.9-1.2	−	−	表	−	115	725.796	-0.4		277	
58	安山岩鉄平石C	10.4	5.0	0.7-1.3	裏	−	表裏	−	90	725.796	-0.4		278	
59								−		725.822	+2.2		279	行方不明
60	安山岩鉄平石A	19.7	15.0	2.7-3.7	−	−	表	−	1370	725.848	+4.8		280	
61	安山岩礫	10.5	8.0	0.5-2.8				−	235				281	
62	安山岩鉄平石C	11.7	8.0	3.5-4.2	−	−	表裏	−	530				282	
63	安山岩	8.2	5.3	0.3-1.3				−	70				283	打斧片？
64	安山岩鉄平石A	7.7	7.5	1.4-2.0	表	−	表裏	−	135	725.809	+0.9		284	
65	安山岩礫	15.4	10.5	0.5-3.4	表	表		−	525				285	
66	安山岩礫の凹石	13.4	6.1	3.5				−	474	725.827	+2.7		286	凹石
67	安山岩円礫	9.0	6.0	2.8-4.4				−	300				287	凹石？
68	安山岩円礫	9.0	6.5	2.5-3.1				−	240				288	
69	安山岩鉄平石A	8.5	6.0	0.5-1.6	−	−	表	−	120	725.850	+5.0		289	
70	安山岩礫	9.4	5.0	2.3-4.8				−	235	725.860	+6.0		290	
71	安山岩鉄平石A	20.0	6.4	1.7-2.2	−	−	−	−	485	725.870	+7.0		291	
72	安山岩鉄平石A	18.5	5.3	1.6-1.9	裏	−	表	−	185	725.855	+5.5		292	
73	安山岩鉄平石A	7.0	4.7	0.8-1.4	裏	裏	表	−	50	725.814	+1.4		293	

して意図的に採取・使用するという傾向はあろう。

(2) **敷石の敷設レベル**　敷石面上での居住によって敷石面がどのように沈下しているか、あるいは本来どのような高さで敷設されていたのかを探るものである。その際、住居廃絶以降現在までの間の斜面方向への敷石のずれや、地形変化の影響による移動も考慮する必要がある。ただ16号住の場合、構築土（地山）がしまりある礫混じりの粘質土で、地盤は安定的であり、敷石には影響していないと思われた。

レベルは各敷石中央付近で測定したものである。その結果、敷石面のレベル高低差は最大7㎝程度で、炉周辺が低く、奥壁側が高い。測定値を炉周辺のレベルを基準に2㎝ごと4段階の色分けをしたのが第166図4である。敷石住居の敷石裏面は通常凹凸であり、表面を平らにして敷設するためには掘り方面にそれぞれの石に応じた量の土を投入して据えている。つまり土で石の平面を保とうとしているので、上から重量がかかるとそれだけ沈下する。したがって普段頻繁に出入りする出入り口や炉周辺は沈下が著しいと予想されるわけである。16号住は全面敷石ではなかったため、限られた敷石面での推定ではあるが、炉周辺、炉左右空間、奥壁側の順に敷石の沈下が弱い。これは敷石住居内での空間使用頻度をよく示しているのではないかと思われる。ただし、水平な敷設が本来的なあり方かどうか。奥壁側の敷石レベルが高いのは、当初から高く敷設したためという予想もできる。分析事例の増加をまって検討すべきであるが、単純に考えるならば、閉じた空間では出入り口側を通過する度合いが高く、出入り口と反対側（奥壁側）では通過頻度は低い。上布田例でも同様に壁寄りの空間から炉の左右空間に向かってレベルが低く、赤城氏は「主体部の掘り方の傾斜に沿って敷石が施されているためで、それが意識的になされたものかは判然としない」とし、深沢例でも同様な傾向があることを指摘している。敷石レベルの状況は、住居内空間の利用を考えるうえで有効な材料と考えられる。

(3) **大きさ・厚さ・重量**　どの空間にどのような大きさの石を用いているのか。空間の使用頻度、使用目的などと関わるもので、座の想定も可能であろうと思われる。16号住では50ｇ程度の小礫から、最大では22㎏まであり、1㎏未満が最も多い（第166図6・第11表）。9㎏を越える石は8枚で、住居内でも炉を中心とした主要な場所に敷設されており、炉を囲んだ座を重視した敷設状況が予想される。また1㎏未満の小礫は主に周縁部や詰め石として用いられている。敷石・炉石の総重量は216.3㎏。なお、21号住の炉裏の敷石は1枚で96㎏もあった。

多摩川流域の事例は、いずれも100㎠の小礫を5～7割程度用いており、また2～10㎏未満、200㎠～500㎠未満の礫が多いという。また10～20㎏のものもあり、前田耕地例では20～50㎏未満の巨大な礫も8点ほど見られる。重量のあり方は本遺跡とも類似した傾向を示しており、20㎏を越えるような重量の礫をどのように運んだのか興味深い。ちなみに上布田は多摩川まで500m、前田耕地は秋川まで850m、深沢は北浅川まで500mであるという。とくに30㎏以上、40㎏を越える礫となると巨木運搬と同様の共同作業が不可欠となってくる。多摩川流域例では主体部内の座に対応した敷石の敷設は看取しにくいが、上布田例では炉右脇に比較的大形の敷石を1枚用い、また前田耕地・深沢例では連結部から張り出し部にかけて大形礫を並べている。赤城氏は張り出し部に大きな石を用いる必然性について、祭祀的な場としての性格から理解を試みている。鉄平石という、薄くて大きな石材は敷石に好都合の石材であり、場の利用の仕方、機能を想定した上で石材を選択的に調達できる。したがって、敷石の大きさから場（座）の機能を推定することも可能である。

(4) **被熱痕（赤変・黒変部の有無）**　赤変部のあるものを被熱痕、また薄く黒変したものをスス付着によるものと考え、それらの分布状況を調べた（第166図5）。その結果、赤変部のある敷石は全体の19%（13個）、黒変部のある敷石は全体の17%（12個）であった。赤変・黒変の両者が認められるものは5個あり、赤変部をもつものは黒変部をもつという傾向はある。また表面に被熱痕をもつもののほか、裏面にもつものがある。また裏面のみもある。これは磨耗痕のあり方にも共通している。また被熱痕のある敷石の分布は集中しているわけではなく、分散している。なお本住居址は火災住居ではなく、床面に焼土・炭化材の分布は見られなかった。この被熱痕のあり方から予想されるのは、石材採取時の加熱・敷石の転用である。前者は、あくまでも想像ではあるが石材を採取する際に薄い石材を獲得するため、鉄平石のある露頭で焚き火を行い、加熱して割れ目を入れて採取した可能性を想定するものである。後者は他の住居で使用した敷石を転用したと考える想定で、炉石の場合も抜き取り、転用が古くから指摘されており、敷石にも同じ行為が行われている可能性がある。そうした仮説の検証のため、また住居の前後関係の把握のためにも、今後住居間での敷石の接合関係を調べてみる必要もあろう。

赤城氏も前田耕地で「焼失住居ではないのになぜ被熱礫がみられるのか」という問題に対して、他の焼失住居からの転用を想定ししつつ、住居廃絶時における「火入れ行為」の可能性も否定できないとしている。ただし、火入れ行為で住居を焼失させた場合、あるいは敷石面上のある場所で焚き火をした場合、被熱痕はいくつかの石にまとまって見られるであろう。16号住では被熱痕をもつものが点在して存在したり、裏面にもあること、磨耗

痕が裏面にも認められるものがあることから、やはり転用の線が強いと考えたい。

(5) **磨耗痕**　磨耗痕は敷石面を礫で磨って滑らかにした痕跡である。石の表裏を触って比較すると明瞭であり、主に突出した部分や稜の部分を磨っている。磨耗の程度には若干の差があり、細かな凹凸が残るもの、完全に滑らかにしたものがある。通常表だけを磨っているはずであるが、本例では裏面にも磨耗痕がある石が多数認められた（第166図3）。総数に対する磨耗痕をもつ石の割合は約9割で、詰め石やもともと滑らかな石に磨耗痕のないものがある。磨耗痕を持つ例のうち、裏面にもある例は約3割であった。また裏面にのみもある。これは先の被熱痕のあり方に類似し、この現象からは敷石の転用、あるいは住居内での敷石の反転行為、または反転を伴う移動が想定される。なお、赤城氏の分析では磨耗痕の観察は行われていない。もともと滑らかな面をもつ河原石を利用した場合磨く必要性はないので、磨耗痕が顕著ではないのだろう。鉄平石の場合は、こまかな凹凸が無数にあり、それらを礫で磨くと容易に滑らかになるという性質があり、磨きが顕著に行われたらしい。ただ河原石の石材の場合も磨耗痕をもつ可能性が予想され、観察する必要はある。

(6) **敷石の接合関係**　住居内において接合事例は4例見つかった（第166図5）。近くの接合と、距離を隔てた接合があり、後者は小さな鉄平石どうしの接合である。大きな石材には接合例が少ないが、これは大きな敷石を敷く目的で運搬した石材を、意図的に割ることがなかったことを示している。また優先的に敷設し、一度固定してしまうと動かしにくい大きな石材とは違って、小さく軽い石材は詰め石、周縁礫として二次的に敷いていくものであり、設置位置を自由に選択して敷設することができる。接合事例の存在は、意図的あるいは意図に反して細片化した小礫を詰め石などに使う事例が多いことを意味する。

多摩川流域の事例分析では、接合事例の存在と被熱礫の存在を関連づけて、まず欠損礫の割合を調べている。そして接合事例については被熱原因で割れた礫もあるものの、「敷石を構築するにあたって礫を適当に加工しながら並べた」状況を想定している。

(7) **二次調整痕**　鉄平石の縁に二次的な調整痕をもつ敷石がある（第11表）。敲打による剝離をもつもので、石材の採取・運搬時に角をとる目的での加工、あるいは敷設時に石をはめ込む際、余分なところ、出っ張りを打ち欠いたものの可能性がある。全体の10%、7個にあり、一辺あるいは二辺に認められる。小礫にはなく、大形のものにときどきある。赤城氏は、この点に関してとくに着目していないが、欠損礫の周縁部に細かな調整が加えられただけの礫が多いことは指摘されている。

以上、16号住についての敷石の観察を行い、多摩川流域との比較によって敷石住居の一般性（普遍性）および地域性が明らかになった。一般性として把握できたことは、炉周辺での敷石面のレベルの沈下、被熱痕の存在、接合事例の存在、敷石の重量分布、二次調整の存在であり、地域性とみたのは表面の磨き、座を考慮した大形石材の敷設状況である。多摩川流域と大きく違うのは石材および石材採取地で、多摩川流域が河原中での採取であるのに対し、16号住を含めた八ヶ岳南麓では露頭から鉄平石を調達したらしく、凹凸のある表面を使用に際して磨くという特徴的な行為が派生していることがわかった。今後も微視的な視点からの分析により、仮説の検証を行っていきたい。

第5節　平安時代土器類の分類と編年

社口遺跡から見つかった12軒の竪穴住居址出土の土器は、大きくは9世紀代の暗文をもつ甲斐型坏の段階と、10世紀代の暗文がなく玉縁状口縁をもつ甲斐型坏と信州系黒色土器を伴う段階の2大群に分けられる。それらを主としながら須恵器、灰釉陶器類も加わり、さらには地元の北巨摩地域内で製作されたと思われる土師器坏・鉢・甕（仮称：北巨摩タイプ）を伴っている。それらの細分により時期設定を行い、各時期ごとの土器のあり方を探ることで、土器を中心とした物流の様相を考えたい。

(1) **器種分類**

甲斐型土師器（「甲斐型」と略）‥‥坏・皿類は赤褐色の独特な胎土をもち、暗文や手持ちヘラ削りなど特有の調整技法をもつ。甕は外面タテ刷毛、内面ヨコ刷毛が特徴である。坏A（いわゆる甲斐型坏）・B（内面黒色処理を施した甲斐型坏）、皿A（屈折のある皿）・B（玉縁口縁の皿）、蓋、甕A（口径25～30㎝、高さ38㎝ほどの縦刷毛目をもつ長胴甕）・B（縦刷毛目をもつ小形の甕）がある。坏・皿・蓋類については甲府市東部付近、甕については東山梨郡方面に製作地が想定されている。

黒色土器‥‥内面黒色処理を施した食器類で、胎土は褐色で小粒子をやや多く含んでいる。内面はヘラナデによって磨きが施され、つやをもつ。坏A・B（口径・高さとも大きな坏）・C（坏Aと同形であるが、内面の黒

色処理がない、あるいは薄い坏)、皿、椀（短い高台をもつ)、高台皿がある。製作地は長野県東信・中信・南信（諏訪地方）が予想できる。ミガキと黒色処理による水漏れ防止が行われ、汁用の器ともいわれている。

ロクロ甕……回転台によるヨコ方向のロクロ目をもつ甕。甕A（ロクロ目のある甕)・B（ヨコ方向に細かなカキメをもつ甕）がある。保坂康夫氏が旧巨麻郡（北巨摩・中巨摩郡）に多いことを指摘し（保坂　1988)、在地甕と思われる。

信州系甕……2種ある。Aは縦刷毛目をもつ甕で、口縁部付近にロクロ目を残し、内面にはタテナデを行う。甲斐型甕よりも口縁部の傾きが立ち、底部付近の作りも違う。Bは武蔵型甕に似た胴部にヘラ削りを多用し、器壁は薄い。東信地方の甕であろう。

北巨摩タイプの土師器(「北巨摩タイプ」と仮称）……上記以外の技法をもつ土師器で、表面にナデを行っている。甲斐型模倣の坏や甕もときどき見られるが、甲斐型に比べて器壁が厚く、暗文は粗雑で、胎土も異なる。坏、鉢、甕、羽釜がある。北巨摩郡内の遺跡でときどき見つかるもので、量は少ない。

灰釉陶器……瀬戸・美濃方面からの搬入品。椀、皿、長頸壷などがある。

須恵器……坏、椀、甕、長頸壷、凸帯壺などがある。製作地不明で、信州方面からの搬入品、又は在地産と考えられる。

(2)　**甲斐型土師器坏Aの変遷と段階設定**（第168図）

山梨県では「甲斐編年」(「坂本編年」，坂本・末木・堀内　1983）が奈良・平安時代の土器編年とされて長い間用いられており、今日でも大枠の流れに変更がないといわれている。しかし、平城京二条四坊十一坪の井戸からの甲斐型坏の発見を機に年代的な見直しの動きが高まり、甲斐型土器研究グループを中心として年代観の変更案が提起された（仮称「瀬田編年」，瀬田　1992)。また同じ頃調査が行われた韮崎市宮ノ前遺跡の報告書でも段階区分の見直しと年代観の提示が行われた(「宮ノ前編年」，櫛原　1992)。ここでは主に宮ノ前編年に基づき甲斐型坏Aの変遷を時期設定の基準とし、段階設定を行って各住居址の時期を決めていきたい。

1段階　4号住の坏が最も古い様相をもつ。底径が6～6.5cmと大きく、内面に放射状暗文のあるもの、ないものがある。外面体部下半は通常手持ちヘラ削りを行うが、4住2のような回転ヘラ削り例もある。底部は回転糸切り後に手持ちヘラ削りが行われる。宮ノ前編年のⅥ期、坂本・瀬田編年のⅧ期に相当し、年代は宮ノ前編年により9世紀中頃、850年前後としておきたい。

2段階　5・12・29号住が相当。整形技法は前段階となんら変化はないが、前段階よりも底径が小さく、底径/口径比が1／2程度になり、器壁の傾きが大きくなる。3軒の住居の中でも、底径のやや大きな坏を含む29号住は古手の様相を残しており、1と2段階の中間的な様相である。宮ノ前編年のⅦ期、坂本・瀬田編年のⅨ・Ⅹ期に相当し、年代は9世紀後半としたい。

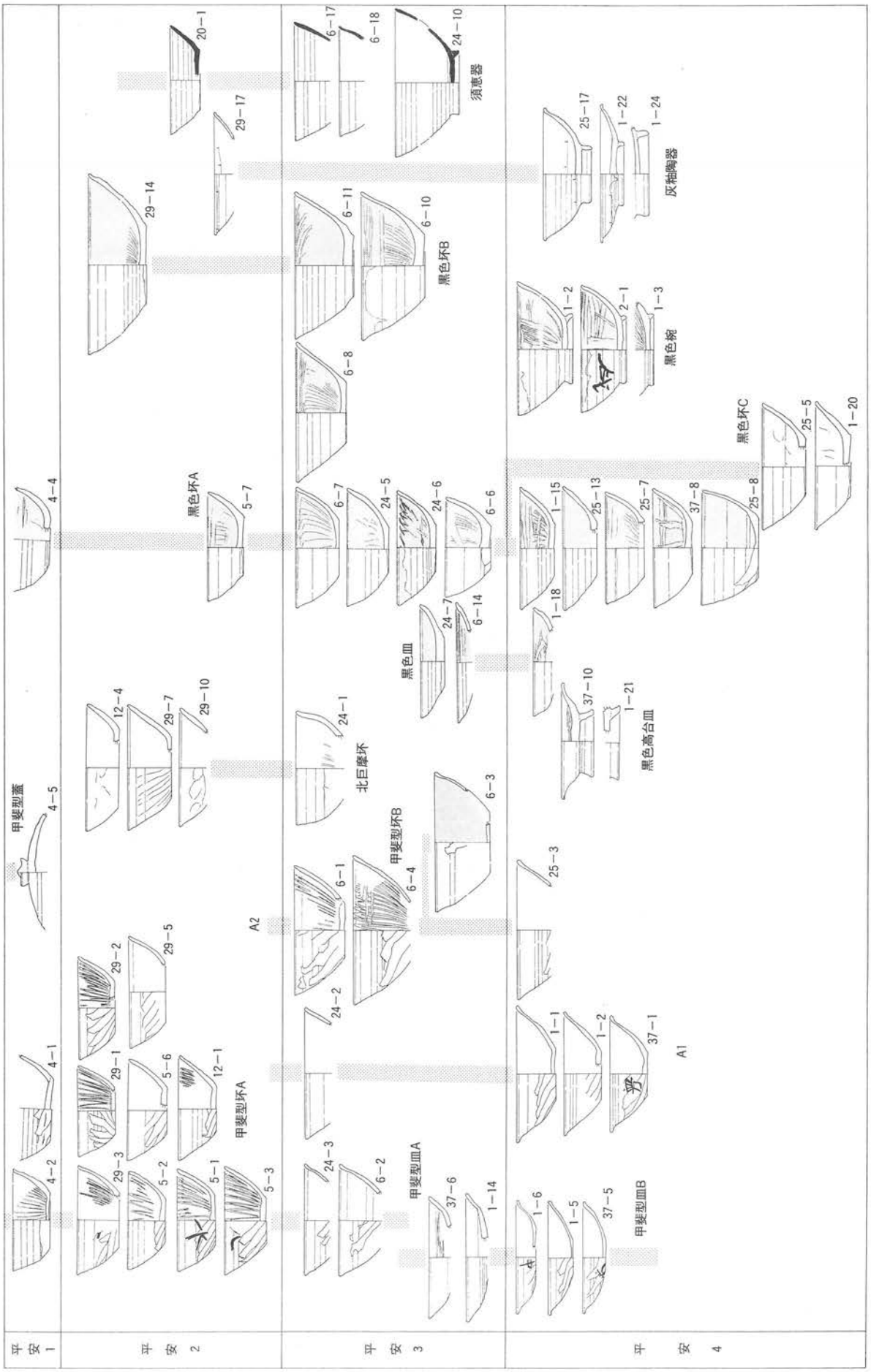
3段階　6・24号住が相当。前段階までの大きさの坏に加えて、口径・器高ともに大きな坏が出現する。前者（A1）は器形的には器壁の立ち上がりに丸みがあり、内面には暗文がない。口縁部はわずかではあるが玉縁状を呈しつつある。後者（A2）には暗文があり、暗文上にヨコナデしたものもある（6住4)。なおこの段階には内面黒色処理を施した坏Bが伴う。黒色土器と違い、内面の黒色処理の前処理としてのミガキは行われず、通常の坏A2を黒色化している。宮ノ前編年のⅧ期、坂本・瀬田編年のⅪ期に相当し、年代は宮ノ前編年により9世紀末～10世紀初頭としたい。

4段階　1・25・37号住が相当。口縁部は隆玉縁化し、底径はさらに小さくなる。口径がやや大きなものと、口径・器高ともにやや大きなものがあり、前者はA1の、また後者はA2の流れであろう。底部は手持ちヘラ削りの他に糸切り痕を残すものがある。宮ノ前編年のⅨ期、坂本・瀬田編年のⅫ期に相当し、年代は10世紀前半から中頃としたい。

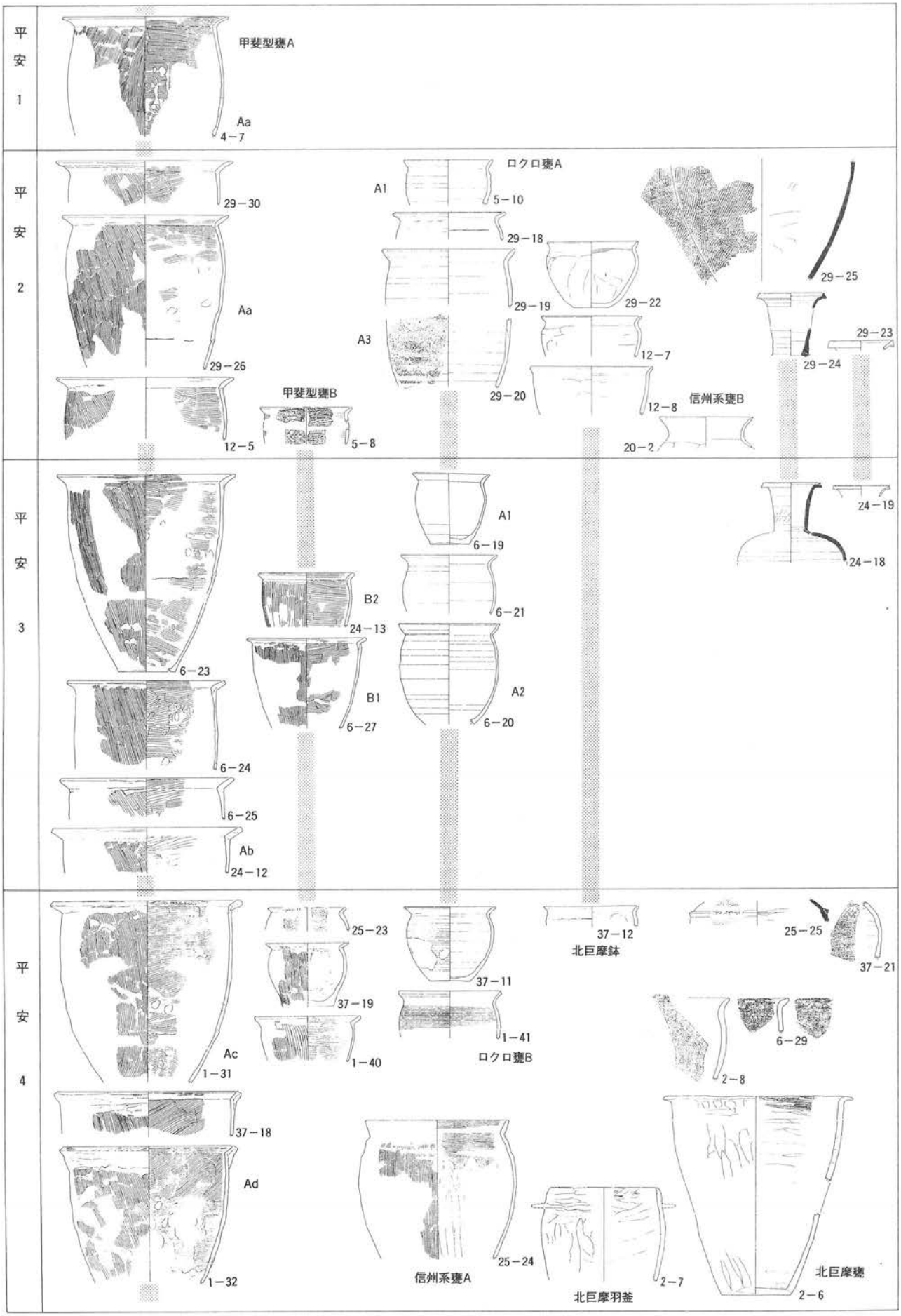
(3)　**各段階の土器・陶器の様相**（第168・169図）

1段階　甲斐型坏A・蓋・甕A、黒色土器坏Aがある。甕Aは口縁部が胴部器壁と同じくらい薄く、やや長く、緩く反っている。胴部内面にはタテナデ痕がわずかにある。黒色土器坏Aは内面のナデは丁寧で、ヘラ痕があまり残らない。器壁は丸く立ち上がっている。

2段階　甲斐型坏A・甕A・B、黒色土器坏A・B、ロクロ甕A、北巨摩タイプ坏・鉢、信州系甕B、灰釉陶器皿・長頸壷、須恵器坏・甕・長頸壷がある。甲斐型甕Aは、1・2段階の中間的な様相をもつ29号住では、4号住と同様に薄く緩やかな反りをもつ口縁部がある（29住30)。また5号住にも存在する（5住14・15)。12号住5などは器壁よりも幾分厚い。いずれにせよ3段階のものに比べると薄い。これは口縁部の製作技法と関わっており、1・2段階では胴部と同程度の厚さの粘土帯を積んで口縁部としているのに対し（Aa技法)、3段階で



第168図　平安時代土器・陶器編年(1)



第169図　平安時代土器・陶器編年(2)

は胴部より倍程度厚めの粘土紐の1～2段積み上げ（Ａb技法）を行っている。甕Ｂは小形のタイプである。黒色土器Ａ・Ｂは、内面に丁寧なヘラミガキを行っており、ヘラミガキ痕はかすかである。器壁の立ち上がりは3段階に比べるとやや急である。ロクロ甕Ａは大（Ａ3）、小（Ａ1）の2種あり、Ａ1では外面の整形として平行の叩き痕を残すものがある（29住20）。これは粘土帯を積み上げていく際に叩きしめをし、最後にロクロナデをしたものであり、Ａ1に普遍的な技法かもしれない。北巨摩タイプ坏はナデを主に整形したもので、12住4・29住10にはヨコの指頭状のナデ痕が、また29住7には斜めのナデ（ヘラナデか）痕がある。ロクロナデを十分に行わないのが特徴であり、内面も手持ちナデで仕上げている。北巨摩タイプ鉢もナデの仕方に特徴があり、小形と中形の2種がありそうである。須恵器坏・信州系甕Ｂはともに20号住出土であるが、共伴する甲斐型坏がないため、ここに置く。須恵器坏は3段階に比べ器壁が厚く直線的であり、古い様相がある。

3段階　甲斐型坏Ａ・Ｂ・皿Ａ・甕Ａ・Ｂ、黒色土器坏Ａ・Ｂ・皿、ロクロ甕Ａ、北巨摩タイプ坏、灰釉陶器長頸壷、須恵器坏・椀・長頸壷がある。甲斐型皿としたものは1・37号住から見つかったＡ1で、37住6には内面に渦巻き状暗文もある。甲斐型甕Ａは口縁が肥厚し、口縁端部にもヨコ刷毛調整を加えている。甲斐型甕Ｂは大（Ｂ1）、小（Ｂ2）があり、甕Ａとほぼ同じ調整技法を施し、口縁部も肥厚している。黒色土器坏Ａは器壁の立ち上がりが次第に直線的になり、内面のミガキは放射状のヘラミガキ痕を残すようになる。また6住6のように束状に間隔を空ける花弁状のミガキもある。さらに口縁部寄りにはヨコミガキ痕を加えている（6住8・6住10など）。これらにも大小がありそうである。ロクロ甕Ａは中（Ａ2）、小（Ａ1）がある。Ａ1には外面のロクロナデ痕がない。両者とも叩き痕はない。北巨摩タイプ坏には24住1の甲斐型模倣坏がある。内面に粗い放射状暗文がかすかに残る。須恵器坏・椀は器壁がやや薄く、丸みをもって立ち上がるものである。

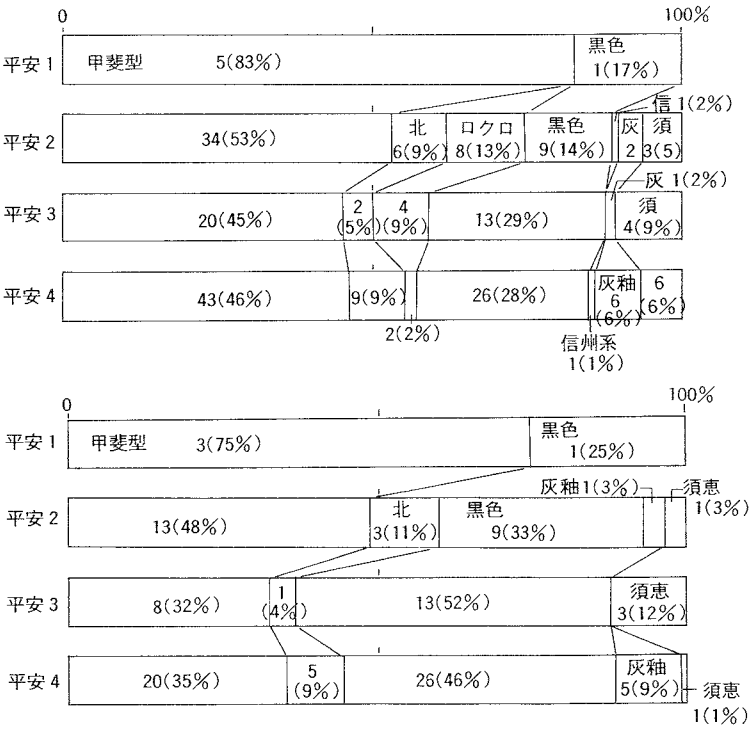
4段階　甲斐型坏Ａ・皿Ｂ・甕Ａ・Ｂ、黒色土器坏Ａ・Ｃ・椀・高台皿、ロクロ甕Ｂ、信州系甕Ｂ、北巨摩タイプ鉢・甕・羽釜、灰釉陶器椀・皿・壷、須恵器凸帯壺がある。甲斐型皿は玉縁の発達した、底部の小さな皿。甲斐型甕Ａは、口縁部の整形技法で2種に分けられる。Ａc技法は口縁部に2重の粘土帯を巻き付け貼付して厚みを増しているもの、Ａd技法も2重の粘土帯を巻く点では同じであるが、巻く位置が胴部にもかかり、外面から見ると口縁部から胴部へ滑らかに移行するものである。こうした甕口縁部の技法の時間差はａからｄの順であろうが、ＡｃとＡｄは一緒に出土する事例が多く、時間差は小さいと思われる。なお保坂康夫氏はこうした口縁部の変化を「薄口縁型」→「厚口縁型」→「末広口縁型」と呼称し、区別している（保坂　1989b）。ここでは接合状況の観察によって保坂氏のものをさらに細分したことになる。甲斐型甕Ｂは小（Ｂ2）がある。口縁部は甕Ａの変化とは呼応せず、3段階とあまり変わらない。黒色土器坏Ａは、口径は3段階とほぼ同じであるが、器高は短くなる。内面のミガキは花弁状を意識したものが多く、幅広のヘラナデを粗く行っている。器壁は直線的で、傾きは3段階よりも大きい。黒色坏Ｂは内面を黒色にしていない類であり、器形はＡと同じである。椀は器形・技法的にはＡと同じであるが、口径・器高ともに大きい。皿としては、1住18が可能性があるが、底部欠損しており不明である。高台皿は口縁部が横に長くのびた器形で、内面のミガキはヨコミガキである。ロクロ甕Ｂは中型があり、ロクロ甕Ａの器形にカキメを加えたタイプである。北巨摩タイプ甕は、外面タテナデ、内面ヨコナデで粗雑に調整したもので、器壁は厚く、口縁部は屈曲している（2住6など）。プロポーションやヘラナデ調整の方向は甲斐型に似ており、甲斐型甕の模倣とみてよいだろう。羽釜は2住7のみで、これもナデによる調整を外面タテ、内面ヨコに行っており、甲斐型の羽釜の模倣、あるいは東信地方からの搬入品であろう。灰釉陶器は刷毛塗りによる施釉を行う光ヶ丘・黒笹窯式期である。

(4)　各段階の土器群のあり方

本遺跡の各段階の土器構成（組成）をみるために、各時期ごとに住居出土の土器を集計して各土器群の割合を出したところ、第170図上のようになった（ここでは図化資料のみを計数し、前後した段階のものが含まれていても集計している）。図を作成するにあたり、大胆かとも思われたが推定製作地ごとにまとめて甲府盆地（甲斐型）、北巨摩（北巨摩タイプ・ロクロ甕）、信州（黒色土器・信州系甕）、灰釉陶器、須恵器の5大別を行った。

まず1段階では集計数が少なく、参考にはならない。2段階では甲府盆地・北巨摩・信州は53%：22%：16%、3段階では45%：14%：28%、4段階では46%：11%：29%であり、甲府盆地産は約5割を維持しているのに対し、信州産は2段階で2割足らずであったのが3・4段階で約3割と増加している。北巨摩産は2割から1割へと減少している。この数値には甕なども含まれているため、次に主要な食器類である坏・皿・椀だけに限定して比較すると（第170図下）、2段階では甲府盆地・北巨摩・信州は48%：11%：33%、3段階では32%：4%：52%、4段階では35%：9%：46%である。このデータからもわかるように、2段階で3割程度であった信州産（黒色土器）が、3段階には5割を越えて甲府盆地産よりも多くなり、4段階でもほぼ同じ割合で推移している。

このように食器だけみると3・4段階に信州産の割合は急増し、大きな存在となっている。つまり甕など、大きな焼き物である調理具類の流入は少ないものの、小形の食器類は非常に多く流入していることが明らかになった。これは本遺跡が甲斐国内でも信州寄りに位置することが最大の要因であろう。同じ旧巨麻郡でも遺跡によって異なると思われ、それぞれのムラの事情（交通事情、自然環境、官衙との結びつきなどの要因）で異なっているはずであり、同じ郡、国内だからといって土器の様相は決して一律ではなく、場合によっては本遺跡例のように盛んな隣国からの食器の流入がある。食器類に限らずあらゆる物資、情報、人間も盛んに交流したはずで、そうした状況が土器の動きから予想できるのである。



第170図　食器類の割合の変遷

なお1軒の住居における土器の保有数は、仮に出土遺物がその住居で保有した土器であり、しかも実測数が出土数の最小個体数を示すと仮定して導くと、3段階では甲斐型坏・皿4個、甕A5個、甕B1個、黒色坏・皿6個、ロクロ甕2個などである。4段階では甲斐型坏・皿5個、甕A5個、甕B1個、黒色土器坏・皿・椀6個、ロクロ甕・信州系・北巨摩タイプあわせて甕類は1個程度で、3・4段階はほとんど同じような数値を示すことがわかる。つまり食器は甲斐型・黒色土器を合わせた10個程度であった、ということになる。黒色土器が汁物を入れた器であるならば、甲斐型土器と黒色土器のセットで1人分の食器が構成されていたと思われ、1軒に4～5人分の食器を保有していたことになる。

第12表　平安時代住居出土の土器数

段階	該当住居	甲斐型							黒色土器						ロクロ甕		信州系甕		北巨摩タイプ				灰釉陶器			須恵器			
		坏A	坏B	皿A	皿B	蓋	甕A	甕B	坏A	坏B	坏C	皿	高台皿	椀	A	B	A	B	坏	鉢	甕	羽釜	椀	皿	壷	坏	椀	甕	壷
1段階	4号住	3	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2段階	5·12·15·20·29号住	13	-	-	-	-	19	2	6	1	2	-		-	8	-	-	1	3	3	-	-	-	1	1	1	-	1	1
3段階	6·24号住	6	1	-	1		10	2	6	4	1	2			4				1		1				1	2	1		1
4段階	1·2·25·37号住	12		1	7		19	4	15	1	4	1	2	3		2	1		5	1	2	1	1	4	1		1	4	1

第6節　配石土坑と中世墓

404号ピットは、土坑形態と六道銭（景祐元宝1、皇宋通宝1、太平通宝1、永楽通宝1、元祐通宝1）・骨片の出土から墓坑と推定された。とりわけ上面に詰め込まれたような状態で検出された配石が特異な印象を与えた。こうした配石を上面にもつ墓坑の類は、本遺跡周辺には散見される。ここでは北巨摩郡下を中心に類例を集成し、404号ピットの意義づけについて考えてみたい。

(1)　**青木北遺跡**（高根町村山北割）15号土坑　79×55㎝、深さ39㎝、北向きの長方形～楕円形の土坑。上面には計48㎝の礫を中心に周囲に礫が置かれ、土坑底面には刃を下に切先を南にして埋納した脇差が一振あった。長さ63㎝、身幅は28㎜。男性の墓坑と思われ、頭位方向は北と推定できる。時期は刀の形状から中世末～江戸初期と推定されている（森　1992）。

(2)　**日影田遺跡**（高根町下黒沢）11号土坑　165×115㎝、深さ86㎝の長方形の掘り方をもつ北向きの土坑である。壁の立ち上がりは直で、上面に径30～50㎝大の11個の礫による配石があり、底面に人骨が遺存した。北頭位西向き仰臥屈位で、両手は折りたたんで胸の位置にある。胸付近に煙管と6枚の六道銭（古寛永通宝2、新寛永通宝3、乾元重宝1）、胡桃、火打ち石が金具付の煙草袋に入れた状態で副葬されていた。近世前期後半代の壮年期

前半の女性人骨とされる（沢登　1995）。

(3) **東姥神B遺跡**（大泉村西井出）ＳＫ63　100×65㎝、深さ10㎝の北向き、長方形の土坑。径40㎝大の礫４個の直下から北頭位西向き屈葬人骨１体が出土した。両手は折りたたんで胸の位置にあり、胸付近から六道銭３枚（皇宋通宝１、熙寧元宝１、永楽通宝１）が重なって出土した。時期は永楽通宝から1408年以降とされる。なお周囲には地下式坑や六道銭を伴う中世墓が存在し、屋敷遺構もある（櫛原　1985）。

(4) **持井遺跡**（高根町村山北割）11号土坑　120×105㎝、深さ30㎝の北向き、長方形の土坑。底面には20～50㎝大の礫が敷き詰められ、表面は赤変していた。覆土中には焼土、炭化材、灰、骨片が出土し、礫上には中央付近に六道銭（永楽通宝１、宣徳通宝１、紹聖元宝１、聖宋元宝１、嘉祐元宝１、治平元宝１）がまとまって出土している（雨宮　1992）。

(5) **上野遺跡**（三珠町上野）14号中世墓　160×110㎝、深さ60～70㎝、北向きの長方形土坑である。上面に最大50㎝ほどの比較的扁平な角礫が敷き詰められ、底面から人骨と六道銭（天禧通宝１、元豊通宝１、熙寧元宝１、元祐通宝１、不明銭１）が出土した。埋葬形態は不明であるが、北頭位屈葬ではないかと思われる。なお周囲には中世墓が14基集中し、14号だけはやや離れて存在し、一番大きな掘り方である。また14号を含めた15基中、８基で頭位方向が確認でき、うち６基が北頭位であった。さらに３基は左半身を下にした東向きの側臥である可能性があり、ほかのものも同じ埋葬姿勢であった可能性があるという。中世墓群全体の時期として15世紀中葉～後半代を想定している（清水　1989）。

以上のように、配石をもつ土坑には次のパターンがある。

Ａ類：社口・青木北・日影田・上野遺跡例。深めの長方形土坑下部に屈葬で土葬し、上面に配石を行う。

Ｂ類：東姥神Ｂ遺跡例。長方形の浅い掘り方内に屈葬で土葬し、直上に配石を行う。

Ｃ類：持井遺跡例。土坑中に平らに石を詰め、その上で直接火葬したか、火葬骨を埋葬したもの。

Ｃ類はかなり特殊事例のようにみられるので、ここではＡ類を中心に配石をもつ墓坑（配石墓坑）について整理したい。まず副葬品としては、青木北遺跡例以外は３枚～６枚の六道銭をもつ。そのほか青木北遺跡では脇差を、日影田遺跡では煙草袋が見られた。六道銭や煙管をもつ点は一般的な土坑墓にみられることだが、脇差は珍しい。ただし、この事例はわずか１例に過ぎず、この類に普遍的ではない。年代の上限は六道銭の時期から東姥神Ｂ遺跡では永楽通宝（明代,初鋳年は1408年,国内でも15～17世紀前半に模鋳銭が作られている）を伴うことから15世紀以降としているが、Ａ類に限定した場合定かではなく、16世紀以前とするにとどめたい。下限は日影田遺跡例の新寛永（文銭,鋳造年代は1668～1683年）から17世紀後半と考えられる。したがって16～17世紀代頃ということになる。埋葬形態はいずれも北頭位側臥屈葬あるいは仰臥屈葬で、掘り方の形状から木棺に入れられていた可能性がある。通常西向きとするが、上野遺跡例は周辺の中世墓の多くが東向きということで、14号墓も東向きであった可能性が指摘されており、地域・ムラによって頭位方向に地域差が存在するのかもしれない。被葬者は成人女性（日影田遺跡）、成人男性か（青木北遺跡）があり、男女を問わずいずれも成人である。土坑の掘り方の大きさから推定しても、いずれも成人墓であることが予想できる。立地（埋葬場所）は中世墓の墓域内例（上野遺跡・東姥神Ｂ遺跡）、周囲に関連遺構があまり見られない例（社口遺跡・日影田遺跡など）があり、社口遺跡例は後者の典型である。また同類の墓坑を近接して見いだすことができず、墓域内にあっても配石をもつ墓は１基のみである。

このように管見に触れた例をあげ、Ａ類を中心に若干の検討を加えたが、これらのほかに配石を持たない墓坑の例は圧倒的に多く、集中して発見された例としては須玉町塩川遺跡が著名である（森原　1992）。104基以上の土葬墓があり、17世紀以前・17世紀代は３基、18世紀代は55基、18世紀末～19世紀代は22基が確認されているが、配石をもつ例は数基であるらしい。各時期の埋葬形態の変遷は寝葬から座葬へという傾向があり、17世紀代まではいずれも北頭位屈葬となっており、上部配石を除けば配石をもつ墓坑との埋葬形態は同じである。ではどういった要因で配石をもつ墓坑がつくられたのだろうか。配石墓坑の場合、配石は獣による掘り返しを防ぐという意味で棺の保護といった性格が強いと思われる。同時に埋葬地の表示的な意味も考えられる。礫による封鎖という状況に関連する遺構として、地下式坑の竪坑に礫を詰めて封鎖する事例がある。地下式坑の場合は人骨検出例が極めて少なく、墓坑と同一視することはできないが、もがりの場とする説が有力であるなど、埋葬関連施設であろうといわれている。いずれにせよ中世から近世前半の埋葬形態として注目しておく必要があろう。

第7節　調査の反省と今後の課題

（縄文時代草創期～早期）表裏縄文土器は近年多くの研究者が注目する土器群であるだけに、調査時点でより厳密な層位の観察をすべきであって、果たして本当に斜面包含層が再堆積であるのか、斜面での居住痕跡はなかったのか、徹底的な調査が必要であった。とくに北台地上での居住痕跡の調査は不十分であり、ピットなどからの破片の出土状況を見れば、当然遺構が存在したはずと考えられる。八ヶ岳南麓では縄文中期でもローム色の土壌を覆土とすることが多々あり、早期包含層の認識が十分ではなかったといえる。調査の反省は過ぎたるは及ばざるものであるが、調査区脇にまだ良好な包含層が残っているとみられるので、今後機会があれば再調査するのも一案であろう。第5章では表裏縄文土器を中心とした土器群の編年に重点を置き、早期撚糸文系土器様式との対比で段階設定案を提示した。この検証が今後の大きな課題であり、他遺跡の表裏縄文土器にも同様な変遷観を与えることができるのか比較検討したい。表裏縄文土器に撚糸文土器的な変遷の方向性が見られるのは関東西部の隣接地域であるからか、そうした状況を中部高地と関東地方の中間地帯としての地域性と理解すべきなのか、あるいは単なる見当違いなのか、各方面から批判していただければ幸いである。また今回石器に関する検討は全く不十分なものとなってしまった。草創期的な石器が少なく、本遺跡の表裏縄文土器の多くが早期段階の所産と考える傍証資料となるはずのものである。とくに石鏃や掻器の形態には特徴的なものがあり、それらからの時期検討のアプローチも可能であろう。石器組成も土器同様に比較検討すべきで、黒曜石のチップ類中にも石器と認定できるものが多数含まれていると思われることから、石器専門の方に再検討していただきたい。

（縄文時代中期）土器の段階設定と集石炉の検討のみとなってしまったが、曽利Ⅰ式の住居形態・炉形態の検討はぜひ行いたい。柱穴配置が特徴的で、炉裏に1本を置き左右対称とする7本柱穴配置が多いように見られたが、どういう系譜をもつのか、そして中期後半の住居形態にどうつながっていくのか、炉形態も関連させて検討したい。曽利Ⅰ式を中心とした土器変遷も確定したものではなく、とくに曽利Ⅱ・Ⅲ式期の縦位条線文土器のあり方が不鮮明である。中期後半の土器群も同じであり、八ヶ岳南麓を中心とした周辺遺跡のあり方をみながら、今回の段階設定に対する是非を検証していきたい。石鏃形態には曽利Ⅰ式期の特徴かと思われるものがあるなど、石器についても早期同様に組成や形態面から分析する必要があろう。集石炉については、予備的な実験を行うにとどまったが、発泡礫の形成に関しては温度の推定のほか、発泡部の顕微鏡観察などを通して原因追究を行いたい。

（縄文時代後期）敷石住居の微視的分析は16号住のみ詳細に報告する形となったが、19・21号住でも同様な視点から観察を行っているので、何らかの機会に報告したい。住居形態については、近年資料が増加しつつある茅野市方面との比較を通し、八ヶ岳南～西南麓での敷石住居の消長をまず明らかにすべきである。とくに茅野市内では敷石のない柱穴列も多数見つかっており、独特の柱穴配置が明らかになっている。また須玉町上ノ原遺跡では堀之内式期を中心に100軒ほどの住居址が検出されており、茅野市方面との類似性がうかがえる。そうした資料との比較が必要であろう。八ヶ岳南麓～甲府盆地では敷石住居の発生が中期末の曽利Ⅴ式期ではなく、加曽利EⅣ式の土器が出現をみてからであり、敷石住居の出現が周辺地域に較べ1段階遅れる傾向がある。また住居形態も典型的な柄鏡形が少なく、短く突出するか、あるいは柄のない住居が多い。第5章では鉄平石を使用した敷石住居のあり方について微視的な観察から地域性を見出そうとしたが、住居形態からも地域性を指摘できそうである。また集落形態の分析も不十分となったが、等間隔に同じ等高線上に並ぶかのような配置は上ノ原遺跡でも認められ、堀之内式期の特徴ともいえる。また斜面に好んで立地する傾向もある。敷石住居や配石遺構の構築は、定住性の高まりとも関連するはずであり、集落の立地や生業形態の分析から縄文後期の集落論を考えていきたい。

（平安時代）土器編年のみを考察するにとどまったが、黒色土器の由来に関しては佐久方面ばかりではなく諏訪地方の土器群も十分考慮しなければならない。たまたま社口遺跡が佐久地方に近いということで土器を比較し、類似性を確認したが、黒色土器が社口遺跡あたりで見られる時期に佐久地方には甲斐型土器はほとんどないということであった。逆に諏訪地方（長野県富士見町等）では黒色土器の時期に玉縁化した甲斐型土器は珍しいものではないので、どの地域の黒色土器が来ているのか、あるいは南麓地域でも生産している可能性はないか検討したい。また在地タイプと考えたナデを多用する土器群や甲斐型模倣坏に関しても、分布域の確認、産地の検討は必要であろう。今回は胎土分析を行い産地を探ったが、生産地の特定にまでは至っていない。その他、炭化種実の水洗選別では竈内からの出土は多くはなかったものの、1号住床面からはアワを主とした分布を確認するなど良好な検討材料が得られた。上ノ原遺跡（須玉町）や一宮町内遺跡群でも興味深い結果が得られており、今後も資料の蓄積を継続したい。ただし、作業効率の問題があり、より効率的な水洗方法の開発が求められよう。

引用参考文献

上野晴朗　1972『原之京鍛冶遺構報告』　塩山市教育委員会
唐木孝雄　1974「甲六遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―諏訪郡富士見町その1―』　長野県教育委員会ほか
小薬一夫　1979「縄文時代における焼石遺構」『小田原考古学研究会会報』8　小田原考古学研究会
加藤晋平・鶴丸俊明　1980『図録　石器の基礎知識Ⅰ　先土器（上）』　柏書房
小林秀夫ほか　1981「金山沢北遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市・原村その3－』　長野県教育委員会ほか
雨宮正樹　1983「高根町湯沢遺跡」『山梨考古』10　山梨県考古学協会
坂本美夫・末木健・堀内真　1983「甲斐地域」『神奈川考古（シンポジウム　奈良・平安時代土器の諸問題）』14　神奈川考古同人会
雨宮正樹　1984『東久保遺跡』　高根町教育委員会
雨宮正樹　1985『旭東久保遺跡』　高根町教育委員会
櫛原功一　1985『東姥神B遺跡』　大泉村教育委員会
山梨県教育委員会　1986『山梨県の中世城館跡』
雨宮正樹　1986『西ノ原遺跡　石堂遺跡』　高根町教育委員会ほか
谷口康浩　1986「縄文時代「集石遺構」に関する試論―関東・中部地方における早・前・中期の事例を中心として―」『東京考古』4　東京考古談訪会
雨宮正樹　1987a『町内遺跡分布調査報告書』　高根町教育委員会
雨宮正樹　1987b『石堂B遺跡』　高根町教育委員会ほか
雨宮正樹　1987c『西原遺跡　当町遺跡』　高根町教育委員会ほか
市河三次ほか　1987『山梨県高根町野添遺跡発掘調査報告書』　八ツ岳南麓遺跡学術調査団
市沢英利　1987「大洞遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』　長野県埋蔵文化財センターほか
阿部芳郎　1988「表裏縄文系土器群の再検討－富士吉田市池之元遺跡出土土器群の位置づけをめぐって－」『富士吉田市史研究』3　富士吉田市史編さん室
上田典男　1988「集石炉をめぐって」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2－塩尻市内その1－』　竜神平遺跡　㈶長野県埋蔵文化財センターほか
雨宮正樹・山下孝司・櫛原功一　1988「山梨県高根町青木遺跡・調査概報」『山梨県考古学協会誌』2　山梨県考古学協会
保坂康夫　1988「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐって」『山梨県考古学協会誌』2　山梨県考古学協会
清水　博　1989「中世墓について」『上野遺跡』　三珠町教育委員会
保坂康夫　1989a『丘の公園第2遺跡』　山梨県教育委員会ほか
保坂康夫　1989b「古代の甲斐型甕をめぐって」『甲斐の成立と地方的展開』　角川書店
新津　健　1990『大輪寺東遺跡』　山梨県教育委員会
保坂康夫　1990『丘の公園第5遺跡』　山梨県教育委員会ほか
浅川二六　1990「気象」『高根町誌』　高根町
八巻与志夫　1990「城址・館跡」『高根町誌』　高根町
野牛嶋豊二　1990「水」『高根町誌』　高根町
高根町郷土研究会編　1990『高根町地名誌』
原田昌幸　1991『撚糸文系土器様式』　ニュー・サイエンス社
山形真理子　1991「多縄紋土器編年に関する一考察－「室谷下層式直後,井草式以前」を中心として－」『考古学研究室研究紀要』10（下）　東京大学文学部考古学研究室
赤城高志　1992「縄文時代柄鏡形敷石住居の微視的分析」『人間・遺跡・遺物－わが考古学論集　2－』　発掘者談話会
森　和敏　1992『青木北遺跡　梅の木遺跡』　山梨県教育委員会ほか
雨宮正樹　1992『持井遺跡』　高根町教育委員会ほか
森原明廣　1992『塩川遺跡』　山梨県教育委員会ほか
櫛原功一　1992「宮ノ前遺跡における奈良・平安時代の土器・陶器」『宮ノ前遺跡 本文編』　宮ノ前遺跡発掘調査団ほか

瀬田正明　1992「甲斐型土器の年代」『甲斐型土器－その編年と年代－』　山梨県考古学協会
櫛原功一　1993「曽利Ⅰ式土器の再検討－山梨県大泉村姥神遺跡の資料をもとに－」『縄文時代』4
新津健・三田村美彦　1993『川又坂上遺跡』　山梨県教育委員会ほか
戸田哲也　1994「表裏縄文土器研究の現状と課題」『縄文時代』5　縄文時代文化研究会
佐野　隆　1994『神取』　明野村教育委員会
秋田かな子　1994「加曽利B1式注口土器の成立（予察）－王子ノ台遺跡出土の注口土器から－」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4　東海大学校地内遺跡調査団ほか
黒尾和久・小林謙一・中山真治　1996「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』　縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会
山本茂樹・沢登正仁・野代幸和ほか　1995『日影田遺跡』　山梨県教育委員会ほか
沢登正仁　1995「墓坑（第11号土坑）」『日影田遺跡』　山梨県教育委員会ほか
広瀬昭弘　1995「基調報告3　表裏縄文土器研究の現状と課題」『長野県考古学会誌』77・78　長野県考古学会
新谷和孝　1995「縄文時代草創期の土器に関する考察」『お宮の森裏遺跡』　上松町教育委員会ほか
雨宮正樹　1995『社口遺跡』　高根町教育委員会ほか
原田昌幸　1995「撚糸文系土器様式「西への視点」－高山市江名子糖塚遺跡の“撚糸文土器”をめぐって－」『飛騨と考古学』　飛騨考古学会
永井久美男編　1996『日本出土銭総覧』1996年度版　兵庫埋蔵銭調査会
萩原孝一・田口明子　1996「古堰遺跡」『年報』12　山梨県埋蔵文化財センター
櫛原功一　1996「上ノ原遺跡－縄文後期の大集落－」『甲斐路』86　山梨郷土研究会
山形真理子　1996「曽利式土器の研究（上）」『考古学研究室研究紀要』14　東京大学文学部考古学研究室

第13表　住居址一覧表（－）は現状値，〔－〕は復元値

住居番号	時期	形態	主軸方向	主軸長m	交軸長m	面積m²	竈・炉	柱穴	備考
1	平	隅丸方形	N-92°-E	5.4	4.6	21.6	石組み，東竈	なし	
2	平	隅丸方形	N-99°-E	3.2	3.3	8.7	石組み，東竈	なし	
3	縄中末	円形	N-3°-E	[3.9]	[4.2]	－	炉体土器（本来石囲いか）	5本？	柱穴は不確実
4	平	隅丸方形	E-23°-W	(5.0)	(4.7)	(14.3)	不明	なし	
5	平	隅丸方形	E-15°-N	5.1	4.0	17.0	石組み，東竈	なし	
6	平	隅丸方形	N-95°-E	4.3	4.4	16.4	石組み，東竈	なし	
7	縄中　（曽利Ⅱ？）	隅丸方形	N-15°-E	[3.5]	(3.55)	(10.2)	方形石囲い炉	4本	
8	縄中　（曽利Ⅱ）	円形か	N-3°-W	[5.7]	[5.4]	(12.5)	方形炉（石は抜かれている）	推定5本	年代測定4,350±110BP
9	縄中　（曽利Ⅲ）	円形	N-11°-E	5.0	[5.5]	(20.1)	方形炉（石は抜かれている）	5本	
10	縄中　（曽利Ⅱ？）	円形	N-49°-W	－	－	－	円形石囲い炉か	4本か	
12	平	隅丸方形	E-16°-W	3.7	(1.6)	(4.2)	石組みか，東竈	なし	
13	縄中　（曽利Ⅳ）	円形	N-18°-E	4.5	[4.6]	(13.3)	方形石囲い炉	4本か	
14	縄中　（曽利Ⅳ）	円形か	N-5°-E	4.5	4.6	(12.1)	方形石囲い炉	4本	
15	平	隅丸方形	E-25°-N	(0.8)	1.6	(3.9)	東竈	なし	
16	縄後　（堀之内1）	円形	N-56°-E	[4.4]	4.0	8.5	方形石囲い埋甕炉		
17	縄後　（堀之内1）	円形	N-65°-E	[3.5]	4.5	(6.6)	方形石囲い埋甕炉	7～9本か	
18	縄後　（堀之内1）	円形	N-81°-E	[4.0]	[4.5]	(6.2)	埋甕炉（本来石囲い炉か）	7本程度か	
19	縄後　（堀之内2）	楕円形	N-72°-E	3.9	3.7	8.7	方形石囲い埋甕炉	9本	年代測定3,740±110BP
20	平	隅丸方形	E-0°-N	(3.3)	4.0	(11.4)	東・北竈（石組み）	なし	
21	縄後　（堀之内2）	円形	N-58°-E	－	4.20	－	石囲い埋甕炉	9本程度	
23	平？	隅丸方形	E-10°-N	東西2.7	南北3.3	7.0	竈なし	なし	
24	平	隅丸方形	E-8°-W	4.2	4.5	15.3	東竈	なし	
25	平	隅丸方形	E-1°-W	3.1	3.0	6.9	石組み，東竈	なし	
26	縄後　（堀之内2か）	不整円形	N-87°-E	2.0	2.54	7.6	炉体土器（本来石囲いか）	6本以上	柱穴は不確実
27	縄中　（曽利Ⅰ）	円形か	N-0°-E	[4.2]	[4.8]	(10.9)	石囲い埋甕炉	6本か	
28	縄中　（曽利Ⅰ）	円形	N-5°-E	[4.1]	[4.8]	13.7	石囲い炉	6本か	
29	平	隅丸方形	E-9°-N	4.8	4.2	18.3	石組み，東竈	なし	
30	縄中	円形	N-2°-E	4.9	[4.7]	(11.7)	石囲い炉	7本か	
31	縄中　（曽利Ⅰ）	楕円形	N-12°-E	5.8	6.4	28.5	石囲い炉	7本	
32	縄中　（曽利Ⅰ）	楕円形か	N-28°-W	6.0	[5.4]	(14.7)	長方形石囲い炉	7本か	
33	縄中　（曽利Ⅰ）	円形	N-4°-E	5.5	5.2	18.8	石囲い炉	7本	
34	縄中　（狢沢）	円形	N-2°-E	5.54	5.10	20.5	埋甕炉	5本	
35	縄後　（堀之内2）	円形	E-23°-S	－	4.4	(10.2)	埋甕炉（本来方形石囲いか）	4本以上	
36	縄中？	不明	－	－	－	－	－	不明	住居でない可能性あり
37	平	隅丸方形	E-8°-N	4.7	4.3	17.9	東竈	なし	

第14表１　ピット一覧表

番号	位置	時期	形態	長軸長m	短軸長m	深さm	出土遺物	備考
1	B73	近現代	不整方形	1.40	1.30	0.38	曽利Ⅲ・Ⅳ11片	
4	BC72･73	曽利Ⅱ	長楕円形	1.30	1.20	0.36	曽利Ⅱ？18片，打斧1	土坑
5	C72	近現代	長楕円形	1.56	1.20	0.38	土師器,縄文土器片,凹石1	
8	C72	？	楕円形	0.90	0.70	0.60	中期土器１片,早期１片	
10	B69	曽利	楕円形	1.00	0.84	0.46	曽利Ⅱ～Ⅳ13片，井戸尻１片,凹石1	土坑
11	C72	？	円形	0.27	0.25	0.07	平安甕片1	
12	C72	？	楕円形	0.65	0.52	0.35	中期1片	
13	B71	？	楕円形	0.50	0.30	0.14	曽利Ⅲ1片	
14	B71	近現代	不整楕円形	1.60	1.30	0.38	曽利3片	
17	B71	宮安２期	円形	0.67	0.65	0.28	平安坏・皿4片	
18	B71	？	長楕円形	0.30	0.18	0.08	曽利1片	
19	B71･72	近現代	不整長方形	1.60	1.30	0.19	曽利など14片	
20	B71	曽利？	円形	0.57	0.55	0.23	曽利・後期など7片	
21	C71	曽利Ⅱ？	楕円形	1.00	0.89	0.43	猪沢・曽利Ⅱなど5片	土坑
22	C71	曽利Ⅱ	楕円形	1.16	1.00	0.25	曽利Ⅱ主体，平安1片，早期1片など15片,ミニチュア1，石鏃1	土坑
24	C71	？	楕円形	0.55	0.42	0.14	曽利Ⅱ1片	25号ピットを切る
25	C70･71	曽利Ⅱ	長楕円形	1.20	0.95	0.45	曽利Ⅱ7片,凹石1	土坑
28	C71	？	長楕円形	0.89	0.67	0.13	加E1片など2片	
30	A70	近現代	方形	1.20	1.30	0.19	曽利Ⅱ・Ⅲ5片	撹乱
31	A69	近現代	円形	0.60	0.55	0.03	縄文1片	撹乱
32	AB69	近現代	円形	0.53	0.52	0.12	曽利Ⅳ主14片，早期1片	撹乱
33	B69･70	曽利Ⅲ・Ⅳ	長楕円形	1.74	1.1	0.50	曽利Ⅲ・Ⅳなど47片	土坑
34	B69･70	近現代	楕円形	1.1	1.05	0.26	曽利？9片	
41	BC69	曽利Ⅲ	不整楕円形	1.98	1.78	0.24	曽利Ⅱ～Ⅴなど53片,土鈴片1,凹石1，石鏃1	土坑
42	BC68･69	？	長楕円形	1.30	0.90	0.14	早期2片	土坑
43	C68	？	楕円形	1.08	0.90	0.39	曽利Ⅱ1片	
45	B71	近現代	不整円形	0.66	0.64	0.23	曽利6片，平安1片	
49	B72	近現代	長楕円形	1.59	1.25	0.35	縄文5片	
52	B71	？	楕円形	0.90	(0.52)	0.10	曽利など7片	
53	B71	近現代	楕円形	1.18	0.84	0.29	曽利Ⅱなど3片	
54	C69	？	楕円形	1.10	0.90	0.11	中期3片	
55	C69	曽利Ⅱ	円形	1.15	1.06	0.52	曽利Ⅱ主15片，早期か1	土坑
56	C69	？	不整形	0.62	0.56	0.14	早期？2片	
61	C66･67	曽利Ⅴ？	楕円形	2.56	2.06	0.15	曽利Ⅱ～Ⅴ46片，早期4片	土坑
63	AB65･66	平安？	長楕円形	(3.64)	2.30	0.54	平安坏・甕など13片，縄文51片，凹石１，打斧片1，掻器2	溝状，調査区外へのびる
68	AB67	近現代	円形	1.13	1.14	0.18	中期６片，早期１片，土偶頭部１	
70	AB66	近現代	不整楕円形	1.58	1.30	0.21	中期？2片,凹石１	
73	C67	曽利Ⅳ？	長楕円形	1.18	0.75	0.26	曽利Ⅲ1片,曽利Ⅳ？1片	
76	BC66･67	曽利	楕円形	(0.60)	0.45	0.12	中期8片，早期1片	シミ状，81号ピットと重複
78	C67	曽利Ⅱ？	円形	(0.50)	0.64	0.11	曽利Ⅱ？2片	61号ピットと重複
79	C66･67	？	楕円形	1.04	0.92	0.14	早期1片，凹石1片	
81	B66	曽利？	長楕円形	1.60	1.06	0.08	曽利など5片,フレイク１	
82	C66	近現代	円形	0.68	0.64	0.14	磨石 1片	
83	C71	曽利	長楕円形	1.00	0.78	0.64	曽利9片	土坑
84	BC66	？	長方形	1.56	0.84	0.21	早期？1片	
86	C66	曽利Ⅱ	長楕円形	0.81	0.55	0.34	曽利Ⅱ3片,石鏃1	土坑
95	C71	曽利Ⅲ	楕円形	1.20	1.10	0.58	曽利Ⅲなど25片,打斧片1,フレイク1	土坑
96	C67	？	楕円形	1.30	1.02	0.15	早期，曽利，平安など6片	
118	B66	近現代	長楕円形	0.90	1.00	0.11	早期2片,近世1片	110号ピットと重複
120	B65	？	円形	0.68	0.64	0.20	平安1片,早期1片	
137	B66	？	楕円形	1.50	1.40	0.16	早期5片,中期7片,凹石1	
143	C64	加B	楕円形	1.20	0.86	0.28	加曽利BⅡ？1片	
144	B64	近現代	不整長方形	2.25	1.80	0.77	土器2片	撹乱
145	C65	近現代	長楕円形	1.51	1.00	0.34	石鏃1	
147	A65	平安２期	円形	0.95	0.94	0.32	平安坏・甕6片，縄文2片	
149	C62	？	楕円形	0.86	0.76	0.44	平安坏1片	165号ピットと重複，土坑
151	C62	？	円形	0.53	0.50	0.54	後期1片	掘り過ぎている
154	B62	？	楕円形	1.06	0.83	0.35	曽利など7片	土坑
156	B65	？	楕円形	0.78	0.54	0.22	曽利Ⅳ1片	
159	B62	？	楕円形	0.56	0.43	0.38	凹石１	掘り過ぎ
167	B62	近現代	楕円形	1.15	0.50	0.52	早期？7片,後期１片，掻器1，縦長剥片1	獣骨出土
169	C62	？	楕円形	0.70	0.56	0.55	早期1片，中期4片	土坑
184	C58･59	？	楕円形	0.98	0.80	0.18	曽利Ⅲ・後期など4片	
186	C57	曽利？	楕円形	0.79	0.60	0.26	曽利・中期末など6片	シミ状
187	B57	？	楕円形	0.62	0.55	0.06	平安甕片1,中期2片	シミ状
195	C56	？	円形	0.42	0.41	0.16	中期末3片	シミ状
198	C56	？	円形	0.51	0.49	0.28	後期1片	シミ状
203	D56	後期？	楕円形	0.43	0.39	0.20	後期2片	シミ状
206	C56	後期？	楕円形	0.65	0.51	0.33	土器2片,石錘１	
207	C56	？	楕円形	0.51	0.40	0.13	土器片1	シミ状
215	D56	？	楕円形	0.48	0.40	0.13	土器1片	シミ状
216	D56	？	楕円形	0.91	0.61	0.13	平安坏1片	シミ状
218	C55	？	楕円形	0.70	0.55	0.12	土器1片	シミ状
221	E55	？	楕円形	0.45	0.35	0.07	土器2片	シミ状
222	E55	？	楕円形	0.52	0.41	0.18	後期1片	シミ状
223	D55	？	楕円形	1.02	0.75	0.11	早期？2片	シミ状
225	D55	平安？	楕円形	0.69	0.60	0.28	平安6片	シミ状
226	E55	？	楕円形	0.45	0.37	0.21	土器1片	シミ状
227	E55	？	楕円形	0.62	0.52	0.19	後期？2片	シミ状
228	D55	？	楕円形	0.52	0.40	0.34	曽利Ⅲ・Ⅳ2片	シミ状
232	D55	？	楕円形	0.55	0.45	0.10	加EⅣ・後期？1片	シミ状
233	D55	？	楕円形	0.65	0.45	0.08	平安1	シミ状
234	D55	堀2？	円形	0.18	0.18	0.06	堀之内2-1片	シミ状
235	D55	？	楕円形	0.59	0.45	0.06	土器1片	シミ状
236	D55	？	楕円形	0.51	0.43	0.17	土器2片	シミ状
238	D55	？	円形	0.59	0.57	0.27	縄文4片，平安3片	シミ状
240	D55	？	楕円形	0.50	0.44	0.13	土器1片	シミ状
241	E55	？	楕円形	0.57	0.45	0.19	縄文1片	シミ状

第14表2　ピット一覧表

番号	位置	時期	形態	長軸長m	短軸長m	深さm	出土遺物	備考
244	D57	平安2期？	楕円形	0.33	0.25	0.12	平安1片	シミ状
246	E57	曽利Ⅱ？	楕円形	0.75	0.69		曽利Ⅱ4片	シミ状
248	D56	？	楕円形	0.78	0.62	0.18	縄文2片	249号ピットと重複
249	E56	？	楕円形	(0.28)	0.28	0.10	平安1片	248号ピットと重複
250	C58	堀1	楕円形	0.72	0.64	0.13	堀之内2埋甕2，後期4片，平安3片	埋設土器
251	B62	曽利Ⅲ	楕円形	0.39	0.34	0.08	曽利Ⅲ2片	
253	E54	？	楕円形	0.55	0.49	0.17	中期末・後期など4片	シミ状
262	E54	？	楕円形	0.43	0.35	0.07	土器1片	シミ状
263	E52	堀1	楕円形	0.73	0.54	0.19	後期炉体土器？2，ほか多数，石鏃1	埋設土器
267	E52	？	楕円形	1.28	0.62	0.17	後期1片	シミ状
268	E52	？	楕円形	0.71	0.58	0.09	土器2片	シミ状
277	E52	？	楕円形	0.40	0.30	0.07	須恵器坏1片	シミ状
293	G38	平安？	楕円形	1.36	0.72	0.09	縄文1片，平安2片	
294	G37	堀１？	楕円形	0.70	0.54	0.20	堀之内１など2片	
295	G H36	後期	楕円形	0.40	0.34	0.15	後期7片	
296	I 36	堀1	円形	0.77	0.74	0.53	堀之内1など54片	
298	H35	後期	楕円形	0.54	0.34	0.20	後期3片	
299	I 36	後期	楕円形	0.38	0.25	0.17	後期13片	
301	I 35	後期	楕円形	0.65	0.55	0.29	後期3片	
303	I 35	後期	楕円形	0.55	0.50	0.11	後期14片	
304	H35	後期	楕円形	0.38	0.30	0.08	後期4片	
305	G38	後期	円形	0.60	0.59	0.16	後期7片	
306	G H38	後期	円形	1.34	(1.30)	0.15	後期8片	305･307号ピットと重複
307	G H38	後期	楕円形	2.75	1.63	0.14	後期40片，平安6片	
308	H38	？	楕円形	1.64	1.07	0.17	後期21片，平安3片，須恵器1片	調査区外へのびる
309	H35	堀1	円形	0.82	0.79	0.50	中期末～後期初など55片	
310	I 35	後期	楕円形	0.63	0.54	0.14	後期20片	
312	H35･36	後期？	楕円形	0.43	0.33	0.10	後期？8片	
313	I 36	後期？	楕円形	0.35	0.24	0.20	後期？8片	
314	I 35	後期	楕円形	0.73	0.60	0.18	堀之内19片	
315	H34	？	楕円形	0.70	0.61	0.07	堀之内１片	
317	J 33	堀	方形	0.86	0.82	0.65	堀之内主11片	
320	I 32	堀	円形	0.56	0.54	0.43	堀之内など17片	
325	J 32	？	楕円形	0.60	0.55	0.28	猿沢１片，後期15片	
326	J 32	堀2	楕円形	0.56	0.40	0.38	堀2ほか14片	
328	J 32	堀2	楕円形	1.10	(0.40)	0.40	堀之内2など31片以上	調査区外へのびる
330	J 32	後期	円形	0.55	0.52	0.18	後期5片	
332	J 33	堀2	楕円形	0.87	(0.85)	0.16	堀之内2など10片	
333	I 32	後期	円形	0.41	0.40	0.12	後期5片	
334	J 32	後期？	楕円形	0.50	0.40	0.14	後期4片，平安1片	
335	J 32	後期	楕円形	0.74	0.66	0.16	後期12片	
336	J 31	後期	楕円形	0.77	0.67	0.14	後期15片	
337	J 31	堀	楕円形	0.86	(0.60)	0.17	336･337合わせて堀之内113片	338号ピットと重複
338	J 31	堀	楕円形	1.46	1.10	0.36	同上	337号ピットと重複
339	J 32	？	楕円形	0.64	0.49	0.40	後期1片	
341	I 32	後期	楕円形	0.50	0.45	0.25	後期8片	
343	J 30	堀2	不整方形	1.36	1.23	0.35	後期82片（堀之内2主）	348号ピットと重複
344	J 30	堀2	楕円形	1.08	0.96	0.45	堀之内2主55片，凹石，土偶片？1	
351	J K30	？	楕円形	0.76	0.67	0.28	後期？5片	土坑
352	J 30	後期	円形	0.45	0.43	0.46	後期16片	掘り過ぎ部分あり
355	J 30	後期？	楕円形	0.95	0.66	0.23	後期5片	
366	J 30	堀2	楕円形	0.50	0.42	0.27	堀之内2など5片	土坑
367	J 30	？	楕円形	0.70	0.45	0.24	後期1片	
368	J 30	後期	円形	0.95	0.92	0.39	堀之内１など14片，凹石1	土坑
373	J K30	？	楕円形	0.93	0.54	0.34	堀之内2など33片	
374	J 30	？	楕円形	(0.54)	0.45	0.27	堀之内2-1片	344号ピットと重複
376	J 32	後期	楕円形	(0.80)	0.57	0.30	後期？9片	調査区外にのびる，377号ピットと重複
377	J 32	後期	楕円形	0.44	(0.34)	0.24	堀之内？7片	調査区外にのびる，376号ピットと重複
381	K28	？	楕円形	1.02	0.90	0.28		集石炉
382	J K27	？	楕円形	1.04	0.86	0.22	土器1片	集石炉
384	J 29	？	楕円形	0.33	0.26	0.30	後期2片	
385	I 30	？	楕円形	0.53	0.37	0.47	堀之内2など6片	
386	I 28	？	楕円形	0.72	0.55	0.43	後期4片	
387	I 29	？	円形	0.49	0.48	0.38	後期？3片	
389	I 28	？	楕円形	1.30	1.04	0.21	中期・後期など12片	
390	J 28	？	不整方形	1.54	1.46	0.46		集石炉
391	J 28	堀1	不整方形	1.36	1.32	0.40	堀之内1主51片，磨き石1	土坑
393	J 29	堀2	不整方形	1.32	1.31	0.24	堀之内2など10片	撹乱
395	J K28	堀2	楕円形	0.84	0.67	0.23	堀之内2など134片	
398	J 29		楕円形	1.51	1.29	0.74	後期2片（混入か）	集石炉
401	Q13･14	曽利Ⅰ	楕円形	1.02	0.92	0.28	曽利Ⅰ大形破片など14片以上	土坑
404	N14	？	楕円形	1.38	1.28	0.98	六道銭5，ほか曽利Ⅰ12片，平安2片	土坑墓
405	S14	？	楕円形	1.28	1.06	0.24	猿沢式土器片	25号住と重複
407	R13	？	不整方形	0.68	0.63	0.24	曽利Ⅰなど10片	
408	O15	曽利Ⅰ	不整長方形	0.92	0.79	0.66	曽利Ⅰ大形破片10片以上	28号住内
412	N O17	？	不整楕円形	1.66	1.39	0.46	中期末・加曽利ＥⅣなど6片，平安1	
413	S14	猿沢	不整楕円形	1.18	0.80	0.26	猿沢式土器数片	25号住内
414	B58	中期末	円形	1.14	1.08	0.42	中期末鉢形土器数片	37号住内

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
54	B60・61・62	1	縄文早	土器	深鉢	[22.5]	−	−	表裏縄文土器，口縁～底部付近	外面・口唇部単節ＬＲ	指頭痕，単節ＬＲ	黄橙	黄橙	長石，石英，安山岩，スコリア，角閃石，小礫ー多	B60No.37・245・299・317,B61No.161・165・167・211・253・339・392・400・441・463・474・724・733・742・756,B62No.42・87・91・137・138・157・163・271・272・374・380・388～390・392・395・400・403・650・651・667・675・743・793	−	外面黒変
54	B61	2	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	表裏縄文	単節ＬＲ	単節ＬＲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石ー多，安山岩	B61No.782	−	内面黒色，在地的胎土
55	B61	3	縄文早	土器	深鉢	[32.0]	−	−	表裏縄文，口縁貼付文	外面・口唇部単節ＬＲ	単節ＬＲ	赤褐	赤褐	長石，石英，雲母	B61No.513・816・818	−	外面黒変
55	B61・61	4	縄文早	土器	深鉢	[21.0]	−	−	表裏縄文，平口縁	外面．口唇部単節ＲＬ	単節ＲＬ	にぶい褐	にぶい褐	雲母ー多，石英	B61No.33・47・185・187・467・561・637・673,B62No.254・257・855，C61No.25	−	外面黒変
55	B60・61	5	縄文早	土器	深鉢	[15.0]	−	−	表縄文，口縁波状	単節ＬＲ	指頭痕	にぶい橙	にぶい橙	雲母ー多，石英，スコリア	B60No.255・257,B61No.77・612・649・691・695・721・722・760・761・764・773～777・781・807～809	−	内外面黒変，すす付着
55	B61・62，C61・62・65	6	縄文早	土器	深鉢	[30.0]	−	−	撚糸文	撚糸Ｒ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，長石，角閃石，石英，雲母，結晶片岩？	B61No.154,B62No.23・765,C62No.20・23・31・53・89・242・295,C65No.8	−	稲荷台式
56	B61・62	7	縄文早	土器	深鉢	[19.0]	−	−	表裏縄文・口縁貼付文	外面・口唇部単節ＲＬ	単節ＲＬ	褐	褐	角閃石ー多，長石，石英	B60No.320,B61No.340・732	−	内外面すす付着
56	B60	8	縄文早	土器	深鉢	[15.0]	−	−	表裏縄文・平口縁	外面・口唇部単節ＬＲ	単節ＬＲ	暗褐	黒褐	石英ー多，長石，雲母	B60No.260・273・322	−	内外面黒変
56	C61	9	縄文早	土器	深鉢	[16.0]	−	−	表裏縄文・平口縁	外面・口唇部単節ＬＲ	単節ＬＲ	にぶい褐	にぶい褐	長石	C61No.37	−	
56	B61・62	10	縄文早	土器	深鉢	[20.0]	−	−	表裏縄文	外面単節ＲＬ，口唇部無節Ｌ？	無節Ｌ	黒褐	黒褐	雲母ー多，長石，石英	B61,B62No.947	−	内外面黒変
56	B60	11	縄文早	土器	深鉢	[24.0]	−	−	表裏縄文	外面・口唇部単節ＲＬ	単節ＲＬ	にぶい黄褐	黄橙	安山岩，角閃石，スコリア	B60No.249	−	外面黒変
56	B61・62	12	縄文早	土器	深鉢	[24.0]	−	−	表裏縄文	外面・口唇部単節ＬＲ	単節ＬＲ	明褐	明褐	雲母ー多，長石，石英	B60No.244,B61No.248・338・706	−	内外面黒変
57	B61	13	縄文早	土器	深鉢	[20.0]	−	−	表裏縄文	外面・口唇部単節ＲＬ	単節ＲＬ	橙	橙	長石，石英，安山岩，スコリア，角閃石	B61No.688	−	
57	B60	14	縄文早	土器	深鉢	[17.0]	−	−	表裏縄文	単節ＲＬ	単節ＲＬ	にぶい橙	黒褐	雲母ー多，石英，スコリア	B60No.261・314	−	内面黒変
57	B60	15	縄文早	土器	深鉢	[25.5]	−	−	平口縁，表裏縄文	外面は無節Ｒ・Ｌにより羽状，口唇部は無節Ｒ	無節Ｒ	黒褐	赤褐	雲母・長石ー多，石英	B60No.271・336・337・350・415・675・676・735・817,B62No.899	−	外面黒変
57	B61	16	縄文早	土器	深鉢	[26.0]	−	−	平口縁	外面・口唇部は無節Ｌ	無節Ｌ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石ー大粒，石英，角閃石，雲母	B61No.244・633・655・772	−	内面黒変
57		17	縄文早	土器	深鉢	[18.0]	−	−	表裏縄文	無節Ｒ	無節Ｒ	暗褐	にぶい黄褐	石英，長石，安山岩，角閃石，スコリア	112・154号ピット	−	外面すす付着
57	B60・61	18	縄文早	土器	深鉢	[15.0]	−	−	表裏縄文	外面・口唇部は無節Ｒ	無節Ｒ	にぶい橙	黒褐	雲母ー多，長石，石英	B60No.234・284,B61No.7・347・403・411・524・526・636・657・694・717,167号ピット	−	内面黒変
58	B62	19	縄文早	土器	深鉢	[20.0]	−	−	表裏縄文	外面・口唇部は無節Ｒ	無節Ｒ	灰	灰	安山岩，角閃石	B62No.542・945	−	
58	B60～62・64，C62	20	縄文早	土器	深鉢	[15.0]	−	−	表裏縄文？	無節Ｒ？	無節Ｒ？，下半指頭痕	赤褐	赤褐	長石，石英，角閃石，安山岩，スコリア	B60No.56・228・76・257・265・286,B61No.62・105・110・164・208・247・270・436・619・679・712・787,B62No.151・187・974,C62No.25，B64	−	
58	C65	21	縄文早	土器	深鉢		−	−	表裏撚糸？	撚糸Ｒ	撚糸			長石ー多，石英	C65	−	被熱し軽い
58	B61～63	22	縄文早	土器	深鉢	[15.0]	−	−	表撚裏縄	外面撚糸Ｒ，口唇部単節ＬＲ	単節ＬＲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，石英，安山岩，角閃石	B61No.697・752,B62No.657・684	−	
58	B61	23	縄文早	土器	深鉢	[19.0]	−	−	口縁～胴下半，撚糸文	撚糸Ｌ？による斜格子状文	ナデ	褐	褐	安山岩，長石，スコリア，角閃石	B60No.101，B61No.220・230・277・320・321・397・646・681・744・750・792	−	
59	B61	24	縄文早	土器	深鉢				撚糸文	撚糸Ｌ	ナデ	褐	褐	雲母ー多，長石，石英	B61No.662・167号ピット	−	内面薄く黒変
59	B62	25	縄文早	土器	深鉢	[16.0]	−	−	撚糸文	撚糸Ｒ？，一部斜格子状	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，石英，角閃石，スコリア	B62No.83	−	内面黒変
59	C62	26	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	表裏縄文？	縄文か？	単節ＲＬ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，石英，角閃石，安山岩，スコリア，雲母	C62No.3	−	擬口縁表面にも施文，外面黒変
59	B61	27	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	表裏縄文	単節ＲＬ？	単節ＲＬ？	にぶい橙	暗褐	長石，石英，安山岩，角閃石	B61No.476・770	−	
59	B61	28	縄文早	土器	深鉢	−	−	−		単節ＲＬ？	ナデ	にぶい黄橙	黒	同上	B61No.77	−	内面黒変
59	C61	29	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	表裏縄文	無節Ｌ	無節Ｌ	黄橙	黒褐	長石，石英，安山岩，スコリア	C61No.10	−	内面底部付近はＬＲを使用
59	B61	30	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部下半，撚糸文	撚糸Ｌ，一部斜格子状	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石ー多，石英，安山岩，スコリア，雲母ー多	B60No.327・380	−	内面薄く黒変
59	B60～63	31	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	表撚裏縄	撚糸Ｒ	無節Ｌ	橙	にぶい橙	長石，石英，安山岩，角閃石，スコリア，砂岩	B60No.125・204,B61No.73・218・246・254・370・391・401・409・444・485・507・551・658・674・693・718・762,B62No.143・215・391・522・551・671・674・677・693・718・801・940,B63No.7	−	内外面黒変，内面剥離したものが多い
59	B62	32	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	同上	同上	同上	同上		同上	B62No.555	−	
59	B61	33	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	同上	同上	剥離	同上		同上	B61No.92	−	
59	B61	34	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	同上	同上	同上	同上		同上	B61No.255	−	
59	B60	35	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	表裏縄文底部	単節ＬＲ	単節ＬＲ？	にぶい黄橙	褐灰	長石，石英，角閃石，スコリア，安山岩	B60No.266	−	底部内面も施文，外面灰付着
59	B61	36	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	底部	単節ＬＲ	ナデ	褐	にぶい黄橙	長石，石英，雲母	B61No.150	−	内面黒変，外面灰付着
59	B60	37	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	撚糸文底部	撚糸Ｌ？	ナデ	橙	にぶい黄褐	長石，石英，安山岩，角閃石，スコリア	B60No.252	−	外面灰付着
59	B61	38	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	底部	単節ＬＲ？	ナデ	橙	橙	長石，石英，雲母	B61No.416	−	外面黒変
59	−	39	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	底部	撚糸Ｒ？	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	長石，スコリア，角閃石	表採	−	内面剥離
59	B62	40	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，石英，スコリア，角閃石	167号ピット	−	
60	B61	41	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面・口唇部単節ＲＬ	無節Ｌ	明黄褐	にぶい黄褐	雲母ー多，長石，角閃石	B61No.503	−	内面黒変
60	B61	42	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面・口唇部単節ＬＲ	単節ＬＲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母ー多，長石，角閃石，石英	B61No.739	−	外面すす付着，42・43は同一個体
60	B61	43	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ	剥離	同上	同上	同上	B61No.274	−	同上
60	B61	44	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面単節ＲＬ？，口唇部単節ＲＬ	単節ＲＬ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石，白色粒	B61No.534	−	内面すす付着

第15表１　土器・陶器観察表（（ー）は現状値，〔ー〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
60	B61	45	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部貼付文	外面・口唇部単節ＲＬ	単節ＲＬ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石，安山岩	B61	−	
60	B62	46	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面単節ＬＲ？，口唇部単節ＬＲ	単節ＬＲ	にぶい黄褐	黄灰	長石，石英，雲母，角閃石	B62No.106	−	
60	B72	47	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面・口唇部単節ＲＬ	単節ＬＲ	黄橙	黄橙	小礫，砂礫	51号ピットNo.5	−	
60	B60	48	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面・口唇部単節ＬＲ	単節ＬＲ	黒褐	にぶい黄橙	安山岩，角閃石	B60No.7	−	
60	B59	49	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ	単節ＬＲ	明褐	にぶい黄橙	雲母ー多，角閃石	B59No.4	−	
60	B60	50	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ	単節ＲＬ	橙	にぶい黄褐	長石，石英	B60	−	
60	B60	51	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ	単節ＬＲ	黄橙	黄橙	長石，石英，角閃石	B60No.289	−	
60	B61	52	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＲＬ	単節ＲＬ	褐	褐	角閃石ー多，雲母，長石，スコリア	B61No.814	−	内外面黒変
60	B61	53	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＲＬ	単節ＲＬ？	橙	黄橙	角閃石，安山岩，長石	B61No.8	−	
60	C62	54	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	底部近く	単節ＬＲ	単節ＬＲ	にぶい黄橙	黒	長石，石英，安山岩，角閃石	C62No.290	−	
60	B61	55	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＲＬ	単節ＲＬ	灰褐	黒褐	角閃石ー多，安山岩，長石，石英	B61No.417	−	内外面薄く黒変
60	B61	56	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ・Ｒ？羽状風	単節ＬＲ	黒褐	にぶい黄褐	長石，石英，安山岩，角閃石	B61No.749	−	
60	B61	57	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ？	単節ＬＲ	黄橙	にぶい黄橙	長石，石英，安山岩	B61No.23	−	内面黒変
60	B61	58	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＲＬ	単節ＲＬ	黒褐	にぶい黄褐	角閃石ーやや多，安山岩	B61No.455	−	外面黒変
60	B61	59	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ	単節ＬＲ	黄橙	黄橙	長石，石英，安山岩，小礫	B61No.2	−	
60	B61	60	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ？	単節ＬＲ？	褐	暗褐	長石，石英，雲母，小礫ー多	B61No.795	−	外面黒変
60	B61	61	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ？	単節ＬＲ	明赤褐	黒褐	長石ー多，石英，雲母，小礫	B61No.160	−	61～63は同一個体
60	B61	62	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ	単節ＬＲ	同上	同上	同上	B61No.756	−	同上
60	B61	63	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ	剝離	同上	同上	同上	B61	−	同上
60	B61	64	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ	剝離	同上	同上	同上	B61No.738	−	
60	B62	65	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＲＬ	単節ＲＬ	橙	にぶい黄橙	長石，石英，安山岩，スコリア，角閃石	B62No.50	−	
60	B62	66	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ	単節ＬＲ？	黒	にぶい黄橙	長石，石英，安山岩，スコリア，角閃石	B62No.658	−	
61	B60	67	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面・口唇部無節Ｒ	無節Ｒ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石，安山岩	B60No.160	−	内外面黒変
61	B62	68	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面・口唇部無節Ｒ	無節Ｒ	黄橙	橙	角閃石，長石，スコリア，安山岩	B62No.588	−	
61	C62	69	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面無節Ｒ？，口唇部無節Ｒ	無節Ｒ	橙	橙	長石，石英，安山岩，角閃石	C62No.206	−	
61	B62	70	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面・口唇部無節Ｒ	無節Ｒ	黄褐	黄褐	角閃石，スコリア，安山岩	B62No.74	−	
61	B60	71	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	無節Ｒ	無節Ｒ	黒褐	暗褐	安山岩ー多，長石，石英，角閃石	B60No.311	−	内外面黒変
61	B60	72	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	無節Ｒ	無節Ｒ	にぶい黄橙	にぶい橙	安山岩，角閃石	B60No.281	−	
61	B61	73	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	無節Ｒ？	無節Ｒ	にぶい黄橙	褐灰	長石，石英，角閃石，安山岩	B61No.98	−	
61	B61	74	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	無節Ｒ	無節Ｒ	橙	黒褐	安山岩，角閃石	B61No.133	−	
61	B・C61	75	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	無節Ｒ	無節Ｒ	浅黄	黄灰	長石，石英，安山岩，角閃石	B61No.827,C61No.34	−	内外面薄く黒変
61	B61	76	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	無節Ｒ	無節Ｒ？	黄橙	黄橙	安山岩，長石，石英，スコリア	B61No.250	−	内面黒変,76～85は同一個体
61	B62	77	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	同上	無節Ｒ	同上	同上	同上	B62No.155・894	−	同上
61	B62	78	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	同上	無節Ｒ	同上	同上	同上	B62No.274	−	同上
61	B62	79	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	同上	無節Ｒ？	同上	同上	同上	B62	−	同上
61	B62	80	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	同上	同上	同上	同上	同上	B62No.738	−	同上
61	B62	81	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	同上	同上	同上	同上	同上	B62No.576・594	−	同上
61	B62	82	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	同上	同上	同上	同上	同上	B62No.76	−	同上
61	B61	83	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	同上	同上	同上	同上	同上	B61No.119・535	−	同上
61	B61	84	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	同上	同上	同上	同上	同上	B61No.58	−	同上
61	B61	85	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	同上	無節Ｒ	同上	同上	同上	B61No.78・200・308・391	−	同上
61	B62	86	縄文中？	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	単節ＬＲ	ナデ	橙	橙	長石，石英，角閃石	B62No.210	−	中期土器か
61	B59	87	縄文前	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＬＲ＋ＲＬ，羽状	ナデ	褐	橙	長石，石英，角閃石，安山岩，スコリア	3号住No.174	−	
61	B70	88	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＲＬ	ナデ	にぶい橙	灰黄	長石，石英，小礫	29号ピット	−	外面黒変,早期ではない可能性
61	B61	89	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＲＬ	ナデ	黄橙	褐灰	角閃石，石英，安山岩	B61No.458	−	
61	B62	90	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	単節ＲＬ	ナデ	にぶい黄	褐灰	長石，石英，スコリア，小礫	B62No.100	−	底部に近い胴部
61	B62	91	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	無節Ｒ	ナデ	明赤褐	明赤褐	安山岩，角閃石	B62No.490	−	
61	B62	92	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	無節Ｒ	ナデ	黄褐	褐	角閃石，スコリア	B62	−	
61	B61	93	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	無節Ｒ	ナデ	橙	にぶい黄褐	角閃石，長石，スコリア，石英	B61No.357	−	
61	B61	94	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	無節Ｒ	ナデ	暗赤褐	赤褐	角閃石ー多，長石，スコリア	B61No.684	−	内外面黒変
62	B62	95	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	無節Ｒ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	角閃石，安山岩	B62No.31(160号ピット)	−	内外面黒変
62	C65	96	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	無節Ｒ	ナデ	橙	褐	角閃石，スコリア，安山岩	C65	−	
62	B62	97	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	無節Ｌ	ナデ	明褐	黒褐	長石，石英，角閃石，スコリア，安山岩	B62No.773	−	内面黒変，97・98は同一個体
62	B62	98	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	無節Ｒ	ナデ	同上	同上	同上	B62No.208	−	同上
62	C62	99	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	無節Ｒ	ナデ	明褐	明褐	長石，石英，角閃石，スコリア	C62No.248	−	
62	B62	100	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	無節Ｒ	ナデ	橙	黄褐	角閃石，長石，スコリア	B62No.3	−	
62	B60	101	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	胴部	無節Ｒ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石，安山岩，スコリア	B60	−	外面すす付着
62	B60	102	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面・口唇部無節Ｌ	剝離	明褐	明褐	長石，角閃石，スコリア	B60No.312	−	内面剝離
62	B60	103	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	口唇部単節ＲＬ	無節Ｒ？	明褐	明褐	白色粒，スコリア	B60	−	内面剝離
62	B60	104	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面・口唇部単節ＲＬ	剝離	明赤褐	明赤褐	角閃石，白色粒	B60No.250	−	内面剝離
62	B61	105	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面・口唇部撚糸Ｒ	撚糸Ｒ	暗灰黄	黄褐	スコリア，白色粒	B61No.625	−	外面黒変
62	B60	106	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	撚糸Ｌ	撚糸Ｌ	褐	褐	雲母ー多	B60	−	
62	B61	107	縄文早	土器	深鉢	−	−	−	口縁部	外面・口唇部撚糸Ｒ	撚糸Ｒ	にぶい橙	にぶい橙	長石，雲母，スコリア，角閃石，安山岩，小礫	B61No.207	−	内外面黒変，107～111は同一個体

第15表２　土器・陶器観察表（（ー）は現状値，〔ー〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
62	B62	108	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸R	ナデ	同上	同上	同上	B62No.971	—	同上
62	B61	109	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上	同上	同上	同上	同上	B61No.712	—	同上
62	B62	110	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上	同上	同上	同上	同上	B62No.919	—	同上
62	B62	111	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上	同上	同上	同上	同上	B62No.818	—	同上
62	C61	112	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	外面・口唇部撚糸L	撚糸L	にぶい黄褐	にぶい黄褐	雲母ー多，角閃石，スコリア	C61No.63	—	内外面黒変
62	B62	113	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	外面撚糸R，口唇部？	撚糸R	褐	褐	長石，石英，雲母，小礫	B62No.73	—	
62	B61	114	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	撚糸L	撚糸L	暗褐	暗褐	長石，石英，雲母，小礫	B61No.641	—	
62		115	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	撚糸L	撚糸L	にぶい橙	にぶい橙	角閃石，長石，安山岩	167号ピット	—	
62	C62	116	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	撚糸R	撚糸R			長石，石英，スコリア，角閃石	C62No.72	—	外面黒変
62	B62	117	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	撚糸L？	撚糸	暗褐	暗褐	長石，石英，スコリア，小礫	B62No.733	—	
62	B62	118	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	撚糸R	撚糸？	にぶい黄褐	褐	長石・安山岩ー多，石英，スコリア，角閃石，雲母	B62No.898	—	
62	B62	119	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	撚糸L	撚糸L？	明赤褐	明赤褐	雲母，長石，角閃石，石英	B62No.679	—	
62	B62	120	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	撚糸L	撚糸	にぶい褐	橙	長石・石英ー大粒，雲母，小礫	B62No.160	—	
62	C62	121	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	撚糸R，斜格子状	撚糸R	黄褐	褐	長石，石英，雲母，スコリア	C62No.111	—	
62	B60	122	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸L	撚糸L？	橙	橙	雲母ー多，長石，石英	B60	—	122・123は同一
62	B60	123	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸L	撚糸L？	同上	同上	同上	B60No.155・310	—	同上
63	B61	124	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸R	撚糸R？	黒褐	赤褐	長石，石英，角閃石，安山岩	B61No.595	—	外面黒変
63	B61	125	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸L	単節LR	黒褐	褐	長石，石英，角閃石，安山岩	B61No.769	—	外面黒変，もろい，125・126は同一個体
63	B61	126	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上	同上	黒褐	褐	同上	B61No.723	—	同上
63	B61	127	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸R	ナデ	橙	橙	安山岩，角閃石，スコリア	B61No.71	—	
63	B61	128	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸R	ナデ	褐	褐	石英，角閃石，安山岩，スコリア	B61No.374	—	内面薄く黒変，128・129は同一個体
63	B61	129	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上	同上	同上	同上	同上	B61No.213	—	同上
63	B61	130	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸R	ナデ	にぶい橙	黒褐	長石，石英，安山岩，スコリア	B61No.698	—	内面剥離・黒変
63	B61	131	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸R	ナデ	黄橙	黄橙	安山岩，角閃石，スコリア	B61No.390	—	内面剥離
63	B60	132	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸L？	ナデ	橙	にぶい黄橙	安山岩，角閃石	B60No.256	—	内面黒変，荒れ
63	B62	133	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸R	ナデ	褐	褐	長石，石英，雲母，スコリア	B62No.126	—	外面黒変
63	B62	134	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸L	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，石英，角閃石	B62No.7	—	30と同一の可能性
63	B60・61	135	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸R	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石，白色粒	C62	—	135・136は同一，内外面黒変
63	C62	136	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸R	ナデ	同上	同上	同上	C62No.26・241	—	同上
63	B63	137	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	撚糸L，斜格子状	ナデ	橙	褐	雲母ー多，角閃石，長石，石英	B63No.39	—	内面一部剥離
63	B60	138	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	押型文，胴部	山形文	ナデ	暗褐	明褐	長石，石英，雲母，小礫	B60No.297	—	縦方向に施文
63	B59	139	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	押型文，胴部	楕円文	ナデ	暗灰黄	暗灰黄	長石，角閃石，白色粒	B59No.15	—	
63	B60	140	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	押型文，胴部	楕円文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，石英，雲母	B60No.8	—	内面剥離
63	B60	141	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	押型文，胴部	楕円文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長石，石英	B60	—	139と類似
63	B60	142	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	押型文，胴部	楕円文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	雲母ー多	B60No.123	—	内面剥離・黒変
63	B60	143	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	押型文，胴部	楕円文	ナデ	暗褐	橙	雲母ー多，石英，角閃石	B60No.124	—	内面剥離・黒変
63	B60	144	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	押型文，胴部	楕円文	ナデ	橙	暗褐	雲母ー多，石英	B60	—	内面黒変
63	B61	145	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	押型文，胴部	楕円文	ナデ	褐	褐	長石，石英，スコリア	B61No.709	—	内面すす付着
63	B59	146	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	押型文，胴部	楕円文・単節RL	ナデ	暗褐	橙	雲母ー多，角閃石	3号住，B59No.29	—	外面2種施文，146～148は同一，内面黒変
63	B59	147	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	押型文，胴部	楕円文	ナデ	同上	同上	同上	B59No.22	—	同上
63	B60	148	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	押型文，胴部	楕円文・単節RL	ナデ	同上	同上	同上	B60No.141	—	同上
63	B60	149	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線文・刺突文		にぶい黄褐	にぶい黄褐	雲母ー多，石英	B60	—	149・150は同一，田戸下層式？
63	B60	150	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上		同上	同上	同上	B60	—	同上
63	B60	151	縄文早	土器	深鉢	—	—	—	胴部	ナデ	ナデ	黒褐	黄橙	長石，スコリア，雲母，小礫	B60	—	149・150と同一か？
75	34号住 炉体土器	1	縄文中	土器	深鉢	26.0	—	(19.0)	3段の横区画帯，平口縁	粘土紐貼付，角押文	ヨコナデ	明赤褐	明赤褐	長石，石英，雲母ー多，角閃石，安山岩	34住No1・2・4・5・6・10・14	—	
75	34号住	2	縄文中	土器	深鉢	[18.0]	10.2	26.8	平口縁，3段の楕円横区画帯	角押文，円形刺突文，粘土紐貼付	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，黒色粒，スコリア	34住No.4	70	内面・外面上半部黒変
76	34号住	3	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	小波状口縁	角押文，粘土紐貼付	ナデ	明褐	明褐	角閃石ー多，長石，石英，安山岩	34住ピット5	—	3・4・5は同一個体
76	34号住	4	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	緩い波状口縁	角押文，粘土紐貼付	ナデ	明褐	明褐	同上	34住No.28	—	
76	34号住	5	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	緩い波状口縁	角押文，粘土紐貼付	ナデ	明褐	明褐	同上	34住No.19	—	
76	34号住	6	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	平口縁	連続爪形文，交互刺突文	ナデ	明赤褐	明赤褐	雲母ー多，長石，黒色粒	34住	—	
76	34号住	7	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	口縁付近	角押文，隆線貼付，交互刺突文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	雲母ー多量，長石，角閃石，スコリア	34住No.4・9・10・11	—	
76	34号住	8	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	小波状口縁	連続爪形文，竹管文	ナデ	灰黄	灰黄	長石ーやや多，石英，雲母	34住	—	8・9は同一個体
76	34号住	9	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	平口縁	同上	ナデ	灰黄	灰黄	同上	34住No.4	—	
76	34号住	10	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	角押文	ナデ	明褐	明褐	雲母ー多，長石，スコリア，小礫	34住	—	
76	34号住	11	縄文中	土器	深鉢	[16.0]	—	—	有段平口縁		ナデ	暗褐	暗褐	安山岩ー多，スコリア	34住	—	外面荒れ
76	34号住	12	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線・縄文RL？	ナデ	橙	橙	角閃石，長石	34住	—	内面黒色付着物
76	34号住	13	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線	ナデ	明褐	明褐	長石，石英，雲母，スコリア	34住	—	
76	34号住	14	縄文後	土器	深鉢	—	—	—	胴部	横羽状沈線文	ナデ	黄橙	黄橙	長石ーやや多，石英，角閃石，スコリア	34住	—	
76	34号住	15	縄文	土器	深鉢	—	6.8	—	底部	網代痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，スコリア	34住No.1	—	内面荒れ

第15表3　土器・陶器観察表（（ー）は現状値，〔ー〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
76	34号住	16	縄文中	土器	浅鉢	[30.0]	—	—	小波状口縁,屈折	角押文	ナデ	褐	褐	長石，角閃石，安山岩，スコリア	34住No.17	—	内面荒れ
76	34号住	17	縄文中	土器	浅鉢	[54.0]	—	—	平口縁,屈折	角押文	ナデ	褐	褐	長石，スコリア，角閃石，安山岩	34住,P17No.4	—	内外黒変
76	34号住	18	縄文中	土器	浅鉢	[80.0]	—	—	平口縁,屈折,4単位文様	角押文，貼付文	ナデ，横ヘラ削り	赤褐	赤褐	小礫－多，長石，スコリア，黒色粒,雲母	34住No.8・12・14・20・23～27	—	
77	3号住　炉体土器？	1	縄文	土器	深鉢	—	7.2	—	底部	ナデ	ナデ	橙	橙	長石，石英，角閃石，スコリア，小礫	3住No.118	—	
77	3号住	2	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	連続ハの字文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩,スコリア,小礫,長石	3住No.122	—	
77	3号住	3	縄文中？	土器	深鉢	—	—	—	胴部	縄文L	ナデ	褐灰	褐灰	長石,石英,角閃石,雲母,スコリア	3住	—	外面黒変
77	7号住	1	縄文中	土器	X把手深鉢	—	—	—	胴部,把手付近	雨垂れ状刺突文,竹管文	ナデ・ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩,長石,角閃石,スコリア	7住No.16・19・22	—	
77	7号住	2	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	頚部付近	粘土紐貼付，縄文LR	ナデ・ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	長石，スコリア，角閃石，安山岩	7住	—	内面黒変・荒れ
77	7号住	3	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	平口縁	縄文LR	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，黒色粒，スコリア	7住No.25	—	
77	7号住	4	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	頚部	縄文RL，粘土紐貼付，竹管文	ナデ	灰褐	灰褐	長石,石英，角閃石，安山岩,スコリア	7住No.52	—	内面荒れ
77	7号住	5	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	縄文LR,蛇行沈線文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，角閃石，スコリア，雲母	7住No.49	—	
77	7号住	6	縄文中	土器	深鉢	[25.0]	—	—	平口縁	縄文RL，隆線貼付	ナデ・ミガキ	灰黄褐	灰黄褐	安山岩，長石，角閃石	7住No.38	—	
77	7号住	7	縄文後	土器	注口土器	[11.2]	—	—	把手付近	沈線・ミガキ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩,雲母，角閃石，長石	7住No.35・43	—	
78	8号住　炉内	1	縄文中	土器	深鉢	[21.0]	9.0	26.6	平口縁	縄文LR＋結節縄文	ナデ・ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，角閃石	8住No.46・83・84	80	
78	8号住	2	縄文中	土器	深鉢	[12.0]	—	—	平口縁	縄文RL	ナデ	灰黄橙	にぶい黄橙	長石，角閃石，安山岩	8住	—	
78	8号住　埋甕？	3	縄文中	土器	深鉢	[18.0]	—	—	平口縁	撚糸文L，沈線文	ナデ	黒褐	黒褐	角閃石，スコリア，黒色粒	8住埋甕No.2	—	
78	8号住	4	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	頚部	縄文RL,沈線文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	安山岩，角閃石，スコリア	8住	—	内面薄く黒変
78	8号住	5	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	縄文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	石英，長石，角閃石，安山岩	8住	—	
78	8号住	6	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	縄文LR，竹管文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	長石，石英	8住No.49・91	—	内面黒変
78	8号住	7	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	縄文,竹管文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	花崗岩・長石・石英－多，安山岩	8住No.60	—	
79	8号住	8	縄文中	土器	深鉢	[22.0]	—	—	平口縁	縄文LR	ナデ・ミガキ	明褐	灰黄褐	長石，スコリア，安山岩	8住No.63・64・72～74・81	—	
79	8号住	9	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	頚部	縄文，粘土紐貼付	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，石英，角閃石，スコリア，黒色粒	8住No.85	—	
79	8号住	10	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	口縁	刺突文，粘土紐貼付	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	雲母，安山岩，黒色粒	8住	—	
79	8号住	11	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	平口縁	竹管文	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	安山岩，黒色粒，スコリア	8住	—	
79	8号住　炉内	12	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	雨垂れ状刺突文	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	安山岩，黒色粒，角閃石	8住炉	—	
79	8号住	13	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	口縁付近	竹管による重弧文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	安山岩－多,角閃石，スコリア	8住No.58	—	内面黒色，剥離
79	8号住　埋甕	14	縄文中	土器	深鉢	—	9.0	—	底部	縄文＋結節縄文,底部削り	ナデ			長石，石英，角閃石，スコリア	8住埋甕No.1	—	内面黒色食物残滓付着
79	8号住	15	縄文中	土器	鉢	[39.0]	—	—	平口縁	隆線文，沈線	ナデ	黄灰	黄灰	安山岩，角閃石	8住No.70・71・75	—	
79	8号住	16	縄文中	土器	鉢	—	—	—	胴部	隆線文，沈線文,櫛歯状沈線文	ナデ・ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石，黒色粒，スコリア	8住	—	
79	8号住	17	縄文中	土器	鉢	[22.0]	—	—	平口縁～胴	縄文LR＋結節縄文	ナデ・ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，角閃石，スコリア	8住No.78	—	
79	8号住	18	縄文中	土器	浅鉢？	—	—	—	胴部	ナデ	ナデ・塗彩	褐灰	褐灰	安山岩,長石	8住No.54	—	黒色顔料の上に赤色塗彩をする
80	9号住　埋甕	1	縄文中	土器	深鉢	[31・5]	—	(29.5)	胴部下半・口縁一部欠損	沈線，隆線，櫛歯状沈線，蛇行沈線文	ナデ			長石，石英，安山岩，角閃石，スコリア	9住埋甕	60	外面胴部上半すす付着，内面下半黒変
80	9号住	2	縄文中	土器	深鉢	[16.4]	7.0	23.5	把手1個	低隆帯,沈線，櫛歯状沈線	ナデ	橙	橙	安山岩，長石，石英，角閃石，スコリア	9住No.30・261～263・265・267・271・301		外面上半黒変
81	9号住	3	縄文中	土器	深鉢	[29.6]	8.6	34.3	平口縁	低隆帯，櫛歯状沈線，ナデ沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，石英，安山岩，黒色粒	9住No.456・485～487・532～534・561・563・565・576・578・592・597・599・600・601		外面胴部上半すす，内面胴下半黒変
81	9号住	4	縄文中	土器	深鉢	[20.0]	—	—	平口縁	沈線,蛇行沈線文	ナデ	黄褐	黄褐	安山岩－多，長石，角閃石，スコリア	9住No.301・308・309・314・315・318～321・324・325・327・338・346・538・540～542・545	50	外面胴上半黒変
81	9号住	5	縄文中	土器	深鉢	[22.0]	—	(28.5)	平口縁	櫛歯状羽状沈線，蛇行沈線文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，角閃石，スコリア	9住No.66・288・317・339・382・390・464・467・468・473	25	外面胴上半黒変，内面全面黒変
81	9号住	6	縄文中	土器	深鉢	[23.6]	7.4	29.5	平口縁	櫛歯状羽状沈線，蛇行沈線，沈線文,底部網代痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，石英，黒色粒，安山岩，スコリア	9住No.48・88・92・95・97・99～103・108・144・184・310・334・465・468・476～478・511・555	50	口縁が大きくゆがむ，外面口縁付近すす付着，内面胴下半黒変
82	9号住	7	縄文中	土器	深鉢	30.0	7.2	19.3	波状口縁、把手4個	櫛歯状沈線，低隆帯，ナデ沈線	ナデ	明褐	明褐	長石，石英，安山岩，角閃石，スコリア，小礫	9住No.30・32・49・59283～286・291	95	外面上半薄く黒変
82	9号住	8	縄文中	土器	深鉢	[15.0]	—	—	平口縁	櫛歯状沈線，蛇行沈線，低隆帯	ナデ	暗褐	暗褐	長石，角閃石，雲母，石英，スコリア	9住No.55・322・332・333	25	
82	9号住	9	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	平口縁	弧状隆線，沈線，蛇行竹管文，縄文	ナデ	黄褐	黄褐	安山岩，角閃石，スコリア，小礫	9住No.354・355		13住No.15と同一
82	9号住	10	縄文中	土器	深鉢	[30.0]	—	—	平口縁	櫛歯状沈線，沈線，蛇行沈線	ナデ	黄橙	黄橙	長石，角閃石，雲母，スコリア	9住No.70・171・192・393・394	—	外面黒変
82	9号住	11	縄文中	土器	深鉢	[18.0]	—	—	平口縁	弧状隆線文，竹管文	ナデ	黄橙	黄橙	長石，角閃石，雲母，スコリア	9住No.75・80～82	—	内面黒変
82	9号住	12	縄文中	土器	深鉢	[21.0]	—	—	平口縁	弧状つなぎ文，沈線，縄文L，蛇行沈線	ナデ	黄橙	黄橙	長石，石英，角閃石，スコリア	9住No.191・203・341・503	—	内外面黒変
82	9号住	13	縄文中	土器	深鉢	[26.0]	—	—	平口縁	縄文LR，隆線文	ナデ	明褐	明褐	長石，石英，雲母，角閃石，スコリア	9住No.238・278	—	外面口縁部付近黒変
83	9号住	14	縄文中	土器	深鉢	[37.8]	—	—	小波状口縁	弧状つなぎ文,沈線，縄文,蛇行沈線文	ナデ	黄橙	黄橙	雲母－多，長石，石英，スコリア	9住No.257・342・547・560	—	
83	9号住	15	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	平口縁	肥厚口縁，窓状区画，蛇行沈線，沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	スコリア－多，安山岩，角閃石	9住No.363	—	外面黒変

第15表4　土器・陶器観察表（（－）は現状値，〔－〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
83	9号住	16	縄文中	土器	深鉢	[38.0]	—	—	平口縁,把手付？	肥厚口縁，窓状区画	ナデ	黄橙	黄橙	長石，石英，雲母，スコリア，角閃石	9住No.499·567·569·572·600	—	内面粘土の上塗り
83	9号住	17	縄文中	土器	深鉢	[12.0]	—	—	平口縁	肥厚口縁，沈線文,櫛歯状沈線	ナデ	黄橙	黄橙	安山岩，角閃石，スコリア	9住No.372·395·575	—	内面胴下半黒変
83	9号住	18	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	櫛歯状沈線，蛇行沈線	ナデ	黄橙	黄橙	安山岩，角閃石，スコリア	9住No.415·416	—	外面上半すす付着
83	9号住	19	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	羽状沈線文	ナデ	橙	橙	安山岩，角閃石，スコリア	9住No.239	—	下部破片部を磨る
83	9号住	20	縄文中	土器	深鉢	—	[8.0]	—	底部付近	櫛歯状沈線，蛇行沈線，隆線，ナデ沈線	ナデ	黄橙	黄橙	安山岩，角閃石，スコリア	9住No.148·161·457·B70	—	外面上部黒変，内面黒変
83	9号住	21	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	櫛歯状沈線，沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石ー多，安山岩，スコリア	9住No.29·251·258·311·591·C70No.4	—	外面黒変
83	9号住	22	縄文中	土器	深鉢	—	[5.2]	—	底部	沈線，隆線,底部ーナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	安山岩，角閃石，長石，スコリア	9住No.361	—	
84	9号住	23	縄文中	土器	X把手付深鉢	[40.0]	—	—	口縁～胴部	低隆帯，ナデ沈線，沈線	ナデ	黄褐	黄褐	安山岩，長石，角閃石，雲母，スコリア	9住No.205·316·510·515·529·534·544·	—	外面薄く黒変
84	9号住	24	縄文中	土器	深鉢	—	8.6	—	胴～底部	低隆帯，櫛歯状沈線，ナデ沈線,底部ー網代痕	ナデ	橙	橙	安山岩，角閃石，スコリア	9住No.137·154·185～193·323·488·491·550·594·601·	—	外面黒変
84	9号住	25	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	ナデ沈線，低隆帯	ナデ	黄褐	黄褐	長石，石英，安山岩，角閃石，スコリア	9住No.141	—	内外面黒変,25·26は同一個体
84	9号住	26	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	低隆帯，ナデ沈線，雨垂れ状刺突文	ナデ	黄褐	黄褐	同上	9住No.130·140·161	—	
84	9号住	27	縄文中	土器	把手付鉢	[31·0]	—	—	口縁～胴部	ナデ沈線，櫛歯状沈線	横ナデ	明黄褐	明黄褐	安山岩，角閃石，スコリア	9住No.37·60·150·289·297··358·359·458·461·	—	内外面黒変
84	9号住	28	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	縦位沈線，粘土紐貼付	ナデ	明褐	明褐	安山岩，長石,石英，角閃石，スコリア	9住No.228	—	
84	9号住	29	縄文中？	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線，円形刺突文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	安山岩，長石，角閃石，スコリア	9住No.440	—	内外面黒変
85	9号住	30	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	隆帯，縄文ＲＬ？	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	安山岩，角閃石，スコリア	9住No.268	—	もろい
85	9号住	31	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	縄文ＬＲ,粘土紐貼付	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，石英，雲母ー少，安山岩，角閃石，スコリア	9住No.562	—	外面すす付着
85	9号住	32	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	縄文ＬＲ＋結節縄文	ナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	安山岩，長石，角閃石，小礫	9住No.9	—	外面灰付着，内面黒変
85	9号住	33	縄文中	土器	鉢	—	—	—	胴部	隆線，沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，角閃石，スコリア	9住No.295·536·549	—	外面黒変
85	9号住	34	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	縄文Ｌ，ＬＲ,文	ナデ	褐	褐	長石，石英，安山岩，角閃石，小礫	9住No.595	—	異系統土器,34～39は同一個体
85	9号住	35	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上	ナデ	褐	褐	同上	9住No.412	—	同上
85	9号住	36	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上	ナデ	褐	褐	同上	9住No.445	—	同上
85	9号住	37	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上	ナデ	褐	褐	同上	9住No.453	—	同上
85	9号住	38	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上	ナデ	褐	褐	同上	9住No.239	—	同上
85	9号住	39	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上	ナデ	褐	褐	同上	9住No.212	—	同上
85	9号住	40	縄文中	土器	鉢	[35.3]	—	—	口縁～胴	縄文ＬＲ,沈線文	ナデ	褐	褐	長石，石英，安山岩，スコリア	9住No.216·247·524	—	内外面黒変
85	9号住	41	縄文中	土器	ミニチュア	3.5	2.0	3.2	椀形，完存	無文	ナデ	褐	褐	安山岩，角閃石，スコリア	9住No.588	100	外面黒変
85	9号住	42	縄文中	土器	ミニチュア	[3.8]	[1.0]	1.8	皿形	無文	ナデ	橙	橙	安山岩，角閃石，スコリア	9住No.232		
87	10号住	1	縄文中	土器	深鉢	[39.0]	—	—	平口縁	竹管による重弧文	ナデ・ミガキ	にぶい褐	褐	長石，石英，安山岩，角閃石,黒色粒	10住No.40·50・65	—	
87	10号住	2	縄文中	土器	深鉢	[33.0]	—	—	小波状口縁	肥厚口縁，窓状区画，沈線文	ナデ・ミガキ	灰褐	灰褐	安山岩，長石，石英，黒色粒	10住No.72	—	内外面黒変
87	10号住	3	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	平口縁	沈線文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，角閃石，スコリア	C72	—	外面薄く黒変
87	10号住	4	縄文中	土器	深鉢	[28.4]	—	—	平口縁	竹管文	ナデ・ミガキ	黒褐	灰黄褐	長石，角閃石，安山岩，雲母	10住No.31·42·43·57·61·63	—	外面・内面口縁部付近黒変
87	10号住	5	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	ナデ沈線，櫛歯状沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，雲母，黒色粒	10住No.4·54·74·C72	—	
87	10号住	6	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	スコリアー多，安山岩，角閃石	10住No.29	—	外面薄く黒変
87	10号住	7	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	ハの字状沈線文，蛇行沈線文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，角閃石，黒色粒	10住No.66	—	内外面黒変
87	10号住	8	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	縄文ＲＬ,竹管文隆線	ナデ	橙	橙	長石，石英，角閃石，安山岩	10住No.70	—	外面すす付着
87	10号住	9	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	羽状沈線文，蛇行沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，石英，安山岩，黒色粒	10住No.7～10	—	
87	10号住	10	縄文中	土器	深鉢	—	10.3	—	底部	横ナデ，沈線　底部ーヘラ削り	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，角閃石，黒色粒	10住No.44·45·C72	—	
87	10号住	11	縄文中	土器	有孔鍔付土器	—	—	—	鍔部～胴部	沈線，鍔貼付	ナデ	にぶい橙	褐灰	安山岩，角閃石，スコリア	10住No.45	—	外面黒変
87	10号住	12	縄文中～後	土器	深鉢？	—	—	—	胴部	撚糸文Ｌ,沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，角閃石，黒色粒	10住No.30	—	内面炭化残滓
88	13号住　埋甕	1	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	低隆帯，櫛歯状沈線	ナデ	にぶい褐	鈍い褐	長石，雲母，黒色粒，スコリア	13住埋甕	—	破損部打ち欠き
88	13号住	2	縄文中	土器	深鉢	[23.0]	—	—	平口縁	低隆帯，櫛歯状沈線	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	安山岩，角閃石，雲母，スコリア	13住No.30·59	—	内外面黒変
88	13号住	3	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管による蛇行沈線，縄文Ｌ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，角閃石，黒色粒，スコリア	13住No.15	—	
89	14号住　埋甕	1	縄文中	土器	深鉢	[28.0]	—	(31.0)	平口縁,底部欠損	ナデ沈線，櫛歯状沈線，低隆帯	ナデ	にぶい橙	褐灰	安山岩，長石，石英，雲母，スコリア	14住埋甕	80	外面上半黒変，内面全面黒変
89	14号住	2	縄文中	土器	深鉢	18.7	—	(13.8)	平口縁	ナデ沈線，縄文Ｌ	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	長石，石英，雲母	14住No.4～7	—	外面上半すす付着
89	14号住	3	縄文中	土器	深鉢	—	5.4	—	底部	ヘラ削り，ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，角閃石，スコリア	14住No.14	—	外面上部すす，内面底部黒変
89	14号住	4	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	平口縁	沈線，櫛歯状沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色粒，白色粒，スコリア	14住No.9	—	
89	14号住	5	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	小突起付口縁	櫛歯状沈線，蛇行沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，角閃石	14住No.31	—	
89	14号住	6	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管による雨垂れ状刺突	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，角閃石，スコリア	14住No.62	—	外面下部黒変

第15表５　土器・陶器観察表（（ー）は現状値，〔ー〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
90	14号住	7	縄文中	土器	鉢？	－	－	－	平口縁	沈線，縄文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，スコリア	14住ﾋﾟｯﾄ4	－	外面すす付着，7·8は同一個体
90	14号住	8	縄文中	土器	鉢？	－	－	－	胴部	沈線，縄文ＲＬ，隆線	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	同上	14住No.15	－	
90	14号住　埋甕内	9	縄文中	土器	鉢？	－	8.4	－	底部	ナデ・ミガキ　底部－ナデ	ナデ・ミガキ	にぶい黄橙	黄灰	長石，角閃石，スコリア	14住埋甕	－	
90	27号住　炉体土器	1	縄文中	土器	深鉢	21.2	－	(21.5)	平口縁，胴下半欠損	竹管文条線，丸押引，粘土紐貼付	ナデ	明赤褐	明赤褐	安山岩，角閃石，スコリア，白・黒粒	27住No.1　炉体	－	外面表面剝離，口縁磨滅，内面下半黒変
90	27号住	2	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	竹管条線	ナデ	黒褐	にぶい褐	黒・白粒，スコリア	27住	－	外面黒変
91	28号住	1	縄文中	土器	深鉢	[60.0]	[12.6]	－	水煙土器，4単位？	竹管条線，中空水煙把手	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，石英，小礫，白・黒粒	28住No.41·43,014·15·16	－	口縁部内外にすす付着
91	28号住	2	縄文中	土器	深鉢	[15.4]	－	－	平口縁	竹管条線，粘土紐貼付	ナデ	暗褐	にぶい橙	雲母ー多，石英，長石，安山岩	28住No.42·63	－	外面うすく黒変
91	28号住	3	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線，隆線文，竹管沈線	ナデ	にぶい黄橙	灰褐	安山岩，スコリア，白・黒粒	N13No.1·3，N14No.4，014No.1	－	内面下半黒変
91	28号住	4	縄文中	土器	深鉢	－	8.0	－	胴下半	竹管条線，粘土紐貼付，	ナデ	橙	褐灰	安山岩，スコリア，輝石	28住No.6，N15No.3，015·16,404号ﾋﾟｯﾄ	－	外面上半薄く黒変，内面黒変
92	28号住	5	縄文中	土器	鉢？	－	－	－	平口縁	ナデ，口唇部刻み	ナデ	黒褐	黒褐	安山岩，角閃石，砂礫	28住No.55	－	内面黒変
92	28号住	6	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	ナデ	ナデ	にぶい橙	黒褐	安山岩，石英，長石，スコリア，小礫	28住No.24	－	
92	28号住	7	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，長石，角閃石	28住	－	
92	28号住	8	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	刻み目隆線、沈線，隆線文	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	安山岩，角閃石，スコリア	28住No.5	－	外面すす付着
92	28号住	9	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	口縁付近	丸押隆線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	安山岩，角閃石，スコリア	28住No.27	－	外面すす付着
92	28号住	10	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	交互刻み沈線，隆線，沈線文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，長石，スコリア，石英	28住	－	
92	28号住	11	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	撚糸文Ｌ	ナデ	にぶい褐	黒褐	安山岩，小礫，スコリア	28住No.40	－	内面黒斑
92	28号住	12	縄文中	土器	鉢？	－	－	－	胴部	縄文，隆線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	安山岩，角閃石	014No.11	－	
92	28号住	13	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	縄文ＲＬ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	安山岩，スコリア	28住No.42，408号ﾋﾟｯﾄNo.8	－	内外面黒変
92	28号住	14	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	縄文ＬＲ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	白・黒粒	28住No.65	－	外面黒変，内面タール状付着
92	28号住	15	縄文中	土器	深鉢	－	10.8	－	底部	竹管条線，底部－ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	安山岩，輝石，スコリア，黒色粒	28住No.56　015	－	
92	28号住	16	縄文中	土器	深鉢	－	[18.0]	－	底部	ナデ　底部－ナデ	ナデ	黒褐	にぶい橙	長石，石英，安山岩，スコリア	28住No.45,33住No.7，015	－	内面黒変
92	28号住	17	縄文中	土器	深鉢	－	[9.0]	－	底部	撚糸文Ｒ，横ナデ　底部－ナデ	ナデ	明赤褐	黒褐	長石，石英，雲母，砂礫	28住No.54	－	内面黒変
92	28号住	18	縄文中	土器	鉢	[19.0]	－	－	波状口縁	横ナデ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	安山岩，角閃石，スコリア，小礫	28住No.21	－	内外面黒変
93	30号住	1	縄文中	土器	深鉢	17.5	8.0	20.3	平口縁	竹管条線，粘土紐貼付，沈線，隆線文	ナデ	明褐	暗褐	安山岩，角閃石，スコリア	30住No.5	98	外面上半すす付着，内面黒変，ほぼ完形
93	30号住	2	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	竹管条線，丸押隆線文，貼付文	ナデ	にぶい暗褐	にぶい褐	安山岩，角閃石，スコリア	30住	－	
93	30号住	3	縄文中	土器	深鉢？	－	[12.0]	－	底部	条線	ナデ	黒褐	浅黄橙	長石，雲母，安山岩，角閃石，スコリア	30住No.	－	
93	31号住	1	縄文中	土器	深鉢	[18.0]	－	－	小突起付口縁	沈線，竹管条線，貼付文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，石英，角閃石，スコリア	31住No.34·46·58·76	－	外面すす付着
93	31号住	2	縄文中	土器	深鉢	[16.0]	－	－	小突起付口縁	沈線文，貼付文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，石英，雲母，スコリア，角閃石，小礫ー多	31住No.13·84·154	－	外面すす付着
94	31号住	3	縄文中	土器	深鉢	[16.4]	[7.0]	(23.5)	突起１個，小突起3個	粘土紐貼付，沈線文	ナデ	浅黄	浅黄	白・黒粒，スコリア	31住No.73	70	底部欠損
94	31号住	4	縄文中	土器	深鉢	[15.0]	[6.4]	(23.5)	平口縁	沈線文，隆線文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	長石，石英，安山岩，角閃石	31住	35	内外面黒変
94	31号住	5	縄文中	土器	深鉢	[13.7]	[6.0]	21.0	平口縁	沈線文，竹管丸押文	ナデ	黄褐	黄褐	安山岩，角閃石，雲母，スコリア	31住No.4·5·7·8	70	外面上半黒変，内面下半黒変
94	31号住	6	縄文中	土器	深鉢	[33·0]	－	－	小突起付口縁	竹管沈線，沈線文，隆線文	ナデ	浅黄	浅黄	長石，角閃石，石英，スコリア	31住No.109·111	－	
95	31号住	7	縄文中	土器	深鉢	[19.0]	10.0	30.5	波状口縁，円筒状	沈線文，隆線文	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白・黒色粒，スコリア	31住No.	70	外面上半黒変
95	31号住	8	縄文中	土器	深鉢	[27.0]	－	－	平縁，橿状	沈線文，竹管押隆線文	ナデ	浅黄	浅黄	安山岩，黒色粒，スコリア	31住No.1·161	20	外面口縁付近黒変
95	31号住	9	縄文中	土器	深鉢	[12.8]	－	－	波状口縁，円筒状	沈線，粘土紐貼付	ナデ	浅黄	浅黄	安山岩，角閃石，長石，石英	31住No.14·67	－	外面口縁部すす付着
95	31号住	10	縄文中	土器	深鉢	[18.0]	－	－	平縁	ナデ，丸押隆線	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，角閃石，スコリア	31住No.45·58	－	内面黒変
96	31号住	11	縄文中	土器	深鉢	[32.0]	－	－	小突起付口縁	隆線文，ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，安山岩，角閃石，小礫	31住No.29·67	－	
96	31号住	12	縄文中	土器	深鉢	[12.0]	－	－	平縁	縄文・沈線文	ナデ	黒褐	黒褐	安山岩・黒色粒	31住	－	
96	31号住	13	縄文中	土器	深鉢	[12.0]	－	－	平縁	竹管文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，黒色粒，スコリア	31住	－	
96	31号住	14	縄文中	土器	深鉢	－	12.4	－	胴部以下	竹管隆線，貼付文，縄文Ｌ，丸押隆線	ナデ	浅黄	浅黄	安山岩，黒色粒，小礫	31住No.18·24～26	70？	外面上半すす付着，内面下半煮沸痕
96	31号住	15	縄文中	土器	深鉢	[38.0]	[16.0]	－	円筒形，破片復元，楕円横区画数段	沈線文，竹管丸押隆線文	ナデ	明褐	明褐	長石・石英ー多，雲母，スコリア，小礫	31住No.47·83·84·130·140·194，32住No.35·36	－	底部内面黒変
96	31号住	16	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	円筒形，楕円横区画数段	沈線文，隆線文	ナデ	浅黄	浅黄	安山岩，スコリア，小礫，黒色粒	31住No.84·86～88，N18	－	
96	31号住	17	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部，円筒形，楕円横区画数段	丸押隆線文，沈線文，貼付文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	安山岩，長石，スコリア，小礫	31住No.70	－	
97	31号住	18	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	口縁付近	粘土紐貼付，隆線文，X字状小把手	ナデ	黄灰	黄灰	安山岩，長石，石英，角閃石，スコリア	31住No.63·64·131	－	外面変色
97	31号住	19	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	粘土紐貼付，刻み目	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，スコリア，小礫	31住No.71·89·138	20？	外面上半薄く黒変，内面黒変

第15表６　土器・陶器観察表（（－）は現状値，〔－〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
97	31号住	20	縄文中	土器	鍔付土器	[26.0]	[13.0]	38.1	壺形	隆線文，ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	安山岩，長石，石英，角閃石，スコリア，小礫	31住No.57·60·62·66·104·112·113·156	50	
97	31号住	21	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	円筒形	丸押隆線文，竹管条線，貼付文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，石英，角閃石，小礫，スコリア	31住No.65·76·81·99·121·142，32住No.4	—	内面下部黒変
97	31号住	22	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管条線，丸押隆線，貼付文	ナデ	褐	褐	安山岩，小礫，スコリア，白・黒色粒	31住No.95	—	
97	31号住	23	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管条線，丸押隆線文，沈線文，貼付文	ナデ			長石・角閃石	31住No.17·117	—	内面全体に黒変
97	31号住	24	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	頚部	沈線文，隆線文，刻み目，粘土紐貼付	ナデ	黄橙	黄橙	安山岩，角閃石	31住No.84·87·90	—	外面すす付着
97	31号住	25	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管条線，丸押隆線	ナデ	橙	橙	長石，石英，雲母，スコリア	31住No.155	—	内面お焦げ状付着
97	31号住	26	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	頚部	沈線文，刻み目	ナデ	赤褐	赤褐	長石，石英	31住	—	
97	31号住	27	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	頚部	斜格子状粘土紐貼付，竹管条線，刻み目隆線	ナデ	橙	橙	安山岩，スコリア，砂礫	31住	—	内面黒変
97	31号住	28	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管条線，隆線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，長石，角閃石，スコリア	31住，29住，30住	20	内外面黒変
98	31号住	29	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管条線，刻み目隆線	ナデ	黄褐	黄褐	長石，石英，雲母，小礫	31住	—	内面黒変
98	31号住	30	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線文，刻み目隆線	ナデ	灰黄	灰黄	安山岩，角閃石	31住No.117	—	外面すす付着
98	31号住	31	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管条線，丸押文	ナデ	赤褐	赤褐	長石，スコリア，白・黒色粒	31住No.77	—	外面薄くすす付着
98	31号住	32	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線文，刺突文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，角閃石	31住No.110	—	外面すす付着
98	31号住	33	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線文，刺突文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，角閃石，スコリア	31住No.20	—	
98	31号住	34	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線，刺突文，丸押文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，石英，角閃石	31住No.151	—	外面すす付着
98	31号住	35	縄文中	土器	深鉢	[22.6]	—	—	口縁～胴部，無文土器	縦ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，小礫，黒色粒	31住No.64·90·130	—	外面上半すす付着，内面黒変
98	31号住	36	縄文中	土器	深鉢	—	[10.4]	—	底部	ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	角閃石－多，長石，安山岩，スコリア，小礫	31住No.111	—	
98	31号住	37	縄文中	土器	深鉢	—	[10.0]	—	底部	ナデ，丸押隆線，底部－ヘラ削り	ナデ	橙	橙	長石，角閃石，安山岩	31住No.11	—	内面黒変
98	31号住	38	縄文中	土器	深鉢	—	[8.0]	—	底部	竹管条線，底部－ヘラ削り	ナデ	明赤褐	明赤褐	安山岩，角閃石，スコリア	31住	—	内面黒変
98	31号住	39	縄文中	土器	深鉢	—	7.0	—	底部	ナデ，底部－網代痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	長石	31住	—	内面剥離
98	31号住	40	縄文中	土器	深鉢	—	[15.0]	—	底部	竹管条線，底部－ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，長石，角閃石，小礫	31住102·109·110	—	内面黒変，お焦げ付着
98	31号住	41	縄文中	土器	深鉢	[27.2]	—	—	平口縁	沈線，縄文ＲＬ	ナデ	灰黄	灰黄	安山岩，角閃石	31住No.118	—	
98	31号住	42	縄文中	土器	鉢	[30.0]	—	—	小波状口縁，Ｘ？字把手付	竹管条線	ナデ	黄橙	黄橙	安山岩，スコリア，白・黒色粒	31住No.60·120，29住，N19	—	
98	31号住	43	縄文中	土器	鉢	[36.0]	—	—		隆線文，交互刺突，ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	安山岩，スコリア	31住No.172	—	
98	31号住	44	縄文中	土器	深鉢	—	[10.0]	—	無文深鉢，底部	ナデ	ナデ	橙	橙	安山岩－多，雲母，スコリア	31住No.68·82	—	
99	31号住	45	縄文中	土器	浅鉢	[40.0]	—	—	口縁～胴部	弧線つなぎ状文	ナデ	明赤褐	明赤褐	結晶片岩－多，長石，石英，雲母，スコリア	31住No.111·149·150	20	群馬県方面の土器か
99	31号住	46	縄文中	土器	台形土器	[24.0]	—	—	台部	ヘラナデ，中央に孔，脚部に孔	ヘラナデ	暗褐	暗褐	安山岩，スコリア	31住No.163	30	表面黒変，粘土らしきもの付着
99	31号住	47	中世	土師質土器	椀	[12.0]	6.4	3.5		ロクロナデ，底部－回転糸切り	ロクロナデ	黄橙	黄橙	白色粒，スコリア，雲母	31住	50	
102	32号住	1	縄文中	土器	深鉢	39.5	16.2	73.5	平口縁，大型，Ｘ字小把手付，4単位	粘土紐貼付，竹管条線，丸押隆線，貼付文	ナデ	明褐	明褐	安山岩，角閃石，長石，石英，雲母，スコリア	32住No.41	70	外面黒変，床面逆位出土
102	32号住	2	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部のみ	竹管条線，刻み目隆線	ナデ	橙	橙	安山岩，石英，長石，雲母，スコリア，黒色粒	32住No.20.42	—	
102	32号住	3	縄文中	土器	深鉢	10.1	6.6	12.5	小型	粘土紐貼付→縄文ＲＬ	ナデ	にぶい赤褐	暗褐	安山岩，黒色粒，スコリア	32住No.37	90	口縁部外面黒色，内面下半煮沸痕
102	32号住	4	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管文，竹管丸押文	ナデ	暗褐	黒褐	安山岩，スコリア，黒色粒	32住	—	
102	32号住	5	縄文中	土器	深鉢	[20.0]	—	—	口縁部	竹管沈線，粘土紐貼付	ナデ	黒褐	黄褐	安山岩，角閃石，スコリア	32住No.21	—	
103	32号住	6	縄文中	土器	深鉢	[30.0]	—	—	口縁～胴部，鉢状	竹管条線，刻み目隆線	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	安山岩，白・黒色粒	32住No.48	—	
103	32号住	7	縄文中	土器	深鉢	[32.0]	—	—	波状口縁	沈線，刻み目隆線	ナデ	褐灰	黒褐	安山岩－やや多，角閃石，スコリア	32住No.3～5	—	
103	32号住	8	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部のみ	竹管条線，刻み目隆線，把手痕	ナデ	黒褐	褐灰	安山岩－やや多，角閃石，スコリア	32住No.52，ﾋﾟｯﾄ1	—	
103	32号住	9	縄文中	土器	深鉢	25.0	10.2	29.5	無文土器	横ナデ　底部－ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩－多，長石	32住No.21	80	底部磨耗
103	32号住	10	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管条線，粘土紐貼付	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	安山岩，長石，黒色粒	32住	—	
103	32号住	11	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	平口縁	微隆線，縄文，沈線	ナデ	にぶい赤橙	にぶい赤橙	長石，スコリア	32住	—	外面すす付着
103	32号住	12	縄文中	土器	深鉢	—	6.0	—	底部	ナデ，底部－ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，白・黒粒	32住No.49	—	内面お焦げ付着
103	32号住	13	縄文中	土器	深鉢	—	5.2	—	底部	横ナデ，底部－ナデ	ナデ	褐灰	灰褐	長石，石英，雲母，スコリア	32住No.5	—	外面黒変
105	33号住	1	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	縦ナデ	ナデ	橙	黒褐	白・黒色粒，スコリア	33住No.15	—	外面上半すす付着，内面下半お焦げ付着，全体に黒変
105	33号住	2	縄文中	土器	深鉢	[15.0]	—	—	口縁，小突起	竹管隆線，丸押隆線	ナデ	暗褐	暗褐	安山岩，白・黒粒	33住No.8	—	内外面黒変，外面すす付着
105	33号住	3	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	頚部	竹管条線，丸押隆線	ナデ	暗褐	暗褐	安山岩，角閃石，スコリア	N16	—	外面黒変
105	33号住	4	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	刻み目隆線，縄文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，スコリア，白・黒粒	33住	—	
105	33号住	5	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	丸押隆線，三角押文，棒引き沈線文，貼付文	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	安山岩，スコリア	33住No.4	—	外面黒変

第15表７　土器・陶器観察表（（－）は現状値，〔－〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
105	33号住	6	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	竹管条線，刻み目隆線	ナデ	にぶい橙	黒褐	石英，長石，安山岩，小礫	33住	－	内面黒変
105	33号住	7	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	竹管条線，刻み目隆線	ナデ	灰褐	にぶい橙	安山岩，角閃石，スコリア	33住	－	外面黒変
105	33号住	8	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	棒引き条線，沈線	ナデ	にぶい橙	灰黄橙	白・黒色粒，スコリア	33住	－	内面剥離
105	33号住	9	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	竹管条線，刻み目隆線	ナデ	にぶい橙	黒褐	安山岩，石英，長石，スコリア	33住	－	内面黒変
105	33号住	10	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	竹管文，沈線，円形刺突文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	石英，長石，安山岩，スコリア，小礫	015No.12	－	10・11は同一個体
105	33号住	11	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	同上	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	同上	33住	－	
105	33号住	12	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	縄文Ｌ	ナデ	にぶい橙	灰褐	安山岩，角閃石，スコリア	015No.15・17・18・21	－	内面下半黒変
105	33号住	13	縄文中	土器	深鉢	－	[11.0]	－	底部	無文，横ナデ	ナデ	暗褐	暗褐	安山岩，スコリア	33住No.2	－	
105	33号住	14	縄文中	土器	深鉢	－	7.6	－	底部	ナデ，底部－網代痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白・黒色粒，スコリア	016	－	
105	33号住	15	縄文中	土器	ミニチュア	[3.8]	3.0	6.2	深鉢形	沈線，刻み目隆線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，スコリア，黒色粒	33住No.16	50	垂下隆線は1本のみ
106	16号住	1	縄文後	土器	深鉢	[36.0]	－	－	口縁，把手付	沈線文，刻み目隆線	ナデ	灰褐	灰褐	長石，石英，スコリア，泥岩	16住No.139・153・155・167	－	もろい，内外面黒変
106	16号住	2	縄文後	土器	深鉢	[36.6]	－	－	口縁，小突起	沈線文，刻み目隆線	ナデ	淡黄	淡黄	安山岩，泥岩，スコリア，黒色粒	16住No.135・136	－	粉っぽい
107	16号住	3	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁，小突起，橋状把手	沈線文	ナデ	浅黄	浅黄	泥岩・砂岩－多，石英，長石，雲母	16住No.90・93	－	口縁外面すす付着，内面黒変
107	16号住	4	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線文，円形刺突文	ナデ	灰黄褐	黒褐	安山岩・泥岩－多，角閃石	16住	－	3・4は同一個体らしい
107	16号住	5	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	沈線文，横ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，雲母，スコリア，白・黒粒	16住No.92	－	5・6は同一個体
107	16号住	6	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	同上	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	同上	16住No.140	－	
107	16号住	7	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁，小突起	沈線文，ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，泥岩，スコリア，長石	16住No.189	－	内面すす付着
107	16号住	8	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	横ナデ	横ナデ	黒褐	黒褐	泥岩－多，角閃石，スコリア	16住No.35	－	内外面黒変
107	16号住	9	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁，小突起	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	泥岩，安山岩，角閃石，輝石	16住No.51	－	
107	16号住	10	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	隆線，円形刺突文	ナデ	赤褐	赤褐	石英，長石，角閃石，スコリア	16住No.87	－	外面黒変
107	16号住	11	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	沈線文	ナデ	黒褐	灰黄褐	安山岩，角閃石，スコリア	16住	－	内外面黒変
107	16号住	12	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	沈線文，刺突文	横ナデ	黒褐	にぶい褐	安山岩，角閃石，スコリア	16住	－	外面黒変
107	16号住	13	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	沈線文，円形刺突文	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，角閃石	16住	－	口唇部黒変，外面風化
107	16号住	14	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線文，刺突文	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	安山岩，石英，スコリア	16住No.120	－	内面黒変
107	16号住	15	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線，刻み目隆線，縄文ＬＲ	横ナデ	明赤褐	暗褐	安山岩，角閃石，スコリア，石英	16住No.165	－	内外面黒変
107	16号住	16	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	頚部	沈線，刺突文，刺突隆線	横ナデ	黒褐	明褐	安山岩，長石，スコリア	16住No.104・119	－	
107	16号住	17	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線文，縄文ＲＬ	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	雲母，長石，スコリア	16住No.124	－	
107	16号住	18	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線文，縄文ＬＲ	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	安山岩，角閃石，輝石，スコリア	16住	－	
107	16号住	19	縄文中～後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	微隆起線，縄文ＬＲ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	砂礫，長石，スコリア	16住No.295	－	
107	16号住	20	縄文中～後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線文，縄文ＬＲ	横ナデ	にぶい橙	黒褐	泥岩，安山岩，輝石，スコリア	16住No.294	－	内面下半黒変
107	16号住	21	縄文後	土器	深鉢	－	[8.0]	－	底部	ナデ，底部－網代痕	ナデ	橙	赤褐	安山岩，輝石，角閃石	16住No.179	－	
107	16号住	22	縄文後	土器	深鉢	－	7.2	－	底部	ナデ，底部－ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	角閃石，白・黒粒，小礫－多	16住No.122	－	
107	16号住	23	縄文後	土器	深鉢	－	7.4	－	底部	ナデ，底部－ナデ	ナデ	赤褐	黒褐	安山岩，長石，スコリア，石英	16住No.13・172・174	－	15と同一らしい
107	16号住 炉体土器	24	縄文後	土器	深鉢	(22.0)	8.8	14.0	底部	縦ナデ，底部－網代痕	ナデ	淡黄	淡黄	安山岩，角閃石	16住No.296	－	内外面剥離激しい
109	17号住	1	縄文後	土器	深鉢	[38.0]	－	－	無文（粗製）土器	縦・横ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	スコリア，白色粒	17住No.11・17・18・102・150・151・148・208・215・220・221・222・236，ﾋﾟｯﾄ11	－	
109	17号住 炉体土器	2	縄文後	土器	深鉢	－	7.4	－	無文	ナデ，底部－網代痕	ナデ	赤褐	明褐	安山岩，長石，輝石，砂礫	17住炉体土器	－	内外面風化著しい
109	17号住	3	縄文後	土器	深鉢	[32.0]	－	－	無文（粗製），平口縁	横ナデ	ナデ	暗赤褐	暗赤褐	安山岩，スコリア，長石，石英	17住No.40・41	－	3・4は同一個体
109	17号住	4	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	ナデ	ナデ	暗赤褐	赤褐	同上	17住No.24・45・75・91・98・99・176・180・	－	
109	17号住	5	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁部	ナデ，円形文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，石英，スコリア	17住No.37	－	内外面部分的に黒変
109	17号住	6	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，角閃石，スコリア	17住No.49・156	－	
109	17号住	7	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁部	沈線文，縄文ＬＲ？	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	泥岩，石英，長石	17住No.224	－	
109	17号住	8	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁，小突起	沈線文，ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	泥岩，スコリア，安山岩	17住	－	
109	17号住	9	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線文，縄文	ナデ	にぶい褐	黒褐	泥岩，石英，スコリア，角閃石	17住No.68・229	－	内面お焦げ付着
109	17号住	10	縄文後	土器	鉢？	－	－	－	胴部	沈線文，隆線文	ナデ	褐	褐	泥岩，輝石，長石	17住	－	
109	17号住	11	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線文，縄文ＬＲ，貼付文	ナデ	暗褐	暗褐	安山岩，角閃石，雲母，砂岩	17住	－	内外面黒変
109	17号住	12	縄文後	土器	注口土器	－	－	－	把手～注口部	沈線文，ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，長石，輝石，スコリア	17住No.16	－	
109	17号住	13	縄文後	土器	深鉢	－	[10.0]	－	底部	ナデ，底部－網代痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，角閃石，スコリア	17住	－	
109	17号住	14	縄文後	土器	深鉢	－	[9.0]	－	底部	ナデ，底部－ナデ	ナデ	褐	褐	安山岩，長石，スコリア	17住No.231	－	
109	17号住	15	縄文後	土器	深鉢	－	[5.8]	－	底部	ナデ，底部－木葉痕	ナデ	橙	橙	安山岩，輝石，スコリア	17住	－	
111	18号住 炉体土器	1	縄文後	土器	深鉢	(25.0)	(26.0)	(8.5)	胴部	沈線文，縄文Ｌ	ナデ	明褐	明褐	安山岩，泥岩	18住No.47 炉	－	内面上部黒変
111	18号住	2	縄文後	土器	深鉢	－	5.4	(10.8)	胴～底部	沈線文，縄文ＬＲ，刻み目隆線，８字状貼付底部－網代痕	ナデ	黒褐	黒褐	安山岩，石英，輝石，角閃石	18住	80	内面黒色
111	18号住	3	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線文，貼付文	ナデ	暗褐	暗褐	長石，石英，雲母	18住No.12	－	
111	18号住	4	縄文後	土器	鉢	－	－	－	口縁，把手	沈線文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，石英，砂岩，スコリア	18住No.27	－	内面黒変
111	18号住	5	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線文，刻み目隆線	ナデ	黒褐	黒褐	石英，長石，雲母，白色粒	18住No.29・30	－	内外面黒変，外面風化

第15表８　土器・陶器観察表（（－）は現状値，〔－〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
112	19号住　炉体土器	1	縄文後	土器	深鉢	[27.8]	9.5	21.8	口縁に数単位の文様	頚部に刻み目隆線，ナデ	口縁部に沈線文，ナデ	橙	橙	安山岩，白・黒色粒	19住炉体土器	70	口縁部内面灰色（灰付着？）
112	19号住	2	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁，粗製	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	スコリアー多，黒色粒	19住No.263	－	
112	19号住	3	縄文後	土器	深鉢	[10.2]	－	－	口縁部	沈線文，縄文，ナデ	沈線文，ナデ	赤褐	赤褐	長石，雲母，スコリア，白色粒	19住No.290	－	表面磨耗
112	19号住	4	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部，粗製	荒い横・斜めナデ	ナデ	橙	橙	白・黒色粒，スコリア，角閃石	19住No.216・251	－	
113	19号住	5	縄文後	土器	深鉢	16.2	9.1	17.2	無文，粗製	ナデ	ナデ	暗褐	暗褐	石英－多，安山岩，黒色粒	19住No.337	90	床直出土，外面上半黒変
113	19号住	6	縄文後	土器	深鉢	[28.4]	－	－	無文平口縁	ナデ	沈線，刻み目，ナデ	暗褐	暗褐	スコリア	19住No.329	－	内面お焦げ付着
113	19号住	7	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	無文，粗製，平口縁	横ナデ，底部－網代痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白・黒色粒，スコリア，砂粒	19住No.30・98・231・263・284	－	
113	19号住	8	縄文後	土器	深鉢	[19.0]	－	－	平口縁，無文	ナデ	ナデ	暗褐	暗褐	白色粒	19住No.278・279・282・283	－	外面すす付着
113	19号住	9	縄文後	土器	注口土器	8.3	8.2	16.5	把手付	頚部に沈線文	ナデ	暗褐	暗褐	安山岩，砂礫	19住No.336	80	内外黒変，もろい
113	19号住	10	縄文後	土器	注口土器	－	－	－	注口部	隆線文，沈線文	ナデ	灰	灰	長石，石英，雲母，白色粒	19住No.323	－	
113	19号住	11	縄文後	土器	注口土器	－	8.5	－	底部	無文，底部－網代痕	ナデ	黒褐	黒褐	白色粒，角閃石，スコリア	19住No.330	－	内外面黒色
114	19号住	12	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	無文，横・斜めナデ	ナデ	暗褐	暗褐	長石，白色粒，スコリア，小礫	19住	－	
114	19号住	13	縄文後	土器	深鉢	－	[13.0]	－	底部	ナデ，底部－網代痕	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒色粒－多，スコリア	19住No.262	－	
114	19号住	14	縄文後	土器	深鉢	－	[10.6]	－	底部	荒い縦ナデ，底部－網代痕	ナデ	橙	橙	黒色粒－多，白色粒，安山岩	19住No.263	－	
114	19号住	15	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	底部	底部－網代痕	ナデ	橙	浅黄橙	長石，スコリア，小礫	19住No.49	－	
114	19号住	16	縄文後	土器	深鉢	－	[10.6]	－	底部	ナデ，底部－ナデ	ナデ	赤褐	黒褐	長石，石英，砂粒，白色粒	19住No.308・322	－	内面お焦げ付着
114	19号住	17	縄文後	土器	深鉢	－	[6.0]	－	底部	ナデ，底部－網代痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	長石，石英，角閃石，小礫	19住No.230	－	
114	19号住	18	縄文後	土器	深鉢	－	7.0	－	底部	ナデ，底部－網代痕	ナデ	浅黄橙	黒褐	スコリア，白色粒	19住No.312	－	
114	19号住	19	縄文後	土器	蓋	[6.5]	－	－	把手付	ナデ	ナデ	橙	橙	安山岩，白・黒粒	19住炉	60	
115	21号住　炉体土器	1	縄文後	土器	深鉢	(20.4)	10.2	(19.5)	無文，粗製	縦ナデ，底部－網代痕	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	安山岩，白・黒色粒	21住炉	－	上部内面被熱，下部内面灰付着
115	21号住	2	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁，突起付	沈線，刻み目隆線	沈線文，ナデ	浅黄橙	浅黄橙	安山岩，スコリア，小礫，黒色粒	21住No.115	－	
115	21号住	3	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁，小波状	沈線，刻み目隆線，貼付文，削り	ナデ，沈線文	灰黄褐	灰黄褐	安山岩，小礫，白色粒	21住No.170	－	内外黒色物付着，鉢か
115	21号住	4	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	刻み目隆線，沈線，貼付文	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	安山岩，角閃石，スコリア，小礫	21住No.273	－	
115	21号住	5	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	刻み目隆線，沈線，縄文ＬＲ	ナデ	黒褐	灰黄褐	安山岩，石英，長石，小礫	21住No.98	－	外面黒変
116	21号住	6	縄文後	土器	鉢	[41.7]	－	－	平口縁	刻み目隆線，貼付文，沈線文，縄文ＬＲ	ナデ	褐灰	褐灰	安山岩，角閃石，スコリア	21住No.165・171・172・178～180・185・187・192・193・218・221・249・257・260・277・278	40	
116	21号住	7	縄文後	土器	深鉢	[19.5]	－	－	口縁，小突起	刻み目隆線，貼付文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，スコリア，小礫	21住No.147	－	
116	21号住	8	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	沈線，縄文ＲＬ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	スコリア，黒色粒	21住No.101	－	
116	21号住	9	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	刻み目隆線，沈線	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	長石，スコリア，黒色粒	21住No.202	－	
116	21号住	10	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	沈線，刺突文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩	21住	－	後期初頭か
116	21号住	11	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	無文，ナデ，横削り	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	安山岩，スコリア	21住No.99	－	
116	21号住	12	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	無文，削り，ナデ	ナデ，削り	褐灰	褐灰	安山岩，長石，小礫，黒色粒	21住No.407	－	
116	21号住	13	縄文後	土器	注口土器	－	－	－	把手部	沈線，縄文ＬＲ	ナデ	暗褐	明褐	安山岩，長石，小礫	268	－	13・14は同一個体
116	21号住	14	縄文後	土器	同上	－	－	－	把手～胴部	同上	ナデ	暗褐	明褐	同上	21住No.188	－	
116	21号住	15	縄文後	土器	注口土器	－	－	－	胴部	沈線，刺突文，ナデ	ナデ	褐灰	黒褐		21住No.276	－	内外面黒色
116	21号住	16	縄文後	土器	浅鉢	[16.0]	6.0	[6.8]	4単位の把手	ナデ	ナデ，沈線	黒褐	黒褐	安山岩，スコリア，黒色粒	21住No.175～177	70	内外面黒色（黒斑）
117	21号住	17	縄文後	土器	深鉢	－	[12.0]	－	底部	ナデ，底部－網代	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石，小礫，スコリア	21住No.206	－	
117	21号住	18	縄文後	土器	深鉢	－	11.2	－	底部	ナデ，底部－網代	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，スコリア	21住No.234・271・272	－	
117	21号住	19	縄文後	土器	深鉢	－	[8.2]	－	底部	ナデ，底部－網代	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，スコリア	21住No.156・158	－	
117	21号住	20	縄文後	土器	深鉢	－	[11.4]	－	底部	ナデ，底部－網代	ナデ	にぶい橙	褐灰	安山岩，スコリア，白・黒色粒	21住No.96	－	内面黒変
117	21号住	21	縄文後	土器	深鉢	－	[5.2]	－	底部	ナデ，底部－網代	ナデ	灰白	灰白	安山岩，スコリア，白・黒色粒	21住	－	ミニチュアか
117	21号住	22	縄文後	土器	鉢？	－	[2.0]	－	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石，小礫，黒曜石片	21住No.232	－	ミニチュアか
119	26号住　炉体土器	1	縄文後	土器	深鉢	(12.2)	8.0	(7.5)	底部	ナデ，底部－網代	ナデ	にぶい黄橙	黒褐	安山岩，輝石，角閃石	26住No.24	－	外面剥離
119	26号住	2	縄文後	土器	双口土器	－	10.1×7.0	(6.3)	胴～底部，底部で連結	刺突沈線文　底部－網代痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，輝石，角閃石，スコリア	26住No.17	－	
119	26号住	3	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁，小突起	沈線文，縄文	ナデ，沈線	にぶい橙	にぶい橙	雲母，白・黒色粒	26住　炉	－	
119	26号住	4	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石，長石，スコリア，白色粒	Q17	－	
119	26号住	5	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴部	沈線文	ナデ	褐灰	褐灰	泥岩，安山岩，角閃石	26住No.8	－	
119	35号住	1	縄文後	土器	鉢	18.4	8.7	14.5	口縁に5カ所の凹み	無文，ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	安山岩，長石，雲母，スコリア	35住No.2	90	
119	35号住　炉体土器	2	縄文後	土器	深鉢	(18.0)	7.7	7.3	底部付近	沈線，縄文ＬＲ	ナデ	赤褐	黒褐	雲母，長石	35住No.15炉	－	内外面剥離，内面黒変
119	35号住	3	縄文後	土器	鉢か	－	－	－	口縁部	沈線文，刺突文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，小礫，スコリア	35住	－	
119	35号住	4	縄文後	土器	鉢か	－	－	－	口縁部	沈線文，刺突文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	安山岩，角閃石	35住	－	
119	35号住	5	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	平口縁	刻み目隆線	ナデ	灰褐	にぶい黄橙	角閃石，石英	35住	－	
119	35号住	6	縄文後	土器	浅鉢	－	－	－	平口縁	ナデ	ナデ，沈線，刺突文	黒褐	黒褐	角閃石，長石，砂粒	35住	－	
119	35号住	7	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	底部	ナデ，底－ナデ	ナデ	橙	橙	角閃石，長石，スコリア	35住No.6	－	
120	1号住	1	平安	土師器	坏	[14.9]	[5.6]	4.3		ロクロナデ，ヘラ削り，底－ヘラ削り	ロクロナデ	橙	にぶい赤褐	スコリア，長石	1住No.96	30	

第15表９　土器・陶器観察表（（－）は現状値，〔－〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
120	1号住	2	平安	土師器	坏	[13.6]	[5.3]	4.0		同上	同上	橙	橙	同上	1住No.134	10	
120	1号住	3	平安	土師器	坏	—	[4.4]	—	体～底部	ロクロナデ後ヘラ削り，底－糸切り後ヘラ削り	同上	橙	橙	スコリア，雲母	1住No.202	30	体部外面墨書「矢」
120	1号住	4	平安	土師器	坏	—	[4.6]	—	体～底部	ヘラ削り，底－ヘラ削り	同上	橙	橙	スコリア，長石	1住No.2	30	
120	1号住	5	平安	土師器	皿	[12.4]	[3.8]	2.4		同上	同上	橙	橙	スコリア，白色粒	1住No.144·145	40	
120	1号住	6	平安	土師器	皿	[12.4]	[6.0]	[2.2]		同上	同上	橙	橙	スコリア	1住No.	10	体部外面墨書「申」
120	1号住	7	平安	土師器	皿	—	[6.0]	—	体～底部	ロクロナデ，底－糸切り後ヘラ削り	同上	橙	にぶい橙	同上	1住No.68	20	内面黒変
120	1号住	8	平安	土師器	皿	—	[5.0]	—	同上	同上	同上	橙	橙	同上	1住	20	
120	1号住	9	平安	土師器	皿？	[12.0]	—	—	口縁部	ロクロナデ	同上	橙	橙	同上	1住No.2	—	体部外面に刻書？
120	1号住	10	平安	土師器	皿	—	[6.4]	—	底部	ロクロナデ，底－糸切り	ロクロナデ，ミガキ	橙	橙	長石，石英，角閃石，スコリア	1住No.9		胎土在地的
120	1号住	11	平安	土師器	皿	—	5.0	—	底部	ロクロナデ後ヘラ削り，底部－糸切り後ヘラ削り	ロクロナデ	明黄橙	明黄橙	長石，スコリア	1住ﾋﾟｯﾄ9	—	
120	1号住	12	平安	土師器	皿？	—	[5.6]	—	底部	ロクロナデ，底部－回転糸切り	同上	橙	橙	スコリア	1住No.93	—	
120	1号住	13	平安	土師器	坏	—	5.0	—	底部	同上	同上	浅黄橙	浅黄橙	長石，スコリア	1住床	—	底部黒斑
120	1号住	14	平安	土師器	皿	[14.0]	—	—	口縁～体部	ロクロナデ，回転削り	同上	橙	橙	スコリア	1住No.204	20	
120	1号住	15	平安	土師器	黒色坏	13.4	5.3	3.7		ロクロナデ，底－糸切り	ミガキ，黒色	橙	橙	泥岩，黒色粒，スコリア	1住No.103·117	70	
120	1号住	16	平安	土師器	黒色坏	[13.2]	—	—	口縁～体部	ロクロナデ	同上	明黄褐	黄褐～黒褐	長石	1住No.188·床	—	黒色が薄い
120	1号住	17	平安	土師器	黒色坏	—	[5.6]	—	底部	ロクロナデ，底－糸切り	放射状ミガキ，黒色	橙	黒色	長石，小礫，スコリア	1住No.88	—	
120	1号住	18	平安	土師器	黒色皿	[12.0]	—	—	口縁部	ロクロナデ	ミガキ，黒色	黄橙	黒色	安山岩，長石，スコリア，角閃石	1住	—	
120	1号住	19	平安	土師器	黒色坏	—	[6.6]	—	底部	ロクロナデ，底－糸切り	同上	にぶい黄褐	黒色	角閃石，スコリア，長石	1住No.92·115	—	
120	1号住	20	平安	土師器	黒色？坏	[14.0]	[6.0]	3.7		ロクロナデ，底部－回転糸切り	ミガキ	明黄褐	明黄褐	角閃石，スコリア	1住No.157·178	30	内面の黒色がとんでいる
120	1号住	21	平安	土師器	黒色高台皿？	—	8.0	—	底部	ロクロナデ，底－付高台	ミガキ，黒色	橙	黒色	スコリア，長石	1住	—	
120	1号住	22	平安	灰釉	皿	[15.0]	7.0	2.5	釉は刷毛塗り	ロクロナデ，付高台	ナデ，内面施釉	灰オリーブ	オリーブ灰	黒・白色粒	1住No.23·24·ｶﾏﾄﾞ	70	
120	1号住	23	平安	灰釉	皿	—	7.0	—	同上	同上	同上	浅黄	浅黄		1住No.211	—	底部外面に墨書「千人」
120	1号住	24	平安	灰釉	皿	—	8.9	—	同上	同上	同上	灰白	灰白	白色粒	1住No.71	—	転用硯－底部外面利用，高台周辺打ち欠き
120	1号住	25	平安	土師器	黒色坏	—	—	—	口縁部	ロクロナデ	ミガキ，黒色	にぶい黄橙	黒色	角閃石，長石	1号住	—	外面墨書
120	1号住	26	平安	土師器	黒色坏	—	—	—	体部小片	同上	同上		黒色	スコリア，黒色粒	1住床	—	外面墨書
120	1号住	27	平安	土師器	坏	—	—	—	体部小片	同上	ロクロナデ	橙	橙	スコリア，長石	1住	—	外面墨書
120	1号住	28	平安	土師器	皿	—	—	—	底部小片	体・底－ヘラ削り	同上	橙	橙	同上	1住	—	底部外面墨書
120	1号住	29	平安	土師器	甕	[29.0]	—	—	口縁～胴	縦刷毛目	横刷毛目	橙	橙	スコリア，黒色粒	1住No.130·53·70	—	
120	1号住	30	平安	土師器	甕	[31.0]	—	—	同上	同上	同上	明褐	明褐	角閃石，長石，雲母	1住No.167·175	—	
121	1号住	31	平安	土師器	甕	30.0	—	—	同上	同上	同上	暗赤褐	暗赤褐	同上	1住No.34·40·41·44·58·61·162·163·167·176·210·ｶﾏﾄﾞ	—	
121	1号住	32	平安	土師器	甕	[28.0]	—	—	同上	同上	同上	褐	橙	スコリア，長石，小礫	1住No.15·16·32·33·56·67·179·208·211·214·ｶﾏﾄﾞ	—	
121	1号住	33	平安	土師器	甕	[32.0]	—	—	同上	ナデ	同上	橙	橙	長石，雲母，角閃石，スコリア	1住No.219	—	
121	1号住	34	平安	土師器	甕	[34.0]	—	—	同上	縦刷毛目	同上	暗褐	明褐	同上	1住No.122	—	
121	1号住	35	平安	土師器	甕	[32.0]	—	—	同上	同上	同上	明褐	褐	同上	1住No.184	—	
121	1号住	36	平安	土師器	甕	—	[8.0]	—	胴～底部	同上	同上	明褐	にぶい褐	安山岩，長石，スコリア，小礫	1住No.149·151·156	—	胴部に粘土付着，在地的胎土
121	1号住	37	平安	土師器	甕	—	[8.0]	—	底部	縦刷毛目，底－木葉痕	ナデ	褐	褐	長石，角閃石，雲母	1住No.207	—	
121	1号住	38	平安	土師器	甕	—	8.8	—	底部	同上	横刷毛目	黄褐	橙	安山岩，角閃石，スコリア	1住No.29	—	
121	1号住	39	平安	土師器	甕	—	8.6	—	底部	同上	同上	赤褐	黒褐	長石，角閃石，スコリア，雲母	1住No.97	—	
121	1号住	40	平安	土師器	甕	[17.0]	—	—	口縁～胴部	縦刷毛目	同上	にぶい黄褐	明黄褐	長石，スコリア，雲母	1住床	—	外面暗色，内面下半黒変
121	1号住	41	平安	土師器	ロクロ甕	[16.0]	—	—	同上	カキメ状の細かいロクロナデ	ロクロナデ	褐	明黄褐	安山岩，スコリア	1住床	—	内面黒変
121	1号住	42	平安	須恵器	甕	—	—	—	胴部	叩き目	ナデ	オリーブ灰	オリーブ灰	長石，スコリア，白色粒	1住No.127	—	
121	1号住	43	平安	須恵器	甕	—	—	—	胴～底部	叩き目	ナデ	オリーブ灰	オリーブ灰	同上	1住No.81·82	—	
122	2号住	1	平安	土師器	黒色高台坏	[13.8]	7.0	4.9		ロクロナデ，付高台	ロクロナデ，ミガキ，黒色	黄褐	黒	安山岩，スコリア，白・黒色粒	2住No.44·45	40	底部外面黒変，体部外面墨書「成」
122	2号住	2	平安	土師器	同上	[14.6]	[7.6]	[6.0]		同上	同上	橙	黒色	長石，スコリア	2住No.16·17.25	40	
122	2号住	3	平安	土師器	同上	—	[7.8]	—	体～底部	同上	同上	にぶい橙	黒色	同上	2住No.38	—	
122	2号住	4	平安	土師器	黒色坏	—	6.0	—	同上	ロクロナデ，底部－回転糸切り	同上	にぶい黄橙	黒色	安山岩，石英，スコリア	2住No.34	—	

第15表10　土器・陶器観察表（（－）は現状値，〔－〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
122	2号住	5	平安	土師器	坏	[11.6]	−	−	口縁～胴	ロクロナデ，ヘラ削り	ロクロナデ	にぶい橙	にぶい橙	スコリア，黒色粒	2住No.26・ｶﾏﾄﾞ	−	
122	2号住	6	平安	土師器	甕	[30.0]	10.8	−	破片復元	縦ヘラナデ	横ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，角閃石，スコリア，石英，長石	2住No.20・22・24・27・40・42・43・	−	
122	2号住	7	平安	土師器	羽釜	[17.0]	−	−	口縁～胴	同上	同上	にぶい褐	にぶい黄橙	角閃石，小礫，スコリア	2住No.2・4・5	−	鍔部は欠損
122	2号住	8	平安	土師器	甕	−	−	−	同上	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	スコリア，白色粒	2住No.	−	
122	2号住	9	平安	須恵器	甕	−	[15.4]	−	底部，平底	叩き目，底－ナデ	ナデ	青灰	青灰	白・黒色粒	2住ｶﾏﾄﾞ	−	
123	4号住	1	平安	土師器	坏	−	[6.5]	−	体～底部	ロクロナデ，ヘラ削り，底－糸切り後ヘラ削り	ロクロナデ	橙	橙	スコリア，白色粒	4住ﾋﾟｯﾄ，058No.3	30	
123	4号住	2	平安	土師器	坏	[11.2]	[6.0]	4.0		ロクロナデ，回転ヘラ削り，底部－回転糸切り後手持ちヘラ削り	ロクロナデ後放射状暗文	暗橙	暗橙	スコリア	4住No.107	20	
123	4号住	3	平安	土師器	坏	−	6.0	−	体～底部	体・底－ヘラ削り	同上	明褐	明褐	同上	4住No.4	−	
123	4号住	4	平安	土師器	黒色坏	−	[5.0]	−	同上	ロクロナデ，底－ヘラ削り	ミガキ，黒色	明褐	黒	スコリア，黒・白色粒	4住No.13	−	
123	4号住	5	平安	土師器	蓋	−	−	−	つまみ～体部	ロクロナデ，回転ヘラ削り，つまみ接合	ロクロナデ	黄橙	黄橙	同上	4住No.106	10	
123	4号住	6	平安	土師器	甕	−	[8.6]	−	体～底部	縦刷毛目，底－木葉痕	横刷毛目	褐	赤褐	長石，雲母，黒色粒	4住床下	−	
123	4号住	7	平安	土師器	甕	[26.2]	−	−	口縁～胴	縦刷毛目	横刷毛目	暗褐	褐	同上	4住No.101・ﾋﾟｯﾄ	−	
123	5号住	1	平安	土師器	坏	[11.2]	5.2	4.2		ロクロナデ後ヘラ削り，底－ヘラ削り	ロクロナデ，放射状暗文	にぶい褐	橙	スコリア	5住No.1～3,10	60	体部外面墨書「水」
123	5号住	2	平安	土師器	坏	[10.6]	4.6	4.1		同上	同上	橙	橙	雲母，スコリア，白色粒	5住No.121・ｶﾏﾄﾞ	50	
123	5号住	3	平安	土師器	坏	11.8	4.8	4.9		同上	同上	橙	橙	同上	5住No.59・63～68	75	体部外面墨書
123	5号住	4	平安	土師器	坏	[11.6]	−	−	口縁～体	同上	同上	橙	橙	スコリア，黒色粒	5住No.62,114	20	
123	5号住	5	平安	土師器	坏	−	5.2	−	底部	同上	同上	橙	橙	同上	5住No.61，床下	−	底部内面に刻書「十」
123	5号住	6	平安	土師器	坏	[11.3]	[4.9]	4.3		ロクロナデ後ヘラ削り，底－糸切り	ロクロナデ	にぶい橙	橙	雲母，スコリア，黒色粒	5住No.34,84,87,89	30	
123	5号住	7	平安	土師器	黒色坏	12.2	6.4	4.0		ロクロナデ	ロクロナデ，ミガキ	にぶい黄橙	黒	白・黒色粒	5住No.57	98	
123	5号住	8	平安	土師器	小型甕	[14.7]	−	−	口縁～胴	縦刷毛目	横刷毛目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白・黒色粒	5住	−	内面黒変，タール状
123	5号住	9	平安	土師器	小型甕	−	−	−	口縁部	同上	同上	にぶい橙	にぶい橙	雲母，スコリア，黒色粒	5住No.50	−	甲斐型坏的胎土
123	5号住	10	平安	土師器	ロクロ甕	[13.5]	−	−	口縁～胴	ロクロナデ	ロクロナデ	橙	にぶい褐	角閃石，スコリア，長石，小礫	5住No.58,117,ｶﾏﾄﾞ	−	
123	5号住	11	平安	土師器	ロクロ甕	−	[9.0]	−	胴～底部	ロクロナデ，底－糸切り	同上	明褐	明褐	長石，雲母，スコリア，小礫	5住No.5.6	−	底部外面灰付着，黒変
123	5号住	12	平安	土師器	ロクロ甕	−	[6.4]	−	底部	同上	同上	橙	にぶい黄褐	スコリア，長石，白色粒	5住No.53	−	
124	5号住	13	平安	土師器	甕	[28.8]	−	−	口縁～胴	縦刷毛目	横刷毛目	にぶい褐	褐	雲母－多，長石，黒色粒	5住No.	−	
124	5号住	14	平安	土師器	甕	[27.0]	−	−	口縁	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	橙	雲母，長石，スコリア，角閃石	5住No.13	−	
124	5号住	15	平安	土師器	甕	[24.6]	−	−	同上	同上	同上	にぶい褐	褐	同上	5住	−	
124	5号住	16	平安	土師器	甕	−	−	−	胴部	縦刷毛目	横刷毛目	にぶい赤褐	にぶい赤褐	同上	5住No.51・54	−	
124	5号住	17	平安	土師器	甕	−	−	−	口縁～胴部	同上	同上	にぶい赤褐	明赤褐	同上	5住No.106	−	
124	6号住	1	平安	土師器	坏	14.0	[6.0]	5.3		ロクロナデ後ヘラ削り，底－糸切り後ヘラ削り	ロクロナデ，暗文	橙	橙	スコリア，白色粒	6住No.74,90	−	
124	6号住	2	平安	土師器	坏	[12.0]	−	−	口縁～体	ロクロナデ後ヘラ削り	ロクロナデ	橙	橙	石英，スコリア，白・黒色粒	6住南側ﾋﾟｯﾄ	−	
124	6号住	3	平安	土師器	黒色坏	[15.0]	−	−	口縁～底部片	同上	同上	にぶい橙	にぶい橙	同上	6住No.69	−	甲斐型黒色土器
124	6号住	4	平安	土師器	坏	[16.0]	−	−	口縁～体	同上	ロクロナデ，暗文，ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	スコリア，白・黒色粒	6住No.59・140・177	50	甲斐型坏の胎土
124	6号住	5	平安	土師器	皿	−	[5.0]	−	体～底部	ロクロナデ後ヘラ削り，底－ヘラ削り	ロクロナデ	橙	橙	スコリア，黒色粒	6住No.70,95	−	体部外面に墨書
124	6号住	6	平安	土師器	黒色坏	[10.6]	4.6	5.0		ロクロナデ，一部ヘラ削り，底－糸切り	ナデ，ミガキ，黒色	にぶい黄橙	黒	スコリア，長石，黒色粒	6住No.180	45	
124	6号住	7	平安	土師器	黒色坏	[13.0]	6.0	4.6		ロクロナデ，底－糸切り	ヘラミガキ，黒色	黒色		安山岩，スコリア，長石，黒色粒	6住No.113・114	50	
124	6号住	8	平安	土師器	黒色坏	[15.0]	6.4	5.4		同上	同上	にぶい黄橙	黒	スコリア，黒色粒	6住No.93・98・104	20	
124	6号住	9	平安	土師器	黒色坏	−	6.0	−	体～底部	同上	同上	にぶい橙	黒	長石，スコリア，黒色粒	6住No.75	−	内面風化
124	6号住	10	平安	土師器	黒色坏	16.1	6.8	6.8		同上	同上	にぶい黄橙	黒	長石，スコリア，角閃石	6住No.183	98	
124	6号住	11	平安	土師器	黒色坏	16.0	6.4	6.3		同上	同上	にぶい橙	黒	スコリア，角閃石，黒色粒	6住No.44・141・159・163・180・ｶﾏﾄﾞ	60	
124	6号住	12	平安	土師器	黒色坏	−	[6.0]	−	体～底部	同上	同上		黒	長石，雲母，黒色粒	6住No.180	−	
124	6号住	13	平安	土師器	黒色皿	−	5.4	−	同上	同上	同上	灰黄褐	黒	角閃石，白色粒	6住No.157	−	
124	6号住	14	平安	土師器	黒色皿	[13.0]	−	−	口縁～体	ロクロナデ	同上	褐灰	黒	角閃石，スコリア，白色粒	6住No.102・107	−	外面も薄い黒色
124	6号住	15	平安	土師器	黒色坏	−	4.8	−	体～底部	ロクロナデ，底－回転ヘラ削り	同上	にぶい橙	黒	スコリア，白・黒色粒	6住No.39	−	体部外面墨書
124	6号住	16	平安	土師器	黒色坏	−	−	−	体部片	ロクロナデ	同上	浅黄橙	黒	スコリア，黒色粒	6住	−	体部外面墨書
124	6号住	17	平安	須恵器	坏	[13.0]	−	−	口縁～体	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白	灰白	白・黒色粒	6住No.5	−	
124	6号住	18	平安	須恵器	坏	[12.0]	−	−	同上	同上	同上	灰白	灰白	黒色粒	6住ｶﾏﾄﾞ	−	
125	6号住	19	平安	土師器	ロクロ甕	11.9	6.0	11.5		ロクロナデ，一部回転ヘラ削り，底－糸切り	同上	浅黄橙	浅黄橙	スコリア，黒色粒	6住No.41・129・158・174	90	内外面黒変
125	6号住	20	平安	土師器	ロクロ甕	15.8	−	−	口縁～体	ロクロナデ	同上	にぶい橙	にぶい橙	スコリア，白・黒色粒	6住No.19・43・146・147・150・154	−	外面上半黒変

第15表11　土器・陶器観察表（（−）は現状値，〔−〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
125	6号住	21	平安	土師器	ロクロ甕	[15.0]	−	−	同上	同上	同上	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，スコリア，黒色粒，小礫	6住No.145・146・177	−	口縁外面すす付着，内面黒変
125	6号住	22	平安	土師器	ロクロ甕	−	6.6	−	体～底部	ロクロナデ，一部回転ヘラ削り，底－糸切り	同上	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，スコリア，黒色粒，小礫	6住No.53・54・152・163	−	外面すす付着，内面風化・黒変
125	6号住	23	平安	土師器	甕	[28.0]	9.0	−		縦刷毛目，底部－木葉痕	横刷毛目	灰褐	灰褐	長石，雲母，スコリア，石英	6住No.45・48・51・146・149・155・156・158・161・162・170～174・176・179～182	−	
125	6号住	24	平安	土師器	甕	[13.0]	−	−	口縁～体	縦刷毛目	横刷毛目	にぶい赤褐	にぶい赤褐	雲母－やや多，長石，スコリア，黒色粒	6住No.146・148	−	内面下半あく状付着
125	6号住	25	平安	土師器	甕	[27.0]	−	−	同上	同上	同上	褐灰	褐灰	同上	6住No.60	−	外面黒変
125	6号住	26	平安	土師器	甕	[28.0]	−	−	同上	同上	同上	にぶい橙	にぶい橙	同上	6住No.35	−	
125	6号住	27	平安	土師器	小型甕	[19.0]	−	−	同上	同上	同上	にぶい赤褐	にぶい赤褐	長石，雲母，黒色粒	6住No.139・143・175・177・ｶﾏﾄﾞ	−	
125	6号住	28	平安	土師器	甕	−	−	−	口縁	横ナデ	同上	にぶい橙	にぶい橙	雲母－多，長石，黒色粒	6住No.24・29・32・65	−	
125	6号住	29	平安	土師器	甕	−	−	−	口縁～胴	縦ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	スコリア，白色粒	6住No.80	−	口縁部外面すす付着
125	6号住	30	縄文中	土器	深鉢	[46.0]	−	−	口縁	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，スコリア，雲母，角閃石，長石	6住No.63170	−	ピット重複か
126	12号住	1	平安	土師器	坏	[11.4]	5.8	4.2		ロクロナデ後ヘラ削り，底－糸切り後ヘラ削り	ロクロナデ，放射状暗文	橙	橙	スコリア，白・黒色粒	12住No.6	80	
126	12号住	2	平安	土師器	坏	[13.2]	−	−	口縁～体	ロクロナデ	同上	橙	にぶい橙	スコリア，黒色粒，雲母	12住No.35・36	20	
126	12号住	3	平安	土師器	坏	[13.0]	−	−	同上	同上	ロクロナデ，ミガキ，黒色	にぶい黄橙	黒	長石，スコリア	12住ｶﾏﾄﾞ	−	
126	12号住	4	平安	土師器	坏	[13.6]	[8.4]	3.5		ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	安山岩，角閃石，スコリア	12住	15	在地的
126	12号住	5	平安	土師器	甕	[28.0]	−	−	口縁～胴	縦刷毛目	横刷毛目	にぶい褐	にぶい褐	長石，角閃石，雲母，スコリア	12住No.5・31	−	
126	12号住	6	平安	土師器	甕	−	8.4	−	胴～底部	縦刷毛目，底－木葉痕	横刷毛目	橙	にぶい赤褐	同上	12住No.46	−	
126	12号住	7	平安	土師器	甕	[16.0]	−	−	口縁～胴	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	スコリア，白・黒色粒	12住No.52，床下	−	在地的
126	12号住	8	平安	土師器	甕	[19.3]	−	−	同上	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	スコリア，長石	12住ｶﾏﾄﾞ	−	内面黒変
126	12号住	9	平安	土師器	甕	−	−	−	胴	ロクロナデ，ヘラ削り	ロクロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	スコリア，長石，黒色粒	12住No.47・48	−	
126	15号住	1	平安	土師器	甕	[21.8]	−	−	口縁～胴	縦刷毛目	横刷毛目	明赤褐	明赤褐	石英，長石，雲母，黒色粒	15住	−	
127	20号住	1	平安	須恵器	坏	[11.8]	[6.6]	3.3		ロクロナデ，底－糸切り	ロクロナデ	浅黄	浅黄	安山岩－やや多，長石，スコリア	20住	18	在地的胎土
127	20号住	2	平安	土師器	甕	[14.9]	−	−	口縁	ロクロナデ，ヘラ削り	ロクロナデ	にぶい橙	橙	長石，スコリア，黒色粒	20住No.54	−	武蔵型か，胎土・色は甲斐型坏的
127	23号住	1	平安	土師器	甕	[27.0]	−	−	口縁	縦刷毛目	横刷毛目	褐	にぶい赤褐	長石，石英，雲母，スコリア	23住	−	内面黒変
127	23号住	2	縄文後	土器	深鉢	−	−	−	小突起付口縁	沈線文，刺突文	ナデ	黒褐	灰白	安山岩，長石，石英，角閃石	23住	−	
127	24号住	1	平安	土師器	坏	[12.2]	−	−	口縁～体	ロクロナデ後回転ヘラ削り	ミガキ後暗文	にぶい黄褐	にぶい橙	長石，石英，角閃石，スコリア	24住No.30	30	在地的（甲斐型模倣坏）
127	24号住	2	平安	土師器	坏	[14.0]	−	−	同上	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白	灰白		24住	−	
127	24号住	3	平安	土師器	坏	[11.8]	−	−	同上	ロクロナデ後ヘラ削り	同上	にぶい橙	にぶい橙	スコリア	24住	−	
127	24号住	4	平安	土師器	坏	−	−	−	体部片	ヘラ削り	放射状暗文	橙	橙	黒色粒	24住	−	体部外面墨書
127	24号住	5	平安	土師器	黒色坏	12.7	4.8	4.4		ロクロナデ後回転ヘラ削り，底－糸切り	ヘラミガキ，黒色	にぶい橙	黒	スコリア，白・黒色粒	24住No.26	98	
127	24号住	6	平安	土師器	黒色坏	12.3	5.0	4.3		ロクロナデ，底－糸切り	ナデ，ミガキ，黒色	橙	黒	雲母，スコリア，白・黒色粒	24住No.36	100	
127	24号住	7	平安	土師器	黒色皿	[12.2]	5.2	2.6		ロクロナデ後回転ヘラ削り	ナデ，ミガキ，黒色	にぶい黄橙	黒	白・黒色粒	24住No.1	50	体部外面黒変，底部にヘラ書き？あり
127	24号住	8	平安	土師器	黒色皿	−	[6.0]	−	体～底部	ナデ，底－糸切り	同上	にぶい黄橙	黒		24住	−	
127	24号住	9		土師器	皿	−	5.4	−	体～底部	ナデ，底－糸切り	ナデ，ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	白・黒色粒	24住No.8	−	
127	24号住	10	平安	須恵器	高台坏	[16.0]	[7.0]	−		ロクロナデ，底－糸切り後付け高台	ロクロナデ	黄灰	黄灰	スコリア，白色粒	24住No.12・ｶﾏﾄﾞ	10	内面に刻書？
127	24号住	11	平安	土師器	ロクロ甕	−	[6.0]	−	体～底部	ナデ，底－糸切り	ロクロナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，角閃石，スコリア，小礫	24住	−	
127	24号住	12	平安	土師器	甕	[30.0]	−	−	口縁～胴	縦刷毛目	横刷毛目	にぶい赤褐	にぶい赤褐	雲母－多，長石，白・黒色粒	24住No.45	−	
127	24号住	13	平安	土師器	小型甕	[15.0]	−	−	同上	同上	同上	同上	同上	雲母，長石，石英，スコリア	24住	−	
127	24号住	14	平安	土師器	甕	−	−	−	口縁	横ナデ	横刷毛目	にぶい赤褐	にぶい赤褐	同上	24住No.38	−	
127	24号住	15	平安	土師器	甕	−	−	−	同上	同上	同上	橙	橙	白・黒色粒	S15	−	
127	24号住	16	平安	土師器	甕	−	−	−	同上	同上	同上	にぶい赤褐	にぶい赤褐	白・黒色粒，雲母	24住No.3	−	
127	24号住	17	平安	土師器	甕	−	−	−	同上	同上	同上			雲母－多，長石，白・黒色粒	24住	−	
128	24号住	18	平安	須恵器	長頸壷	8.8	−	−	同上	ロクロナデ	ロクロナデ	黄灰	黄灰	白色粒	24住No.24・25・37	−	
128	24号住	19	平安	灰釉	長頸壷	[9.0]	−	−	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白	灰白	白・黒色粒	24住	−	
128	24号住	20	中世	土器	内耳土器	[30.0]	[22.0]	−	破片復元	ナデ	ロクロナデ			安山岩，石英，雲母，スコリア，黒色粒	24住No.4・6・R14・R15・S15	−	外面全体にすす付着
129	25号住	1	平安	土師器	坏	[12.0]	−	−	口縁～体	ロクロナデ，横ヘラ削り	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白色粒，スコリア	25住	15	外面一部黒変，甲斐型模倣坏
129	25号住	2	平安	土師器	坏	[12.0]	−	−	同上	ロクロナデ，ヘラ削り	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白色粒，スコリア	25住No.27・ｶﾏﾄﾞ・R13	30	内外面剥離多い
129	25号住	3	平安	土師器	坏	[15.0]	−	−	同上	同上	同上	にぶい褐	にぶい褐	白色粒，スコリア	25住No.32・ｶﾏﾄﾞ	−	
129	25号住	4	平安	土師器	皿	[12.0]	−	−	同上	ロクロナデ	ナデ	橙	橙	白色粒，スコリア	25住	−	体部外面墨書
129	25号住	5	平安	土師器	坏	[13.6]	[6.0]	4.6		ロクロナデ，底－糸切り	ナデ，ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	黒色粒－やや多，雲母，スコリア，白色粒	25住No.39	20	本来は黒色土器か
129	25号住	6	平安	土師器	皿？	−	5.4	−	体～底部	ロクロナデ，底－糸切り	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石，スコリア，白色粒	25住No.5	−	本来は黒色土器か

第15表12　土器・陶器観察表（（－）は現状値，〔－〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
129	25号住	7	平安	土師器	黒色坏	12.0	[6.3]	4.2		ロクロナデ	ナデ，ミガキ，黒色	にぶい橙	黒色	雲母，白・黒色粒	25住No.32・ｶﾏﾄﾞ	40	
129	25号住	8	平安	土師器	黒色坏	[12.3]	6.4	6.1		ロクロナデ，ヘラ削り，底－糸切り	同上	にぶい橙	黒色	雲母，白・黒色粒，スコリア	25住No.15	80	
129	25号住	9	平安	土師器	黒色坏	[12.0]	－	－	口縁～体	ロクロナデ	同上	にぶい褐	黒色	スコリア，白・黒色粒	25住	－	
129	25号住	10	平安	土師器	黒色坏	[13.0]	－	－	同上	ロクロナデ	同上	にぶい赤褐	黒	雲母，スコリア，白色粒	25住	－	外面黒変
129	25号住	11	平安	土師器	黒色坏	－	[7.0]	－	体～底部	ロクロナデ，底－糸切り	同上	にぶい橙	黒	雲母，角閃石，白色粒	25住No.9	－	外面黒変
129	25号住	12	平安	土師器	黒色坏	[14.0]	－	－	口縁～体	ロクロナデ	同上	にぶい赤褐	黒	雲母，スコリア，白・黒色粒	25住No.35	20	12・13は同一の可能性
129	25号住	13	平安	土師器	黒色坏	[13.2]	[5.6]	3.7		ロクロナデ，底－糸切り	同上	にぶい褐	黒	スコリア，白・黒色粒	25住No.24	25	
129	25号住	14	平安	土師器	黒色坏	－	[6.0]	－	体～底部	同上	同上	にぶい橙	黒	同上	25住	－	
129	25号住	15	平安	土師器	黒色坏	－	[5.0]	－	同上	同上	同上	にぶい黄橙	黒	同上	25住	－	外面墨書
129	25号住	16	平安	土師器	黒色坏	－	－	－	体部片	ロクロナデ	同上	にぶい橙	黒	同上	25住	－	外面墨書
129	25号住	17	平安	灰釉	椀	14.2	5.8	5.2		ロクロナデ，底－付け高台	ナデ	灰白	灰白	白・黒色粒	25住No.12・21・22・30・31	55	
129	25号住	18	平安	灰釉	皿？	－	[7.0]	－	底部	付け高台	ナデ	灰白	灰白		25住No.	－	
129	25号住	19	平安	土師器	甕	[20.8]	－	－	口縁～胴	縦刷毛目	横刷毛目	橙	橙	雲母，スコリア，白色粒	25住No.25	－	
129	25号住	20	平安	土師器	甕	－	－	－	同上	同上	同上	にぶい橙	にぶい橙	白・黒色粒	25住No.28	－	在地的（雲母入らず）
129	25号住	21	平安	土師器	甕	－	－	－	同上	同上	同上	にぶい赤褐	にぶい赤褐	長石・雲母－やや多，白・黒色粒	25住	－	在地的胎土
129	25号住	22	平安	土師器	甕	－	－	－	同上	同上	同上	にぶい橙	にぶい橙	長石，石英，雲母，白，黒色粒	25住No.37	－	
129	25号住	23	平安	土師器	小型甕	[12.2]	－	－	同上	同上	同上	にぶい橙	にぶい橙	雲母，スコリア，白・黒色粒	25住	－	
129	25号住	24	平安	土師器	ロクロ甕	[22.0]	－	－	同上	ロクロナデ後縦刷毛目	横刷毛目，ナデ	黄灰	黄灰	雲母，白・黒色粒	25住No.8・14・16・32・ｶﾏﾄﾞ	－	口縁部内面タール付着
129	25号住	25	平安	須恵器	突帯壷	－	－	－	肩部	叩き，突帯貼付	ナデ	灰	灰	白色粒	25住No.13	－	
129	25号住	26	平安	須恵器	甕	－	－	－	胴部片	叩き	ナデ	褐灰	褐灰	白色粒，スコリア	25住	－	
129	25号住	27	平安	須恵器	甕	－	－	－	同上	同上	ナデ	黒		雲母，白・黒色粒	25住No.2	－	
129	25号住	28	中世	土器	内耳土器	[28.0]	－	－	口縁～胴	ナデ	ロクロナデ	灰褐	灰褐	スコリア，白・黒色粒	25住No.17・18・ｶﾏﾄﾞ，25住	－	外面すす付着
130	25号住	30	縄文中	土器	深鉢	[24.0]	－	－	同上	角押文，隆線文，貼付文，指頭痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	安山岩，角閃石，雲母，スコリア	25住No.6・23・30	－	
130	25号住	31	縄文中	土器	深鉢	－	[16.0]	－	胴～底部	角押文，貼付文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩－多，黒色粒，雲母	25住No.4	－	
130	25号住	32	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	口縁	角押文，隆線文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	雲母，スコリア，白色粒	T13	－	
130	25号住	33	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	角押文，隆線文	ナデ	褐	褐	雲母，白・黒色粒	25住No.33	－	34・35・36は同一個体
130	25号住	34	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	角押文，隆線文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	同上	25住	－	
130	25号住	35	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	角押文，隆線文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	同上	25住	－	
130	25号住	36	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴部	角押文，隆線文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	同上	25住	－	
130	29号住	1	平安	土師器	坏	[10.0]	[5.0]	4.1		ロクロナデ後ヘラ削り，底－ヘラ削り	ロクロナデ後暗門	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色粒，スコリア	29住	20	
130	29号住	2	平安	土師器	坏	[11.4]	[5.4]	3.9		ロクロナデ後ヘラ削り，底－糸切り後ヘラ削り	同上	橙	橙	同上	29住	25	
130	29号住	3	平安	土師器	坏	[12.0]	[6.0]	4.1		同上	同上	にぶい褐	にぶい褐	スコリア，長石，黒色粒	29住	20	体部外面墨書
130	29号住	4	平安	土師器	坏	－	5.6	－		同上	同上	橙	橙	スコリア，白・黒色粒	29住No.24	20	
130	29号住	5	平安	土師器	坏	[12.4]	[6.9]	4.0		ロクロナデ後ヘラ削り	ロクロナデ	橙	橙	同上	29住No.94	20	
130	29号住	6	平安	土師器	坏	－	4.6	－	底部	ヘラ削り，底－糸切り後ヘラ削り	ロクロナデ	橙	橙	スコリア，長石	N17	－	胎土分析No.A
130	29号住	7	平安	土師器	坏	[13.6]	[6.4]	4.7		ロクロナデ後ナデ	ロクロナデ	浅黄	浅黄	スコリア，角閃石，黒色粒	29住No.2	40	在地的
130	29号住	8	平安	土師器	坏	[13.0]	－	－	口縁～体	ナデ	ロクロナデ	黄橙	黄橙	スコリア，白・黒色粒	29住	－	胎土分析No.E
130	29号住	9	平安	土師器	坏	－	5.6	－	底部	ロクロナデ，底－糸切り	ロクロナデ，ミガキ	橙	浅黄	長石，スコリア，角閃石，黒色粒	29住No.22	－	本来黒色坏か
130	29号住	10	平安	土師器	坏	－	[5.4]	－	体～底部	同上	ロクロナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	長石，スコリア，黒色粒	29住No.12	－	本来黒色坏か
130	29号住	11	平安	土師器	黒色坏	－	[7.0]	－	底部	ヘラ削り，底－ヘラ削り	ナデ，ミガキ，黒色	浅黄	黒	スコリア，長石	29住	－	胎土分析No.C
130	29号住	12	平安	土師器	黒色坏	－	[6.0]	－	底部	ヘラ削り，底－糸切り	同上	橙	黒	角閃石，長石，スコリア，小礫	29住	－	胎土分析No.D
130	29号住	13	平安	土師器	黒色坏	－	[7.0]	－	底部	ロクロナデ，底－糸切り	同上	浅黄	黒	長石，角閃石	29住	－	胎土分析No.B
130	29号住	14	平安	土師器	黒色坏	[19.9]	[8.4]	6.3		同上	ナデ，ミガキ，黒色	にぶい黄橙	黒	長石，石英，角閃石	29住	25	
130	29号住	15	平安	土師器	黒色坏	－	6.6	－	体～底部	同上	同上	灰白	黒	長石，スコリア，黒色粒	29住No.13	－	
130	29号住	16	平安	土師器	坏	－	－	－	体部	ヘラ削り	ロクロナデ	橙	橙	スコリア，黒色粒	29住	－	外面墨書
130	29号住	17	平安	灰釉	皿	[13.6]	－	－	口縁～体	ロクロナデ	ナデ	灰白	灰白		29住	－	
131	29号住	18	平安	土師器	ロクロ甕	[17.6]	－	－	口縁～体	ロクロナデ，かすかに刷毛目	ロクロナデ	浅黄橙	浅黄橙	長石，スコリア，白・黒色粒	29住No.90	－	
131	29号住	19	平安	土師器	ロクロ甕	[21.4]	－	－	同上	ロクロナデ	ロクロナデ	黄橙	黄橙	長石，石英，スコリア，雲母	29住No.16	－	内外面黒変，胎土分析土器No.G
131	29号住	20	平安	土師器	ロクロ甕	－	－	－	胴	ロクロナデ，かすかに叩き目	ロクロナデ	にぶい橙	橙	スコリアー多，長石，石英，安山岩，砂粒	29住ｶﾏﾄﾞ	－	胎土分析土器No.H
131	29号住	21	平安	土師器	ロクロ甕	－	[8.5]	－	胴～底部	ロクロナデ，底－糸切り	ロクロナデ	黒褐	にぶい橙	長石，石英，雲母，スコリア，黒色粒	29住No.53	－	外面黒変
131	29号住	22	平安	土師器	ロクロ甕	14.6	5.4	10.8		斜めナデ，底－木葉痕	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	安山岩，角閃石，スコリア	29住No.1	80	内外面全体黒変

第15表13　土器・陶器観察表（（－）は現状値，〔－〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
131	29号住	23	平安	灰釉	長頸壷	[10.2]	—	—	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	灰オリーブ	灰オリーブ		29住	—	内外施釉
131	29号住	24	平安	須恵器	長頸壷	[10.1]	—	—	口縁～頚部	ロクロナデ	ロクロナデ	灰オリーブ	灰	スコリア，白色粒	29住	—	
131	29号住	25	平安	須恵器	甕	—	—	—	胴部	叩き	ナデ	暗赤褐	灰	スコリア，長石	29住No.95・ｶﾏﾄﾞ，N16	—	
131	29号住	26	平安	土師器	甕	[26.0]	—	—	口縁～胴	縦刷毛目	横刷毛目	にぶい橙	にぶい橙	長石，雲母，黒色粒	29住No.5～7・9～11・32・～37・39・40・41・56・68～70・72	—	外面上半すす付着，内面下半黒変
131	29号住	27	平安	土師器	甕	[24.8]	—	—	同上	同上	同上	橙	橙	同上	29住No.87・ｶﾏﾄﾞ	—	
131	29号住	28	平安	土師器	甕	[26.4]	—	—	同上	同上	同上	にぶい橙	にぶい橙	同上	29住No.47・48・ｶﾏﾄﾞ，N17	—	
131	29号住	29	平安	土師器	甕	[23.6]	—	—	同上	同上	同上	にぶい褐	にぶい褐	雲母一多，長石，白・黒色粒	29住No.28・39	—	外面黒変
131	29号住	30	平安	土師器	甕	[27.6]	—	—	同上	同上	同上	にぶい褐	にぶい褐	雲母，角閃石，長石	29住No.51	—	
131	29号住	31	平安	土師器	甕	[27.8]	—	—	同上	同上	同上	にぶい褐	黒褐	長石一多，雲母，スコリア，黒色粒	29住No.26	—	内面黒変
131	29号住	32	平安	土師器	甕	[30.0]	—	—	同上	同上	同上	にぶい褐	にぶい褐	安山岩，石英，雲母，角閃石	29住No.42	—	胎土分析土器No.F
131	29号住	33	平安	土師器	甕	—	[8.4]	—	体～底部	縦刷毛目，底一木葉痕	同上	明赤褐	明赤褐	雲母一やや多，角閃石，長石，石英，スコリア	29住No.91	—	体部外面粘土付着
131	29号住	34	平安	土師器	甕	—	[8.6]	—	同上	同上	同上	黒褐	にぶい黄橙	雲母，長石，角閃石，スコリア	29住	—	外面黒変
131	29号住	35	平安	土師器	甕	—	[8.0]	—	同上	縦刷毛目	同上	にぶい橙	にぶい橙	同上	29住No.44・46	—	外面雲粘土付着，黒変
131	29号住	36	平安	土師器	甕	—	[8.4]	—	同上	縦刷毛目，底一木葉痕	同上	明赤褐	明赤褐	雲母一やや多，角閃石，長石，石英	29住No.91	—	外面粘土付着
132	37号住	1	平安	土師器	坏	12.6	4.9	4.1	完存	ロクロナデ後ヘラ削り，底一糸切り後ヘラ削り	ロクロナデ	橙	橙	雲母，スコリア，白色粒	37住No.25	90	外面体部に墨書
132	37号住	2	平安	土師器	坏	—	[6.6]	—	体～底部	ヘラ削り，底一ヘラ削り	同上	にぶい黄橙	にぶい黄橙	スコリア，長石，角閃石	37住No.26	20	
132	37号住	3	平安	土師器	坏	—	[6.2]	—	同上	ヘラ削り，底一糸切り後ヘラ削り	ロクロナデ後放射状暗文	橙	橙	スコリア	37住	10	
132	37号住	4	平安	土師器	坏	—	4.4	—	同上	ヘラ削り，底一ヘラ削り	ナデ	褐	褐	安山岩，スコリア，角閃石	37住	20	底部灰付着，黒変
132	37号住	5	平安	土師器	皿	12.2	2.0	2.5	完存	ロクロナデ後ヘラ削り，底一ヘラ削り	ロクロナデ	橙	橙	雲母，スコリア	37住No.24	100	体部外面墨書
132	37号住	6	平安	土師器	皿	[13.4]	—	—	口縁～体	ロクロナデ，回転ヘラ削り	ロクロナデ，螺旋状暗文	橙	橙	スコリア	37住No.12	—	
132	37号住	7	平安	土師器	坏	[15.0]	—	—	同上	ロクロナデ	ロクロナデ	橙	橙	石英，角閃石，白色粒	37住No.16	—	本来黒色坏か
132	37号住	8	平安	土師器	黒色坏	[13.0]	5.6	4.2		ロクロナデ，底一糸切り	ロクロナデ，ミガキ，黒色	暗褐	黒	スコリア，白・黒色粒，砂粒	37住No.11	80	外面も黒変
132	37号住	9	平安	土師器	黒色坏	[14.6]	—	—	口縁～体	ロクロナデ	ミガキ，黒色	橙	黒	長石，スコリア，黒色粒	37住	10	
132	37号住	10	平安	土師器	高台皿	12.6	7.6	3.5		ロクロナデ，底一付け高台	同上	暗褐	黒	スコリア，安山岩，角閃石	37住No.23	70	
132	37号住	11	平安	土師器	ロクロ甕	[14.4]	6.0	12.1		カキメ状のロクロナデ，ヘラ削り，底一糸切り	ロクロナデ	褐	浅黄橙	スコリア，白色粒	B58No.3	40	外面上半黒変，下半表面剥離
132	37号住	12	平安	土師器	甕	[15.2]	—	—	口縁	ナデ	ナデ	にぶい橙	黄橙	安山岩，スコリア，小礫	37住No.9	—	外面すす付着
132	37号住	13	平安	須恵器	壷？												
133	37号住	14	平安	土師器	甕	[29.6]	—	—	口縁～胴	縦刷毛目	横刷毛目	橙	褐灰	スコリア，長石	37住No.13・30・	—	
133	37号住	15	平安	土師器	甕	[32.1]	—	—	同上	縦刷毛目	横刷毛目	明赤褐	赤褐	長石，角閃石，雲母	37住No.3・4	—	
133	37号住	16	平安	土師器	甕	[31.0]	—	—	同上	縦刷毛目	横刷毛目	黒褐	赤褐	長石，雲母，黒色粒	B58No.52	—	
133	37号住	17	平安	土師器	甕	[31.2]	—	—	同上	縦刷毛目	横刷毛目	赤褐	にぶい赤褐	長石，雲母，スコリア	37住，BC57・58	—	
133	37号住	18	平安	土師器	甕	[28.9]	—	—	同上	縦刷毛目	横刷毛目	橙	にぶい橙	長石，スコリア	37住No.19	—	
133	37号住	19	平安	土師器	小型甕	[13.4]	8.0	10.3		縦刷毛目，底一木葉痕	横ナデ	橙	黒褐	安山岩，白色粒	37住No.14	50	外面黒変，底部灰付着
133	37号住	20	平安	須恵器	甕	—	—	—	頚部	ナデ	ナデ	黒褐	黄灰	スコリア，白・黒色粒	37住	—	
133	37号住	21	平安	灰釉	壷	—	—	—	胴部	ナデ，施釉	ロクロナデ	褐灰	灰白	白色粒	37住	—	
133	37号住	22	縄文中	土器	鉢	—	—	—	把手付	縄文ＬＲ，沈線，把手	ナデ	褐	暗褐	安山岩，長石，スコリア，石英	37住No.32	—	22・24は同一の可能性
133	37号住	23	縄文中	土器	鉢	—	—	—	平口縁	沈線，縄文ＬＲ	ナデ			安山岩，スコリア	37住	—	
133	37号住	24	縄文中	土器	鉢	—	—	—	平口縁	沈線，縄文ＬＲ	ナデ	褐	暗褐	安山岩，長石，スコリア，石英	37住No.22	—	
133	37号住	25	縄文中	土器	鉢？	—	—	—	胴部	縄文ＬＲ＋結節縄文	ナデ	明褐	明褐	長石，石英，スコリア	37住	—	
133	37号住	26	縄文中	土器	鉢	—	—	—	胴部	縄文ＬＲ，沈線，微隆線	ナデ	褐	褐	安山岩，角閃石，スコリア	37住ﾋﾟｯﾄ1	—	
133	37号住	27	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線文（ハの字文？）	ナデ	褐	黒褐	安山岩，石英，スコリア，長石	37住	—	
134	21号ピット	4	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	口縁	沈線，角押文，えぐり	ナデ	明黄褐	明黄褐	安山岩，角閃石，スコリア，長石	ﾋﾟｯﾄ21	—	外面黒変
134	22号ピット	5	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管隆線文，縄文ＲＬ	ナデ	黄橙	褐灰	長石一多，石英，雲母，スコリア	ﾋﾟｯﾄ22No.4・6・7・11	—	内面黒変
134	22号ピット	6	縄文	土器	ミニチュア	2.5	0.8	1.5	椀状	ナデ	ナデ	明褐	明褐	輝石	ﾋﾟｯﾄ22No.1	100	外面わずかに黒変
134	25号ピット	9	縄文中	土器	鉢	—	—	—	胴	竹管条線	ナデ	灰黄	灰	長石一多，石英，雲母，スコリア	ﾋﾟｯﾄ25No.2，C70No.32	—	
134	33号ピット	10	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	櫛歯状沈線，沈線文	ナデ	暗橙	橙	長石，石英，雲母	ﾋﾟｯﾄ33No.13	—	10・11は同一，外面黒変
134	33号ピット	11	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	同上	同上	にぶい橙	褐灰	同上	ﾋﾟｯﾄ33No.14	—	
134	41号ピット	12	縄文中	土器	鉢	—	[8.0]	—	胴～底部	櫛歯状沈線，沈線，隆線	ナデ	灰黄	灰黄	安山岩，スコリア，輝石，角閃石	ﾋﾟｯﾄ41No.7～13・15・16・23・33	—	外面黒斑，内面黒変
134	41号ピット	13	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴	沈線，縄文ＲＬ	ナデ	明赤褐	明赤褐	安山岩，長石，スコリア	ﾋﾟｯﾄ41No.25	—	外面荒れ，内面黒変
134	41号ピット	14	縄文中	土器	深鉢	—	[7.0]	—	底部	ナデ	ナデ	黄橙	黒	安山岩，長石，角閃石	ﾋﾟｯﾄ41No.29	—	内面お焦げ付着
134	41号ピット	15	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管刺突文	ナデ	にぶい褐	黒褐	安山岩，角閃石，スコリア，長石	ﾋﾟｯﾄNo.24	—	内面黒変
135	52号ピット	20	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	櫛歯状沈線	ナデ	にぶい橙	浅黄	雲母一多，長石，石英，角閃石，スコリア	ﾋﾟｯﾄ52　B71No.19	—	内面薄く黒変

第15表14　土器・陶器観察表（（—）は現状値，〔—〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
135	53号ピット	22	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管隆線，縄文ＲＬ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，石英，輝石，スコリア	ピット53　B71No.9	—	
135	55号ピット	23	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	竹管文，縄文ＬＲ，粘土紐貼付	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	長石－多，石英，角閃石，雲母	ピット55No.2	—	外面すす付着
135	61号ピット	24	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	櫛歯刺突文	ナデ	にぶい黄橙	黄橙	安山岩，輝石，スコリア	ピット61No.14	—	内面黒変
135	61号ピット	25	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線，縄文ＲＬ	ナデ	黄橙	黄橙	スコリア，白色粒	ピット61C67No.4	—	
135	63号ピット	26	平安	土師器	甕	[27.5]	—	—	口縁～胴	縦刷毛目	横刷毛目	明赤褐	明赤褐	長石，石英，角閃石，雲母	ピット63No.4	—	
135	63号ピット	27	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	櫛歯状沈線	ナデ	浅黄	にぶい黄橙	安山岩，輝石，角閃石，スコリア	ピット63No.9	—	外面黒変
135	63号ピット	28	平安	灰釉	壺	—	9.4	—	底部	ナデ後付け高台	ロクロナデ	灰	灰	白色粒	ピット63A66No.5	—	底面を硯面として転用，周囲打ち欠き，黒変
136	73号ピット	33	縄文中	土器	深鉢	[28.0]	—	—	胴部	櫛歯状沈線，沈線文	ナデ	にぶい黄橙	黄橙	長石，石英，スコリア	ピット73C67No.13	—	
136	86号ピット	38	縄文中	土器	深鉢	[19.5]	—	—	口縁～胴	縄文Ｌ＋結節縄文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石，白色粒	ピット86C66No.8	—	内外面黒変
136	95号ピット	40	縄文中	土器	深鉢	[39.0]	—	—	口縁～頸部	肥厚口縁，沈線文	ナデ	浅黄	浅黄	安山岩，角閃石，スコリア	ピット95No.11	—	口縁部外面黒変
136	95号ピット	41	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	角押文，隆線	ナデ	褐	褐	長石，角閃石，雲母，スコリア	ピット95No.1	—	外面薄く黒変
136	95号ピット	42	縄文中	土器	深鉢	—	[10.0]	—	底部	沈線，櫛歯状沈線	ナデ	赤褐	黒	安山岩，長石，角閃石，スコリア	ピット95No.2	—	内面黒変
136	137号ピット	46	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線文，粘土紐貼付	ナデ	明黄褐	明黄褐	安山岩，輝石，長石	ピット137	—	内外面荒れ
136	149号ピット	48	縄文中	土師器	坏	[14.0]	—	—	口縁～体	ロクロナデ	ロクロナデ	褐	黒褐	スコリア，白色粒	ピット149	—	内面黒変
137	156号ピット	49	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴	櫛歯状沈線，低隆帯，ナデ沈線	ナデ	黄橙	黄灰	安山岩，角閃石，石英，スコリア	ピット156A65No.5	—	
137	169号ピット	51	縄文中	土器	深鉢	—	[9.0]	—	底部	ナデ，底－ヘラ削り	ナデ	明黄褐	明黄褐	安山岩，スコリア	ピット169No.4	—	
137	184号ピット	52	縄文後？	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	安山岩，長石，スコリア	ピット184No.2	—	外面すす付着，内面黒変
137	232号ピット	54	縄文早又は後	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	隆線文	ナデ			長石，角閃石，石英，雲母	ピット232	—	内面お焦げ付着，早期末の可能性，繊維不明
137	248号ピット	55	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	刺突文	ナデ	にぶい黄橙	灰黄橙	長石，角閃石，スコリア	ピット248	—	
137	250号ピット	56	縄文後	土器	深鉢	[34.0]	—	—	口縁～胴部	沈線文，貼付文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，泥岩，スコリア，長石	ピット250	—	もろい
137	250号ピット	57	縄文後	土器	深鉢	—	9.4	—	胴～底部	沈線文，貼付文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	安山岩，角閃石，長石，石英，スコリア	ピット250　C58No.4	—	内面下半黒変，荒れ
138	251号ピット	58	縄文中	土器	深鉢	[24.0]	—	—	口縁部	隆線，沈線	ナデ	暗褐	暗褐	安山岩－多，石英，輝石	ピット251　B62No.32	—	外面黒変
138	251号ピット	59	縄文中	土器	深鉢	—	—	—	胴部	低隆帯，櫛歯状沈線，沈線	ナデ	にぶい橙	黄橙	スコリア－多，安山岩，角閃石，長石	ピット251　B62No.32	—	内面下半すす付着
138	263号ピット	60	縄文後	土器	深鉢	—	10.0	—	胴～底部	縦ナデ，底－網代痕	ナデ	黄橙	にぶい黄橙	安山岩，スコリア，輝石	ピット263No.2	—	炉体土器か
138	263号ピット	61	縄文後	土器	深鉢	[13.0]	—	—	口縁	沈線，縄文Ｒ	ナデ	浅黄	浅黄	安山岩，スコリア	ピット263	—	
138	263号ピット	62	縄文後	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	無文，ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	安山岩，角閃石，長石，石英	ピット263No.2	—	60と同一か
138	263号ピット	63	縄文後	土器	深鉢	—	10.3	—	胴～底部	無文，縦ナデ，ヘラ削り	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	安山岩，長石，石英，スコリア，輝石	ピット263No.1	—	炉体土器か，内面黒変
138	294号ピット	65	縄文後	土器	深鉢	—	[11.2]	—	底部	ナデ，底－網代痕	ナデ	橙	褐灰	安山岩，長石，角閃石，スコリア	ピット294No.1	—	内外面荒れ
138	296号ピット	66	縄文早？	土器	深鉢	[17.0]	—	—	口縁	ナデ，沈線，ヘラ削り	ナデ	明黄褐	明黄褐	安山岩，泥岩，スコリア	ピット296No.1	—	外面黒変
138	296号ピット	67	縄文	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	ヘラ削り，ナデ	ナデ	黒褐	明褐	安山岩，長石，泥岩，角閃石，スコリア	ピット296No.2	—	外面黒変
138	296号ピット	68	縄文後？	土器	深鉢	—	—	—	胴部	沈線，ナデ	ナデ	暗褐	暗褐	安山岩，泥岩，角閃石，スコリア	ピット296No.4	—	
139	328号ピット	69	縄文後	土器	深鉢	[20.0]	—	—	口縁部	刻み目隆線，ナデ，ミガキ	沈線，ナデ，ミガキ	黒褐	黒褐	長石，角閃石	ピット327	—	内外面すす付着
139	328号ピット	70	縄文後	土器	深鉢	—	—	—	口縁，突起部	沈線文	沈線文	褐	黄橙	長石，石英，角閃石，砂粒	ピット327	—	
139	328号ピット	71	縄文後	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	刻み目隆線，沈線，縄文	ナデ	黒	黒	安山岩，角閃石，白色粒	ピット327	—	内外黒変
139	328号ピット	72	縄文後	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	沈線，ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	スコリア，小礫－多	ピット327	—	
139	335号ピット	73	縄文後	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	オリーブ褐	安山岩，角閃石，小礫	ピット335	—	
139	337・338号ピット	74	縄文後	土器	深鉢	[24.0]	—	—	口縁部	ナデ，ミガキ，刻み目隆線，貼付文	ナデ，ミガキ，沈線文	にぶい黄橙	黒	長石，石英，角閃石	ピット337・338	—	内外面黒変
139	337・338号ピット	75	縄文後	土器	深鉢	—	—	—	胴部	ナデ，沈線，縄文ＬＲ	ナデ	にぶい黄橙	黄橙	安山岩，角閃石，石英，スコリア	ピット337・338	—	外面すす付着
139	337・338号ピット	76	縄文後	土器	深鉢？	—	[8.0]	—	底部	ナデ，底－網代痕	ナデ	橙	黒	石英，角閃石，スコリア，砂粒	ピット337・338	—	注口土器底部か
139	337・338号ピット	77	縄文後	土器	注口土器？	—	—	—	注口部	ナデ，微隆線	ナデ	黄橙	黄橙	長石，石英，スコリア	ピット	—	
139	344号ピット	78	縄文後	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	隆線，ナデ	ナデ			安山岩，石英，角閃石，スコリア	ピット344No.22	—	
139	344号ピット	79	縄文後	土器	深鉢	—	[8.0]	—	底部近く	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄橙	長石，石英，スコリア，角閃石	ピット344	—	
139	344号ピット	80	縄文後	土器	注口土器	—	[6.6]	—	底部	ナデ，ミガキ	ナデ	淡黄	灰	安山岩，スコリア	ピット344	—	
139	344号ピット	81	縄文後	土器	異形台付？	—	—	—		ミガキ，沈線	ナデ	黒	黄灰	長石，石英，雲母，スコリア	ピット344No.19	—	内外面黒変
139	344号ピット	82	縄文後	土器	深鉢	—	[10.0]	—	胴～底部	ナデ，ミガキ，沈線，縄文ＲＬ，底－網代痕	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	安山岩，角閃石，輝石	ピット344No.8・12・16～18	—	内外面薄く黒変 外面黒変，内面下半黒変
139	366号ピット	84	縄文後	土器	深鉢	—	—	—	胴	沈線，ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，泥岩，輝石，角閃石，スコリア	ピット366　J30No.17	—	外面薄く黒変
140	393号ピット	87	縄文後	土器	深鉢	[30.0]	—	—	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	淡黄	安山岩，角閃石，スコリア	ピット393	—	
140	395号ピット	88	縄文後	土器	深鉢	[15.0]	—	—	口縁部	沈線，縄文ＬＲ	沈線，ナデ	黒褐	にぶい黄	安山岩，長石，石英	ピット395	—	内外面黒変
140	395号ピット	89	縄文後	土器	深鉢	—	—	—	口縁部	沈線	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	石英，長石，雲母，スコリア	ピット395	—	
140	395号ピット	90	縄文後	土器	深鉢	—	—	—	口縁，突起	刺突隆線，貼付文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	長石，石英，角閃石，スコリア	ピット395	—	
140	401号ピット	91	縄文中	土器	深鉢	[44.0]	—	—	平口縁～胴	櫛歯条線，丸押隆線，粘土紐貼付	ナデ	にぶい黄	明黄褐	安山岩，輝石，スコリア	ピット401No.1～21	—	内面荒れ
140	401号ピット	92	縄文中	土器	深鉢	[50.0]	—	—	同上	竹管条線，粘土紐貼付，押文	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	同上	ピット401No.22・23	—	口縁外面黒変

第15表15　土器・陶器観察表（（－）は現状値，〔－〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

挿図番号	出土地点	番号	時代	種別	器種	口径	底径	器高	部位・形態・文様の特徴	整形・施文技法（外・底）	調整技法（内）	色調（表）	色調（裏）	胎土	注記内容	残存率%	備考
141	408号ピット	101	縄文中	土器	深鉢	[47.0]	－	－	同上	櫛歯条線，粘土紐貼付	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，角閃石，輝石，スコリア	ﾋﾟｯﾄ408No.1～7·9·10,28住No.1·3·6～17·23·46·47·58·61,33住No.14·17,D14No.1·19·20	－	内外面黒変
142	O17	1	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴	竹管条線，丸押隆線	ナデ	灰黄	浅黄	安山岩，スコリア，輝石	O17	－	外面薄く黒変
142	N14	2	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴	竹管条線，刻み目隆線	ナデ	橙	橙	安山岩，輝石，スコリア	N14No.3·5·7·11	－	
142	溝表採	3	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴	粘土紐貼付，縄文ＬＲ	ナデ	灰黄橙	にぶい黄橙	石英，安山岩，輝石，スコリア	C68セギ	－	外面すす付着
142	C69	4	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴	刺突文，粘土紐貼付	ナデ	明黄褐	明黄褐	安山岩，角閃石，長石，スコリア	C69	－	内面黒変
142	O18	5	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴	櫛歯状沈線文	ナデ	にぶい橙	黒褐	雲母－多，長石	O18	－	内面黒変
142	B62	6	縄文中	土器	深鉢	－	[7.4]	－	胴～底部	沈線	ナデ			安山岩・泥岩－多，長石，石英，角閃石，スコリア	B62No.8·9	－	内面黒変
142	K29	7	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	口縁部	沈線，縄文Ｌ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	安山岩，長石，石英，輝石	K29	－	外面黒変
142	E52	8	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	口縁部，波状	沈線，縄文ＬＲ，微隆線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，長石，石英，角閃石，スコリア	E52	－	外面薄く黒変
142	C58	9	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	胴	刻み目隆線，櫛歯沈線	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	安山岩，長石，スコリア，雲母	C58No.5	－	
142	C57	10	縄文中	土器	深鉢	－	－	－	口縁～胴	微隆線，縄文ＬＲ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長石，角閃石，石英，スコリア	C57No.10·11	－	外面すす付着
142	E55	11	縄文後	土器	深鉢	[32.0]	－	－	口縁	沈線，縄文Ｌ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	長石，石英，スコリア	E55	－	
142	C67	12	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁	沈線，縄文ＲＬ	ナデ	黄橙	黄橙	スコリア，白色粒	C67	－	
142	K29	13	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	口縁	沈線文	沈線文	黄橙	黄橙	泥岩，長石，スコリア，石英，角閃石	K29	－	内面黒変
142	N19	14	縄文後	土器	深鉢	－	－	－	胴	刻み目隆線，沈線，縄文	ナデ	浅黄	浅黄	安山岩，輝石，スコリア	N19	－	
142	I3	15	縄文後	土器	深鉢	[32.0]	－	－	口縁部	刻み目隆線文，貼付文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	安山岩，長石，石英，スコリア	I31No.49	－	
142	M23	16	縄文後	土器	鉢	[18.0]	－	－	口縁部	沈線，縄文Ｌ，ミガキ	ナデ，ミガキ	橙	橙	長石，石英，角閃石，スコリア	M23	－	
142	E53	17	縄文後	土器	深鉢	－	10.0	－	底部	ナデ，底－網代痕	ナデ	明黄橙	明黄橙	安山岩，長石，角閃石，スコリア	E53No.1	－	内面黒変
150	I31	106	縄文後	土器	蓋	[10.0]	－	－	破片	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒	安山岩，輝石，長石	I31	－	内面黒変
150	15号溝	107	縄文	土器	ミニチュア	2.6	1.5	2.8	把手状の突起2個	ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	安山岩，角閃石，スコリア	15溝	100	
150		108	縄文	土器	ミニチュア												
150	表採	109	平安	土師器	坏	[11.2]	－	－	口縁～体	ロクロナデ後ヘラ削り	ロクロナデ後放射状暗文	橙	橙	スコリア	表採		
150	溝表採	110	平安	土師器	皿	－	[5.0]	－	底部	回転ヘラ削り，底－ヘラ削り	ロクロナデ，螺旋暗文	橙	にぶい黄橙	スコリア	セギ	－	底部内面墨書「不」
150	表採	111	平安	土師器	坏	－	－	－	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石，スコリア	表採	－	外面墨書
150	N16	112	平安	土師器	坏	－	－	－	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	橙	橙	スコリア，白色粒	N16	－	外面墨書
150	O20	113	平安	土師器	皿	－	[4.4]	－	底部		ロクロナデ	橙	橙	白色粒，スコリア	O20	－	底部外面に墨書「氏」

第15表16　土器・陶器観察表（（－）は現状値，〔－〕は復元値，スコリアはスコリア状の赤色粒子，胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる）

第16表１　石器観察表

挿図番号	出土地点	番号	時期	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	欠損状況	自然面	注記内容	備考
64	B60	152	縄文	凹石	9.3	6.3	4.4	312	安山岩	完存	有	B60No.305	凹み面は２面
64	B60	153	縄文	凹石	8.1	8.0	4.7	438	安山岩	完存	有	B60No.222	凹み面は１面
64	B61	154	縄文	凹石	(5.4)	5.8	3.9	170	安山岩	半分欠損	有	B61No.813	凹み面は２面，すす付着
64	B61	155	縄文	凹石	7.7	5.4	4.7	388	安山岩	完存	有	B61No.7	凹み面は２面
64	B62	156	縄文	凹石	11.5	7.0	3.8	350	安山岩	完存	有	B62No.10	凹み面は２面
64	B62	157	縄文	凹石	12.6	8.4	5.8	666	安山岩	完存	有	B62No.199	凹み面は１面，側面調整
64	B62	158	縄文	凹石	10.5	6.3	5.2	410	安山岩	完存	有	B62No.967	凹み面は２面，端部敲打痕
64	C62	159	縄文	凹石	(7.4)	7.0	4.0	254	砂岩	約半分欠損	有	C62No.263	凹み面は１面
64	C63	160	縄文	凹石	9.6	9.0	7.0	618	安山岩	完存	有	C63No.6	凹み面は１面
64	B61	161	縄文	凹石	(8.0)	7.4	5.0	346	安山岩	半分欠損	有	B61No.728	凹み面は３面
64	B61	162	縄文	凹石	(10.5)	(7.6)	4.1	452	安山岩	欠損	有	B61No.638	凹み面は２面，側面稜磨り，外面黒変
65	B62	163	縄文	凹石	10.5	7.7	5.8	548	安山岩	完存	有	B62No.30	凹み面は２面，一部稜磨り
65	A65	164	縄文	凹石	(7.5)	9.4	4.0	514	安山岩	欠損	有	A65No.6	凹み面は１面，側面は稜磨り
65	B60	165	縄文	磨石	8.8	7.4	4.4	378	安山岩	完存	有	B60No.219	磨り面は２面
65	B61	166	縄文	磨石	(10.0)	(5.7)	3.0	210	安山岩	欠損	有	B61No.639	側面稜磨り
65	B61	167	縄文	磨石	(4.8)	(6.4)	(2.5)	110	安山岩	欠損	有	B61No.214	一部稜磨り
65	C61	168	縄文	磨石	4.7	3.5	2.6	16	デイサイト	完存	無	C61No.40	全面を磨っている
65	B62	169	縄文	磨石	(9.6)	(7.2)	(2.5)	214	砂岩	欠損	有	B62No.122	一部稜磨り，礫器か
65	B62	170	縄文	磨石	(6.4)	9.0	3.4	320	安山岩	半分欠損	有	B62No.979	周縁部稜磨り
65	B63	171	縄文	磨石	(8.8)	7.4	6.3	578	砂岩	約半分欠損	有	B63No.2	稜磨り
65	B62	172	縄文	磨石	(5.1)	8.9	3.2	236	安山岩	欠損	有	B62No.715	稜磨り
65	C63	173	縄文	磨石	13.0	10.3	5.3	1050	安山岩	完存	有	C63No.4	稜磨り
65	A66	174	縄文	磨石	11.0	8.5	5.0	634	砂岩	一部剥離	有	A66No.6	側面稜磨り，表面も磨り面の可能性有
65	A66	175	縄文	磨石	(7.0)	7.8	3.7	322	安山岩	欠損	有	A66No.7	側面稜磨り
66	B62	176	縄文	砥石	12.4	5.2	(0.6)	54	砂岩	裏面剥離	無	B62No.268	砥面は１面
66	C62	177	縄文	砥石	(6.6)	(6.2)	1.1	48	砂岩	欠損	無	C62No.87	砥面は２面
66	B62	178	縄文	砥石	8.5	7.5	1.0	82	砂岩	完存	有	B62No.91	砥面は２面
66	B62	179	縄文	砥石	8.3	9.5	2.3	140	砂岩	一部欠損	有	B62No.728･965	砥面は２面，かすかな線条痕あり
66	B62	180	縄文	砥石	(3.2)	(3.3)	0.4	6	砂岩	欠損	無	B62No.205	砥面は２面
66	B61	181	縄文	砥石	(4.5)	(3.5)	0.6	12	砂岩	欠損	無	B61No.705	砥面は２面
66	B62	182	縄文	砥石	(3.1)	(3.8)	0.9	8	砂岩	欠損	無	B62No.805	砥面は２面
66	B62	183	縄文	砥石	(5.6)	(1.9)	1.1	8	砂岩	欠損	無	B62No.135	砥面は不明確
66	C65	184	縄文	砥石	(4.7)	(3.5)	1.0	19	砂岩	欠損	無	C65No.7	砥面は２面
66	B61	185	縄文	砥石	(5.9)	(3.2)	1.3	40	花崗岩	欠損	無	B61No.15	
66	B61	186	縄文	砥石	(2.5)	(7.7)	1.2	25	砂岩	欠損	無	B61No.729	砥面は２面
67	B60	187	縄文	剥片	3.47	1.06	0.26	1.15	黒曜石	完存	無	B60No.197	縦長
67	B62	188	縄文	剥片	3.87	1.04	0.56	2.13	黒曜石	完存	有	B62No.750	縦長，原石
67	B62	189	縄文	剥片	3.54	1.10	0.57	1.46	黒曜石	完存	無	B62	縦長
67	B61	190	縄文	剥片	(1.87)	1.05	0.46	1.00	黒曜石	欠損	無	B61No.67	縦長
67	B60	191	縄文	剥片	(2.35)	1.46	0.50	1.95	黒曜石	欠損	無	B60No.242	縦長
67	B60	192	縄文	剥片	2.92	1.21	0.46	1.48	黒曜石	完存	無	B60No.308	調整痕あり，縦長
67	B60	193	縄文	剥片	3.40	1.24	0.35	1.34	黒曜石	完存	無	B60No.48	縦長
67	B61	194	縄文	剥片	3.49	1.29	0.62	1.66	黒曜石	完存	無	B61No.746	縦長
67	B61	195	縄文	剥片	3.38	0.86	0.32	0.97	黒曜石	完存	無	B61No.565	縦長
67	B62	196	縄文	剥片	3.46	1.54	0.55	2.04	黒曜石	完存	有	B62No.49	縦長，原石面あり
68	B60	197	縄文	石鏃	1.31	(1.09)	0.22	0.23	黒曜石	脚部一部欠損	無	B60No.44	表面磨き，三角鏃
68	B61	198	縄文	石鏃	1.18	1.20	0.18	0.18	黒曜石	完存	無	B61No.783	剥片三角鏃
68	B62	199	縄文	石鏃	1.55	1.48	0.53	0.79	黒曜石	完存	有	B62No.443	三角鏃
68	C62	200	縄文	石鏃	1.15	1.22	0.18	0.17	黒曜石	完存	無	C62	三角剥片鏃
68	B61	201	縄文	石鏃	1.18	(1.02)	0.20	0.16	黒曜石	片脚一部欠損	無	B61No.231	三角鏃
68	B60	202	縄文	石鏃	1.12	1.22	0.25	0.21	黒曜石	ほぼ完存	無	B60No.126	
68	B61	203	縄文	石鏃	1.44	1.39	0.24	0.31	黒曜石	完存	無	B61No.171	
68	B61	204	縄文	石鏃	(1.18)	(1.16)	0.22	0.22	黒曜石	基部欠損	有	B61	
68	C62	205	縄文	石鏃	1.44	(0.94)	0.24	0.20	黒曜石	脚部一部欠損	無	C62No.306	
68	B62	206	縄文	石鏃	1.22	(1.20)	0.32	0.35	黒曜石	ほぼ完存	有	B62No.809	三角鏃，剥片鏃
68	C62	207	縄文	石鏃	1.54	(1.40)	0.40	0.60	黒曜石	片脚一部欠損	有	C62No.294	鋸歯状，三角鏃
68	B60	208	縄文	石鏃	1.38	(1.10)	0.31	0.25	黒曜石	片脚欠損	無	B60No.10	
68	B61	209	縄文	石鏃	(1.33)	(1.18)	0.27	0.31	黒曜石	先端・片脚一部欠損	無	B61No.395	
68	B62	210	縄文	石鏃	1.05	0.92	0.27	0.19	黒曜石	完存	無	B62No.449	微小石鏃
68	C62	211	縄文	石鏃	1.16	1.25	0.20	0.21	黒曜石	完存	有	C62	剥片鏃
68	B62	212	縄文	石鏃	1.32	1.30	0.22	0.24	黒曜石	完存	無	B62No.116	剥片鏃
68	B62	213	縄文	石鏃	(0.76)	(1.32)	0.25	0.19	黒曜石	先端欠損	無	B62No.961	
68	B62	214	縄文	石鏃	1.54	(1.32)	0.32	3.65	黒曜石	片脚一部欠損	無	B62No.792	
68	C61	215	縄文	石鏃	1.35	(1.23)	0.26	0.23	黒曜石	片脚欠損	無	C61No.45	
68	B61	216	縄文	石鏃	1.38	1.65	0.35	0.56	黒曜石	完存	無	B61	剥片鏃
68	B62	217	縄文	石鏃	(1.13)	(0.72)	0.20	0.13	黒曜石	先端・片脚一部欠損	無	B62No.474	微小石鏃
68	B62	218	縄文	石鏃	1.76	1.43	0.35	0.86	黒曜石	完存	無	B62No.841	剥片鏃
68	—	219	縄文	石鏃	1.67	1.28	0.25	0.45	黒曜石	完存	無	—	出土地点不明，剥片鏃
68	B61	220	縄文	石鏃	1.48	(1.01)	0.33	0.45	黒曜石	脚部一部欠損	無	B61No.53	
68	C60	221	縄文	石鏃	(1.42)	(1.05)	0.23	0.24	黒曜石	先端・片脚欠損	無	C60	
68	B59	222	縄文	石鏃	1.37	1.34	1.18	0.31	黒曜石	完存	無	B59No.27	剥片鏃，未製品か
68	B62	223	縄文	石鏃	(1.20)	1.10	0.20	0.33	黒曜石	先端欠損	有	B62No.225	剥片鏃
68	B62	224	縄文	石鏃	1.52	1.42	0.19	0.35	黒曜石	完存	無	B62No.202	剥片鏃
68	B60	225	縄文	石鏃	(1.25)	1.36	0.33	0.52	黒曜石	先端欠損	有	B60No.309	剥片鏃
68	B60	226	縄文	石鏃	(1.58)	(1.12)	0.28	0.30	黒曜石	脚部欠損	無	B60No.145	鍬形鏃か
68	B59	227	縄文	石鏃	1.94	(0.80)	0.29	0.33	黒曜石	片脚欠損	無	B59No.2	
69	C62	228	縄文	石鏃	(1.85)	1.71	0.27	0.63	黒曜石	先端欠損	無	C62No.147	剥片鏃
69		229	縄文	石鏃	2.65	2.01	0.40	1.38	チャート	完存	無	149号ピット	中期か
69	B62	230	縄文	石鏃	(1.72)	(1.78)	0.74	1.86	黒曜石	先端・側面欠損	有	B62No.723	石鏃状
69	C62	231	縄文	石鏃	1.64	1.38	0.68	1.20	黒曜石	完存	有	C62No.120	石鏃状
69	B62	232	縄文	石鏃	(0.95)	1.64	0.36	0.47	黒曜石	先端欠損	無	B62No.110	
69	B60	233	縄文	掻器	1.89	1.94	0.53	1.27	黒曜石	完存	有	B60	円形
69	B60	234	縄文	掻器	2.73	2.31	1.23	8.02	黒曜石	完存	無	B60No.200	
69	C60	235	縄文	掻器	2.09	2.11	0.85	3.17	黒曜石	完存	無	C60	
69	B61	236	縄文	掻器	1.85	1.70	0.43	1.38	黒曜石	完存	無	B61No.804	茶混じり黒曜石，円形
69	B61	237	縄文	掻器	2.11	1.59	0.41	1.58	珪質頁岩	完存	無	B61No.692	円形
69	B61	238	縄文	掻器	1.40	1.58	0.65	1.48	黒曜石	完存	無	B61No.622	円形
69	B61	239	縄文	掻器	1.70	1.81	0.71	2.30	黒曜石	完存	無	B61No.802	
69	C62	240	縄文	掻器	2.17	1.92	0.77	2.92	黒曜石	完存	無	148号ピット	C62

第16表２　石器観察表

挿図番号	出土地点	番号	時期	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	欠損状況	自然面	注記内容	備考
69	B62	241	縄文	掻器	1.74	2.40	0.66	2.93	黒曜石	完存	無	B62No.856	
70	B60	242	縄文	掻器	3.00	2.70	0.95	6.02	黒曜石	完存	無	B60No.2	
70	B60	243	縄文	掻器	2.22	2.25	1.44	6.27	黒曜石	完存	有	B60No.315	
70	B60	244	縄文	掻器	2.18	2.58	0.85	3.36	黒曜石	完存？	有	B60No.318	
70	B60	245	縄文	掻器	1.98	2.42	0.70	3.17	黒曜石	完存	無	B60No.268	
70	B60	246	縄文	掻器	1.89	1.97	0.73	2.89	黒曜石	完存	有	B60No.9	
70	B60	247	縄文	掻器	1.96	1.58	0.55	1.83	黒曜石	完存？	無	B60No.30	
70	A61	248	縄文	掻器	(1.70)	(1.78)	1.00	1.76	黒曜石	欠損	無	A61No.10	
70	B61	249	縄文	掻器	1.60	1.78	1.68	2.04	黒曜石	完存	無	B61No.815	
70	B61	250	縄文	掻器	1.92	1.61	0.71	1.98	黒曜石	完存？	無	B61No.778	
70	B61	251	縄文	掻器	2.12	1.61	1.05	3.23	黒曜石	完存	無	B61No.481	
70	B61	252	縄文	掻器	1.82	1.73	0.61	1.88	黒曜石	一部欠損	無	B61No.462	
70	B61	253	縄文	掻器	2.13	1.75	0.75	1.90	黒曜石	完存	無	B61No.759	
70	B61	254	縄文	掻器	(0.83)	(1.90)	0.66	0.69	黒曜石	刃部のみ	無	B61No.156	
70	B61	255	縄文	掻器	1.85	2.00	0.68	2.23	黒曜石	完存	有	B61No.801	
70	B61	256	縄文	掻器	1.96	2.26	1.23	4.78	黒曜石	完存	有	B61No.296	
71	B61	257	縄文	掻器	2.35	2.75	0.88	4.50	黒曜石	完存	無	B61	
71	B61	258	縄文	掻器	1.83	2.78	1.27	5.05	黒曜石	完存？	有	B61No.147	
71	B61	259	縄文	掻器	(2.73)	(2.37)	0.69	4.00	黒曜石	欠損	無	B61No.820	
71	C61	260	縄文	掻器	1.62	2.22	0.70	2.94	黒曜石	完存	無	C61No.2	
71	C61	261	縄文	掻器	2.04	1.75	0.61	1.91	黒曜石	一部欠損か	無	C61No.60	
71	C61	262	縄文	掻器	1.95	1.78	0.68	1.88	黒曜石	完存？	無	C61No.158	
71	C62	263	縄文	掻器	2.15	1.84	0.98	4.48	黒曜石	完存	無	149号ピット	
71	B62	264	縄文	剥片	2.72	2.53	1.11	5.87	黒曜石	完存	有	B62No.944	掻器類似の原石
71	B62	265	縄文	掻器	1.78	2.08	0.83	3.17	黒曜石	完存	無？	B62No.446	
71	B62	266	縄文	掻器	1.69	2.11	0.88	3.75	黒曜石	完存	無	B62No.766	
71	B62	267	縄文	掻器	1.95	2.04	0.79	3.44	黒曜石	完存	無	B62No.955	
71	C62	268	縄文	掻器	(2.26)	1.75	1.00	3.62	黒曜石	欠損	有	C62No.19	
71	C62	269	縄文	掻器	1.72	2.06	0.70	2.95	黒曜石	完存	無	C62試掘坑	
72	B64	270	縄文	掻器	1.47	1.69	0.68	1.87	黒曜石	完存	無	B64	
72	B61	271	縄文	掻器	4.08	2.29	1.10	6.23	黒曜石	完存	無	B61No.731	縦長
72	B62	272	縄文	掻器	4.10	1.95	1.22	9.21	黒曜石	完存	無	B62No.270	縦長
72	B62	273	縄文	掻器	2.56	1.90	0.60	2.73	黒曜石	完存	有	B62No.193	縦長
72	B62	274	縄文	掻器	2.58	1.94	0.96	3.29	黒曜石	完存	無	B62No.207	縦長
72	B62	275	縄文	掻器	2.58	1.58	0.78	2.27	黒曜石	完存	無	B62No.845	縦長
72	B60	276	縄文	楔形	2.33	2.73	0.80	3.68	黒曜石	完存？	有	B60No.202	
72	B60	277	縄文	楔形	1.82	2.46	0.81	2.82	黒曜石	完存？	有	B60	
72	B61	278	縄文	楔形	2.10	2.31	0.58	2.78	黒曜石	完存？	無	B61No.127	刃部は両刃
72	B61	279	縄文	楔形	2.28	3.39	0.94	6.13	黒曜石	完存	無	B61No.685	
73	B61	280	縄文	楔形	1.86	3.18	0.78	4.56	黒曜石	完存？	無	B61No.745	
73	B61	281	縄文	剥片	1.78	(2.13)	0.51	1.32	黒曜石	欠損	無	B61	二次加工あり
73	B62	282	縄文	掻器	(3.05)	(1.40)	1.06	3.06	黒曜石	欠損	無	B62No.192	
73	B62	283	縄文	剥片	1.90	1.53	0.32	0.95	黒曜石	完存？	無	B62No.441	二次加工あり
73	C62	284	縄文	剥片	2.66	2.05	0.87	4.07	黒曜石	完存	無	C62No.1	二次加工あり
73	C62	285	縄文	楔形	2.01	2.07	0.78	3.05	黒曜石	完存	無	C62No.236	刃部は両刃
73	C62	286	縄文	掻器	(1.86)	(1.50)	0.81	2.26	黒曜石	欠損	無	C62No.249	
73	C62	287	縄文	剥片	(1.01)	(1.78)	0.82	1.47	黒曜石	欠損	無	C62No.76	二次加工あり
73	B62	288	縄文	礫器	3.80	4.60	2.33	40.57	珪質頁岩	完存	有	B62No.211	石核状石器
73	C62	289	縄文	石錐	2.02	0.70	0.49	0.67	黒曜石	完存？	無	C62No.286	
73	B60	290	縄文	剥片	1.63	2.22	0.28	0.52	黒曜石	完存？	無	B60No.162	二次加工あり
73	B61	291	縄文	剥片	1.83	3.10	0.92	4.14	黒曜石	完存？	無	B61No.175	二次加工あり
74	B61	292	縄文	剥片	4.09	2.21	0.87	6.58	珪質頁岩	完存	有	B61No.456	二次加工あり
74	B61	293	縄文	剥片	3.16	1.80	0.67	3.42	黒曜石	完存	無	B61No.51	二次加工あり
74	B62	294	縄文	楔形	2.34	1.46	0.67	1.65	黒曜石	完存	有	B62No.941	
74	B62	295	縄文	剥片	2.84	1.65	0.90	2.90	黒曜石	完存？	無	B62No.185	二次加工あり
74	C62	296	縄文	剥片	2.60	1.66	0.40	1.57	黒曜石	完存？	無	C62No.130	二次加工あり
74	C62	297	縄文	剥片	2.81	4.82	1.21	11.72	黒曜石		有	C62No.172-314	原石面あり，二次加工あり
74	--	298	縄文	剥片	1.27	1.95	0.36	0.74	黒曜石	完存？	無	早期層	二次加工あり
74	B60	299	縄文	掻器	6.7	5.5	1.5	52	黒色緻密安山岩	完存	無	B60No.319	刃部は磨耗
74	B60	300	縄文	礫器	5.8	8.8	3.4	218	頁岩	完存	有	B60No.221	刃部は片刃
77	34号住	19	縄文	打斧	9.5	6.4	3.3	250	砂岩	刃部側欠損	有	34住No.16	
77	34号住	20	縄文	打斧	9.9	5.8	2.7	205	砂岩	柄部側欠損	無	34住No.18	
77	34号住	21	縄文	打斧	7.7	4.2	1.1	40	粘板岩	両端欠損	有	34住	
77	34号住	22	縄文	打斧	5.4	5.0	1.1	38	粘板岩	両端欠損	無	34住	
77	34号住	23	縄文	打斧	9.0	5.6	2.6	148	粘板岩	刃部側欠損	有	34住No.5	
77	34号住	24	縄文	打斧	6.0	4.3	1.4	53	砂質粘板岩	刃部側欠損	無	34住	
77	3号住	4	縄文	砥石	8.5	5.5	4.2	115	デイサイト		無	3住No.68	3面を使用
78	7号住	8	縄文	凹石	10.9	7.5	3.1	495	安山岩	端部	有	7住No.2	両面及び側面を磨る
78	7号住	9	縄文	凹石	11.3	10.0	6.9	1030	安山岩	なし	有	7住No.41	3面を使用
79	8号住	19	縄文	打斧	10.4	3.3	0.7	45	粘板岩	完存	有	8住No.94	
79	8号住	20	縄文	打斧	8.9	3.6	0.8	51	緑色片岩	完存	有	8住No.93	片面を弱く磨く
79	8号住	21	縄文	叩き石	9.2	5.4	3.8	274	砂岩	完存	有	C69No.27	両端部を叩く
79	8号住	22	縄文	凹石？	(4.6)	5.0	4.3	175	安山岩	約半分欠損	有	8住	凹み部は欠損
85	9号住	43	縄文	石皿	22.5	18.5	5.0	3250	安山岩	完存	有	9住No.426	
85	9号住	44	縄文	埋甕蓋石	35.0	17.2	5.5	4170	安山岩	完存	有	9住No.604	板状自然石，一部赤変
85	9号住	45	縄文	打斧	(3.9)	2.9	0.8	12	砂質粘板岩	刃部側欠損	無	9住No.466	
85	9号住	46	縄文	砥石？	7.9	4.0	1.2	36	デイサイト	完存	無	9住No.169	灰白色，もろい
86	9号住	47	縄文	横刃形石器	14.3	7.8	3.7	422	砂岩	完存	有	9住No.517	
86	9号住	48	縄文	磨石	7.4	6.4	4.9	255	安山岩	完存	無	9住No.427	
86	9号住	49	縄文	礫器？	13.1	9.7	3.0	475	安山岩	完存	有	9住No.519	表面磨耗
86	9号住	50	縄文	凹石	12.8	8.1	5.6	726	安山岩	完存	有	9住No.96	凹み面は1面，片面は磨り面
86	9号住	51	縄文	凹石	(9.3)	7.0	3.8	435	安山岩	端部欠損	無	9住No.56	凹み2面，磨り面4面
86	9号住	52	縄文	凹石	11.4	10.5	3.4	608	安山岩	完存	有	9住No.520	稜磨り，凹み面は1面
86	9号住	53	縄文	凹石	7.7	6.1	3.6	245	安山岩	完存	有	9住No.167	凹み面は2面
86	9号住	54	縄文	凹石	9.8	6.5	3.9	382	安山岩	一部破損	無	9住No.603	凹み面は3面，片面及び側面は磨り面
86	9号住	55	縄文	砥石？	8.5	6.0	3.5	100	デイサイト		無	9住No.606	磨り面は1面
86	9号住	56	縄文	石鏃	(2.74)	(1.55)	0.28	0.57	黒曜石	先端・片脚欠損	無	9住No.574	基部付近磨き
86	9号住	57	縄文	石錐	3.57	1.18	0.92	2.80	黒曜石	完存	無	9住No.294	
88	13号住	4	縄文	凹石	10.8	8.3	5.5	606	安山岩	完存	有	13住	凹み面は2面
88	13号住	5	縄文	凹石	10.8	7.4	5.1	610	安山岩	完存	有	13住No.72	凹み面は2面
88	13号住	6	縄文	凹石	10.7	8.0	5.3	526	安山岩	完存	有	13住No.71	凹み面は1面
88	13号住	7	縄文	凹石	11.5	5.8	3.4	330	安山岩	完存	有	13住No.70	凹み面は2面
88	13号住	8	縄文	掻器？	7.0	5.5	1.2	58	頁岩	完存	無	B70No.6	

第16表３　石器観察表

挿図番号	出土地点	番号	時期	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	欠損状況	自然面	注記内容	備考
88	13号住	9	縄文	小型磨斧	3.6	1.9	0.8	8	緑色凝灰岩	完存	無	13住No.52	
88	13号住	10	縄文	掻器？	3.7	3.1	1.2	10	チャート	完存	無	13住	石鏃風
90	14号住	10	縄文	凹石	12.5	6.9	5.4	578	安山岩	完存	有	14住No.83	凹み面は2面
90	14号住	11	縄文	自然礫	20.3	10.0	6.9	1370	安山岩	完存	有	14住No.82	被熱，一部赤変，すす付着
90	14号住	12	縄文	石鏃	1.72	1.31	0.47	0.81	黒曜石	完存	無	14住No.58	
92	27号住	3	縄文	凹石	11.6	8.7	6.9	950	安山岩	完存	有	27住	凹み面は１面
92	28号住	20	縄文	打斧	(10.0)	5.9	1.5	116	砂岩	柄部側欠損	無	28住No.35	
92	28号住	21	縄文	打斧	(5.7)	3.4	1.6	32	ホルンフェルス	柄部側欠損	無	28住	
92	28号住	22	縄文	打斧	(5.9)	4.5	1.9	62	頁岩	刃部側欠損	無	28住No.57	柄部に抉りがある
92	28号住	23	縄文	横刃形石器	10.0	4.9	1.7	115	粘板岩	完存	有	28住	
92	28号住	24	縄文	凹石	(5.2)	6.1	3.5	132	安山岩	端部欠損	有	28住No.31	凹み面は2面
92	28号住	25	縄文	凹石	9.7	6.8	5.2	432	安山岩	完存	有	28住ﾋﾟｯﾄ3	凹み面は1面
93	30号住	4	縄文	打斧	(9.2)	4.5	1.0	50	粘板岩	柄部側欠損	無	30住	表面風化する
93	30号住	5	縄文	横刃形石器	8.6	5.5	2.0	105	粘板岩	完存	有	30住ﾋﾟｯﾄ3	
93	30号住	6	縄文	剥片石器	5.8	5.4	1.5	46	粘板岩	完存	有	30住No.4	
93	30号住	7	縄文	磨斧片再利用	4.2	2.8	0.4	12	緑色岩	転用品	無	30住ﾋﾟｯﾄ1	磨斧片の両面を磨いている
93	30号住	8	縄文	石鏃	(2.42)	(1.40)	0.35	0.79	頁岩	先端・片脚欠損	無	30住	
99	31号住	48	縄文	打斧	9.7	5.8	2.2	126	砂岩	完存	有	31住No.99	
99	31号住	49	縄文	打斧	(9.4)	5.7	1.9	116	粘板岩	柄部側欠損	無	31住No.169	
99	31号住	50	縄文	打斧	14.2	5.4	2.0	196	砂岩	完存	無	31住No.6	
99	31号住	51	縄文	打斧	13.3	4.4	2.0	134	砂岩	完存	無	31住	
99	31号住	52	縄文	打斧	(7.5)	3.5	1.7	50	粘板岩	わずかに刃先を欠く	無	31住	
99	31号住	53	縄文	打斧	6.9	4.0	2.5	100	蛇紋岩類	柄部側欠損か	無	31住No.	磨斧片転用
99	31号住	54	縄文	打斧	7.4	4.3	2.5	116	粘板岩	完存	無	31住No.106	表面風化する
99	31号住	55	縄文	打斧	9.5	4.9	2.5	132	粘板岩	完存	有	31住No.103	
99	31号住	56	縄文	打斧	(9.6)	5.6	1.0	58	粘板岩	柄部欠損	有	31住No.181	分胴形
99	31号住	57	縄文	打斧	(7.3)	5.0	1.3	65	砂岩	刃部側欠損	無	31住No.79	
99	31号住	58	縄文	打斧	(7.5)	5.0	1.7	72	粘板岩	刃部側欠損	無	31住No.167	
99	31号住	59	縄文	打斧	(8.5)	4.8	1.0	47	粘板岩	刃部側欠損	無	31住	風化著しい
99	31号住	60	縄文	打斧	(5.8)	4.4	1.7	72	砂質粘板岩	刃部側・柄部側欠損	無	31住	
99	31号住	61	縄文	打斧	5.9	3.4	0.8	27	砂岩		無	31住	フレイク状
100	31号住	62	縄文	横刃形石器	9.5	8.4	1.6	110	頁岩	完存	有	31住ﾋﾟｯﾄ7	フレイク状
100	31号住	63	縄文	横刃形石器	7.4	4.3	1.7	56	頁岩	完存	無	31住	フレイク状
100	31号住	64	縄文	横刃形石器	6.5	6.2	1.7	40	砂岩頁岩	完存	無	31住ﾋﾟｯﾄ4	フレイク状
100	31号住	65	縄文	横刃形石器	4.9	4.7	0.7	26	粘板岩	完存	無	31住ﾋﾟｯﾄ4	フレイク状
100	31号住	66	縄文	磨斧	(12.5)	4.7	(3.0)	308	緑色片岩	両端欠損	無	31住No.16	
100	31号住	67	縄文	凹石	10.0	8.6	4.5	496	安山岩	完存	有	31住No.80	凹み面は2面
100	31号住	68	縄文	凹石	11.3	6.2	4.6	428	安山岩	完存	有	31住No.19	凹み面1面，全体に被熱，赤変
100	31号住	69	縄文	凹石	12.9	6.6	5.0	539	安山岩	完存	有	31住No.10	凹み面は2面
100	31号住	70	縄文	凹石	14.7	7.1	5.0	654	安山岩	完存	有	31住No.105	凹み面は2面
100	31号住	71	縄文	凹石	14.9	7.8	4.0	750	安山岩	完存	有	31住No.43	凹み面は2面
100	31号住	72	縄文	凹石	10.4	6.0	3.5	293	安山岩	完存	有	31住No.3	凹み面は1面
100	31号住	73	縄文	凹石	9.8	6.9	5.3	435	安山岩	完存	有	31住No.173	凹み面は1面
100	31号住	74	縄文	凹石	9.2	6.8	4.7	376	安山岩	完存	有	31住No.162	凹み面は1面
100	31号住	75	縄文	凹石	8.0	6.4	3.3	178	安山岩	完存	有	31住No.27	凹み面1面，表面黒変（被熱か）
101	31号住	76	縄文	磨石	10.5	8.8	6.7	870	安山岩	完存	有	31住No.119	磨り面は1面
101	31号住	77	縄文	磨石	7.9	5.6	4.3	288	安山岩	完存	有	31住No.176	磨り面は1面，一部赤変
101	31号住　炉内	78	縄文	丸石	34.1	28.8	25.7	37000	安山岩	完存	有	31住No.160	
101	31号住	79	縄文	丸石	(12.0)	(9.5)	4.8	617	安山岩	破片	有	31住No.41	表面被熱
101	31号住	80	縄文	石鏃	2.70	(1.62)	0.39	1.00	黒曜石	片脚欠損	無	31住No.136	
101	31号住	81	縄文	石鏃	3.36	1.92	0.51	2.09	チャート	完存	無	31住No.178	
101	31号住	82	縄文	石鏃	2.25	1.50	0.40	0.95	黒曜石	完存	無	31住No.164	
101	31号住	83	縄文	石鏃	1.77	1.33	0.38	0.57	黒曜石	完存	無	31住No.165	
101	31号住	84	縄文	石鏃	1.63	1.42	0.39	0.96	チャート	完存	無	31住炉内	
101	31号住	85	縄文	石鏃	(1.55)	(1.49)	0.42	0.64	黒曜石	先端・片脚欠損	無	31住	
101	31号住	86	縄文	石錐	(2.85)	0.85	0.51	1.26	黒曜石	端部欠損	有	31住	
103	32号住	14	縄文	打斧	(6.9)	6.0	1.6	96	砂岩	柄部欠損	無	32住No.46	
103	32号住	15	縄文	打斧	(4.8)	3.9	1.6	48	粘板岩	刃部側欠損	有	32住	
103	32号住	16	縄文	打斧	(6.9)	3.8	1.8	28	粘板岩	柄部側欠損	有	32住ﾋﾟｯﾄ5	
104	32号住	17	縄文	凹石	9.4	6.5	4.5	382	安山岩	完存	有	32住No.50	凹み面4面
104	32号住	18	縄文	凹石	(12.4)	10.1	4.6	798	安山岩	端部欠損	有	32住No.9	凹み面は1面，2辺を稜磨り
104	32号住	19	縄文	凹石	10.0	8.8	8.0	990	安山岩	完存	有	32住No.45	凹み面は2面
104	32号住	20	縄文	凹石	11.9	5.3	3.8	280	安山岩	完存	有	32住No.23	凹み面は2面
104	32号住	21	縄文	凹石	12.6	9.2	6.1	870	安山岩	完存	有	32住No.44	凹み面は2面
104	32号住	22	縄文	凹石	12.0	6.8	4.7	564	安山岩	完存	有	32住No.43	凹み面は1面，全体に被熱
104	32号住	23	縄文	凹石	(7.4)	6.8	5.3	306	安山岩	端部欠損	有	32住	
104	32号住	24	縄文	凹石	9.5	9.3	4.8	496	安山岩	完存	有	32住No.24	凹み面は2面
105	32号住	25	縄文	剥片	4.9	2.3	1.0	16	チャート	完存	無	32住	フレイク
105	32号住	26	縄文	石鏃	(2.25)	2.07	0.47	1.90	黒曜石	先端欠損	無	32住	
105	32号住	27	縄文	石鏃	3.10	(1.68)	0.45	1.77	チャート	片脚欠損	無	32住No.19	側辺鋸歯状
105	32号住	28	縄文	石錐	3.38	1.02	0.40	1.42	頁岩	完存	無	32住No.12	先端付近に使用痕
106	33号住	17	縄文	打斧	8.3	4.9	1.2	50	粘板岩	完存？	有	33住No.5	
106	33号住	18	縄文	打斧	(10.7)	6.4	2.1	200	砂岩	刃部側欠損	有	33住	
106	33号住	19	縄文	剥片石器	8.5	8.3	2.0	135	砂岩	完存	有	33住No.1	
106	33号住	20	縄文	凹石	10.2	8.9	5.0	598	安山岩	完存	有	33住No.6	凹み面は2面
106	36号住	1	縄文	打斧	13.5	4.2	1.7	125	ホルンフェルス	完存	有	36住No.2	
106	36号住	2	縄文	横刃形石器	8.5	6.6	1.8	99	砂岩	完存	有	Q17	
106	36号住	3	縄文	凹石	13.5	9.1	4.8	698	安山岩	完存	有	36住No.3	
107	16号住	25	縄文	石錘	5.9	4.8	2.5	95	安山岩	完存	有	16住No.109	打ち欠き石錘，欠き部は4カ所
107	16号住	26	縄文	砥石？	8.8	3.5	3.1	195	ホルンフェルス	完存	有	16住No.65	使用目的不明
108	16号住	27	縄文	凹石	12.2	8.6	4.5	793	安山岩	完存	有	16住No.194	凹み面は2面，全てごく浅い
108	16号住	28	縄文	凹石	13.4	6.1	3.5	474	安山岩	完存	有	16住No.286	凹み面は2面，敷石中
108	16号住	29	縄文	凹石	9.5	7.0	5.3	458	安山岩	完存	有	16住No.99	凹み面は3面
108	16号住	30	縄文	凹石	11.5	8.5	5.9	596	安山岩	完存	有	16住No.195	凹み面は2面，表面赤変
108	16号住	31	縄文	磨石	12.1	7.3	7.3	1000	石英閃緑岩	完存	有	16住No.97	花崗岩類
108	16号住	32	縄文	丸石	26.4	24.1	16.7	15800	安山岩	完存	有	16住No.210	表面磨耗

第16表4　石器観察表

挿図番号	出土地点	番号	時期	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	欠損状況	自然面	注記内容	備考
108	16号住	33	縄文	石鏃	(1.60)	(0.77)	0.23	0.22	黒曜石	両脚欠損	無	16住No.133	
108	16号住	34	縄文	石鏃	1.54	(1.15)	0.30	0.31	黒曜石	片脚欠損	無	16住No.123	
108	16号住	35	縄文	石鏃	1.45	(1.13)	0.45	0.40	黒曜石	片脚欠損	無	16住No.170	
110	17号住	16	縄文	凹石	11.8	6.6	5.3	550	安山岩	一部欠損	有	17住No.262	凹み面は2面
110	17号住	17	縄文	凹石	9.1	6.7	5.0	414	安山岩	完存	有	17住No.263	凹み面は1面
110	17号住	18	縄文	凹石	8.8	6.2	4.5	340	安山岩	完存	有	17住No.232	凹み面は4面（側面にも）
110	17号住	19	縄文	凹石	8.5	(6.8)	(4.0)	347	安山岩	半分以上欠損	有	17住	凹み面は1面以上
110	17号住	20	縄文	凹石	11.5	8.3	2.9	423	安山岩	完存	有	17住No.230	凹み面は2面，端部後を磨る
110	17号住	21	縄文	凹石	(9.4)	(4.5)	6.5	300	安山岩	大きく破損	有	17住No.264	凹み面は1面以上，赤変
110	17号住	22	縄文	磨石	9.2	8.7	6.3	660	安山岩	完存	有	17住	磨り面は1面
110	17号住	23	縄文	磨斧	(5.4)	4.0	1.7	56	安山岩？	刃部側欠損	無	17住No.235	
110	17号住	24	縄文	剥片石器	9.8	8.3	1.3	149	砂岩	完存	有	17住ﾋﾟｯﾄ14	
110	17号住	25	縄文	石核	4.2	4.2	1.2	21	チャート	完存	無	F41No.2	
110	17号住	26	縄文	石鏃	1.28	0.91	0.22	0.17	黒曜石	完存	無	17住No.164	
111	18号住	6	縄文	打斧	(10.3)	8.0	2.7	312	砂岩	刃部側欠損	無	18住No.34	
111	18号住	7	縄文	凹石	11.4	5.6	3.2	270	安山岩	完存	有	18住No.46	凹み面は3面
111	18号住	8	縄文	凹石	10.0	7.5	3.7	387	安山岩	完存	有	18住No.43	凹み面は1面
112	18号住	9	縄文	凹石	12.1	6.1	3.9	336	安山岩	完存	有	18住No.49	凹み面は2面
112	18号住	10	縄文	磨石 ？	10.8	8.4	3.7	550	石英閃緑岩	完存	無	18住No.35	表面剥離，磨り面は選らない
112	18号住	11	縄文	石錘	5.6	4.5	1.8	56	安山岩	完存	有	18住No.48	打ち欠き石錘，欠き部は2カ所
112	18号住	12	縄文	石錘	5.2	4.0	2.9	60	安山岩	完存	有	18住No.40	磨り削り石錘，削りは2カ所
112	18号住	13	縄文	石鏃	1.45	1.09	0.28	0.31	黒曜石	完存	無	18住No.41	
112	18号住	14	縄文	石鏃	(1.30)	1.34	0.32	0.31	黒曜石	先端欠損	無	18住	
112	18号住	15	縄文	石鏃	(2.10)	(1.67)	0.62	2.09	黒曜石	両脚欠損	無	18住	
112	18号住	16	縄文	石皿	(19.0)	25.0	10.5	7360	安山岩	手前半分欠損	有	18住No.39	底面赤変
114	19号住	21	縄文	打斧	(10.5)	5.0	1.0	70	ホルンフェルス	刃部の一部・柄部欠損	無	19住No.300	表面風化する
114	19号住	22	縄文	凹石	13.1	8.2	4.8	780	安山岩	完存	有	19住No.240	凹み面は2面，端部で叩き
114	19号住	23	縄文	凹石	9.3	7.2	4.4	318	安山岩	完存	有	19住No.318	凹み面は4面
114	19号住	24	縄文	凹石	10.8	7.4	3.1	370	安山岩	完存	有	19住No.361	凹み面は2面
114	19号住	25	縄文	凹石	12.3	8.0	5.5	695	安山岩	完存	有	19住No.387	凹み面は3面
115	19号住	26	縄文	凹石	12.4	9.4	4.8	762	安山岩	完存	有	19住No.238	凹み面は2面，左面にすす付着
115	19号住	27	縄文	凹石	12.7	10.2	6.0	1040	安山岩	完存	有	19住No.292	凹み面は1面，浅い
115	19号住	28	縄文	小型石棒	(15.0)	3.0	(1.6)	120	結晶片岩	破損	無	19住No.321	赤変
115	19号住	29	縄文	浮子状石製品	11.1	5.7	2.1	53	デイサイト質軽石	一部破損	無	19住No.241	径6㎜の孔あり
115	19号住	30	縄文	磨石	(5.0)	(4.2)	(1.5)	36	砂岩	破損	無	19住	
115	19号住	31	縄文	玉	2.4	1.2	0.6	2.98	黒色滑石	完存	無	H36No.3	径5㎜の孔があく
115	19号住	32	縄文	玉	0.78	0.75	0.50	0.36	滑石	完存	無	19住No.242	淡緑褐色
115	19号住	33	縄文	石鏃	1.32	(0.88)	0.20	0.15	黒曜石	片脚欠損	無	19住	
115	19号住	34	縄文	石鏃	1.49	1.07	0.16	0.19	黒曜石	完存	無	19住No.178	剥片鏃
115	19号住	35	縄文	石鏃	1.29	1.19	0.35	0.46	黒曜石	完存	無	19住No.227	剥片鏃
115	19号住	36	縄文	石鏃	1.94	1.38	0.32	0.75	チャート	完存	無	19住No.201	剥片鏃
115	19号住	37	縄文	石鏃	1.41	(1.16)	0.27	0.40	黒曜石	脚部欠損	無	19住No.227	剥片鏃
115	19号住	38	縄文	石鏃	1.55	1.11	0.23	0.27	黒曜石	完存	無	19住No.6	
117	21号住	25	縄文	石錘	5.6	4.7	1.3	47	砂岩	完存	有	21住	打ち欠き石錘，欠き部は2カ所
117	21号住	26	縄文	玉	3.7	1.6	1.3	6	緑色滑石	完存	無	21住No.250	側面に溝，径5㎜の孔
117	21号住	27	縄文	磨斧	[4.6]	[1.7]	0.9	8	蛇紋岩類	破片	無	21住No.13	小型
117	21号住	28	縄文	凹石	13.1	7.6	5.2	708	安山岩	完存	有	21住No.240	凹み面は2面，両端叩き
117	21号住	29	縄文	凹石	13.7	6.7	6.2	930	安山岩	完存	有	21住No.242	凹み面は2面
117	21号住	30	縄文	凹石	10.7	7.2	3.0	275	安山岩	半分欠損	有	21住No.236	凹み面は1面，破損部を調整して使用継続
117	21号住	31	縄文	凹石	8.9	6.0	3.6	243	安山岩	完存	有	21住No.379	凹み面は2面
117	21号住	32	縄文	凹石	11.8	7.7	5.6	628	安山岩	完存	有	21住No.243	凹み面は1面，片面は磨り面
118	21号住	33	縄文	凹石	11.1	8.6	7.0	768	安山岩	完存	有	21住No.244	凹み面は2面
118	21号住	34	縄文	磨石	11.0	9.3	7.3	1030	安山岩	完存	有	21住No.235	一部凹み，磨り面は1面
118	21号住	35	縄文	磨石	9.7	7.0	5.4	566	安山岩	完存	有	21住No.241	磨り面は2面
118	21号住	36	縄文	凹石	6.5	6.2	4.2	212	安山岩	完存	有	21住No.396	凹み面は2面，すす付着
118	21号住	37	縄文	磨石	(6.5)	(6.2)	4.2	212	安山岩	半分欠損	有	21住No.238	凹みらしい部分あり
118	21号住	38	縄文	丸石	11.8	11.6	9.4	1890	安山岩	完存	有	21住No.245	
118	21号住	39	縄文	自然石	19.5	4.2	3.8	460	安山岩	完存	有	21住No.376	石棒状，一部敲打痕あり
118	21号住	40	縄文	石核	5.1	4.5	2.8	64	チャート	完存	無	21住No.239	質良好
119	26号住	6	縄文	磨石	10.2	9.5	5.2	665	安山岩	完存	有	26号住No.20	磨り面の形跡ほとんどなし
119	26号住	7	縄文	凹石	12.3	6.5	4.8	550	安山岩	完存	有	26号住No.19	凹み面は3面
120	35号住	8	縄文	石皿片？	(13.1)	(8.0)	(2.6)	372	ホルンフェルス	破片	無	35住No.7	打斧に転用か，表面風化
120	35号住	9	縄文	凹石	9.8	8.1	(3.5)	426	安山岩	半分欠損	有	35住No.8	
120	35号住	10	縄文	磨斧	(2.3)	(2.3)	0.7	5	蛇紋岩類	刃部側欠損	無	35住No.16	小型
120	35号住	11	縄文	玉	1.1	1.0	0.7	2	滑石類		無	35住No.14	径4㎜の孔
120	35号住	12	縄文	石鏃	1.77	(1.12)	0.28	0.47	黒曜石	片脚欠損	無	35住No.13	
121	1号住	44	平安	砥石	8.8	6.6	4.7	395	砂岩	完存	無	1住床	砥石面は6面
121	1号住	45	平安	砥石？	12.6	7.5	1.5	235	ホルンフェルス	完存？	無	1住No.126	全体にもろく風化している
121	1号住	46	縄文	石棒	(10.5)	4.2	3.9	232	点紋緑色片岩		無		
121	1号住	47	縄文	磨石	7.3	6.1	6.0	390	安山岩	完存	無	1住No.130	磨り面は不明確だが，滑らか
122	1号住	56	縄文	石鏃	2.10	1.29	0.27	0.51	黒曜石	完存	無	1住No.116	
123	2号住 竈	10	平安	支脚石	34.0	12.3	8.2	4540	安山岩	完存	有	2住カマド	被熱・赤変
123	4号住	8	平安	砥石	(6.8)	2.9	3.0	55	変質安山岩	両端欠損	無	4住No.5	
124	5号住	18	縄文	石匙	7.2	5.7	1.1	30	粘板岩	完存	無	5住No.95	
124	5号住	19	縄文	石鏃	1.95	1.07	0.25	0.44	珪質頁岩	完存	無	5住No.94	側辺鋸歯状
125	6号住	31	不明	叩き石	19.0	6.6	6.0	1150	砂岩	完存	有	6住No.189	突き棒状
126	6号住	32	縄文	凹石	13.5	5.7	4.8	454	安山岩	完存	有	6住No.187	凹み面は3面
126	6号住	33	縄文	石棒	(11.4)	(9.2)	(2.7)	390	緑色片質デイサイト	破片	無	6住No.130	
126	6号住	34	縄文	石鏃	1.48	(1.29)	0.28	0.44	チャート	片脚欠損	無	6住	側辺鋸歯状，三角鏃，早期か
126	6号住	35	縄文	石錐	2.74	1.22	0.63	1.23	黒曜石	完存？	有	6住No.79	茎部寄りに使用痕
126	12号住	10	縄文	凹石	8.8	5.8	3.5	182	安山岩	完存	有	12住No.22	凹み面は4面（側面も使用）
126	12号住	11	縄文	凹石？	(5.7)	9.2	6.9	443	安山岩	半分欠損	有	12住No.38	凹み面は遺存せず
127	20号住	3	縄文	凹石	(7.9)	6.8	4.7	226	安山岩	半分欠損	有	20住No.59	凹み面は1面以上
127	20号住	4	縄文	打斧	(7.2)	(4.8)	1.2	40	粘板岩	刃部側欠損	無	20住ｶﾏﾄﾞ	もろい
127	20号住	5	縄文	石鏃	1.7	1.0	0.3	0.33	黒曜石	完存	無	20住	
127	23号住	3	縄文	打斧	(8.8)	4.7	1.7	88	緑色片岩	柄部側欠損	有	23住No.6	
128	24号住	21	平安	突き臼	19.9	18.0	13.0	5620	安山岩	完存	有	24住No.41	凹みの径8.5cm，深さ5.2cm，裏面は多孔石状
128	24号住	22	平安	砥石	[8.4]	5.7	2.8	142	緑色変質凝灰岩	約半分欠損	無	24住No.39	4面使用

第16表5　石器観察表

挿図番号	出土地点	番号	時期	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	欠損状況	自然面	注記内容	備考
128	24号住	23	縄文	打斧	[8.8]	5.5	1.2	84	砂岩	柄部側？欠損	無	24住	
128	24号住	24	縄文	石鏃	(1.16)	1.62	0.45	0.85	黒曜石	先端欠損	無	24住	
129	25号住　竈	29	平安	支脚石	23.8	8.3	10.0	2820	安山岩	完存	有	25住No.40	全体に赤変
130	25号住	37	縄文	凹石	10.3	6.4	3.4	295	安山岩	完存	有	25住No.7	凹み面は2面
130	25号住	38	縄文	石核状石器	4.4	2.7	1.9	39	チャート	完存	有	25住	
132	29号住　竈	37	平安	支脚石	21.5	11.2	7.6	2660	安山岩	完存	有	29住支脚	赤変
132	29号住　竈	38	平安	支脚石蓋	11.6	7.5	3.5	310	安山岩	完存	有	29住支脚	赤変
132	29号住	39	縄文	凹石	10.3	8.4	4.9	570	安山岩	端部破損	有	29住No.61	
132	29号住	40	不明	叩き石	10.0	4.5	2.2	182	蛇紋岩類	周縁部潰し	無	29住No.4	本来磨斧
132	29号住	41	縄文	打斧	(4.6)	(6.5)	1.2	46	頁岩	刃部のみ	無	29住	
132	29号住	42	縄文	打斧	(10.9)	5.2	1.7	102	砂岩	刃部欠損	有	29住	
132	29号住	43	縄文	石鏃	2.05	2.02	0.62	1.86	黒曜石	完存	無	29住	
132	29号住	44	縄文	石鏃	2.06	1.26	0.44	0.73	黒曜石	完存	無	29住	
132	29号住	45	縄文	石鏃	1.60	(1.12)	0.28	0.32	黒曜石	片脚欠損	無	29住	
133	37号住	28	縄文	多凹石	(10.5)	13.5	6.0	1130	安山岩	約半分欠損	有	C58No.36	凹み面は2面
133	37号住	29	縄文	横刃形石器	(7.2)	9.0	3.3	255	砂岩	半分欠損	有	C58No.37	礫器か
133	37号住	30	縄文	石鏃	1.36	(1.03)	0.27	0.21	黒曜石	片脚欠損	無	37住	
133	37号住	31	縄文	石鏃	2.25	(1.41)	0.34	0.62	黒曜石	片脚欠損	無	37住No.31	
134	4号ピット	1	縄文	打斧	11.6	4.3	1.7	94	頁岩	刃部一部欠損	有	ﾋﾟｯﾄ4No.3	
134	5号ピット	2	縄文	凹石	10.5	5.3	4.3	303	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ5	凹み面は1面
134	10号ピット	3	縄文	凹石	10.5	8.2	5.3	564	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ10No.3	凹み面は2面
134	22号ピット	7	縄文	石鏃	1.14	0.88	0.18	0.13	黒曜石	完存	無	ﾋﾟｯﾄ22	微小石鏃
134	25号ピット	8	縄文	凹石	10.6	7.9	4.2	365	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ25No.4	凹み面は1面
135	41号ピット	17	縄文	凹石	12.7	5.8	4.5	520	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ41No.5	凹み面は1面
135	41号ピット	18	縄文	石鏃	1.92	1.55	0.46	1.11	珪質頁岩	完存	無	ﾋﾟｯﾄ41	
135	45号ピット	19	縄文	石鏃	1.58	1.75	0.23	0.42	黒曜石	完存	無	B71No.2	ﾋﾟｯﾄ45内
135	52号ピット	21	縄文	凹石	9.8	7.3	5.5	547	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ52No.10	凹み面は2面
135	63号ピット	29	縄文	打斧？	(4.5)	5.1	1.8	42	頁岩	刃部側欠損	無	ﾋﾟｯﾄ63No.6	
135	63号ピット	30	縄文	凹石	11.5	8.3	3.7	560	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ63No.7	凹み面は2面
135	69号ピット	31	縄文	磨斧	(6.0)	(3.4)	1.2	38	緑色片岩	刃部側片	無	ﾋﾟｯﾄ69	
135	70号ピット	32	縄文	凹石	11.1	8.2	3.3	422	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ70No.8	側面叩き・磨り
136	73号ピット	34	縄文	磨石	(6.0)	7.1	4.4	255	安山岩	約半分欠損	有	C67No.15	側面を磨っている
136	79号ピット	35	縄文	凹石	10.6	8.6	3.7	500	安山岩	完存	有	C66No.3	凹み面は2面
136	81号ピット	36	縄文	剥片石器	(4.4)	5.2	1.3	31	頁岩	半分欠損	無	B66No.13	
136	82号ピット	37	縄文	叩き石？	8.3	(4.8)	3.8	195	安山岩	約半分欠損	有	C66No.17	凹石か
136	86号ピット	39	縄文	石鏃	3.2	1.84	0.70	2.26	黒曜石	完存	有	ﾋﾟｯﾄ86	側面鋸歯状
136	95号ピット	43	縄文	打斧	(4.6)	4.4	0.9	26	ホルンフェルス	柄部側欠損	有？	ﾋﾟｯﾄ95　C71	表面風化
136	95号ピット	44	縄文	打斧？	(3.2)	4.5	1.0	18	チャート	約半分欠損？	無	ﾋﾟｯﾄ95No.5	
136	137号ピット	45	縄文	凹石	10.3	6.1	6.0	616	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ136 B66No.11	凹み面は1面，磨り面は3面
136	145号ピット	47	縄文	石鏃	1.47	1.35	0.25	0.31	黒曜石	完存	無	ﾋﾟｯﾄ145	早期か
137	159号ピット	50	縄文	凹石	(7.0)	6.3	3.2	163	安山岩	端部欠損	有	ﾋﾟｯﾄ159	凹み面は2面，両面磨っている
137	206号ピット	53	縄文	石錘	5.5	6.7	2.2	95	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ206	打ち欠き石錘，欠き部は2カ所
138	263号ピット	64	縄文	石鏃	(1.45)	0.94	0.29	0.32	黒曜石	先端欠損	無	ﾋﾟｯﾄ263	埋設土器内
139	366号ピット	83	縄文	凹石	10.7	7.2	5.1	498	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ344No.10	凹み面は2面，両面磨っている
139	368号ピット	85	縄文	凹石	8.1	7.4	4.5	354	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ368No.1	凹み面は2面
140	391号ピット	86	縄文	磨き石？	(1.2)	(3.2)	1.5	5	砂岩頁岩	一部のみ	無	ﾋﾟｯﾄ391	海浜石か
141	404号ピット	98	縄文	石鏃	2.44	1.95	0.59	2.81	頁岩	完存	無	404号ピット	
141	407号ピット	99	縄文	打斧	(9.7)	5.7	1.4	76	粘板岩	柄部側欠損	無	ﾋﾟｯﾄ407	横刃形石器か
141	407号ピット	100	縄文	打斧	(4.5)	3.7	0.5	11	粘板岩	刃部側欠損	無	ﾋﾟｯﾄ407	
141	412号ピット	102	縄文	凹石	11.3	8.5	5.2	658	安山岩	完存	有	ﾋﾟｯﾄ412No.1	凹み面は2面，周囲に敲打痕
143	N16	18	縄文	打斧	(7.5)	5.1	0.8	50	粘板岩	柄部側破損	無	N16	表面風化する
143	M17	19	縄文	打斧	5.8	6.1	1.2	52	粘板岩	完存	無	M17	横刃形石器か
143	P17	20	縄文	打斧	12.7	5.0	1.1	83	粘板岩	完存	有	P17	
143	P17	21	縄文	打斧	(7.6)	4.0	1.4	49	ホルンフェルス	刃部側欠損	無	P17	柄部に抉りあり
143	P17	22	縄文	打斧	(5.8)	4.7	1.4	51	砂岩	柄部側欠損	無	P17	稜線不明確，風化激しい
143	P17	23	縄文	打斧	(6.1)	(3.7)	0.6	16	粘板岩	破片	無	P17	
143	O18	24	縄文	打斧	(7.5)	4.6	1.3	52	粘板岩	柄部側片	無	O18	
143	O18	25	縄文	打斧	9.1	3.9	1.1	55	粘板岩	完存	無	O18	
143	N19	26	縄文	打斧	(6.6)	3.7	0.9	34	砂質粘板岩	柄部側欠損	無	N19	
143	N19	27	縄文	打斧	(7.6)	4.2	0.9	29	粘板岩	両端欠損	無	N19	
143	O19	28	縄文	打斧	(6.8)	4.5	1.2	60	粘板岩	両端欠損	無	O19	
143	N19	29	縄文	打斧	(6.6)	5.2	1.4	65	頁岩	刃部側欠損	無	N19	
143	N20	30	縄文	打斧	6.7	3.3	0.7	20	粘板岩	完存	無	N20	
143	N21	31	縄文	打斧	10.7	3.9	1.5	90	砂質粘板岩	完存	有	N21	稜が磨耗
143	M22	32	縄文	打斧	(6.3)	6.6	0.9	54	粘板岩	刃部側？欠損	無	M22	表面風化する
143	N22	33	縄文	打斧	10.6	5.5	1.0	76	粘板岩	完存	無	N22	
143	J32	34	縄文	打斧	12.7	4.3	1.9	112	粘板岩	完存	無	J32	
143	E53	35	縄文	打斧	(9.5)	5.8	2.4	154	粘板岩	刃部側欠損	有	E53	
143	D56	36	縄文	打斧	(6.4)	6.2	1.2	54	粘板岩	刃部のみ	無	D56	
143	C66	37	縄文	打斧	(6.5)	5.5	1.3	47	ホルンフェルス	両端欠損	無	C66	
143	C67	38	縄文	打斧	6.5	3.7	1.0	36	粘板岩	完存	無	C67	もろい
143	B68	39	縄文	打斧	10.9	4.5	1.3	70	粘板岩	完存	有	B68	横刃形石器か
143	C68	40	縄文	打斧	(8.0)	7.3	0.9	80	粘板岩	刃部側のみ	有	C68	
143	C71	41	縄文	打斧	(11.5)	8.6	3.3	300	砂岩	柄部側欠損	有	C71	
143	A72	42	縄文	打斧	(6.6)	4.2	1.4	46	砂岩	刃部側欠損	無	A72	
144	－	43	縄文	打斧	10.7	6.8	2.1	172	頁岩	完存	無	表採	
144	－	44	縄文	打斧	(6.3)	8.9	1.6	102	粘板岩	柄部側欠損？	無	表採	横刃形石器か
144	Q13	45	縄文	横刃形石器	11.0	5.6	1.2	82	粘板岩	完存	有	Q13	
144	N19	46	縄文	横刃形石器	7.4	4.8	2.0	100	頁岩	完存	無	N19	
144	D51	47	縄文	横刃形石器	12.3	6.0	1.7	140	粘板岩	完存	有	D51	
144	O15	48	縄文	磨斧	(14.6)	5.8	3.7	462	緑色凝灰岩	刃部破損	無	O15	刃部欠損のまま使用継続か
144	M22	49	縄文	磨斧	(4.8)	(4.4)	2.9	48	緑色凝灰岩	刃部側のみ	無	M22	
144	O16	50	縄文	凹石	(10.6)	8.3	4.2	434	安山岩	約半分欠損	無	O16	凹み面は1面
144	N19	51	縄文	凹石	10.7	6.5	4.8	424	安山岩	完存	有	N19	凹み面は2面
144	N19	52	縄文	凹石	(9.8)	6.4	(4.1)	320	安山岩	端部等破損	有	N19	凹み面は1面
145	N19	53	縄文	凹石	11.0	6.6	4.8	458	安山岩	完存	有	N19	凹み面は1面
145	N19	54	縄文	凹石	13.8	10.3	7.0	1190	安山岩	完存	有	M19	凹み面は2面
145	N19	55	縄文	凹石	(5.6)	7.0	3.1	140	安山岩	半分欠損	有	N19	凹み面は1面
145	G38	56	縄文	凹石	11.5	7.6	5.1	508	安山岩	完存	有	G38	凹み面は1面
145	F42	57	縄文	凹石	9.2	7.8	4.9	463	安山岩	完存	有	F42No.35	凹み面は2面
145	B66	58	縄文	凹石	10.4	8.3	5.3	607	安山岩	完存	有	B66No.12	凹み面は2面，もろい

第16表６　石器観察表

挿図番号	出土地点	番号	時期	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	欠損状況	自然面	注記内容	備考
145	C66	59	縄文	凹石	12.4	8.9	6.1	785	安山岩	完存	有	C66　11住No.23	凹み面は1面
145	C66	60	縄文	凹石	9.5	6.4	3.8	268	安山岩	完存	有	C66　11住No.24	凹み面は2面
145	B68	61	縄文	凹石	10.4	7.8	4.9	650	安山岩	完存	有	B68　No.11	凹み面は2面
146	溝表採	62	縄文	凹石	8.5	6.4	4.9	322	安山岩	側面破損	有	セギ	凹み面は2面
146	溝表採	63	縄文	凹石	9.1	7.7	4.0	385	安山岩	完存	有	C68セギ	凹み面は2面
146	溝表採	64	縄文	凹石	10.0	8.8	5.0	576	安山岩	片面破損	有	C68セギ	凹み面は1面以上
146	溝表採	65	縄文	凹石	9.3	7.4	4.2	368	安山岩	完存	有	C68	凹み面は2面
146	溝表採	66	縄文	凹石	11.5	8.8	5.3	712	安山岩	完存	有	セギ	凹み面は2面
146	溝表採	67	縄文	凹石	12.5	6.7	5.2	614	安山岩	片面破損	有	セギ	凹み面は1面以上
146	溝表採	68	縄文	凹石	11.8	8.9	4.7	696	安山岩	完存	有	セギ	凹み面は2面
146	溝表採	69	縄文	凹石	9.0	4.7	4.2	278	安山岩	完存	有	C68セギ	凹み面は4面
147	溝表採	70	縄文	凹石	9.2	8.0	5.1	469	安山岩	完存	有	セギ	凹み面は2面
147	溝表採	71	縄文	凹石	9.4	7.3	3.6	258	安山岩	完存	有	D68セギ	凹み面は2面
147	溝表採	72	縄文	凹石	9.2	7.4	5.4	458	安山岩	完存	有	セギ	凹み面は1面
147	溝表採	73	縄文	凹石	9.3	5.8	4.6	284	安山岩	完存	有	C68セギ	凹み面は1面
147	溝表採	74	縄文	凹石	(8.0)	6.7	5.5	325	安山岩	両端部等破損	有	C68セギ	凹み面は2面
147	溝表採	75	縄文	凹石	6.9	6.6	4.2	262	安山岩	完存	有	セギ	凹み面は2面
147	－	76	縄文	凹石	11.3	8.2	6.1	738	安山岩	完存	有	表採	凹み面は2面
147	－	77	縄文	凹石	15.4	5.3	3.8	406	安山岩	完存	有	表採	凹み面は3面
147	－	78	縄文	凹石	10.7	9.0	5.7	673	安山岩	完存	有	表採	凹み面は2面
148	－	79	縄文	凹石	9.8	8.5	5.3	650	安山岩	完存	有	表採	凹み面は2面，一面は磨り面併用
148	－	80	縄文	凹石	9.6	6.6	4.4	360	安山岩	完存	有	表採	凹み面は4面
148	－	81	縄文	凹石	11.2	7.5	4.4	447	玄武岩	完存	有	表採	凹み面は2面
148	B52	82	縄文	石皿	(19.0)	34.2	8.8	8500	安山岩	手前半分欠損	有	B58No.30	被熱
148	F42	83	縄文	石皿	(19.5)	(12.7)	4.3	1040	安山岩	破片	有	F42	
148	B66	84	縄文	石錘	3.5	5.8	2.7	60	安山岩	完存	有	B66	
148	I34	85	縄文	みがき石	3.4	2.6	1.7	20	砂岩	完存	無	I34	
148	－	86	縄文	玦状耳飾	2.6	(1.4)	0.4	2.08	滑石	半分欠損	無	表採	灰オリーブ色，径2㎜の補修孔
149	N13	87	縄文	多凹石	24.7	11.7	10.5	3550	安山岩	完存	有	N13	凹み面は2面
149	－	88	縄文	多凹石	24.6	23.5	11.7	8800	安山岩	完存	有	セギ	やや黒変する
150	J31	89	縄文	石鏃	(1.76)	(1.15)	0.27	0.37	黒曜石	両脚部欠損	無	J31	
150	C53	90	縄文	石鏃	1.44	(1.24)	0.27	0.41	黒曜石	片脚部わずかに欠損	無	C53	小型三角鏃，基部に磨き，早期か
150	Q16	91	縄文	石鏃	2.05	1.69	0.37	1.13	珪質頁岩	完存	無	Q16ﾋﾟｯﾄ内	普利Ⅰ式期か
150	I32	92	縄文	石鏃	(0.80)	(1.13)	0.22	0.18	黒曜石	先端・両脚欠損	無	I 32No.43	
150	A72	93	縄文	石鏃	(1.95)	1.38	0.27	0.52	黒曜石	先端わずかに欠損	無	A72	
150	N22	94	縄文	石鏃	(1.50)	(0.87)	0.34	0.30	黒曜石	基部欠損	無	N22	
150	J32	95	縄文	石鏃	2.10	1.54	0.31	0.63	黒曜石	完存	無	J32No.6	
150	B58	96	縄文	石鏃	1.70	1.35	0.30	0.46	黒曜石	完存	無	B58No.2	早期か
150	I32	97	縄文	石鏃	1.68	(1.36)	0.46	0.57	黒曜石	片脚欠損	無	I 32	三角鏃か
150	H37	98	縄文	石鏃	(1.44)	(1.32)	0.32	0.39	黒曜石	基部欠損	無	H37	
150	C58	99	縄文	石鏃	1.51	0.97	0.25	0.25	黒曜石	完存	無	C58	
150	－	100	縄文	小型磨斧	(2.06)	1.03	0.49	1.51	蛇紋岩類	刃部のみ	無	－	
150	M23	101	縄文	石匙？	(5.02)	2.10	0.78	9.47	チャート	基部・先端欠損	無	M23	ポイントの可能性あり

第17表　土製品観察表

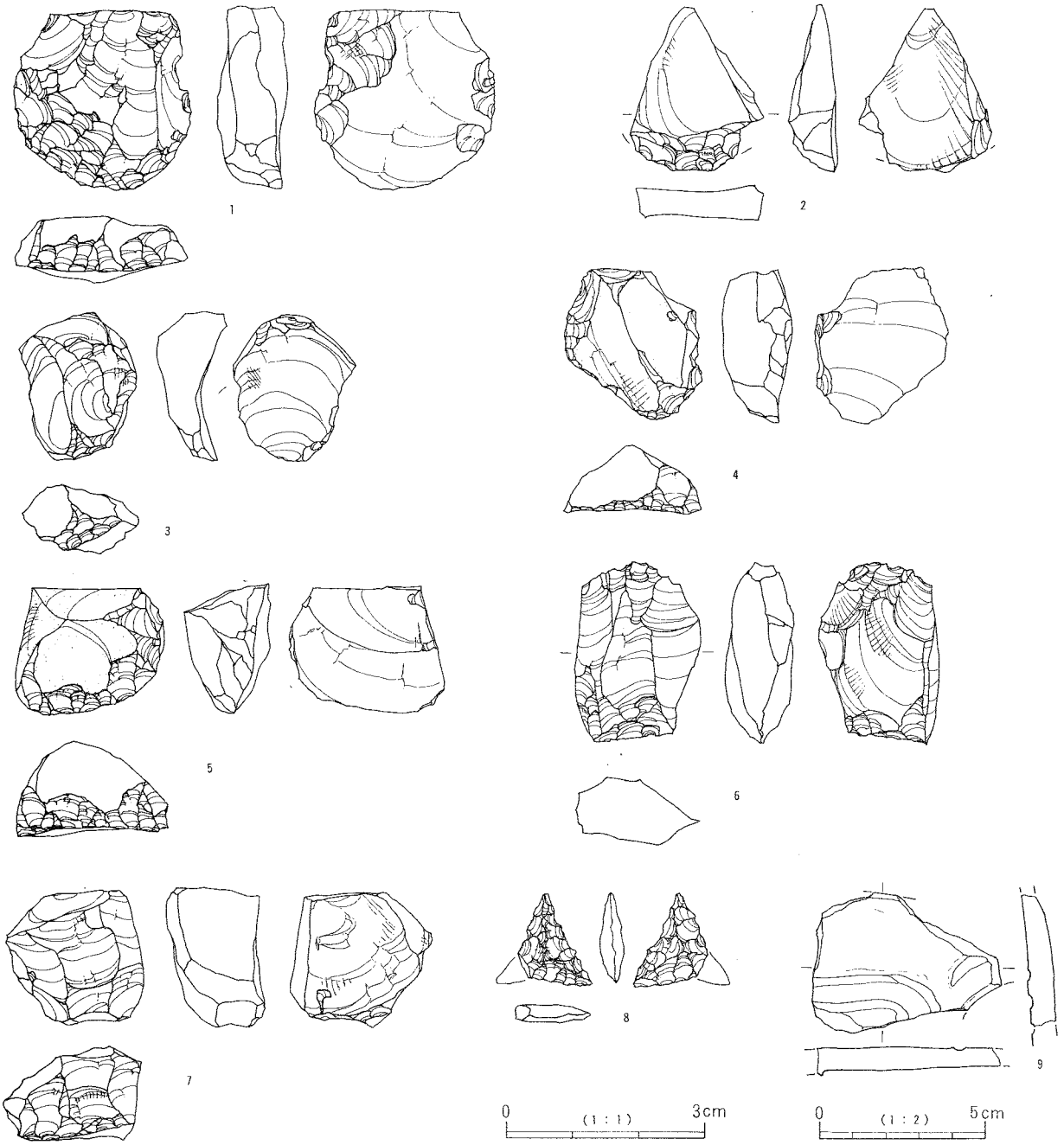
挿図番号	出土地点	番号	分類	時代	時期	長さcm	幅cm	厚さcm	形態	整形技法・文様	色調	胎土	欠損状況	注記内容	備考
92	28号住	19	土製スプーン	縄文	中期	(4.2)	(3.0)	1.3	匙状	ナデ	灰褐	角閃石，スコリア，安山岩	匙部半分欠損	28住	外面黒変
93	30号住	9	土偶　体部	縄文	中期・曽利	(5.3)	(2.6)	(2.1)	体部左側	側面に渦巻き沈線文，ナデ，中央に接合帯	灰褐	安山岩，スコリア	体部左側以外は欠損	30住	
105	33号住	16	土鈴	縄文	中期・曽利	3.5	3.8	3.8	球形，底に0.5mmの孔	半球の接合，ナデ	黄褐	雲母・安山岩・輝石	完存	33住13	内面に土玉6個
114	19号住	20	土製スプーン	縄文	後期・堀之内	(4.2)	(2.3)	1.5	匙状	ナデ	褐白	砂粒・輝石・スコリア	匙部欠損	19住	外面黒斑
117	21号住	23	土偶　顔	縄文	後期・堀之内	(4.0)	(3.6)	(1.7)	顔面扁平	顔面ミガキ	黒褐	輝石・スコリア・安山岩	顔面約3分の1，裏面剥離	21住	黒色
117	21号住	24	土偶　腕？	縄文	後期	(5.9)	2.7	2.2	棒状	指状沈線	黒褐	輝石・安山岩・長石	片腕のみ，左腕か	21住No.264	外面黒斑
127	20号住	6	土偶　脚	縄文	中～後期	(2.2)	1.8	(3.0)		ナデ	暗橙	長石・石英・雲母	左脚か	20住北カマド	
134	41号ピット	16	土鈴	縄文	中期	[3.4]	—	—	球形，底に孔		褐	長石，石英，角閃石，スコリア	破片	41ﾋﾟｯﾄNo.21	外面黒変
150	K30	102	土偶	縄文	後期？	(4.0)	(2.7)	3.9	体部，半分	沈線文，ナデ	にぶい黄橙	安山岩，スコリア，角閃石	破片	K30	外面黒変，中心に接合帯
150	G36	103	土偶	縄文	後期	(6.1)	(3.4)	3.0	左脚？	ナデ	にぶい黄橙	安山岩，長石，角閃石，スコリア，輝石	破片	G36No.1	
150	B61	104	土偶	縄文	中期・曽利Ⅲ？	(4.3)	(3.0)	(2.5)	体～脚部	ナデ，沈線	灰黄褐	安山岩，角閃石	破片	B61No.6	外面黒変
150	68号ピット	105	土偶	縄文	中期・曽利Ⅲ？	(1.8)	2.4	2.2	頭部	刺突文，ナデ	にぶい黄橙	長石，雲母，角閃石，石英	頭部のみ	P68	ﾋﾟｯﾄは近現代

第18表　金属器観察表

挿図番号	出土地点	番号	分類	材質	時期	長さcm	幅cm	厚さcm	形態	重量g	欠損状況	注記内容	備考
118	21号住	41	不明	鉄	不明	(3.1)	0.5	0.5	棒状	(2.7)	両端欠損	21住	
122	1号住	48	鏃？	鉄	平安	(14.4)	0.8	0.7	棒状，裁頭状	(15.2)	柄部側欠損か	1住No.119	
122	1号住	49	鏃？	鉄	平安	(14.2)	0.8	0.8	棒状，裁頭状	(14.4)	柄部側欠損か	1住No.118	
122	1号住	50	剣形？	鉄	平安	(9.3)	1.3	0.3	剣状	(9.4)	柄部欠損	1住No.120	
122	1号住	51	剣形？	鉄	平安	10.2	1.3	0.3	剣状	9.7	完存	1住No.120	
122	1号住	52	角釘	鉄	平安	(5.5)	0.8	0.7		(10.7)	先端欠損	1住No.16	
122	1号住	53	鑿？	鉄	平安	(3.3)	1.0	0.2	刃先か	(2.1)	両端欠損	1住No.86	
122	1号住	54	不明	鉄	平安	(5.0)	0.4	0.4	丸棒状	(3.5)	両端欠損	1住No.129	
122	1号住	55	鉄滓	鉄	平安	8.5	5.7	2.4	椀形鉄滓	140	完存	1住No.128	
124	5号住	20	鉄滓	鉄	平安	12.7	[11.0]	5.8	椀型鉄滓	(620)	破損，接合	5住No.118.119	
124	5号住	21	角釘	鉄	平安	(3.7)	0.8	0.5		(3.0)	先端欠損	5住No.105	
128	24号住	25	紡錘車	鉄	平安	(14.2)	5.8	0.5		(34.9)	軸部欠損	24住No.18	幅は円盤径，厚さは軸径
132	29号住	46	鎌	鉄	平安	12.0	3.0	0.3		(30)	先端欠損	29住No.76.96	
132	29号住	47	角釘	鉄	平安	(4.1)	0.5	0.4		(1.4)	先端欠損	29住No.50	頭部曲がる
132	29号住	48	鉄滓	鉄	平安	11.6	7.3	2.2	椀形鉄滓	240.0	完存	29住No.23	
141	404号ピット	93	銭貨	銅	中世	2.4		0.15	景祐元寶	2.5	完存	ﾋﾟｯﾄ404No.1	初鋳1034（北宋）
141	404号ピット	94	銭貨	銅	中世	2.5		0.1	皇宋通寶	3.7	完存	ﾋﾟｯﾄ404No.1	初鋳1038（北宋）
141	404号ピット	95	銭貨	銅	中世	2.4		0.15	太平通寶	1.9	完存	ﾋﾟｯﾄ404No.1	初鋳976（北宋）
141	404号ピット	96	銭貨	銅	中世	2.5		0.2	永楽通寶	4.4	完存	ﾋﾟｯﾄ404No.1	初鋳1408（明）
141	404号ピット	97	銭貨	銅	中世	2.5		0.1	元祐通寶	2.1	完存	ﾋﾟｯﾄ404No.1	初鋳1086（北宋）
150	13号溝	114	角釘	鉄	?	(5.6)	0.5	0.3		(4.2)	先端欠損	13溝	

第19表　墨書・刻書一覧表

番号	遺構番号	図番号	番号	種別	器種	文字種類	文字部位	文字向き	時期	内容	備考
1	1号住	120	3	土師器	坏	墨書	体部外面	逆	平安4期	矢	甲斐型坏
2	同上	120	6	土師器	皿	墨書	体部外面	逆	平安4期	申	甲斐型皿
3	同上	120	23	灰釉陶器	皿	墨書	底部外面	—	平安4期	千人	
4	同上	120	25	土師器	坏	墨書	体部外面	?		?	
5	同上	120	26	土師器	坏	墨書	体部外面	?		?	
6	同上	120	27	土師器	坏	墨書	体部外面	正		?	
7	同上	120	28	土師器	皿	墨書	体部外面	?		?	甲斐型皿
8	2号住	122	1	黒色土器	高台坏	墨書	体部外面	逆	平安4期	成	信州系
9	5号住	123	1	土師器	坏	墨書	体部外面	逆	平安2期	水？	甲斐型坏
10	同上	123	3	土師器	坏	墨書	体部外面	逆？	平安2期	?	甲斐型坏
11	同上	123	5	土師器	坏	焼成後刻書	内面見込み部	—	平安2期	十	甲斐型坏
12	6号住	124	5	土師器	皿	墨書	体部外面	正？		?	甲斐型皿
13	同上	124	10	黒色土器	坏	墨書	底部外面	—		?	墨痕か
14	同上	124	15	黒色土器	坏	墨書	体部外面2カ所	正？		?	
15	同上	124	16	黒色土器	坏	墨書	体部外面	逆		?	
16	24号住	127	4	土師器	坏	墨書	体部外面	?		?	甲斐型坏
17	25号住	129	4	土師器	皿	墨書	体部外面	?		?	
18	同上	129	15	黒色土器	坏	墨書	体部外面	?		?	
19	同上	129	16	土師器	坏	墨書	体部外面	正？		?	
20	29号住	130	3	土師器	坏	墨書	体部外面	?		?	甲斐型坏
21	同上	130	14	黒色土器	坏	墨書	底部外面	—		?	
22	同上	130	16	土師器	坏	墨書	体部外面	?		?	
23	37号住	132	1	土師器	坏	墨書	体部外面	正	平安4期	四万	甲斐型坏
24	同上	132	5	土師器	皿	墨書	体部外面	正	平安4期	四万	甲斐型皿
25	表採	150	109	土師器	坏	焼成後刻書	体部外面	正	平安2期	圭	甲斐型坏
26	表採	150	110	土師器	皿	墨書	底部見込み部	—	平安3期	不	甲斐型皿
27	表採	150	111	土師器	坏	墨書	体部外面	?		?	
28	N16	150	112	土師器	坏	墨書	体部外面	?		?	
29	O20	150	113	土師器	皿？	墨書	底部外面	—		氏？	



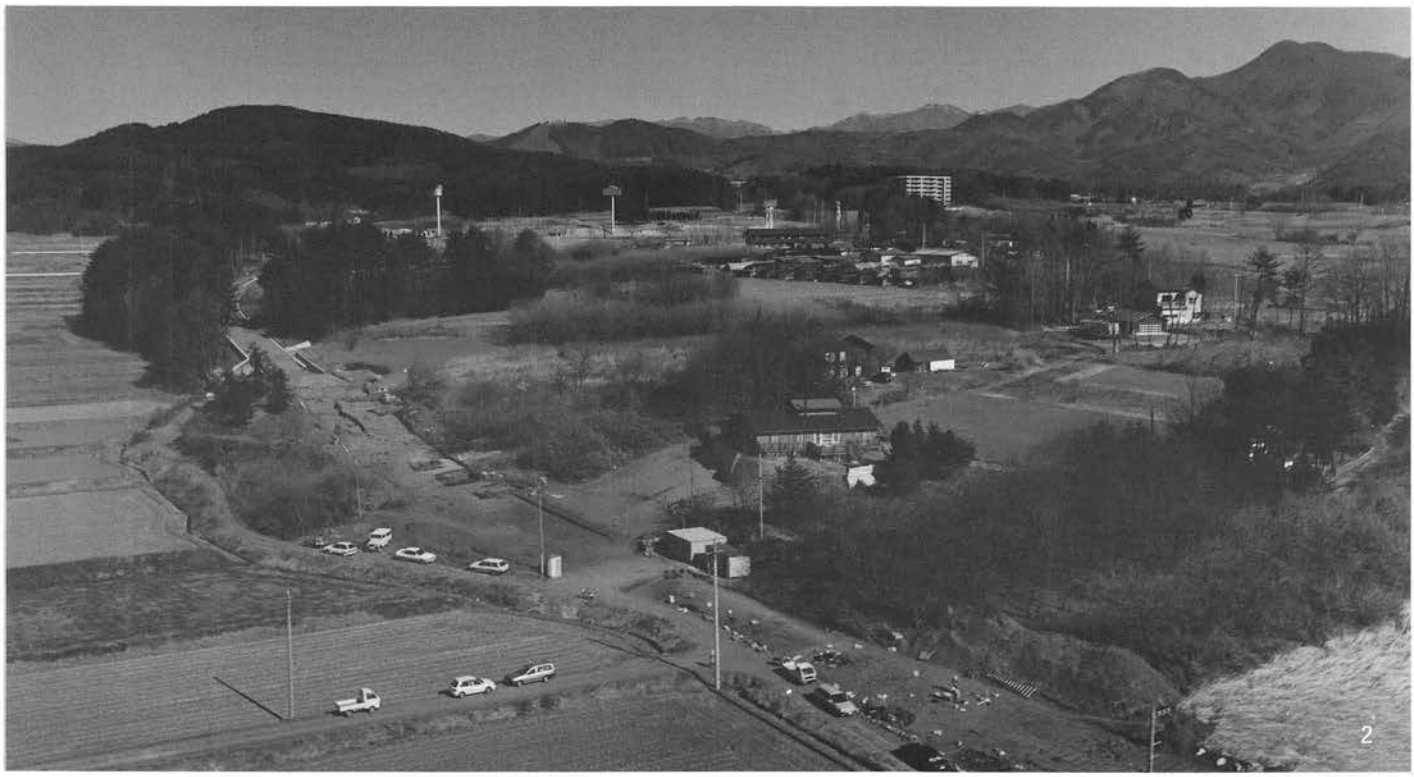
第171図　追加資料図

第20表　追加資料表

挿図番号	出土地点	番号	時期	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	欠損状況	自然面	注記内容	備考
171	63号ﾋﾟｯﾄ	1	縄文	掻器	2.72	2.70	0.92	7.71	黒曜石	完存	無	ﾋﾟｯﾄ63	
171	63号ﾋﾟｯﾄ	2	縄文	掻器	(2.49)	(1.94)	0.60	2.30	黒曜石	欠損	無	ﾋﾟｯﾄ63	
171	167号ﾋﾟｯﾄ	3	縄文	掻器	2.18	1.77	1.95	2.29	黒曜石	完存	無	ﾋﾟｯﾄ167	
171	1号溝	4	縄文	掻器	2.28	2.00	0.94	3.85	黒曜石	完存	有	1ミゾ	
171	6号溝	5	縄文	掻器	1.92	2.40	1.22	5.15	黒曜石	完存	有	6ミゾ	
171	115号ﾋﾟｯﾄ	6	縄文	楔形石器	2.72	1.86	0.92	4.93	黒曜石	完存	無	ﾋﾟｯﾄ115	
171	—	7	縄文	掻器	2.0	2.08	1.40	7.03	黒曜石	完存	無	表採	
171	10号住	8	縄文	石鏃	1.35	(1.03)	0.28	0.33	黒曜石	脚部片方欠損	無	10住ﾋﾟｯﾄ3	小型三角鏃

挿図番号	出土地点	番号	分類	時代	時期	長さcm	幅cm	厚さcm	形態	整形技法・文様	色調	胎土	欠損状況	注記内容	備考
171	O16	9	土偶	縄文	後期	(4.2)	(5.6)	(0.8)	中空，板状	ナデ，沈線文	褐色	角閃石，雲母，石英，長石	背面の一部のみ	O16	

1．北から見た遺跡（1996年2月7日，南側は調査中）



2．南西から見た遺跡（清里方向を見る）

図版 2

1．北から見た遺跡（1996年 3月19日，韮崎方向を見る，正面に富士山がかすむ）

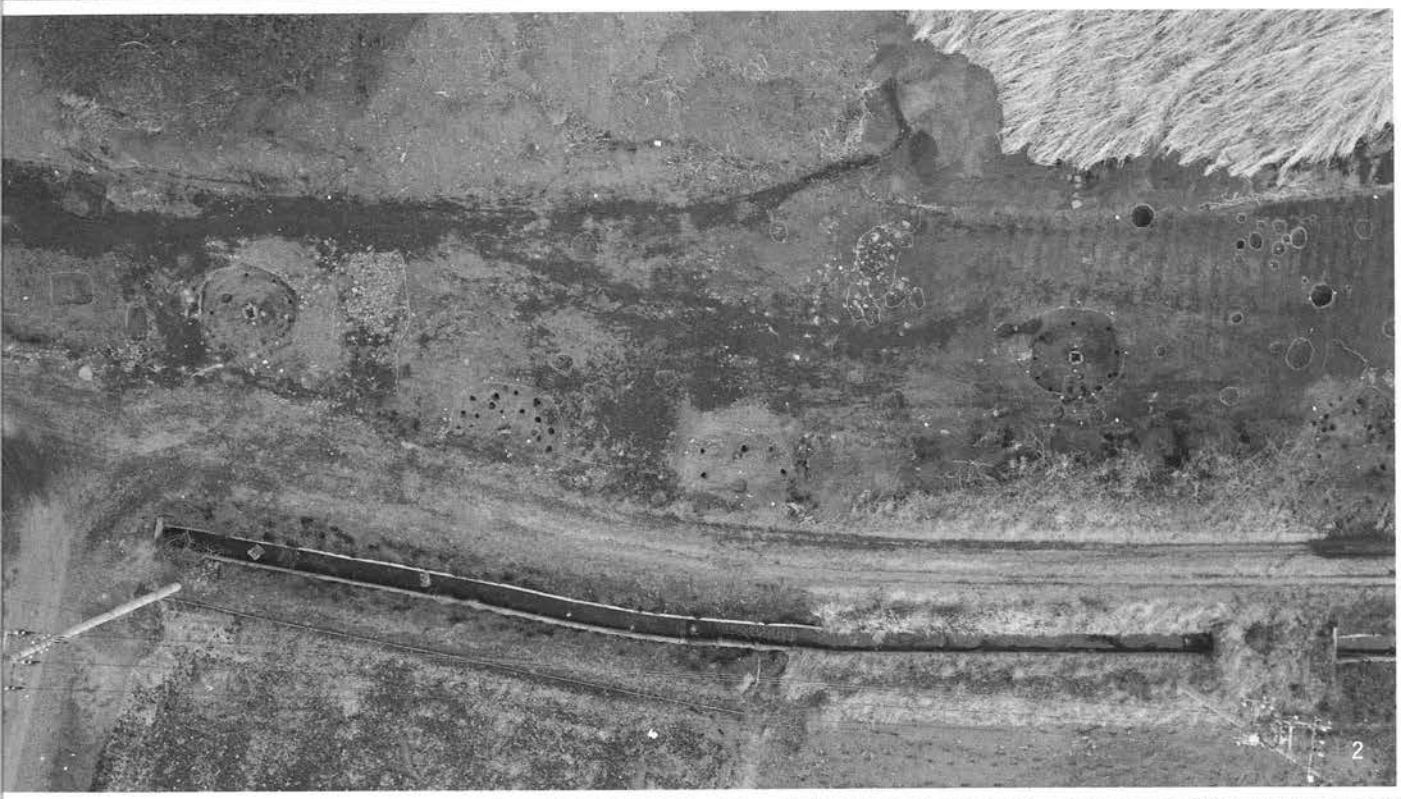
2．西から見た遺跡（後期集落を俯瞰，中央雪を頂く山は金峰山，標高2595m）

1．南から見た遺跡（八ケ岳を見る，中央には整備終了した圃場が広がる，東久保・青木遺跡等の現状）

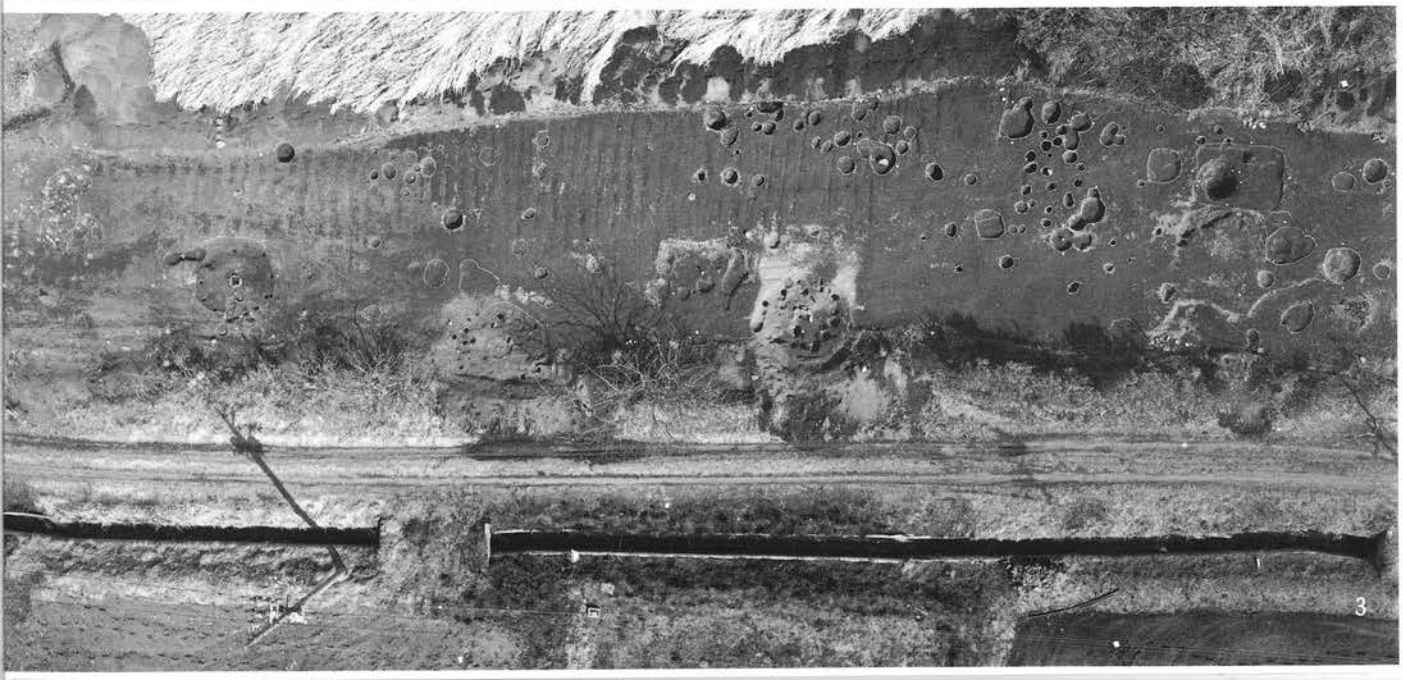
2．西から見た遺跡（調査区南端の曽利Ⅰ集落を見る）

図版4

1．53～74グリッド付近（上から）



2．36～43グリッド付近（上から）



3．28～37グリッド付近（上から）

1．22～28グリッド付近（上から）

2．13～23グリッド付近
（上から，調査区南端に箕輪堰が直角に折れて流れる）

図版6

1．調査前景観（1995年10月16日，51～53グリッド付近のレタス畑，奥の林は早期包含層付近で，桑が野生化している）

2．調査中景観（1と同じアングルで撮影，1996年1月30日，左側の点々が早期包含層，遺構は白紐で示している）

1．D52付近から北を見る（尾根状大地から低地へ下る傾斜面）

2．C67付近から南西を見る（台地縁辺部の状況）

3．B68付近から南を見る（中央の深い溝は11号溝）

図版 8

1．50～74グリッドを西から見る（中央部が早期包含層，テントを設置して調査中）

2．F43付近から南を見る（手前から16・17・18・19号住等が斜面に並んでいる）

3．J27付近から北を見る（霜柱のために荒れつつある調査区内）

1．積雪の朝（L24付近より北を見る，土をまいて雪を溶かそうとしている，1996年1月9日）

2．019付近から北を見る（28・29・32・34号住等，カラマツの切り株が点在する）

3．R14付近から北を見る（深い溝は山道）

1．C61付近から西南をみる（早期包含層上層のピット，方形のピットは試掘坑，溝は3号溝）

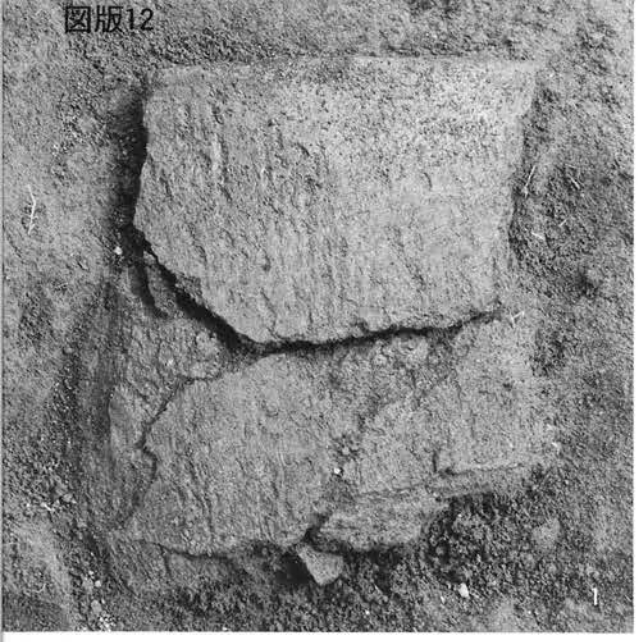
2．早期包含層調査風景

3．早期包含層下層の調査状況（ほぼ遺物が出尽くしたところ）

1．早期包含層（南北セクション，作業風景，遺物出土状況，東から）

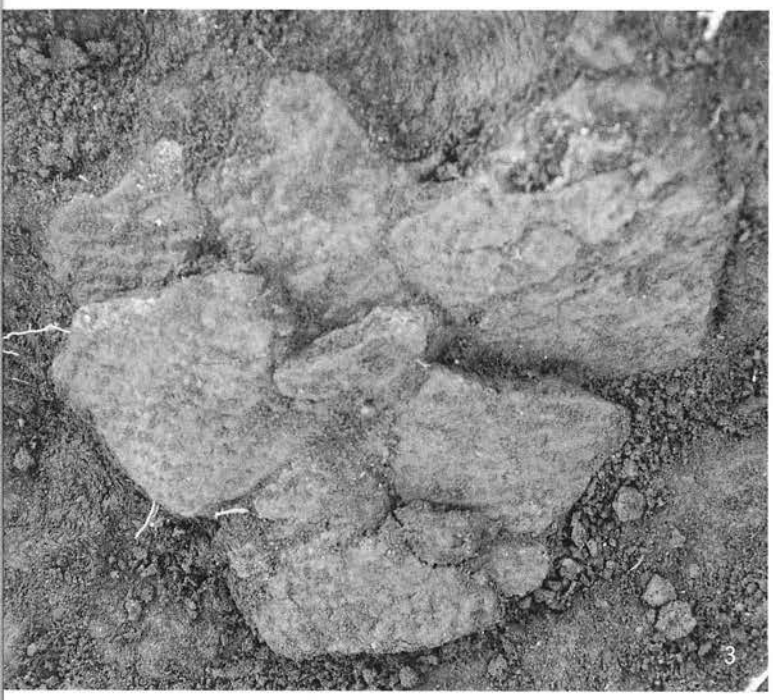
2．早期包含層（東西セクション，作業風景，遺物出土状況，南から）

3．早期包含層（作業風景，遺物出土状況，東から）



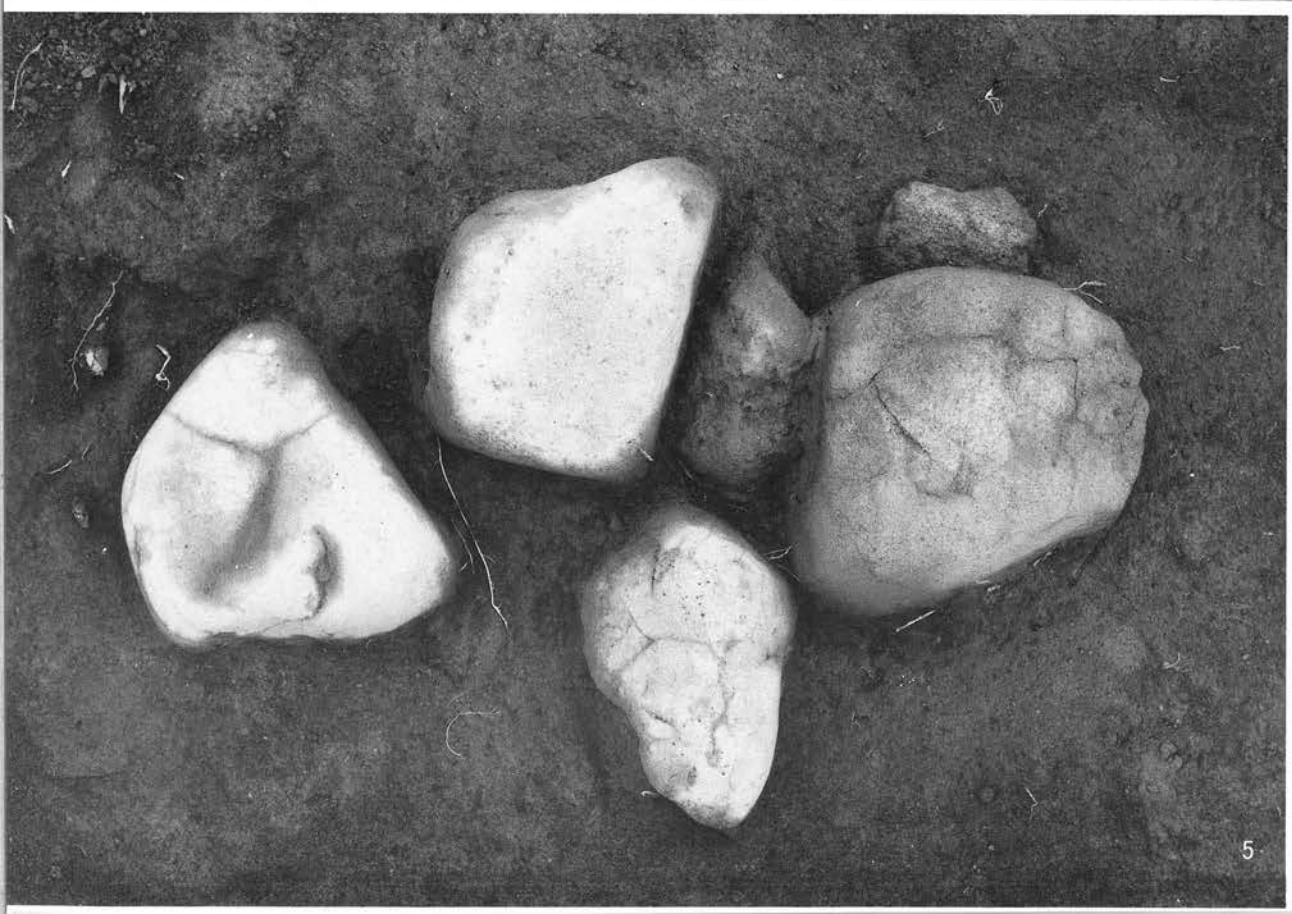
1．出土状況（55図6，撚紋土器）

2．出土状況（55図4，表裏縄文土器）



3．出土状況（54図2，表裏縄文土器，細片化して重なっている）

4．出土状況（55図3，表裏縄文土器，裏面を上にして出土，この後取り上げ時に細片化）



5．406号ピット内配石（平たい石を平らにまとめており、被熱している）

1．34号住完掘状況（南から，炉体土器取り上げ後）

2．34号住内遺物出土状況（東から，炉周辺に点在する）

3．34号住深鉢出土状況（75図2，横位で出土）

4．34号住炉体出土状況（床面レベルに口縁部片が平らに広がっている，75図1）

図版14

1．3号住礫・遺物出土状況(南から)

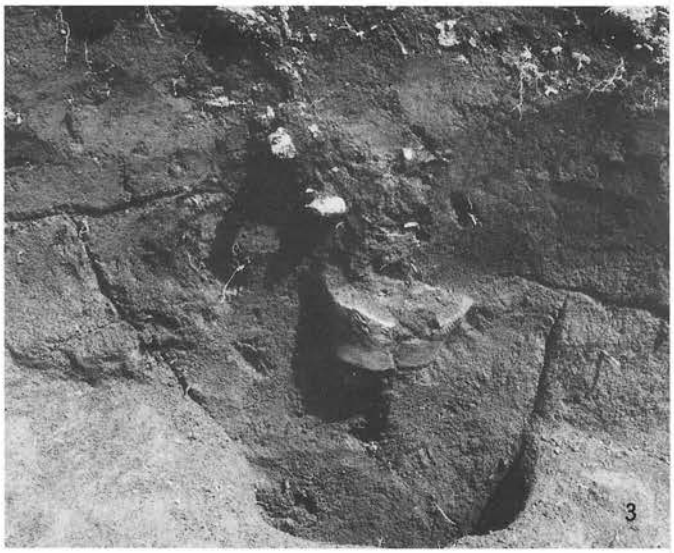
2．3号住完掘状況(南から，礫面より随分下げたが，柱穴がはっきりしない)

3．7号住完掘状況(西から)

4．7号住炉完掘状況(南から，手前の石は一度もち上げてしまっている)

1．8号住完掘状況（西から，この時点では埋甕は見つかっていない）

2．8号住炉（西から，石はすべて抜かれていた）



3．8号住埋甕（調査区境の南北セクション中に検出された）

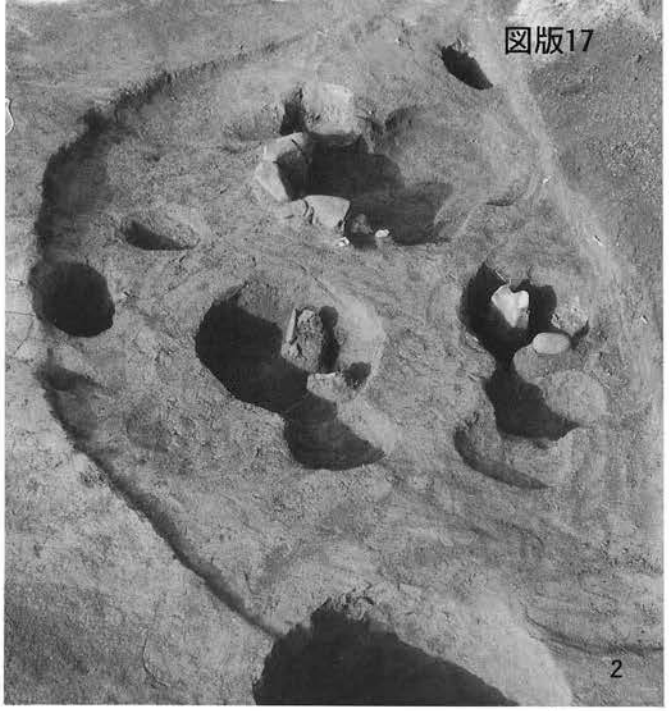
4．9号住完掘状況（南から，埋甕は半載した状況）

1．9号住遺物出土状況（南から）

2．9号住内石皿・磨石出土状況（北壁に接して，磨り面を上にして立てかけたような状況，セット関係とみられる，85図43・86図48）

3．9号住埋甕出土状況（石蓋状の平石が土器内に入り込んでいる，80図1・85図44）

4．9号住炉内礫・遺物出土状況（東から，炉石はすべて抜かれている）

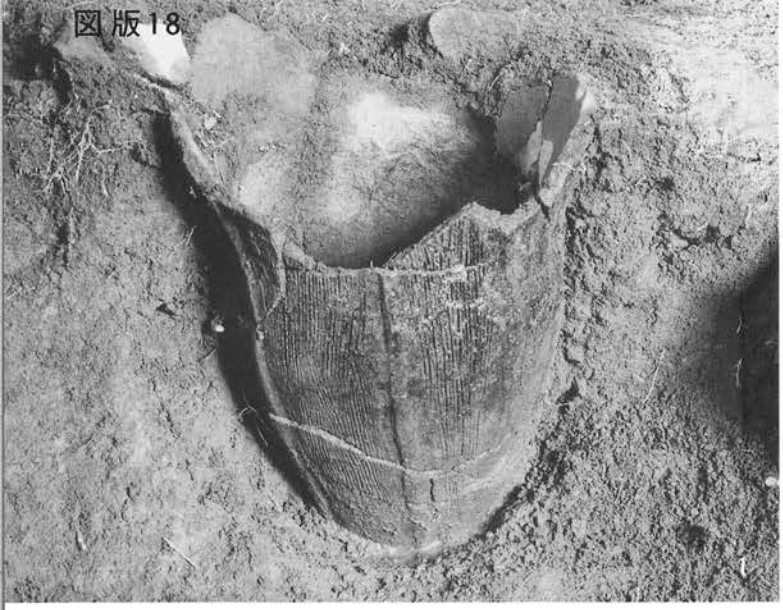


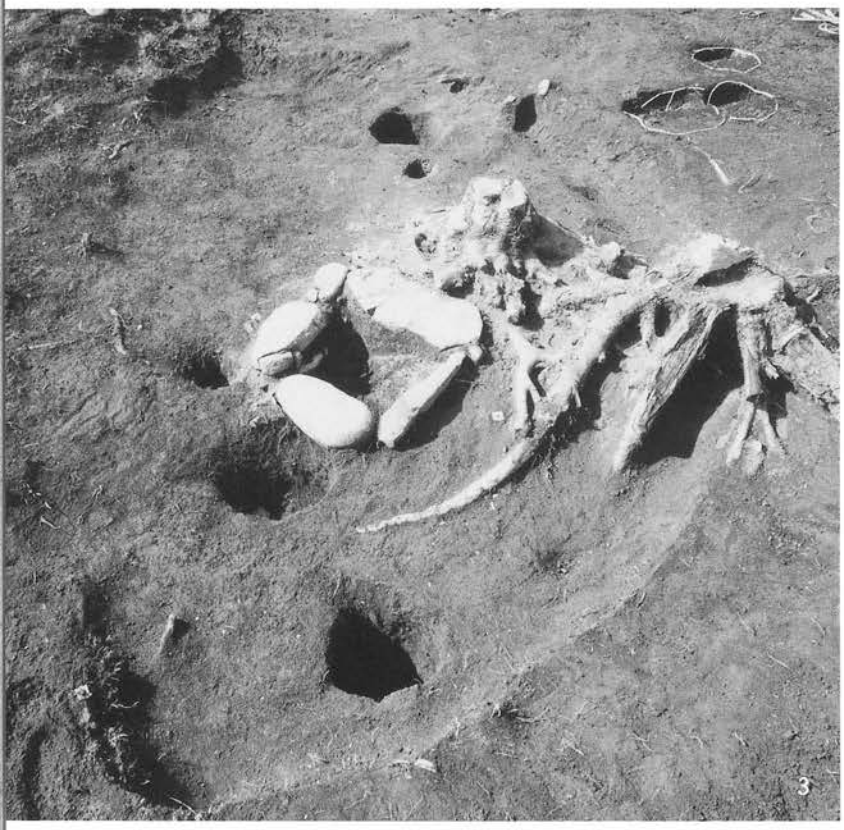
1．10号住炉断面(東から)

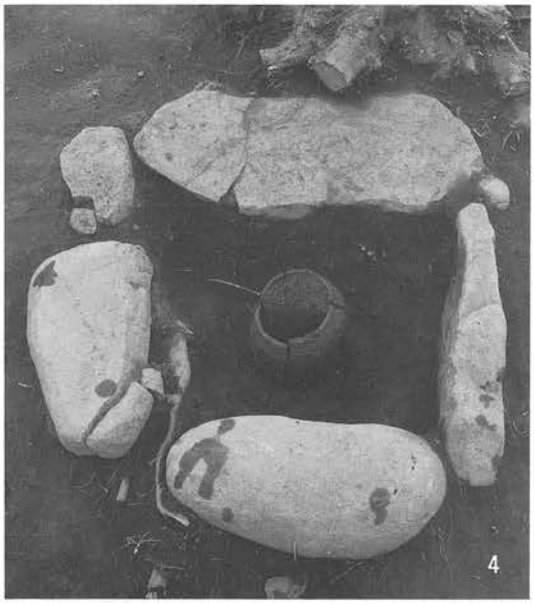
2．10号住完掘状況(南から，プランが明確でない)

3．13号住完掘状況(南から)

4．14号住完掘状況(東から，埋甕取り上げ後)







1．14号住埋甕(東側掘り方を截ち割る，東から，89図１)

2．14号住炉(南から)

3．27号住完掘状況(東南から)

4．27号住炉(炉体土器が置かれている，東から)

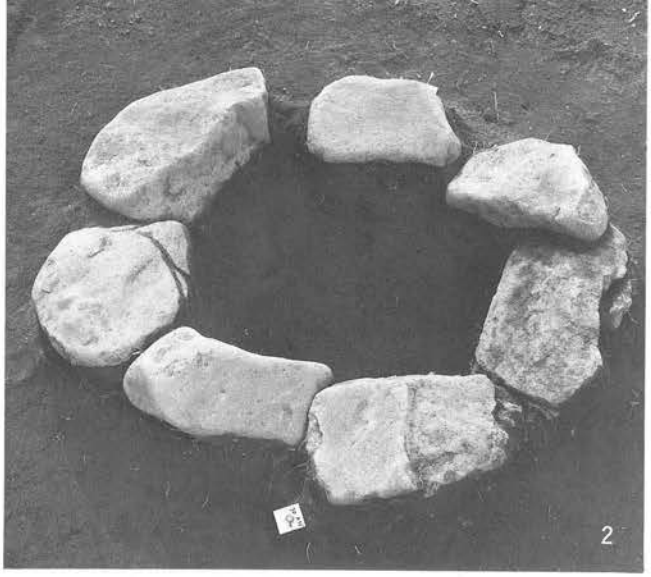
5．28号住完掘状況(南西から)

1．28号住遺物出土状況(南から)

2．28号住炉完掘状況(南から)

3．30号住遺物出土状況(南東から，南側ピット中に土器がある)

図版20

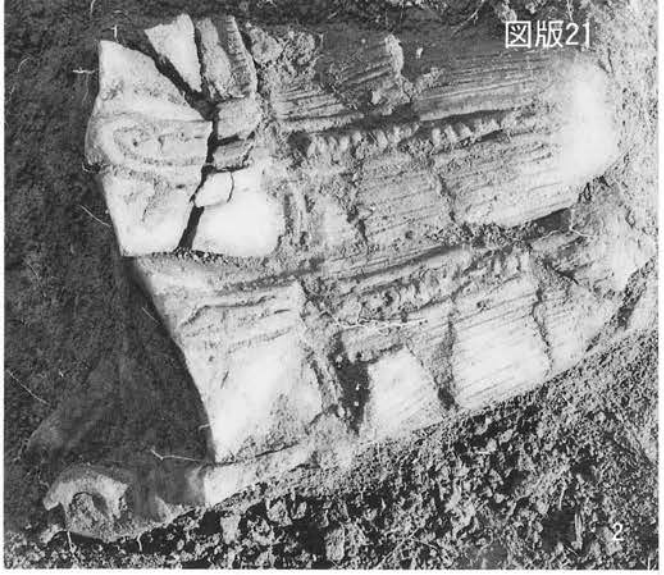


1．30号住内出土土器（横位，西から，93図1）

2．30号住炉完掘状況（南から）

3．31号住完掘状況（南東から）

4．31号住遺物出土状況（南から）



1．31号炉（丸石が入っている状況，101図78）

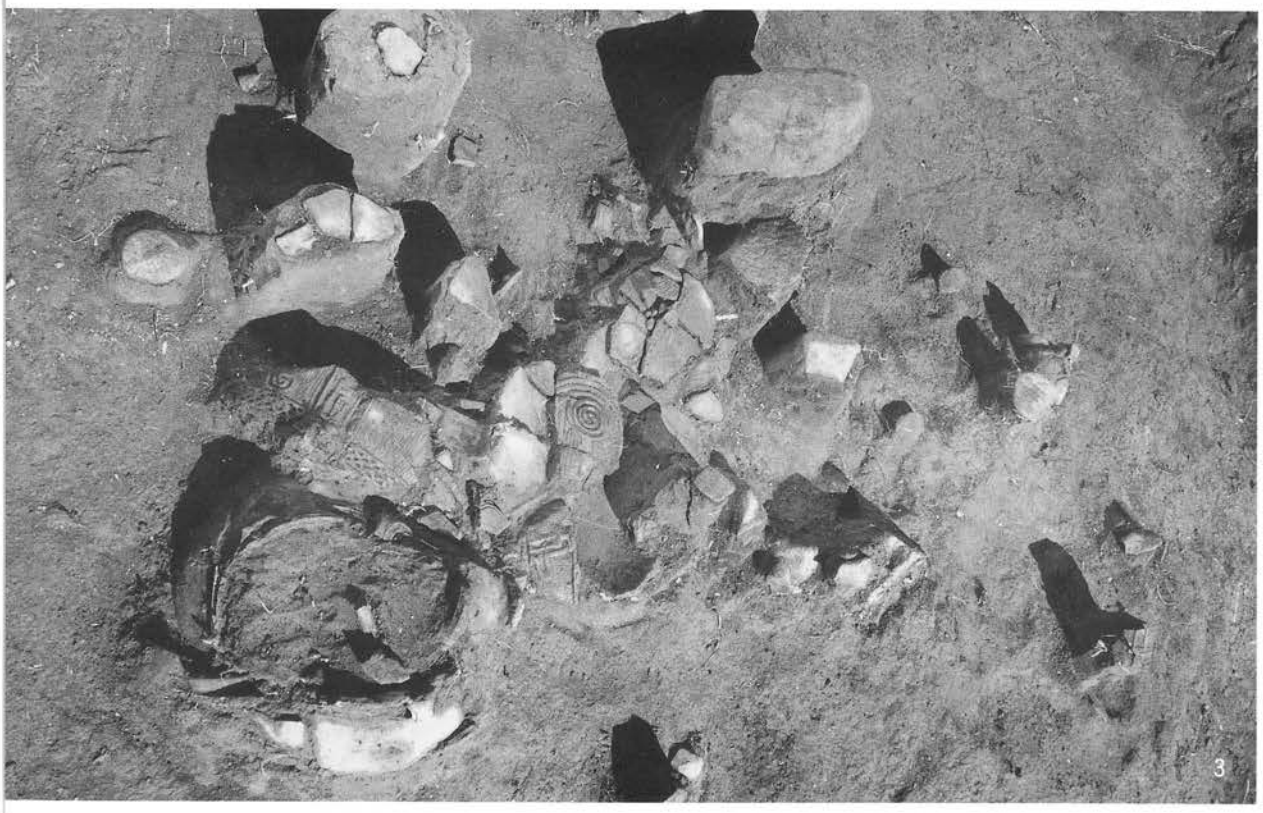
2．31号住内土器出土状況（94図3）

3．31号住内土器出土状況

4．31号住内土器出土状況（97図19等）

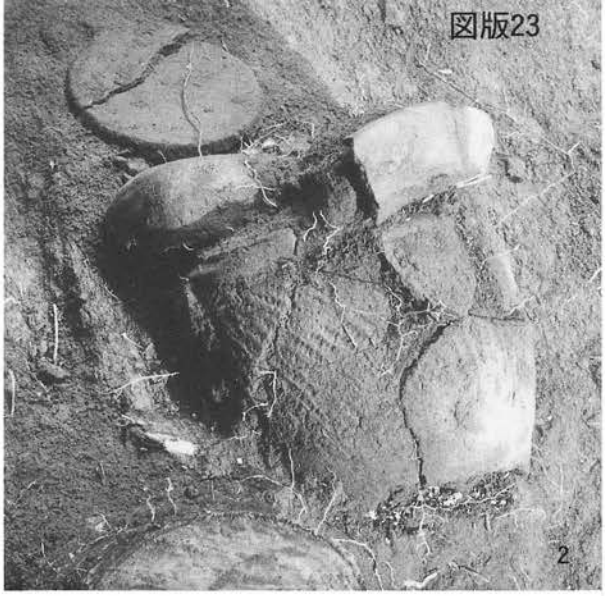
1．32号住完掘状況（西から）

2．32号住遺物出土状況（西から，当初プランがよくわからなかったため西側が広くなっている）

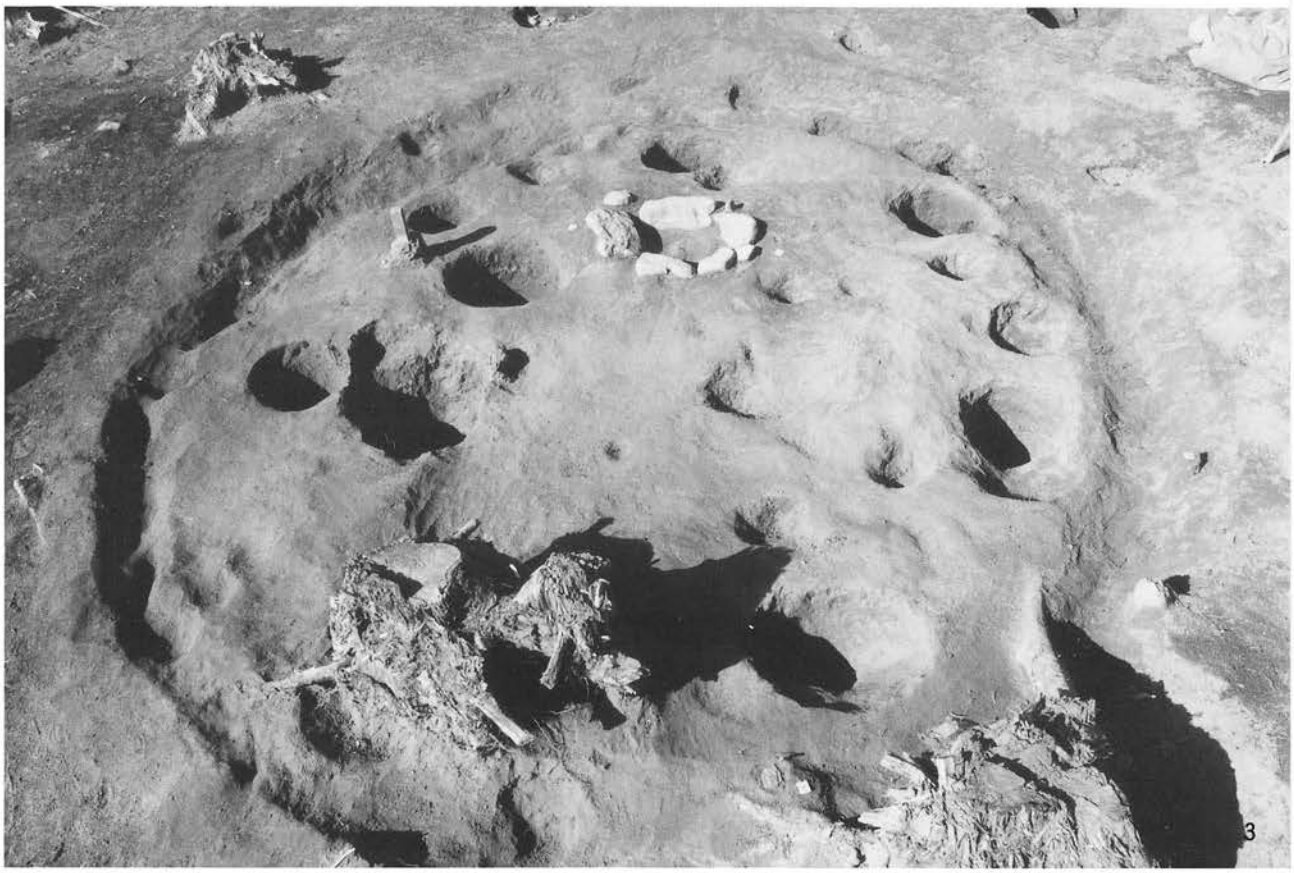


3．32号住内遺物出土状況（床直に伏せられた深鉢，102図1他）

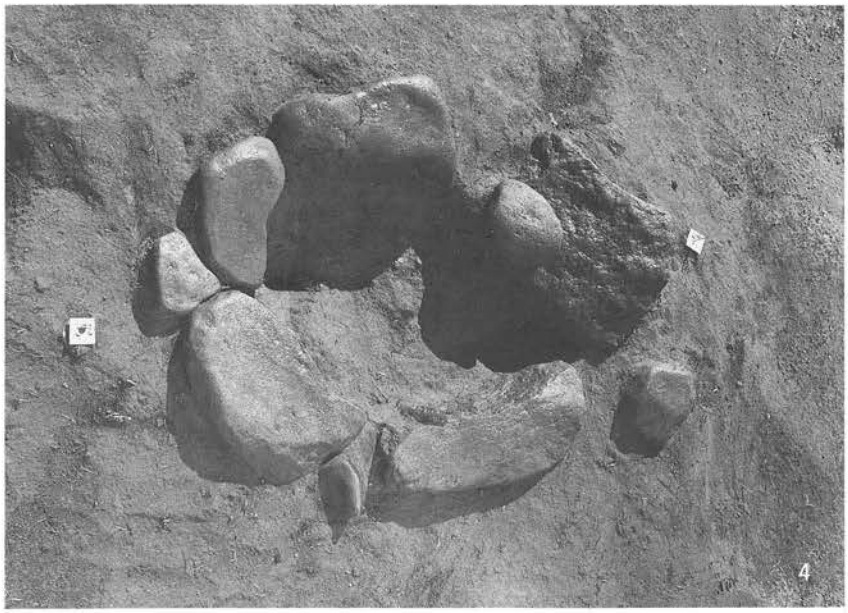
1．32号住炉（東から）



2．32号住内土器出土状況（102図3，底が口縁側にある）



3．33号住完掘状況（南から）



4．33号住炉完掘状況（南から）

1．36号住完掘状況(西から)

2．16号住遺物出土状況(西から，丸石が奥壁寄りにある)

3．16号住敷石状況(主に鉄平石を使用，壁中の礫は地山礫)

1．16号住内丸石出土状況(西から，下面の敷石より浮いている点に注意)

2．16号住遺物出土状況(北から，西向きの傾斜地である)

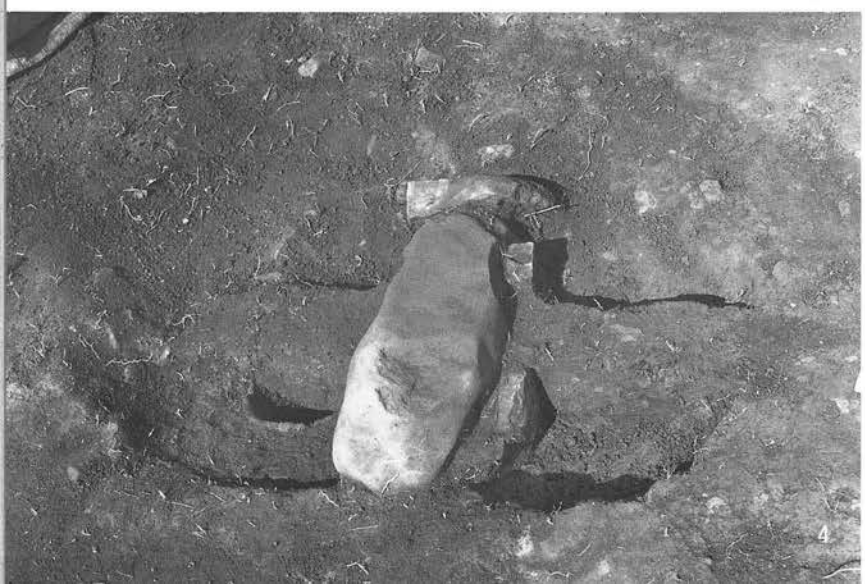
3．16号住敷石敷設状況

4．16号住完掘状況(西から)

1．16号住炉(炉石撤去後炉体土器が現れる)

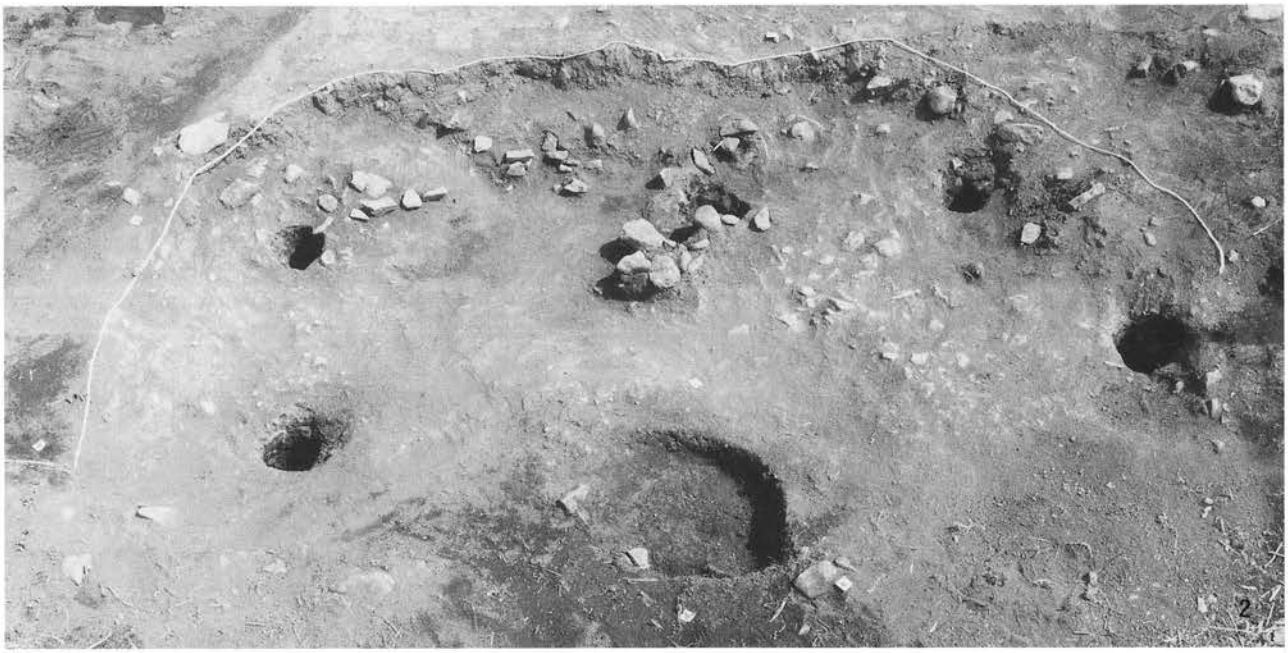
2．17号住遺物
出土状況

3．17号住敷石・柱穴配置状況
(壁寄りに礫・鉄平石が巡る)



4．17号住炉体土器

1．18号住遺物・礫出土状況（西から）

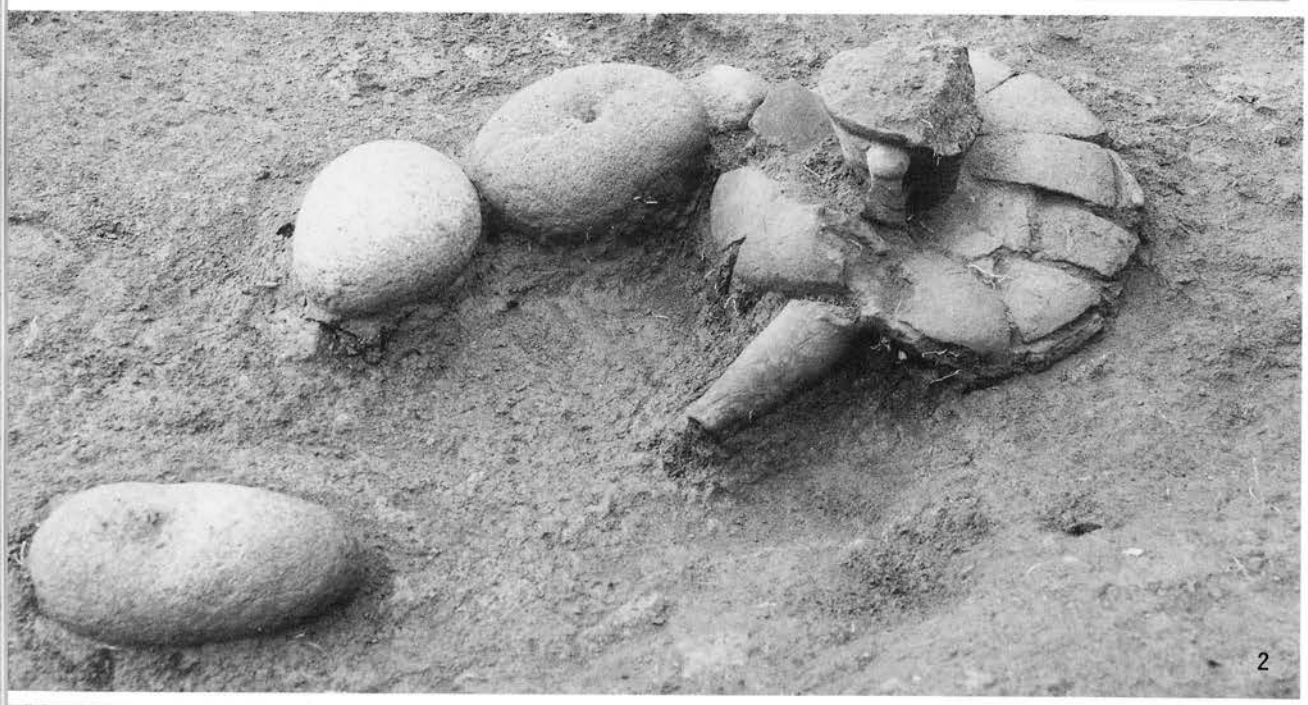


2．18号住完掘状況（西から，柱穴を結ぶように礫や鉄平石が並ぶところがある）

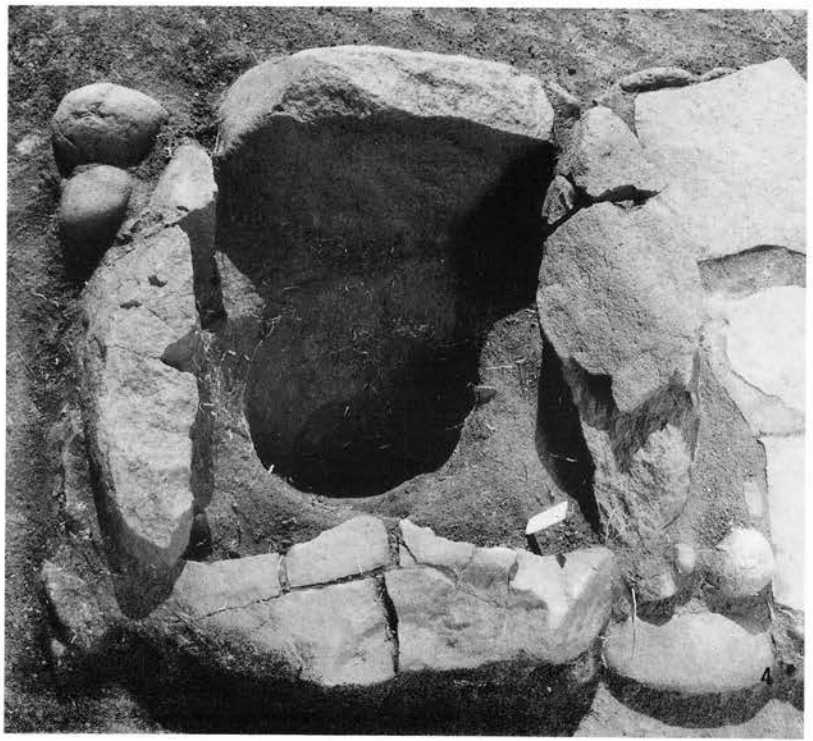
3．18号住炉体土器出土状況（南から）

4．19号住遺物出土状況（平石の下に正位の注口土器・凹石等がみられる，また手前左側には小形石棒がある）

1．19号住床面遺物出土状況（西から，注口土器，深鉢等がみられる）

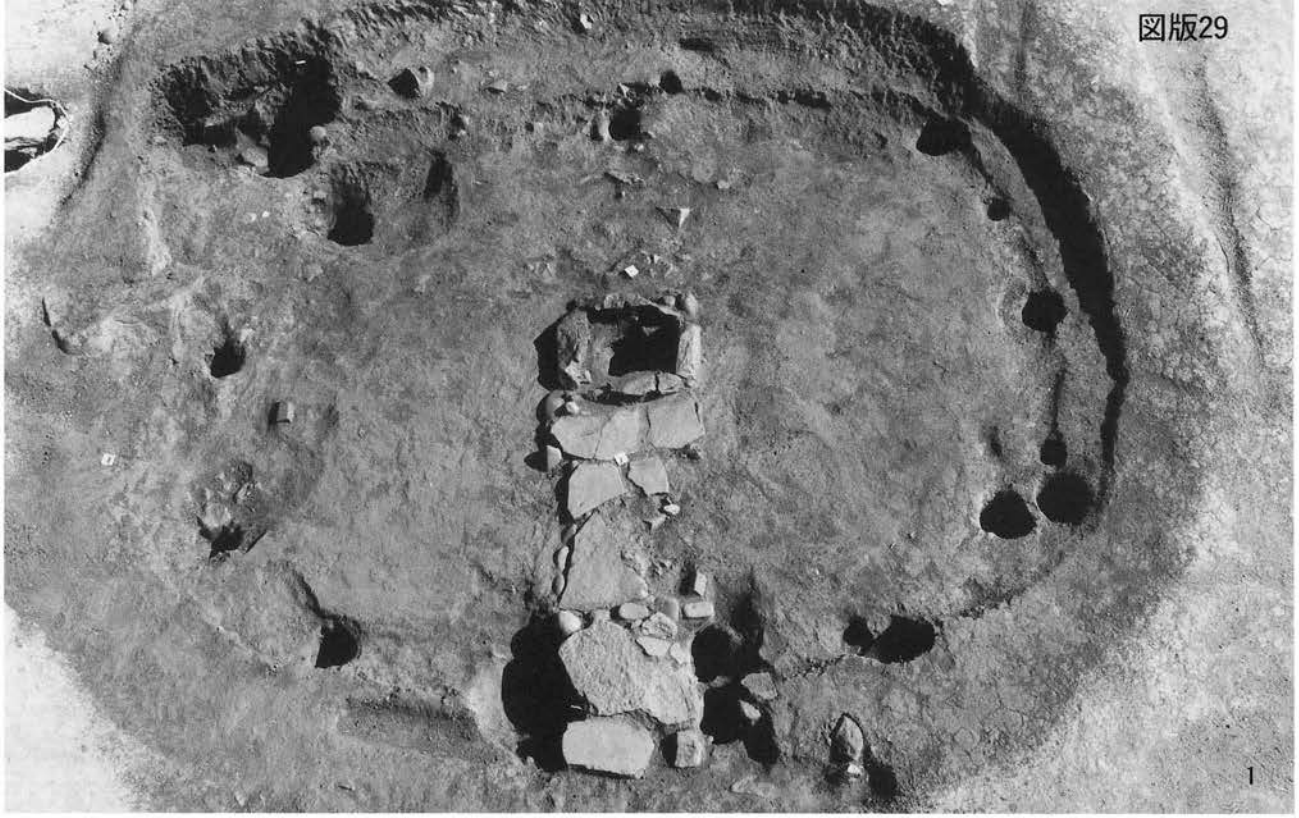


2．19号住床面上の注口土器・凹石（床は焼土化する）

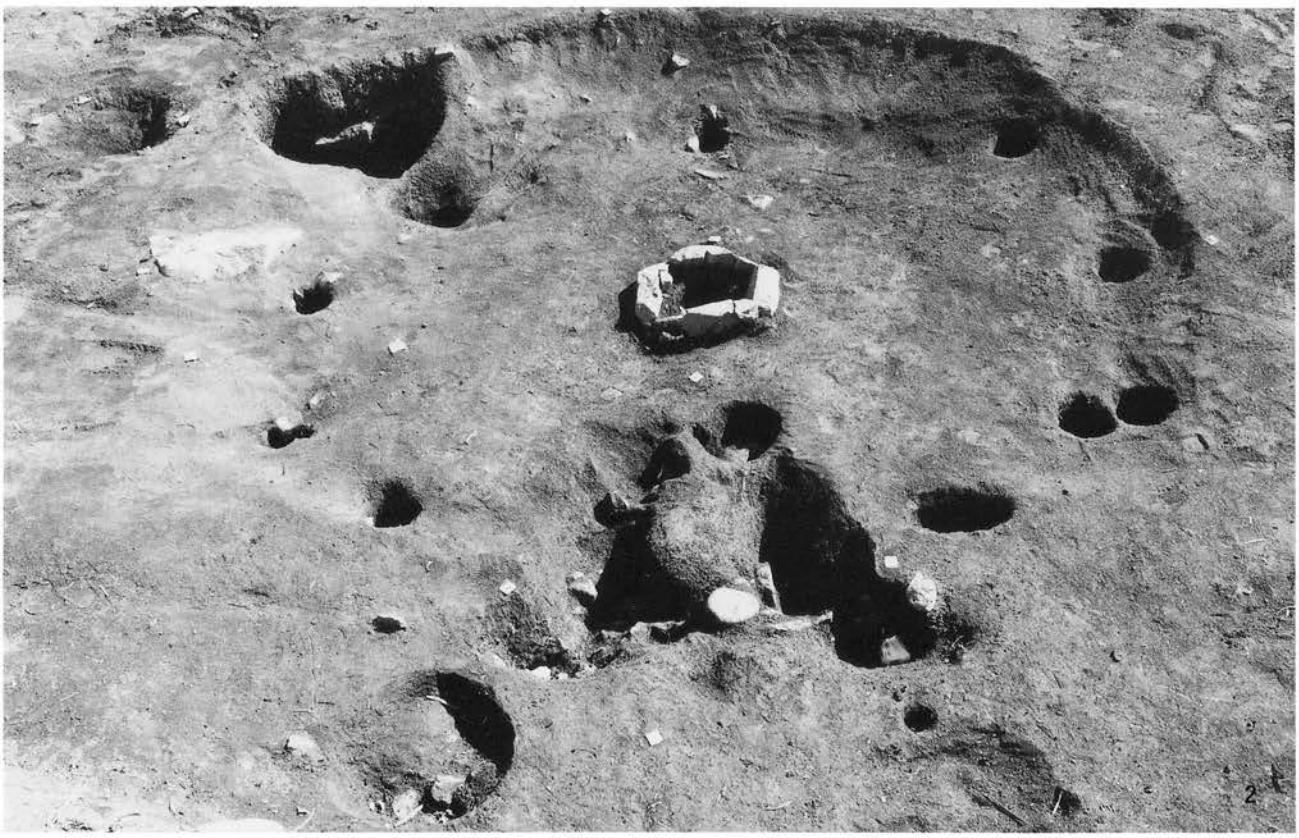


3．19号住床上の深鉢（横位出土）

4．19号住炉と炉体土器（北から）

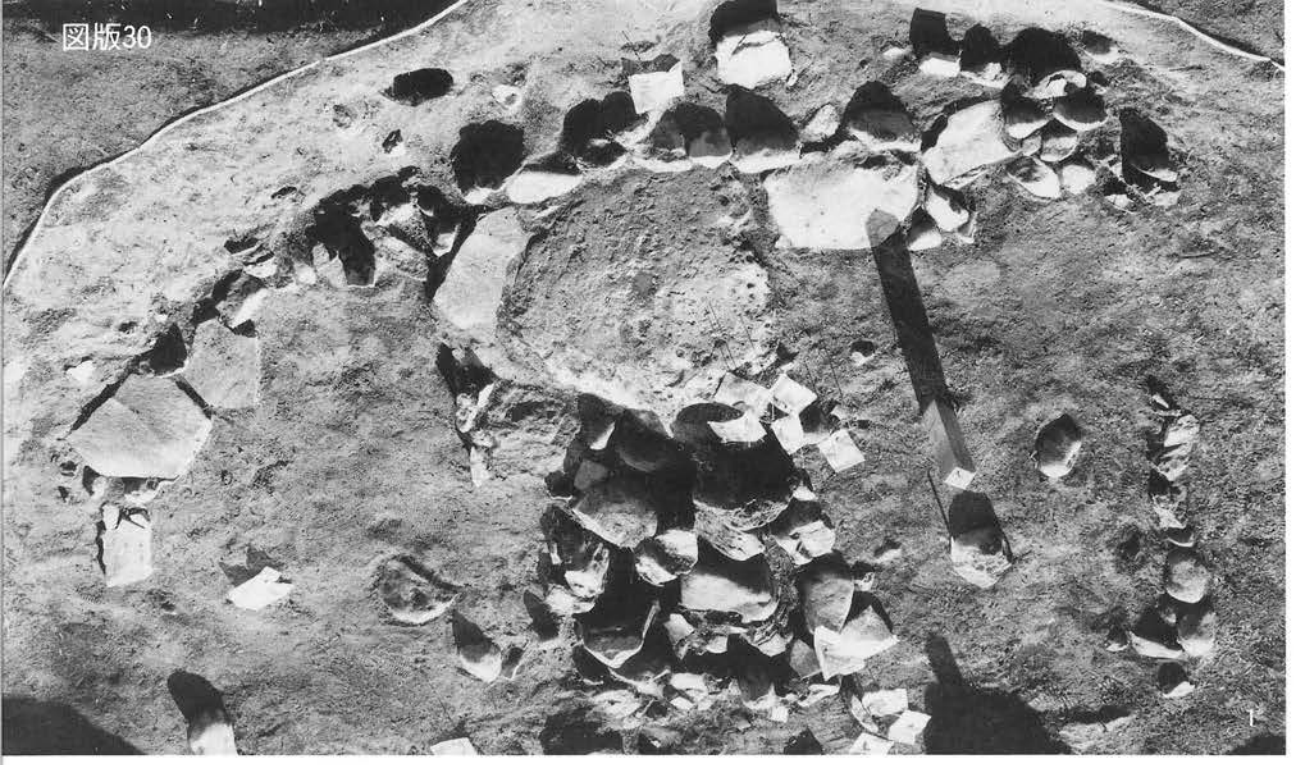


1．19号住完掘状況・敷石敷設状況（西から）



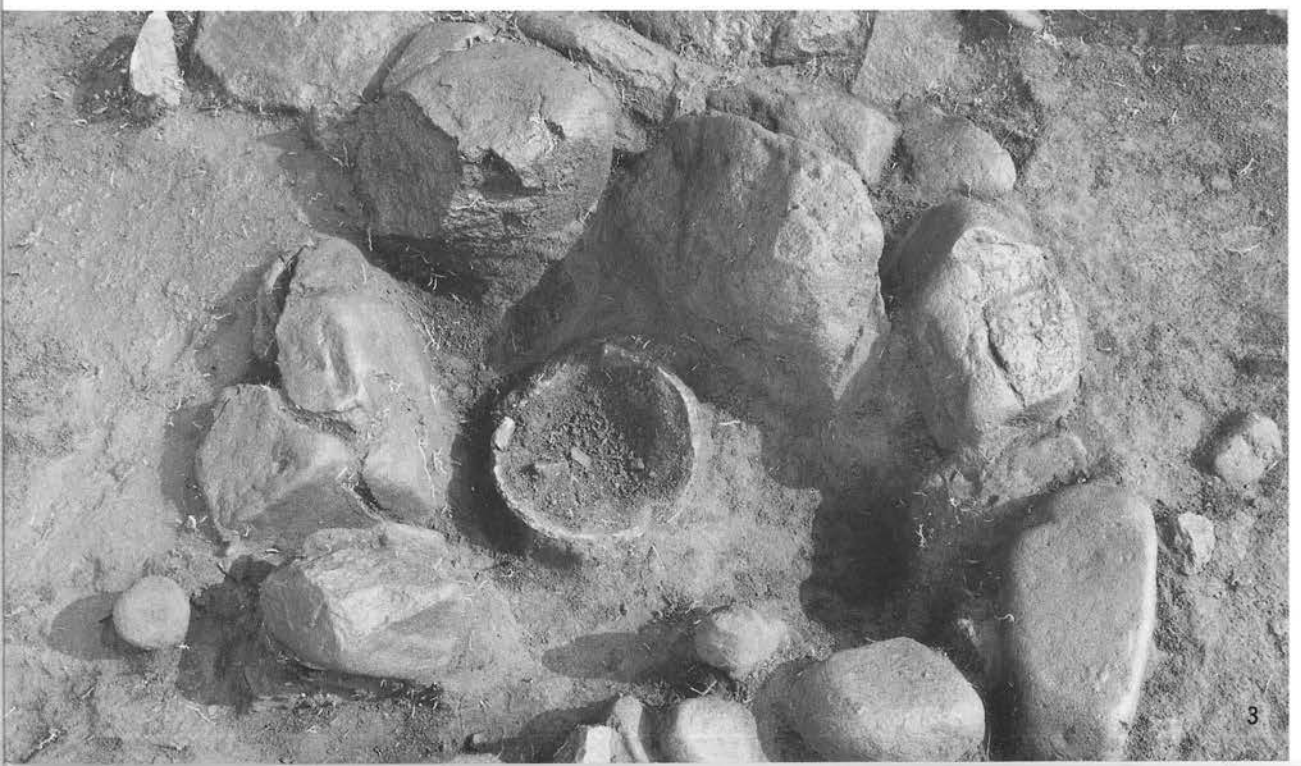
2．19号住完掘状況（敷石撤去後，対ピット検出状況）

3．21号住遺物出土状況（西から）



1．21号住敷石敷設状況（西から）

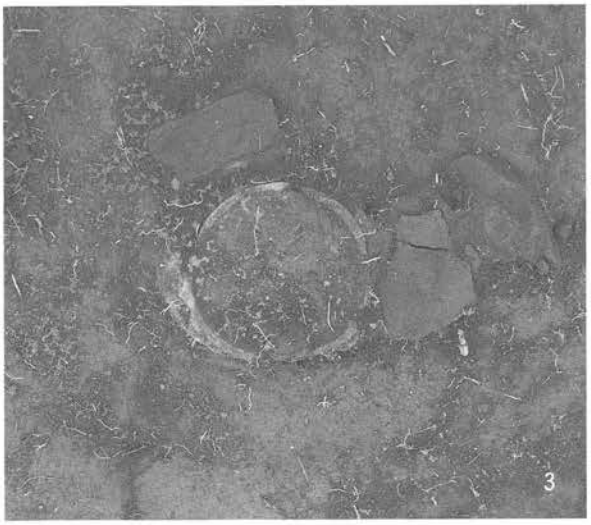
2．21号住完掘状況（西から，敷石取り上げ後）



3．21号住炉内炉体土器出土状況（西から）

1．26号住遺物出土状況（西から）

2．26号住完掘状況（南から，ピットは不明確）



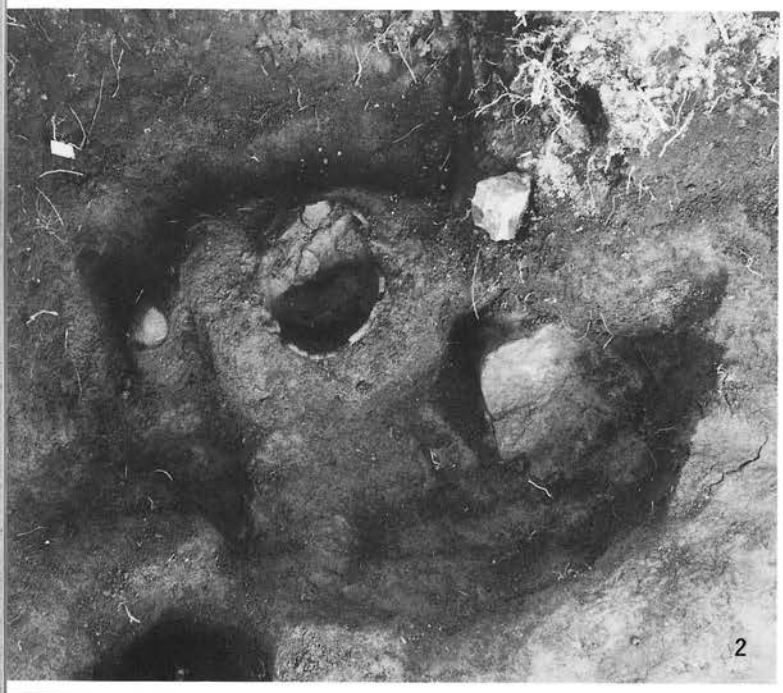
3．26号住炉体土器（119図1）

4．26号住内双口土器出土状況（119図2）

5．35号住遺物出土状況（東から）

図版32

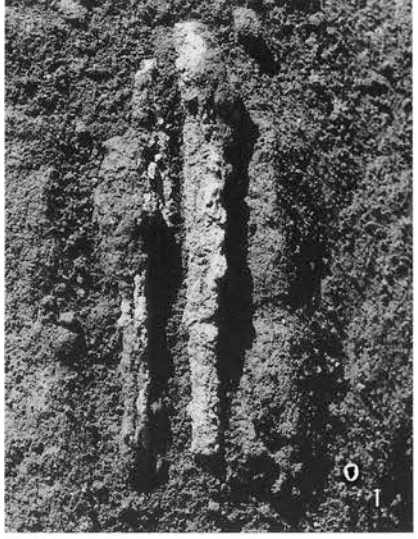
1．35号住完掘状況（東から）



2．35号住炉内炉体土器（東から，119図2）

3．35号住内深鉢出土状況（119図1）

4．1号住遺物出土状況（南から，カマドは右側）



1．1号住内鉄製品出土状況(122図48～51が束ねたように出土)

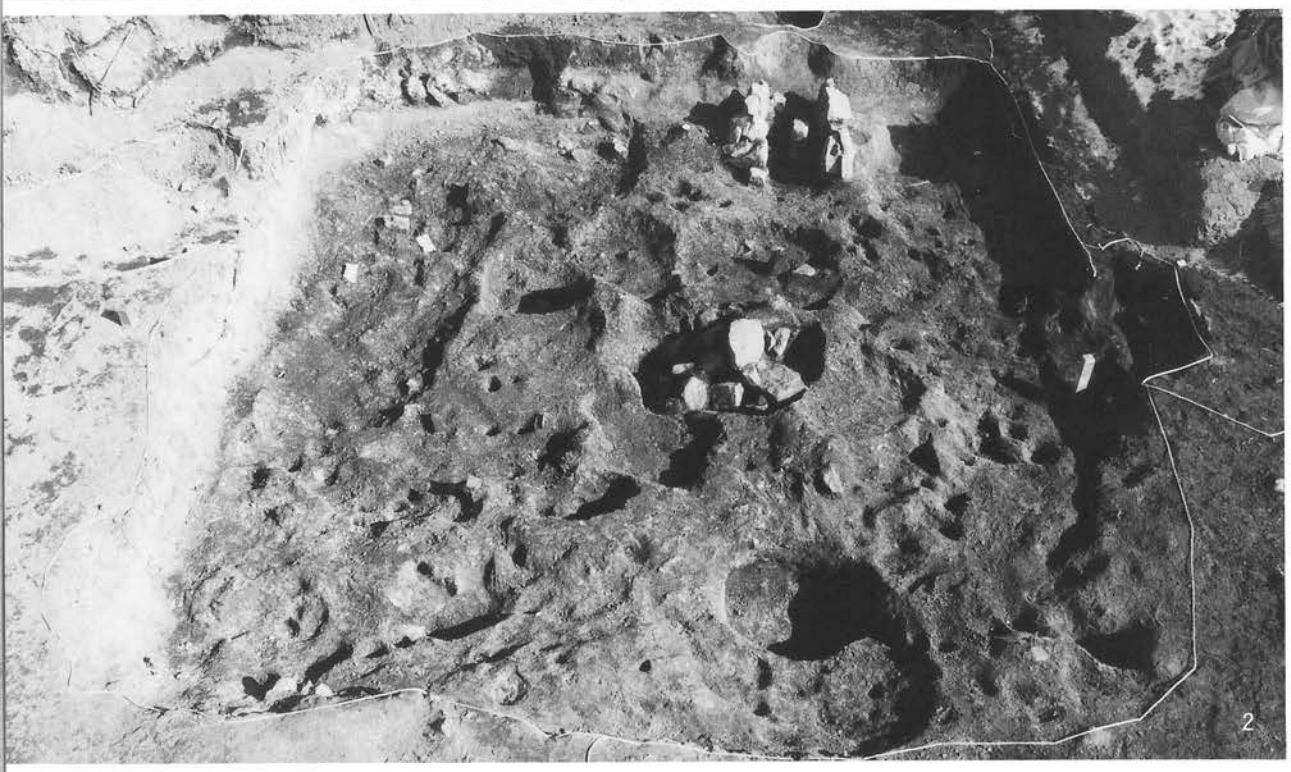
2．1号住竈南側付近での出土状況(甕・灰釉陶器など出土)

3．1号住竈内・竈周辺遺物出土状況(西から，2を更に下げた状況)

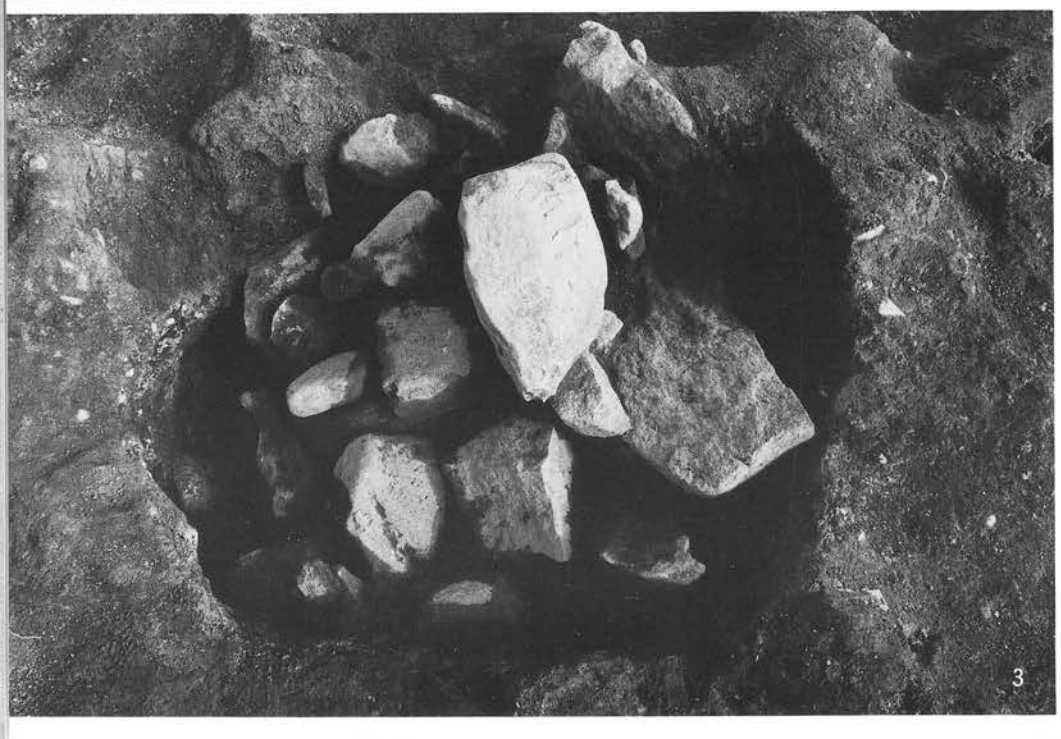
4．1号住竈内支脚石の状況(西から，奥壁側に天井石が残る)

5．1号住竈袖石の状況(西から)

1．1号住完掘状況（西から）



2．1号住掘り方完掘状況（西から，土坑状の凹みが集合する）



3．1号住内中央のピット（礫が詰め込まれた集石土坑）

1．2号住完掘状況(西から)

2．2号住竈内出土状況(西から)

3．2号住竈支脚石と袖石(右側が支脚石)

4．4号住遺物・礫出土状況(南から，礫は9号溝に伴うものが主)

5．4号住完掘状況(南から)

1．5号住遺物出土状況（西から）

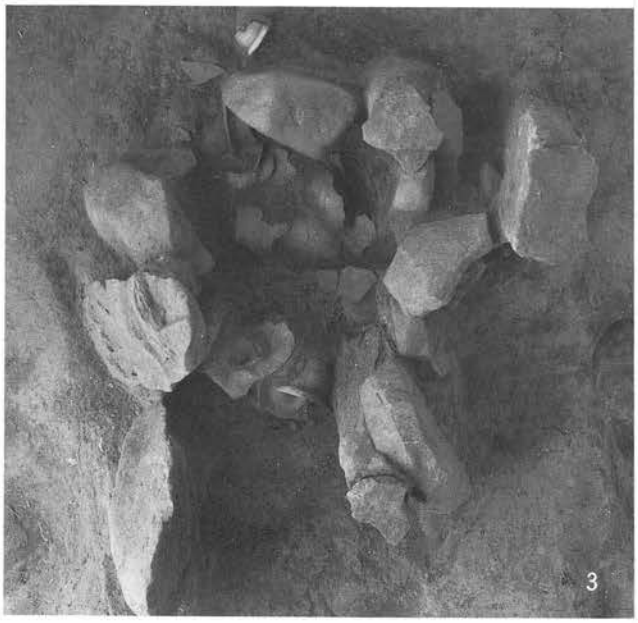
2．5号住完掘状況（西から）

3．5号住竈出土状況（右袖に白色粘土が残る，西から）

4．5号住竈袖石状況（西から）

1．6号住遺物出土状況（西から）

2．6号住坏出土状況(124図10)



3．6号住竈袖石状況

4．6号住竈内遺物出土状況（北から）

1．6号住完掘状況（西から）

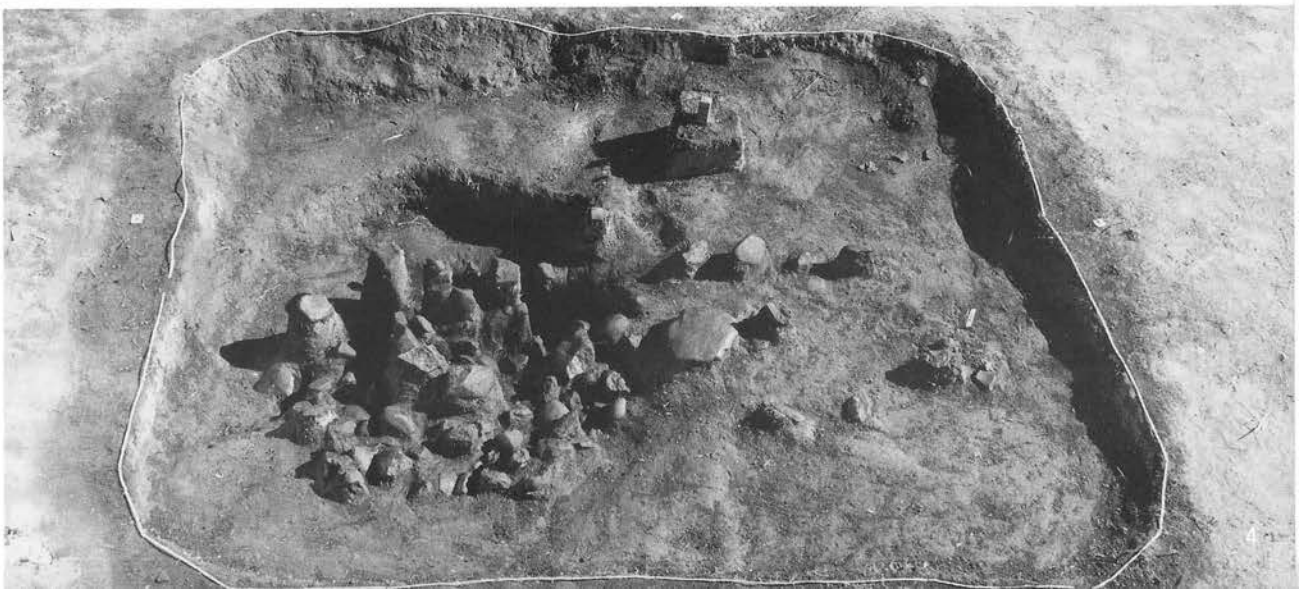
2．6号住掘り方完掘状況（西から）

3．12号住完掘状況（北から，北半は溝でこわされている）

1．12号住竈（西から）

2．15号住完掘状況（西から）

3．20号住完掘状況（西から，東・北2ケ所に竈をもつ）



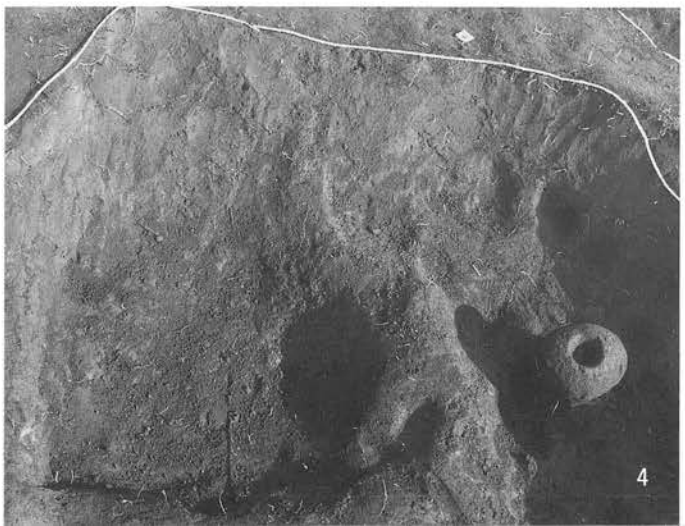
4．23号住遺物出土状況（西から，398号ピットが重複する）

1．24号住遺物出土状況（西から，竈南側の配石は竈石を片付けたものの可能性がある）

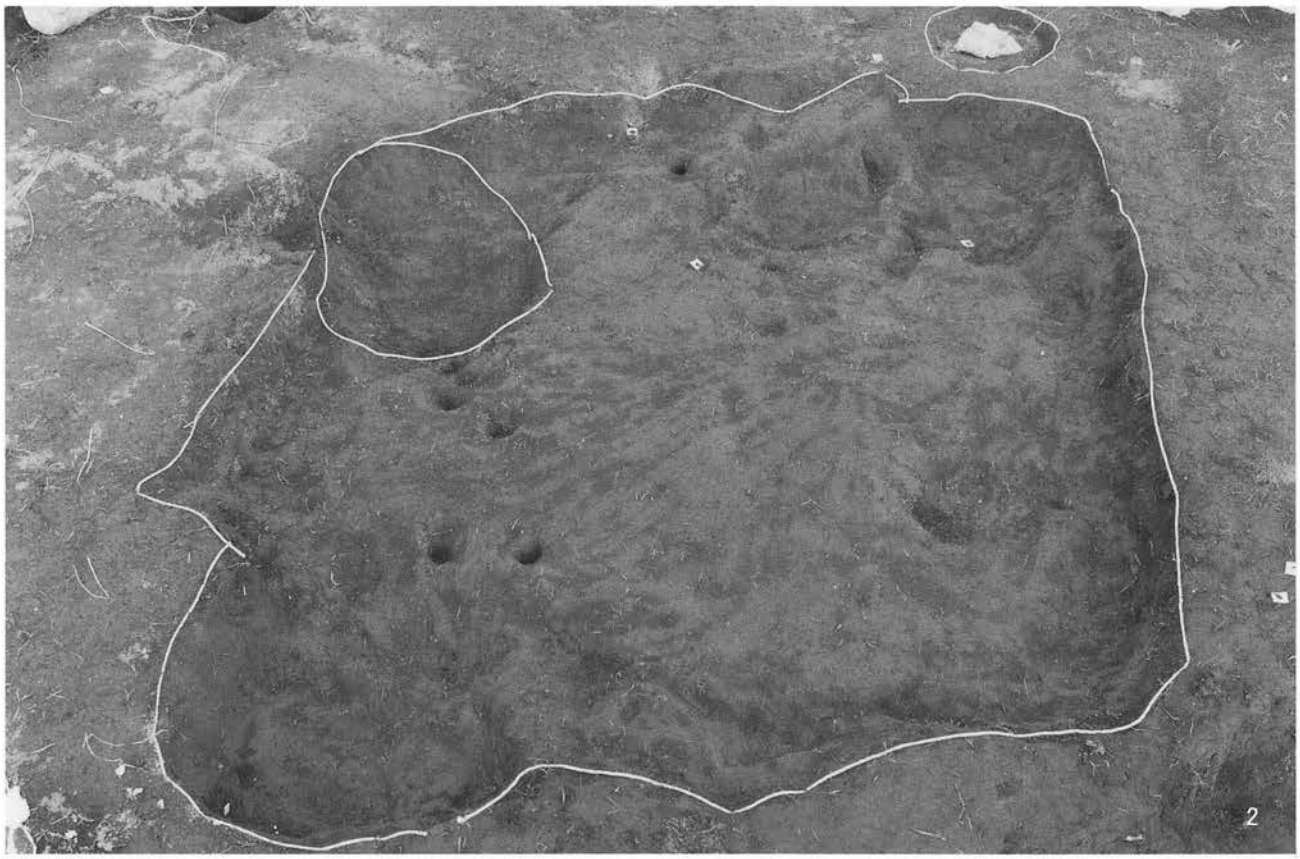
2．24号住完掘状況（西から，配石下から出土したつき臼がみられる）

3．24号住竈遺物出土状況

4．24号住竈とつき臼



1．25号住遺物出土状況（西から）

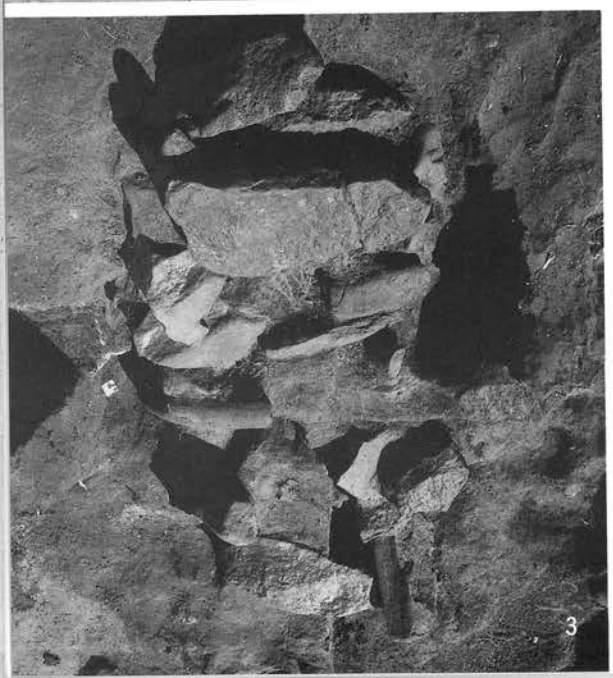


2．25号住完掘状況（西から）

3．25号住竈出土状況（西から，手前の天井石，支脚石が残る）

1．29号住遺物出土状況(西から)

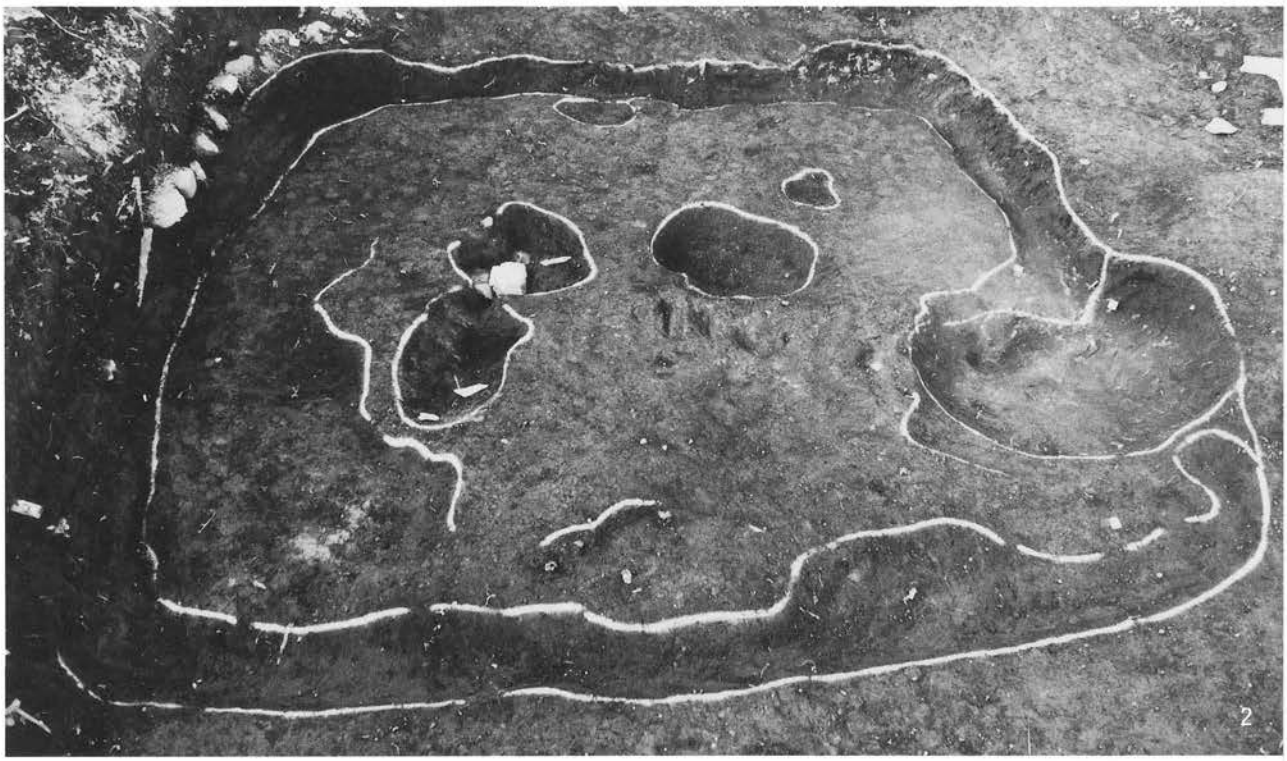
2．29号住完掘状況(西から，写真では不鮮明であるが，南壁寄りに出入口状の床の高まりがある)



3．29号住竈(上から)

4．29号住竈(西から)

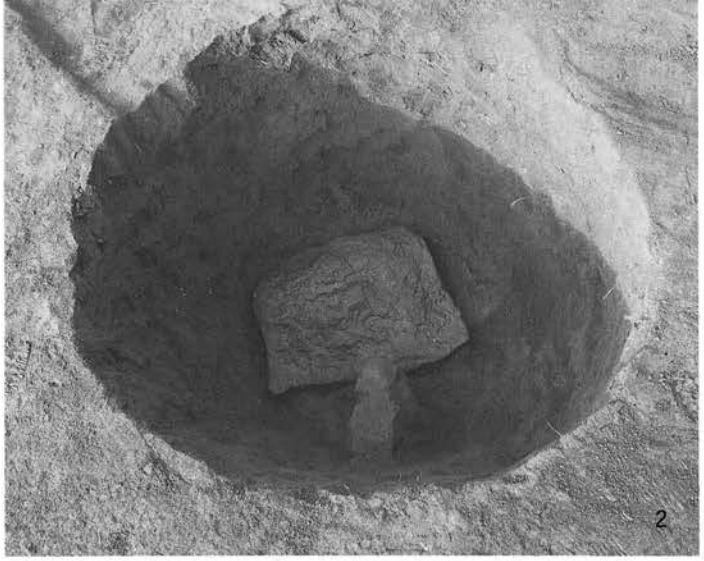
1．37号住遺物出土状況（南から，右上コーナーに2枚重ねの皿がある）

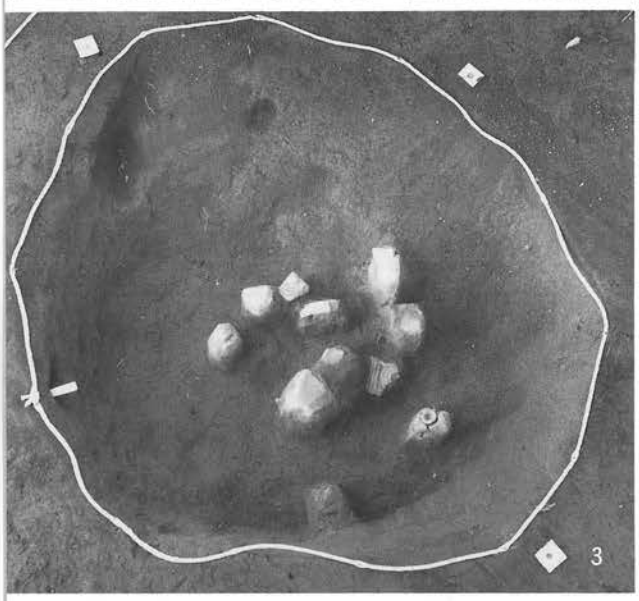


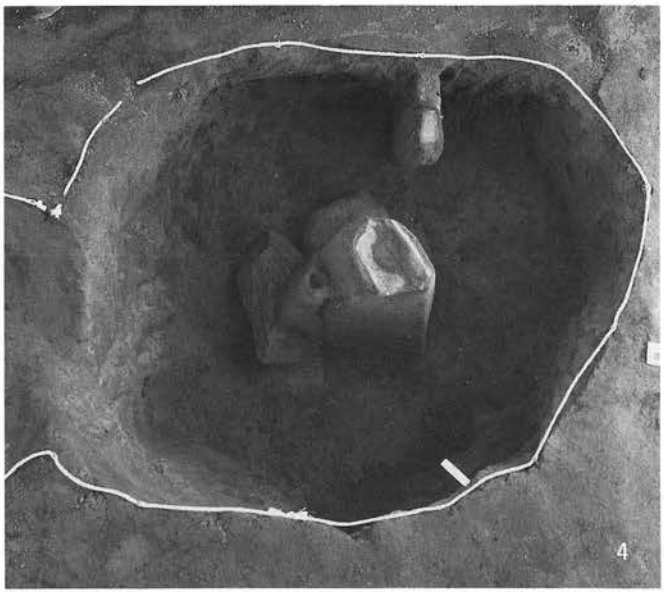
2．37号住完掘状況（南から，白スプレーで上端ラインを表示）

3．37号住内ロクロ甕出土状況（住居確認前に取り上げる，132図11）

4．37号住内出土2枚重ねの皿出土状況（132図1・5）





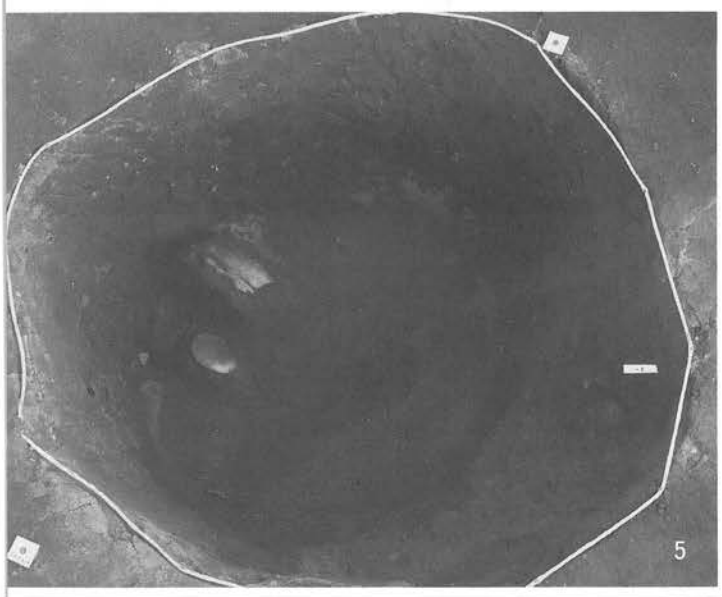


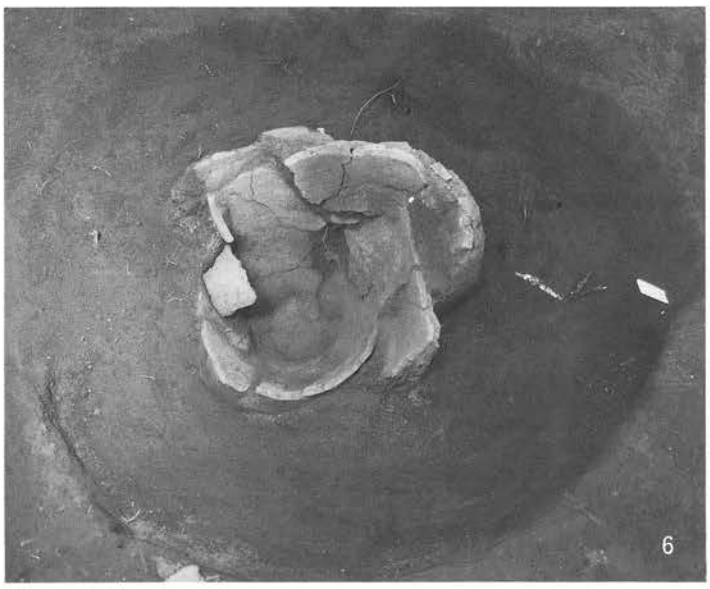
1．10号ピット出土状況（南から）

2．21号ピット出土状況（南から）

3．22号ピット出土状況（東から）

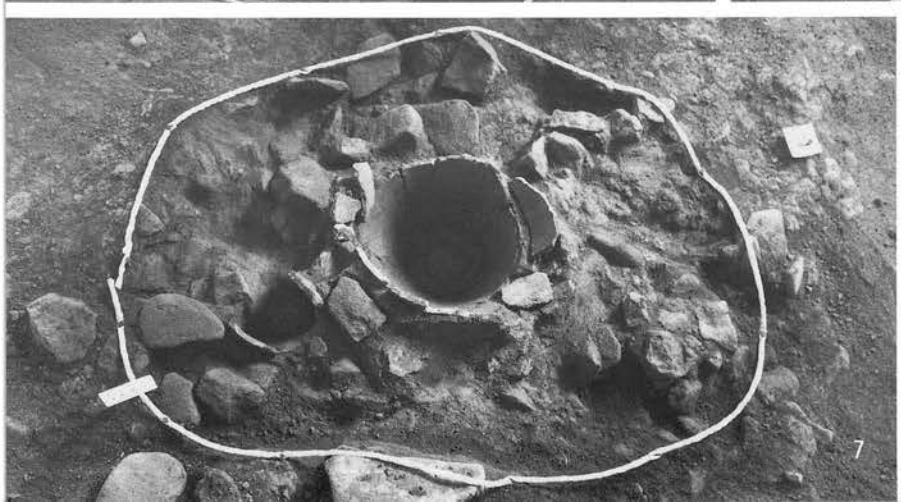
4．25号ピット出土状況（西から）





5．95号ピット出土状況（西から）

6．250号ピット出土状況（南から，後期の炉か）



7．263号ピット出土状況（北東から，後期の炉か）

1．343号ピット出土状況（北から）

2．344号ピット出土状況（北から）

3．381号ピット内集石出土状況（西から）

4．381号ピット下部石組出土状況（西から）

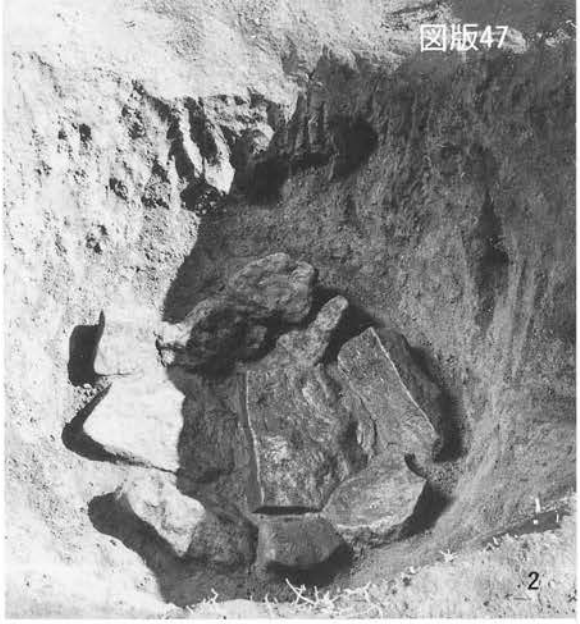
1．382号ピット内石組出土状況（東から）

2．390号ピット内集石・石組出土状況（北から）

3．390号ピット内石組出土状況（西から）

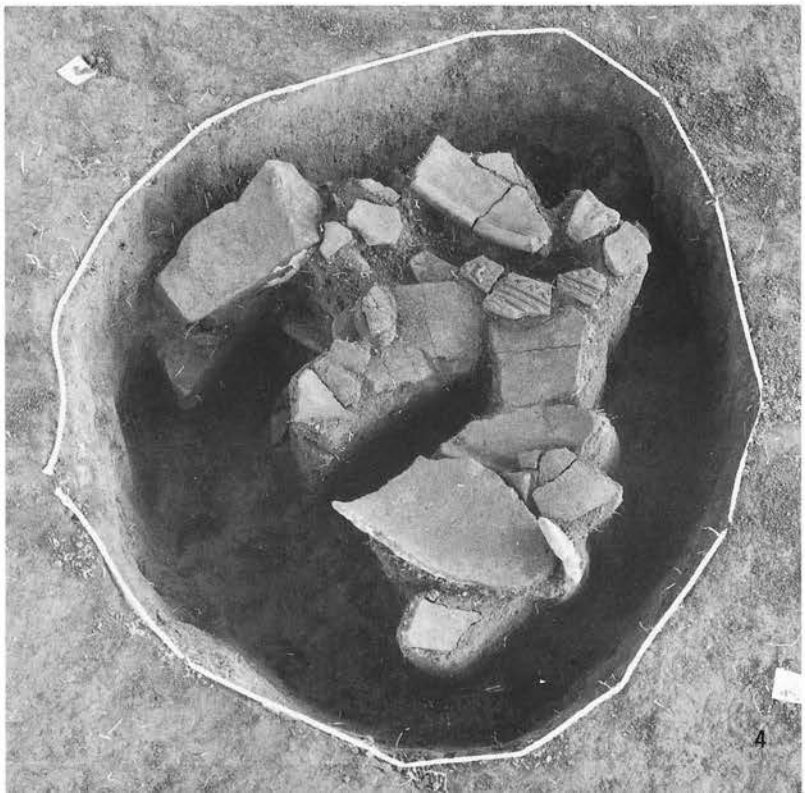
4．398号ピット内集石出土状況（東から，23号住内に存在）

1．398号ピット内上部集石・石組取り上げ後の下層集石状況(東から)

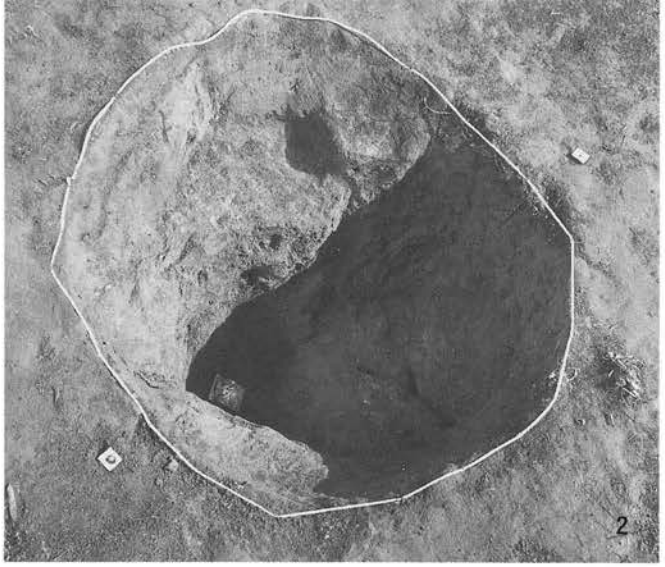


2．398号ピット内下層石組状況(東から)

3．381～398号ピット全景(南西から，石組をもつ集石炉が集中)



4．401号ピット内出土状況(西から)



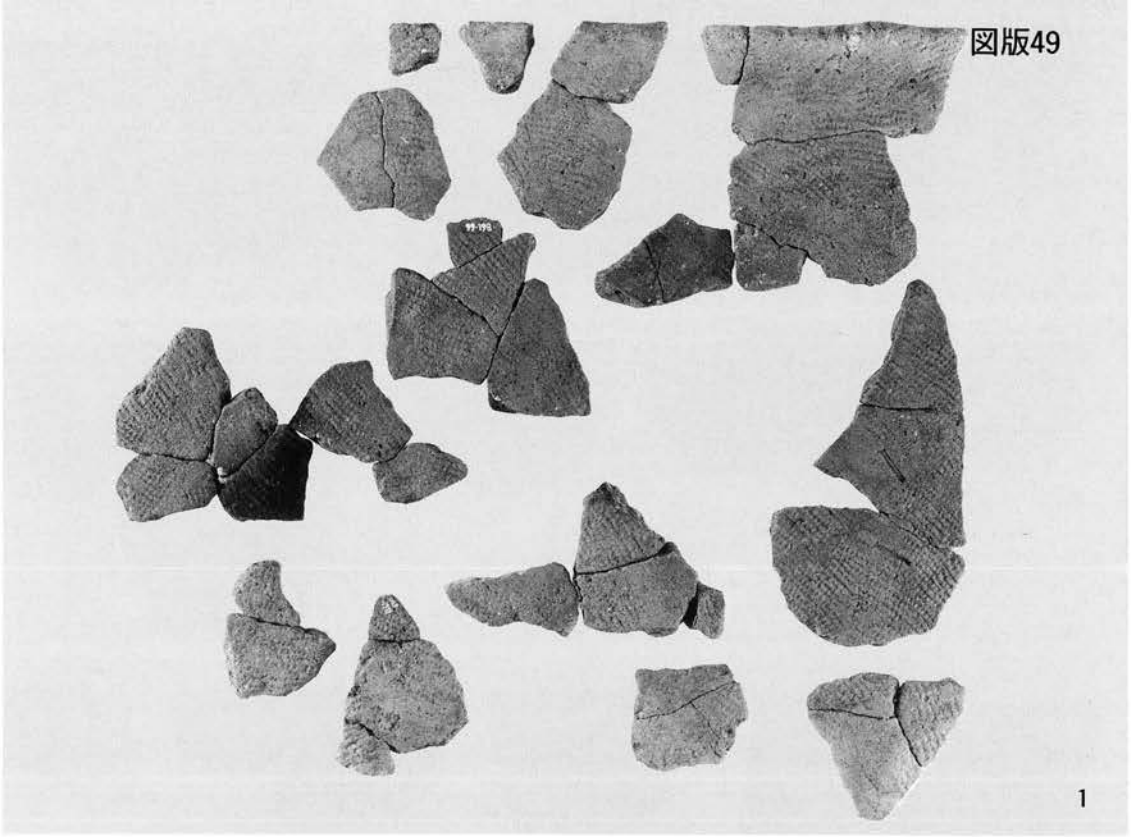
1．404号ピット上面配石出土状況(北から，この時点では下部に土坑があることは想定しなかった)

2．404号ピット完掘状況(東から，墓坑状のピットとなる)

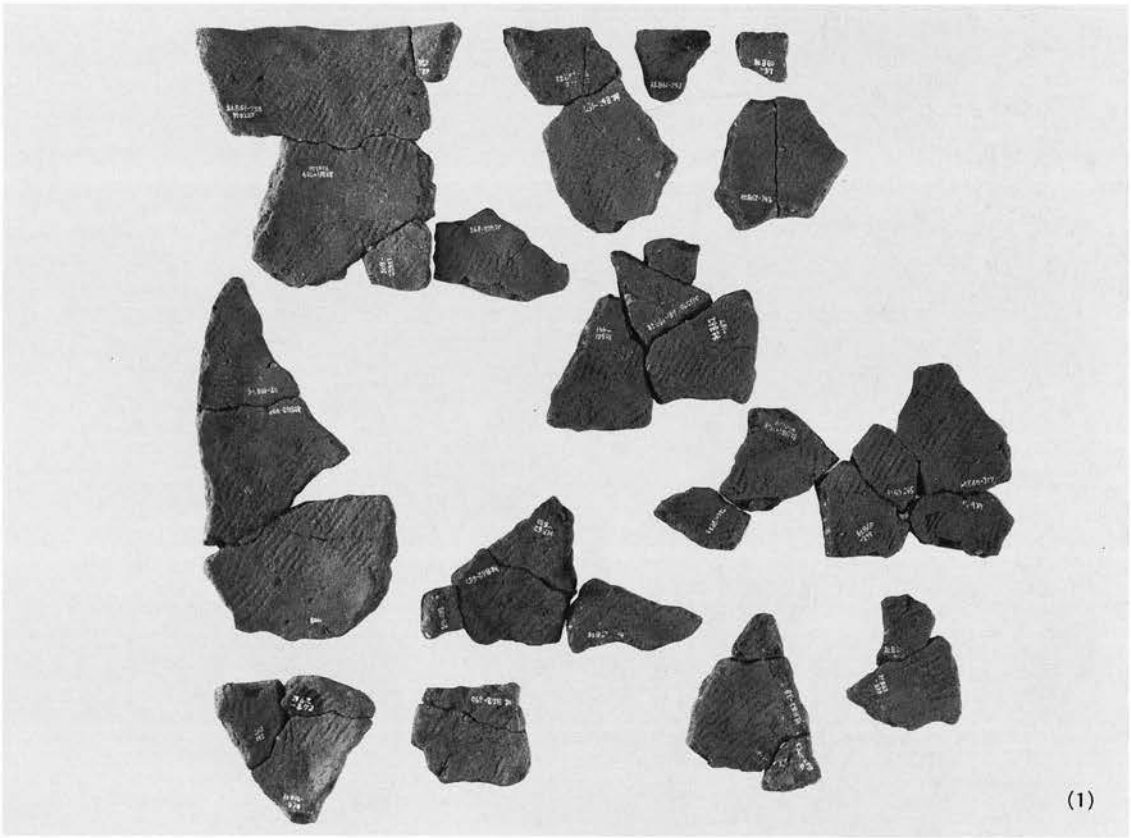
3．408号ピット出土状況(28号住内，西から)

4．箕輪堰(ふるせぎ)断面(西から，現況上に廃土を盛り上げている)

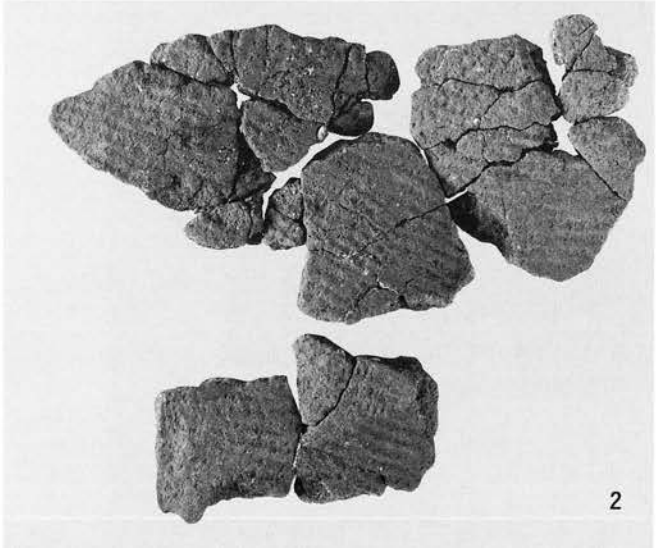
図版49



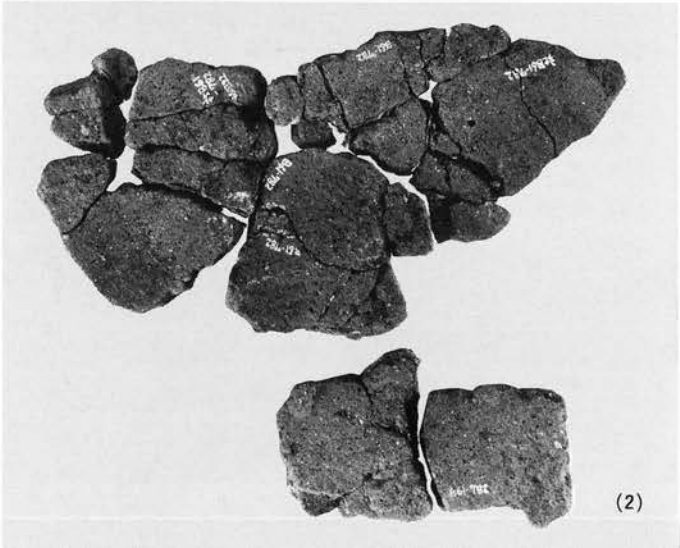
1



(1)

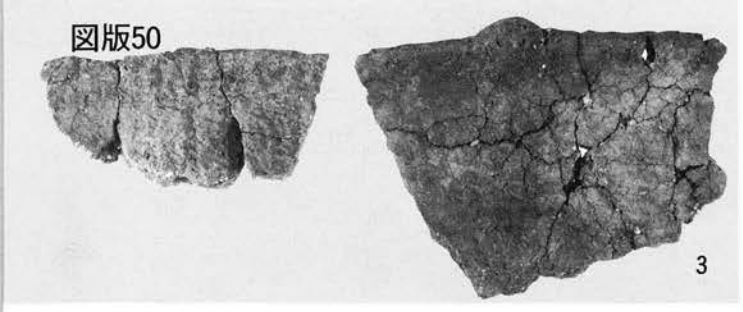


2

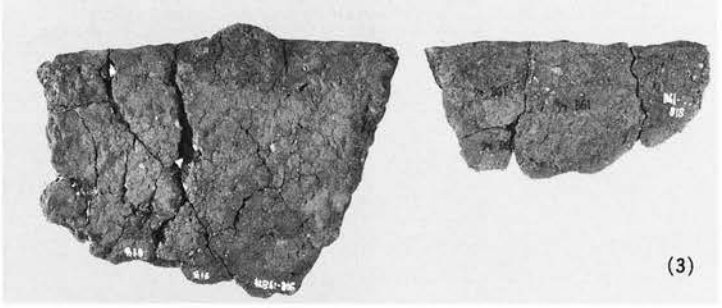


(2)

図版50

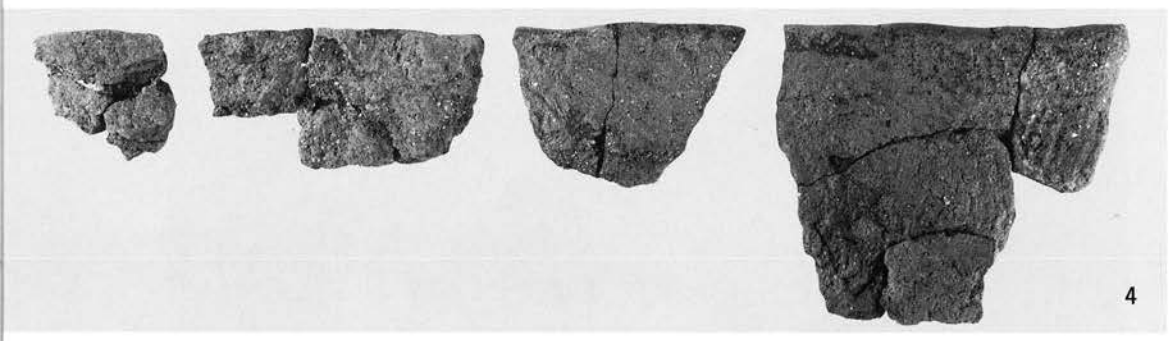


3

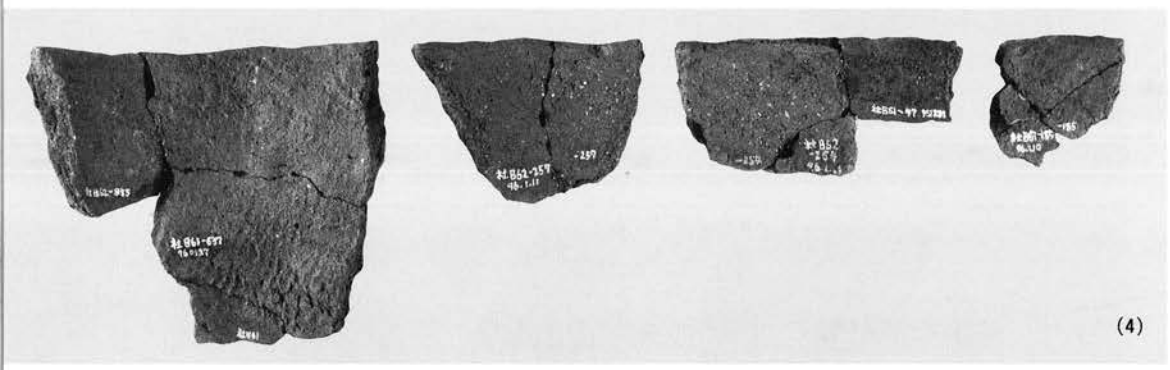


(3)

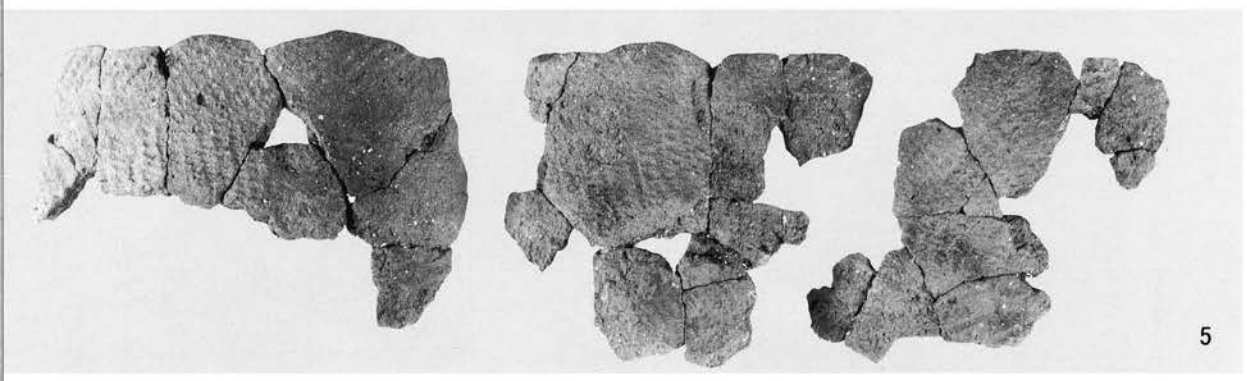
草創期～早期土器



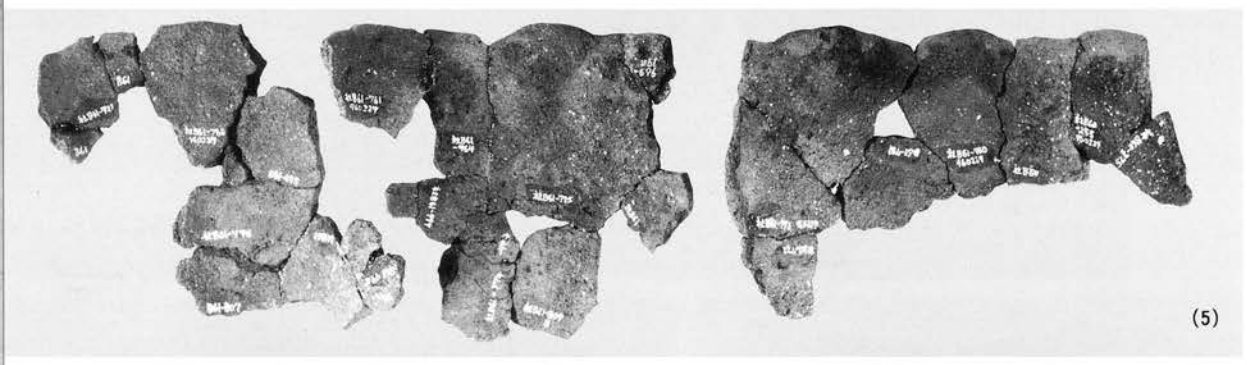
4



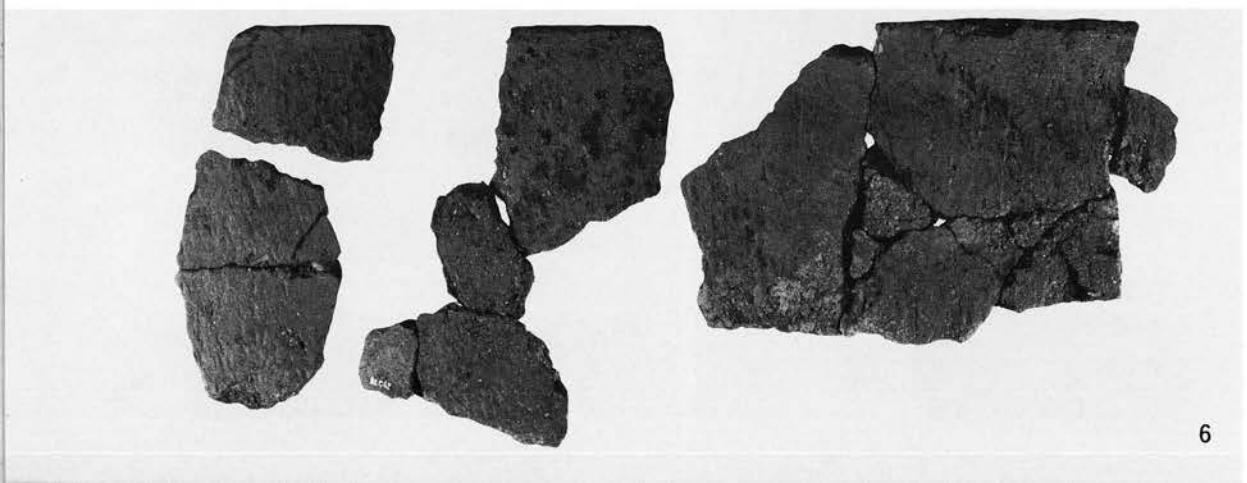
(4)



5

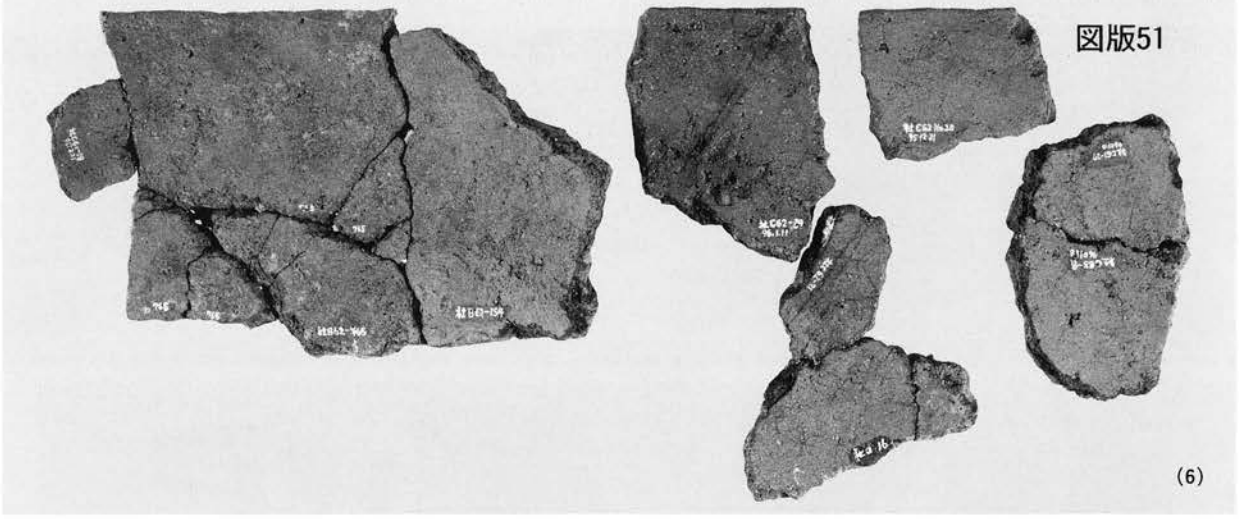


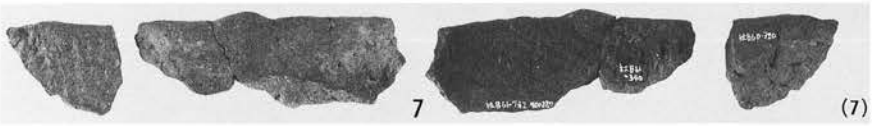
(5)

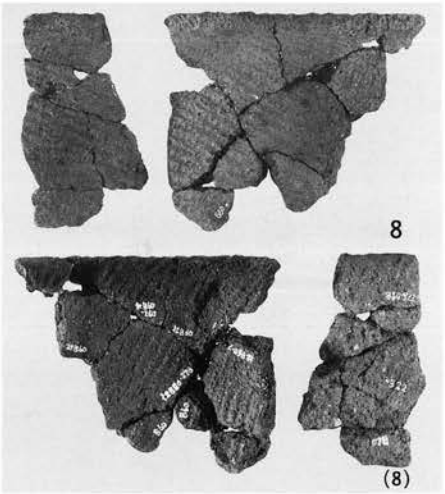


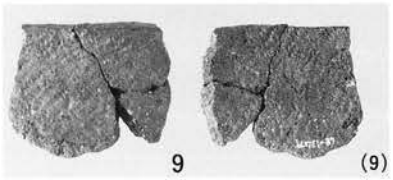
6

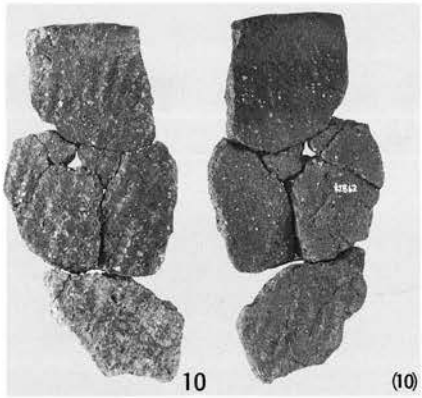
図版51

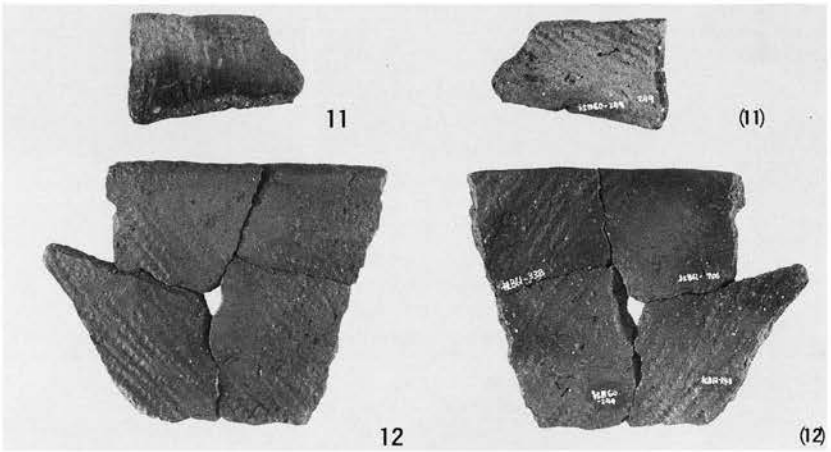

(6)

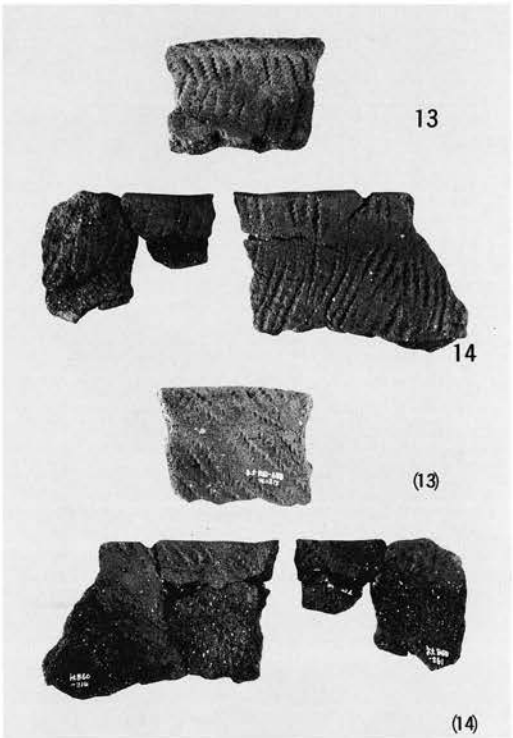

7
(7)

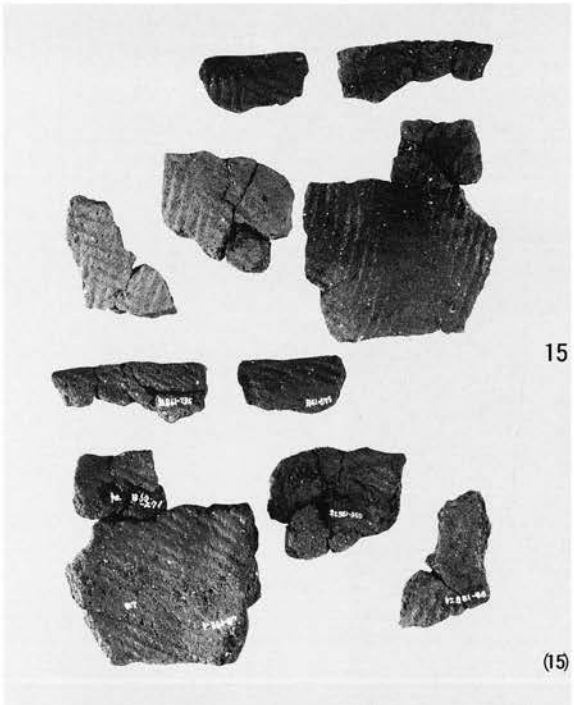

8
(8)

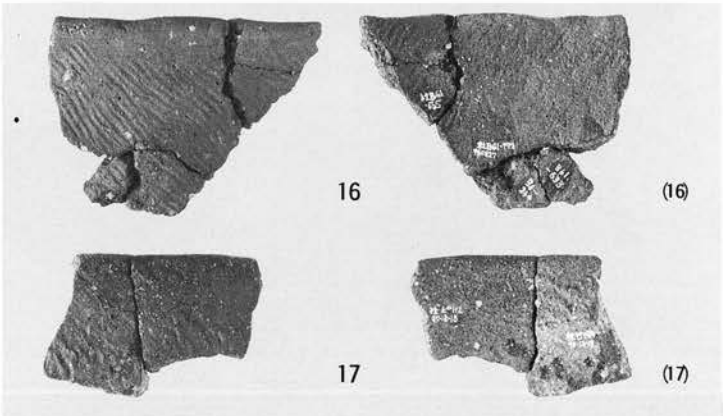

9
(9)


10
(10)

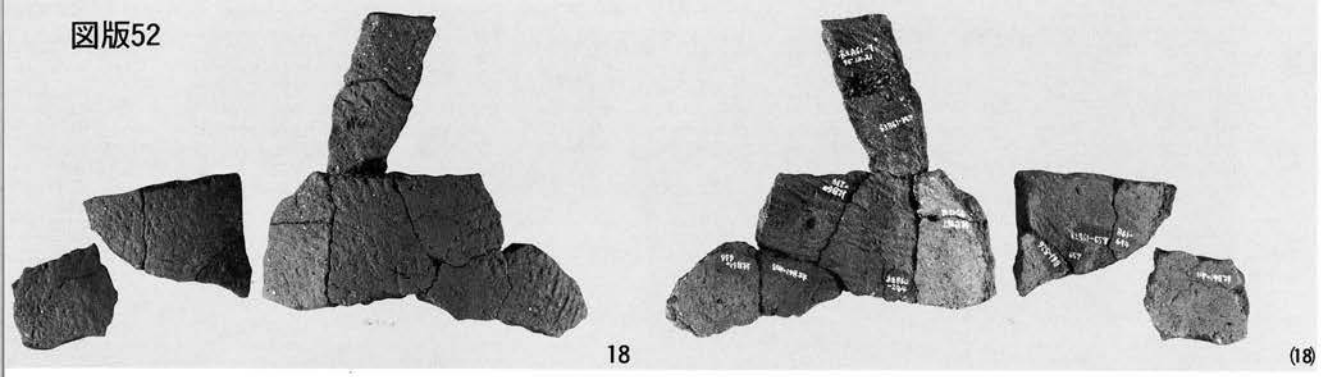

11
(11)
12
(12)

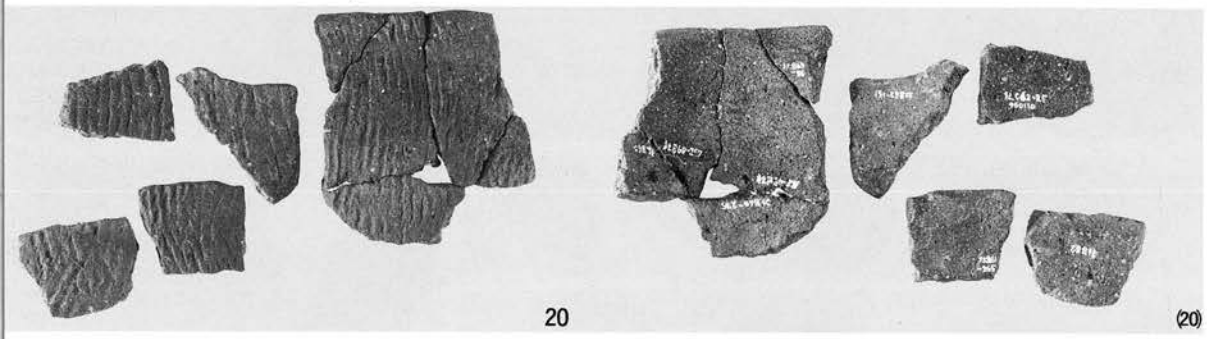

13
14
(13)
(14)

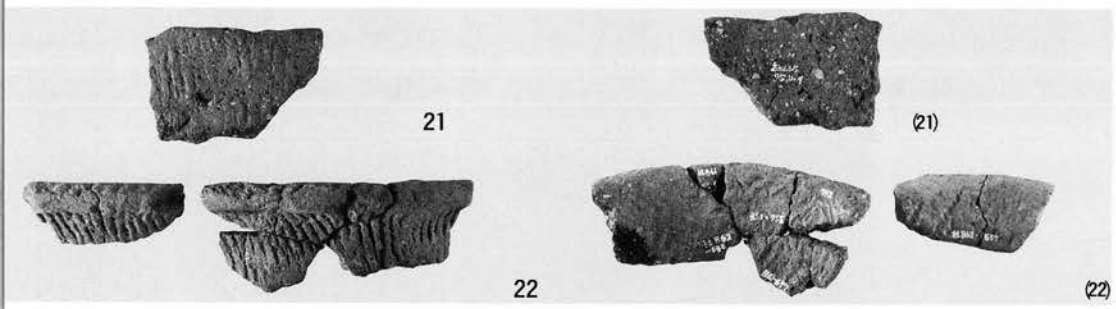

15
(15)

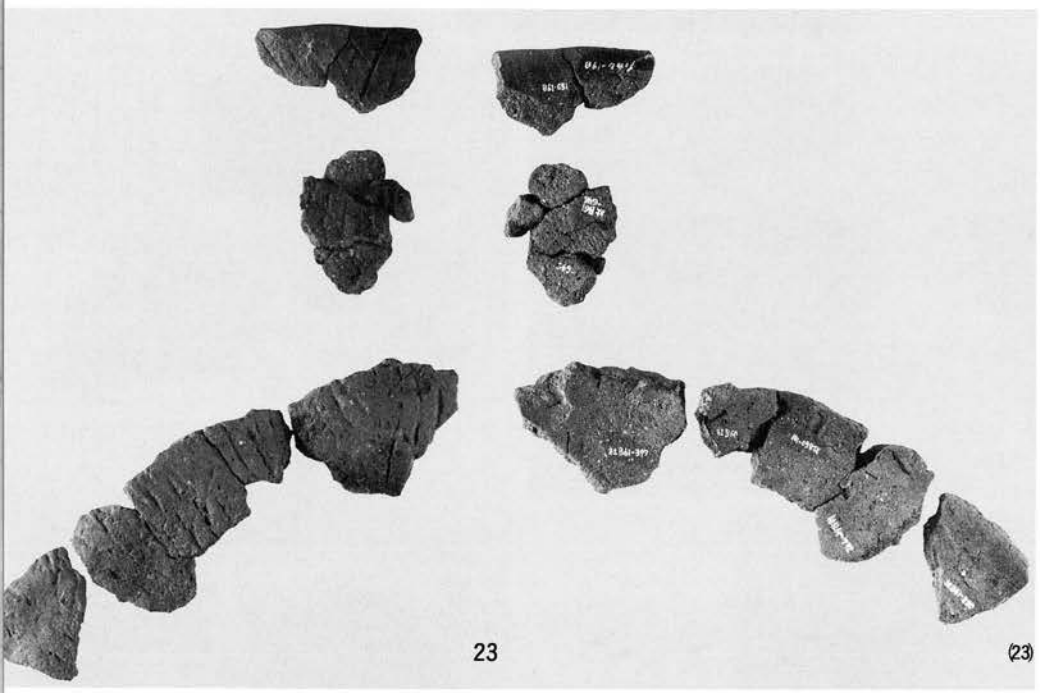

16
(16)
17
(17)

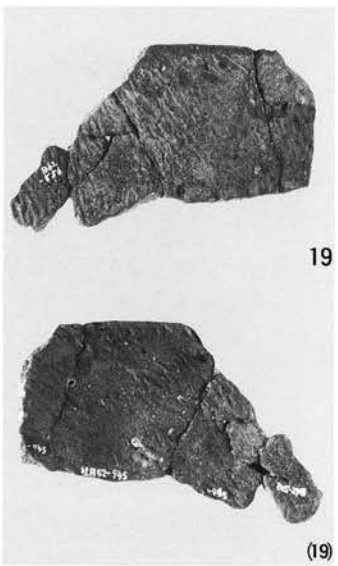
図版52

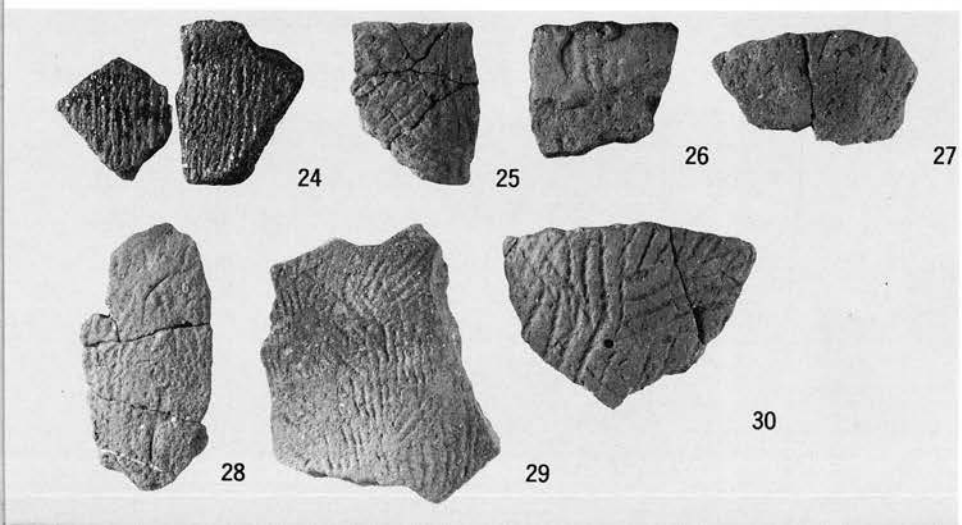


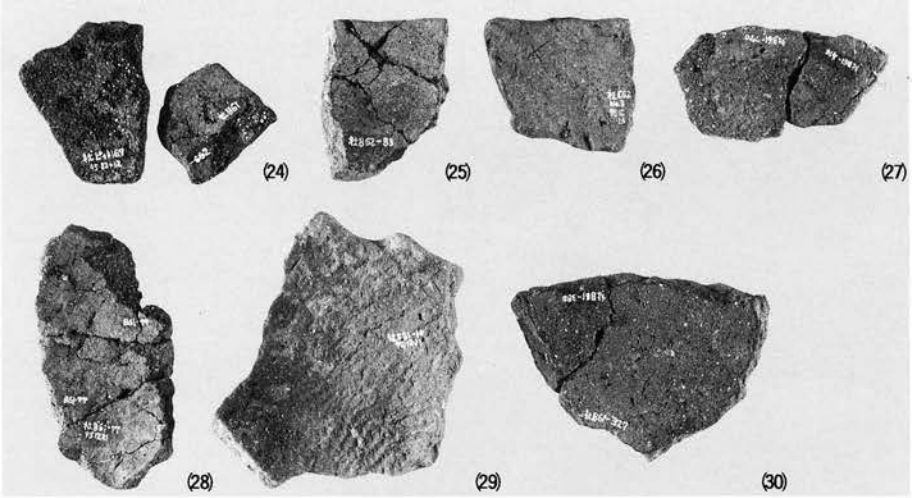


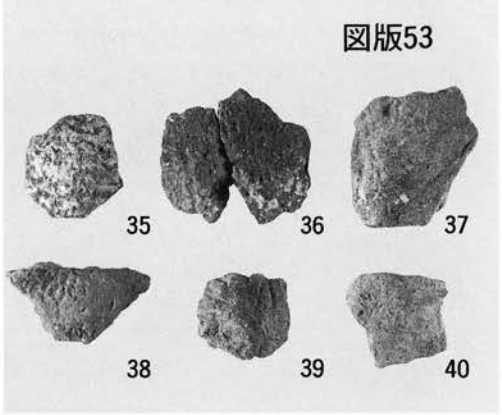


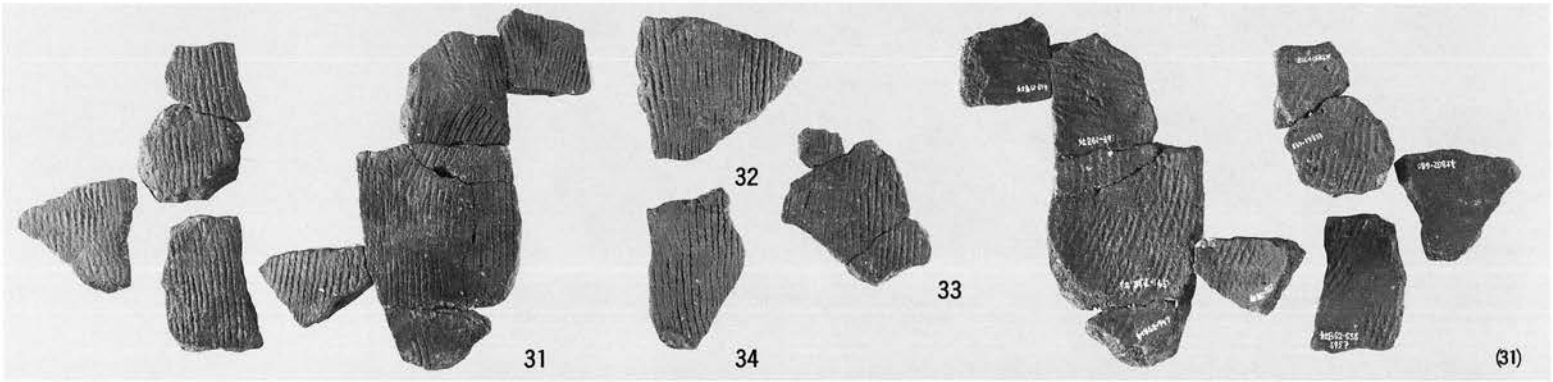




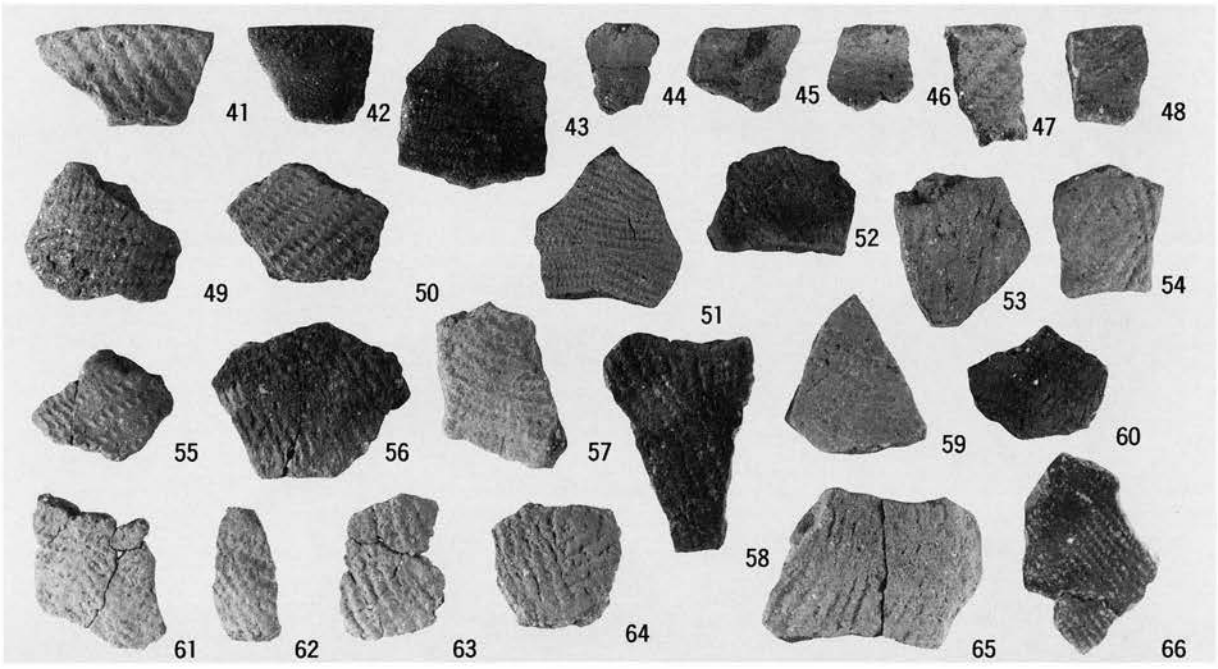


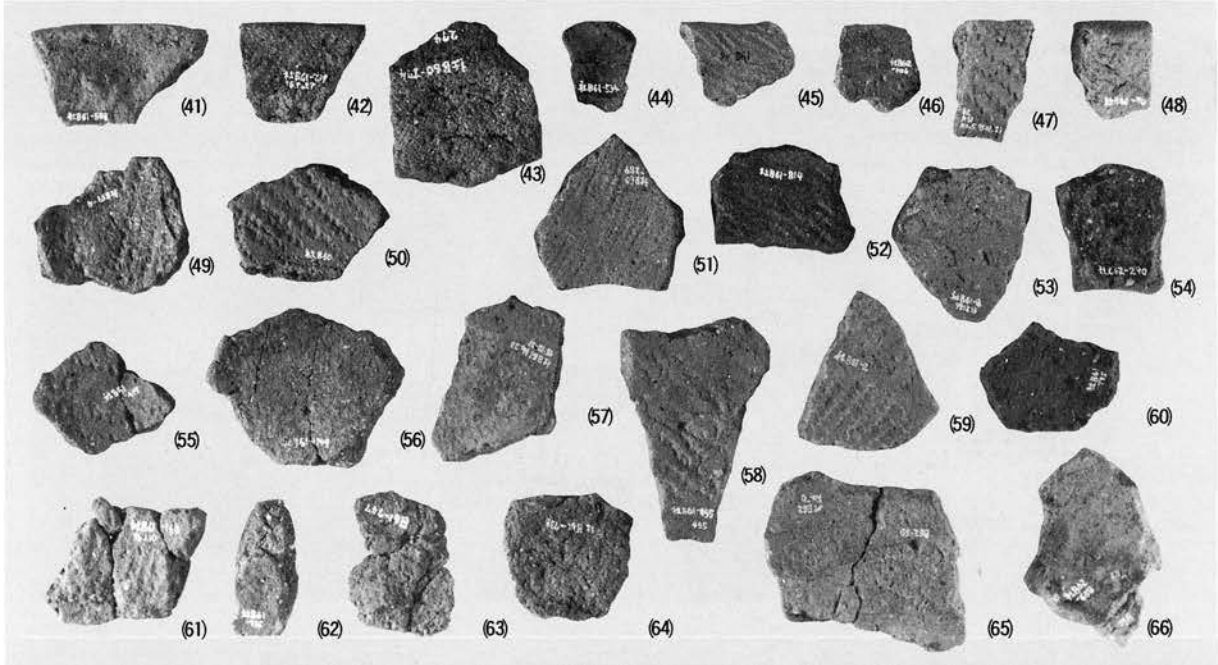

(24)
(25)
(26)
(27)
(28)
(29)
(30)

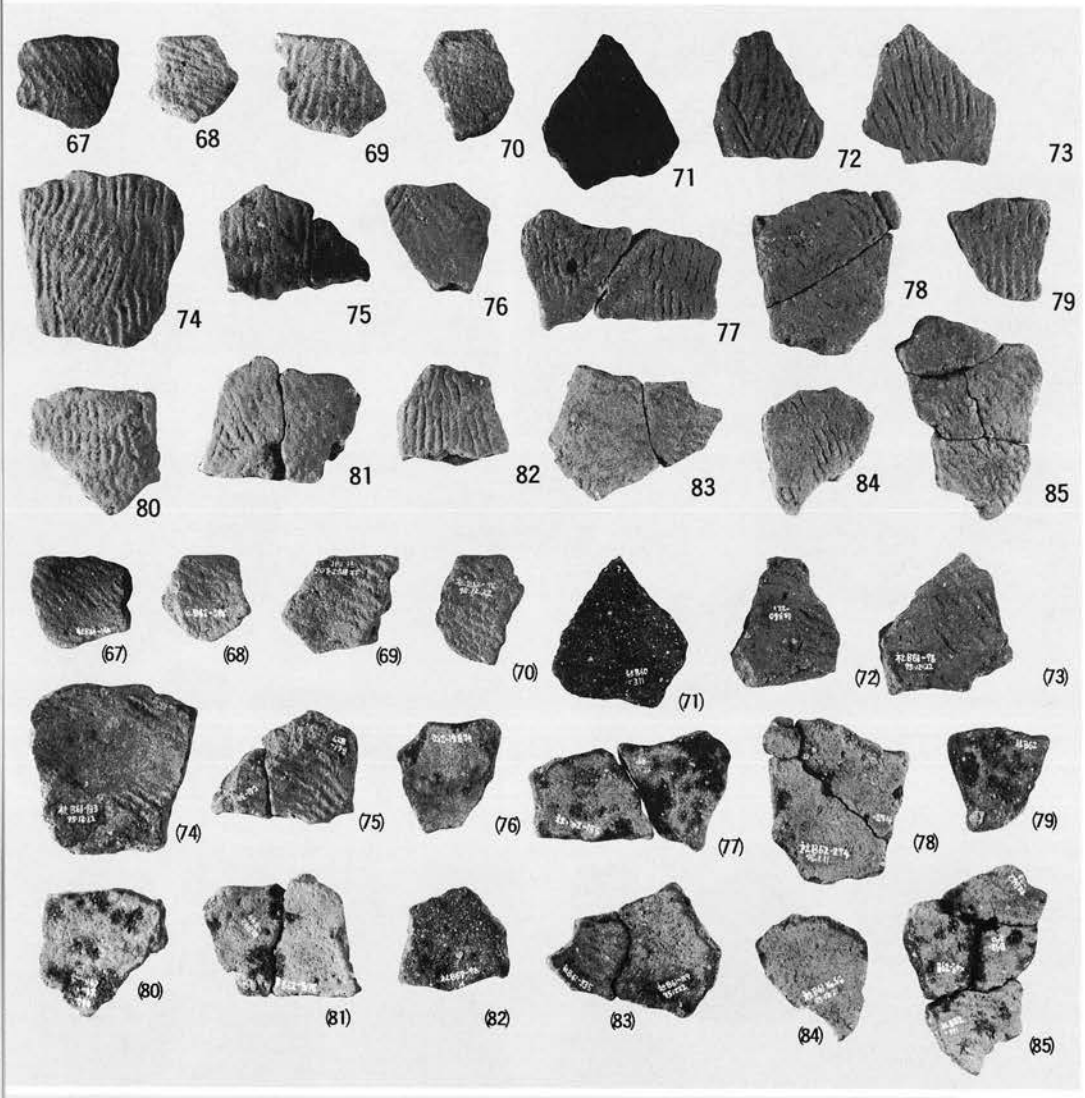

35
36
37
38
39
40

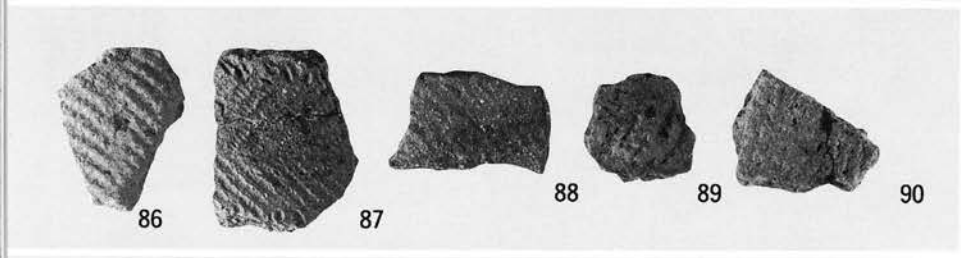

31
32
33
34
(31)

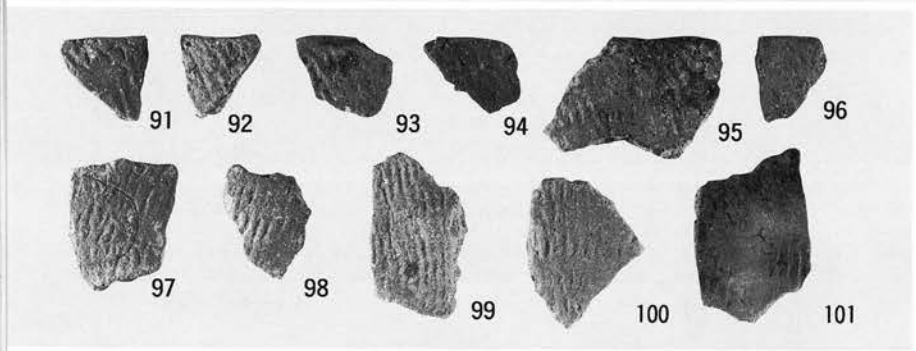
草創期～早期土器

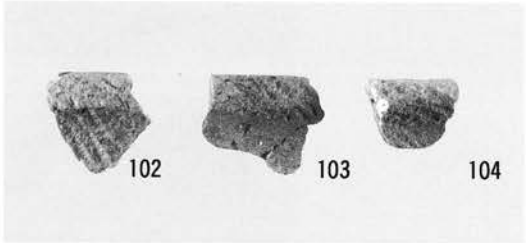

41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66

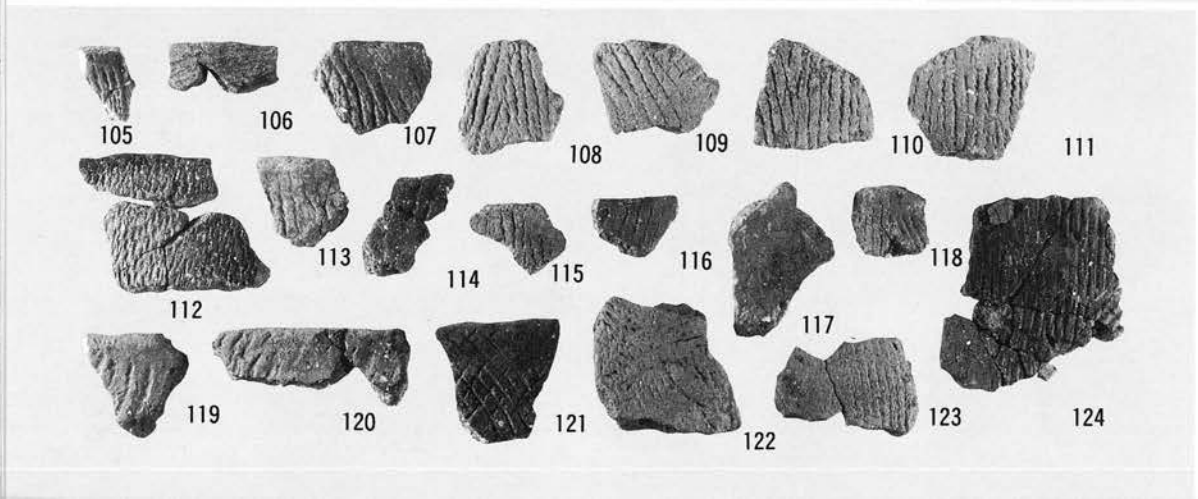

(41)
(42)
(43)
(44)
(45)
(46)
(47)
(48)
(49)
(50)
(51)
(52)
(53)
(54)
(55)
(56)
(57)
(58)
(59)
(60)
(61)
(62)
(63)
(64)
(65)
(66)

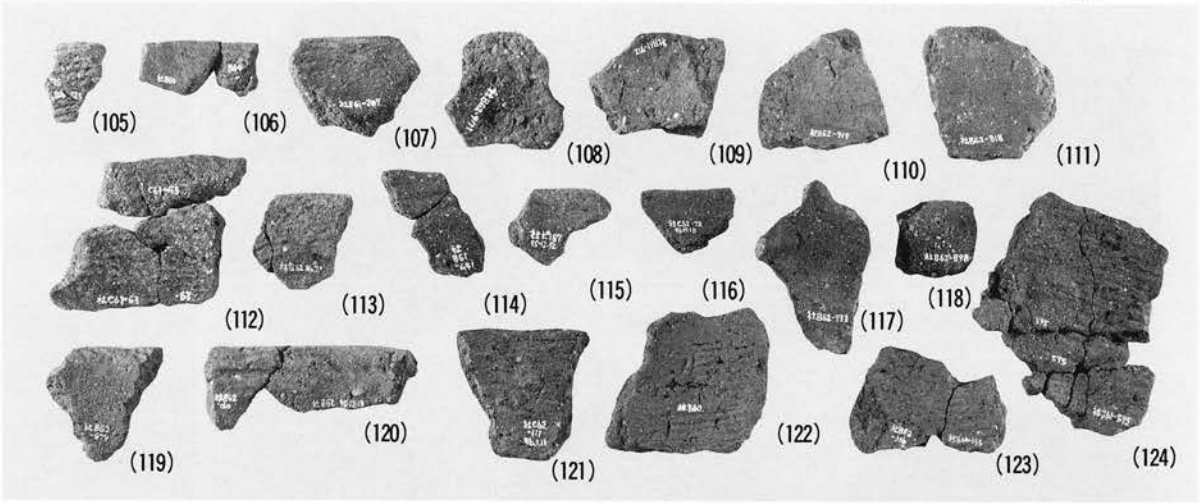

67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
(67)
(68)
(69)
(70)
(71)
(72)
(73)
(74)
(75)
(76)
(77)
(78)
(79)
(80)
(81)
(82)
(83)
(84)
(85)

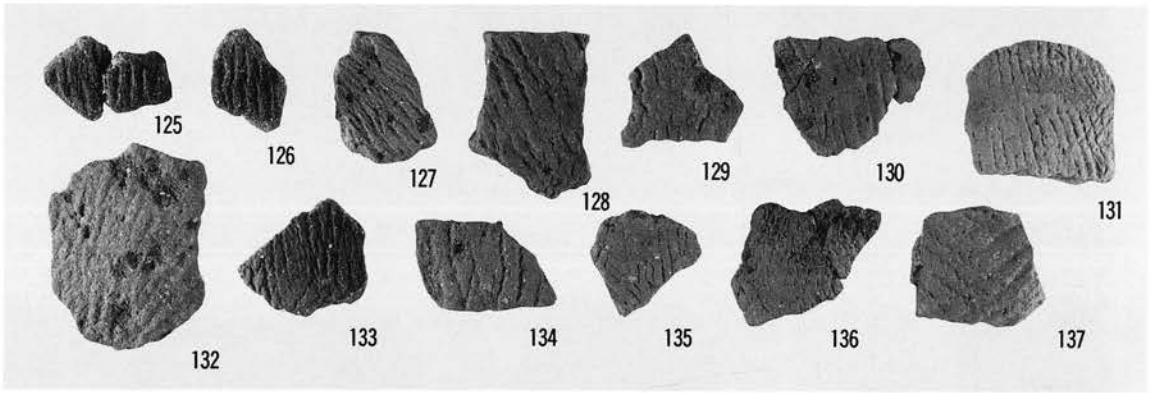

86
87
88
89
90

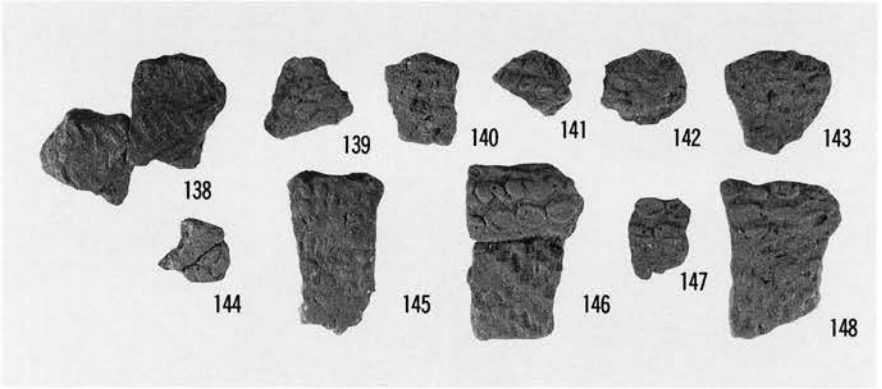

91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101

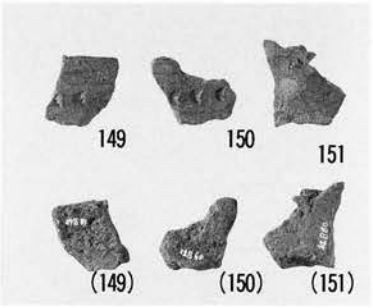

102
103
104

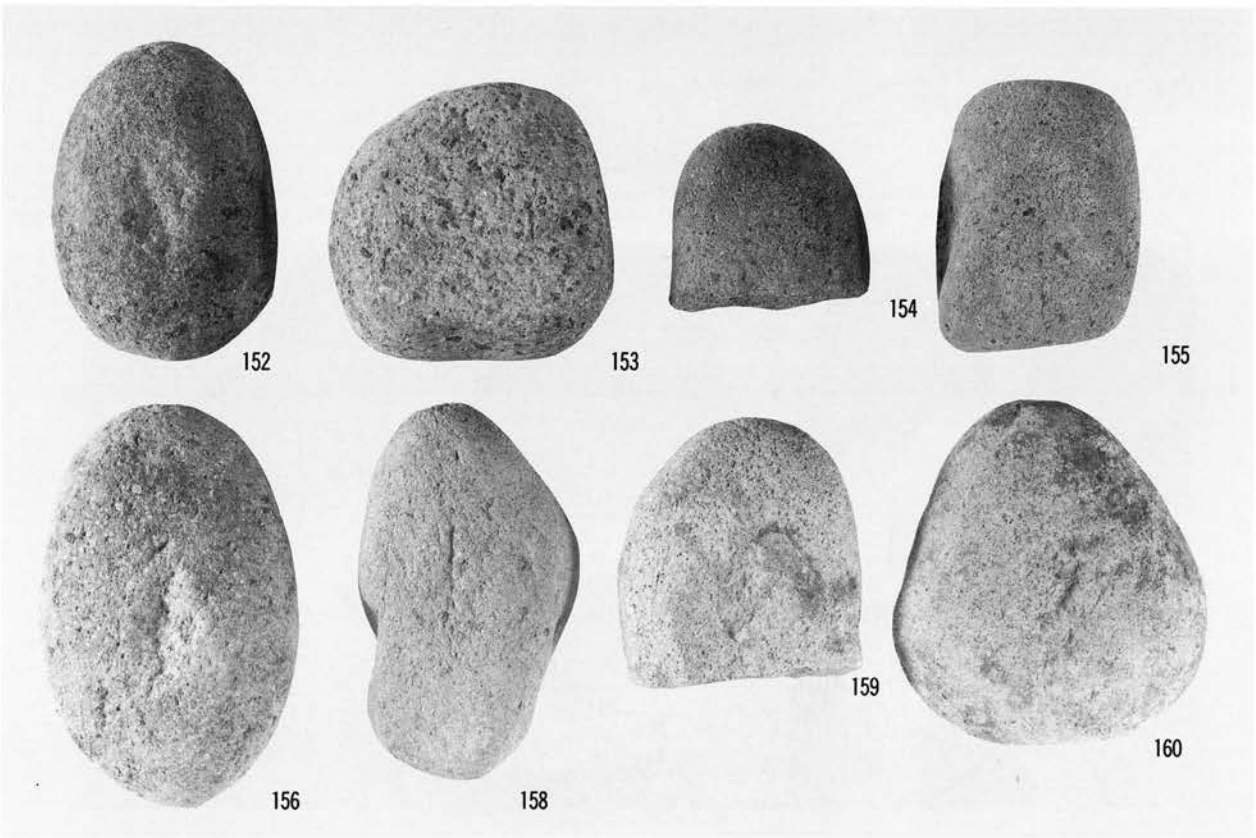

105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124


(105)
(106)
(107)
(108)
(109)
(110)
(111)
(112)
(113)
(114)
(115)
(116)
(117)
(118)
(119)
(120)
(121)
(122)
(123)
(124)

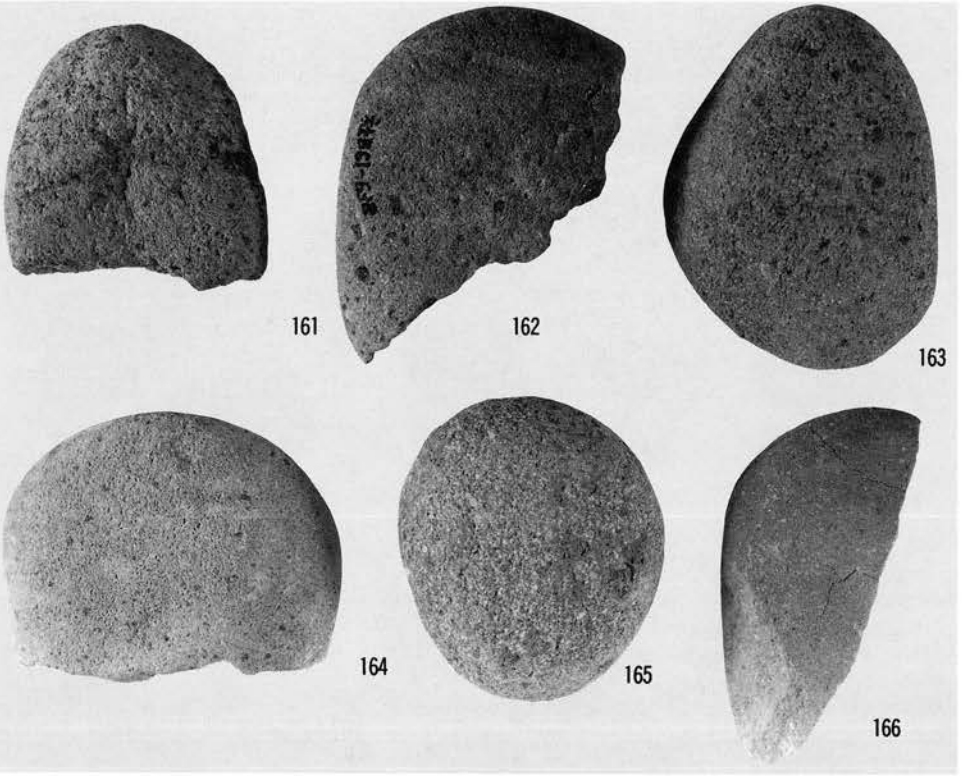

125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137

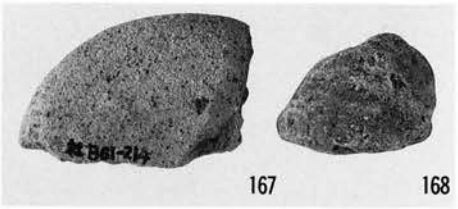

138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148

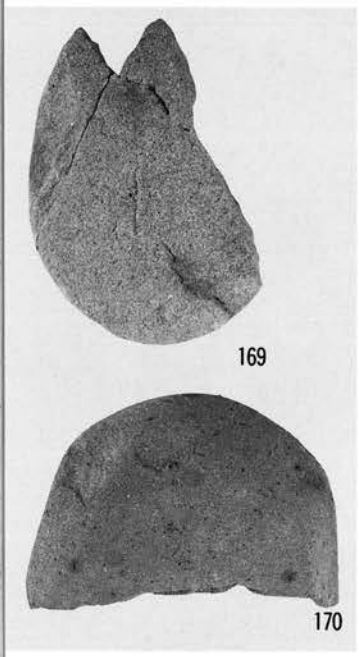

149
150
151
(149)
(150)
(151)

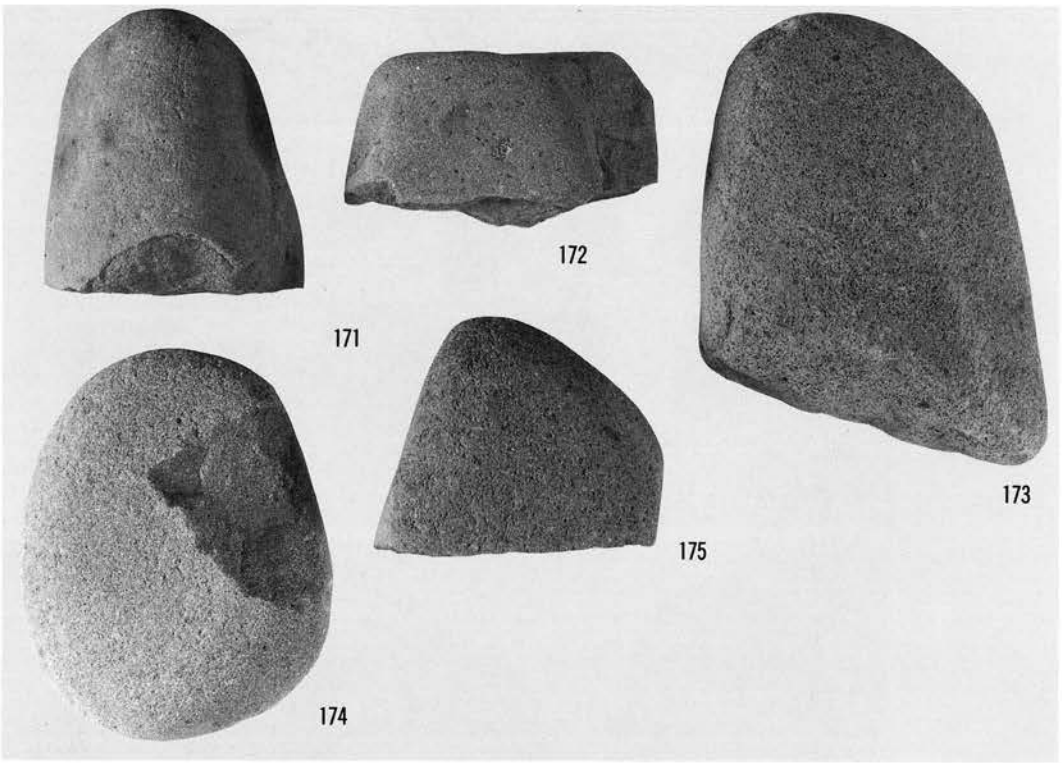

152
153
154
155
156
158
159
160

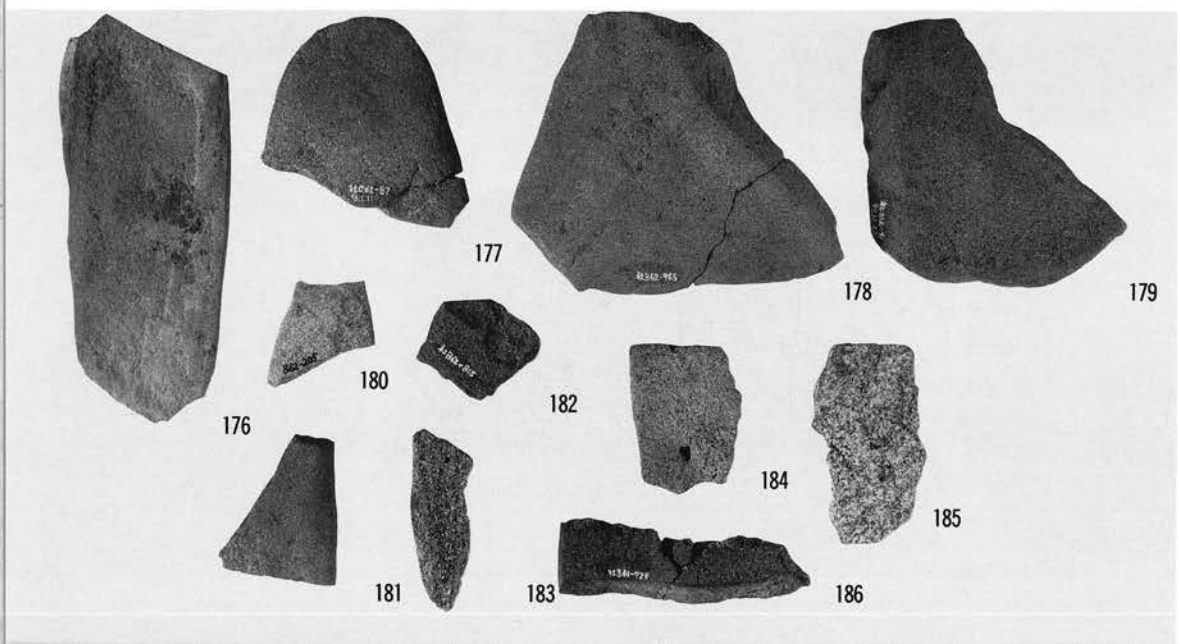
図版56



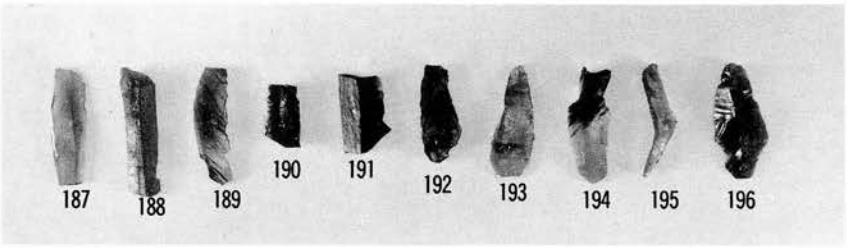


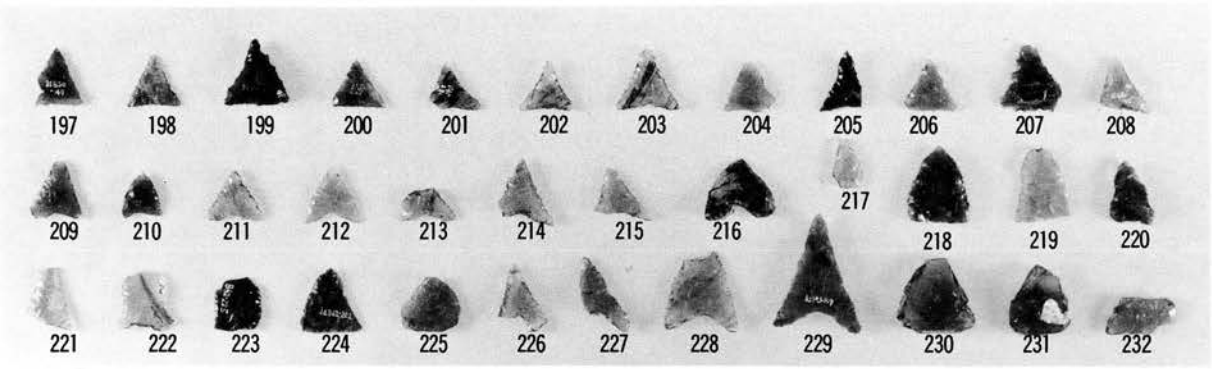


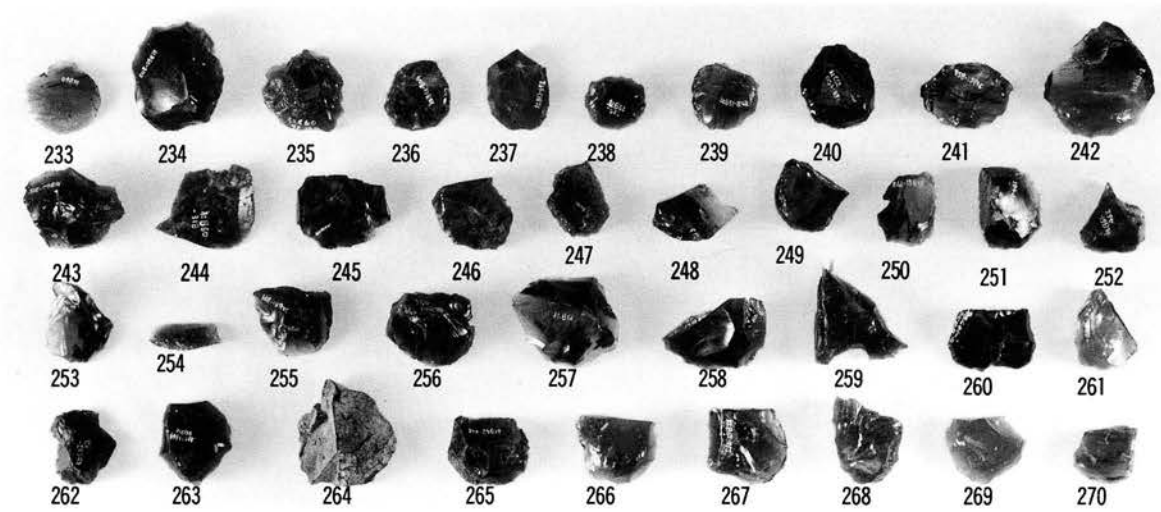




草創期～早期石器


187
188
189
190
191
192
193
194
195
196


197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232


233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270

271
272
273
274
275

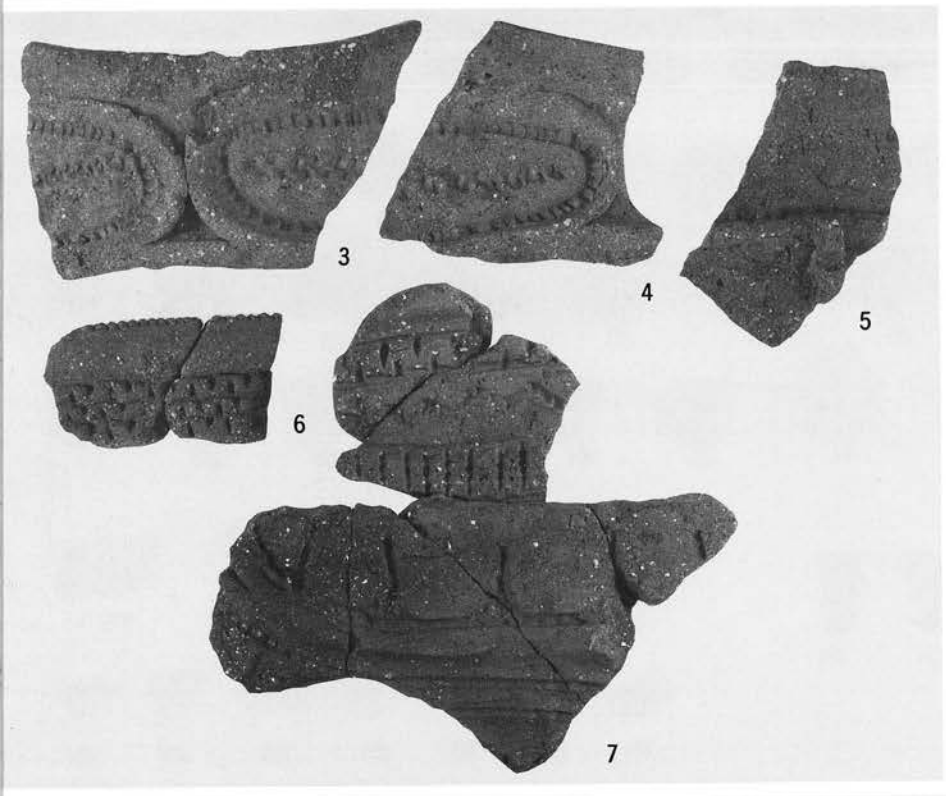
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287

290
291
292
293
294
295
296
297
298

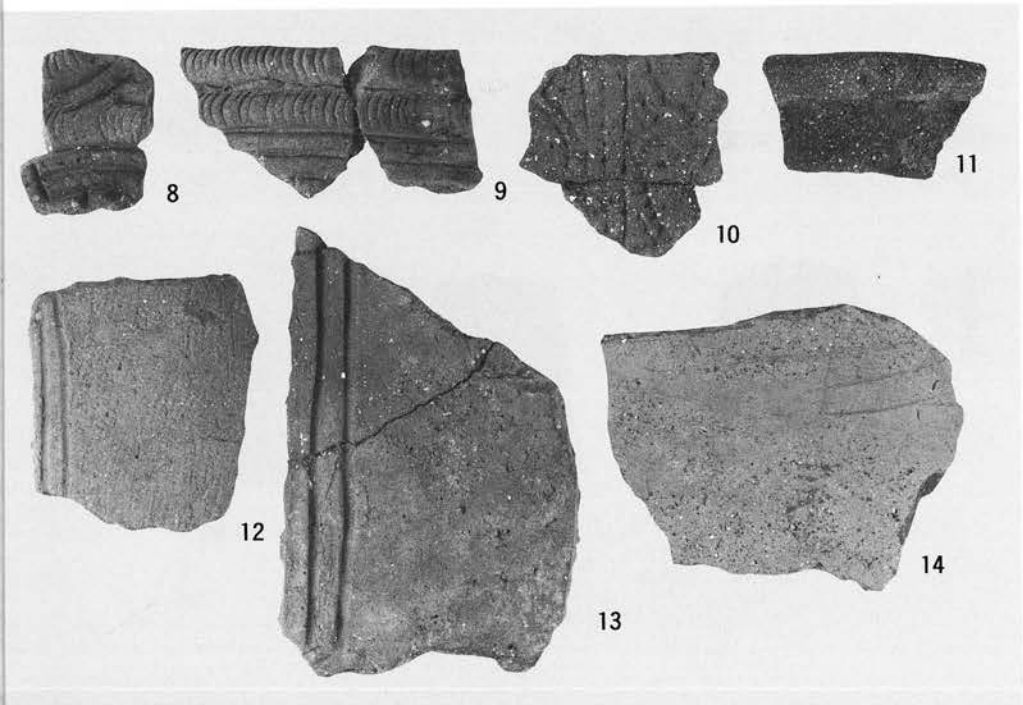
289
288
299
300

1

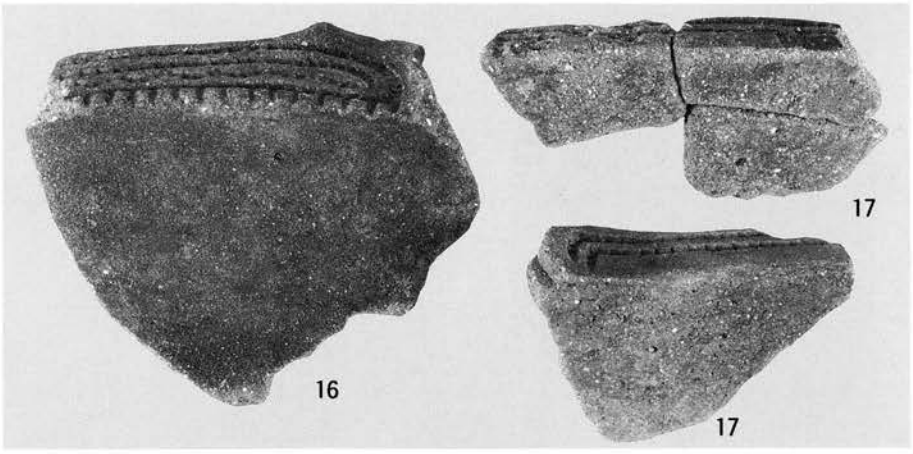
2

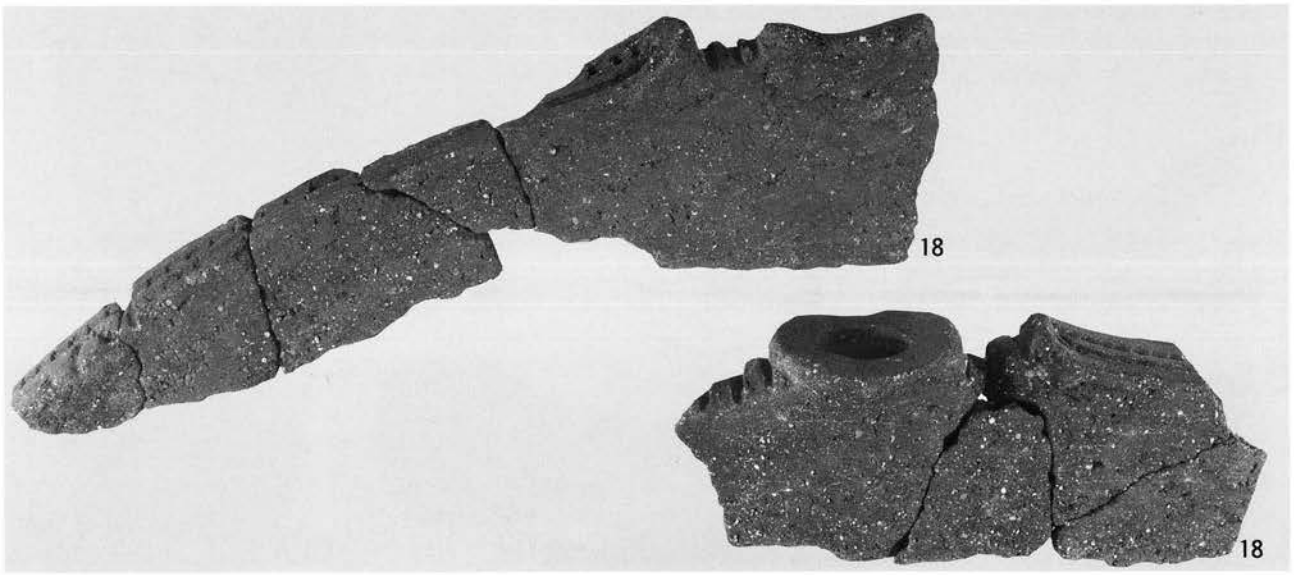

3
4
5
6
7

2

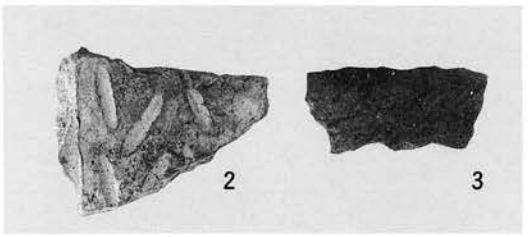

8
9
10
11
12
13
14

34号住出土遺物

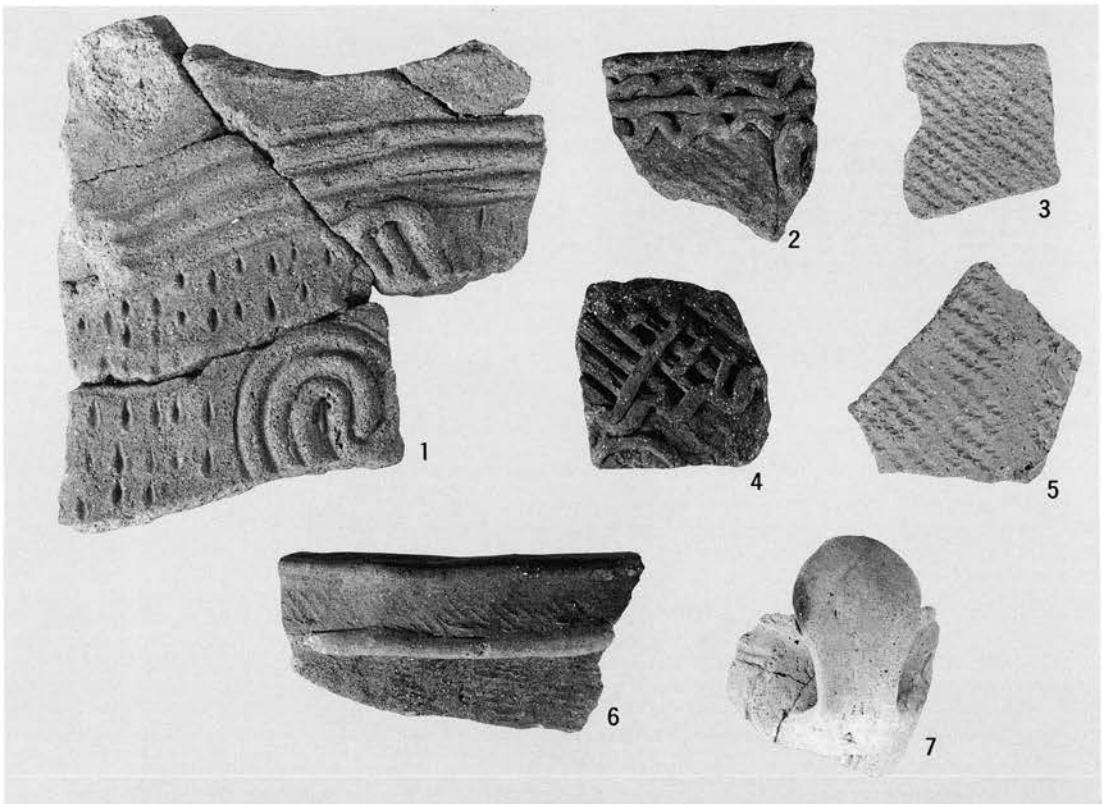




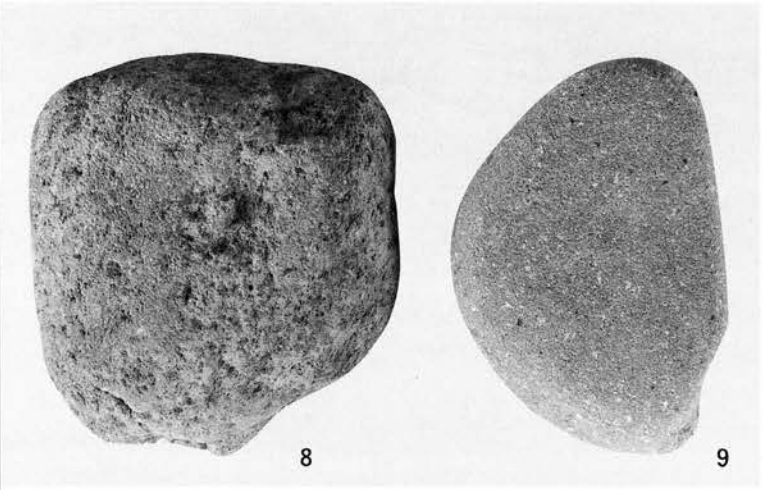
3 号住出土遺物

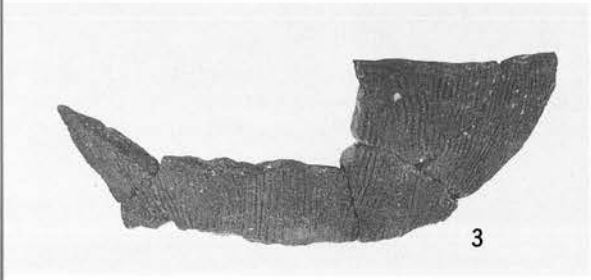


7 号住出土遺物



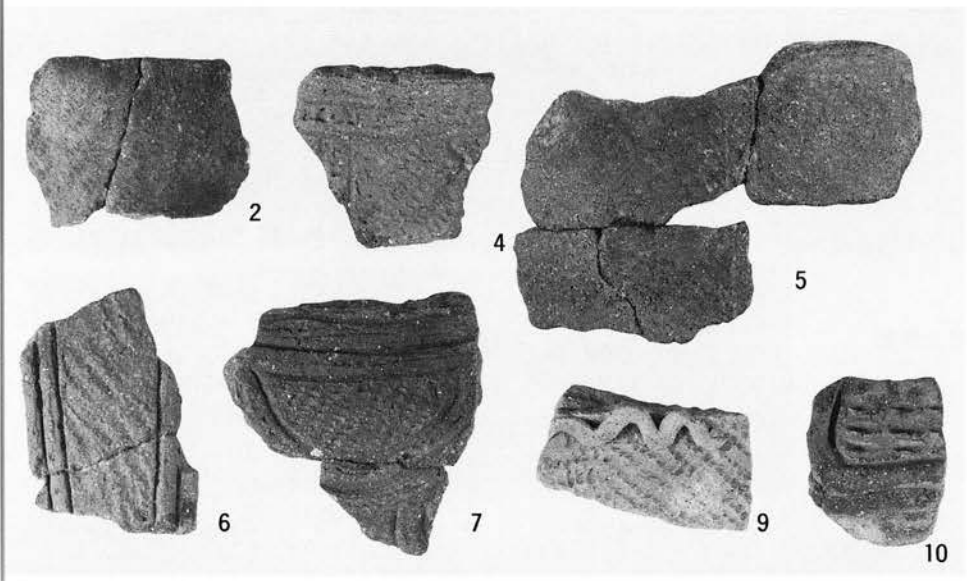
図版60

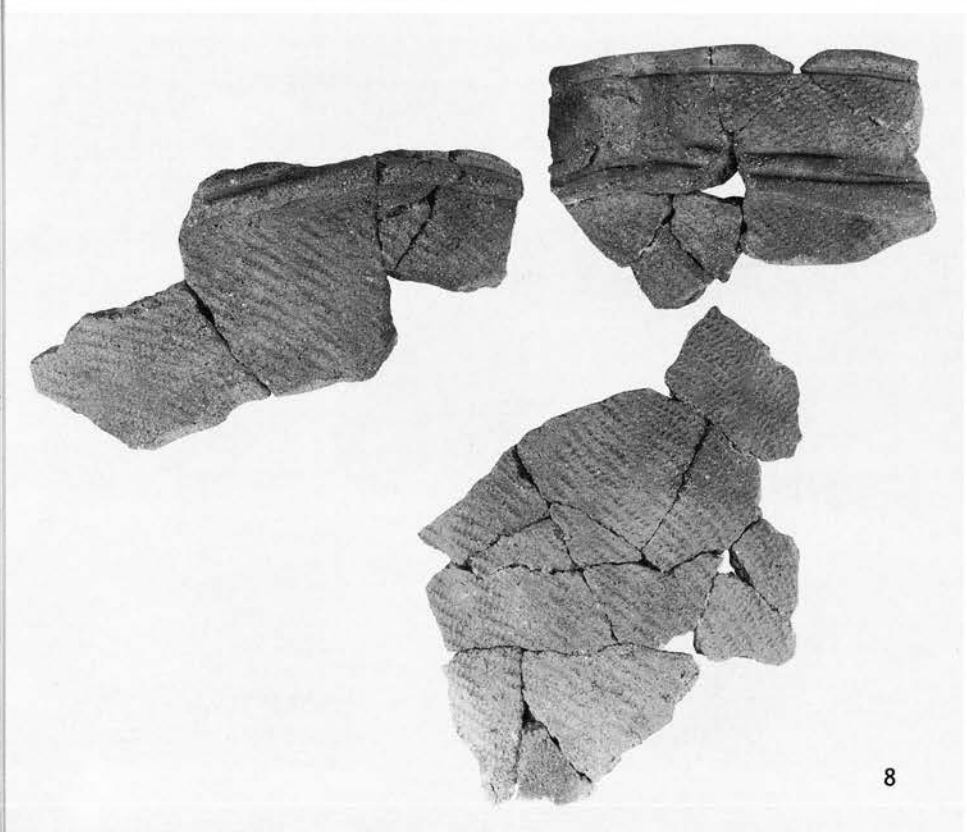


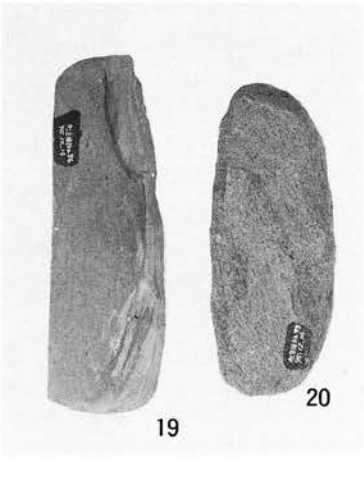


7号住
出土遺物

8号住
出土遺物







1

3

2

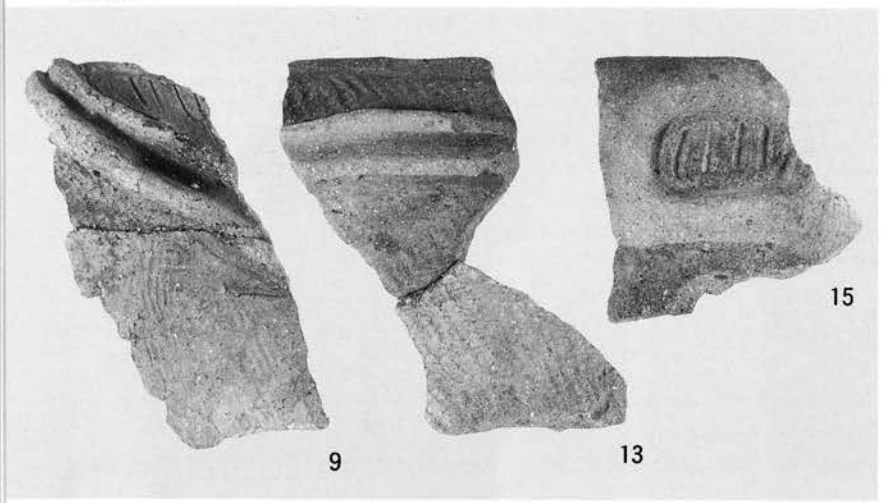
4

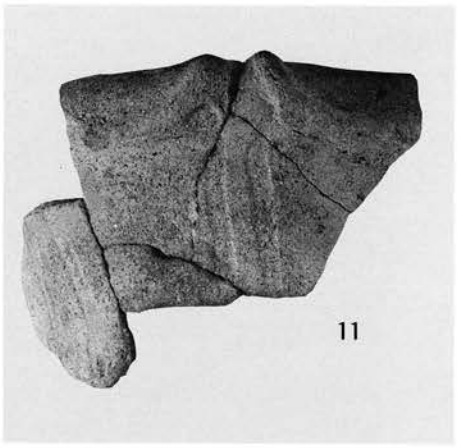
6

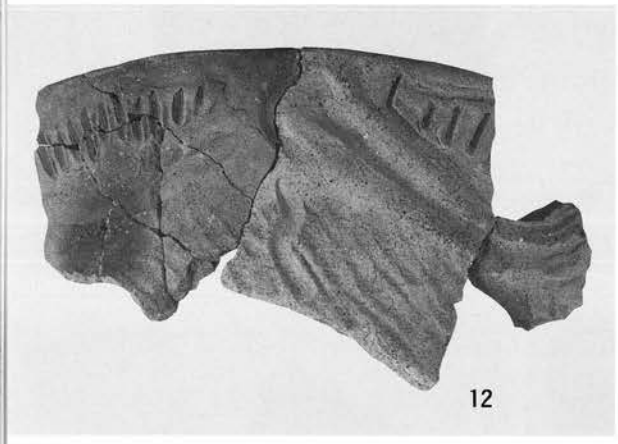
7

8

10

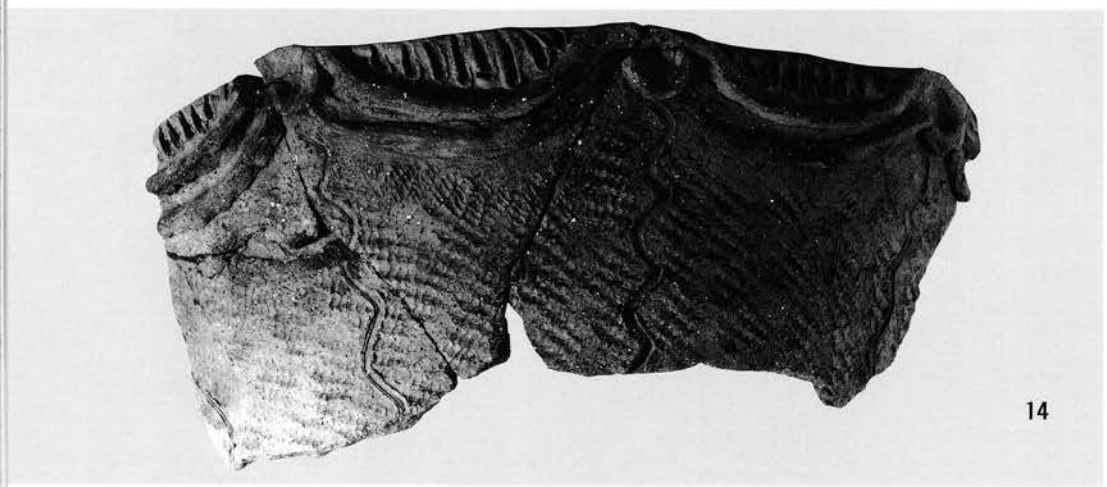

9
13
15

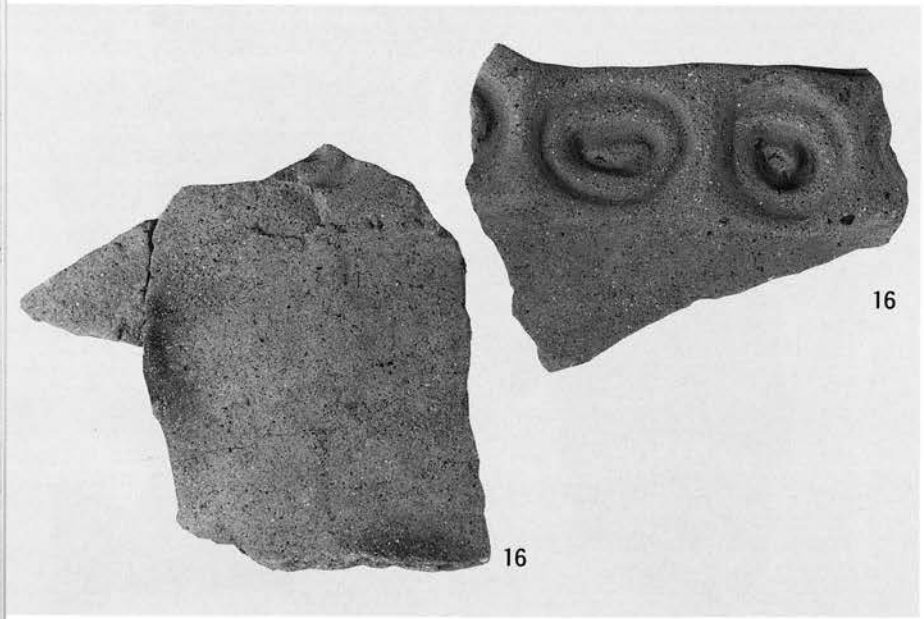

11


12

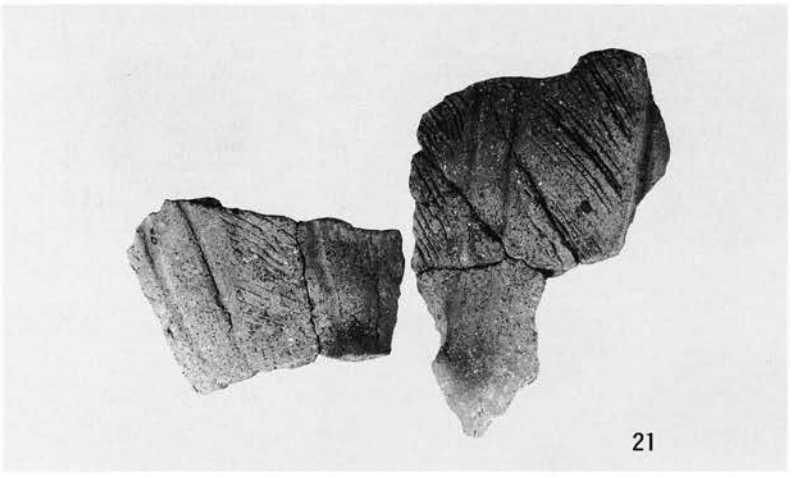
17

18

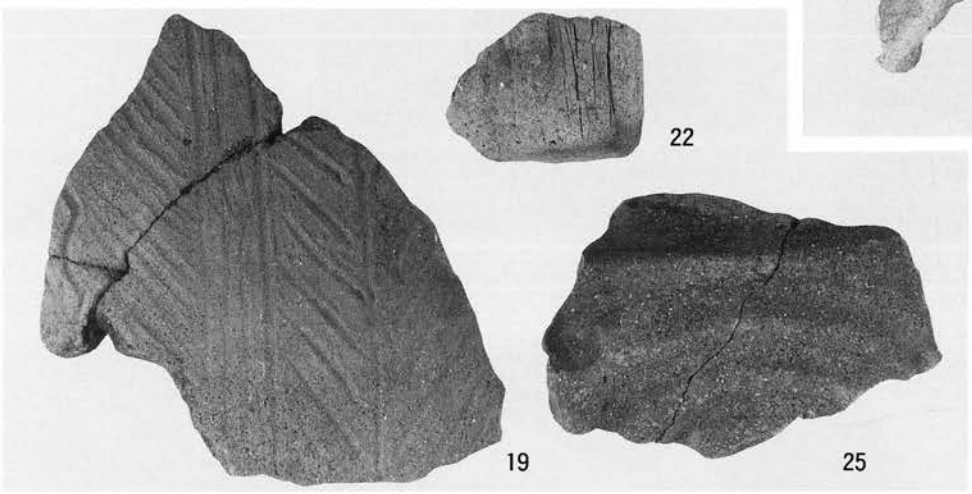

14

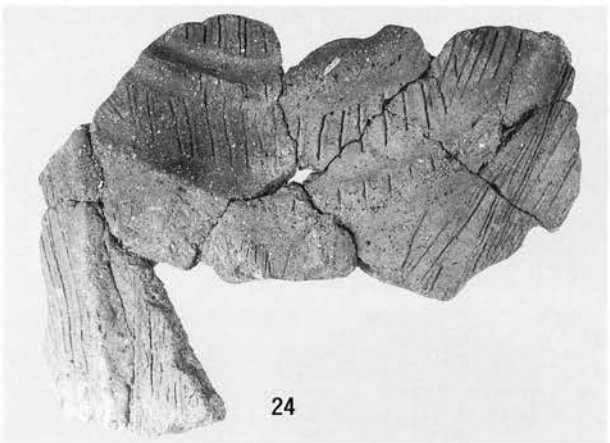

16
16

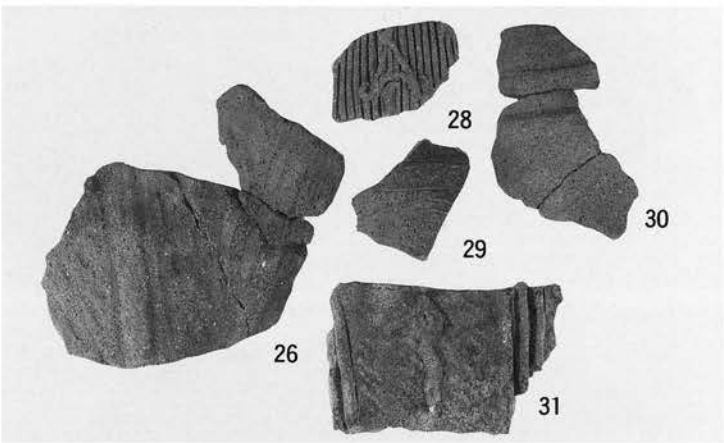
20

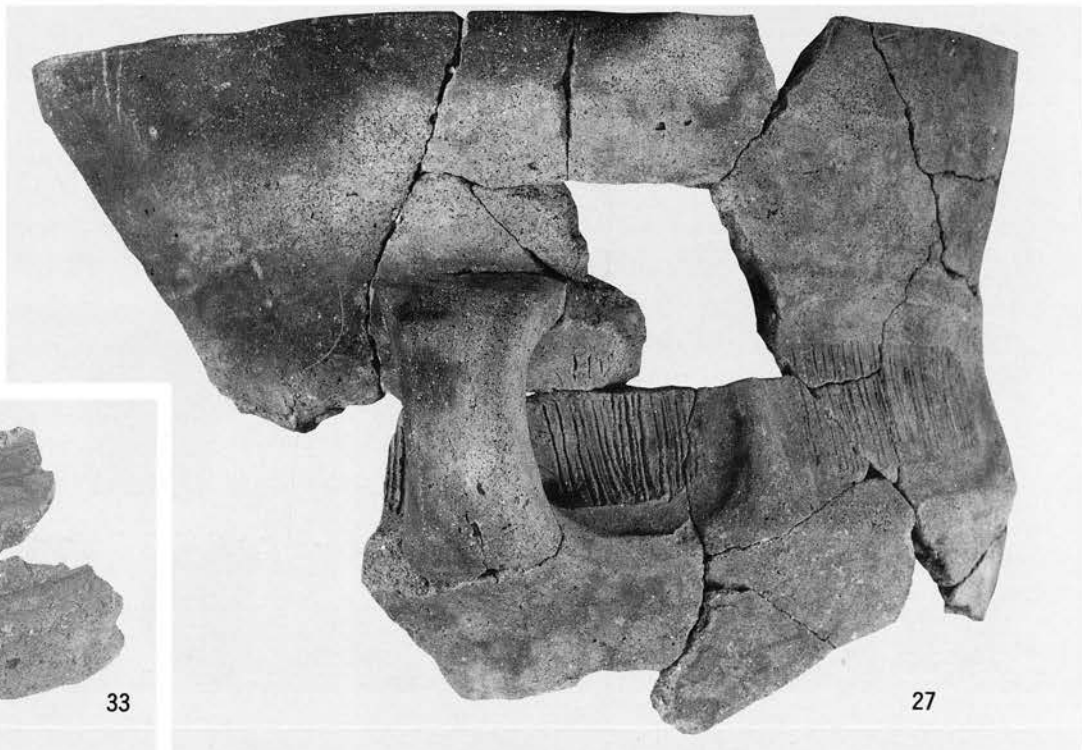

21

23

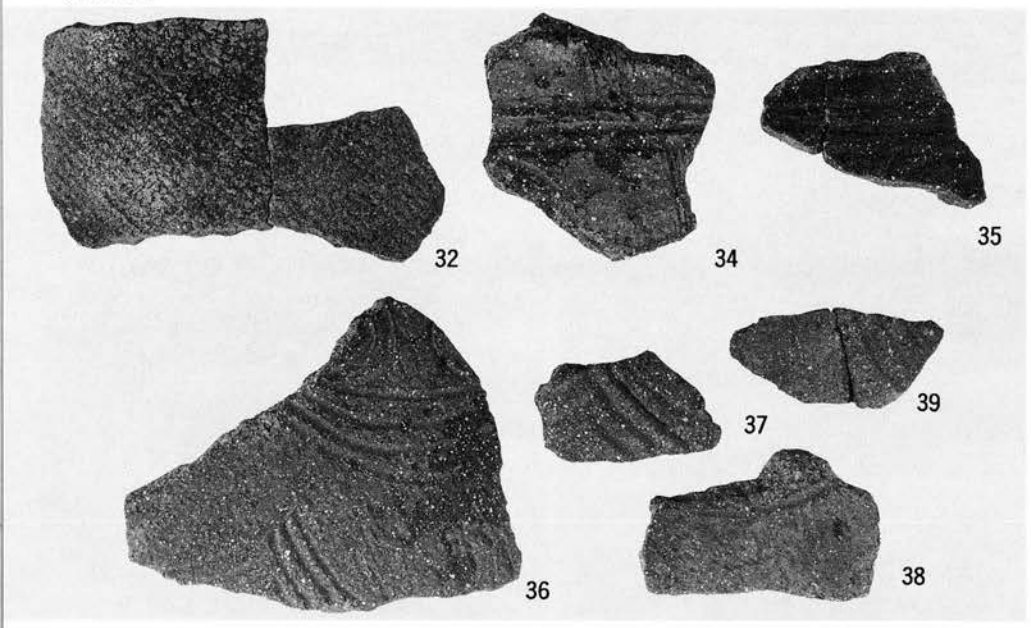

22
19
25


24

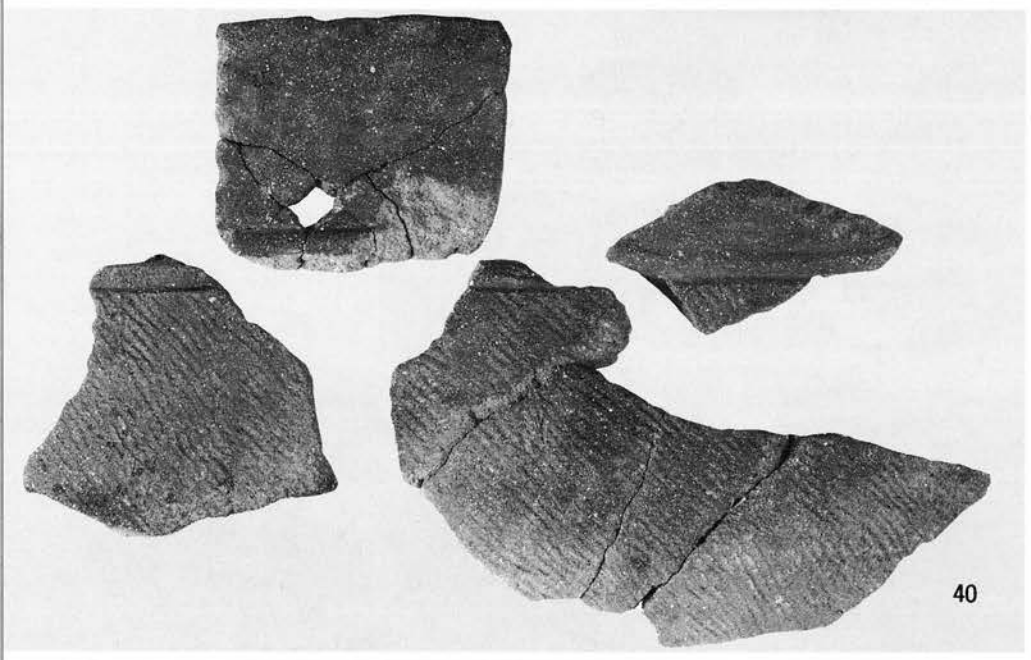

28
30
29
26
31

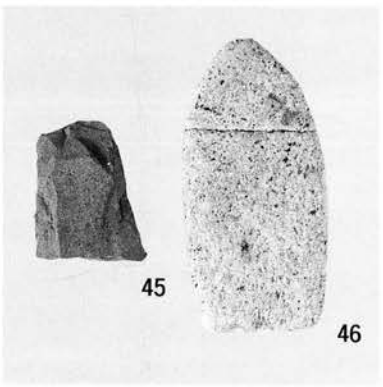

27

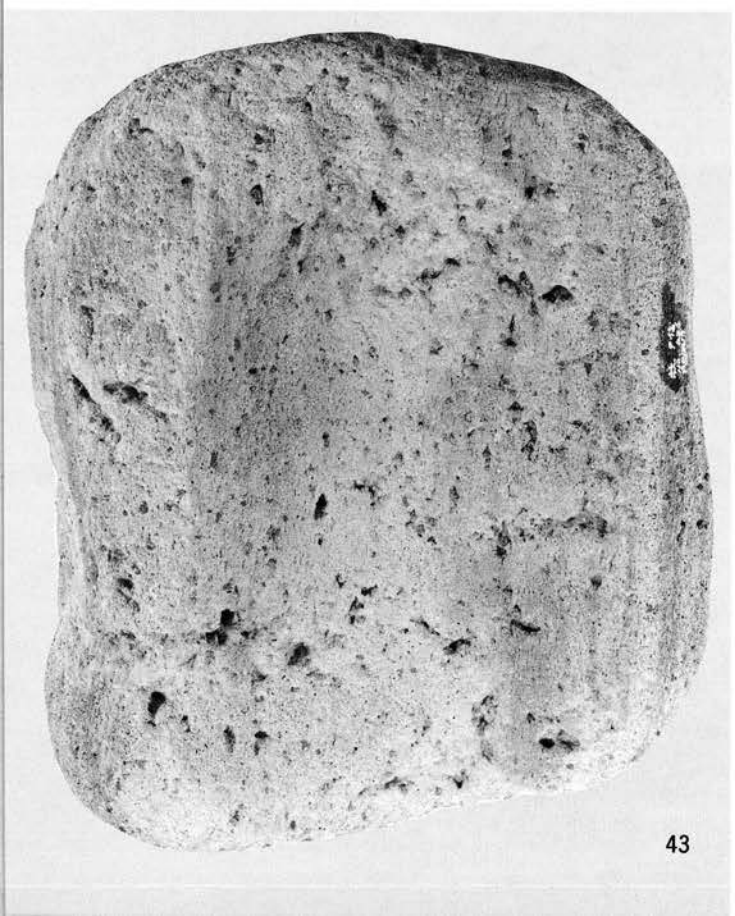
33

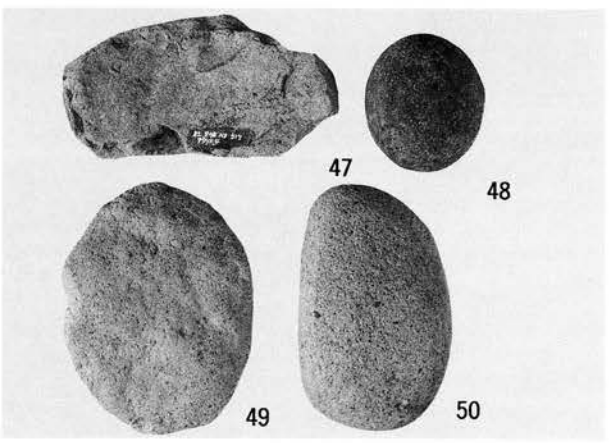

32
34
35
36
37
38
39

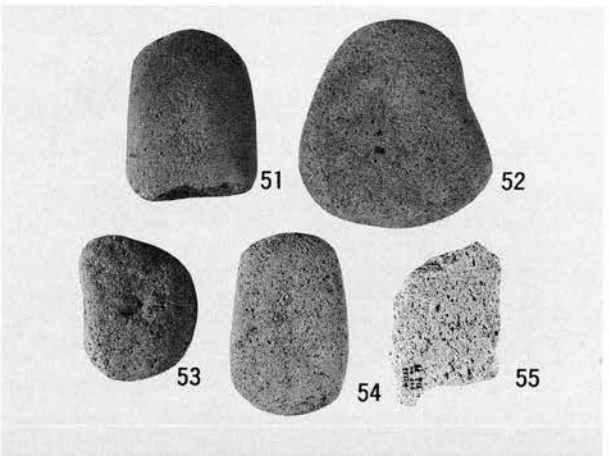
41


40

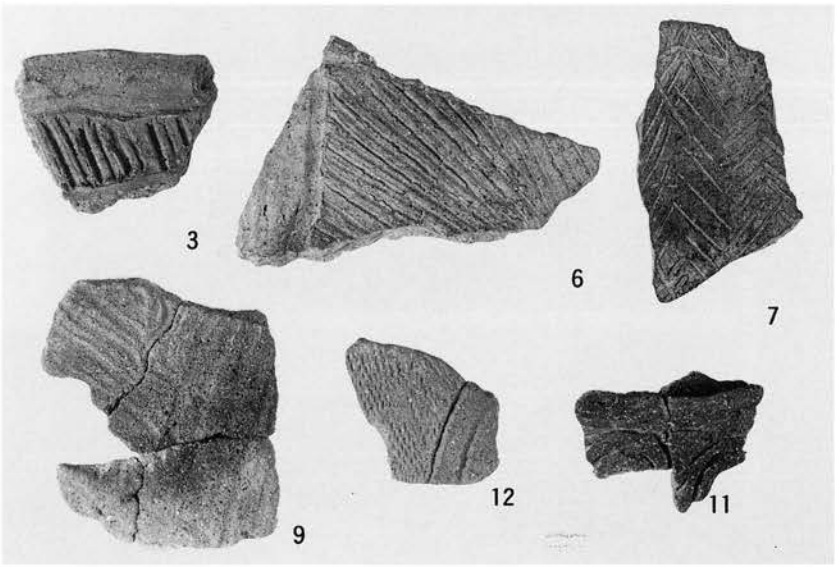

45
46


43

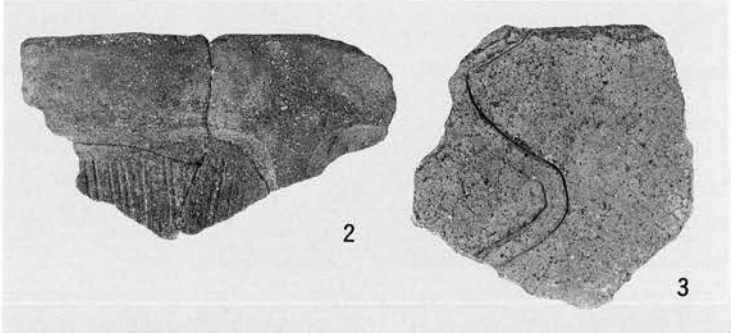

47
48
49
50


51
52
53
54
55

10号住出土遺物

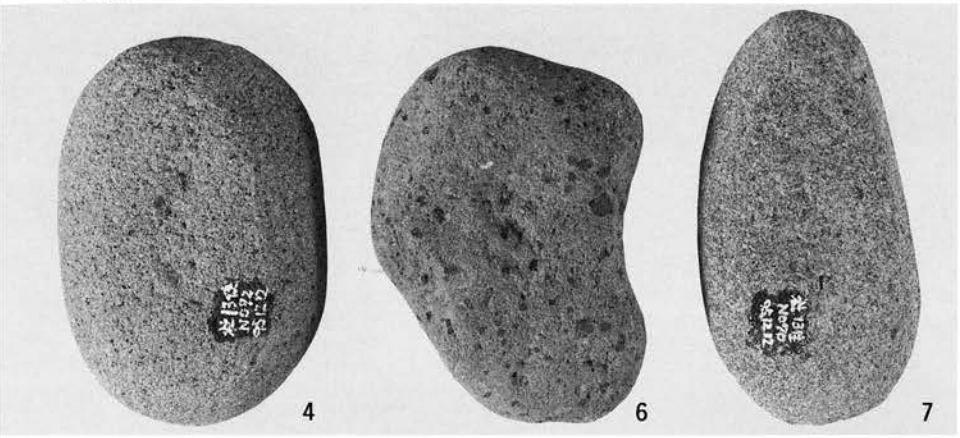


13号住出土遺物

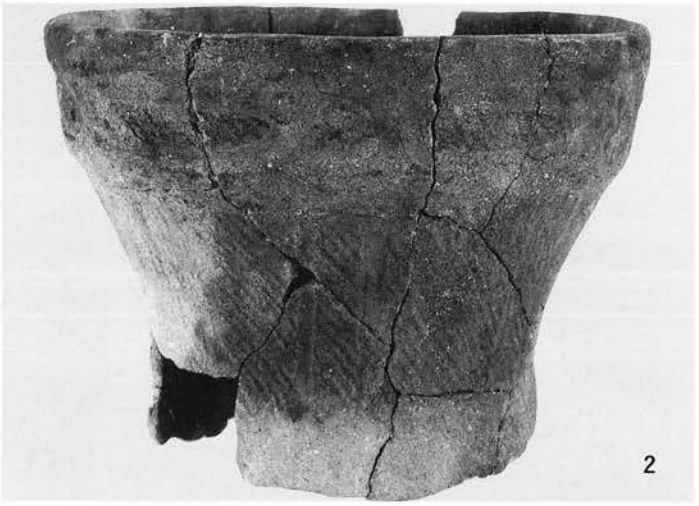


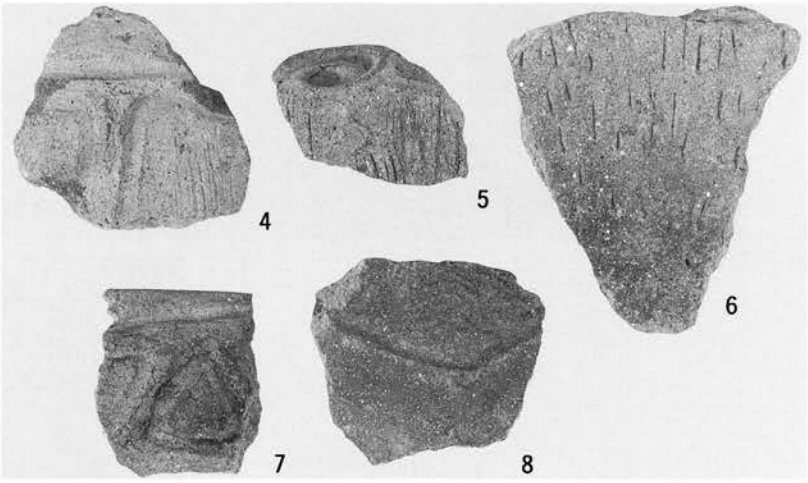
図版66

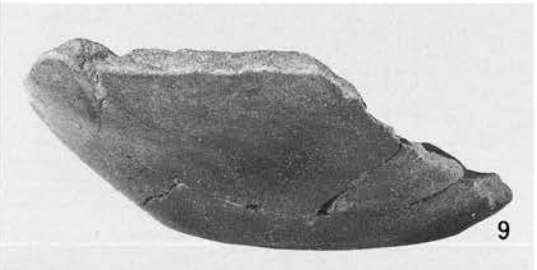
13号住出土遺物

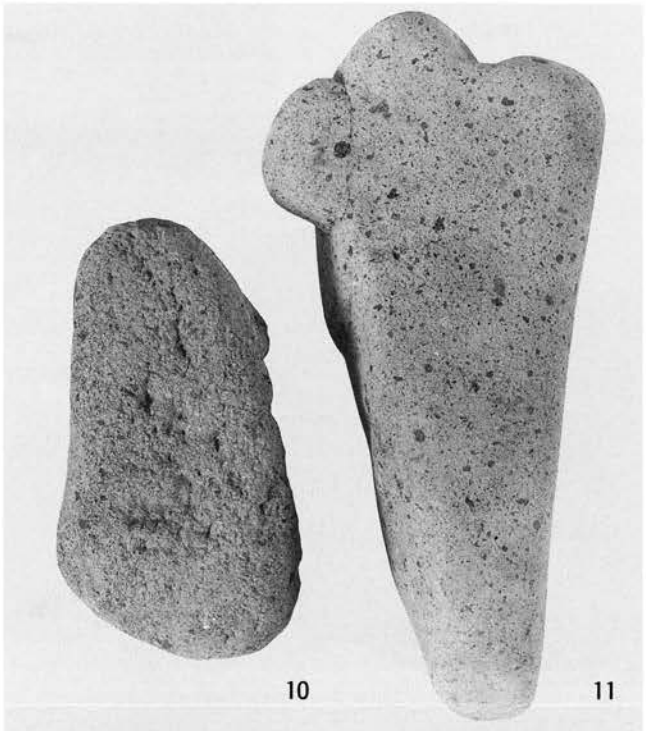


14号住出土遺物









27号住出土遺物

1

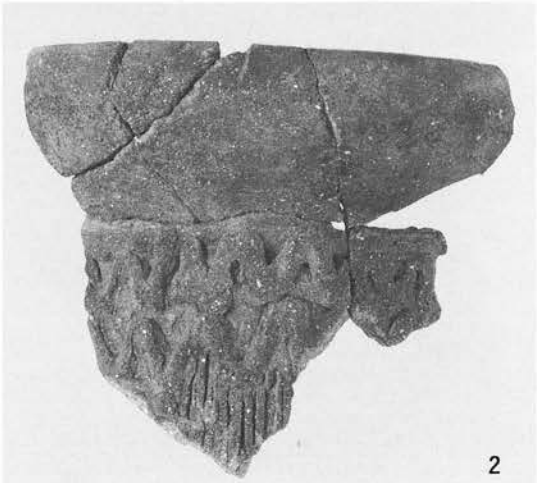
1

28号住出土遺物

1

1

1

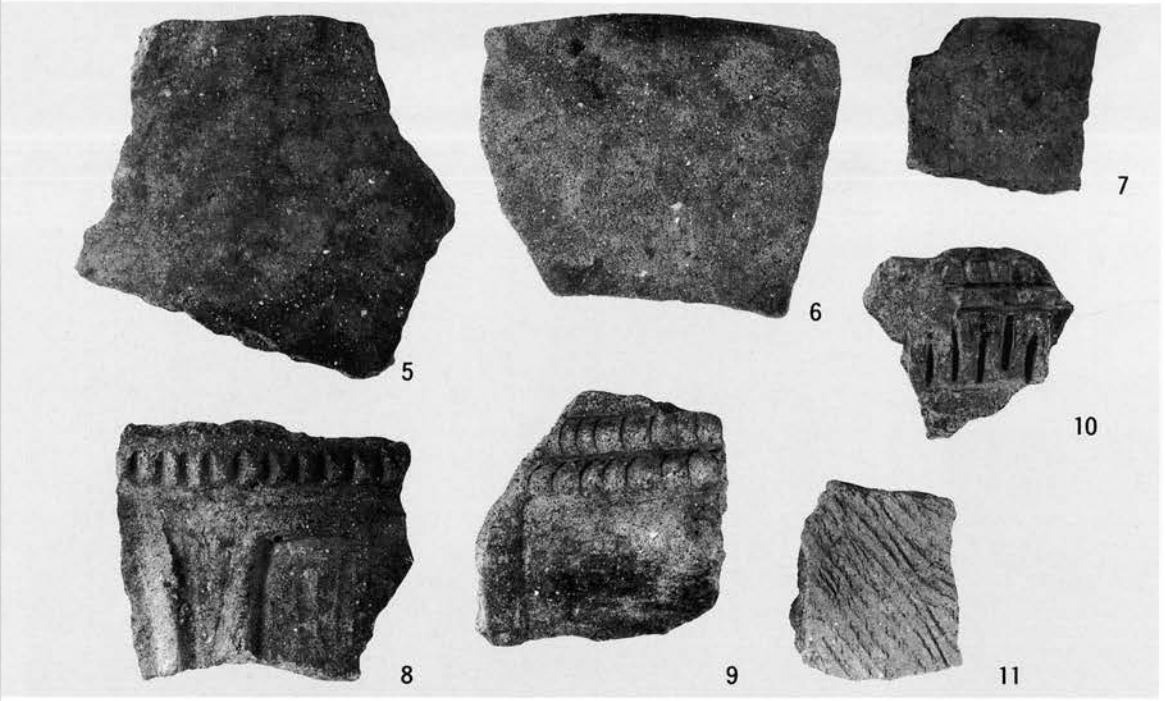

2

図版68

28号住出土遺物

3

4


5

6

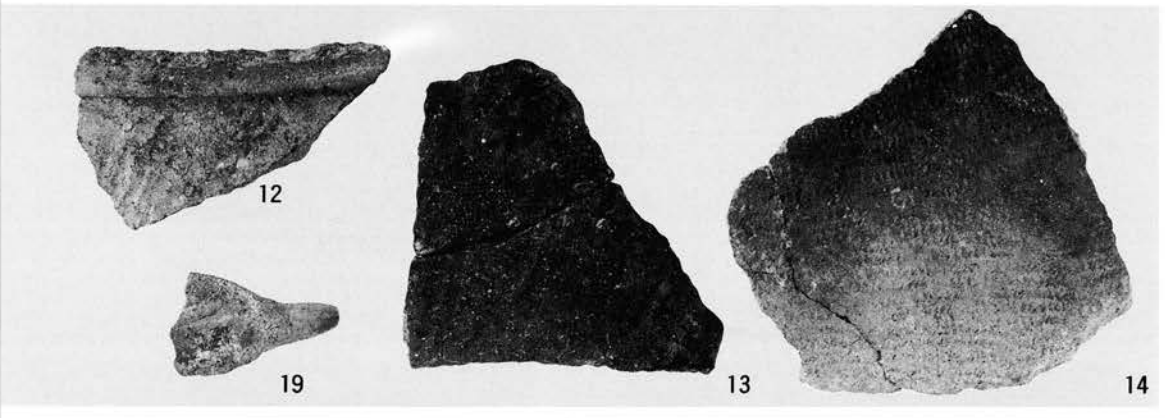
7

10

8

9

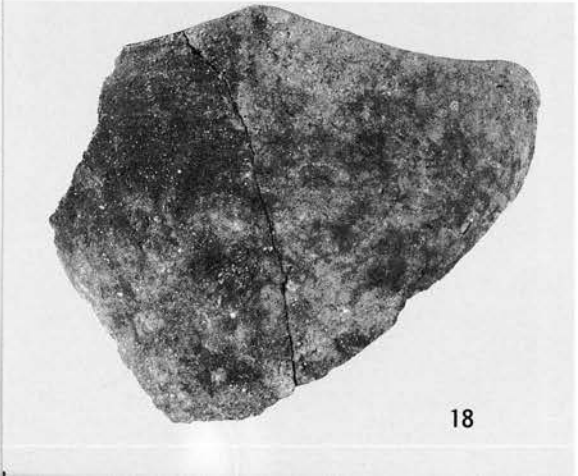
11

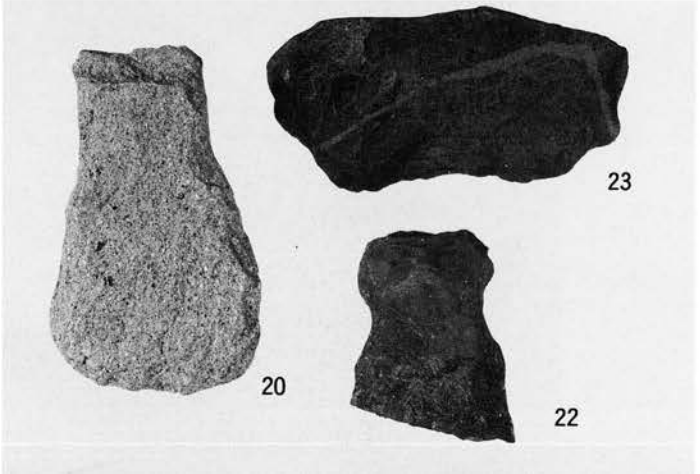

12

19

13

14


18


20

23

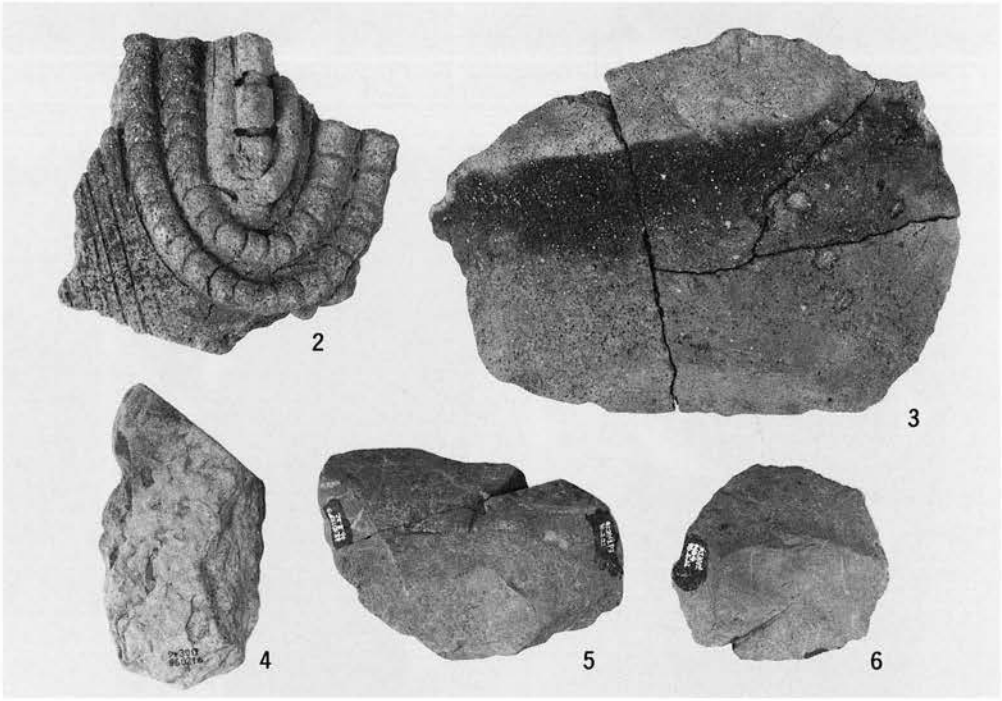
22

30号住出土遺物

1

1

9


2

3

4

5

6

31号住出土遺物

1

4

2

図版70

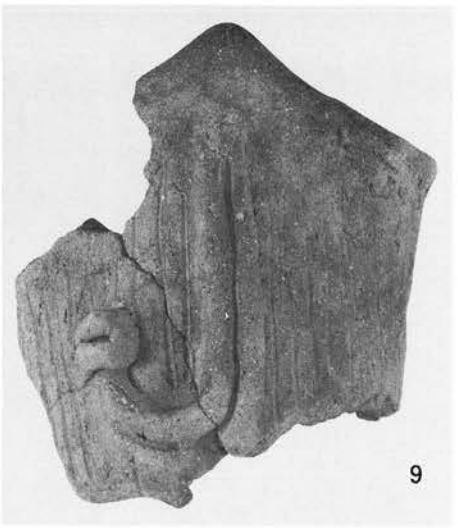
31号住出土遺物

3

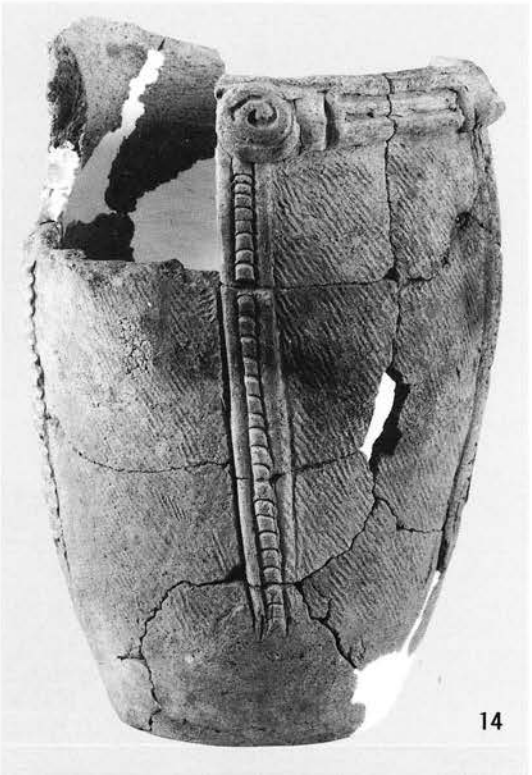
3

5

7


9

18


14

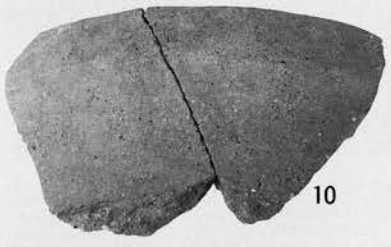
31号住出土遺物

6

8

16

17

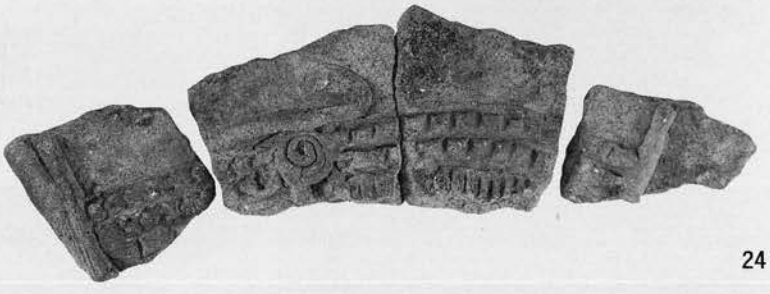

10

12

13

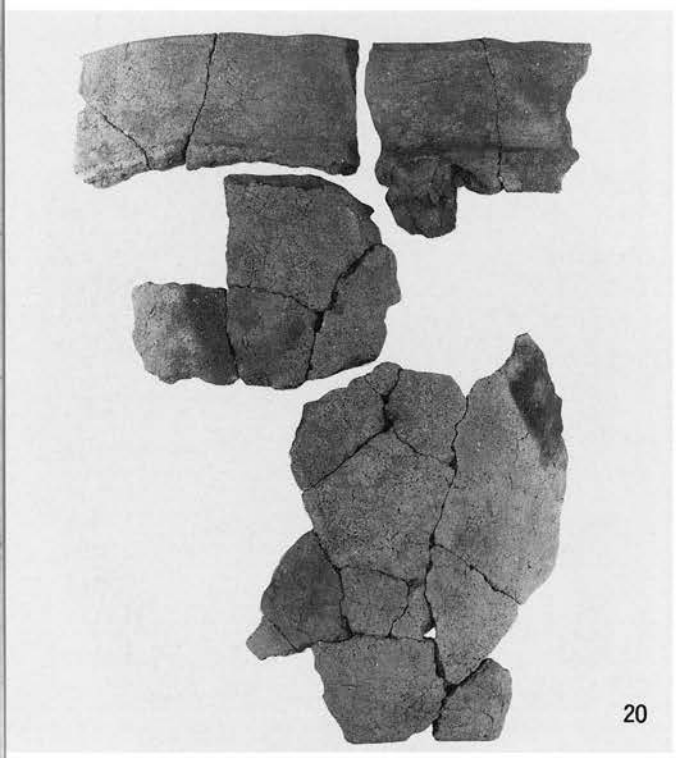
22

25


24

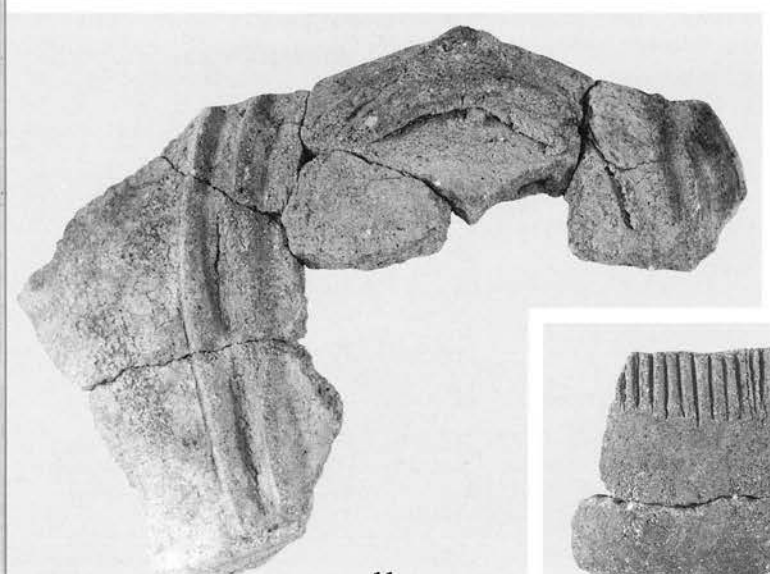
19

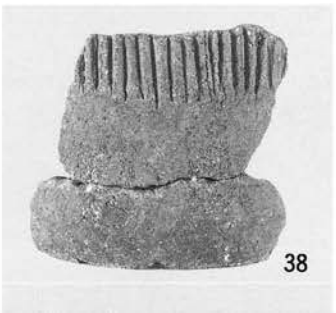
21

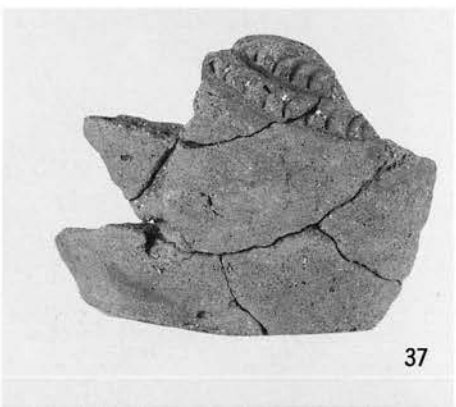

20

23

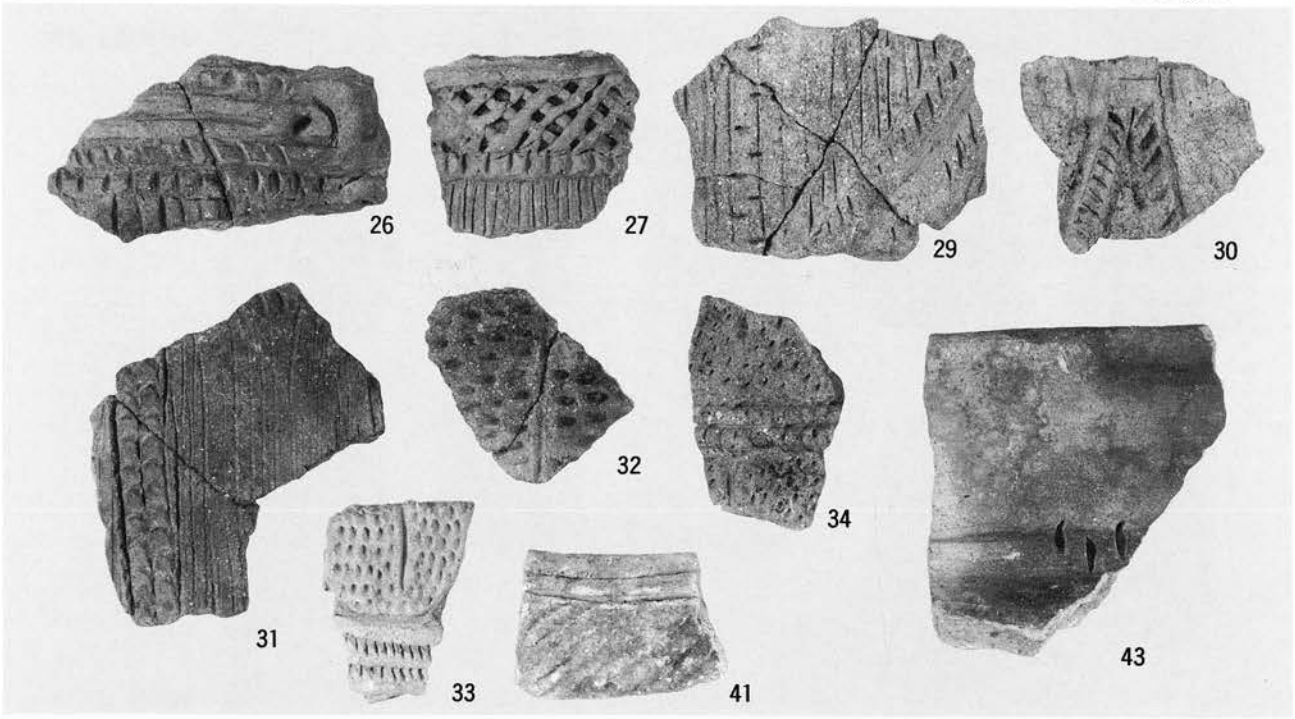
28

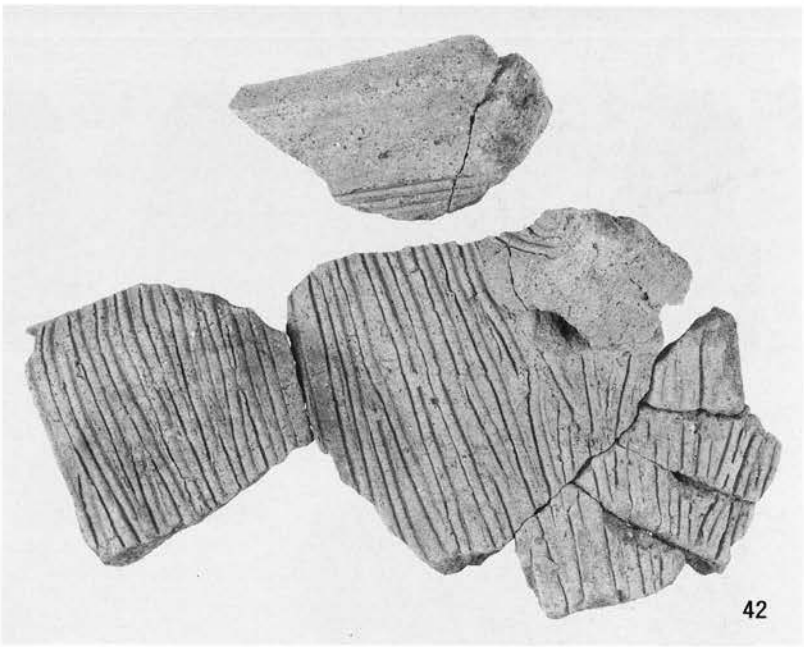

11

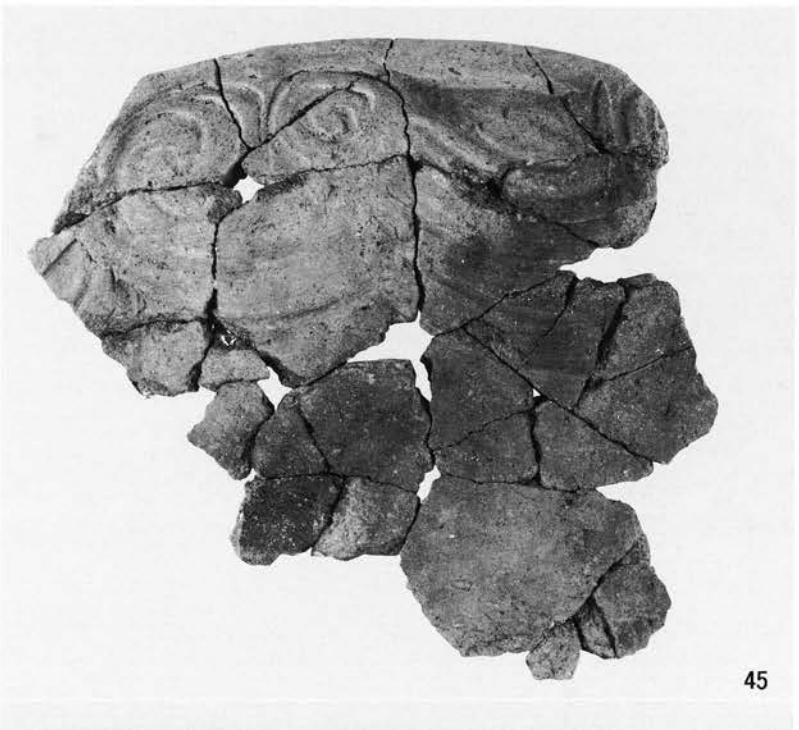

38


37

31号住
出土遺物

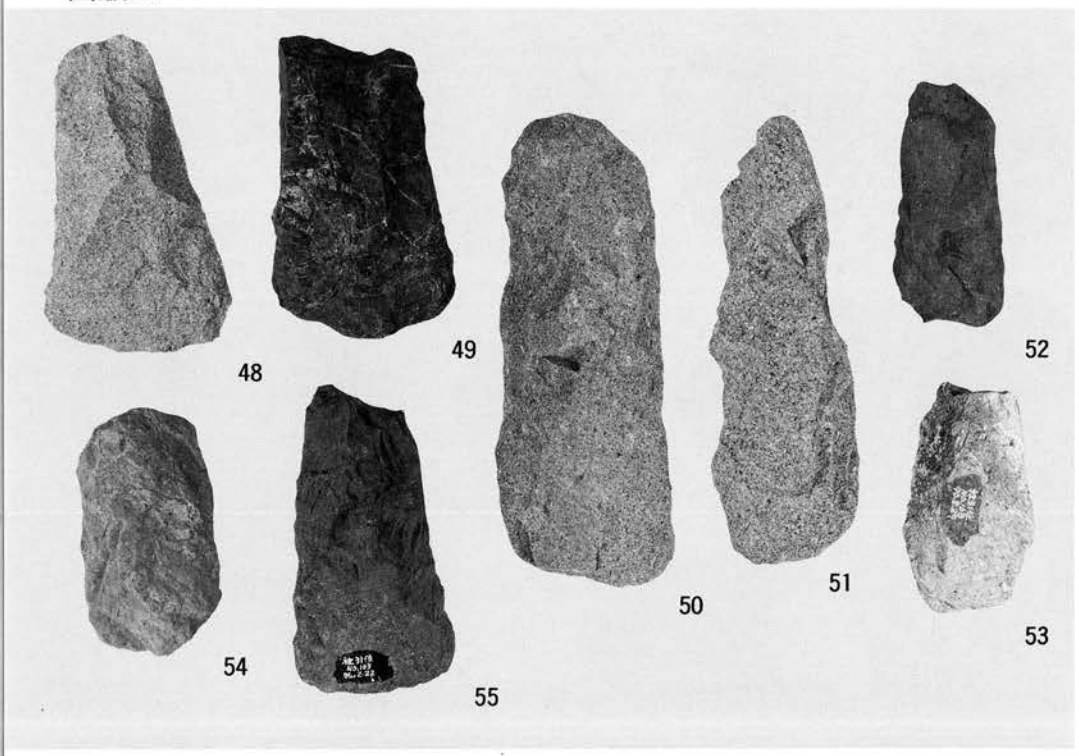


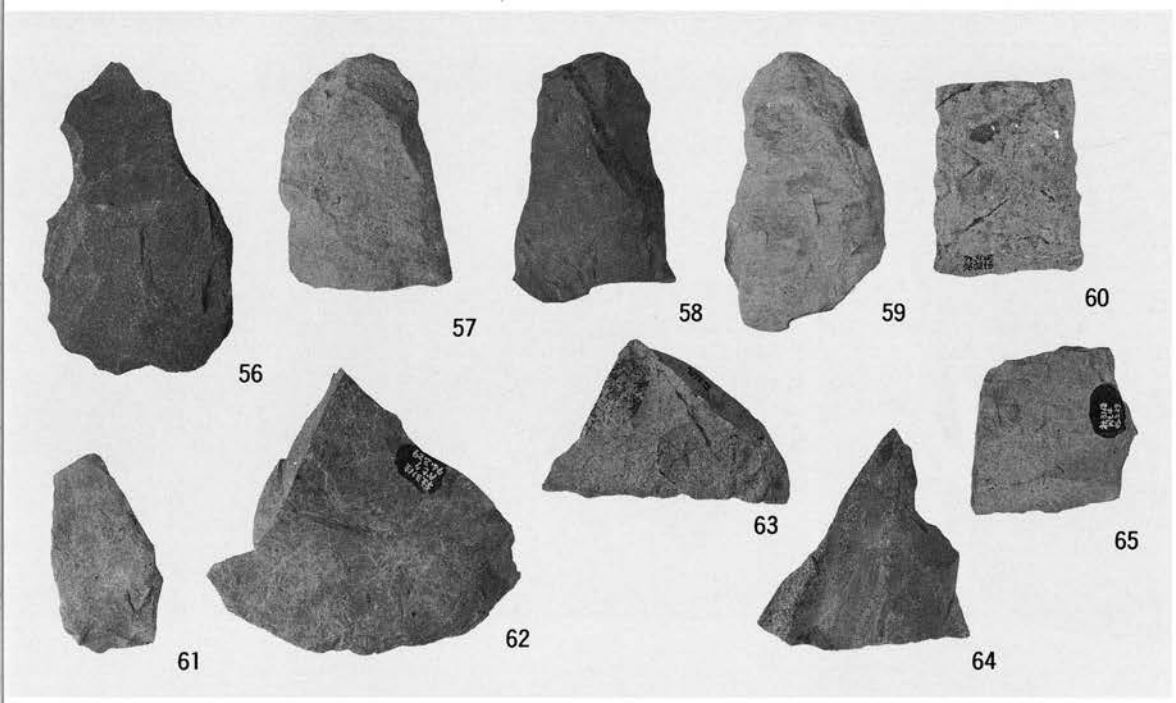


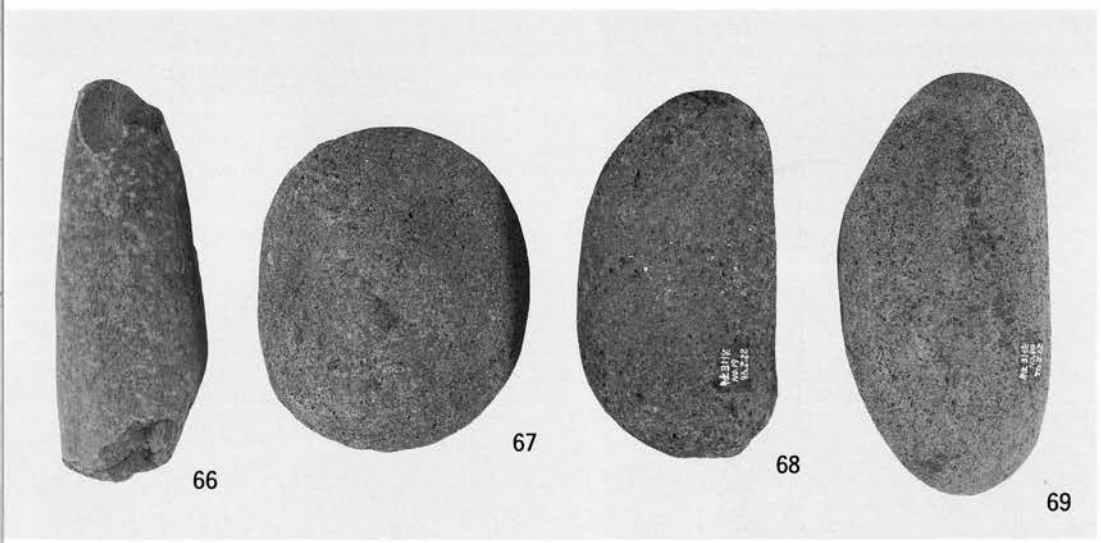


図版74

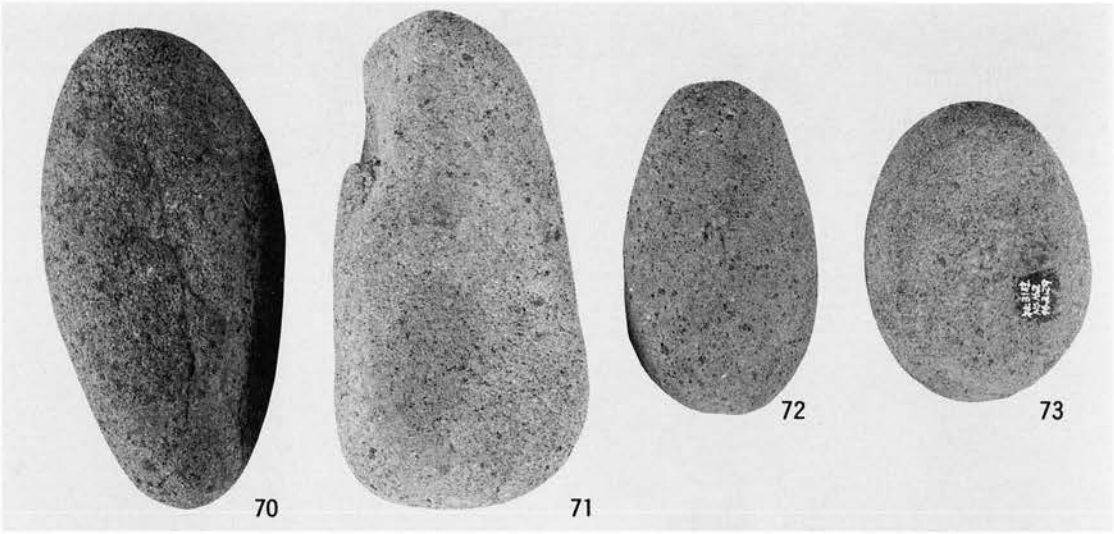
31号住出土遺物

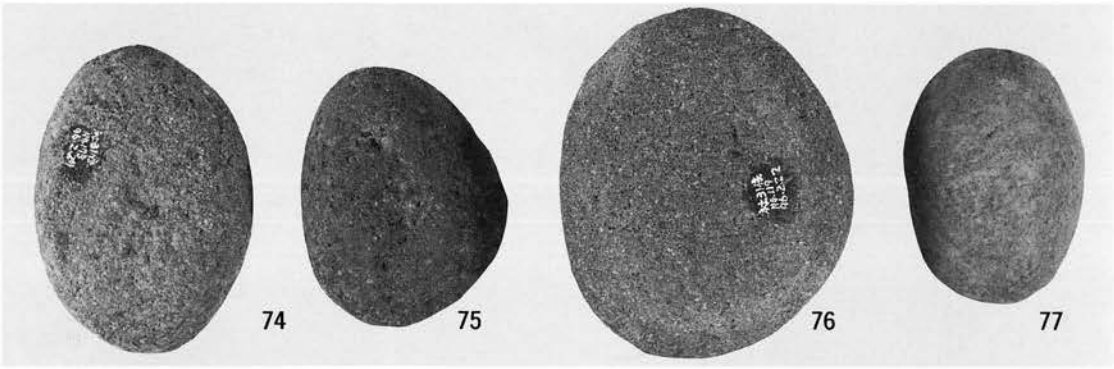






31号住出土遺物



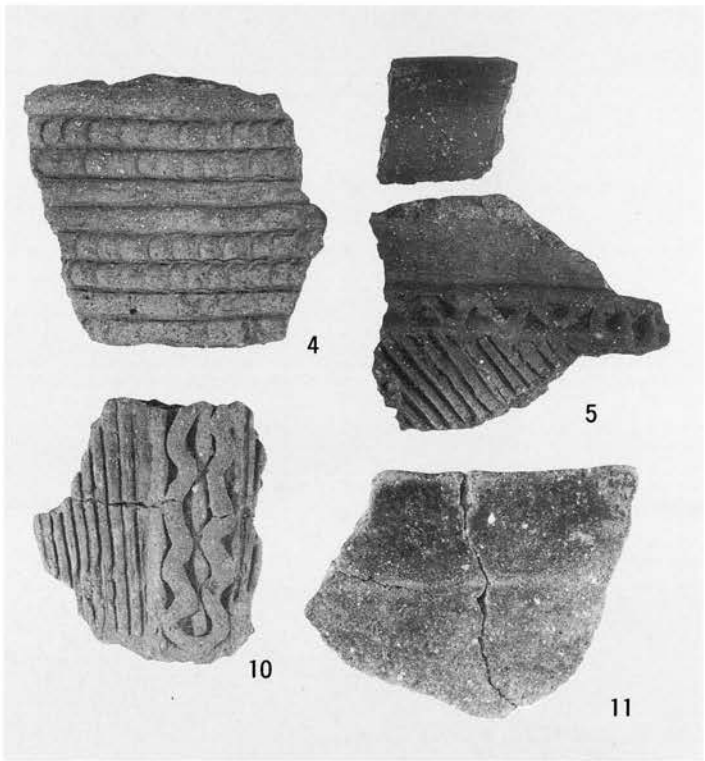


32号住出土遺物

1

1

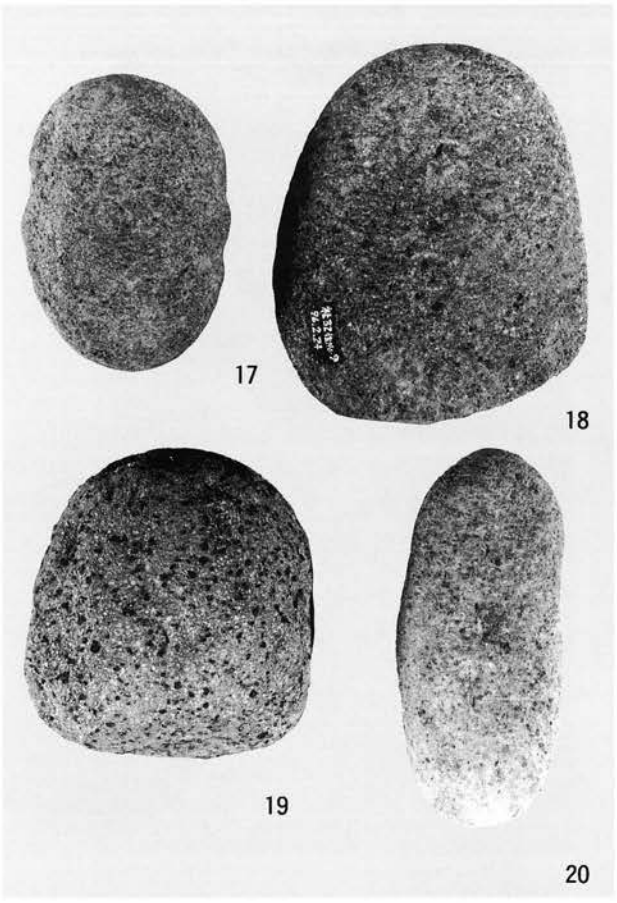
9

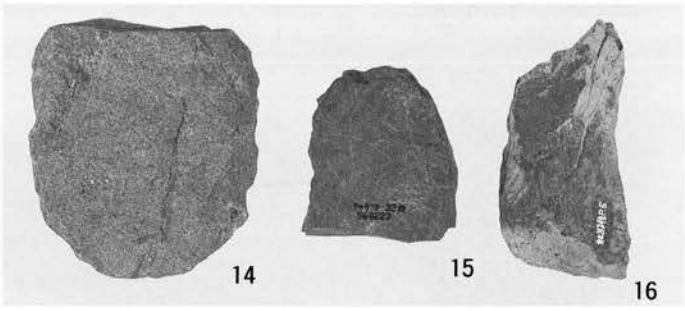

4
5
10
11

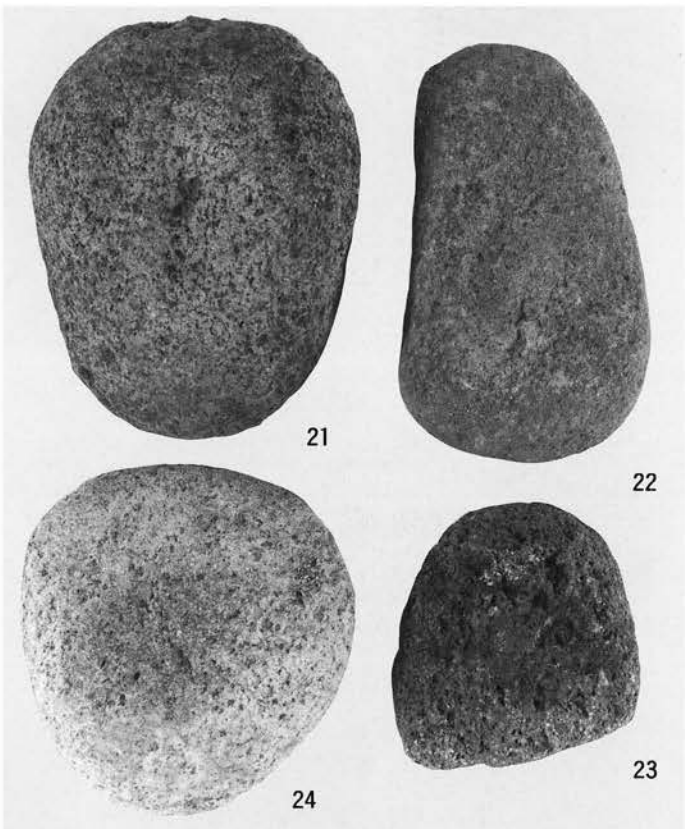
32号住出土遺物

6

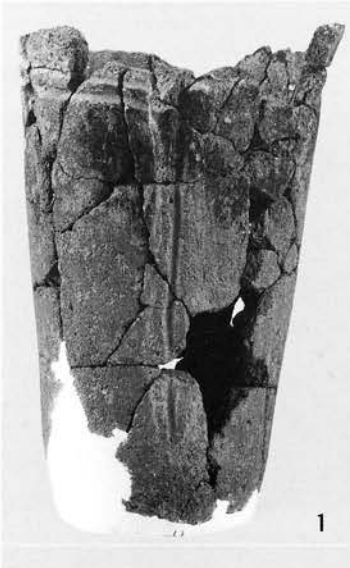
8

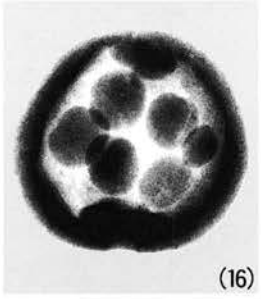

17
18
19
20

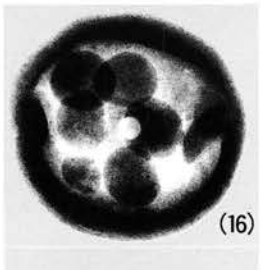

14
15
16

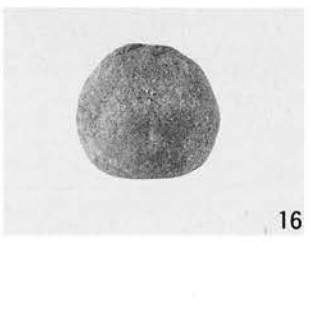

21
22
23
24

33号住
出土遺物


1


(16)


(16)


16

16のX線写真

15

33号住出土遺物

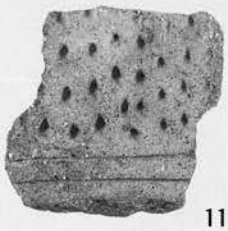
6

7

8

9

10


11

12

2

3

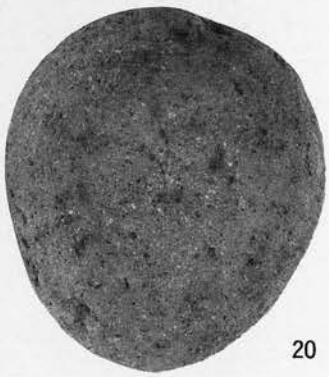
4

5

17

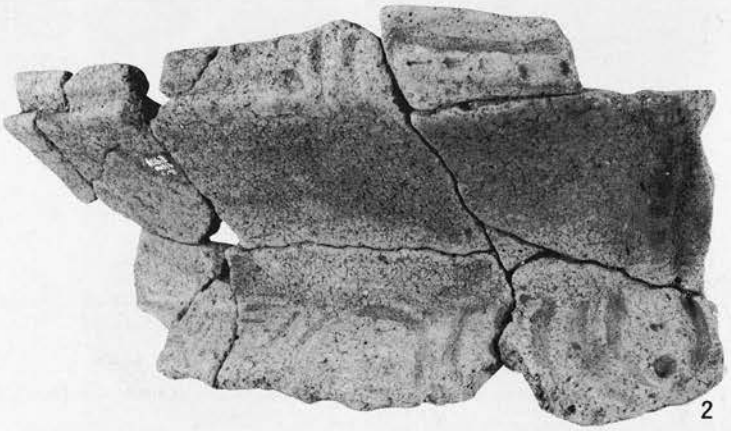
18

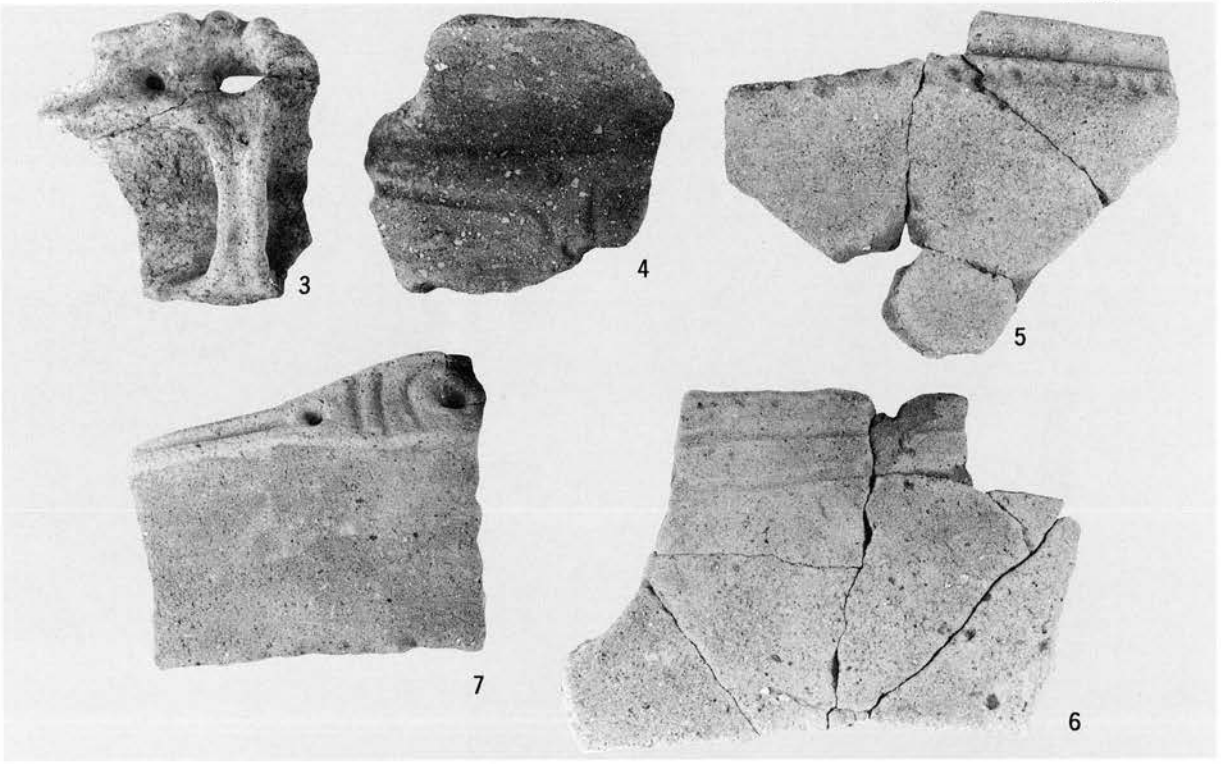
19

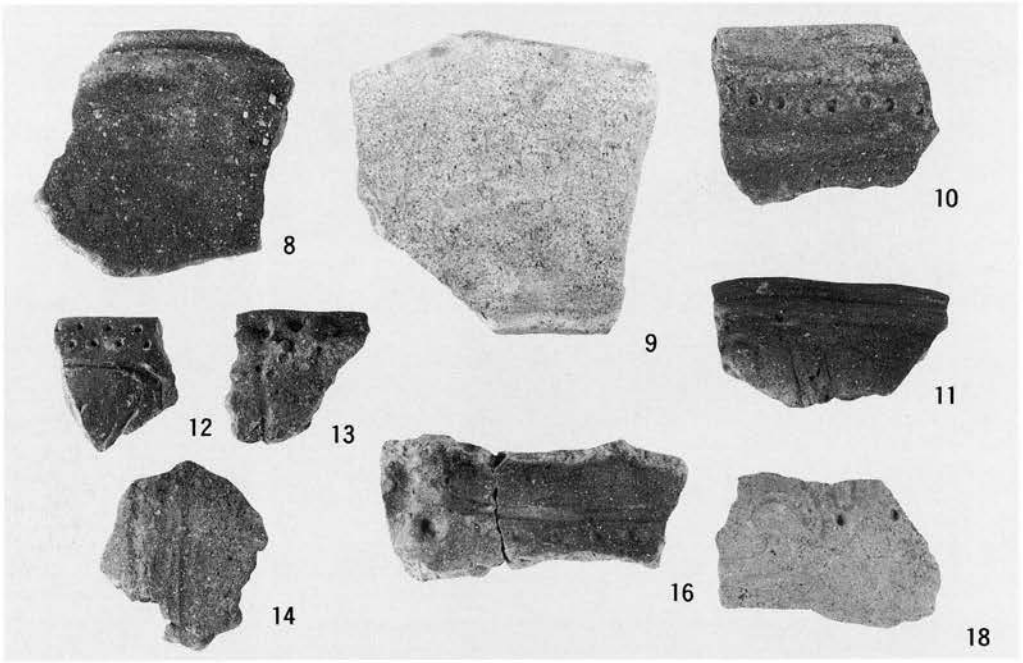

20

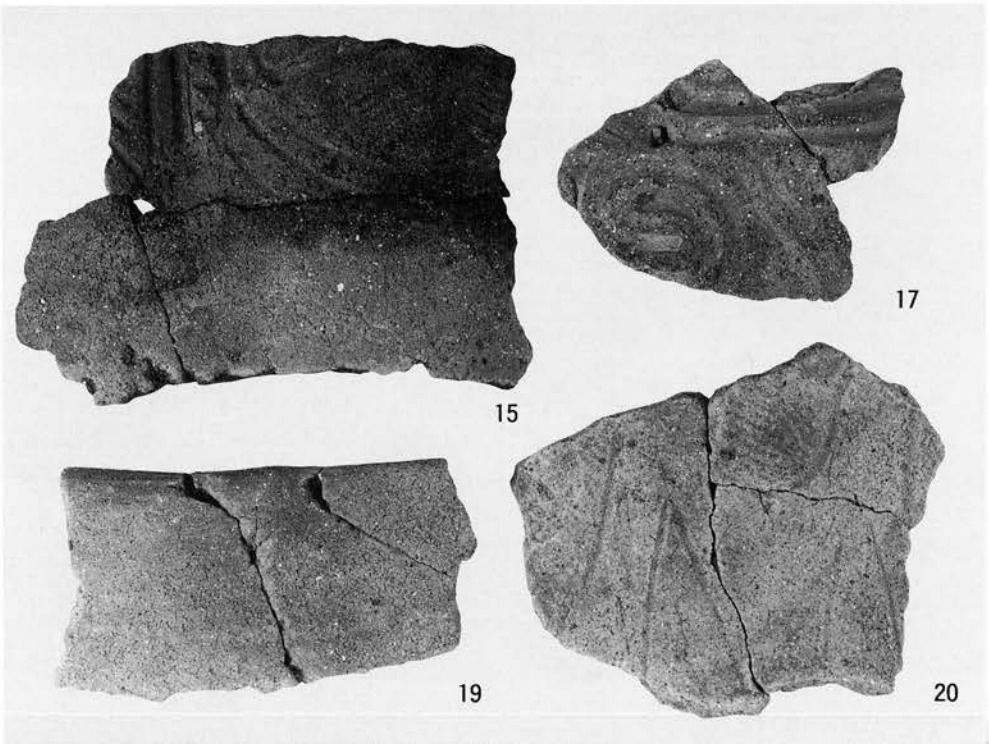
1

16号住出土遺物


2

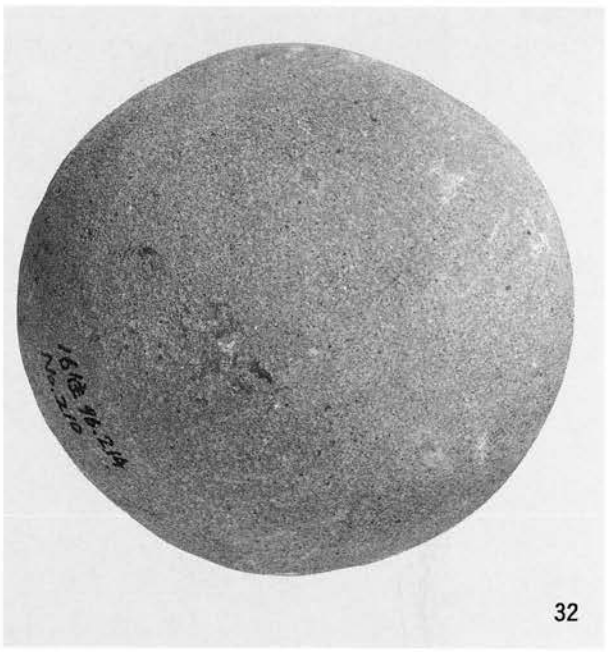

3
4
5
7
6

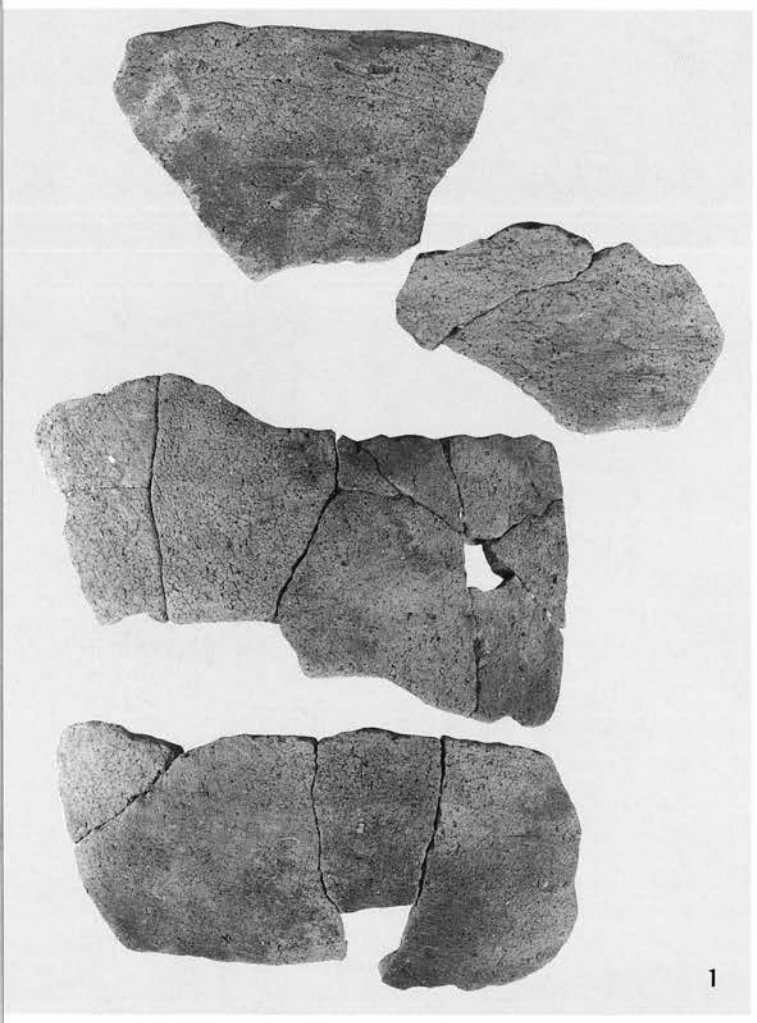

8
9
10
12
13
11
14
16
18


15
17
19
20

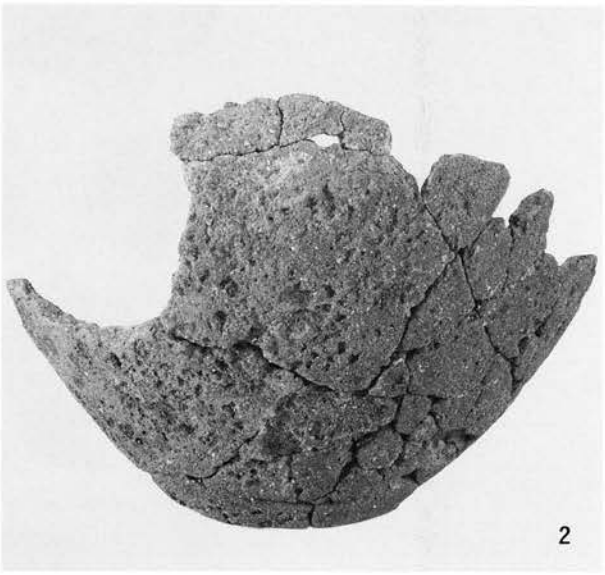
16号住出土遺物

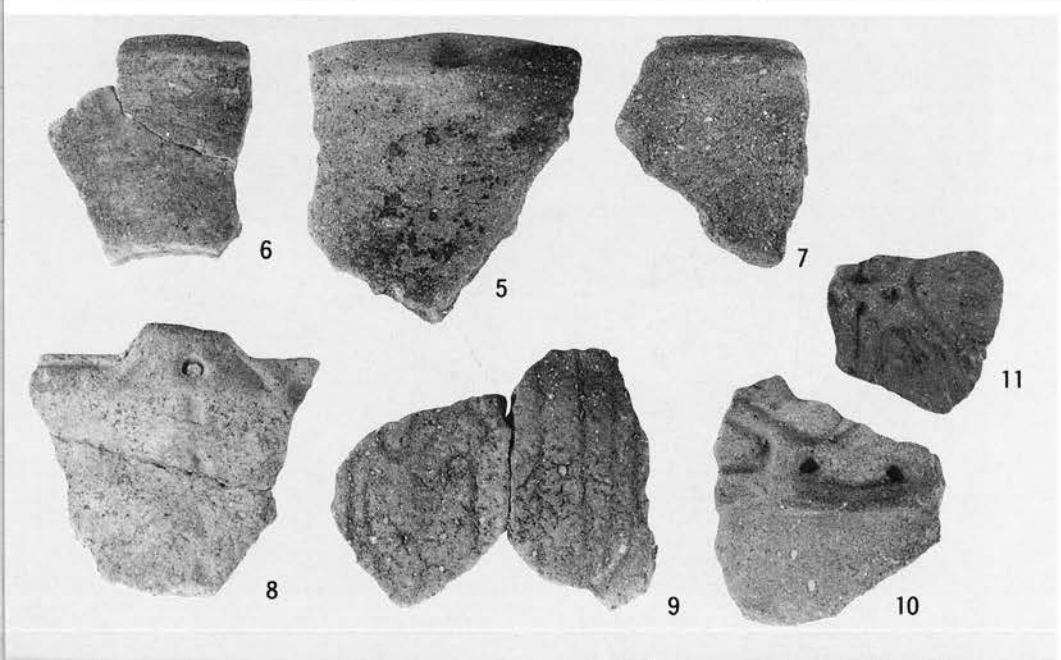
24


32


1

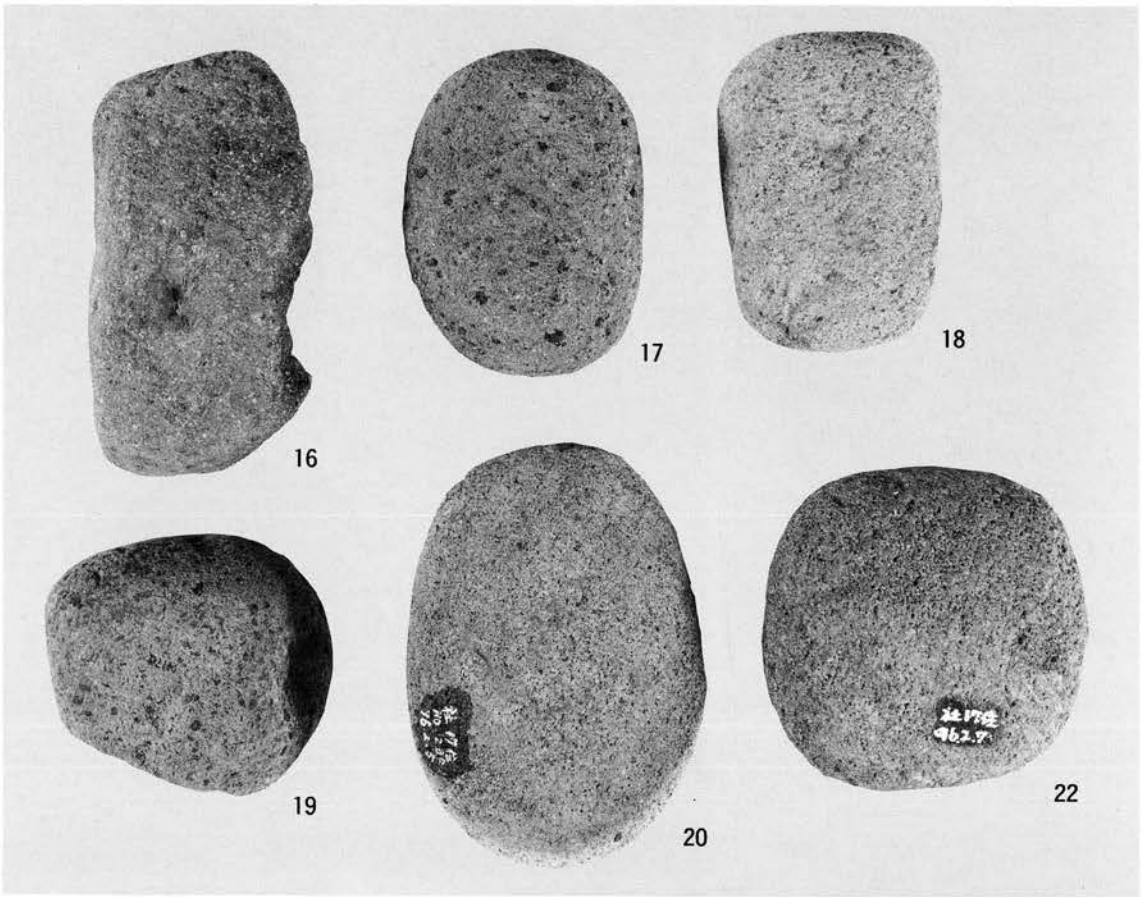
17号住出土遺物

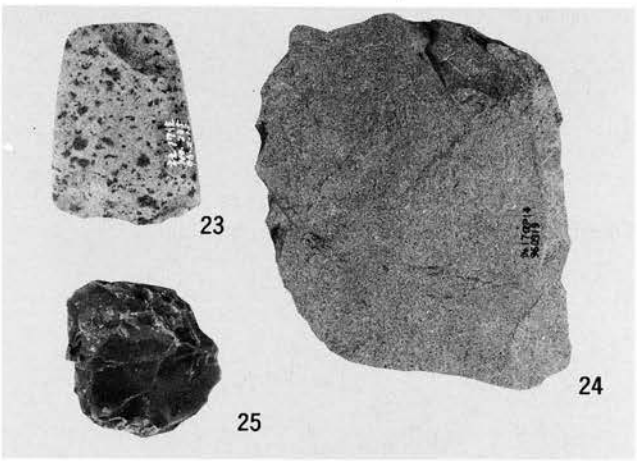

2


6
5
7
11
8
9
10

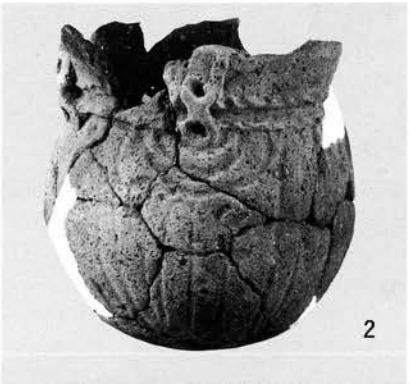
12

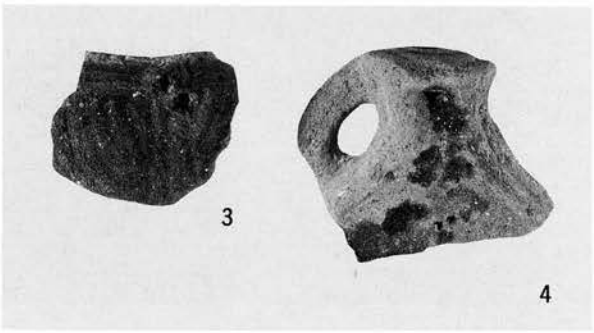
17号住出土遺物



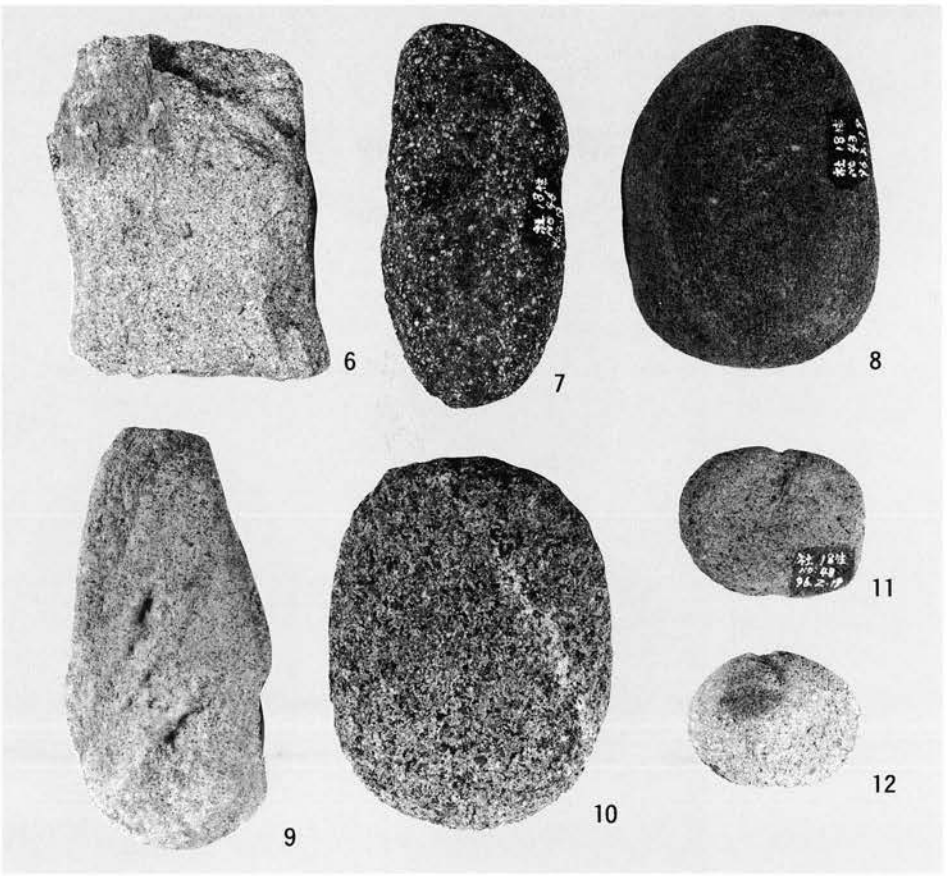


18号住出土遺物





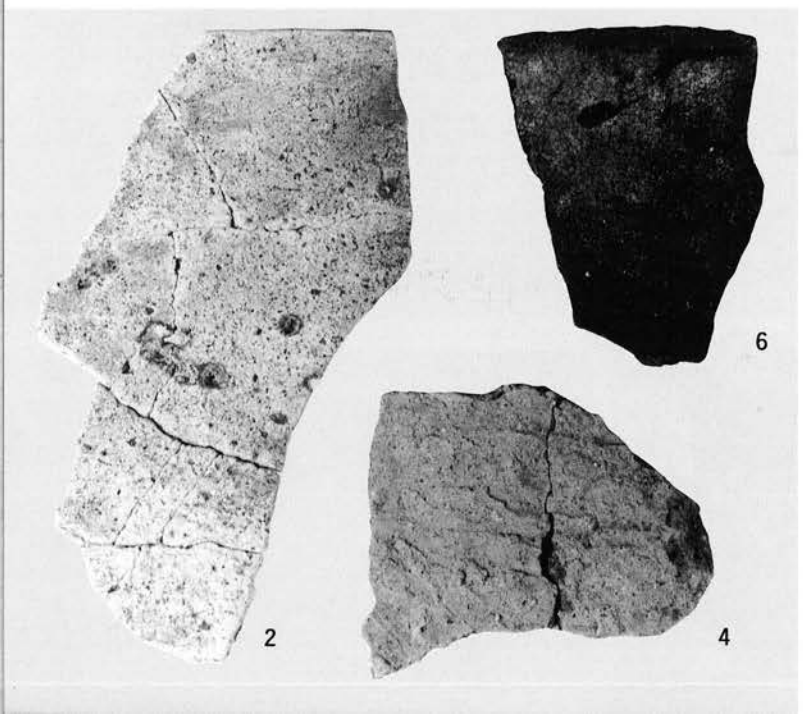
5


6 7 8 9 10 11 12

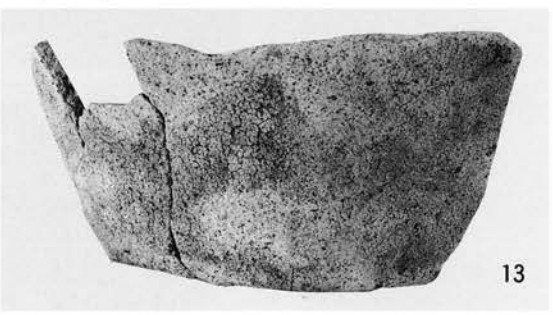
1

19号住
出土遺物

5

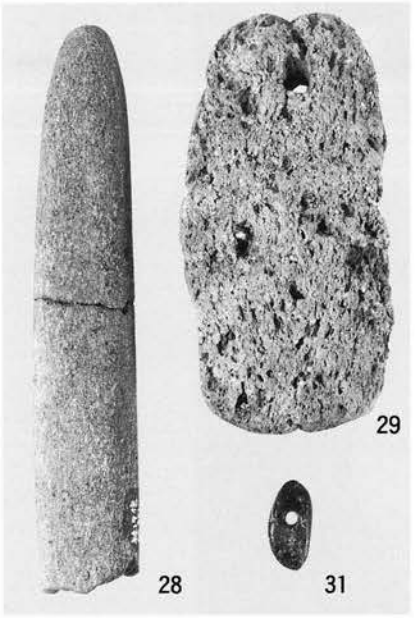

2 4 6

10


13

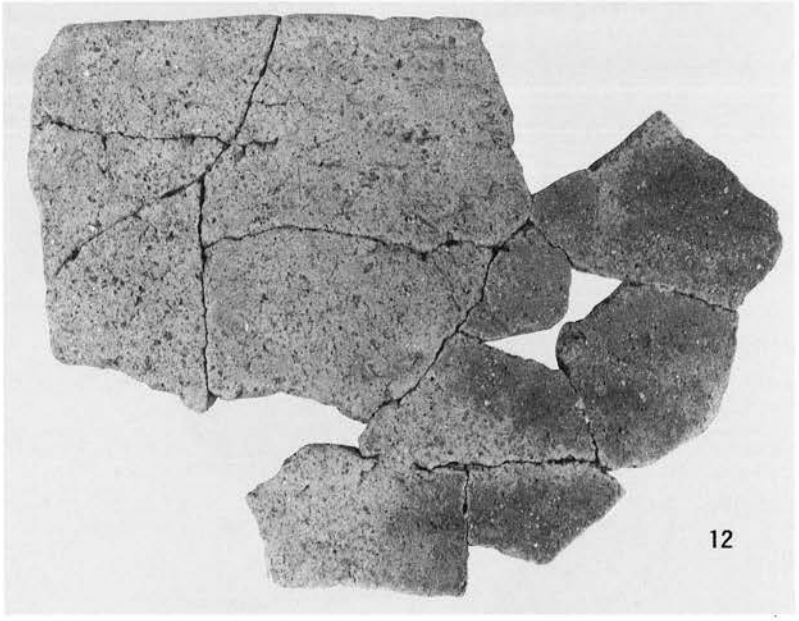
9

9


28

29

31


12

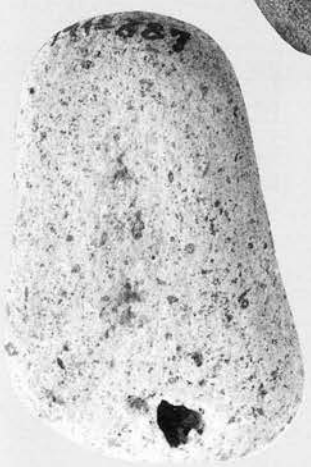
19

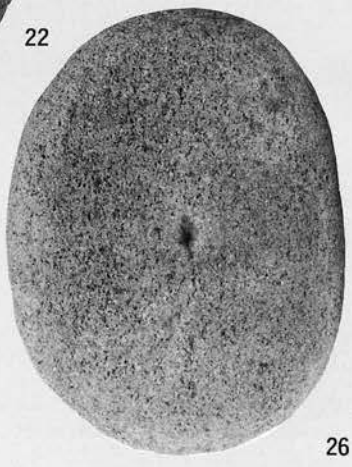
20

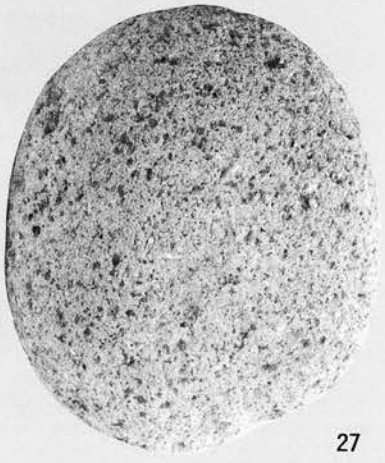
22

23

24

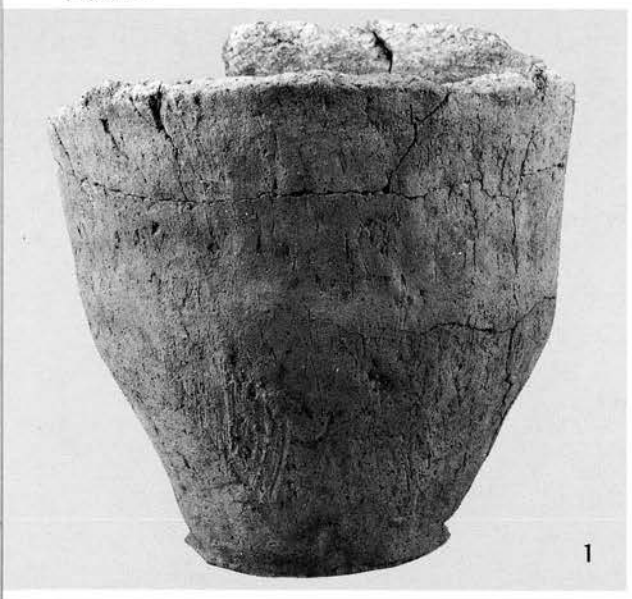

25

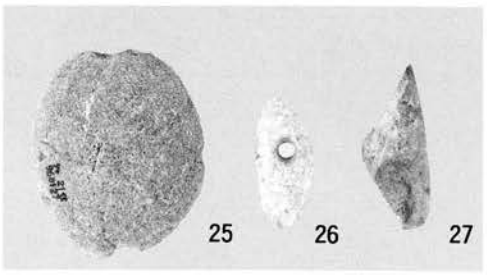

26

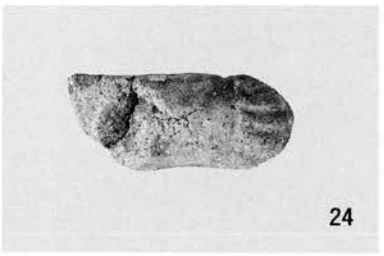

27

図版84

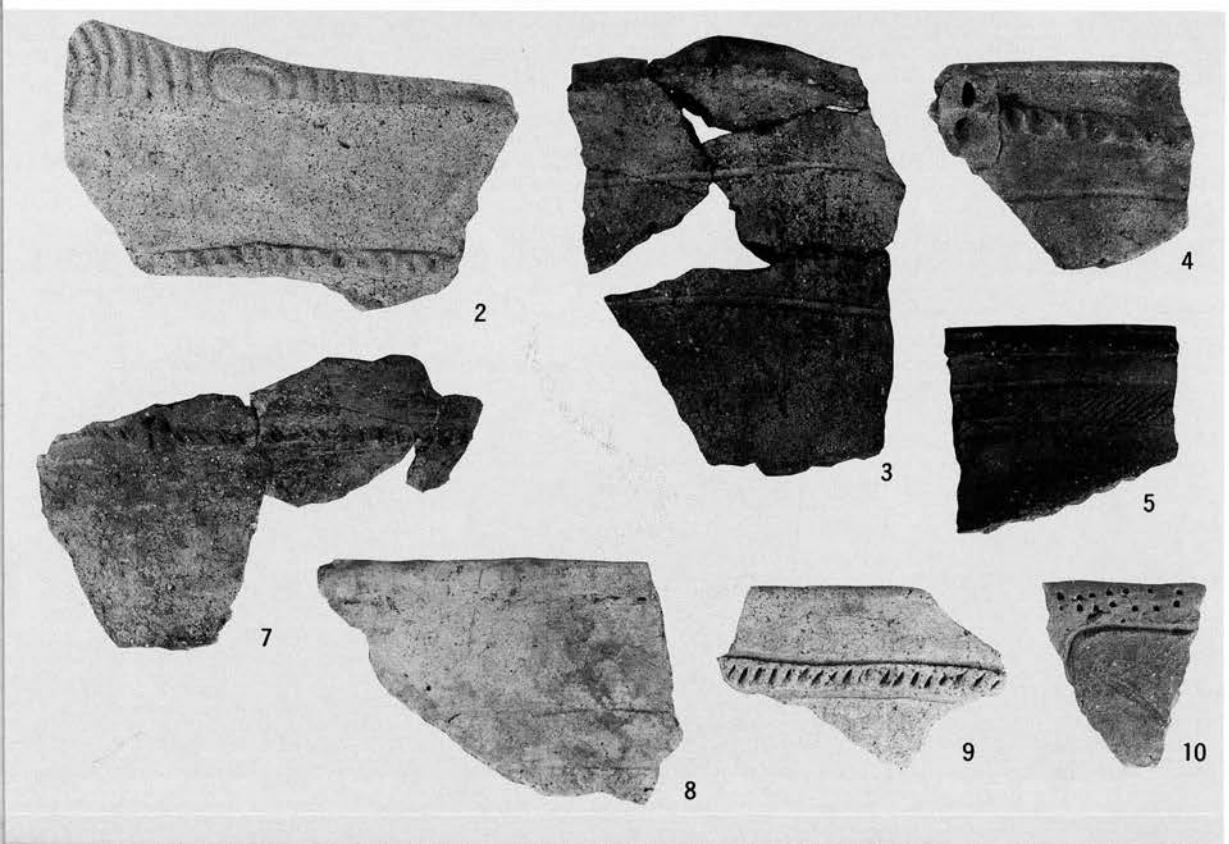
21号住出土遺物

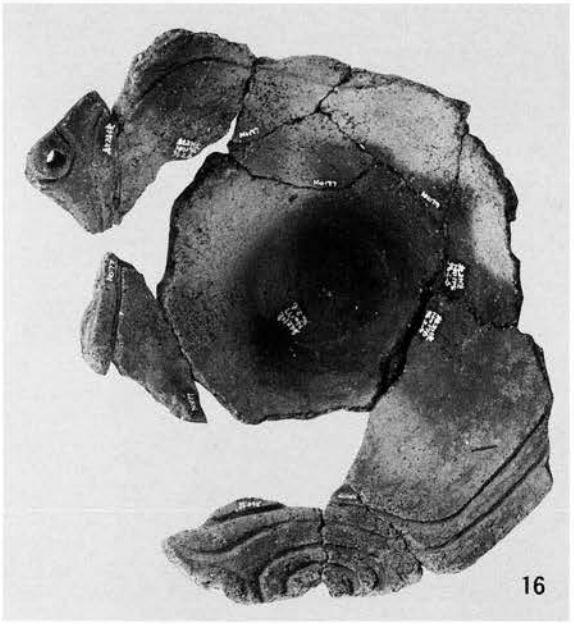

1

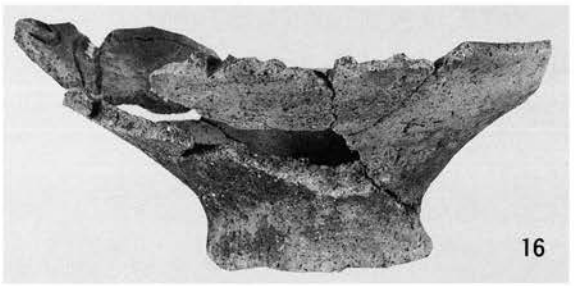

25 26 27

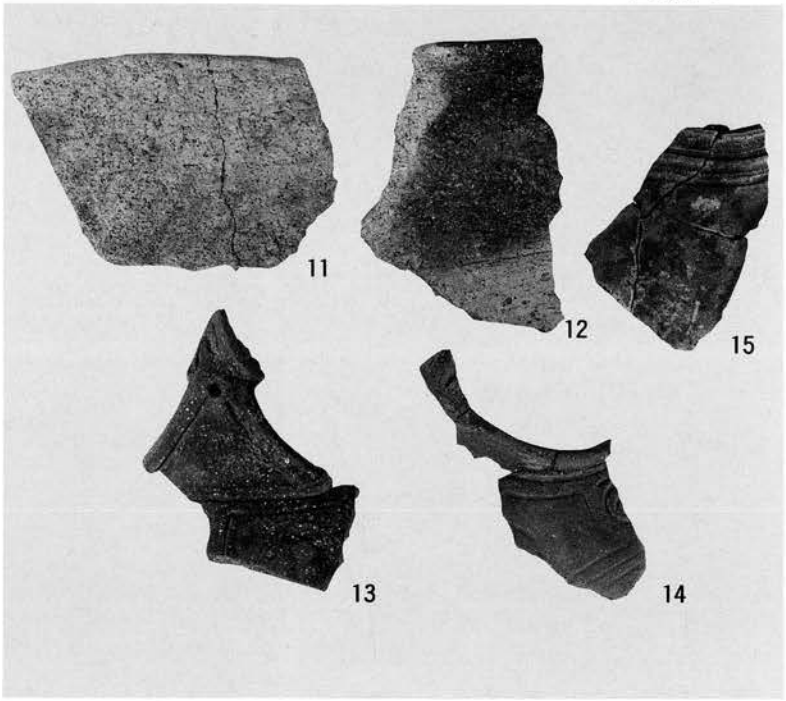

24

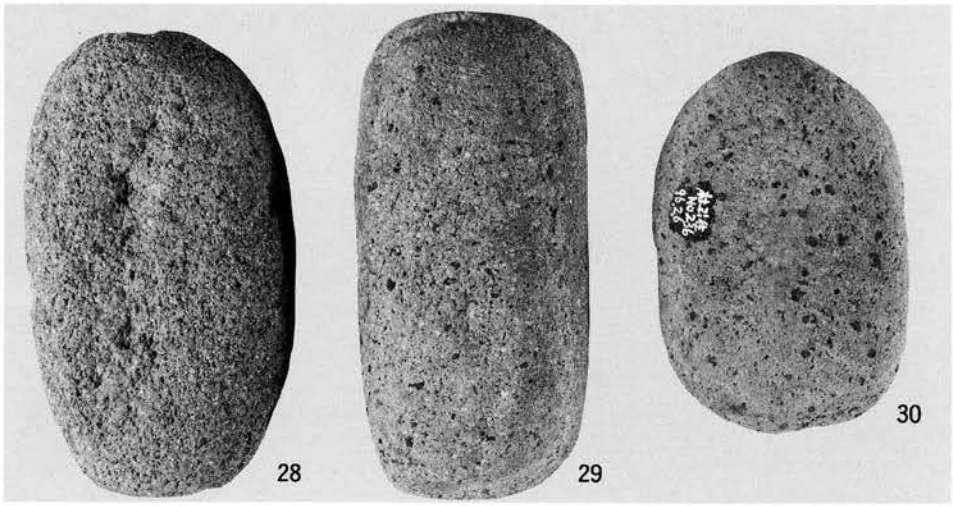
6

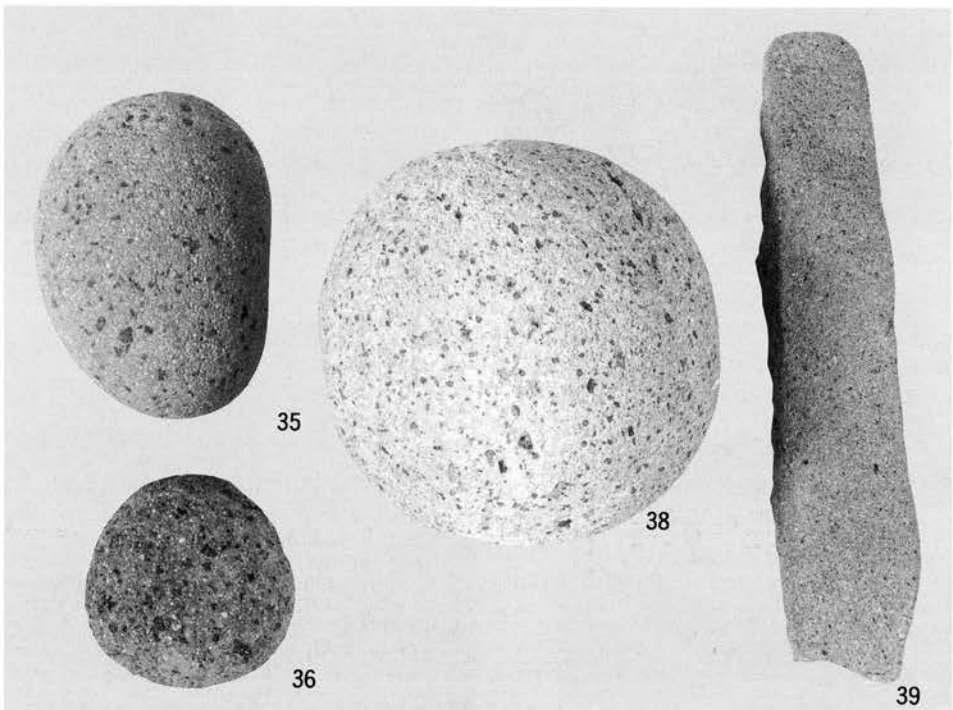

2 3 4 5 7 8 9 10


16


16

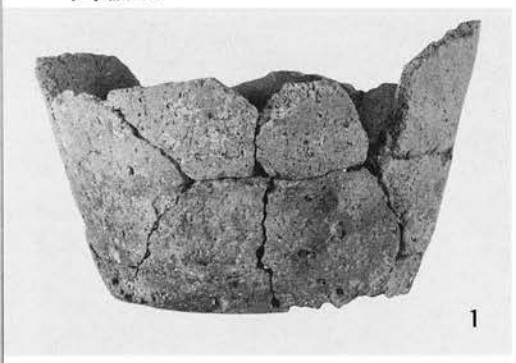

11
12
15
13
14

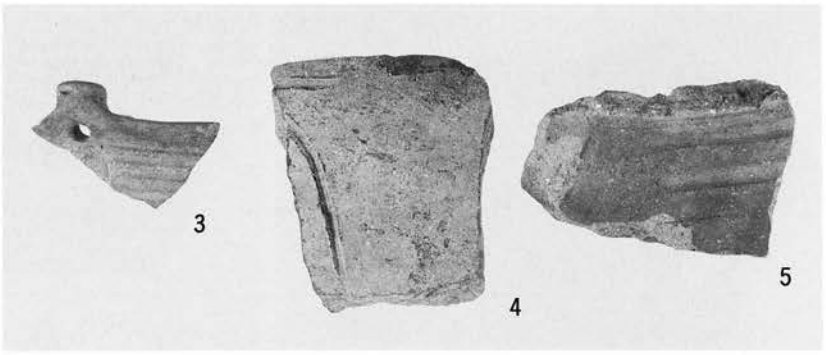

28
29
30

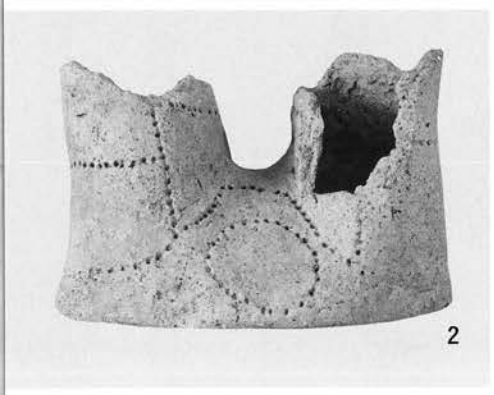

35
38
39
36

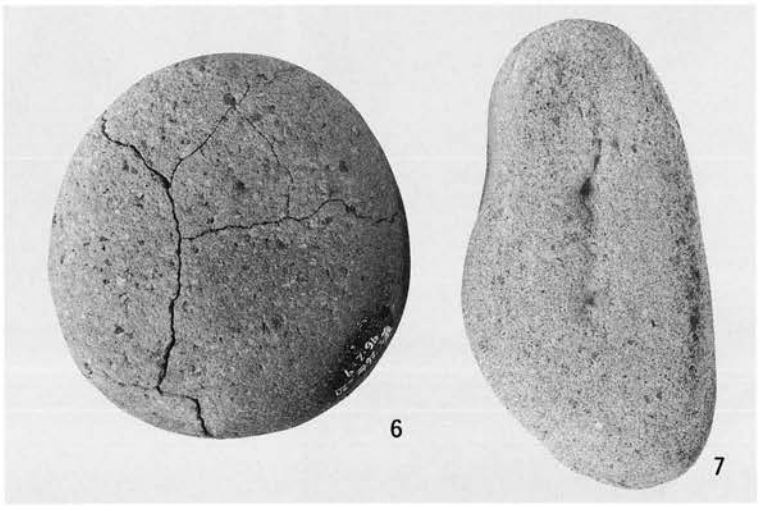
図版86

26号住出土遺物


1

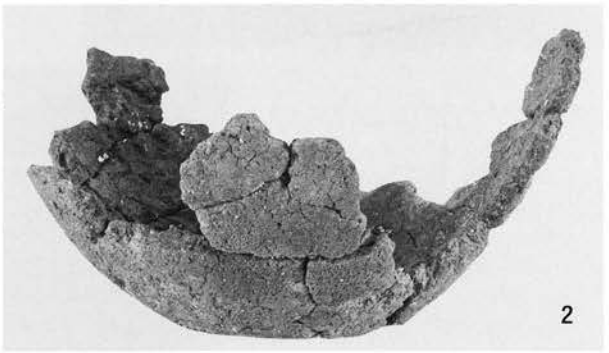

3 4 5

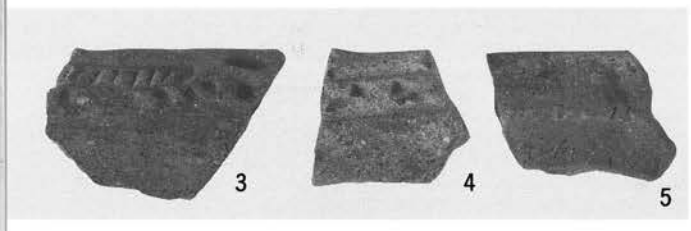

2

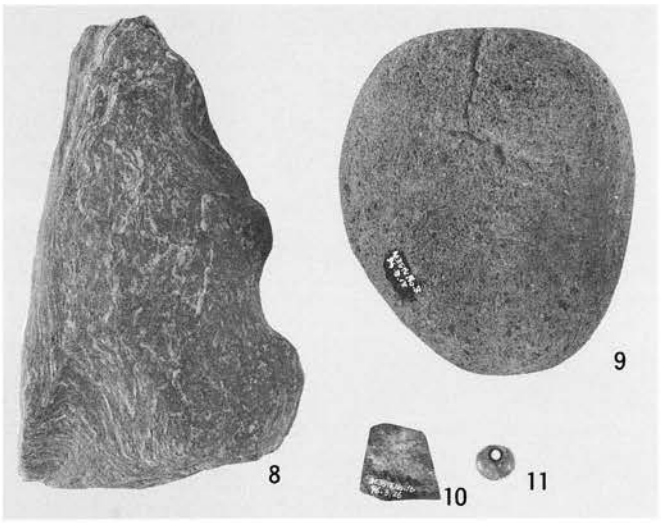

6 7

35号住
出土遺物

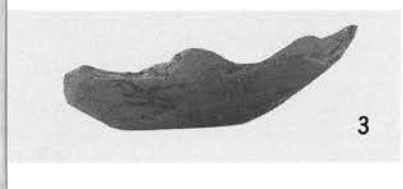
1

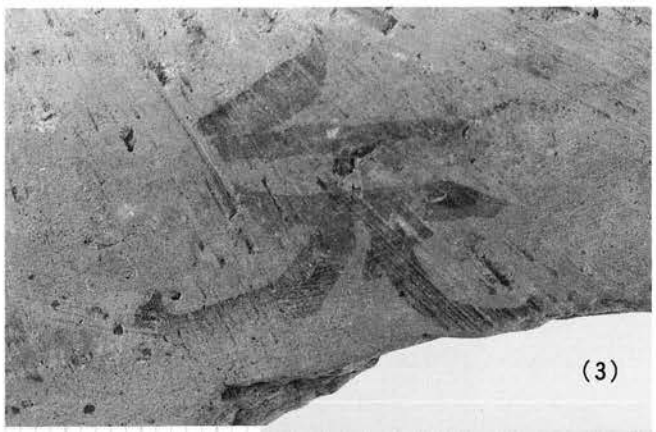

2


3 4 5


8 9 10 11

1


3

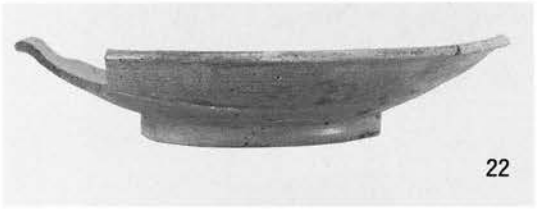

(3)

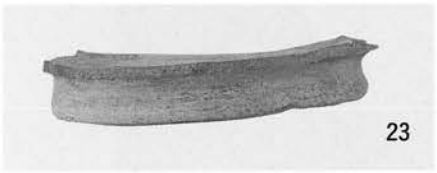
1号住出土遺物

5

15

20


22

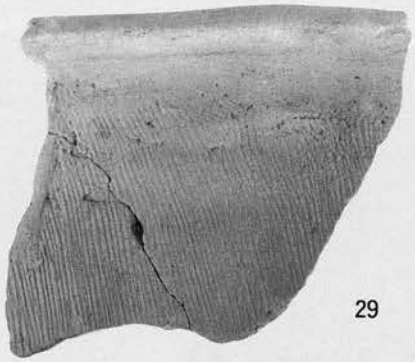

23

(23)

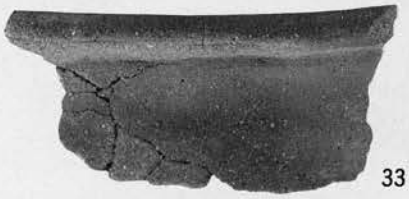
(23)

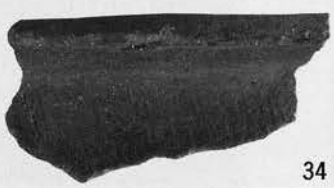
31

32


29

30

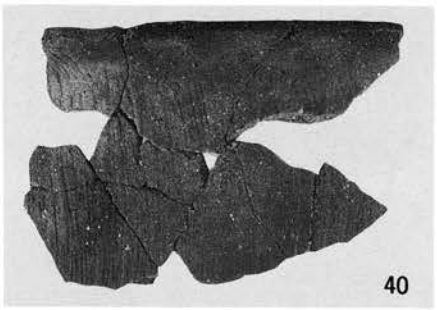

33


34

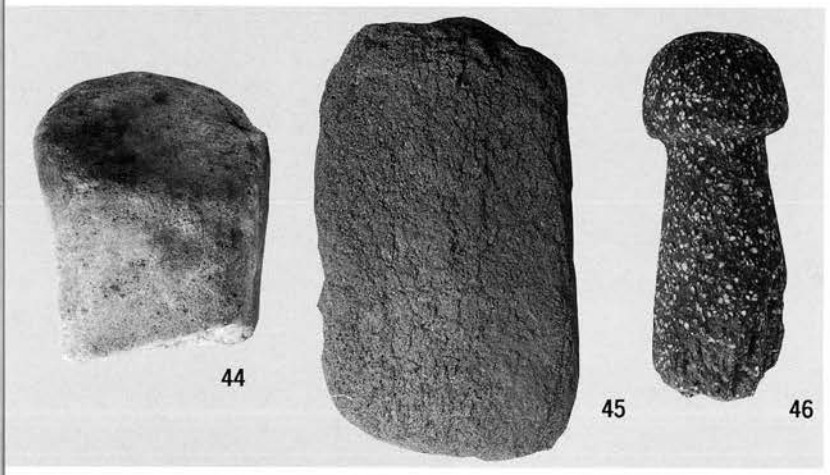
35

1号住出土遺物

41

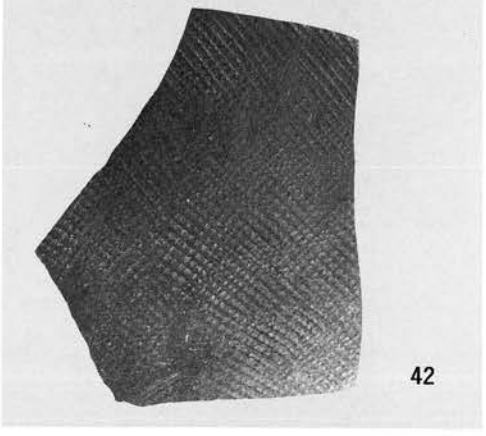

40

43


44

45

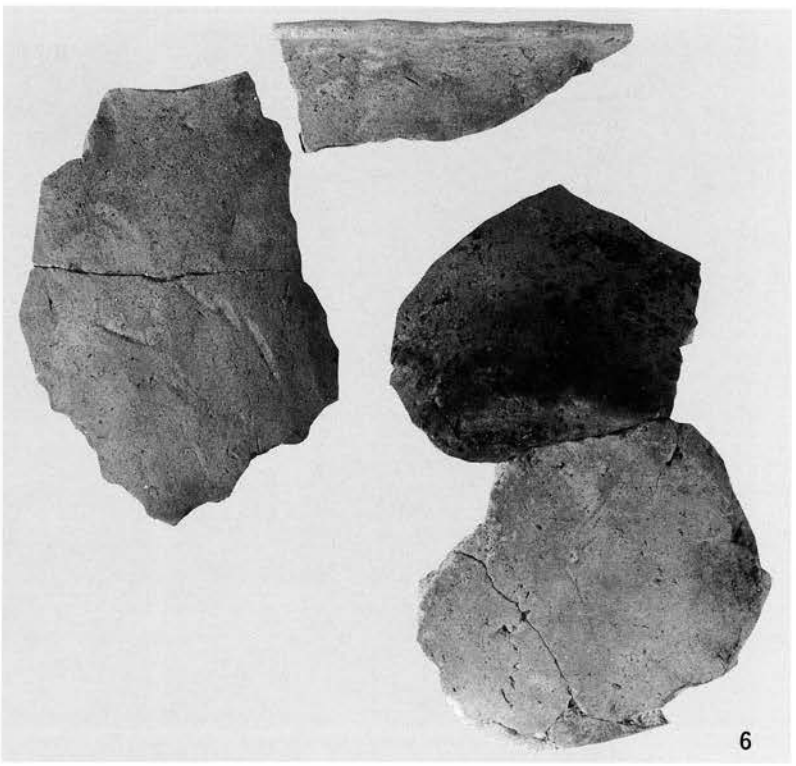
46

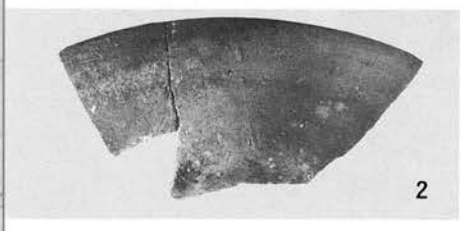

42

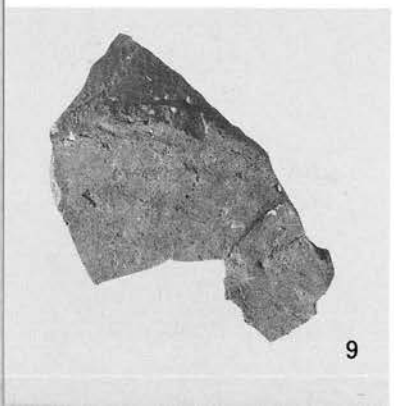
1

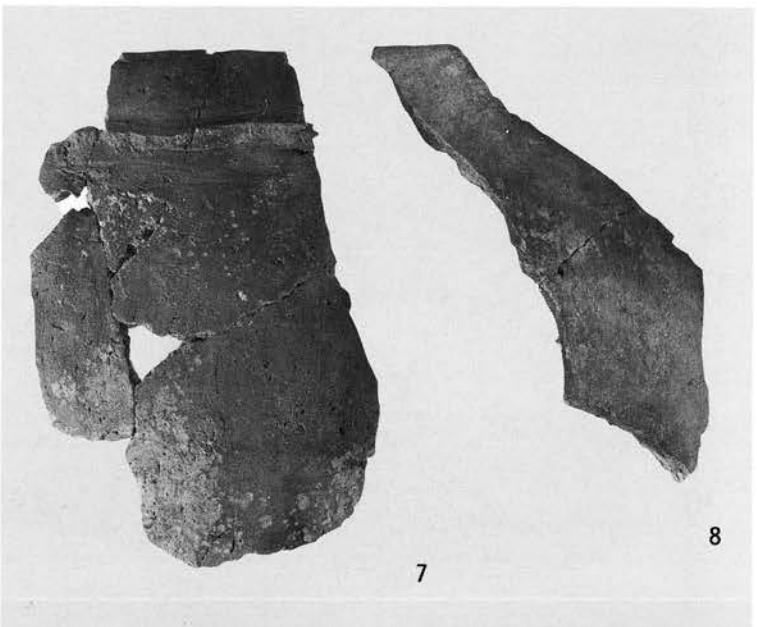
(1)

2号住
出土遺物


6

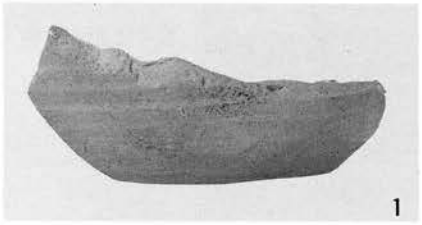

2


9

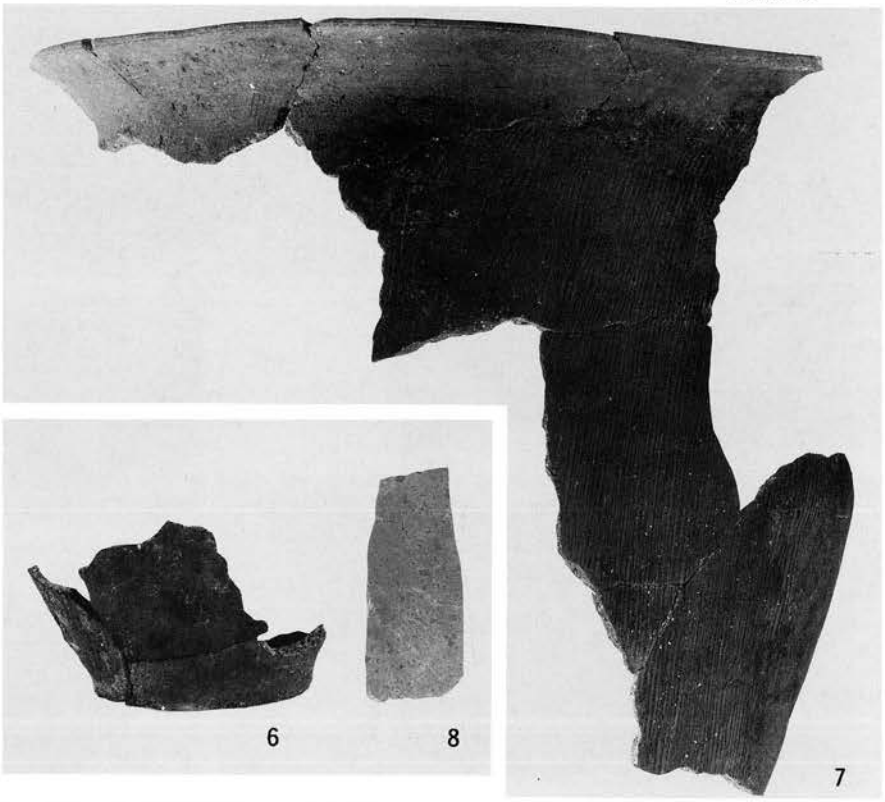

7

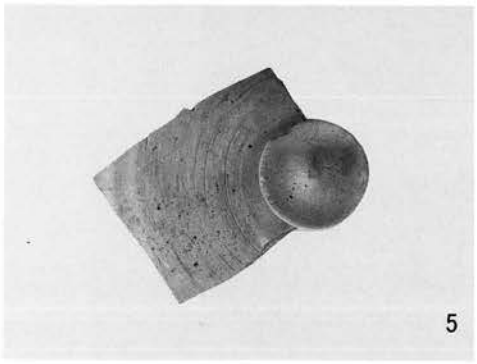
8

4号住出土遺物


1

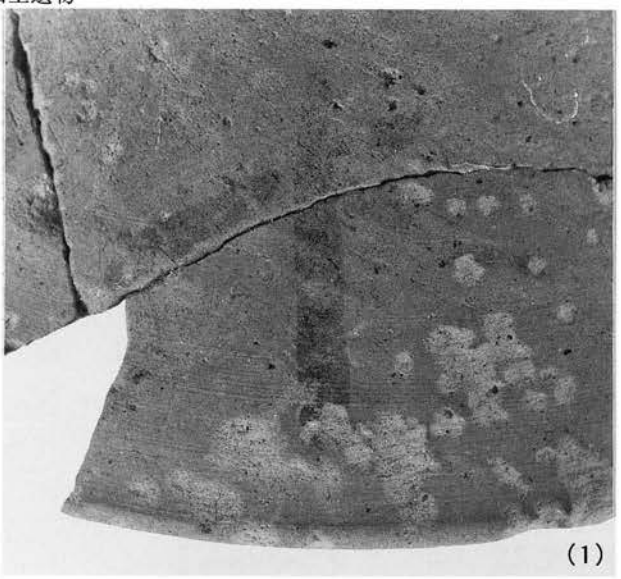
2


7


5

6 8

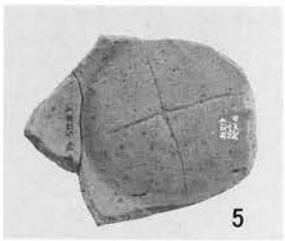
5号住出土遺物

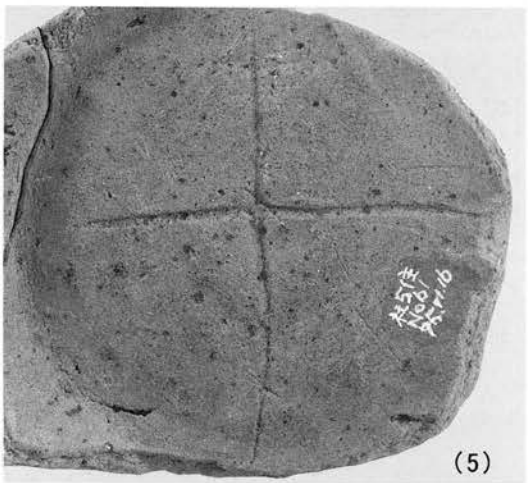

(1)

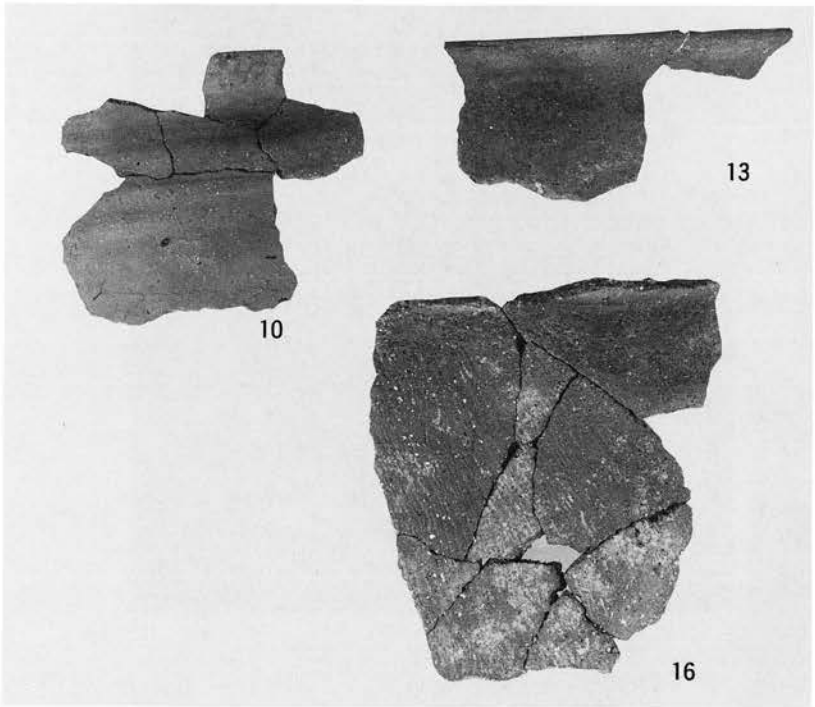
1

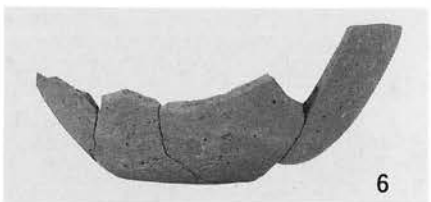
2

3


5


(5)

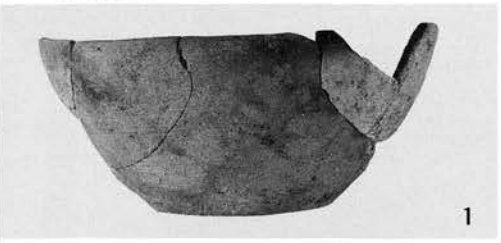

10 13 16

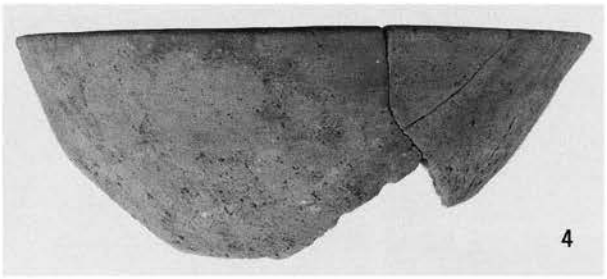

6

7

図版90

6号住出土遺物


1


4

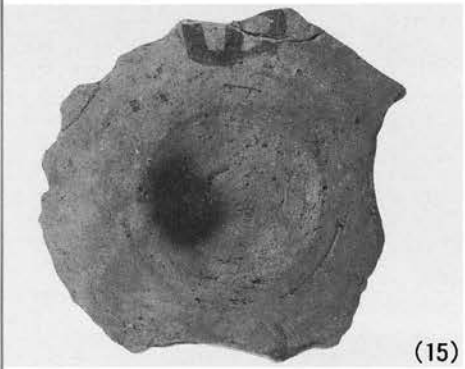
7

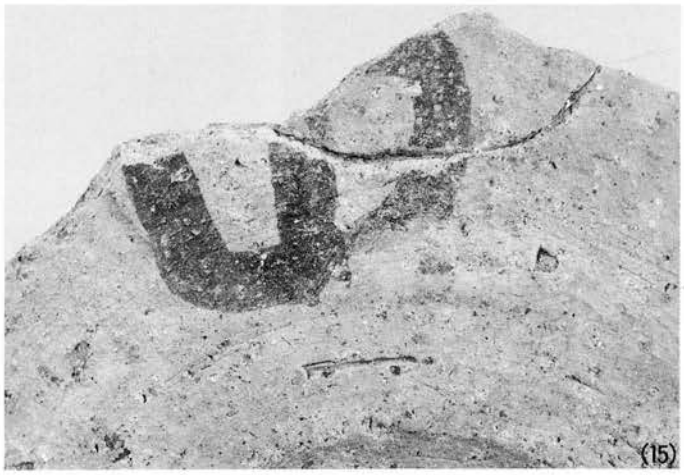
8

10

11

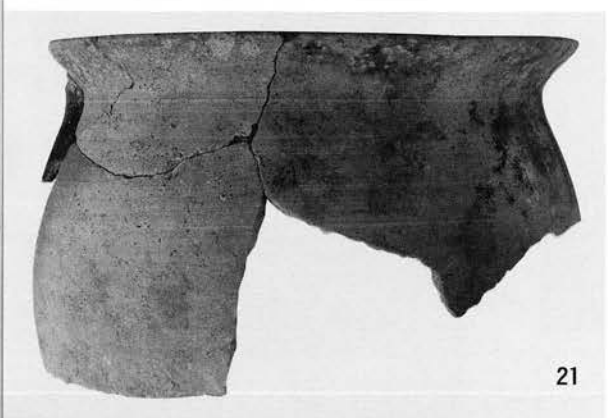
15


(15)

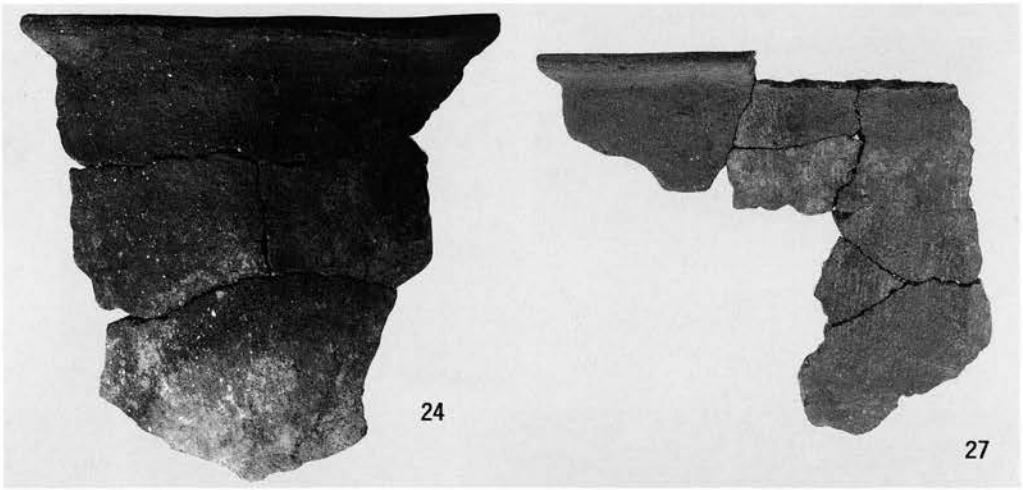

(15)

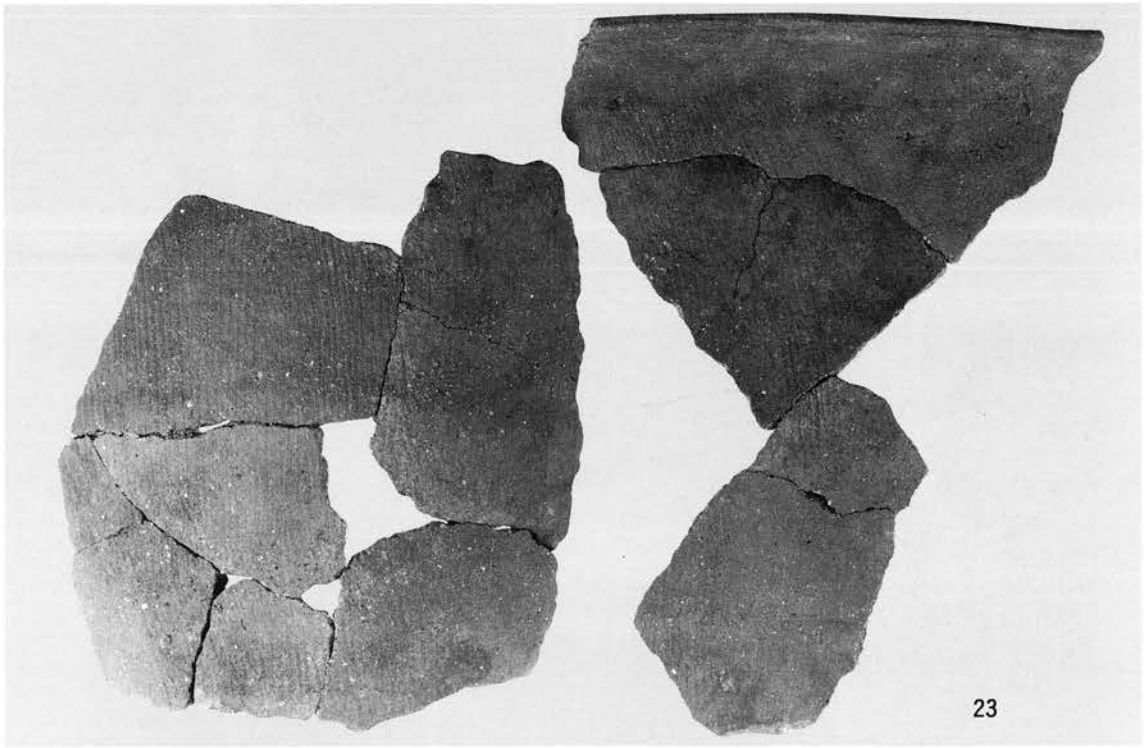
19

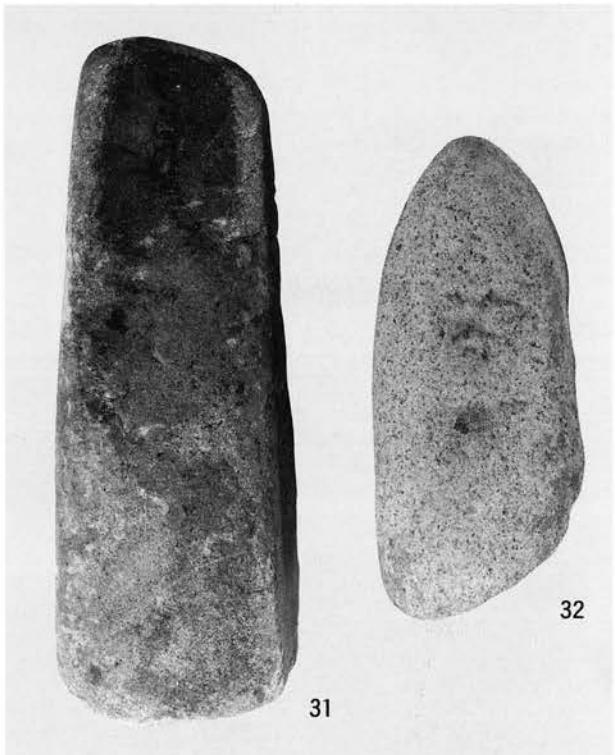
20

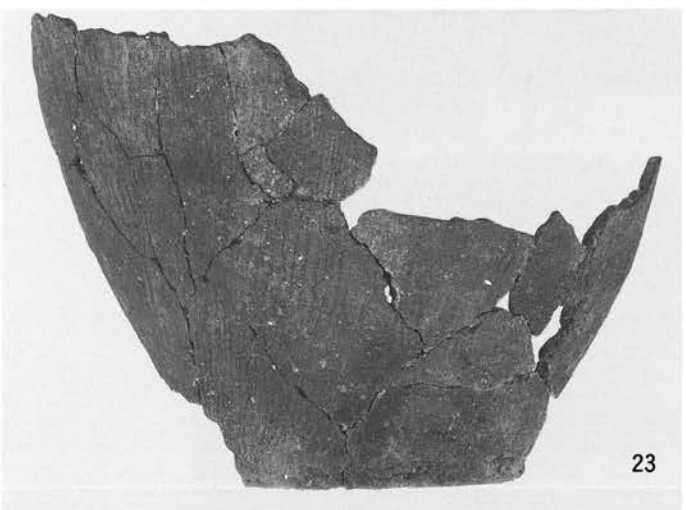

21

6号住出土遺物



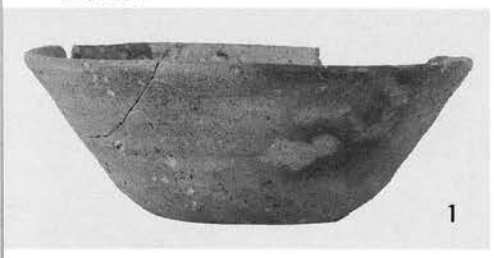


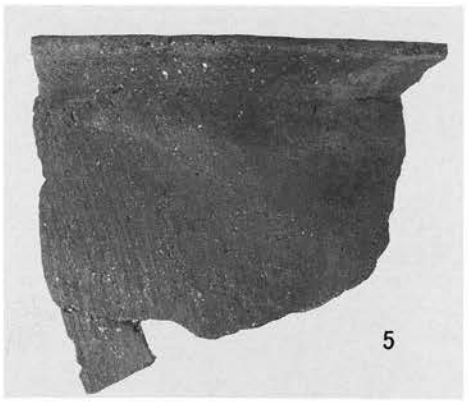




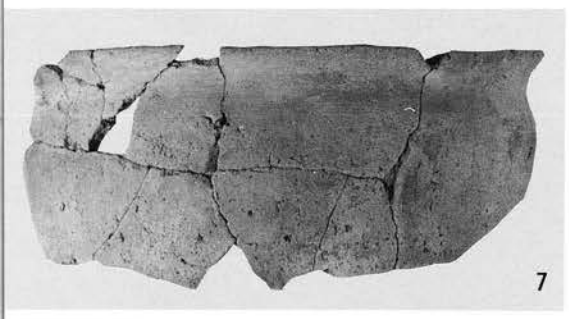
図版92

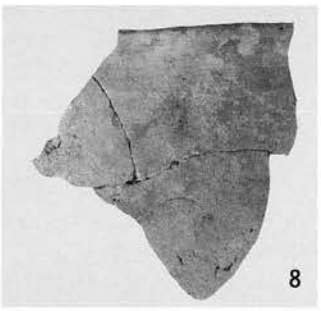
12号住出土遺物

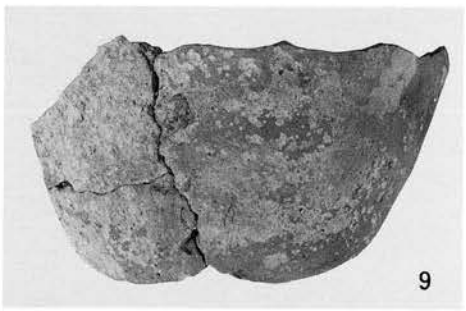

1

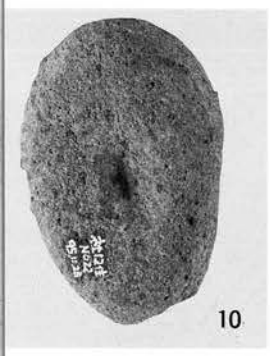

5

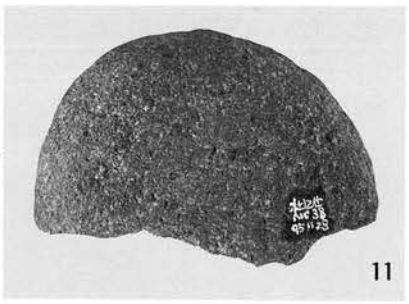
6


7

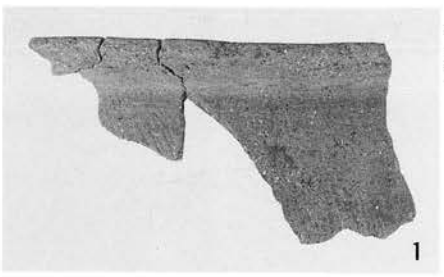

8

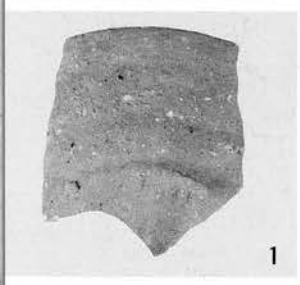

9

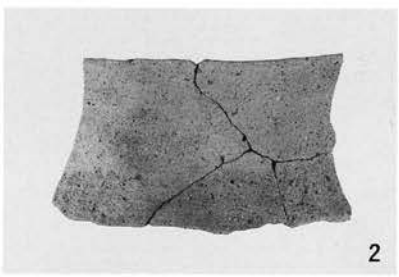

10

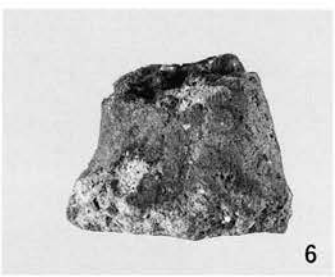

11

15号住
出土遺物

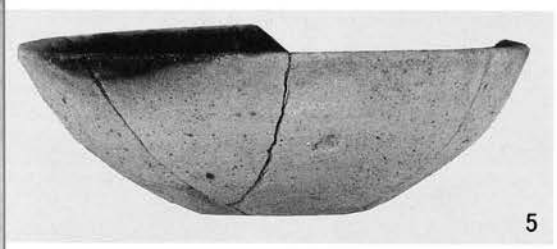

1

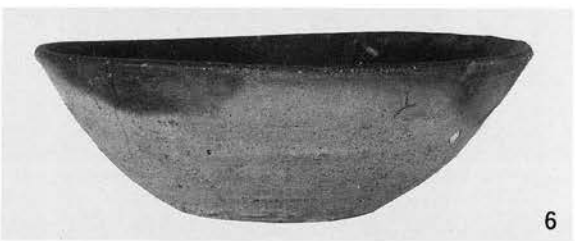

1


2

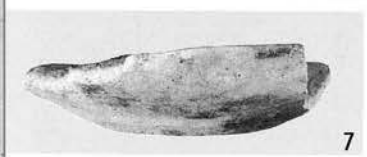

6

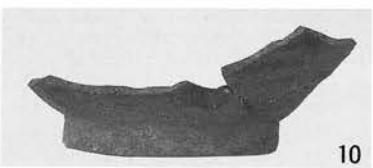
20号住出土遺物

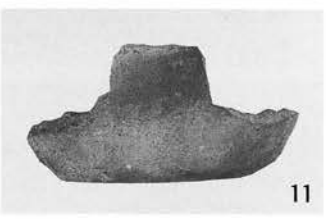

5


6

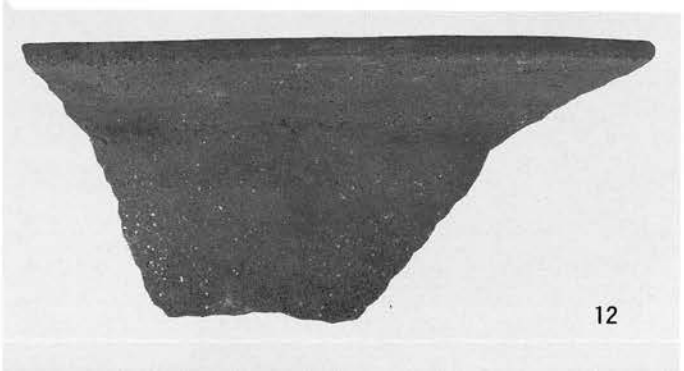
24号住出土遺物


7

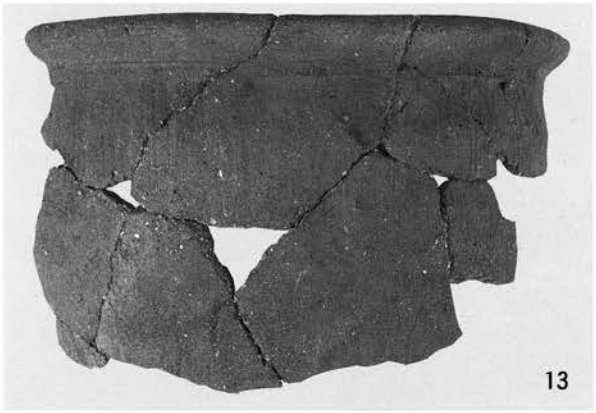

10

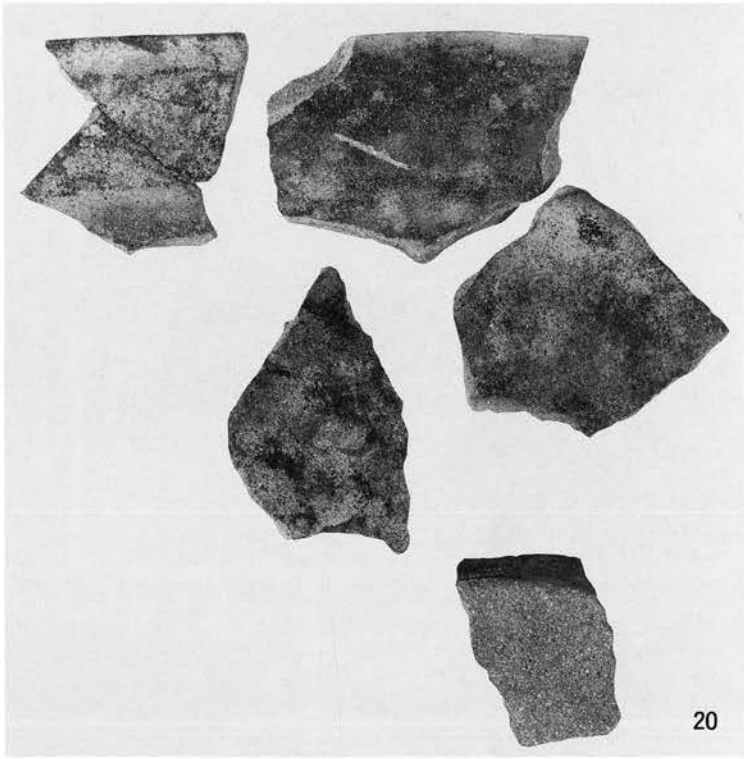

11

18


12

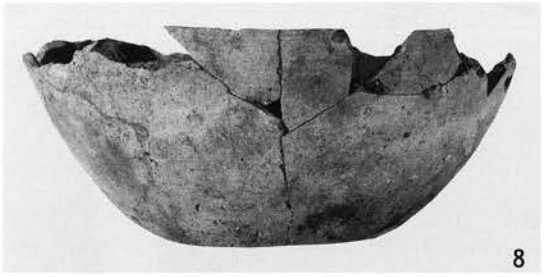
24号住出土遺物

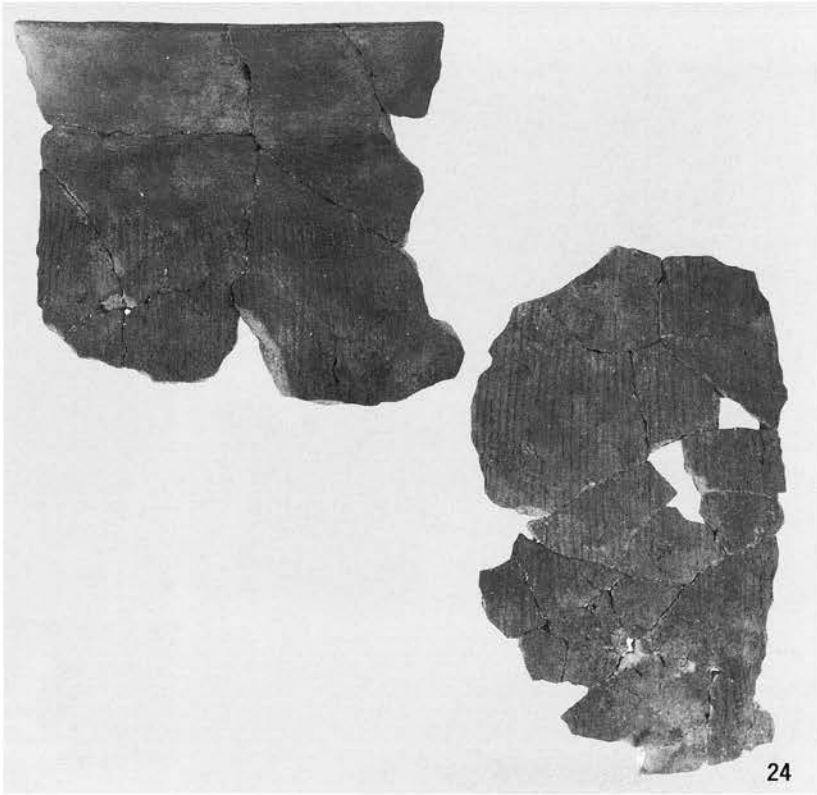

13

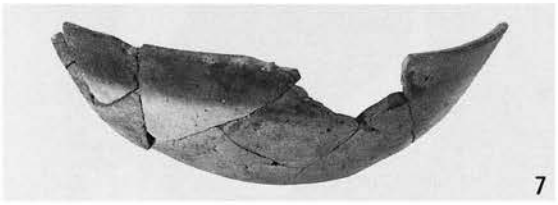

20

22

25号住出土遺物

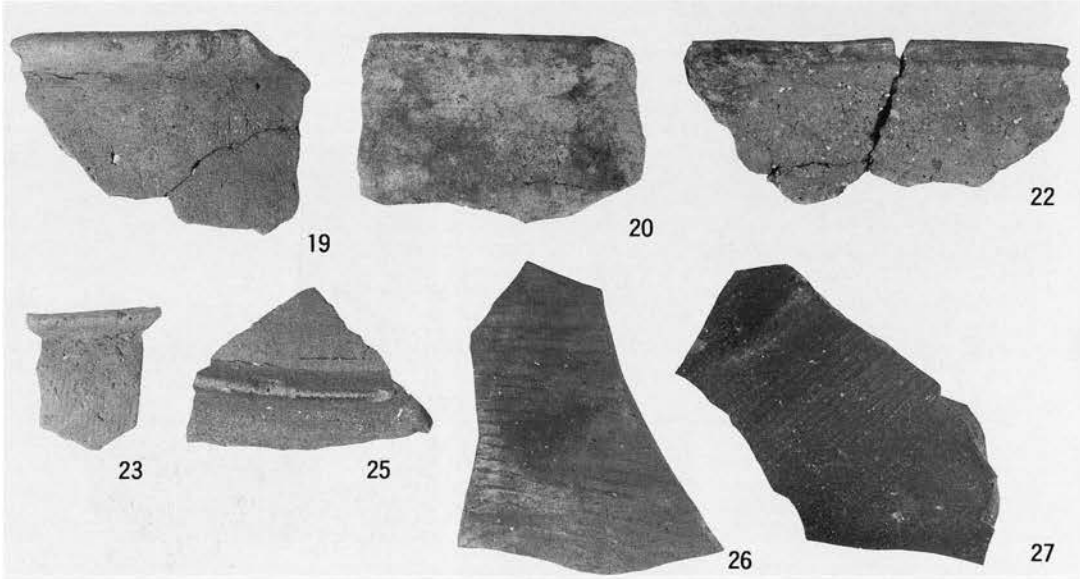

8


24


7

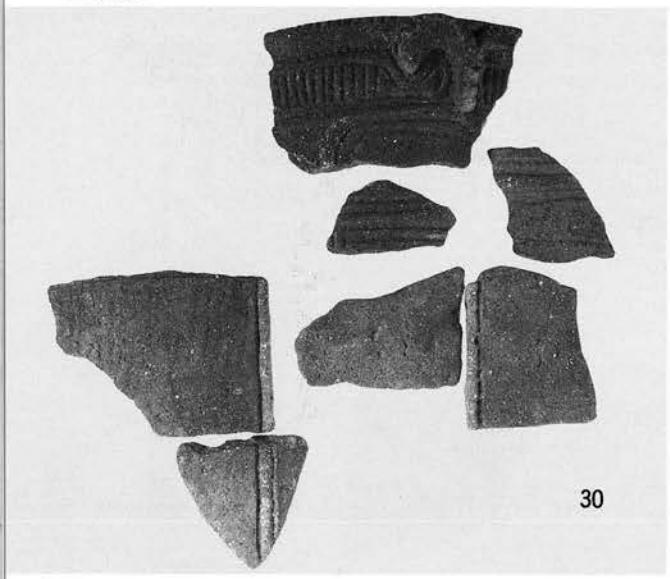
17

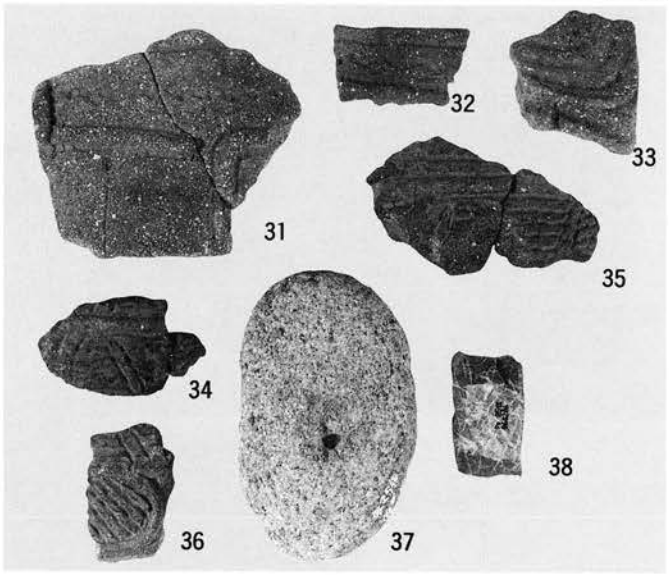
28


19
20
22
23
25
26
27

図版94

25号住出土遺物


30


31

32

33

35

34

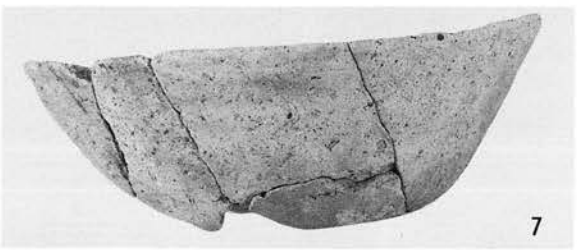
36

37

38

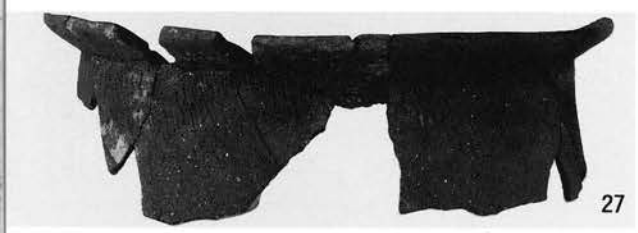
29号住出土遺物

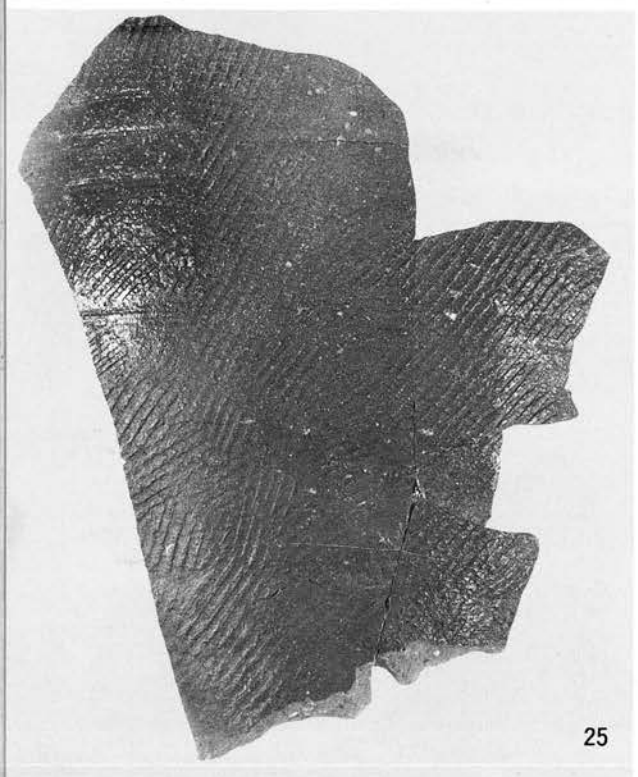
2

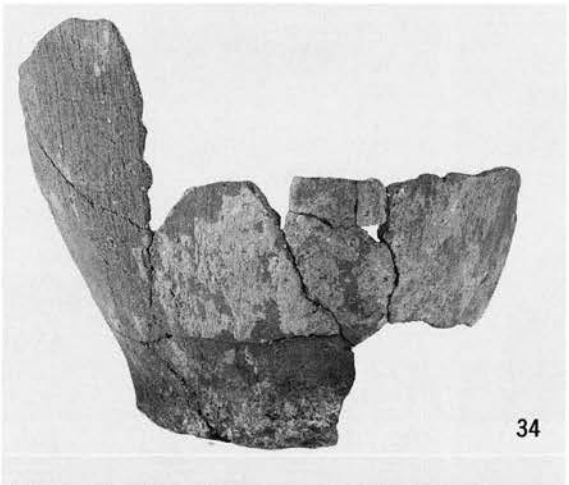

7

22

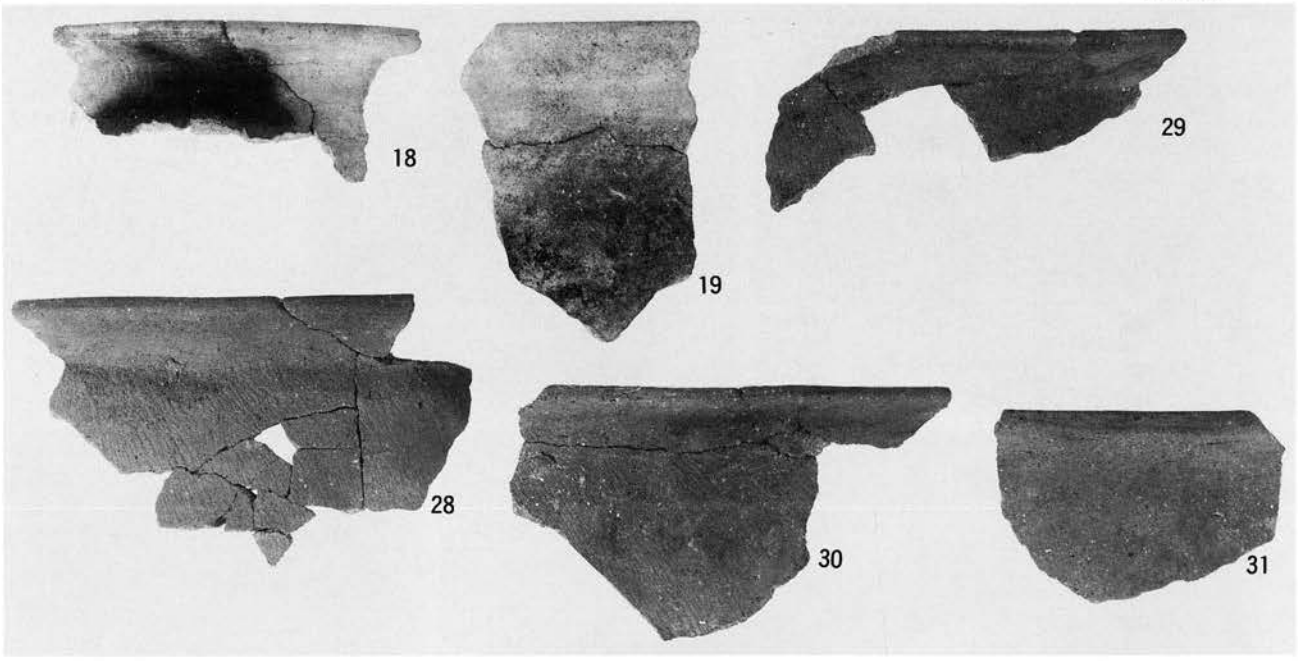
26


27

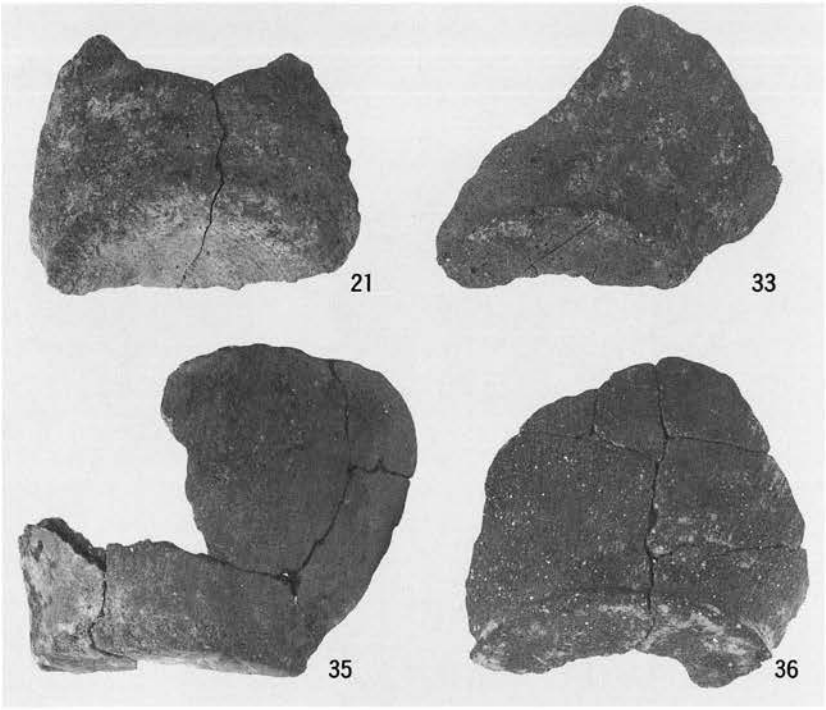

25

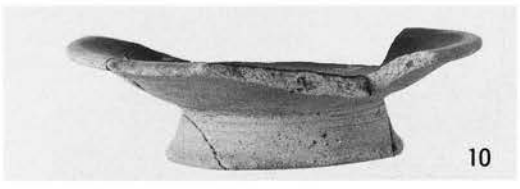

34

29号住出土遺物



37号住出土遺物

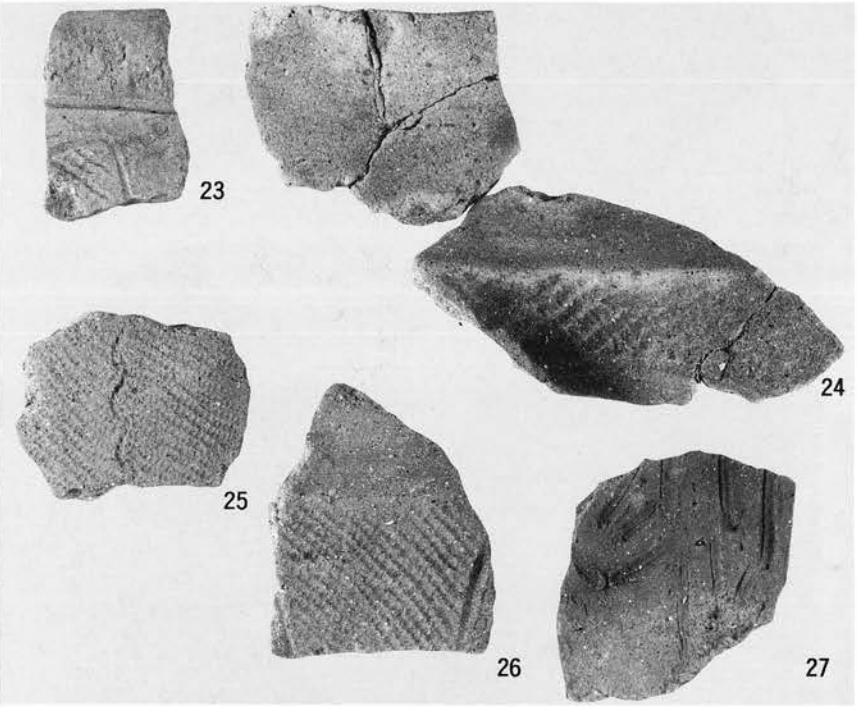




37号住出土遺物

11

19


23

24

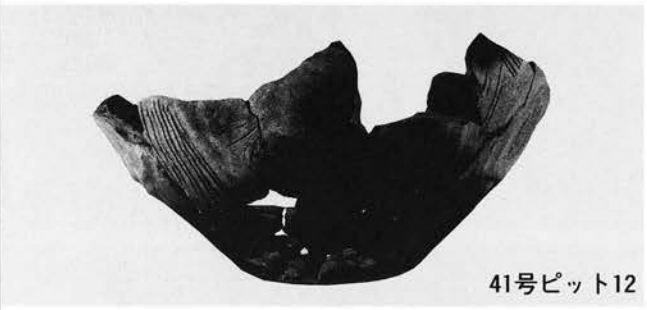
25

26

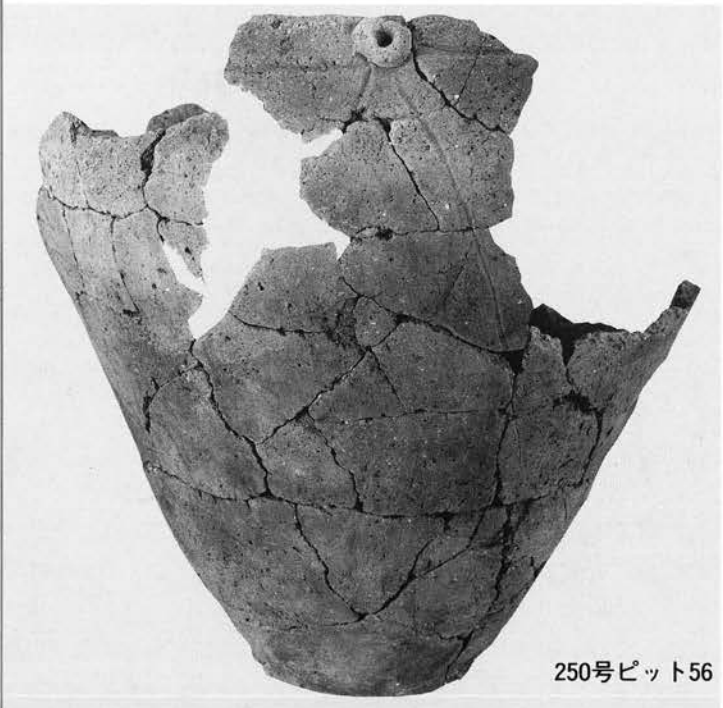
27

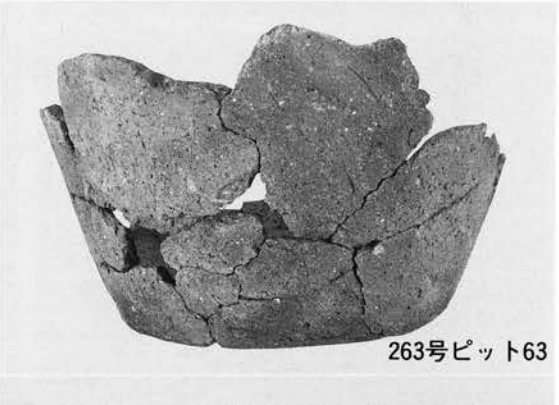
22

ピット出土遺物

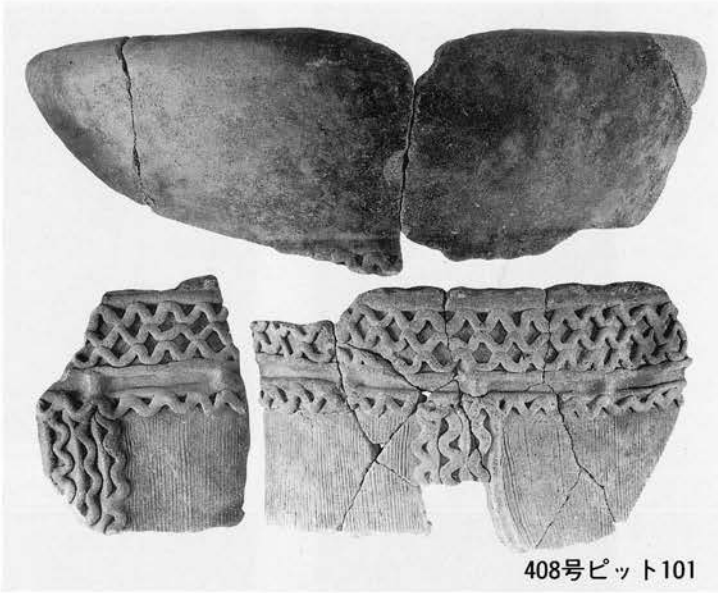

41号ピット12

263号ピット60


250号ピット56


263号ピット63

401号ピット91

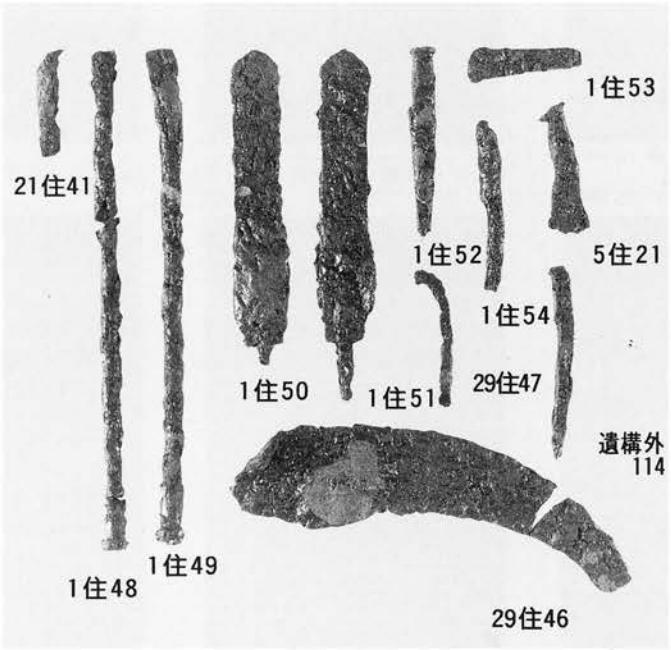


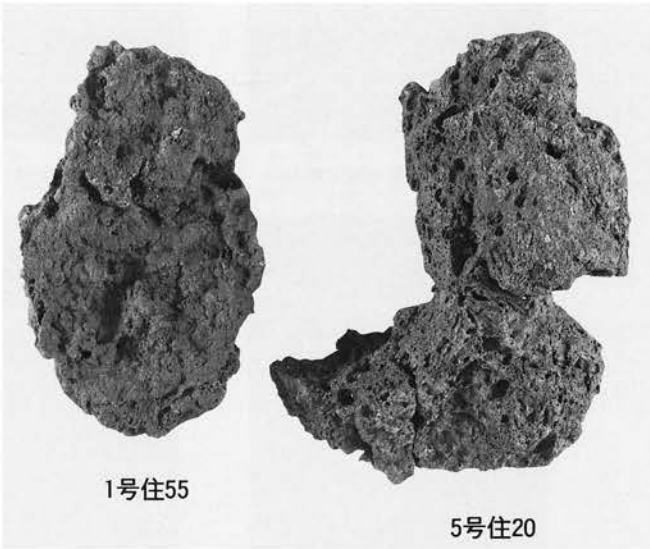
408号ピット101

404号ピット

93　94　95　96　97

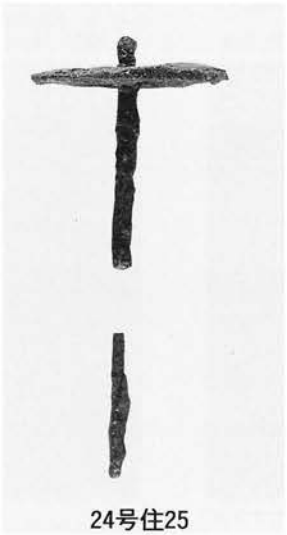
鉄製品
鉄滓
土偶
墨書土器





1号住55

5号住20



24号住25

遺構外102

遺構外104

遺構外103

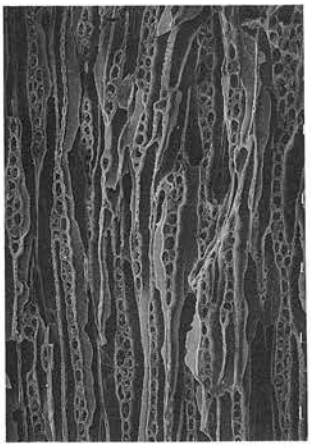
遺構外105

遺構外110

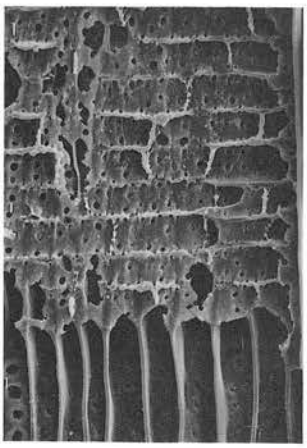
遺構外113

図版98

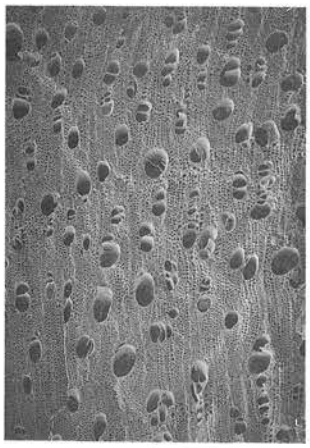
1a.モミ属（横断面）
P250　埋甕　bar:0.5mm



1b.同左（接線断面）
bar:0.1mm

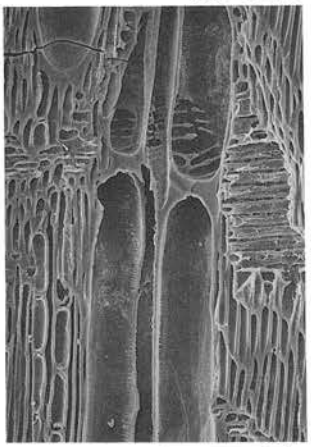


1c.同左（放射断面）
bar:0.05mm



2a.カバノキ属（横断面）
16住　炉　bar:0.5mm

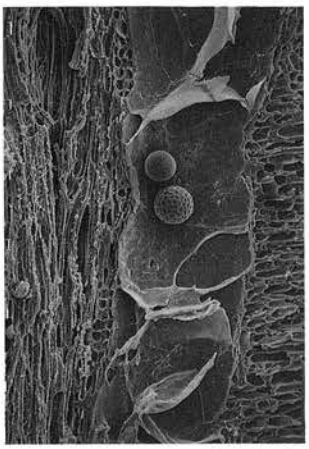
2b.カバノキ属（接線断面）
bar:0.1mm



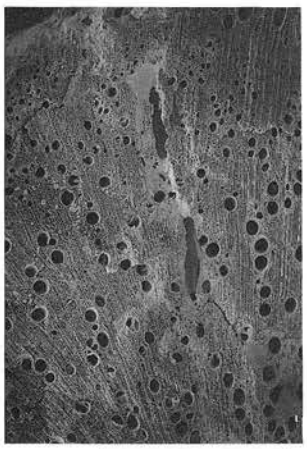
2c.同左（放射断面）
bar:0.1mm

3a.コナラ属コナラ節（横断面）
34住　No2 内土　bar:1mm

3b.同左（接線断面）
bar:0.1mm

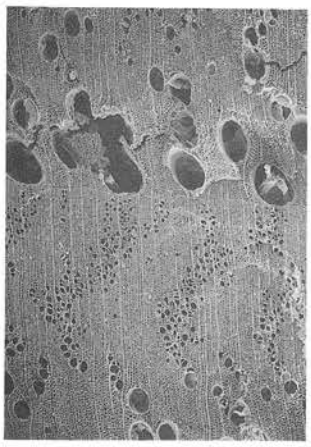


3c.コナラ属コナラ節
（放射断面）　bar:0.1mm

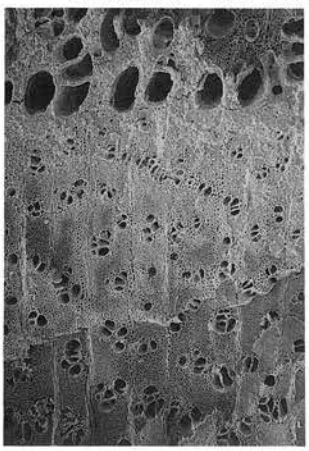


4a.クリ（2年枝）（横断面）
6住　竈　4層　bar:1mm

4b.同左（接線断面）
bar:0.1mm

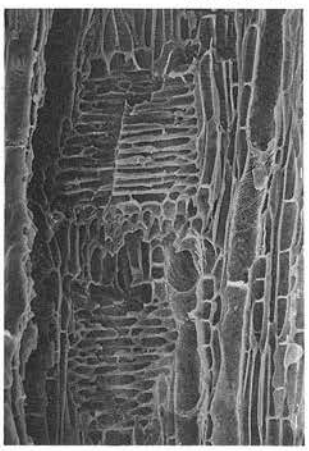


5.クリ（横断面）
6住　No81　bar:1mm

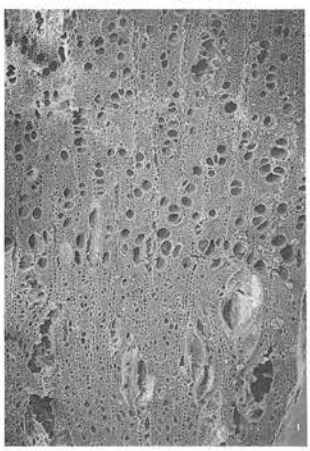


6a.クワ属（横断面）
17住　炉　bar:0.5mm

6b.同左（接線断面）
bar:0.1mm

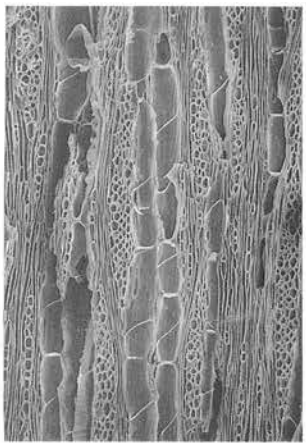


6c.同左（放射断面）
bar:0.1mm

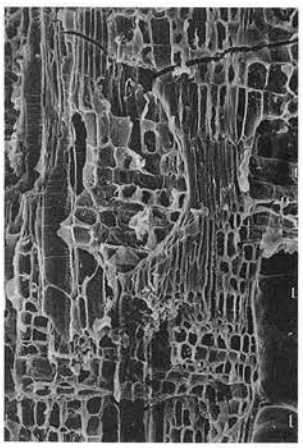


7a.モモまたはウメ（横断面）
6住　竈4層　bar:0.5mm

社口遺跡出土炭化材の樹種



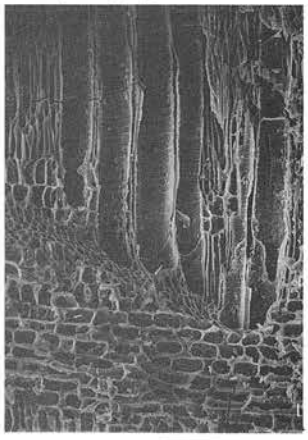
7b. モモまたはウメ（接線断面）
6住　竈4層　bar:0.1mm



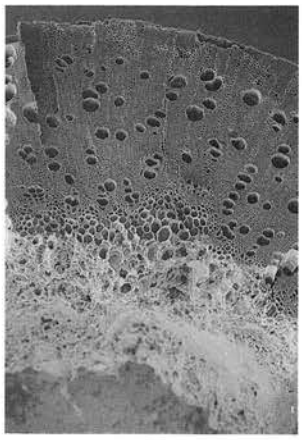
7c. 同左（放射断面）
bar:0.1mm

8a. 環孔材A（横断面）
37住 竈 3層　bar:0.5mm

8b. 同左（接線断面）
bar:0.1mm



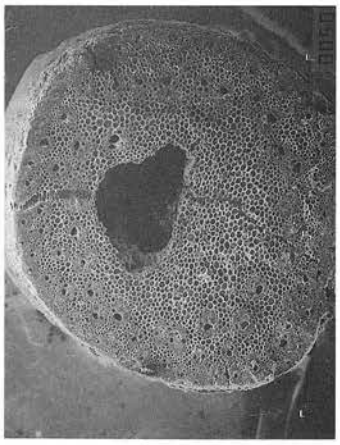
8c. 環孔材A（放射断面）
37住 竈 3層　bar:0.1mm



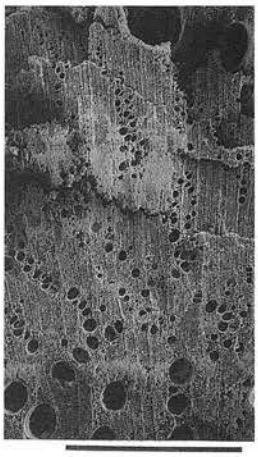
9a. 広葉樹の当年枝（横断面）
12住　竈　bar:0.5mm

9b. 同（接線断面）
bar:0.1mm

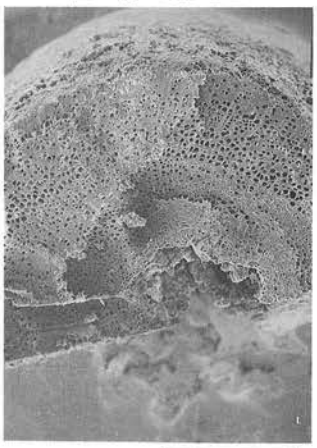
9c. 同（放射断面）
bar:0.1mm



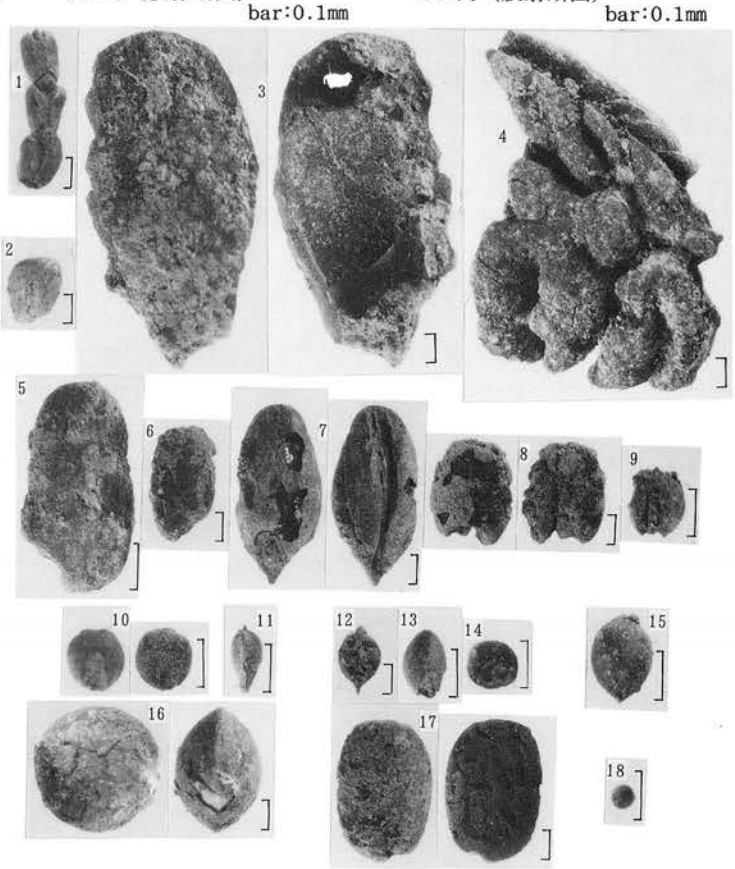
10. イネ科（横断面）
12住　竈　bar:1mm



12. クリ（横断面）
8住 炉内(PLD−170)
bar:1mm



11. モモまたはウメ(2年枝)(横断面)
6住　竈　4層　bar:0.5mm



産出した大型植物化石（スケールは全て1mm）

1. ヒノキ、小枝、1住−16　2. クワ属、種子、1住−103　3. オニグルミ、炭化核、34住炉北ピット
4. モモ、炭化核、25住カマド　5. イネ、炭化胚乳、1住−51　6. イネ、炭化胚乳、1住−52
7. オオムギ、炭化胚乳、1住−17　8. コムギ、炭化胚乳、1住−33　9. アワ、炭化胚乳、1住−62
10. アワ、炭化胚乳　1住カマド2層　11. カヤツリグサ属、果実、1住−4
12. タデ属A、炭化果実、19住床上（南）　13. タデ属B、炭化果実、1住−38
14. シロザ近似種　種子、18住炉2層　15. エノキグサ、種子、1住−31　16. カナムグラ、種子、1住−31
17. ササゲ属、炭化種子、16住炉　18. 菌核、1住−90

社口遺跡出土炭化材の樹種・大型植物化石

報告書概要

フリガナ	シャグチイセキダイサンジチョウサホウコクショ		
書名	社口遺跡第3次調査報告書		
副題			
シリーズ			
著者名	櫛原功一・森原智恵子・河西学・新山雅広・植田弥生・山形秀樹		
発行者	高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査団		
編集機関	社口遺跡発掘調査団		
住所・電話	〒406 山梨県東八代郡石和町四日市場1566 帝京大学山梨文化財研究所内　TEL 0552－63－6441		
印刷所	㈱エンドレス　〒405 山梨県山梨市上石森123　TEL 0553－22－4574		
印刷・発行日	平成9年（1997）3月・平成9年（1997）3月31日		
社口（シャグチ）遺跡	所在地	山梨県北巨摩郡高根町村山東割字社口	
	25,000分の1 地図名・位置・標高	谷戸	北緯35°50′10″ 東経138°25′40″ 標高725～737m
概要 主な時代	縄文時代草創期～早期・中期・後期、平安時代、中世		
概要 主な遺構	縄文時代早期を中心とした包含層、中期住居址14軒、後期住居址（敷石住居址）7軒、平安時代住居址12軒、縄文時代～中世のピット（土坑）		
概要 主な遺物	表裏縄文土器・撚糸文土器・狢沢式土器・曽利Ⅰ～Ⅳ式土器・堀之内1・2式土器及び石器・土偶・玉、平安時代土師器・須恵器・灰釉陶器及び石製品・鉄製品など		
概要 特殊遺構	縄文中期集石炉4基、敷石住居址7軒、中世墓坑1基、近世堰		
概要 特殊遺物	表裏縄文土器・土偶・玉・丸石・鉄製品・墨書土器など		
概要 調査期間	平成7年（1995）10月16日～平成8年（1996）3月24日		

社口遺跡第3次調査報告書

平成9年（1997）3月31日発行

編集・発行　高根町教育委員会
〒408 山梨県北巨摩郡高根町村山北割3261
TEL 0551－47－3111
社口遺跡発掘調査団
〒406 山梨県東八代郡石和町四日市場1566
帝京大学山梨文化財研究所内
TEL 0552－63－6441

印刷　㈱エンドレス
〒405 山梨県山梨市上石森123
TEL 0553－22－4574